

艦隊これくしょん      その刀は誰が為に

幻在

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある海軍関係の高校に通っていた天野あまの 時打ときひうちは、突如、知り合いの長官から提督に成れと言われる。

そして、その着任する予定の『黒河鎮守府』は、提督に対して、憎しみや恐れといった感情を持つ艦娘が多いブラック鎮守府だった。

腰に携えた逆刃刀。学生時代から連れ添ってきた電と共に、時打は、黒河鎮守府の艦娘たちと、真正面から向き合う。

これはブラウザゲーム『艦これ』の二次創作です。

主人公は『るろうに剣心』の技が使えますが、この話は『るろうに剣心』とは一切関係ありませんので、その点については悪しからず。

# 目次

## 翔鶴編

始まりの指令 | 1

提督が砲弾を斬って鎮守府に着任します | 8

初日の生活 | 24

初日の生活その2 | 42

決闘寸前のそれぞれの覚悟 | 52

決闘 長門VS時打 | 63

明治の街『黒河市』 | 82

突撃直前 | 99

突撃開始！ | 109

戦闘開始 電VS鹿丸 響夜VS鬼村 | 122

時打VS達也 | 129

帰還 | 141

## 第六駆逐隊編

黒河の日常 | 156

関係を断つ言葉 | 168

六駆の追憶 | 178

暴走 | 187

恐怖を乗り越えて 牙突炸裂！ | 205

四隻目の戦艦 | 225

## 大和編

大和の過去 其ノ壱 | 231

大和の過去 其ノ弐 | 238

大和の過去 其ノ参 | 251

何がビックセブンだ

263

決戦前夜

270

時打VS大和

279

事後報告

295

### 瑞鶴編

新戦力

300

定例会議

309

高速戦艦！その名は霧島！

328

指導

333

大連合艦隊 組み分け

343

決戦前夜 瑞鶴と加賀

356

出撃直前！

373

作戦開始！予想外の事態!?

380

まだまだ続く、敵の攻撃

392

電、怒りの白兵戦

406

長門、勝利への一撃

413

瑞鶴、誇りの為に

420

逆転の鍵、黒風、白狼の初陣

433

宴

449

我願うは、幸福を守る力

456

### 吹雪編

我欲するは闇夜の力

461

消えた吹雪。目的地は戒めの地

470

迫りくる刃

487

取り戻せ 儂き命の為に

502

吹雪 影丸 抜錨

我鎮守府へ帰還ス

五月雨編

孤独の少女

Hel l t o y o u

まさかの再開 羽黒の黒

搜索活動

夜中の決戦

どちらを選ぶ？

五月雨ならぬもの

黒河元提督 一ノ瀬悠斗

謝罪

黒河大抗争編

馬坂 葉子

馬坂の技

黒河最強の艦娘 那珂

師匠と弟子

激突

明王と化せ 十重の極み

馬坂の最奥 『火爪』炸裂

姉の想いを乗せて斬れ 『天翔龍閃・加賀岬』

守りたい者のために 川内の馬坂流

黒河幕府と征夷大將軍

天野時打編

北東の闇

521

539

552

566

573

583

589

599

609

621

629

639

653

660

676

683

704

714

722

737

762

771

襲撃者

救われぬ者には死を

終わりなき怨念

紅の少女

薬丸示現流

780

803

810

818

828

## 翔鶴編

### 始まりの指令

ヒトサンマルマル——午後一時。

横須賀防衛省、その長官室に、一人、黒い学生服で、腰に一本の刀を差した青年が一人。もう一人、その見た目から気弱そうな小さな少女が一人。その腰の後ろに一本の小太刀を差している。

その二人が長官室の扉の前に立っていた。

「行くぞ……」

「は、はいなのです」

何気に緊張した様子の二人は、意を決したのか、扉を勢いよくあける。

そして、入った途端、すぐさま気を付けをしてからの敬礼をする。

「あまの天野 時打。只今、参上致しました」

「いなずま駆逐艦『電』。同じく参上したのです！」

すると、机に座っている一人の五十代と思われる男が一瞬、鋭い眼光を向けてきた。

その気迫に、怖じ気づく事なく、敬礼を続行した。

それを見た、男……長官はすぐに顔を綻ばせた。

「おお、来たか時打」

「お久しぶりです。長官」

天野時打。年齢は十八。

彼は、まだ海軍関係の高校を卒業していない、とはいっても、もう卒業できるほどの成績は得ているのだが、とある敵性勢力に対する為の教育を受けていた。

温暖化による海面上昇と同時に深海より出てきた、深海棲艦。

その出現により、人類の領海域のほとんどが、奴らに奪われ、日本は、海外からの支援を完全に絶たれてしまった。

もちろん、抵抗はした。海上自衛隊が護衛艦などの艦隊を出撃さ

せ、奴らの迎撃に向かった。

だが、奴らの力はそんな、海上自衛隊如きが敵う相手では無かった。こちらの砲弾は効かず、魚雷も効かず。だというのに、向こうの攻撃は通用する。

そのおかげで、自衛隊はボロボロになって帰って来た時には、国中がパニックに陥った。

だが、そんな絶望に光が差すように、希望とも呼べる存在が現れた。とある研究で作られた存在。かつて、『軍艦』と呼ばれた艦船の魂と記憶を体に宿し、『艦装』と呼ばれる武装を身に纏い、奴らと戦う存在。その名を『艦娘』。

唯一、奴らと互角に戦う事の出来る存在であり、『兵器』である。

そして、時打の傍らのいる少女、『電』こそが、その存在の一人で、『駆逐艦』のカテゴリに入る艦娘の一人だ。

「今回来てもらったのは、他でもない」

長官が、机の上に置いてあった一枚の紙を、時打に差し出す。それを時打が受け取る。

「……提督、ですか」

「という事は、お兄ちゃん、司令官になるのですね！」

まるで、妹のようにはしゃぐ電。

「ああ……といっても、お前が就く鎮守府は新任のお前には、少々荷が重い所なのだが……」

「ブラック鎮守府ですか？」

「ああ」

ブラック鎮守府。

そこは、そこに就く提督が、その艦娘たちを、屈辱な行為をさせたり、無理を言わせて轟沈させたり、いわば、提督が艦娘たちを『人』として見ず、『使い捨て道具』として扱う、無情な心情の持ち主が就く鎮守府だと言う事だ。

艦娘は、法律により提督を攻撃する事が出来ず、提督が許さない限り、あらゆる行動を制限されてしまうのだ。さらに、提督の命令は絶



対という常識が植え付けられている上、もし提督の命令に逆らったりすれば、提督によつては死よりも苦しい罰を与えられる事もある。

「しかもそこはその中でも一際酷くてな、この一年、何度も提督が着任したのだが、全員三日と持たず辞退してしまつたんだ」

「そこで、お兄ちゃんなのですか?」

電が長官に問いかける。

「ああ」

それを長官は肯定する。

「唯一、特例で艦娘と一緒に生活してきたお前なら、と思つてな。そして何より、飛天御剣流を見様見まねで完全模範したお前なら、と思つてな」

「そうなのです!お兄ちゃんに勝てる人なんていないのです!」

長官の言葉を肯定する電。

その二人の言葉に照れるように頭を掻く時打。

「やめろよ電。長官はともかく、お前に言われるとむず痒くて仕方が無い」

「でも本当の事なのです!」

反論できないのか、苦笑した時打は、すぐさま話題を戻す。

「分かりました。その鎮守府は俺が持ちましょう」

「そうか。だが、やめたければいつでも言つてもいい。お前はまだ学生だからな」

「そういえば、お兄ちゃんはまだ学生なのに、なんで提督に選ばれたのです?」

そこで、電が最もな質問をする。

長官はこれを聞くと、肩をすくめ、答える。

「この鎮守府にいる艦娘たちは、少々過激でね」

「提督に砲雷撃戦するとか?」

「そうだ」

「そいつは随分物騒な所ですね」

苦笑する時打。

だが・・・

「それで、俺が適任と」

「電をここまで育てたお前なら、大丈夫だろ？ 時には、その逆刃刀で黙らせれば良い」

「流石にそこまでではしませんよ」

悪い冗談だとさらに苦笑する時打。

そして、やがて観念したかのように笑うと、姿勢を正す。

「分かりました。この天野時打、提督の任を受けます」

「言ってくれると思ったぞ」

そして、あらかたの手続きを済ませた二人は自室に戻った。

「一週間後に着任か」

資料を見て、また苦笑する時打。

「今日は苦笑してばかりですね。いつもの事ですが。それだから回りから苦笑男と言われるんですよ」

「仕方ないだろ、癖なんだから」

かれこれ十五年はやっているのだ。

「直すべきなのです」

「ほつとけ」

こつんと軽く電の頭をたたく。

「あう〜」

恨めしそうに叩かれた頭を押さえながら時打を見る電。

時打は、携えていた刀、『逆刃刀・深鳳』さかばとう しんほうを外し、机の側に立てて置く。

逆刃刀とは、「逆さまに刃がついている刀」という意味の略称で、その名の通り、本当に刃が逆さまに付いているのだ。

その為、こんな刀では人を殺す事など、まず無理だし、これで居合をやっても、単なる打撃攻撃にしかないのだ。

しかし、流派の技によつてはその威力は絶大で、まず喰らえば骨が砕けてもおかしくない。

特に、飛天御剣流なんかの、一対多数を想定した剣術の様な剣術なら。

そして、深鳳を置いた時打は、この部屋に一つしかないベッドに腰

掛け、受け取った書類を見る。その隣に電が座る。

「さて、秘書艦は最初は誰にしようか……」

「この『長門』って言う人が良いんじゃないでしょうか？ なんだか、この鎮守府の事をなんでも知っていそうな気がします」

「その前に殺されなきゃいいんだがな」

「またもや苦笑する時打。」

「大丈夫なのです！ その時は私が守ってあげるのです」

「はは、期待してるよ」

「今度は電の頭を撫で、褒める。」

「えへへ」

「そんじやま、秘書艦はこいつにしておいてさっさと荷作りして寝ますか」

「はいなのです！」

電が、段ボールを取ってくると言い、部屋を出て行った。

その様子を微笑ましく見届け、ふと名簿の一つの名前に注目する。

「……翔鶴」

その名を、ふと、零した。

一方で、ここは時打と電が着任する予定の鎮守府、『黒河鎮守府』。新しい提督が着任するそうですよ」

一人の艦娘が、司令室の窓から外を眺めている艦娘にそう告げる。

「そうか……全く、本部はまだ諦めてないのか」

うんざりした様な声音でそう言う、黒髪の艦娘。

「今回はどうしますか？」

「もう追い出すのは面倒だ。砲撃して殺す。それで隠蔽するんだ」

顔色一つ変えずにそう言う女性。もとい、戦艦『長門』。

「そうですか。ですが、バレたらおしまいですよ？」

「かまわん。それほど我々が本気だという事を伝えれば良い。連絡は、もとより私がやって来たのだからな」

冷酷に、そう言う長門。

その声音から、微かに怒りの情が感じられる。

「分かりました、全員に伝えておきます」

「頼んだぞ」

長門の返事を聞いた艦娘、『大淀』は司令室からでて、放送室に向かった。

彼女が出て行ったのを見た長門は、外を見て、険しい顔で外で楽しく遊ぶ艦娘たちを見る。

「・・・お前たちは、必ず私が守つてやる。だから、あなたには死んで貰うぞ。新しい提督殿」

すでに、顔からは笑みが消え失せたかのような表情で、外にいる彼女たちを、その眼差しだけは、優しい色で見下ろした。

ある一つの部屋。

そこに、一人の白髪の少女がいた。服装は弓道着で、スカートの様な袴の色は赤。

ベッドに腰をかけ、虚ろに、光が失われた眼で、一枚の写真を眺めていた。

「翔鶴姉・・・」

ふと、部屋の扉が開き、そこから、ツインテールの少女が入ってくる。

白髪の少女、正規空母、五航戦の『翔鶴』は、一度、写真から眼を外し、入って来た少女、同じ五航戦で、妹の『瑞鶴』を見る。だが、すぐに写真の方へ視線を戻す。

「どうかしたの？瑞鶴」

「さつき、長門さんから聞いたけど、また、来るんだって、提督」

一瞬、びくりと、肩を震わせた翔鶴。

「・・・そう」

先ほどとは違い、掠れた声。

「翔鶴姉・・・私・・・」

「大丈夫よ、瑞鶴。きつと、すぐにいなくなるから……」

震える声を絞り出し、体を震わせる翔鶴を、心配そうに見る瑞鶴。

「翔鶴姉、大丈夫……もう、あんな目には合わせないから」

どうしようもない恐怖を刻まれた姉を、まるで怯える子供をあやす様に抱き締める瑞鶴。

そう、もう二度と、あんな苦しみは味合わせない。必ず。

小さな嗚咽と共に、時間は過ぎて行った……

提督が砲弾を斬って鎮守府に着任します

ヒトサンマルマル——午後一時。

長官より、提督の任を任された天野時打は、自身の初期艦である電とともに、就任先の黒河鎮守府に一般車に偽装した護送車で向かっていた。

服装は、支給された白い軍服だ。

「ここまでする必要あるのか・・・」

「あの鎮守府を加えたいいくつかの鎮守府は、その存在を隠されてますから一般人に見られるのはまずいんですよ」

時打の言葉に運転手の人間がそう言う。

ちなみに電は時打の隣でこっくりこっくりと眠たそうに頭を振っていた。

確かに、何か重要機密がある鎮守府を見られるのはまずい。

それに、着任の時に政府に反抗する組織に襲われ、その鎮守府を乗っ取られる事も多々あるのだ。

だから、これだ。

「まあ、いいけど・・・おい、起きろ電」

「あう!？」

強烈なデコピンを額に喰らい、眠気を吹っ飛ばされる電。

「うゝ、酷いのです」

「お前の我が侂で逆刃刀を持たせてやってるんだ。これぐらい安いものだろ」

「いくらなんでも仇で返すような真似しないで下さい!」

時打の逆刃刀・深鳳を抱えながら、そう反論する電。

ちなみに、電が腰の後ろに提げている小太刀は『逆刃刀・落雷』らくらいである。

しばらくすると、トンネルが見えて来た。

「そろそろですよ」

運転手の隣に座る護衛官がそう言う。

「そろそろか・・・」

「はいなのです」

突然、緊張しはじめる時打と電。

そして、トンネルを抜ける。

「あ……」

電がパワーウィンドウをあけ、身を乗り出して、外を見る。

「わあ……」

その先に見えるは、目的の黒河鎮守府。

「あれが、黒河鎮守府……」

正面の窓を見て、時打はそう呟いた。

鎮守府の入り口付近にて、駆逐艦の暁と響、雷は草むらからその様子を見ていた。

理由は当然、新しく着任する提督の視察だ。

「どんな人なんだろうね」

響がそう呟く。

「どんな人だって、どうでもいいわ。最後の提督なんだから、姿ぐらいは見ておきましょう」

暁がそう答える。

「はあ。どうして本部はこうろくでもない提督なんて寄越すのかしらね」

雷がそう呟く。

まあ、どうせ長門からの命令なのだし、第一印象でどれほどの人物なのかを長門に伝えるだけだ。

後は、平穏な日々が続くだろう。きつと。

電のいない生活が……

そう考えているうちに、響が口を開く。

「きたよ」

その言葉で、三人とも息を殺し、身を潜める。

響の言った通り、護送車かと思われる車が、この山に囲まれた鎮守府の正門で止まる。

そして、扉が開き、そこから一人の青年が現れる。

白い軍服で、帽子は被っていない。髪の色は黒髪で、顔はそこそこ良い。

目の色は深い海色。

そして、もう一人。

その姿を見た瞬間、息が詰まるような衝撃が三人を襲った。

「いな……ずま……？」

暁が切れ切れの声で、そう呟く。

そう、その人物は、彼女たちの妹であり、数年前に『轟沈』した筈の、暁型駆逐艦四番艦『電』なのだ。

ただ、彼女たちが知っている電と違うのは、腰の後ろに小太刀を携え、一本の刀を抱え込んでおり、なにより、雰囲気が全く違う。

あの、心優しい性格の電が、あそこまでの気迫を出せるとは思ってもみなかったのだ。

「ど……して……」

この事は、大淀から聞かされていない。

いや、そもそも、特例で学生時代から艦娘を持っている事例は少ない。

今回は、彼女がいる事を本部から聞かされてなかったのだ。

「ど、どうしよう暁……」

雷が狼狽した様な表情と声で暁に訪ねる。

「ツ……！」

暁は歯を食いしばり、重々しい決断をする。

「……長門さんに、報告する」

「で、でもそれじゃ……」

「仕方ないじゃない！」

暁は押し殺した声で雷に怒鳴る。

「言ってたじゃない。もし、艦娘を引き連れていたら、その娘も殺すって……恨みを持って、こここの現状を告げられたら、私たちは終わりなのよ！」

だからと言って、自分たちの姉妹艦である彼女を閉じ込め、監禁し



ておく事も、拷問をして服従させる事もできない。  
ならいつそ、殺してしまえば、なにも起こらない。  
そこから先は平穏な日々が続くのだ。

「……行くわよ」

そして、暁の後を追うように、響と雷も追いかける。  
ちらりと、電の方を見た雷だったが、すぐに、暁たちの後を追った。

「行ったか……」

一方で、護送車を見送った時打と電。

「今のは、暁型だったな。だけど、お前がいなかったな」

「はいなのです……」

電は、少し暗い表情でうつむく。

暁型は、どの鎮守府でも、かならずと行っているほど、四人ともそろっている。その内の一人がいなくなると、轟沈してしまった可能性が高い。

艦娘は、人の手によって作られた人工生命体だ。

軍艦の魂を、その軍艦をモデルとした体とスペックに与える事で、初めて深海棲艦に対抗できる存在となる。

その体を作るのが彼女たちについている妖精。同時に、彼女たちの艦装を動かす為に必要な存在だ。

艦娘が中枢神経だとして、艦装はその体。そしてそれに乗る妖精たちはいわば運動神経のようなものだ。

艦装がダメージを受ければ、それほど艦娘の戦闘能力が下がる。

その上に、艦娘自体もダメージを受けても戦闘能力が下がるのだから上無いほど不便だ。

ただ逆に、艦娘が治れば艦装が直り、艦装が直れば艦娘も治る。そうした、造ったのは自分たちの癖に分からない事も多々存在する。

その理由は、造るのに協力した妖精たちにしか分からない事もあるのかもしれない。

話を戻すが、そうした軍艦の魂を持つ艦娘たちだが、深海棲艦との

戦いが始まってから二年後、魂を分ける、『分魂』をする事が出来たのだ。

その為、艦娘を量産する事が出来るようになり、ここにいる電にも、同じ駆逐艦『電』の魂を持つ、全く同じ容姿の艦娘がいるのだ。何十人も……。

「行くう」

「……はい」

重い空気の中、彼らは、鎮守府の中に入っていく。

足音が聞こえる……

この広間に近付いて来ているようだ。

一応、『見せしめ』という事でこの部屋には、ほとんどの艦娘が集まっている。

近付いてきているのは二人ほどだ。

一人は二十歳に近い男、もう一人は小柄な少女のものだ……  
全く、短い間に提督が何度もくるから、どれがどんな体格の人間のものか、分かるようになってしまった。

まあいい。今日はこんなうるさい足音から、こいつらを引き離す事が出来るのだ。

そして、こんな汚れ仕事を、他の娘たちには任せられない。

だから、私がやるのだ。もう二度と、この娘たちに、あんな目には遭わせない。

だから、私は、この砲門を向けるのだ。

ただ、暁たちの話では、小柄な少女の方は、電だと聞いた。

参ったな……彼女たちの妹だというのに。私が手を下さなければならぬとは……

だが、私は展開した艤装の砲塔の一つをこの広間の、新しい提督が入ってくるであろう扉に向ける。

悪いな、私たちの安全の為だ。死んでくれ。

そして、ドアノブが回り、扉が開かれ、私の14cm単装砲が火を吹

いた。

玄関に張ってあった『どこにもよらず一階の広間に来い』という指示に従い、俺と電はそこへ向かっている。

・・・うん、殺気剥き出しじゃなねえか・・・

近付けば近付く程強くなる殺気。一体どれほど無下な扱い受ければここまで強くなるんだ？

「・・・電」

「はっ」

名前を呼んだだけで理解したらしく、深鳳を差し出してくる。

良い妹を持ったな。

俺はそれを受け取り、左腰に差さずに左手に持つ。

多分、この鎮守府にいる誰かがあの見えて来た扉に向かって主砲むけているんだろうけど、この際仕方の無い事だろう。

ここはブラック鎮守府。提督に恨みを持つ奴は少なくない。

だから、ここで少し恐怖を植え付けてしまうかもしれないけど、死んで電が一人になるよりはマシだ。

そして、扉の前に立った俺は、一度深呼吸をして・・・ドアノブを回して少し開けた瞬間、思いつき蹴り飛ばして開けた。

その瞬間、目の前から赤い閃光が走り、長年の修行の成果で鍛え上げた動体視力で砲弾が撃ち出されている所を目撃する。

それを視認した俺は、すぐさま深鳳を抜刀。

まだ抜け切っていない状態で、砲弾の斜線上に深鳳の逆刃の方を向けた状態で構える。

俺の故郷にいる一番の鍛冶職人が造ったこの深鳳は、そこらの鉄なご薄氷の様に斬る事が出来る。

だから、例え艦娘の砲弾など、簡単に斬れる！しかも実験済みの証明書付き！

重い衝撃が両腕に来る。だが、それは一瞬の事ですぐに、ギヤリイインツ!!という音と共に、砲弾が真っ二つに斬れ、俺の両脇を

抜けていく。

そして最後に、背後と正面からのほぼ同時の轟音。初速は音速を超えるのだから、当然だが、音が後から聞こえてもおかしくはない。だから、背後でおそらく壁が砕ける音と発砲の音が重なったのだ。

「ふう……」

俺は、一息つくくと、刀を鞘にもどし、後ろにいるであろう電を見る。

「大丈夫か電」

「けほっけほっ……はい、大丈夫なのです」

巻き起こった土煙をもちに被ったのか、咳き込む電。無事でなによりだ。

そして、電の背後には、撃ち抜かれた拍子で吹き飛んだ壁。

……修理代、どれくらいだろうか……

俺は癖になってしまった苦笑をして、俺は、砲撃をしてきた張本人であろう人物を見る。

威力からして14cm単装砲だろう。資料によれば、それを撃てて、そして提督に向かって撃てる人物といえば、あいつしかいないだろうな。

ここでたった四人しかない戦艦の一人、『長門』だ。

艦装を展開したままだったって放心してる。驚いているのが見え見えだ。

まあ口に出す事はしないがな。

「行くぞ、電」

「あ、はいなのです！」

俺は深鳳を電に預けて、広間の北側の壁へ向かい、そこでここにいる艦娘たちを一度に見回す。

そして俺は口を開いた。

なんて事だ……

まさか、ただの人間が、砲弾を斬るなど、だれが予想できたか……

「ふう……」

一息吐いた砲弾を斬った張本人は、土煙で付いた埃を払う事をする前に、後ろを向いた。

「大丈夫か電」

「けほっけほっ．．．はい、大丈夫なのです」

まさか、自分より他人の心配をするとは．．．私の予想を裏切る様な行為をするこの男は一体．．．

提督は皆同じだ．．．私たちを無下に扱い、思いを踏みにじる存在だ。

信じてはいけない。

「行くぞ電」

「あ、はいなのです」

電に刀を預けた。何故だ？まだ砲撃されるかもしれないんだぞ。

そんな思いとは裏腹に、彼は北側の壁に近付き、そこで立ち止まって私たちの方を見た。

一度、この場にいる私たち艦娘たちを見回した。

そして、彼は口を開いた。よく、通る声で。

「今日から、この鎮守府に着任する事になった、天野時打だ。好きなように呼んでくれて構わない。クソ提督でもクズでも構わない。だが、俺がお前たちに言う『命令』であり『最優先事項』は．．．」

そこで私はもう一度主砲を向けた。

ふざけた命令なら、容赦なく撃ち抜く。まだ私には、41cm連装砲がある。

今度こそ、確実に葬って．．．

「生きろ。どんな事であろうと、絶対に生き抜け。轟沈など、俺が許さない。そして、仲間は見捨てるな。仲間がどんなに瀕死だろうと、困難だろうと、絶対にここに帰ってこい。ここは、お前たちの家なのだから」

時が止まった様な感覚に見舞われた。

生きろ、だと？何を馬鹿な事を。そんな事を言っておきながら、ど

うせ私たちを無下にするつもりなのだろう。

だったら、私はその化けの皮を剥いでやる。

そう、思った瞬間だった。

「という訳で俺からいう事はこれだけ。全員解散！」

.....は？

もう解散なのか？

他にいう事とかないのか？

「あ、そうそう」

私たちが戸惑っている間に、退室しようとしていた男は思い出したかのように振り向いた。

「さっき長門がやったように人誅したい奴は明日から襲いかかって来ているぞ。それで気が晴れるなら何度でも相手してやるよ」

またもや衝撃。

襲いかかって来ているのか何を言っているんだ？

確かに私の砲弾を斬ったのは驚いたが、不意打ちで対応できる程お前は強くないだろ。というか、対抗する方法が今電が持っている刀。下手したら、私たち艦娘でも死んでしまうんじゃないか.....

「あの、長門さん」

「ん」

そこで奴の初期艦であろう電が、一枚の紙を持って私に近付いて来た。何のようだ？

「後で、これを読んでから司令室に来て下さい」

そう、堂々という。

.....だめだ。どうにも違和感を感じてしまう。

私の知っている電とは、全く違う。

あの娘は、こんな堂々としていない。あの砲撃で、腰を抜かさないとどこか、驚いた様子でも無かった。

一体、どのように育てたら、ここまで強くなるんだ.....

私は、一瞬寒気のようなものを感じながら、その紙を受け取った。

「では、私はおに.....司令官の所にいきますね」

そして、彼女は奴の後を追うように、去っていくとした。

「あ、ま……」

そんな彼女を、私は引き止めようとした。だが、それよりも早く、電は止まって振り向いた。

「皆さんー！」

まるで、思い出したかのように、笑顔を向けて、私たちが知っている電の人物像から、ありえない様なハキハキとした、堂々とした声で、ある事を言った。

「先ほど、司令官が言った『襲っても良い』という事ですが、まず、殺される事などありえませんから」

殺される事は無い。それは当然だろう。だって、そんな事をすれば、この国の貴重な戦力を失う事になるのだから。

だが、そんな考えを裏切るように、とんでもない事を言った。

「ただし、大怪我する事だけは覚悟して下さいね」

大怪我……つまりは、私たちが大破する程のダメージを受けるという事なのだろうか？

ありえない。

だけど、誰もそれを口に出す事ができない。

何故なら……

彼女から放たれる気迫が、それをどうしても止めてしまうのだ。

一体、彼女……いや、彼女をこんな風にした奴は一体何者なのだ……

かすかな恐怖を植え付けられた状態で、私は、司令室に向かった。

ヒトヨンヒトゴ——午後二時十五分。

「やりすぎです」

「申し訳ない」

今、時打は電に司令室で正座させられていた。

「仕方なく私が一役買って恐怖を和らげたから良かったものを、次からは気を付けて下さいよ」

「はい……」

正座は子供の頃からやっているで馴れているから、足が痺れる事は無い。

しかし、かなりの身長差があるのか、時打が正座しても、身長が全然変わる事が無いのだ。

時打が怒られて猫背になっていなければの話だが。

「全く、次からはもう少し加減して言って下さいなのです」

「はい……」

電に見下され、時打はとほほと苦笑する。

そして、そんな様子を外から見ている者がいる。

(いや……何も言えなかったのは全部お前の所為なんだが……)  
長門である。

電に言われた通りに司令室前に来たのだが、中の様子を見ようと今時古い、中世式鍵穴扉の鍵穴から中の様子を覗いているのだ。

その状況をありえない様な表情で見る長門。

(なんで提督が怒られているんだ……)

その様な状況を見るのは初めてだ。

普通は、提督が違反を起こした艦娘を怒るものであり、艦娘が提督を怒る事はありえない筈なのだ。

だが、それはもちろん、他の鎮守府の事を知らない彼女たちの意見であり、この様な状況はブラック鎮守府とは正反対のホワイト鎮守府では珍しくない事なのだ。

「すみませんでした」

「もういいのです」

電は腕組みを解き、表情を崩すと、時打に手を差し伸べる。

「さ、仕事をするのです」

「ああ」

時打は、電の手を取り、立ち上がる。

「さて、電。彼女をいれてやってくれ」

「はいなのです」

え、と思った長門だったが、そんな思考を始める前に目の前の扉が内側に向かって勢い良く開く。



「え、うわあ!？」

「さ、入って下さい」

驚いて、後ずさる長門。

まさか自分が反応するよりも早く行動されるとは思っても見なかったのだ。

「あ、ああ……」

そんな返事しか出来ず、つつたつてしまふ長門。

「遠慮せずに入ってくれないか？お茶とか出すから」

「い、いや、そこまでしなくても……第一、砲撃した相手を持って成すなど……」

「いやいや、昨日の敵は今日の友と言うだろ？」

「それをいうなら明日の敵は今日の友なんじゃ……」

「いえ、今日の敵は明日の友ですよ」

なんだがばらばらな意見を言い合う三人。

「ま、とりあえず入ってくれ」

「……」

少々不満な表情で中に入る長門。

「さて、電から渡された資料は見てくれたかな？」

時打は机に座り、長門にそう問いかける。

「はい。しかし、何故私を秘書艦に？」

長門は最もな質問を時打に返す。

「理由としては、お前がこの鎮守府の事を一番良く知っていると思ってたからかな」

「……何故、そう思うと？」

確かにこの鎮守府の事はよく知っている。

だが、彼にその事を知るすべはない筈だ。

「資料を見たけど、お前が一番、ここの艦娘たちの世話を焼いている事が分かったんだ。だから、艦娘たちの事を良く知っているお前に、秘書艦を頼もうとした。それだけさ」

なるほど、資料か。

納得がいった長門だが、それでも、まだ時打の事を信じた訳ではな

い。

もし、この男が他の艦娘たちに、何かしら手を出そうというものなら、すぐに砲撃して殺す。

例えば、一回じや当たらなくても、何度も撃ち込めば、かならず当たる筈だ。きつと。

「もちろん強制じゃない。お前がいやなら、昔からの馴染みである電に任せるけど・・・」

「いえ、やらせて頂きます」

「いいのか？」

「ええ。ただし、こちらから条件があります」

そう、無料では引き受けない。

「分かった。いつてみる」

「では、ここにいる艦娘たちには、その刀を向けなくて頂きたい」

これは絶対条件だ。彼は自分から襲っても良いといったが、もし、その刀でここの艦娘たちを傷つけようものなら、自分が風穴を開けてやる。

そこで彼はすぐに口を開こうとしたが、意外な人物によってそれは遮られてしまう。

「待って下さいなのです」

電だ。

何故だ。何故彼女はその条件を止めるのだ。

「電・・・」

どうやら、時打も予想外のようだった。

「その条件を出す前に、あなたには知ってもらいたい事があるのです」

「知ってもらいたい事・・・？」

オウム返しに聞くと、電は頷く。

「司令官」

「ああ、分かった」

すると、時打は、自分の左側に立てかけていた刀を持ち上げ、柄の方を長門に向けて差し出す。

「？」

一瞬、身構えた長門だったが、柄の方を差し出して来た時打の行動に戸惑いの表情を浮かべる。

ただ、柄の部分に向けてきたという事は、抜けという事なのだろう。なので、長門は右手で柄をつかみ、一思いに一気に引き抜く。

「これは・・・!?!」

そして、驚愕した。

その理由は、この刀は、刃が逆さまに付いているのだ。

「そんな刀で人を殺せないだろうか？」

「あ、ああ・・・そうか、そういう事か・・・」

先ほどの広間での一見。最後に電が言った事の意味がようやく分かった。

『殺される事は無いが、大怪我はする』。その理由は、この刀が人を殺すためのものじゃないという事だ。

相手を鎮圧する事を目的としたこの刀では、大怪我をさせる事が出来るが殺す事はない。

そして、先ほど長門の砲弾を斬った芸当は、この峰の刃でやった事なのだ。

そしてなにより、長門は、この刀の美しさに見とれた。

綺麗な波模様に、天井の証明に照らされて、黒光りする刃。

そして、刃こぼれ一つしていない刃。

「でも」

そこで、時打が口を開く。

「俺がその逆刃刀を使うのはあくまで砲弾の迎撃だけだ。それに、彼女たちに使うのは体術であって、それを使う時は、相手がどうしても止まらない時。あるいは、お前たちに仇なす輩に対してのみだ」

その言葉に乗せられた気迫に、長門は一瞬、寒気のようなものを感じた。

この男はただ者じゃない。

言葉に嘘偽りが無い様にも思えるし、なにより、勝てる気がしない。艦娘として生まれ変わった身なのに、自分は、戦艦の筈なのに、どうしても、彼の気迫に怯えてしまう。

「そうだ、他には？」

「え？」

「他に条件はあるか？いくらでも構わないよ。それとさっきの条件は飲んであげるよ」

遠慮するな、とでもいう様に微笑み彼を見ると、持っていた警戒心がだんだんと解れていってしまう気がした。

それが、なんだか恐ろしい。

だから今、先手を打たなければならぬ。

「では、次に、自分の言った事に責任を持って貰う事」

「分かった」

「私たちを無下に扱わない事」

「ああ」

「私たちを大切に扱う事」

「了解」

「私たちを、平等に扱う事」

「うん」

「私たちに、十分な援助をする事」

「分かった」

たくさん条件を出した気がする。

そのすべてを、電が記録してくれている様だったので、少し安心した。

「最後に」

「うん」

そして、この提督は、最後まで自分の話を聞いてくれた。

「・・・私たちを、この逆刃刀で、その仇なす輩から、守る事」

「分かった」

「そして、このどれかを疎かにするようだったら・・・」

そして、右手に持った逆刃刀を、時打に向けた。

「・・・私に、一回殴らせろ」

この時、どうしてこんな事を言ったのか、理解出来なかった。

ただ、彼は、逆刃刀を鞘に納めながら受け取った後、確かに言った。

「分かった。どれかを疎かにするようだったら、お前に殴られるよ」

そこで、長門は、久しぶりに笑った。

「約束だぞ」

そして、一つ、彼は人差し指をたてた。

「それじゃあ、こちらから、簡単な条件を一つ」

ぴくり、と、長門は笑みを引つ込め、冷徹な視線を時打に向ける。

「・・・なんでしよう？」

「俺、実は電以外から敬語使われるの馴れていないんだ」

そして、長門は彼の意図を察した。

「だから、俺にはタメ口を使ってくれて構わない。これは飲んでも飲まなくても良いよ。君の自由にすれば良い」

そこが見えない男だ。

長門は、そう思った。

「分かった。私も息苦しかった所だ」

その反応に、時打は嬉しそうに笑い、右手を差し出す。

「それじゃあよろしく。長門秘書艦殿」

「ああ、よろしく頼む。天野時打司令官殿」

そして、長門も右手を差し出し、その手を握った。

## 初日の生活

マルゴサンマル——午前五時三十分。

この黒河鎮守府の敷地にある、小さな竹林。

その中心で、時打は立っていた。

「……………」

ただ、ブーツとして、つつたっていた。

周りには、ただただそよ風に吹かれる竹の葉のみ。

しばらく、ただ時間が過ぎていた。

しかし、突然、目をカツと見開いたかと思うと、鋭い気合声を発する。

「オオオオオツ!!!」

瞬間、周りの竹がいきなり見えない棒で叩かれたかのようにそこからだを曲げ、悲鳴の様な音をあげる。

「ふう……………」

その瞬間、ぐっしよりと汗を流す時打。

そこへ近付く一つの足音。

「はいなのです」

「ああ、ありがとう電」

彼の初期艦の電だ。

電は、その手に持っていたタオルを時打に差し出す。

時打はそれを受け取り、体から溢れ出る汗を拭き取る。

「それと……………」

時打は、汗を拭き取りながら心配そうにこの鍛錬に付き合ってくれたもう一人の人物を見る。

「…………大丈夫か長門？」

見ると、そこには呆然とした表情でつつたっていた。

「……………」

「おーい、長門さーん？」

「だ、大丈夫なのです？」

先ほどの鍛錬、『剣気』を発散させるだけなのだが、剣客にとってこ

の気迫は日々溜め込まれるものであり、ストレスでもある。

だから、こうして時々、発散させないと、いざって時に止まらなくなってしまうのだ。

だから、週に一度、こうして発散させているのだ。

「・・・は」

ようやく、我に帰ったのか、慌てた様な行動をする。

「あ、すまない。つい呆然としてしまった・・・」

「いや、体が強張らないだけマシだよ。電はこれを最初に喰らった時は気絶したぐらいだからな」

「もー！そういう事は言わなくて良いのですー！」

ぶんすかと怒る電を他所に、逆刃刀を彼女に預け、時打は長門に近寄る。

「それじゃあ、そろそろ戻るか」

「そうだな」

「あ、待って下さいなのですー！」

先に行ってしまう二人を電が追いかけて、時打の、提督着任の初日が始まる。

「・・・以上が、今日やる事だ」

「これぐらいなら、午前中に終わるかな」

「なら、午前にすべて終わらせると？」

「うん。それで今日の予定を組もう」

司令室で、時打と長門は今日の予定について打ち合わせをしていた。

「それと、朝食の制限時間を解禁してくれ。みんなゆっくりと食べたいだろうし」

「良いのか？」

「ああ。飯というのは時間に制限されず、好きな時に自由なペースで食べるものだ。まあ、マナーはある程度守って貰うけど」

「そうか・・・」

「という訳で、お前の口から言っておいてくれないか？俺じゃあ説得

力なさそうだから」

「そうだな。分かった。私から伝えておこう」

そして、今終わったようだ。

「それじゃあ、飯でも食いに行こうか」

「そうだな」

時打は椅子から立ち上がり、そこで何か思い出したかの様にその状態で止まる。

「? どうした?」

「いや……提督に対して不満を持っている奴らが多いし、それに初日でお前の砲弾斬ったから怯えてる奴もいるんじゃないかと思っ  
て……それで飯が不味くなってしまうんじゃないか……」

「う……」

確かにそれは問題だ。

ここはブラック鎮守府。  
提督に対し、怒り、憎しみ、恐れを抱く艦娘たちが多い所だ。

その中で、食堂で堂々と提督が飯を食べていては、気分を害する者が出るかもしれない。

「電は暁たちと一緒に食べるようだし……お前も、仲間と一緒に食べたいと思うし……だがここに艦娘たちとのコミュニケーションも必要だし……」

頭を抱え、唸り出す時打。

「……優しいんだな」

「え?」

「何でもない」

そこでふと考える長門。

「……だったら、私がついてこようか?」

「え? 良いよ。別に時間をズラしたって何か問題がある訳じゃないし、それに、ここで食うにしても、お前他の奴らと……」

「同じ事を二回も繰り返すな。それに……一緒に食うといっても、特に話をする訳ではないからな……」

目をそらした長門の目に、影が差した。



そこには、何か、大切なものを失ってしまった、喪失感が感じられた。

「……分かった。じゃあサンドイッチでも頼もうかな」

「分かった」

それを了承した長門は、時打に背をむけ、司令室の扉に向かう。

「あ」

ふと、思い出したかのように、立ち止まり、振り向く。

「私がない間に、ここから出るなよ」

「ああ、お前がない間に勝手に出る事はしないよ」

そんなことすればお前に殴られるからな、と苦笑しながら言い、長門は少し安心したように部屋を出た。

マルナナサンマル——七時三十分、朝食の時間。

「……なので、以前の様に朝食の時間の制限は解かれる事になった。次からは自由な時間に朝食を取っても誰も咎める者はいないから安心してくれ」

食卓にいるであろう全ての艦娘たちにそう告げた長門は、周りの戸惑いの声を聞きながら、ここの補給艦にして、料理長の間宮の元へ向かった。

「あ、長門さん」

「おはよう間宮、すまないが、サンドイッチを作ってくれないか？」

「サンドイッチ？何故？」

戸惑いの表情を浮かべる間宮。

「提督が食べたいと言っているそうさ」

「え……」

そして、目が少し見開かれる。

「あの……好みとかは……」

「なんでもいいそうさ。それと、それほど怯えなくて良いぞ。今の提督は底は見えないが、それほど怖くはない。あの刀だって、半分模造刀の様な物だからな」

「え？そんなんですか？」

間宮は意外そうに目を見開く。

「まあ、とりあえず作ってくれ」

「分かりました」

うなずいた間宮はすぐに調理に取りかかった。

「長門」

「ん？」

そこへ、長門に声をかける人物が二人。

「扶桑、山城」

ここの長門以外の戦艦の扶桑と山城だ。

その表情から、心配そうな気持ちが見て取れる。

「大丈夫？酷い事とか、されてない？」

扶桑が、そう聞く。

「ああ、今の所は・・・な」

長門はそう返す。だが、その声にまだ不安の感情が感じられる。

「本当？」

「ああ」

「あの刀で脅されたりとかしなかった」

「いくらなんでも心配し過ぎだ。それこそしなかったよ。そもそも、私が秘書艦になる為の条件の項目を見せただろう？しっかりと守ってくれているよ」

「だけど・・・」

扶桑は、片手を胸に当て、俯く。その瞳は揺らいでいる。

扶桑型戦艦、一番艦の扶桑と二番艦の山城の姉妹は、その史実から語られる通り、不幸戦艦として有名だ。

その為、よく被弾し、出撃する度に入渠などで資材を根こそぎ持つて行ってしまいう事が多々あるのだ。

そしてそれが理由で、この鎮守府がブラックになった時の提督は解体よりも惨い、『轟沈』させようとしたのだ。

もともと不幸体質な彼女たちは、敵に囲まれたりするのは慣れっこ

だが、流石に『死ぬ』という命令を受ける事だけは予想外だったのだ。正確には圧倒的戦力差で『戦闘を続行せよ』と言われ、彼女たちは命令に逆らえず、言われた通り戦闘を続行。

夜戦にまで持ち込まれ、燃料ぎりぎりの所で勝利。しかし、鎮守府に戻った彼女たちを待っていたのは、提督からの非難だった。

『お前たちはこの鎮守府を潰したいのか』と。

彼女たちは戦艦。その為、大量の資源を消費する為に、資源が足りなくなってしまうのだ。

だから、彼女たちは大破状態のまま放置された。

ろくに出撃も出来ず、戦力にならない彼女たちを、何故解体しないのかは、未だに不明だが、とにかく彼女たちにとって、提督というのは自分たちを非難する存在でしかないのだ。

「一応、ご飯の時間はいつでも良いと言われたけど、まだ不安なのよ」

「扶桑姉様・・・」

未だに、時打への不安を抱いている彼女たちは、秘書艦に指名され、それを受けた長門を心配しているのだ。

「心配するなお前たち。何かあれば、私が奴を殴るようにしているからな」

と、勇気付けるように扶桑の肩に手を置く長門。

「長門・・・」

「できましたよ」

そこへ、間宮がサンドイッチを皿に乗せて持って来た。

「ああ、ありがとう間宮」

「いえ。貴方の分も作ってあるので食べて下さい」

「すまないな」

潔く、皿ごとサンドイッチを受け取る長門。

「それじゃあな」

「あ・・・」

そして、長門は去って行く。

一方で、こちらは司令室。

そこで、執務机に座っている時打は今日処理しなければならない書類をかなりのハイスピードで片付けていた。

「えーっと、資材に関しての資料はこれで終わり……後は、この工廠こうしょうの設備か……酷いな」

資料を見て、苦い顔をする時打。

見て見ると、だいたいの機能を艦娘が使う事を制限されているのだ。

「たしか、工作艦に明石っていう奴いたな……お、ちょうどそいつからじゃないか……て、しばらく提督いなかったんなら勝手に解禁にすればいいのに」

ふと疑問に思った。

何故この艦娘たちはもう既にいない提督のルールに従っているのだ？

いないのなら、そのルールに縛られる事もないのに、何故この艦娘たちは……

不意に、扉からノック音が聞こえた。

(長門か?)

「入ってくれ」

「では……」

声のトーンが違う。長門ではない。

扉が開き、中入ってきたのは桜色の髪をした少女。

工作艦『明石』だ。

「お前が、明石か?」

「はい」

その表情は気を引き締めている。

緊張しているのか、警戒しているのか、定かではないが、どちらかといえば、後者だろう。

「何の用だ?」

「……私の、書類は見てくれましたか?」

「書類……ああ、これのことか？」

丁度目の前にある手を付けていた書類を手に取り、目線のやや下の所に持っていく。

「当然…….?」

自由に使っていていいぞ。と言おうとした瞬間、彼女の顔が強張るのを見た。

「……どうした？」

「え？」

「何を怖がる必要が……と、これは無理な相談か」

時打は自虐する様に苦笑する。

「すみません……」

「謝る必要なんてないよ。悪いのはお前たちをぞんざいに扱った前の提督だ。気に病む必要は無い」

「しかし……」

「それと、敬語は無しだ。どうもむずがゆくてしかたがない」

それを聞いた明石が慌てだす。

「そんな!?!提督に対してそんな物言い……」

「いやいや、他の人に対して使うのはお前の勝手だけど、俺には遠慮なく使ってくれ」

「でも……」

言葉を詰まらせる明石。

（仕方ない、少しいじってみるか）

「うーん、せっかく工蔽の使用を解禁にしようと思ったのに、それじゃあやめようかな」

「な!?!それずる……」

「ならどうする?簡単な事だぞ?」

「……提督はいじわるね」

口調が、タメ口に変わる。

「うん。やっぱりタメ口の方がしっくりくる」

「貴方、おかしいわよ?艦娘に敬語使わせないなんてさ」

「俺はここにいる奴らを平等に扱いたいだけだよ」

「ふくん……それで？敬語やめたけど、工廠の方はどうなの？」  
明石は視線を鋭くして時打に問いかける。

時打は苦笑して、口を開く。

「もちろん、自由に使ってくれていい。建造は俺の許可が必要だけど、開発は自由にしてくれていいぞ」

「本当!？」

明石が驚いたように目を見開く。

「……前の提督ってどんだけ人でなしだったんだよ……」

「え?」

思わず頭が痛くなってしまう時打。

「人の趣味を潰してまで戦績が欲しいのかよ……そんなんじゃ士気あがらないだろ……もつと自由にさせておけばいいのに……」

「あ、あの提督?」

だんだんと殺気が強くなるのを感じた明石。

「……は!?わ、悪い。つい愚痴ってしまった……」

「……ぷふ」

つい、時打の慌て様に吹き出してしまう明石。

「?」

「す、すみません……どうにも、く、貴方は、くく、おもしろくて……ぷくく……」

必死に笑いを押えこんでいるようだが、それでも声が漏れ出でている。

「なんか、傷付くな……」

でも、明石が笑ってくれてるならいいか、と内心で思ってしまう。

「明石」

「くく……は、はい」

「いつか、工廠を見せてくれないか?」

「え?」

時打の言葉に、眼を丸くする明石。

「ああ、いや、な……妖精っているだろ?」

「ええ、色々と手伝ってくれてるわよ。艦娘の艤装とか、工廠とか」

「多分、工蔽にいるあいづらは、きつと、提督の事恨んでるからさ。俺が無断で入ろうとすれば、追い出されるんじゃないかって」

「……優しいのね、貴方」

「なんか長門にも言われた気がするなそのセリフ」

「なら、気のせいよ」

明石はふふと笑い、時打は苦笑した。

「それじゃあ、工作艦明石。この事を、他にも出入りしたい奴に報告し次第、作業を自由にやってもよし。ただし、使った資材は必ず報告する事。他の奴らの補給ができなくなるからな」

「了解よ、提督」

互いに敬礼をして、明石は退出する。

「さて、他の書類を片付けるか」

「失礼するぞ」

「ん？」

残った書類に手を付けようとしたら、扉から声が聞こえた。

「ああ、長門」

「なぜか明石が上機嫌でここから出てきたが、何かあったのか？」

「なについて、工蔽を開放しただけだが……」

「それだけじゃないだろう？」

じとつと時打をにらむ長門。

「それだけじゃないって言われても、少し話しあっただけだが……」

あ、その時笑ったなあいつ」

「え？本当か？」

長門が意外そうな表情をする。

「ああ、なんで笑ったか分からないけど」

「その様子なら、本当のようだな」

長門は笑みを少し零した。

工作艦『明石』

彼女の場合は他の艦娘と比べ、とても軽いものだ。

ただ、作りたくないものを、強引に作らされることが多々あったの

だ。

それに反対する度に、叩かれたり、脅されたりと、仕方なく作るが、その時に不備があれば、その脅しを本気で実行に移される事があったのだ。

だから、彼女にとって提督というのは強引な存在なのだ。

「それで、サンドイッチは？」

「ほら」

「お、サンキュ」

長門の持っていた皿を受け取ると、それを一つ、口に放り込む。何度か噛み、しばらく味を堪能する。

「……ん！美味しい！」

「当然だろう？」

思わず、賞賛の叫びを漏らす時打。

「間宮の料理だ。まずい訳が無い」

「ああ！後で美味かったっていつておかなきゃな」

「それは私が言っておこうか？」

「いや、それは俺が直接言うよ。間宮だって、本人に言われた方が嬉しいだろう？」

と、長門の提案を拒否する時打。

それを聞いた長門の顔が少し曇る。

「確かにそうだが……お前、気分を害するんじゃないかって言っただけか？」

「時間によるよ」

「お前、案外適当だな……」

「よく電にも言われたよ」

苦笑する時打。

「それで、仕事はどれくらい進んだんだ？」

「結構進んだぞ。後これだけだ」

「すごいな……」

右にあるあと数枚の書類を指さす時打に、これには流石に賞賛の言



葉を漏らす長門。

そうしている内にサンドイッチを食べ終えた時打。

「それじゃあ続けるか」

「皿、片付けておこうか？」

「いや、自分で行くよ。そうすれば手間が省ける」

「そうか・・・」

不安なのか、表情が曇ったままの長門だった。

鎮守府は、当然の如く、海岸に建てられる。

そこにある崖に、電はいた。

「・・・海が綺麗なのです」

ふと、そう呟いた。

何故、彼女だけがここにいいのかというと、なんというか、居づらかったのだ。

### 駆逐艦『電』

本来なら、心優しい性格で、いつもオドオドとしてた気弱な性格でもあるのだ。

だが、彼女の場合は、剣客を目指している時打の傍で五年間も一緒に過ごしていて、その性格が変わってもおかしくない。

普段から、彼の剣気に当てられ続けければ。

その上、時打から剣術の手解きを受けて、小太刀と体術の複合戦術を扱う事が出来るのだ。

これを電は『天野流』と勝手に命名しているが、それでも、大抵の敵なら倒せる様になったのだ。

そんな、『剣』を持つ、他の『電』とは決定的に違う彼女が、果たして別の電しか知らない暁たちと、仲良くする事が出来るのか・・・

「・・・」

同室の暁たちの事を思い出す。

「やっぱり・・・迷惑なのかなあ・・・」

あの視線は、確実に自分を恐れている目だ。

それと同時に、何かに謝罪をするような・・・

「・・・あの人たちの電って、どんな娘だったのかな」

そう、眩き、電は鎮守府に向かって歩き出す。

森を歩き続け、ふと、止まる電。

そして、肩越しに後ろを見る。

「・・・」

無言で右手を腰の後ろにある小太刀の鞘に移動させる。

周囲を警戒しながら、ゆっくりと小太刀を引き抜く。

「・・・行きましたか」

が、途中まで引き抜いた小太刀を、チンツ、と鞘に戻し、また、歩き出す。

(この艦娘じゃない。なら・・・誰?)

不穏な空気を感じ、電は鎮守府に戻った。

「・・・」

(は、入りづらい・・・)

食堂の扉の前。・・・の死角から中の様子を伺っている時打。

実は・・・まだ中に何人か艦娘たちが談笑しているのだ。

もう十時だというのに、ここで思う事があるのか、楽しく会話しているのは微笑ましい事なのだが、時打はその中に自分が入る事でそのムードを壊さないか心配なのだ。

「く・・・時間を改めるか」

「何をしてんだ?」

「うおわ!」

いきなり後ろから声をかけられ、驚いて振り向いた瞬間、足をからめ、思いつきり後ろに転倒。

「ぐはっ!」

そのまま壁の角に後頭部を強打。

「あたた・・・」

「お、おい大丈夫か？」

その衝撃で目を回す時打。

だが、持ち前の気力ですぐに持ち直し、後ろから声をかけてきた人物を見る。

「お前は確か・・・『天龍』か」

「あ、ああ・・・」

眼帯の高校生ぐらいの少女、軽巡洋艦『天龍』だ。

「で？こんな所で何してんだ？提督さんよ」

「いやあ、サンドイッチの事を美味かったって間宮に言いたいんだが、ここ、まだ人いるじゃん？だから入りづらいのなんのって・・・」

「いや、普通に堂々と入っちゃえばいいんじゃない？」

「いやいや、今ここで楽しいムードを壊す訳にはいかない」

「・・・そんな事言ってるけどさ」

天龍が気まずそうに、片手で頭を掻きながら、もう片方の手で食堂を指さす。

「・・・そのムード、とつくに壊れてんぞ」

「え」

一気に冷や汗が噴き出て、ギギギ、とまるで錆びたブリキの様に首を回すと・・・その場にいる全員の視線がこちらに向いていた。

「・・・マジで？」

「一目瞭然だろ？」

「くう、俺の『忍者の様に間宮に近付いてお礼を言う作戦』が潰れてしまった・・・」

「その作戦名、なんか長くないか？そしてなんでそんなコソコソする必要があるんだよ？」

天龍が最もな事を言う。

軽巡洋艦『天龍』

この鎮守府では最も新参で、このブラック鎮守府の現状をそこまで

理解できていない。

なので、提督に対してのイメージはなんか嫌な奴という事だけ。しかし、自分は男らしく振舞っているみたいだが、実は素直じゃないだけで、駆逐艦の娘たちには結構人気がある。

その為、本人には自覚は無いが、彼女は駆逐艦の娘たちにとっての一つの支えの様なものなのだ。

「とりあえず言ったらどうだ？」

「あ、ああ・・・頼むから押すなよ？」

「なんでそうなる!？」

半ば漫才化している天龍と時打の会話が終わり、時打は控えめに食堂に入っていく。

視線が痛い。

とにかく痛い。

(頼むからみんなみないでくれ。本当に痛いんだけど！)

全員が警戒や恐れといった表情で時打を見る。

中には逆恨みともいうべき感情を向けている艦娘もいる。

そんな中、時打は間宮の元に辿りつく。

「間宮」

「は、はい。なんででしょう?」

びくびくとした態度を取る間宮。なんだかこちらが怖がらせているようで気が引ける。

「あー。サンドイッチ、美味しかったよ」

「そ、そうですか・・・良かった」

間宮は安心したのか、ほっと息を吐く。

「その、ありがとう」

「え」

時打のいきなりのお礼に、目を丸くする間宮。

そして、背中で感じていた視線の気配が急激に変わった。

「提督がお礼いったよ」「聞き間違いないよね?」「私たちを油断させる罠かも」「そうなの?」

「……」

それを聞いた時打が先より大量の冷や汗を掻きまくっている。

「そ、それじゃあ俺はこれで！また明日も頼む！」

「あ」

そして、今すぐにこの場から離れたいという本能に従い、たつたと走り去っていく時打を茫然と見送る間宮。

食堂では未だに時打の行動で議論している艦娘たちがいる。

「……優しい人ですね……」

笑みを零し、間宮は、気持ちが悪くなった気がした。

「そんじゃ天龍！またな！」

「お、おう！」

すれ違い様に天龍に挨拶をし、食堂が見えなくなった所で走るのをやめ、歩いて指令室に向かう。

「はあ……そこまで珍しい事なのか？」

溜息を吐いて、つきあたりの角を右に曲がろうとした時、それと同じに、向こう側からも誰かが歩いてきていた。

「わ」

「あ」

それに気付かず、二人はぶつかってしまった。

時打は体格と持ち前の足腰の強さで踏みとどまったが、向こうの人物、白髪の長髪の少女は弾かれる様に後ろに転びそうになる。

「危ねえ！」

「あ」

それを見た時打は慌ててその少女の手を掴み、転倒するのを回避させた。

そして、しばらくその様な状態が続いたが、突然、少女の方が表情を強張らせ、わなわなと体を震わせ始めた。

その異変に気付いた時打は、少女の手を思いつきり引っ張った。

「きゃ」

短い悲鳴があがったが、時打は彼女を立たせるだけにとどめ、一步

下がった。

少女は未だに体を震わせており、恐れるように時打を見つめたまま固まっていた。

「…………ごめん」

「え…………？」

時打は、そんな彼女に、謝罪した。

その行動に困惑する少女。

時打は、これ以上彼女のトラウマを呼び覚まさない為にその場から退こうとしたが、それは次に聞こえた怒号で止められる。

「翔鶴姉！」

その声が聞こえたすぐ後に、白髪の少女が出てきた通路とは反対側の通路から、もう一人、ツインテールの少女が出てきて、時打と白髪の少女、『翔鶴』との間に入って、時打を睨み付ける。

「ツ…………」

その怒りの感情がこめられた視線に、後ろめたい気持ちになってしまふ時打。

『姉』と呼んだからには、おそらく彼女は、翔鶴の妹艦である『瑞鶴』だろう。

二人とも、『五航戦』と呼ばれる『正規空母』なのである。

「あんた…………翔鶴姉になにしたの？」

瑞鶴がそう問いかける。

「瑞鶴…………」

「翔鶴姉は黙ってて」

翔鶴が何かを言いかけたが、瑞鶴にそれを止められる。

「…………ぶつかって転ばし掛けた。すまない」

時打は、そういった。

「本当に…………それだけ？」

「ああ。それと…………翔鶴を怖がらせて、すまなかつた」

「え…………？」

時打の言葉に、瑞鶴の表情が、怒りから驚愕に変わる。

時打は、これ以上、この場にいるとまずいと思い、彼女たちの横を

すり抜けて去っていった。

その様子を茫然と見ていた瑞鶴。

「……何なのよ、あいつ」

そう悪態吐く瑞鶴。

しかし、翔鶴は、未だに震える手を、合わせ、それを見つめるだけだった。

## 初日の生活その2

ヒトマルヒトゴ——午前十時十五分。

指令室にて。

「翔鶴と瑞鶴について?」

「ああ。お前が知っている。そして、言える限りの事を言ってくれ。もちろん、強制はしない」

執務机に向かつて、神妙な顔付きで長門を見る時打。

今朝、翔鶴と瑞鶴にあった時打。

その時の二人の様子に気になる事があったのだ。

「翔鶴になにがあったのか聞きたい」

何故、あそこまでのトラウマを持っているのか。

その理由を知りたいのだ。

長門は、持っていた書類を執務机に置き、数歩下がる。

「……私が知っているのは、彼女たちが、私が建造される前にいたという事だけだ」

「建造される前?」

「ああ、名簿を見ればわかると思うが、彼女たちは……その……私を建造した提督の前の提督の頃からいたようだな」

「そうか……ん?」

時打はそこで、何かを思い出したのか、机の引き出しにある名簿を引っ張り出して、開く。

「? 提督?」

「……」

あるページに眼を着ける時打。

「なあ長門」

「なんだ?」

「その頃の艦娘って……後何人残っている?」

「ツ……」

長門は視線を逸らす。それほど、答えたくない事なのだろう。

「……やめておこうか」



「いえ……」

名簿を閉じかけた時打を止め、長門は告白した。

「……翔鶴と瑞鶴の二人以外……全員轟沈した」

「……そうか」

空気が重い。

長門の答えに、何も言う事の出来ず、短く答える事しかできない時打。

「薄い反応だな」

「大きなリアクションを取ろうにも、その時の気持ちを感じる事は出来ない。出来るのは……何も知らないバカみたいな戯言をいう事だけだ」

「ふ……そうか」

自虐的な笑みを浮かべる長門。

そこで名簿を見つめたままの時打は、立ち上がる。

「ありがとう長門。そこまで言ってくれば十分だ」

「どこに行くんだ？」

「屋上だ。少し風に当たってくる」

「そうか……」

「すまないな」

指令室を出た時打は、真つすぐ屋上へ向かった。

「……」

屋上にて、駆逐艦『雷』は黄昏ていた。

フェンスに両腕を乗せ、目の前にある海を眺める。

「……電」

「？」  
そう、眩いた時、ぎい……と、屋上の扉が開く音がした。

気になり振り向くと、そこには白い軍服を着た一人の男性。

「し、司令官？」

「雷か」

少し、狼狽した声で、その人物の仮称を言い、その司令官と呼ばれた人物、時打は彼女の名を呼んだ。

「ど、どうしたの？こんな所で？」

「それはこっちのセリフだ。俺はただ単に風にあたりに来ただけだ」

と、雷の隣に立ち、海を眺める時打。

そんな時打を少しの間見つめた雷は、また海の方へ視線を戻し、口を開く。

「ねえ、司令官」

「なんだ？」

「あの電とは、いつあったの？」

ふと、思いついた質問を投げかけた。

「そうだな……」

その質問に答える時打。

「あいつの出会いには、単なる偶然だったんだ」

「え？偶然？」

雷は目を丸くして、また時打を見る。

「五年前にな……」

偶然にも、横須賀の鎮守府の敷地に迷い込んで、更にそこから工場に入り込んでしまったのだ。

そして、そこで、建造されたばかりの電に出会った。

その時、常に深鳳を持ち歩いていたので、電を怖がらせてしまい、更にはその警備員に捕まってしまったのだ。

本当なら、記憶消去されて、元の家に戻り返されるのだが、時打は海軍関係の学校の生徒。更に、『妖精』の姿を目撃している事から、提督としての素質があると見込まれたのだ。

その時、当時その鎮守府で提督をやっていた、時打に黒河鎮守府を任じたあの長官、『壹条 豪真』にはとてもお世話になった。

そして、豪真のお陰で、時打は電を自分の初めての艦娘にしたのだ。

「そうなんだ」

「ああ。あの偶然があったから、今の俺がいて、電がいるんだ」

時打は、さぞ懐かしそうに、遠くを眺める。

雷は、その横顔をただ見つめる事しか出来なかった。だが、すぐに視線を海へ戻し、語り出す。

「……私たちの電は、さ」

「ん？」

「いつもドジ起こして、何も無い所で転んで、泣き虫で。その癖に誰よりも勇敢で。誰かのピンチには必ず助けに行く。この鎮守府では、たった一人、提督の命令に逆らえる艦娘だったんだよ」

「へえ……」

提督の命令に逆らえる艦娘。

それはつまり、自分の意思で、行動できる艦娘という事だ。

艦娘には、どんな考えを持っていようが、必ず守らなければならない、『呪い』ともいふべき『命令』がある。

『提督の命令には、必ず従え』

これは、どんな艦娘でも持っている、絶対的『常識』であり、逆らう事の出来ない命令……という訳ではない。

この『命令』の強さは、鎮守府によって違う。

ブラック鎮守府では、この『命令』は強く発揮され、ホワイト鎮守府では、この『命令』は弱く発揮される。

その理由は、なんでも、『提督』に対する『恐怖心』で決まるらしい。恐怖心が弱まれば『命令』による強制力は弱まり、恐怖心が強ければ『命令』による強制力は強くなる。

ここの艦娘たちは、前の提督に、圧倒的『恐怖心』を植え付けられてしまっているようなのだが、どうやら、その『電』だけは、『イレギュラー』の様だ。

おそらく、稀に生まれるその『命令』を持たない艦娘。あるいはある拍子に『命令』を打ち破ったのだろう。

どこぞのVR世界の封印コードを破って片目が吹っ飛ぶ様な事でもしたのだろうか。

ただ、そうなる、一つ、ある、考えたくもない可能性が浮かんでくる。

「なあ、雷……」

「大丈夫だよ司令官。電はそんな理由で沈んでいないから」

「どうやら、時打が言おうとしていた事を分かっていたようだ。」

「そうか……でもさ」

時打は、ポケットからハンカチを取り出し、それを雷に差し出す。

「まずは涙拭けよ」

「え……?」

気付くと、雷は泣いていた。

「あ、あれ……?」

雷は、セーラー服の袖で涙を拭うが、それでも涙が止まらない。

相当、怖い事があったのだろう。

「……今話さなくても良いけど、今は思いっきり泣いた方が良いんじゃないか?」

「はは……あの時、もう、全部、流したと思ったのに……まだ……」

雷は、時打のハンカチを受け取り、涙を拭きとる。それでも止まらないが、ただ、自分の提督の誠意は受け取っておこうと思った。

「……心配するなよ」

「え?……わ!?!」

時打は、雷の頭をわしやわしやと撫でまわすと、真剣な眼差しで、雷を見る。そして、言い放つ。

「お前たちは、絶対に誰一人として沈めない」

その言葉が真実かどうかは分からない。

ただ、それだけで何かが決壊した。

「しれ……かん……」

「だからさ、心配するな、雷。そんなに心配なら、今度は電を沈めない様に強くなれ」

ただただ涙が溢れ出る。

優しく微笑む時打に、雷は、ただ、泣く事しか出来なかった。

ヒトヒトマルマル——午前十一時。指令室。

長門は、目の前の光景に、少し目を疑っていた。

雷が……提督の時打に膝枕をしてもらって寝ていたのだ。

「すう……すう……」

その幸せそうな寝顔に、どうしても起こすのを躊躇ってしまう長門。

一方で時打は、淡々と名簿のを眺めていた。

「提督」

「ん？なんだ長門」

時打は名簿から目を離し、長門を見る。

「一応……何もしてないよな？」

「ああ。たが少し話しをしただけで、後は何もしてないぞ」

「そうか、なら、なんで泣いた後があるんだ？」

じとつと怪しむ様に時打を見る長門。

「少し、こいつから、こいつらの電の事を聞いてな」

「……そうか」

彼女たちの電……それはつまり、雷のトラウマを聞いたという事だ。

どうやら、それを話した事で、自然と涙を流して、最終的には大泣きしたという事になる。

そして、今、雷は泣き疲れて寝ているという事だ。

「長門、お前は仲間の所に行ってもいいが……どうする？」

「いや、ここで監視させて貰う。お前が雷に何かしないか心配だ」

「しないんだけどな……お前も退屈だと思いが……」

「お前がここの艦娘たちを傷付けるよりはマシだ」

「そっか……」

時打は苦笑して、名簿を閉じる。

「長門、悪いんだけど、その棚にあるスケッチブックと鉛筆と消しゴムを取ってくれないか？中身見てもいいからさ」

「？」

長門は指をさされた棚から飛び出しかけているスケッチブックを

見つける。

それを手に取り、開けてみる。

「これは……!」

その中身は……電の絵ばかり描かれていた。

「な、何故電?」

「いやあ、いい相手がいなくてさ。電が一生懸命頑張っている所とか、寝顔とかさ」

「趣味なのか?」

「まあね。でもちゃんと他の奴らの事も描いてるぞ。決してシスコンって意味じゃないから」

「それをいうならロリコンなんじゃ……ってなんでシスコン?」

時打の言葉に疑問符を浮かべる長門。

それで、少し考えた時打は、また口を開く。

「なんというか……義理の兄妹みたいな? あいつだって、俺の事お兄ちゃんって呼んでたし」

「……」

もはや絶句するしかない。

色々な意味で、規格外だ。この提督と駆逐艦。

「ま、まあいい」

とりあえず、スケッチブックを時打に渡した長門は、向かいのソファに座り、同時に時打は受け取ったスケッチブックを開き、一緒に受け取った鉛筆を右手に持つ。

「……」

「? どうした? 描かないのか?」

「……お前を描いても良いか?」

「は……?」

唐突な頼み事に困惑する長門。

「いや、なんでだ?」

「お前が目の前にいたから」

「その本でも描けばいいだろう?」

「お前がそういうなら描くけど……やっぱ生き物が良いんだよな

あ……イタチとかタヌキとかイヌとか、後、一生懸命に何かを成し遂げようとしている人とか」

「……」

その真顔で言う事に、なんとなく納得してしまう長門。

あのスケッチブックの中には、剣道着を着て、必死に木刀を打ち込んでいる電の姿もあったのだ。

あの表情は、確かに一生懸命な感情が見て取れた。

他の絵にも、その人物の感情がしっかり伝わる様に描かれていた。

「はあ……分かった」

「え？」

「描かせてやる。変な風に描くなよ」

「ありがとう長門」

——ありがとう

それを聞いた長門は、複雑な気分になってしまう。

建造されていろいろ、一度も提督の口から聞いたことのない、感謝の言葉。

その言葉に、どうしても心が揺れ動いてしまう。

筆を動かして、今、長門を描いているのであろう時打の表情は、真剣でもあり、どこか楽しんでいる様に感じられる。

「長門ってさ」

「ん？」

「何か、好きな事とかある？」

「なんだ？ 藪から棒に」

「いや、なんとなくだ」

時打は、表情を緩め、微笑みながら長門に聞く。

それに長門は、少し躊躇いがちに答える。

「そうだな……やっぱり、あそこの窓から皆が楽しそうに遊んでいるのを見るのは、皆の笑顔が見れて、嬉しい事があるな」

「そっか、大事なんだ。ここの皆の事が」

「ああ。皆、大切な仲間だ」

少し、表情がほころんでしまう長門。

「・・・皆が皆、この世に生を受けた、『人』だからな」  
「え?」

時打の言葉に首をかしげる長門。

「だってそうだろう? お前たちが、どんなに人から離れた力を持っていても、それは結局、海の上でだけだ。陸上じゃ、お前たちは、ただの女の子だろう?」

「!?」

何気に、そう言われた長門は衝撃を受けた。

「な・・・にを・・・」

「? 前の提督にお前は兵器だって言われたのか? まあ、見方は人それぞれだから、その事に口を出す気はないけどさ。それでも、お前たちは、『艦娘』という事を除けば、『ただの女の子』なんだからさ」

その言葉に、驚愕する長門。

艦娘は、確かに、『心』があり、『兵器』だ。

しかし、艦娘にとっては、『兵器』という自覚の方が強く、その事だけは、どうしても覆らない、艦娘に存在する共通の絶対価値観だ。

だが、そんな彼女たちにも『心』があるのだ。

ただ、彼女たちを扱う『提督』がその存在の重さに気付けるかどうかの違いだけ。

この黒河鎮守府より、陸の方へ出てったことの無い長門たち、黒河鎮守府の艦娘たちにとっては、時打の考えであり思いは、彼女たちには信じられないものだ。

当然、困惑するが、それよりも、浮上してくる感情があった。

「笑ったな」

「え?」

長門は、知らぬ間に笑っていた。

「うん、いい笑顔だ」

時打は、そう呟くと、ささつと、鉛筆を先よりも早く動かす。

「できた」

そして数分経ち、時打は満足そうに鉛筆を止め、絵を見る。

「ほら」



時打は、その絵を長門に差し出す。

それを受け取り、その絵を見た長門は、もう何度目か分からない驚愕に見舞われた。

優しく微笑み、嬉しそうな眼差しでこちらを見る長門が描かれていた。

それはまさしく長門そのものであり、長門の一面でもある。

「こ、れは……」

「ここまで優しく微笑んだのは初めてだろ？あの時見たのは、まだ俺の対しての警戒が解けてなかったから、なんか強張った笑みだったからさ。それとも、なんか嫌だった？」

苦笑気味にそういう時打。

それに、長門は、笑みを零しながら、その絵を抱きしめる。

「いや、嫌ではない」

「そうか、なら良かった」

時打は、安心した様に笑う。

ただ、長門の方は、一つの決心が着いたようだった。

「提督」

「ん？」

長門は、スケッチブックを机の上に置く。

「私はまだ貴方を認めた訳ではない」

「うん」

「だから」

長門はソファから立ち上がり、時打を見下ろす。

「私に、貴方を見極めるチャンス機会をくれ」

「チャンス機会？」

時打は理解出来ないような表情をする。

そして、長門は、彼女が思いつく限りの方法を口にする。

「私と決闘してくれ」

## 決闘寸前のそれぞれの覚悟

マルキユウサンマル——午前九時三十分。

鎮守府の敷地にて、大規模な工事が行われていた。

正方形に建てられた、分厚い鋼鉄の壁。

高さは三メートルといった所だ。

よく見ると、あちらこちらに小さな人型の何かが無数に引っ付いている。

妖精だ。

恐らく彼らは工作するのが得意なタイプなのだろう。

「本気なの？」

「そうでなければこんなもの作らせないさ」

その中で、工作艦の明石と、この黒河鎮守府を任されている提督の天野時打は話し合っていた。

「明石——壁の方はなんとかなったよ——これなら長門さんの砲弾を通さないよ——」

「ありがとう夕張——」

軽巡なのに開発とか、なかなか貢献している『夕張』がそう明石に叫ぶ。

だが、すぐに真面目な表情に戻り、自身の提督に言う。

「ただの人間が、艦娘と決闘するなんて、前代未聞よ」

「仕方ないだろう。吹っ掛けたのはあっちでもあり、それを買ったのは俺だ。互いに自業自得という物だ」

「そうかしら？」

白い軍服に身を包み、帽子は被らず、黒い髪をなびかせながら、腰にある逆刃刀・深鳳の柄に触れる。

しかし、何故こんなものが作られているのかというと、それは一週間前……

「な、長門さんと決闘!?!」

「ああ」

真顔でそう答える時打に驚きを隠せない明石。

「ここは工廠。」

明石が趣味がてら開発をする場所である。

「貴方バカ!？」

「剣術バカというなら否定しない」

「そういうバカじゃないわよ!」

会話が始まって早々、頭が痛くなる明石。

この男は、海上じゃ、あの深海棲艦と互角に戦う艦娘と決闘すると  
言っているのだ。

その為に、闘技場を作って欲しいといっているのだ。

「資源は好きだけ持って行ってくれ。既に暁型の全員に遠征に行か  
せている。他にも何人が行かせたから、それなりに資材は集まるはず  
だ」

「いやいやいや私が言いたいのはそういう事じゃなくてでして、本気  
なの?」

「本気だけど?」

「いやなんでそんなさも当然の様に言ってるのよ!？」

「バンツ!と作業台を叩く明石。」

「別に、無理なら良いんだ。その代わり鎮守府がボロボロになるけ  
ど・・・」

「あ、もう何が何でもやる方向なんだ・・・」

がつくりと折れる明石。

「あ、明石・・・」

「ん?どつたの夕張」

そこで後ろから躊躇いがちに声を掛けてくる軽巡の夕張が話しか  
けてくる。

「前に話を聞いた時には安心できる人とは聞いたけどさ・・・この人  
の言ってること本気?」

「みたいよ・・・ハア、全く。とんでもない提督が来たわね・・・」

やれやれというように力無く笑う明石。

「やってくれるか?」

「まあね。貴方の事はともかく、この鎮守府がボロボロになるよりはマシね」

「パンツ!と両手を打ち鳴らし、決心したような表情を浮かべる明石。」

「え?まさか本気で作るの?」

「本気も何も、提督が言ってるのよ?提督の頼み事なら引き受けるっきゃないでしょ?」

「俺からも頼む、夕張」

いきなり頭を下げる時打に困惑する夕張だったが、やがて彼女も諦めたかのようにため息をついた。

「分かったわ。その代わり、死ぬんじゃないわよ」

そして今に戻る。

「工事開始から一週間。」

休みながらもこんな短期間にここまで作るとは、流石、工作艦と重武装最新艦開発の元になった軽巡洋艦だ。

と、内心感心する時打。

「午後までには完成するから、しばらく暇を潰しても良いわよ」

「いや、竹林にいつて剣の練習でもしているよ」

「そう」

明石にそう伝え、時打は竹林に向かって歩き出す。

竹林に着く。

ふと、そこで誰かの気配を感じる。

「誰だ?」

「本気なのか?」

「天龍か」

竹の影から天龍が出てくる。

「どうしたんだ?」

「アンタが長門さんと決闘するって聞いてな。悪い事は言わねえ。今すぐ取り消せ」

キツイ目付きで時打を睨む天龍。

だが、時打はそんな彼女の申し出を蹴った。

「悪いな。これは長門からの果たし状みたいなものだ。ここまで時間が経つと、取り消すのは難しいぞ」

「そうか・・・」

天龍は、表情を緩めず、眼を閉じる。

「なら、オレがアンタを倒してやる」

天龍が眼をカツと見開き、懐から臙装の剣を抜き放ち、時打に斬りかかる。

一息で時打と距離を詰め、右に持った剣を、上段やや斜め右上から斬り下ろす。

だが、時打がその剣を両手でつかむ。真剣白羽取りだ。

「な!?!」

「良い太刀筋だ。だが、それじゃあ俺は倒せないぞ」

「うわ!?!」

完全に威力を殺された剣をすぐさま押し返され、よろける天龍。

その天龍に向かって突っ込み、右手を彼女の服の襟首に、左手を彼女の右手を掴み、そこから大外刈りをかけ、投げ飛ばす。

「がっはあ!?!」

背中から思いつき叩き着けられ、肺の中の空気が絞り出される。

時打は、そんな彼女を見下ろす。

「もう少し鍛錬しろ。電が良い練習相手になるだろ」

「・・・ツハア!?!・・・畜生・・・」

悔しそうな表情の天龍に、フツと笑う時打。

「ありがとうな、止めれくれて。だけど、俺はここで立ち止まる訳にはいかないんだ」

先ほどの警告は、彼女なりの善意だという事なのだろう。

素直になるのが、とても苦手な様だ。

やがて天龍が回復すると、時打はまた、竹林の奥に歩いて行った。

鎮守府一階廊下。

「電」

「あ、雷ちゃん」

話しかけられ、振り向く電。相分ならず、腰の後ろには一本の小太刀が差さっている。

気軽そうな電に対して、声を掛けた人物である雷は心配そうな表情だった。

「大丈夫なの？その、貴方のお兄さんが長門さんと決闘するの」

「あく、その事ですか・・・」

アハハと力無く笑う電。

「大丈夫なのです。お兄ちゃんはああ見えて強いから」

「強いつていっても、人としての範囲でしょ？いくら砲弾が斬れるからって、流石に・・・」

「もしかして、心配してるの？」

「ギク・・・」

凶星の様だ。

「はっはくん。さては何かあったのですね」

悪い笑みを浮かべる電。

それにどうしても違和感を感じる雷。

(本当に、同じ電なのかしら・・・)

そう、感じてしまう雷。

と、考えている内に表情を戻す電。

「とにかく、お兄ちゃんなら大丈夫なのです。確かに、大怪我する時もあつたけど、それでも大丈夫なのです」

と、心配するなどでもいう様に満面の笑みを向ける電。

ついでに握り拳に親指を立てる。

「そ、そうなんだ・・・」

その異様なテンションに若干引く雷。

「その自信はどこから来るのかしらね」

突然、別の方向から声が聞こえてきた。

雷の背後だ。

振り向くと、そこには軽巡洋艦『川内』がいた。

その後ろには、同じ『川内型』の『神通』がいた。

「あ、川内さん」

「こんにちわなのです」

「こんにちわ、電ちゃん」

神通と電が互いに挨拶をする。

ちなみに、服装はセーラー服の様なものである（Ⅱ改二ではない）。

「でもさ、相手はあの長門さんだよ。いくら提督があの人砲弾を斬ったからって、流石に戦艦級相手にただじゃすまないでしょ？」

川内が最もな事を言う。

それに頷く神通と雷。

「確かにそうですけど・・・ああ見えて、沢山の修羅場を超えてきたのです」

「例えばどんな？」

試しに聞いてみる神通。

そこで電は考える素振りを見せる。

「んく・・・色々ありましたけど・・・テロリストがデパートに入ってきた時にお兄ちゃんが一人だけであの逆刃刀で倒した事があるのです！」

と、誇らしそうに胸を張る電。

そこで、川内があるワードに食いつく。

「ん？逆刃刀？」

これは神通でも知らない事だ。

当然だろう。あの時、長門が時打に向かって砲撃した時に見えたのは、半ば抜かれた刀であり、それがまさか刃が逆さまについているとは思ってもよらないだろう。

「あの提督が持ち歩いてる刀の事よ」

因みに、雷を加えたあの暁型の全員は知っている。

なので雷が電に代わって川内たちに逆刃刀の事を話す。

「あの刀って刃逆さまについてんの!？」

「だったら・・・そう簡単に人を殺す事なんて出来ないわね・・・」  
驚いた様な表情をする二人。

しかし。

「だったら尚更勝ち目がないんじゃないかな？」

「え？どういう事？」

雷は首を傾げるも、川内は説明する。

「だって、刃がないんなら、それは単なる打撃武器になるだけだし、急に当たらない限り、致命傷なんて与えられないよ」

「なら連続でやれば問題ないのです」

「それを長門さんがみすみる逃さない訳ないじゃん」

電の反論に、正論で反撃する川内。

「それでも・・・負けないのです・・・」

シユンとなる電。

その様子に罪悪感を感じてしまう川内。

たった一週間で彼女の放つ威圧には慣れたが、この様な所は、あの電と変わっていない。

やはり、記憶は違えど、持っている魂は同じ駆逐艦『電』なのだろう。

「まあ、結果は最後まで分からないとも言おうからそんな顔しないでよ」

ポンポンと電の頭を叩く川内。

「それじゃあ、午後に始まるみたいだから」

「またね」

そして、川内たちと別れた電と雷。

「・・・お兄ちゃんは、負けないのです」

先ほどとは違い、不安な表情を浮かべる電。

そんな電を、雷は見る事しか出来なかった。

ヒトフタサンマル——十二時三十分、昼食。  
食堂にて。



「間宮、まだ貰えるか？」

「は、はい！」

長門は、いつも以上に飯をガツガツと食っていた。

長門の座っている机には、特大の皿に乗った大量の肉じやががあった。

それもそうだろう。

「き、今日はいつも以上に食べますね・・・」

「む、吹雪か」

長門の元へ、カレーをお盆の上に乗せて持っている駆逐艦『吹雪』がやってきた。

「そんなに食べて、後でお腹壊したりしないんですか？」

「心配するな。それに、これぐらい食べなければ、後でガス欠を起こしそうで、そっちの方が怖い」

「そうですか・・・」

吹雪は、何か不満のある表情で、長門のいる席に座る。

「どうした？・・・はむ」

「どうして・・・ただの人間相手にそこまで気合を入れる必要があるんですか？」

「・・・」

それを聞いた長門は、箸を止め、しばし黙り込む。

長門と吹雪は、建造された時は違えど、同じ艦隊に入れられた戦友でもあり、良き、上司と部下の関係だったのだ。

今でもそれは変わっていないが、まだその関係は続いている。

しばし、時間がたった後、長門が口を開いた。

「・・・あの男には、どうしても、油断してはいけないような気がするんだ。窮鼠猫を噛むともいうのか・・・まるで、蟻の大量に紛れた象さえも殺してしまう毒を持つ毒蟻の様な・・・もしくは、牙を隠している龍か・・・そんな気がするんだ」

「・・・」

そんなバカな、と思った吹雪だったが、長門の手が震えているのを見て、彼女が冗談を言っているんじゃないと思った。

「・・・そこまでの相手なんですか？」

「ああ。あの言葉に、嘘偽りなんてない。だが、それとは裏腹に、どうしても感じてしまうんだ」

——あれは龍だ、と・・・

その言葉の重さに、思わずビクツとなる吹雪。

一週間、あの提督の傍で秘書艦を務めていたから分かる、彼女が思った最大の表現なのだろう。

「だから、こうして食べて戦いに備えているんだ。心配するな。私はこの世に名高いビッグ7セブンだぞ。そう簡単に負けないさ」

そして、長門は、あの日以来の、頼もしい笑顔でそう吹雪に言う。「そう、ですか・・・」

吹雪は、まだ不安が拭い切れていないが、それでも、長門に今自分が送れる最大のエールを送る。

「頑張ってください。長門さん」

ヒトヨンマルマル——午後二時。

明石から、準備が完成したとの放送が鎮守府の敷地中に響いた。

それを聞いた時打は、右手に持っていた深鳳を鞘に納め、脱いでいた軍服の上着を着て、腰に深鳳を差す。

長門は、溜め込んだエネルギーが体中に染み渡るのを感じながら艀装を装着する。

竹林を歩くなか、竹に背中を預けながら立っている天龍に会う。

闘技場の入り口で、心配そうな表情の大淀に会う。

「本当に行くのか？」と、また言われた。

「大丈夫ですか？」と言われる。

時打は、「ああ、行くよ」と答えた。

長門は「心配するな」と答えた。

それを聞いた天龍は、「武運を祈ってるぜ」と言い、時打はその脇を通り抜けていった。

それを聞いた大淀は、「武運を……」と言い、長門は闘技場を入り口をくぐり抜けた。

そして……

「来たか」

長門はそう呟く。

闘技場の奥にて、扉が開く音が聞こえた。

そこから、時打が、白い軍服をなびかせ、入ってくる。

天井が吹き抜けになっている闘技場の天井から、設置された観客席らしき所から、何人もの艦娘が見ていた。

その中には、電たち、天龍の姿もあった。

「準備は良いな？」

「当然」

時打は、ゆっくりと鞘から深鳳を抜き放つ。

それが完全に抜き放たれ、だらりと、右側に構えられる。

観客から、眼の良い者から動揺の声が聞こえた。

おそらく、深鳳の構造に困惑しているのだろう。

だが、今はどうでも良い。

普通ならここで実況とかが入る所だが、生憎とここには青葉や霧島といった実況するほどハイテンションな艦娘はいない。

だから、入るのは、確認の声とゴングだけだった。

「二人とも、準備は良いでしょうか？」

大淀が、遠くからそう言う。

「大丈夫だ」

「ああ、始めてくれ大淀」

「では……」

二人から了承の言葉を受け取った大淀は、自分の傍らにあるゴング

を鳴らす。  
「始めッ！」

## 決闘 長門VS時打

長門が連装砲を放つ。

「ッ！」

時打は、小回りの利く動きで全て回避する。

「これじゃあ当たらないか・・・ッ！」

長門の武装は、二連装の砲塔が三つ。

更に右腕上腕に単装砲を装備しているというものだ。

つまりは、普通の長門より砲門が一個多いのだ。

もう一度、連装砲で砲撃。

これも避けられる。

しかし・・・

装填が終了した一回目と二回目の右側の砲門。だが、今度は、左の砲門も動く。

「対空砲火・・・」

「ッ!?!」

それを聞いた時打の眼が見開かれるのを見た。

「っ撃——!!!」

全部で六門の砲門が火を吹き、その全てが時打に向かって飛んでいく。

「ッ・・・」

時打は一瞬、苦い顔をしながらも、大きく横に走り出す。

そのスピードは、常人のそれを超えている。

だが・・・

バアアアアンツ!!!

「くおっ!?!」

いきなりそれが途中で爆ぜた。

飽和状態の敵機の接近に対して使われるものであり、その効力は・・・

空中で爆発する炸裂爆弾。

中に詰められていた破片が大量に飛び散り、それがもの凄い勢いで

四方八方に飛び散る。

「お、オオアアッ!!」

対する時打は、更に加速する事で、衝撃を緩和。爆風で更に加速する。

「な．．．!?!」

その行動に驚きを隠せない長門。

まさか、あの対空砲を躲されるとは思っていなかったのだ。

だが、すぐに切り替えて、艀装の中にある妖精たちに装填の指示を下す。

思った以上に手強い。

長門はそう戦慄する。

しかし、何かが可笑しい。

長門は、心の片隅にて、そう思っていた。

奴は、装填の時動かなかった。何故だ？

試しに右腕の単装砲を撃つ。

時打はそれをかわす。

だが、それだけだ。

艦娘にとつては装填時間は命取りに近い行為だ。その間はその砲門による攻撃が出来なくなるからだ。

なのに、この男はそれをしなかった。

その意図を察する長門。

「ふ．．．」

思わず、笑みが零れる。

「？」

それに首を傾げる時打。

「いや．．．やはり、貴方は優しいな」

観客席．．．

「マジかよ．．．」

天龍が信じられないような表情をする。

「対空砲を避け切るなんて・・・」

暁がそう呟く。

「それもそうだろうか？」

なんてったって、ただの人間がありえないスピードで走り、爆散する対空砲を避けたのだから。

この場にいるのは、天龍、暁、響、雷、電、他駆逐艦の面々がそろっている。

「飛天御剣流は神速の剣術」

ふと、電が呟く。

「剣を振るう速さ。体のこなしの速さ。相手の動きを読む速さ。あらゆる『速さ』を追及したのが、飛天御剣流剣術なのです」

電が真剣な表情でそう説明する。

「でも、さっきのは普通の人が行っても良い速さじゃなかったわよ・・・」

雷がそう言う。

「時には、常識さえも超える事の出来る剣術があるって事なのです。それに、全部避け切った訳じゃないのです」

その言葉にその場にいる全員が首を傾げるが、天龍が時打の背中を見て声を上げる。

「あ、アイツの背中!」

『!?!』

それに弾かれるように見ると、背中にいくつか焦げた跡があった。

「いくつか直撃していやがる・・・」

「ちよ、大丈夫なのあれ!?!」

一見して血は流れていないが、それでも衝撃はそうとうなものだろう。

常人が耐えられる痛みじゃないだろう。

「それほどの鍛錬をしてきたって事・・・だね」

響が、自分の左拳を右手で包みながら、そう呟いた。

それに電は、無言でうなずいた。

「だけど・・・」

ふと、後ろの席にいた吹雪が口を開く。

「長門さんは・・・強いよ」

「優しい？」

「そうだろうか？」

長門の言葉に、ぬぐ・・・となる時打。

「今まで、貴方は私を攻撃するチャンスは何度もあつただろう？それなのにしなかった。それはつまり、私を攻撃したくないという事なんじゃないのか？」

それを聞いた時打は、肩をすくめ、ため息を吐く。

「やっぱ、隠し事が苦手だな俺は」

「そうだな。だが・・・」

そこで突然、長門の殺気が増す。

「それで私を認めさせることは出来ないぞ」

その殺気に、怖気づく事も無く、ふう・・・と息を吐いた。

そして、それに負けないような『剣気』を発し、逆刃刀を構える。

「良いんだな？もしかしたら、終わったら修復不可能なダメージを負うかもしれないぞ」

「何をいまさら。お前の全力を知らずして、認める事などできない」

「そうか・・・」

ふと、眼を閉じる。

しかし、すぐさま目を見開くと、発していた剣気を上回る程の剣気を発し、叫ぶ。

「ならば行くぞッ!!」

瞬間、時打の姿が消えた。

「な・・・!?!」

右脇腹から、鈍い音が響き、更にそこからとんでもない鈍痛がくる。



「く……あ……!?!」

その痛みに、思わず膝をついてしまう長門。

「どうした?」

突如、後ろから声が聞こえた。

なんとか振り向いてみると、そこには、こちらを鋭い眼光でこちらを見据えている時打がいた。

今、確かに時打は消えた。否……目にも止まらない速さで動いた!

ここまで速いとは、長門さえも思わなかった。

これが、本気の一撃……

——おもしろい……

「ふ、ふふふ……」

脇腹の痛みが、吹っ切れた事により、吹っ飛ぶ。

楽しい、楽しい、楽しい。

「お前……戦闘狂だな……」

時打が、苦笑しながら引く。

「はは……ここまで楽しめそうな戦いは、久しぶりだ……そう  
だ、これだ。これを求めていたんだ……!」

狂った笑みを浮かべる長門。

それにつられて笑う時打。ただ、その中には、恐怖も少し感じられた。

「行くぞー!」

長門が叫び、全ての連装砲を放つ。

だが、時打はそれを高く飛び上がる事で回避する。

「バカめ……ッ!?!」

本来、空中に飛び上がる事は、身動きが取れないからやる事は相当な緊急事態に限られる。

だが、飛天御剣流には空中からの攻撃を持つ。

「飛天御剣流、龍槌閃!!」

「くッ!」

落下の威力に加え、剣を振り下ろすスピードが加算されて強力な落下攻撃と化す『龍槌閃』。

それに対し、長門は右腕の単装砲を撃つ。

それが空中で激突し、砲弾と刀が同時に弾かれる。

空中で後転し、地面に着地すると同時に、今度は姿勢を低くしてダッシュ。

長門に急速に接近する。そして、突っ込みながら時計回りに回転をして、思いつ切り薙ぐ。

「オオオッ!」

『龍巻閃・こがらし 凧』

遠心力を付け振るう横薙ぎの技。

長門はそれを拳を交差させる事で防御。

そして、その直前で装填が完了する。

「これで・・・!?!」

だが、『龍巻線』はそれでは止まらない。

『凧』から『旋』つむじへ。更に遠心力をかけた攻撃が炸裂する。

「つう・・・!」

だが、それでは終わらない。

『旋』から『嵐』へ!更に遠心力をかけ、次は上段から振り下ろす。

だが、長門はそれを予期し、更には艦娘に備えられた耐久力を持つての事か、思いつき飛び凌いでかわす。

そして、連装砲を放つ。

「オオオ!」

だが、時打はそれよりも更に身を低くして回避。さらに逆刃刀を左手に持ち替え、刀の側面に右手を添える。

「なに・・・!?!」

「飛天御剣流・・・」

そして、そのまま下段からの強烈な攻撃が炸裂する。

「龍翔閃ツ!!」

「長門さんッー!」

吹雪が悲鳴染みた叫び声を上げる。

それもそうだろう。憧れの存在である長門が、ただの人間の一撃で膝を着いたからだ。

「マジかよ……」

これには天龍も驚きを隠せない。

「まだです」

だがその中で、電だけは、小さくも切羽詰まった声を発する。

「まだ、おに……司令官は長門さんを落としてしません。勝負は……最後まで分かりません」

「……」

その電の言葉に、全員は息を飲んだ。

ここまで冷静でいられる電を、彼女たちは見た事が無い。

やはし、彼女たちの知っている電とは、何もかもが違うのだ。

ただ、吹雪だけは、長門の様子に戦慄する。

(笑ってる……)

そう、まるで、好敵手を見つけたかのような、歓喜の笑み。

そして、戦況は変化する。

上空からの叩き落とし。遠心力で威力を増していく三連撃。

それにより押されていく長門。

そして、下段からくる斬り上げ。

「長門さんッー!」

そして、その一撃は、長門の鳩尾みぞおちに直撃する。

「ガッハア!?!」

『龍翔閃』

本来なら右手で峰を支え、飛び上がり気味に斬りあげる技なのだが、逆刃刀なので峰に手を添える事が出来ない。側面、そしてその技を顎を打ち上げたり、鳩尾に切っ先をぶつけるといったアレンジを組んでいる。

だが、確実に決まった筈なのに、長門は立っている。

「すごいな……龍翔閃を鳩尾に喰らってたっていられるなんて、アイツ以来か。流石、『ビッグ7』の異名を持つ戦艦だな」

時打が関心しているが、長門の方はそれどころではない。

鳩尾に喰らった事で、その下にある肋骨が悲鳴を上げ、肺の中の空気が吐き出されて、呼吸がままならなくなる。

「は……はは……」

それでも……笑いが収まらない。

「これだ……これなんだ……私が求めていたものは……」

立ち上がる長門。しかしその左手は未だに龍翔閃を叩き込まれた鳩尾を抑えている。

時打は、彼女の史実を思い出す。

「戦艦長門……その最後は、確か原子力爆弾の実験に時に、その爆発に巻き込まれて……」

「そうだ……だから、楽しいんだ。この戦いが、今、貴方という強者と戦えている事が！」

長門は、身体を時打の方に向け、連装砲を一つ、放つ。

それをかわし、接近する時打。

その距離をすぐさま縮められ、時打が横に薙ごうとした、その瞬間。

「かかった……ッ！」

「!？」

突如、連装砲を石作の床に向かって砲火！それによって、砕け散る。

それが、四散し、時打に直撃する。

「ぐあああ!？」

その衝撃で吹き飛ぶ時打。

五メートルぐらい飛ばされ、地面にうつ伏せに落ちる。

「ハア……ハア……」

なんとか、刀を支えにして起き上がる時打。

「つつつあッ!？」

一方で、先ほどの衝撃で、肋骨が逝ったのか苦しそうに鳩尾を抑える長門。

だが、その顔はまだ笑っている。

「お兄ちゃん!？」

電が叫ぶ。

床が石で作られていた事が災い、長門がそこに向かって砲撃した事で碎けた破片が時打に向かって直撃したのだ。

だが、それよりも・・・

(あの人・・・強いッ!?)

たった数分で、地上戦に慣れてきている。

「そうとう応えてるな」

天龍がそう呟く。

「電、さつき提督が使ったあの打ち上げる様な技ってなんていうんだ?」

「龍翔閃といいます」

「そうか・・・その龍翔閃、かなり深く入ったな・・・」

吹き飛ばす際に、地面に放った砲撃がかなり体にくる角度だったよ  
うで、すでにヒビが入っていた肋骨がついに折れたのだ。

その激痛が今、長門を苦しめているのだ。

「どつちにしろ、この勝負、次で終わりだ」

つまりは・・・ラスト一撃。

「長門さん・・・」

それを聞いた吹雪が、不安そうに、決闘を見守った・・・

なんとか立ち上がる時打。

「本当、恐ろしい奴だよ。お前」

「ハハ・・・そうだな」

「一つ聞かせてくれ。お前は、戦いを楽しむ為にこんな決闘を申し出たのか？」

時打が、真剣な眼差しで長門を見据える。

「楽しむ・・・だと・・・？」

長門から、笑みが消える。

「確かに、そういう一面もあったかもしれない」

俯き、表情が見えない。

だが、突如弾かれるように顔を上げ、怒号を発する。

「しかし、あの時の私は、お前にこの鎮守府を預けるに値する人間かどうかを知りたい一心で申し出た！お前の言葉が、真実か偽りか!!お前の本性が、残虐かどうか!!それを見極める為に!!!」

長門は、軋む肋骨などお構いなしに叫ぶ。

「それが、こここの皆を守りたい思いを持つ、私の意志だツ!!!!」

「そうか・・・」

長門は息を上げ、しばし俯く。

やがて、時打の表情を見る為に、顔を上げる長門。

「なら、良かった」

時打は、笑っていた。

優しく、決して、嘲笑う事などなく、安心した様な表情だった。

歩き始める時打。

「お前の気持ちを知れてよかった。もし、戦いをするだけだったら、ここで俺は戦いを止めていただろう」

そして、時打が、自身の間合いに長門を捉えた所で止まった。

「?・・・」

「だから・・・」

そこで、時打は、刀を鞘に納めた。そして、刀を鞘ごと腰のベルトから取る。

「その気持ちに全霊で応えよう」

腰を落とし、身体を右に向け、右手を、鞘に触れる数センチ手前で止める。

抜刀術の構え

時打は、その様に構える。

「！」

「構えろ長門。これが最後の一撃だ」

まさしく、本気の一撃。

彼が放つ剣気がそう語る。

「……………」

それに、しばし茫然とする長門だったが、すぐに表情を引き締め、全砲門を時打に向ける。

相手の本気に、本気で応えずなんとするか。

今、この瞬間、長門は時打を認めた。

だから、全力で最大の攻撃を持って、彼を葬る。

相手は抜刀術。

それに対し、こちらは砲撃。

勝負としては、一目瞭然。破壊力では、確実に時打が劣る。

だが、この人間はただの人間では無い。

常識を超えた『速さ』を知り尽くし、極め尽くした彼が、もしかしたら、こちらの砲撃よりも速く、一撃を決めるかもしれない。

ならば、やる事は一つ。

そのたった一撃を見切り、かわす。

それさえできれば、後は勝ったも同然だ。

最初の鞘走りの瞬間を見切り、軌道を読んでかわす。

言うのは簡単だ。だが、やるのは容易ではない。

弾丸の様に飛来する一撃を見切りかわす事は、まさに至難の業。

この勝負、長門が避けるか避けられないかで決まる。

静寂が身を包む。

誰も声を発する事はせず、ただ、決着の時を待つ。

たった、その一撃を見極める為に、長門は、鞘を睨み続ける。

そして……………

時打が刃を抜き放ったッ!!!

飛天御剣流は神速の剣術。

足さばき、体のこなし、剣を振るう速さ、相手の心理を見抜く洞察力。

その全てに『速さ』を求めた剣術が、この飛天御剣流。

その為、長門の眼でもなんとか捉える事が出来る程のスピードで刃が迫ってきていた。

(速いッ!?)

だが、これさえ避ければ、勝ったも同然。

長門は、全力でその軌道を読もうとする。

視界が超スローになる。体の動きがそれについてこれるかどうかは定かではないが、全力で体を下がらせる。

狙いは………顔面ッ!!

そう読んだ長門は、頭を思いっきり後ろに下げる。

瞬間、眼前を、時打の逆刃刀が通過する。

避けた!

そう確信した長門は、全ての砲門の微調整をする。

どこに当てても良い。ただ当てるだけで良い。

ただの人間なら、それだけで終わる。

そして、長門が自分の全ての砲門を発射しようとした瞬間、時打の



左腕が動いた。

鞘が長門の右の砲門を潰した。

「ッ!？」

既に砲弾を発射する態勢に入っている上に、もう止める事は出来ない。

つまり……………

弾詰まりで砲塔は爆発する。

「ぐあああああああああ!？」

「あつつつ……………」

爆発の衝撃で吹き飛んだ時打。

だが、受け身をとったからか、それほどダメージは受けていない。

そして、時打は、爆発する瞬間、とっさに引き戻した鞘を見る。

「折れてはいないか」

そう呟き、逆刃刀・深鳳を鞘に戻す。

飛天御剣流抜刀術『双龍閃』

鞘を率いた二段抜刀術であり、最初に、刀の方で敵を斬りつけてから鞘で止めを刺すといった技。

更に、最初の一撃がかわされているても、鞘による第二撃が敵を撃

ち飛ばすために、隙を生じぬ技でもあるのだ。

時打は立ち上がり、同時に爆発で吹き飛んだ筈の長門を探す。

「……………」

自分とは反対側に吹き飛んで、壁に激突したようだ。

艦装は半壊。体の方は右半身がかなりボロボロだ。頭からも血を流している。

そして、苦しそうに息を切らせている。

時打は、長門のもとへ、ゆっくりと歩み寄る。

「おい！吹雪！」

あと三メートルという事で、観客席の方から、誰かの叫び声が聞こえた。

そちらに振り向こうとした途端、不意に視界の隅で何かの影が通過するのが見えた。

慌てて視線を戻すと、長門に背を向けて、こちらを睨み付けるように、両手を広げて立ちはだかっているセーラー服の少女がいた。

「特型駆逐艦の吹雪か」

つい、そう呟いてしまう。

「もう、良いでしょう……………」

ただ、彼女は、震える足でこちらを睨み付け、確かなはつきりとした声で、時打に向かって叫ぶ。

「これ以上はもうやめて下さい！長門さんは、もうこれ以上戦えないんですよ！もし、まだ戦いたいというのなら、私が……私が相手をします!!」

無謀な発言。

まさにそれだ。

しかし、彼女の瞳から、本気だという事が感じられた。

「よ……………せ……………ふぶ……………き……………」

なんとか意識だけはあるらしい長門が、左手を吹雪へ向かって伸ばし、必死に止めようとする。

だが、それでも吹雪は退く事はしない。

ただ、大切な存在を守りたいが為に。

「……」

時打は、そんな彼女を見据え、やがて、右手が動く。

吹雪は、びくつと縮こまり、眼をぎゅつと閉じる。

殴られる、そう思った。

しかし、感じたのは、優しい手つきだった。

「え……？」

眼を開くと、頭を優しく撫でられていた。

「……強い子だな」

短く、そう言った。

「安心しろ。これ以上攻撃する事なんてまずないさ」

そして、時打は、吹雪の横を通り抜け、長門の前でしゃがむ。

「どうする？まだ左の砲塔が残っているが……続けるか？」

長門は、まるで悪い冗談だとも言うかのように笑う。

「いや……もう立つ事すらままならない……私の負けだ……

てい……と……く……」

そして、力尽きたかのように、眼を閉じ、気を失う。

「長門さん！」

吹雪が長門に駆け寄る。

「急いで長門を入渠させろ」

吹雪にそう囁いた時打は、今度は観客席に向かって叫ぶ。

「おい！早く彼女を入渠させろ！戦いは終わった！急げ!!」

それに茫然としている観客にいる艦娘。

その中で、電だけは一番早く行動に移った。

「何をしているんですか！戦いは終わりました！早く長門さんを入渠

させて下さいツ!!」

電が怒号を迸らせ、それに呼応するかの様に川内と神通、天龍が動

く。

次々に動く艦娘たち。

その様子にほっとしながらも、その場にへたり込む時打。

「あ、司令官……」

「心配するな。ちよつと戦いの糸が切れた様で、体から力が抜けたみ

たいでな・・・疲れた」

苦笑する時打。

「吹雪、長門をこちらに」

「あ、はい」

扶桑と山城が来て、長門を肩に乗せながら闘技場を出て行ってしまう。

次に来たのは救急セットを持ってきた雷だった。

「ほら！脱ぎなさい！」

「かたじけない」

時打は、上着とTシャツを脱ぎ、雷に長門に受けた傷を見せた。

「あの・・・司令官・・・」

「ん？」

傷の手当を受けながら、吹雪の言葉に耳を傾ける時打。

「先ほどは・・・その・・・出しゃばった真似を・・・」

気まずそうに喋る吹雪の頭を、言葉を遮って撫でる時打。

「何言ってるんだ。先も言ったけど、お前は強いよ。どんな恐怖にも立ち向かうその心意気に、俺は感動したくらいだぜ？」

「え?」

時打の言葉にきよとんとする吹雪。

「仲間を守りたいその気持ち。絶対に忘れるんじゃないぞ」

ぽんぽんと、吹雪の頭を叩く。

「あ、ありがとうございます・・・ごいませ・・・」

頬を少し赤くして、俯く吹雪。

「それじゃあ、そろそろ指令室に・・・」

「その前に保健室でしようが！」

「いてえ!?!」

バンッ!、と傷の辺りを雷に叩かれる時打。

「しばらく安静にしてなさい」

「おい・・・ここまで動けるなら良いだろ?」

「貴方が思ってる以上に酷いのよ。電」

「はいなのです」

「オレも手伝うぜ」

「電?!それに天龍まで!」

どこから現れたのか、電と天龍が時打を持ち上げ、強制的に連行していく。

「……」

その光景に唾然とする吹雪であった。

「まあ、あの人は私たちが思っている以上に酷い人じゃないから」

「そう……なんだ……」

追いかけていく雷の言葉に、そう返す吹雪。

そして、ふと、微笑んで。

「そっか……優しい人なんだ……」

心なかで、ふと、安心した。

ヒトキュウマルマル——午後七時。

翔鶴は、誰もいない、海岸沿いの道を歩いていた。

「……」

今日の、まだ日が昇っていた時間。

一週間前に着任した提督が、長門を倒した事で、今日はその事で持ち切りだった。

決闘の時、提督の吹雪に対する態度が、一部の艦娘には今回の提督は安全と評されたらしく、何人かが、監禁気味にベッドに横たわっている提督の元へお見舞いにいった。

長門は、艀装が爆発した時のダメージが酷く、まだ入渠中。

しかし、その間も元気な表情を見せてくれたので、まだ、生きていると実感させてくれた。

だが、どうしても、翔鶴だけは、提督に心を許す事が出来なかった。いや、正確には恐れない事が出来なかった。

艦娘、それも、戦艦級を倒すなど、前代未聞の行為。

それで、一部の艦娘に恐怖を刻みつけない事などない。

そして……自分のせいで失われた、かつての仲間たち。

不意に、翔鶴は、自分の手が震えている事に気付く。

「そっか……まだ、怖いんだ……」

そう呟いた翔鶴は、震える右手を左手で包み込む。

ふと、後ろで何か音が聞こえた。

「?…!?!」

何かと思い、振り向こうとした瞬間、手に何かを当てられる。

「んん!?!」

「らつきい……まさかこんな所に、商売につかえそうな女の子がいるなんて」

口に布が当てられているらしく、更にそれに薬物が染み込まされていいるようで、だんだんと意識が遠のいていく。

(だ……れか……ずい……か……)

ガクリと、力が抜け、気絶する翔鶴。

「おい、そろそろ」

「ああ、分かっている」

翔鶴を気絶させた大柄な男は、翔鶴を担ぐと、すぐさまそこから去っていった。

フタヒトマルマル——午後九時。

「まさか雷が衛生面担当だったとは」

「なによ」

「いや、史実から考えてば当然か」

サラシを胴体に巻いた状態で、上半身裸でベッドに横たわる時打。

その話し相手に、背丈の合わない白衣をきた雷がいた。

「駆逐艦『雷』といえば、工藤艦長の話が有名だからな」

「史実に詳しいのね」

「覚えておいて損はないからな」

ベッドの横にある机には、逆刃刀が立てかけられていた。

ちなみに電は後片付けの為に闘技場に戻っている。

「しっかし、まさかこの刀の刃が逆さまについてるなんて、思いもよらなかつたわ。普通ないわよこういう刀」

「まあな。知り合いが饞別としてくれたものなんだ。由緒ある刀鍛冶なんだぜ」

時打が自慢する様に言う。

何人か、この病室にやってきて、見舞いにきてくれたが、皆、どうやら時打が危険な提督じゃないと思ってくれた様で、内心、良かったと思っている時打。

人との関係は、恐れていては始まらない。

ふと、廊下の方で、足音が聞こえてきた。

それも、走っている。

「誰だ？」

「さあ？」

そう思うのも束の間、扉が勢いよく開かれる。

「ハア・・・ハア・・・」

「瑞鶴？」

入って来たのは、瑞鶴だった。

「どうした？」

「翔鶴姉見なかつた？」

「翔鶴？いや・・・見てないが・・・」

「そんな・・・」

この時間帯、もうほとんどの艦娘は自室に戻っている筈なのだ。

なのに、何故瑞鶴はここに・・・

「・・・翔鶴がどうかしたのか？」

そして、瑞鶴は切羽詰まった声で言う。

「翔鶴姉が、どこにもいないの」

## 明治の街『黒河市』

今まで、月日の概念を忘れていたが本日は、決闘の翌日、二月七日だ。

そして、時刻はマルロクマルマル——午前六時。

指令室。

そこには、執務机に提督である天野 時打。

その正面には、川内、神通、天龍の軽巡三人に、今回の件の原因の人物である翔鶴の妹の瑞鶴。そして、記録係の大淀と秘書艦の長門、そして時打の初期艦の電だ。

「すまない。翔鶴が行方不明なのに動けなくて……」

「それは怪我をさせた私が悪いんだ。お前が落ち込む事は……」

「それでも、この鎮守府を預かる提督としては、失態だ」

重い空気が、その場に渦巻いていた。

——昨日の夜。

翔鶴が鎮守府から消えて、一晩がたった。

時打の命令で搜索隊が結成されて、鎮守府内、そして、裏にある山も搜索した結果……

「誘拐された可能性が高い、と」

「はー」

神通が返事を返す。

搜索隊の班長として推薦された、川内、神通、天龍の三人の報告により、翔鶴は誘拐されたと報告。

証拠として、翔鶴の千切れた髪の毛、山へ続く複数の足跡が見つかった。

「ッー」

「瑞鶴ー」

部屋を飛び出そうとする瑞鶴。

しかし、時打が怒号を迸らせて止める。



「お前がいつて何になる」

「ツ……」

瑞鶴は悔しそうに歯を食いしばり、時打に向き直る。

「それで、山の方へ向かっていたという訳だが……確か、この山の向こうには……」

「ああ、街がある」

長門が、そう答える。

そう、この黒河鎮守府は、海と山に囲まれた、殆どの場合、人が来る事は無い。

むしろ、周囲の山々には、一般人が入る事が出来ず、まずバレる事が無い。

つまりは、何かの犯罪組織が偶然にもこの山に迷い込み、この鎮守府を見つけ、翔鶴を攫ったという事になる。

「その街に行けば……翔鶴が見つかる可能性が高い、という事だな？」

「あらかた間違つてねえよ」

天龍が、肯定する。

「そうか……まだ一日なら、奴らもそう簡単には動かない筈だ……よし、と一息着いてから、時打は立ち上がり、命令を下す。

「これより、緊急作戦を実施する！」

内容は救出！

俺と電が翔鶴を攫った敵本陣に殴り込み救出する！

一方で、またここから誰か攫われる可能性がある。その時は、ここにいる艦娘全員で対処する事。

異論は無いな？」

その中で、瑞鶴だけが手を挙げる。

「なんだ？」

「その作戦、私も同行する事は出来ないでしょうか？」

「ダメだ」

間を空けず、拒否される。

「何故……」

「天龍ならまだしも、お前は陸上じゃ戦えないだろう。それに長門の様に艦装を持ち込んでくれば、確実に相手を殺しかねない」

「ツ……」

歯を食いしばる瑞鶴。

「……翔鶴姉の事……何も知らない癖に……」

小声で言ったつもりだった。

「……」

「そうさ。翔鶴の事は何も知らない」

「!?」

弾かれるように顔を上げる瑞鶴。

「でも、今はそんな事関係ないだろ」

時打は、瑞鶴の元へ歩み寄り、そして、横を通り過ぎていく時に、頭をなでる。

「翔鶴の事は俺に任せろ」

「そう一言、言い残した。」

「長門、ここの事は任せただぞ」

「ああ。行ってこい」

「電」

「はいなのです」

そして時打は、指令室から出ようとする。

「待って」

だが、また瑞鶴に止められる。

「もしかして、街に行くのに山を越えていく気?」

「ああ、それしか道が無いだろう?」

それがどうかしたのか?、と時打が瑞鶴に聞く。

瑞鶴は、振り向いて、言う。

「街への抜け道。知ってるわよ」

その場の全員が『なぬ……』と呟いた。

「こんな所があつたのか・・・」

ここのは鎮守府に続いていた地下水道。  
瑞鶴に連れられ、鎮守府にあつたマンホールからここに入ったのだ。

ちなみに、時打は目立たない為、私服の赤いチェック柄の長袖のシャツと、少しぶかぶかなジーンズを履いている。

そして、逆刃刀は、紫色の包みに包んでいる。電も同じようにしている。

「よく、前の提督の眼を盗んで、街に行く事が多かつたの。だから、こういうのはね」

瑞鶴が気まずそうに喋る。

そして、あるマンホールの下で止まる。

「ここよ。ここなら、誰にもバレず街に入る事が出来るわ」

「そうか・・・ありがとな、瑞鶴」

「・・・必ず、翔鶴姉を助けてよ」

「ああ、必ず。だから安心して鎮守府で待っていてくれ」

ぽん、と瑞鶴の頭に手を置き、そう励ます。

「・・・うん」

瑞鶴は、そううなずく。

「お兄ちゃんーん！」

先の上っていた電が呼ぶ。

「それじゃ」

片手で素早く梯子を上り、地下道から飛び出す。

黒河市・・・

黒河鎮守府の背中にある山の向こう側にある大規模な街。

東京の一区域はあるんじゃないかという程に大きい街は、とある時代から、その街並みを変えていない。

京都の街が、まだ都としての風景を保っているのと、同じ様で、その規模は違う。

かつて、戊辰戦争という戦争がこの国で起き、そして、江戸幕府が落ちたその時から、この街は、その風景をほとんど変えなかった。だから、こう呼ばれている。

——『明治の街』と……

「ここまで街並みがこれだと、なんだか合わせたくなくなっちゃいますよね。」

「だからって俺までこの恰好する必要は……」

時打と電は、早速その街に馴染んでしまった。

それもそうだろう。

この街に住むほとんどの人が着物や袴といった明治初期の服装をしている者ばかりなのだ。

そこで電の我儘スキルが発動し、暗い黄色羽織りに、ズボンの様な袴を着ている。中にはなんとブラ代わりにサラシである。

更に時打まで巻き添えを喰らい、黒が主な正に若い武士の恰好をさせられているのだ。一応、包みに包んだ逆刃刀は腰の帯に差している。

「ってというか、目的忘れてないよな？」

「勿論なのです！」

まるで心外だとも言う様にぶんすか怒る電を他所に、もう昼だと気付く時打。

「そろそろ飯にするか」

「はいなのです！」

それを聞いた電が態度を変えきやつきやとはしゃぐ。

「さて、丁度良い食事処は……え？」

とある店の名前が眼に止まり、絶句する時打。

「? どうしたのです? お兄ちゃん……え?」

更に電までもが絶句する。

それもそうだろう。

そもそも、この店の名前は架空の筈。

漫画の中での話の筈だ。

そう、漫画の中での話の筈だ……

「なんでここに……『赤べこ』がある……」

そう、あの牛鍋店『赤べこ』なのである。

たつぷり、三十分その場に立ちすくんで、腹の音で我に返った二人は、仕方なくそこに入る事にした。

「あ、いらっしやいませ」

早速、若い女性の定員さんが声をかけてきた。

「二人なんですが……」

「では、こちらに」

女性につれられ、まるつきり赤べこと同じ内装のこの店の席に連れられる。

そして、スキヤキを一つ注文して、二人は畳の上に座った。

「お兄ちゃん……私、スキヤキ初めてなのです」

「俺は久しぶりだな」

しばらくして、大きな鍋に大量の野菜や肉がのせられて持ってこられた。

「おお……」

その香ばしい匂いに、早くも涎をたらす電。

時打も唾を飲み込む。

二人で顔を見合わせ、肉を一つとり、解いた卵が入った皿に入れてつけて、口に入れる。



突然、どこからか茶碗が飛来してきたので、時打が咄嗟に女将を引き寄せる。

「ぐはあ!？」

だが逆に時打がその茶碗を代わりに喰らう事になり、顔面に直撃する。

「おおお・・・」

「だ、大丈夫ですか!？」

「お兄ちゃん!？」

慌てて時打の様子を確認する二人。

「デメエ！何しやがる！」

「うるせえ！お前が先にやったんだろが！」

見ると、どうやら酔っぱらった中年共が茶碗を投げて、その軌道に女将と時打がいたという事らしい。

ちなみに三人だ。

しかし、その三人は、腰に刀を差していた。

黒河市は、明治の街並みそのまま残されており、その為に日本では、銃刀法が最も機能していない街としても有名だ。

だから、おそらく極道<sup>ヤクザ</sup>辺りであろうそいつらは、刀を腰にさしているのだ。

ちなみに、ここ警察も、腰に刀を差している者もいるらしい。

「お、お客様、周りにご迷惑ですので・・・」

そこへ女性店員が止めに入る。

「あれ、この状況どこかで見た気が・・・」

時打が頭を抑えながら起き上がり、その一部始終を眺めていて、そんな感想を呟く。

「うるせえー！」

「キヤア!？」

案の定、叩き飛ばされる女性店員。

「おっと」

と、その女性を誰かが受け止める。

その人物は、男で、コートのような白い羽織。腹の辺りにサランを巻

いており、ズボンはボロい無生地むせいの何も変わったところのない簡易な物だ。

そして、かなり鍛えられているであろう肉体。

傍からみたら、誰もがこう呼ぶだろう。

「……『相良左之助』？」

時打が、そう呟いてしまう。

「あ、響夜さん」

女将さんが安心した様に男の名前を呼ぶ。

「へ？知り合い？」

「はい。よく相良左之助さきよさって間違われるんですが、本名は『佐加野響夜』。この辺りで一番強い、喧嘩野郎けんぱやろうなんですよ」

「へえ……」

そう関心している間に、あちらでは……

「誰だテメエは！」

三人組は、その男の事を知らない、あるいは酔って分からないのだろうか、響夜に怒鳴る。

だが、響夜は女性を離れた所に立たせると、堂々と名乗りを上げる。

「俺は佐加野 響夜。喧嘩なら喜んで買うぜ」

ニツと笑う響夜。

「うるせえ！お前の事なんざどうだっていいんだよ！」

「邪魔するってならまずお前から叩きのめしてやる！」

「おお良いね。表出ろや」

という訳で表で喧嘩する羽目になった。

当然、時打たちもその様子を見に行く。

野次馬の中、響夜と男三人は向かい合っていた。

「さあ、どいつからでも掛かって来い！」

ドンツと地面を踏み鳴らす響夜。

やる気は十分の様だ。

「なら、俺から行くぜ！」

人一倍大きな体格の男が右拳を振り下ろす。



「ん？あれは・・・」

「メリケン!?!」

その瞬間、時打と電は男の右手に鉄色に光るメリケンを眼に捉える。

そのままその右手は響夜の顔面に直撃する。

「なんだろう、このお約束過ぎる展開は・・・」

見覚えある光景に頭を痛める時打。

「・・・チツ」

舌打ちが聞こえた。

「メリケン如きで、俺を倒せると思ったのかこのウスノロが」

「へ・・・ぎやあああああ!?!」

まるでなんとも無かったかのように平然としている響夜に対して、男の右腕は、へし折れていた。

なんとも見覚えのある光景だ。

「デメエなんざ指一本で十分だ」

その宣言通り、デコピンで男の顔面を弾き飛ばす響夜。

「ひ、ヒイイ!?!」

「んだよ。喧嘩売るからにはちったあ度胸のある奴かと思っただらすぐこれか」

「こ、こいつッ!」

ビビっている男Bを他所に男Cは自身の腰にある刀を抜こうとする。

だが・・・

「おい」

「!?!」

だが、今度は別の場所から殺気が迫る。

その方向を見ると、時打が包みから姿を現した逆刃刀・深鳳の柄に手をかけている時打がいた。

「それを抜く気なら俺も黙ってはいないが良いのか?」

黒服の武士姿から出される、まさに人斬りともいえる雰囲気を出す時打にビビった男Cはすぐさま刀から手を放す。

「次は無いぞ？良いな？」

「は、はいい!!」

情けない悲鳴を挙げながら、男三人はすたこらさつさと逃げていく。

そして、周りから歓声が上がる。

その中、時打は響夜に近付く。

「すまない。お前の喧嘩に手を出してしまつて」

「うーん。ここで何か奢ってくれるなら許してやる」

「現金な奴だな」

響夜の態度に苦笑する時打。

「別に手助けなんてしなくてよかつたのに」

電が口を尖らせてさういう。

「悪い悪い」

「なんだなんだ？子供連れか？」

「な!?子供とはなんですか!?これでも一介の剣士なんですよー!」

「またもやぶんすかと怒りだす電。」

「妹なんだ」

「それにしても似てくないか？」

確かに黒髪の時打に対して電は黄色掛かった茶髪だ。顔立ちからしても似ている所はない。

「まあ、一応お礼もかねて何か奢るよ」

「お、ありがとな」

赤べこの時打たちが食事をしていた席で、相良左之助によく似た男、佐加野 響夜はとんかつ定食を食べていた。

その向かいには時打と電。

「白髪の弓道服姿の女？」

「ああ。何か知らないか？」

響夜は一度、味噌汁を一気に飲み干すと、それを思いつきりお盆の上に乗せ、カァー!と声を漏らし、時打たちに向き直る。

「良くは覚えてねえけどよ。白髪の女を担いでいた奴なら見た事あるぞ」

「どこでだ!？」

「どこなのです!？」

ズイツと詰め寄る時打と電。

「……相当切羽詰まってるみたいだな……」

響夜の表情が少し締まる。

「どこでつても、そこまでは知らねえな。ただ見かけたっただけで、どこに連れていかれたっっていうのは分からねえ」

「そ、そうか……」

一気に落胆する時打と電。

「しかし、そんな奴探して何になるんだ?」

響夜はご飯を一口、口に放り込み、そういう。

時打は、俯き、答える。

「仲間なんだ……大切な……」

「……」

響夜は黙って最後の一口を口に入れ、やがて、ドンツとそれをお盆の上に叩き着ける。

「よし、なら手伝ってやる!」

「は?」

響夜はニツと笑う。

「俺は『相良左之助』の様に政府がそこまで嫌いって訳じゃ無いけど、そういう仲間想いな奴は俺は好きだ。それに、そこまで大事な相手ならなおさら手伝わない訳にはいかねえよ」

「いや、関係無い奴を巻き込む訳には……」

「情報売っている時点で関係あるも無いも知ったことかよ」

「な、なんて自分勝手……」

響夜の態度に唾然とするしかない時打と電。

「それに、それなりに頼りになるぜ」

「……」

確かに、先ほどの喧嘩で同じように、この男は相良左之助並みの打

たれ強さと筋力を兼ね備えている。

だが、それだけでは・・・

「それに、『二重の極み』も使える」

「!？」

『二重の極み』

物には全てがそれぞれの『抵抗』を持つ。

例えば、それを拳打で衝撃を加えるとする。

だが、その衝撃は『抵抗』によって完全には伝わり切らない。

つまり、そこに無駄な衝撃が出来てしまう訳だ。

ならばどうするか？

まず、拳を立てて物の第一撃を加える。そしてその第一撃目が物の『抵抗』とぶつかった瞬間、拳を折って第二撃を加える。すると、二撃目の衝撃は、一撃目による衝撃が既に物の『抵抗』を消している訳で、二撃目の衝撃は『抵抗』を受ける事無く完全に伝わり、粉碎する。これが破壊の極意『二重の極み』だ。

時打は、どこからか手頃な石を取り出し、それを響夜に向かって投げける。

「ん」

それを響夜は何でもない動作で右拳を石にぶつける。

すると、石は粉々に砕け散った。

「な・・・」

それに唾然とする電。

一方で時打は冷や汗を流す。

「・・・どうやら本当の様だな・・・」

「どうだ？」

「参った。降参だ」

時打は両手を上げ、そういう。

ヒトナナマルマル——午後五時。

ヒューマンショップ…… 奴隷売り場。

「十二万五千!」

「まだまだ、十二万六千!」

目の前で繰り広げられる白熱する競売。

賭けられているのは……自分。

手錠をかけられ、その姿を大勢の人間に見られている。

(何故……こんな事に……)

翔鶴は、心の中で、そう後悔した。

昨夜、夜、沿岸沿いの道を一人歩いていた所を、誰かの手によって  
気絶させられてしまった。

そして気付くと、自分は見知らぬ牢屋の中にいた。

そこには、何人もの手錠をかけられた、人間たち。

自分とは違う、陸の内で暮らしている人間たち。

だが、その表情は絶望に包まれている者がほとんどだった。

一人、親切な人が教えてくれたが、ここは、人を売る奴隷売り場。

つまり、自分はどこからか誘拐されて、奴隷にされかけているとい  
うのだ。

当然、出してくれと懇願したが、そんな思いは届かず、逆に殴られ  
た。

それで理解した。

自分には、もう口出しの権利等ないのだと。

もう、自分にまともな人生は無いのだと……

(誰か……助けて……)

そう、願うも、届くわけが無かった。

ふと、一人の、若干、細身の偉そうな男が不意に立ち上がった。

そして……

「一億だそうじゃないか」

『!?』

「な……」

一億……そんな大金を自分に出すというのか？

何を考えているのだ、この男は。

男は嫌な笑みを浮かべ、更に言葉を紡ぐ。

「まだまだ足りないのか。ならもつと出すが？」

「ッ……」

翔鶴は恐怖した。

この男、自分を手に入れる為なら、なんでもする気だ。

翔鶴はふと、横目で司会を見る。

だが、司会はこちらの視線に気付いていないようで、他に誰かいないかと問う。

「えー、一億出しましたが、他に誰かは……？」

誰も、手を挙げようとしな。

既に、諦めている。

その男が、それほど強大な力を持っているという事を示している証拠だ。

(い……いや……)

「他には？」

(やめて……)

帰りたい。今すぐあそこに帰りたい。瑞鶴のいるあの鎮守府に……

「では、落札です！おめでとうございます!!」

(やだ……提督……)

ヒトハチマルマル——午後六時。

「こんなを探しても手がかり一つも見つからないなんて……」  
暗くなつた街で、電はそう呟いた。

「くそ……どこにいるんだよ……翔鶴……」

時打は、苛立ちのある声でさういう。

「うーん……あとあるとすれば……」

響夜は片手を顎に当て、考え込む。

まだ半分だが、この街は京都よりも広いのだ。

「仕方ない……こうなれば強行だ」

時打が逆刃刀の鍔を押し上げ、その刀身を少しだけ見せる。

「強行つて……まさかヤクザのアジトに押しかけるつもりですか!？」

電が心底驚いた様な声で叫ぶ。

時打はさうだとも言うかのように頷く。

「やめて下さい！まだ学校を卒業してないとはいえ、お兄ちゃんは一介の海軍兵なんですよ！そんな事していいと思つて居るのですか!？  
理不尽ですよ!!」

「離せ電！早く翔鶴を助けなさいけないんだ!」

「ずかずかと行こうとする時打を全力で阻止する電。」

「ん？海軍?」

そこで響夜は電が言ったワードに食いつく。

「という事は……時打お前海軍なのか?」

「あ……」

電が冷や汗を流す。

時打は呆れた様に頭を押さえる。

「電……翔鶴……そうか、お前のいう仲間つていうのは『艦娘』の事か」

バレた。

相良左之助似的のこの男の事だから分からないと思つていたが、どうやら軍艦についての知識は良く知つて居るようだ。

一般人にその事を知られてしまった。

どうする？口封じに叩きのめすか？

しかし、それでは……

「ならそうと言ってくれよ！」

「は……?？」

だが、響夜はその顔を笑顔にするとバンバンと背中を叩く。

「これで政府に恩を売っておけば、いざって時に手伝ってくれるかもしれねえだろ？」

「現金だ。現金な奴ですよこの男!？」

電がそう叫ぶ。

「さくて、大事な事だからあの時は聞かなかったけど、これで身分がバレたからには言うしかなくなつたなく？」

「ぐ……中々に頭の回る奴だな……」

苦笑する時打。

仕方なく、時打と電は、全ての事情を話した。

「なるほどな……」

「はあ……長門に殴られる」

「ごめんなさいなのです……」

響夜は腕を組んで考え込み、時打は長門に殴られるのを、電は自分の所為で身分がバレた事を申し訳なさそうに項垂れた。

「とりあえず事情は分かった。だけど、なんでこんな近くに街があるのにそんなものを作ったんだ？」

「それは上に行ってくれ、俺にもわからん」

「だけど、お前らが海軍だと分かって、一つ当てが出来た」

「本当か!？」

時打が響夜の言葉に食いつく。

「ああ。一言でいうと、『情報屋』だ」



## 突撃直前

イチキユウマルマル——午後七時、夜。

黒河市にて、時打と電と響夜はある場所に向かっていた。

「ここだ」

「……」

響夜に連れられてきた場所は……ホームレス街だった。

「あー、もしかして『龍が如く』と同じで、こんなちんけな場所に地下には豪華な娯楽街があつてそこに情報屋がいるっていうパターンなのか?」

「娯楽街はないけどまあそうだな」

時打の仮定を肯定する響夜。

「ははは……もう疲れたのです」

そう力無く笑う電。

「行くぞ！俺も世話になつてるからな！」

響夜は景気良さそうにそう言い、ホームレス街を突っ切っていく。

「しかし……」

ここにいるホームレスたちは、それなりに楽しそうに暮らしているようだ。

「お前はここに住んでるのか?」

「いんや。ちよいと知り合いの家に泊まらせてもらつてるんだ」

「へえ……」

追及はしない。

何か嫌な予感がしてならない。

そして突っ切る事数分。

なにかしら地下へと続く小さなコンクリで作られた階段があつた。

「ここだ」

「なあ、一つ聞きたいんだが、こここの情報屋って人見知りとかじゃないよな?」

「まあ、人を選ぶ事は当然するな」

「大丈夫だと良いんですが……」

電が心配そうに言う。

しばらく階段を下りる事数分。

一番下に扉が一つ。

響夜が扉をノックする。

『入れ』

「おう」

まるで分かっていたかのように返事が返ってくる。

響夜は堂々とその扉を開ける。

そこにはあったのは……

大量のモニターだった。

「……」

「来たぜジジイ」

その数に絶句している時打と電を他所に、響夜はモニターの中心にある椅子に座っている男に声をかける。

その男は、服装は祭り男の様な恰好をしているが、顔立ちは中年、体格はかなりのマッチョとききた。

「おう、やっとききたか」

男は、響夜に挨拶した後、時打たちを見る。

「よお、黒河鎮守府の新しい提督さんよ」

「なるほど、もう鎮守府の存在は知っていたか」

時打は苦笑しながらそう言う。

「最近には派手な事をしたそうじゃねーか。あの戦艦『長門』をその逆刃刀でぶっ飛ばしたみてえじゃねえか」

「なに!?!」

それを聞いた響夜は目を丸くして驚く。

「艦娘のそれも戦艦をぶっ飛ばしたのか!?!」

「ま、まあ、そうだな・・・うん」

更に困った様な表情で苦笑する時打。

「ひよえ〜」

響夜が驚愕混じりの感嘆の声を漏らす。

そんな響夜を他所に、時打は男に向き直る。

「それで、名前を聞きたいのですが・・・」

「ああ、そうだったな。全く、なんで先に言っとかねえんだ」

「わ、悪かったよ・・・」

響夜がばつが悪そうに頭をかく。

そして、男が名乗る。

「俺は『三柱 刃馬』。この街で情報屋をやっている」

「ご丁寧にも。俺は天野時打。こっちは初期艦の電」

「よろしくなのです」

ペこりとお辞儀をする電。

そして、時打は、刃馬を見据え、本題に入る。

「単刀直入に言おう。翔鶴はどこだ？」

向こうは、こちらの情報を持っている。つまりはこちらの事を知っているという事だ。

「白髪の弓道服姿の女、だったな。それなら五時に売り飛ばされたよ」

「売り飛ばされた？」

意味不明だというように聞き返す電。

「ヒューマンショップ・・・簡単に言えば奴隷売り場で五時で一億円で売られたよ」

「な・・・!？」

つまりは・・・翔鶴は奴隷にされたという事だ。

「それって犯罪なんじゃ!？」

電がそう聞く。

そもそも奴隷など、この国では太古の昔から禁止とされている人の権利を完全に剥奪される行為。

そんな事があるとしたら、すぐに警察に捕まってもおかしくない話だ。

「そうだ。犯罪だ。けどどな、その後ろにいるのが、警察でさえ手が出せないような大組織なんだよ」

刃馬がたばこを吸う。

「だから、警察は手が出せないまま立ち往生していると」

「そうなるな」

「ツ……」

電が悔しそうに俯く。

「……俺たちの目的はあくまで翔鶴の救出だ」

時打が、そういう。

その言葉にバツと顔を上げる電。

「今はそれが最優先事項。その事については、おいおい考える事にする」

時打の言葉に、驚愕を混じらせた表情で電は見つめる。

しかし、すぐに俯く。

「心配すんなよ電」

だが、すぐに電の頭をわしゃわしゃと撫でまわす時打。

「どつちにしろ、必ず潰す」

そう、確かに言う。

「お兄ちゃん……」

「ハッハッハー!!」

直後に高笑いが聞こえた。

響夜だ。

「潰すか！面白い奴だなお前はよー！」

あひやひやひやと腹を抱えて笑い出す響夜。

それに唾然とする一同。

やがて笑いをおさめると、キツと表情を引き締める。

「良いぜ。お前の意思はしかと伝わった。この佐加野 響夜、こういうりやとことん協力してやるぜ」

心強い言葉を発する響夜。

その誠意に、時打は……

「ああ、よろしく頼むよ。響夜」

そして、時打は右手を差し出し、それを響夜を掴み、握手をする。  
「決まったみたいだな」

そこで刃馬が口をはさむ。

「その翔鶴って女だが、丁度、この第二区にいるここ一番の大富豪の所だ。だが気を付けろ。ゲスい奴だが、頭は回る奴だ。かなり強い用心棒を雇った上に五十人近いゴロツキを正面の庭に徘徊させている。騒ぎを起こせば一発で集まってくるだろう。けどな、奴は頭は良いが、考える事は子供だ。そこが狙い目だ」

「ありがとう。そこまで分かれば後は乗り込むだけだ」

かなり有力な情報をくれた刃馬にお礼を言い、時打は左腰の逆刃刀の鞘をなでる。

「・・・頼むぞ、深鳳」

そう短く呟く。

「行こう、電、響夜」

「おう！」

「はいなのです！」

そして、彼らはその部屋から退出する直前。

「だんご」

「え？」

「何もただで情報を提供する訳ねえだろ。ここで一番美味しい『三日月屋』の団子を持ってこい」

「ははは・・・分かったよ」

苦笑して、彼らは出て行った。

フタヒトマルマル——午後九時。  
道真邸・・・

その屋敷を例えるなら、明治の大富豪の屋敷を思うだろう。

まあ、どこぞの『明治村』と呼ばれている所よりも明治らしいこの黒河市は、当然、建てられる建物も明治らしくなる。

その家主である、『道真 敦也』<sup>あつや</sup>は、かなりの金持ちだ。ゴロツキとも言うべき、まるで戊辰戦争直後に役割の無くなった志士たちの様な者たちを雇っている上、違法な武器を仕入れる程の悪人だ。

最近では、麻薬の製造にまで手を出しているらしい。

それはさておき、その道真に買われた翔鶴だが……

「ん、やはり良い女だ」

その道真の慰み者にされていた。

牢屋とも言うべきこの寝室は、普通よりかなり広く設計されているらしい。

接吻など、そこまでの事はされていないが、とにかくこの男に触られる事自体に嫌悪を感じている。

ただ、逆らえばそこがこの男の思う壺だと思いと、どうしても我慢してしまう。

「やはり、僕の方には向いてくれないのかい？」

「はい」

とにかく堂々としていなければ、いづれ、人としての自分を見失ってしまう。

『家畜』にはなりたくない。

「やれやれ。まだ奴隷としての自覚がないのか」

ふっと笑う道真。恰好でもつけているつもりなのだろうか？

「まあいい。これからゆっくりと調教していけばいいんだ」

この男は……あの男に似ている。

時打が着任する前の、自分の大切な仲間を全て沈めたあの男に……

空母『翔鶴』

時打が着任する前の提督より更に前の提督の頃から着艦していた空母だ。

つまりは、事実上の一番の古参なのだ。

だが、そんな彼女には、かつての仲間たちはいない。

その理由は、彼女が慕っていた提督がやめて次についた提督のせい

だ。

その提督は、まず、翔鶴の仲間である者たちを酷使し始めた。重なる疲労。蓄積されるダメージ。それによって轟沈していく仲間。

妹の瑞鶴は、そんな仲間が轟沈していく真つ只中で建造された。

だが、翔鶴がそんな事を黙っている訳が無かった。

すぐに直談判に行き、もうやめてくれと言った。

だが、そんな言葉は届かず、すぐに出撃させられた。

そこで悲劇が起きた。

翔鶴が務めた艦隊が、思わぬイレギュラーによって、艦隊は混乱。旗艦である翔鶴はすぐにも撤退したかったが、提督からの命令で一気に絶望へ落とされた。

その敵艦隊を全滅させるまで、鎮守府には入れない。

そこからは血みどろの争いだった。

敵の潜水艦による軽巡の轟沈。

空母による駆逐艦の轟沈。

最後に残った翔鶴は怒りに身を任せて艦載機を飛ばし続けた。

だが……誰も助ける事が出来なかった。

一応、敵艦隊は全滅させたが、もう大破によって戦う事ができず、強制帰還。

帰った時、そのまま指令室に向かわされ、そこでボロボロの状態で提督と対面した。

そして……

『お前が俺に逆らったから、全員沈んだんだよ』

そう、言った。

その時からか、提督に対しての『恐怖心』が強くなり、どんな『命令』でも遂行するようになってしまったのだ。

そして、その提督が鎮守府からいなくなっても、植えつけられた恐怖心はそう簡単に拭えるものでは無かった。

以来、殆どの生活を部屋で過ごし、引き籠る様になってしまったのだ。

ただ、昨日の夜は、一ヶ月に一度はする散歩だ。  
そこを攫われてしまったのだろう。

そんな事を思い出しながら、もう二度と、瑞鶴たちに会えないのだ  
と思うと、胸が締め付けられていく。

ただ、そんな事を思い出しながら、突然扉が開け放たれる。

「大変です！道真様！」

「いきなりなんだ!?もつと静かにこないか！」

入って来た白スーツの男に怒鳴るも、その白スーツは無理矢理言葉  
を繋いだ。

「侵入者です!!」

「何イ!？」

道真が心底驚いた様な表情をする。

そして……

「翔鶴

!!!!

彼の声が聞こえた。

数分前……

「ここだな」

「はい、間違いないのです」

「よっしゃ、じゃあ早速突撃しますか！」

響夜がそう提案する。

「ちよつと、ここは慎重に気付かれない様に行くべきでしょう!？」

電が小声でそう怒鳴る。

「だけどお前の兄貴はそこまで待てないみたいだぞ？」

「え?。」



響夜の言葉で時打を見る電。

「あー……」

そこにはもう正面の警備を倒している時打がいた。

「早くしろ」

「あーもう分かりましたよ」

電はやれやれとでも言う様に時打の元にトタトタと走っていく。

「そんじゃ、派手に行きますか!!」

響夜がそう言い、正門の前に立つ。

「オラア!!」

威勢の良い掛け声と共に、門を殴る。

ドガアアアン!!

まるで大砲でも撃ったかのような轟音が響き、鉄の門が粉々に砕け散る。

「ひゃあ……二重の極みって凄いな……」

「おうー!」

そして、三人はづかづかと中に入っていく。

当然、その轟音を聞きつけて大量のゴロツキが刀や刃物などを持ってきてやってきた。

その数、百。

「あの人がいった数よりかなり多いですね」

「五十人近いと言ってたからな、誤差があってもおかしくないだろ?」

そう言い、時打は、前が出る。

そして……

「翔鶴

に來たぞオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

!!!迎え

大きな声で、彼女に届くように叫んだ。

その声は彼女に届いた。

「てい．．．とく．．．?」

翔鶴は寢室の窓を開ける。

最上階に存在するこの部屋は、正面の庭を見渡せる。

だから、すぐに見つけられた。

服装は違うが、確かに、あの黒い髪にあの海の様な碧い目は、確かに彼だ。

他にも、電や、見知らぬ男がいるが、きっと、彼に協力してくれているのだろう。

——助けに来てくれた。

それだけで、涙が溢れ出た。

「一緒に帰ろうツ!!皆の所へ!!」

こんな、自分を助けに来てくれた。

提督なのに、自分たちの後ろで守られている存在の筈なのに、彼は、来てくれた。

「はいツ!!」

待とう。彼が来てくれると信じて。

突撃開始！

翔鶴の声が聞こえた時打、電、響夜の三人は同時に動いた。

「まずこの邪魔な奴らを片付けるぞ!!」

「おう！」

「はい！」

三方向に走り出す三人。

それぞれを集団が三つに分かれて追いかける。

「死ねえ！」

時打の正面にいる男が刀を振り上げ、そのまま振り下ろしてくる。

だが、遅い。

それよりも早く時打が抜刀。

その男だけでなく、後ろにいた三人もまとめてぶっ飛ばす。

『ぎやああああ!』

悲鳴を上げて中を舞う、ゴロツキの四人。

「この野郎！」

今度は背後からゴロツキが突き刺そうとする。

だが、時打は時計回りに回転しながら回避。

その遠心力をそのままにして、回転をかけて返し技カウンターを放つ。

飛天御剣流『龍巻閃』

「ぐげあ!」

そのまま吹き飛んでいくゴロツキ。

それに警戒して、一時止まるゴロツキたち。だが・・・

「な、何してる!?!早く行け!」

リーダーらしき人物がけしかけ、ゴロツキたちが突っ込み事を再開する。

「我流飛天御剣流・・・」

ここで引けば時打は何も大技を出す事はしなかつただろう。

時打は一息で地面と平行となる様に跳躍。それと同時に体を軸に時計回りに回転を掛けて、ゴロツキたちに突っ込む。それによって生じた突風がゴロツキたちを吹き飛ばす!

「龍巻閃『息吹』!!」

まるで龍が息吹ブレスでも放ったが如き一撃がゴロツキたちを一網打尽にする!

『ぎやあああああ!?!』

悲鳴を上げながら宙を舞うゴロツキたち。

「ひ、ひいい!?!」

「な、なんだよこいつ!?!」

「無茶苦茶過ぎる!」

一斉に逃げ惑うゴロツキたち。

だが、響夜がそんな奴らを一息に殴り飛ばす。

「逃げるたあ関心しねえな」

「別に、もう戦意が無ければいいのに」

「甘えなお前はよお」

時打と会話する響夜の後ろからドス(脇差)を振り上げるゴロツキ。

「ふん!」

「ぐげあ!?!」

そんなゴロツキを後ろを見ずに顎を左手で殴り飛ばす。

「しゃらくせえ」

「そっちは任せたぞ」

「おう」

戦意を戻したゴロツキたちがもう一度津波の様に襲い掛かってくるのを見た時打はそのまま突っ込んで行く。

「よオし!・来オイ!!」

もう一方から来たゴロツキたちを見据えた響夜は、地面に向かって右手を突き出す。

「二重の極みツ!!」

瞬間、響夜の前方の地面が割れ、爆散する。

それによって生じた破片が飛び散り、ゴロツキたちに直撃する。

「この野郎!」

別の所から襲い掛かってくるゴロツキを右手で吹き飛ばし、更にもう一方から来た敵を左で殴り飛ばす。

『うおおおお!!』

「しやらああああ!!」

十人が同時に襲い掛かってくるも、響夜は連続で拳を繰り出し、全員を吹き飛ばす。

「へー!」

「げぎやあ!」

「ん?」

後ろで悲鳴が聞こえ、振り向いてみると、電が敵を一撃で絞め落としていた光景だった。

「おう・・・」

「私の戦法は小太刀と拳法の複合闘技。もともとお兄ちゃんが指導してくれたか、私が勝手に『天野流』って言ってるけど、その名には恥じる事はないのです」

電が響夜に向かってそう説明する。

「このガキ・・・」

「女だからって容赦しねえぞ」

その間にゴロツキたちがそう刃を向ける。

「別に容赦なんてする必要ありませんよ」

電が小太刀を逆手に持つ。

「私が沈めるから」

地を蹴り、敵に急接近する。

その途中で跳び、一番前にいた男の頭に左手を置き、倒立。だが、その状態から後頭部へ膝蹴りを打ち込む。

その状態で体を反らし、地面に両手を着き、回転。立ち上がり気味に反時計回りに体を回転。後ろにいる敵の首筋に刃を叩き着ける。

その腕を引き戻し、自分の右にいた男に左手で掌打を加え、更に回転。体を低くして、更に向かい側の敵に左足の踵で足払いを掛け、倒れる所へ側頭部に右膝蹴りを打ち込む。

そして虎伏の状態へ。

ゴロツキたちが上から一斉に武器を振り下ろしてくる。

だが、それよりも早く、股が大きく開いている相手の下に潜り込み、

くぐる。

すぐさま立ち上がり、その男に小太刀を叩き込む。

「この野郎!!」

電の後ろから首を斬り飛ばさんとばかりに太刀を横薙ぎに振ってくるのを感知した電は勢い良く背中を反らし回避。

そのままバック転をし、男の頭を蹴り落とす。

「このガキイ!!!」

大柄な男が、巨大な大槌を持って、電に振り下ろそうとする。

「!? あぶねえ!」

「大丈夫だ」

響夜が叫んで助けに行こうとするが、時打がそれを止める。

「天野流……」

電が小太刀を持ち直し、男の懐に突撃する。

そして、左手で一撃目の掌打を入れた。

「げう!」

「やああああ!」

立て続けに小太刀を振り下ろし二撃目、三撃目に左拳、四撃目は小太刀。

「五臓打ち!!」

ラスト五撃目は、零距离から放つ拳打。

その威力故に大男の体は浮き、地面に沈む。

「なあ!」

「最後の一撃は『牙突《零式》』の要領を生かした攻撃だ。ま、そんな事しなくても牙突は普通に撃てるんだがな」

時打が自慢するように驚いている響夜に言う。

「見た目で判断しちゃいけないえって事だな……」

「そういう事だ」

「何しているんだお前らああああ!!」

「ん?」

突然、屋敷の方から怒号が聞こえた。

見ると、そこにはいかにも弱そうでボス的な男がいた。

「あいつが道真って野郎か？」

「そうみたいだな」

時打の表情が険しくなる。

「たかが三人に何していやがる！金ならいくらでもある！そいつらを倒した奴には大量の金をくれてやる！オラやれえ！」

そう言いながら、大量の札束をばらまく道真とその部下数人。

それを見たゴロツキたちが咆哮を上げる。

『オオオオオオオオオオ——！！！！』

「あの野郎……」

「良いじゃねえかよ。これで手間が省けるって物だ」

「お兄ちゃん！」

誰かを蹴り飛ばして飛んできた電。

「電、こうなったら全員倒していくぞ」

「分かったのです！」

そして、三人同時にゴロツキの集団に突っ込む。

「我流飛天御剣流……」

「天野流！」

「オオオツ！」

時打が左から物凄い勢いで逆刃刀を横に薙ぐ。

電が突撃しながら体を回転させる。

響夜が両腕を思いっきり引く。

「波龍閃！！」

「電いなずま式回転剣舞！」

「双拳・二重の極み！！」

それぞれの技が、残り五十人のザコをぶっ飛ばす！

前進する勢いに加え、剣を振るう勢いを重ね掛けする『波龍閃』。

電が相手の周りで回る様に攻撃する回転する回転剣舞を電自身が回転してその遠心力を小太刀に乗せて連続攻撃する『電式回転剣舞』。

両手で同時に二重の極みを放つ『双拳・二重の極み』。

それぞれの大技が見事に決まった。

お陰で全てのゴロツキたちが地に伏せた。

「行くぞ！」

時打の掛け声で屋敷の中に入っていく三人。

一方で、道真は……

「お前ら、仕事だ」

壁際に座る三人の人物にそう言う道真。

「あの三人を始末して来い。仕留めた奴には大量の金をくれてやる」  
「強いのか？そいつら？」

三人の内、一人が話しかける。

「ああ、百人はいたゴロツキどのがもう全滅だ。まったく、使えない奴らが……」

そう悪態吐く道真。

それを聞いたひよろりとした男が嬉しそうに顔を歪ませる。

「よっしゃ、それなら一番手は俺が請け負ってやる」

「良いだろう……だが、負けたら許さんぞ、鹿丸しかまる」

それを聞いた鹿丸は、すぐさま部屋を飛び出していく。

「お前たちも、それぞれの位置につけ。もしかしたら誰か一人に任せ  
て残りの奴らが先に行くかもしれない」

「分かった。次の相手は俺がしよう」

今度は、かなり筋肉質な男が部屋を出ていく。

「おい、お前は行かないのか？」

道真は最後に残った白コートの男にそう問いかける道真。

だが、白コートの男はふん、とあしらうと、こう言う。

「俺には俺のやり方がある。指図するな」

「な……!?!」

その反抗的な態度に青筋を浮かべる道真。

「貴様ア……雇って貰っている癖になんだその口の利き方はア……」  
「金の為だ。迎撃するとはいつたが、何もやり方までは言っていない  
だろう？」

正論を叩かれ、うぐ、と唸る道真。

「何、少ししたら動く。それまで黙っている」



そう言い残し、白コートの男は椅子にもたれる。

一方の道真はイライラが溜まっており、これ以上は爆発しそうだから、部屋を勢い良く出ていく。

屋敷の中に入った三人。

「こつちで合ってるんですね？」

「は、はいいい!!」

電は小太刀の逆刃を、ここの部下であろう男に突きつけながらそう言う。

それはまるで小さな強盗である。

「こ、ここの通路をま、真っ直ぐ行けばか、階段があつて、その先にある、広間にある、か、階段を上れば・・・」

「よし、十分です」

「ぐえ」

そこまで聞いた電はすぐさまその部下を絞め落とす。

「なあ？電って実は腹黒かったりするの？」

「苛立っている時はああなる」

その光景に内心ゾツとしている響夜に、いつもの事の様に苦笑している時打。

「さて、行こうか」

廊下を走る三人。

だが、廊下を曲がると、その先に誰かが立っていた。

「誰かいますー!」

電の声で一斉に止まる三人。

そこには体格的にはひよろつとしており、髪は染めているのか金髪。

武装は、太腿に巻かれたベルトについている投げナイフだけか・・・。

「お前は？」

時打が男に問いかける。

「俺は鹿丸！私怨は無いけど、お前らには死んでもらうぜ」  
堂々と名乗りを挙げた上に死刑宣告。

それほどに自分の腕に自信があるのだろう。

「どうする？速攻で片付けるか？」

響夜が右腕をパキパキと鳴らす。

だが、電が前に出る。

「時間はかけてられません。お兄ちゃんと響夜さんは先に行っていて下さい。ここは私に任せて下さい」

電は先ほどしまったばかりの逆刃小太刀・落雷を引き抜く。

確かに、これほどの騒ぎを起こして警察が黙っている訳が無い。

急がなければ、翔鶴と電の正体がバレる可能性もあるし、世間からは隠されている鎮守府の一つである黒河鎮守府の事が露見してしまうかもしれない。

「分かった。頼んだぞ電」

「はい。電の本気を見るのです！」

久しぶりに聞いたそのセリフを聞き、時打は安心する。

「ちよつとお取込み中の所悪いけどよお。俺がそう簡単に行かせると思つか？」

鹿丸が左手のガントレットから隠しナイフをとりだす。否、長さ三十センチのコンバットナイフだ。

だが、その瞬間、電が大きく飛びこみ、小太刀を振り下ろす。

「ぬお!?!」

「行つてッ!!」

鹿丸がそのスピードと威力に驚いて硬直している間に、時打と響夜が横をすり抜ける。

「チィッ！こなくそー！」

「させない！」

「な!?!」

鹿丸が開いた左手で左太腿にある投げナイフを一本掴み、それを時打に向かって投げる。

だが、それを電は小太刀の角度を変え、後ろに変則的なハンドस्प

リングを決め、投げた直前の投げナイフを踏んで止める。

「このガキ！」

「ガキだからって油断しないで下さいなのです！」

電が鹿丸に立ちちはだかり、時打たちを行かせた。

「後悔すんじゃないやねえぞお！」

「上等なのです！」

「あいつの腕を疑ってる訳じゃねえが大丈夫なのか？あいつ、かなり強いぞ」

響夜がそう時打に聞く。

だが、時打は自身満々に答える。

「あいつは俺が手塩を掛けて育てたんだ。勝つさ、電は」

「なら安心だ」

響夜もフツと笑い、廊下を抜け、階段のある部屋に出る。

「!?!」

だが、その上に一人、筋肉質な男がいた。

「どうやらあの男の読みは当たった様だな。思考は幼稚な癖して頭の回る奴だ」

やれやれと溜息を吐く男。

「お前は誰だ？」

響夜が皮肉たつぷりに聞く。

「俺は、鬼村<sup>きむら</sup>。悪いがここで足止めを喰らって貰うぞ」

鬼村は大きく飛び、床に着地、二人を見据える。

「時打、こいつの相手は俺がやる。お前は先に行け」

「良いのか？」

「さつき電も言ってただろ。時間が無いって。だから行け！」

響夜がけしかけ、時打がそれに応え、階段を飛天御剣流で鍛えた跳躍力で一息に跳んでいく。

鬼村は、それを見届ける。

「お前、最初<sup>ハナ</sup>から行かせるつもりだったな」

「ああ。どうせ行っても、死、あるのみだ」

鬼村がそう、笑いながら言う。

「……誰がいる？」

「俺たちのリーダー的な存在だ。それに、強さも俺たちとは比べ物にはならない」

鬼村が構える。

「そうかい。なら強さでいったら時打だつて負けてねえ。それだけは絶対だ」

響夜も、そう言いながら身を屈めながら構える。

階段を上った先にある廊下を走り抜け、目の前にある扉を蹴り開ける。

そこは、パーティー用の広間。

「……ここは……」

「ここまでだア！」

「!?」

突如、聞き覚えのある声が聞こえ、見ると、向かいのドアが開け放たれ、そこから黒光りする何かが現れる。

六つの細長い鉄製の筒。それらが輪を描くように並べられ、その後ろには同じ鉄製の四角いなにかに回転式のハンドル。その横には大量の薬莖。

ガトリングガン  
回転式機関砲だ！

アームストロングカノン  
ストンウォール  
甲鉄艦、元込式旋条砲と並ぶ幕末三大兵器の一つだ。

しかも一分間で二百発も撃てる代物だ。

「ハッハッハー！これでお前の人生も終わり……て、ちよ!？」

それを視認した時打の行動は簡単だ。

速攻で破壊して奴を殴る。

「ええい！いいでしょう！新しく購入したこの兵器の威力をお前で試してやりますよ!!」

そのまま、ハンドルを回転させる道真。

銃口が回転しはじめ、やがてそこから無数の弾丸が発射される。それが時打に向かって飛来していく。だが、それが直撃する瞬間、時打の姿が消えた。

「え!?!」

「ガトリングガン回転式機関砲の弱点、それは……」

上空から声が聞こえ、見上げると、既に攻撃態勢に入っている時打だった。

「な……!?!」

「その重量故に真上からの攻撃には対応できない事だア!」

飛天御剣流 龍槌閃!!

上空からの振り下ろしが炸裂し、ガトリングガン回転式機関砲は真つ二つに破壊。

「オオオッ!」

「ま、待って……」

そしてそのまま回転し、龍巻閃《凧》を叩き込む。

「ぐげあ!?!」

登場僅か十秒の出来事だった。

それほどまでにあっけない決着だった。

「全く」

「仕方ない奴だ」

ふと、頭上から声が聞こえた。

上の階にあるテラスからだ。

見上げると、そこには白コートの男が立っていた。

「先ほどの、飛天御剣流の龍槌閃か?」

「へえ、知ってるのか?」

「そして、それを使うって事は、お前が『飛天童子』か?」

ざわり……

瞬間、時打の表情が殺気に染まる。

「お前……」

「闇の裏業界では有名な話だぞ?」

テラスから飛び降り、時打のいる下の階に降りる白コートの男。

「あの、かつて魑魅魍魎ちみもうりょうが住み着く『暗黒都市』と呼ばれた『きんざん山市』の『飛天童子』。その強さはまさに鬼が如し。そして、飛天御剣流を使う事から、その名がついたと聞いている。極道の大量の殺人をして、あの『革命の日』以来、行方不明だった筈のお前が、まさかこの街にいたとはな。——だが、なんだその刀は？」

白コートの男が時打の刀を見て、真剣な眼差しで見る。

「そんな刀で人を殺せない。まさか、『緋村剣心』にでもなりきったつもりか？」

笑えない冗談だともいう様な冷たい眼差しで時打を睨みつける白コートの男。

それを聞いた時打は、いつになく、険しい表情で、白コートの男を睨み付け、言う。

「そんな理由でやった訳じゃ無い……ただ、眼につく人を助けたかっただけだ。ただ、それだけだ」

時打は、構える。

「そして……」

時打は、更に言葉を繋げる。

「もう、人は殺さない」

強い眼差しで、そう言った。

「そうか」

白コートの男は、笑う事は無く、コートの中に両手を交差させながら入る。

「ならば、そんなお前は俺が殺してやろう」

出てきたのは白銀に輝く拳銃。ベレッタだ。

それも、装弾数を弄ってある物だ。

しかし、その眼は未だに真剣その物。

「自己紹介がまだだったな。俺は『秋風 達也』だ。お前の本名は？」

「……天野 時打だ」

そして、達也が右手の拳銃を突きつけ、時打は体の右側に刀を構える。

そして、試合開始の引金が引かれた。

## 戦闘開始 電VS鹿丸 響夜VS鬼村

屋敷廊下。

「やああああー！」

電が雄叫びを上げ、鹿丸に斬りかかる。

「こなくそー！」

「ッ!？」

しかし、鹿丸が流石の手つきでホルダーから投げナイフを三本引き抜き、それを電に二本投げる。

電はそれを跳んで回避。体を反転させて天井に足を付け、三次元で飛び回りながら鹿丸に接近する。

「ヤアア!!」

そして電が天井から斬りかかるその瞬間、鹿丸が三本目のナイフを投げる。

「ッつあ!？」

それに慌てて小太刀を薙ぎ、弾く。だが反応が送れたのか、軌道を変える事にしか至らず、首筋を掠る。

「ソコヤアー！」

「あぐ!？」

その隙を突かれ、腹を蹴り飛ばされる電。

宙を舞い、しかしそこから態勢を立て直し床に着地。

そして、顔を上げた瞬間、鹿丸がこちらに走ってきているのが見えた。

「うあ!？」

「そらそらそらア!!」

コンバットナイフを鋭く薙ぎ、電の小太刀を弾き、大きく体を反らす。

更にそこから連続で斬りかかる。

なんとかギリギリの所で小太刀を引き戻した電はその連撃を受け続ける。

「こッのオー！」



「ぬお!?」

一瞬の鏢迫り合いの瞬間、体の各部分から発揮される力を小太刀に集中。

その瞬間、鹿丸のコンバットナイフが弾かれる。

「しゃあんなろおおおおッ!!」

「おわ!」

そのまま飛び上がり、力任せに鹿丸の顔面目掛けて左足を薙ぐ。

それをギリギリの所で体を反らして回避する鹿丸。

だが、それでは終わらない。

その勢いのまま龍巻閃の《旋》から《嵐》へ繋げる連撃の様に、オーバーヘッドキックを繰り出す。

だが、鹿丸はそれを更に体を反らしバック転で回避。

その着地の瞬間、左手でナイフを引き抜き投げる。

電はそれを地面に左手を着いたまま右手で小太刀を薙いで防ぐ。

「こんの野郎……女、それも子供は家に帰ってねんねしてる時間だぜ?」

「あいにく、そこまで普通な生活を送ってた訳じゃ無いので」

余裕の無い笑みで互いに挑発する二人。

だが、それも長くは続かず、二人同時に動きだす。

鹿丸がナイフを投げ、それを電は今度は態勢を低くして回避。

「ッ!」

電が小太刀を左手に持ち替え、思いっきり弓の弦を引くように左手を引く。

そして右手で狙いをつける様に前に掌を開いて突き出す。

「牙突・壺式ッ!」

瞬間、まるでロケットが発射された直後の様な音が響き、左手の小太刀が思いつき突き出される。

「ぬおあ!」

その速度に驚いた鹿丸は大きく飛ぶ。

電の体格が小さいからなのか、上空へ回避する事は簡単だった。「引つかかったな……」

「な!？」

電がそう眩き、その瞬間、電が牙突の軌道を床に変え、それを軸にして反転。勢いそのまま鹿丸に向かって飛び上がる。それと同時に小太刀が引き抜かれる。

「ハアアッ!」

天野流『牙突・電式』でんしき

通常の壱式、斜め上から突き下ろす『弐式』、対空の『参式』、そして、間合いの無い密着状態から上半身のバネのみで繰り出す『零式』。だが、この電式は電のオリジナルであり、一言で言えば、『緋弾のアリア』の主人公、遠山キンジがホームズ戦などで率いた音速攻撃『桜花』に近い。

体のあらゆる部分で加速を同時につけ、一瞬だけ時速1250Kmの音速の攻撃を繰り出す事が出来る『桜花』という技に、左肩手平突き『牙突』を混ぜたのがこの『電式』。

この技は、たった一步を踏み込む瞬間で出せる一撃を繰り出す技なので、対空の『参式』でも繰り出す事の出来る。

だが、踏み込みのない『零式』では出せないのが玉に瑕。きず

だが、威力は本物だ。

「ぐッはああ!？」

重い衝撃が鹿丸の体に響く。

更に・・・

ビキイツ!!

「つぁッ!？」

電の左腕が悲鳴を上げる。

いくら艦娘の様に通常の人間より丈夫でも、音速の加速と威力を全一点に捧げるこの『電式』は、全力で使えば骨にヒビが入る程に強力である上に、外せば自滅してしまう技なのだ。

まあ、急所は外しておいたが。

先ほどの一撃で脇下にダメージを喰らい、気絶した様だ。

脇下は人体急所の一つ。ここに衝撃を加えれば、衝撃は肋骨に響き、肺の中の空気を押し出し、一時的な呼吸困難に追い込む事が出来るのだ。

「とりあえず、私の勝ちなのです」

誇らし気に、そういう電。

だが。

「あ……れ……?」

いきなり意識が朦朧となる。

体の力が失われ、バランスを崩し、前のめりに倒れる。

「ど……く……?」

どうやら、鹿丸のナイフに毒が塗り込まれていた様なのだ。

そのまま電の意識は深い闇に落ちた。

一方で、ここは階段前。

「おらああああ!!」

開始早々、右拳を振り上げる響夜。

鬼村はボクシングの構えを取ると、フットワークで左に回避。

そこからジャブを叩き込む。そう、ジャブなのだ。

「ぐおあ!」

それだけで吹っ飛ば響夜。

地面に背中から叩き着けられる。

「な、なんだ今のパンチ……!」

フットワークをしながらシユシユツとウォームアップ気味の空振りを出しながら、鬼村は答える。

「お前の事は噂でかねがね聞いている。お前は『るろうに剣心』の登場人物である『相楽左之助』に憧れ、かなり打たれ強い上に『《明王》安慈』の『二重の極み』を習得している。つまり、お前の拳は一撃必倒。一発も受ければそれだけでアウトだ」

そう、説明する鬼村。

「それにくらべ、こちらの一撃はお前を必倒させる事はできない。ならどうするか」

瞬間、鬼村が床に右足を大きく踏み込む。

「ッ!」

攻撃を予期した響夜はそれに備える。

そして鬼村は一息で響夜に接近。

「手数で押し切るのみ」

瞬間、とてつもなく重いアッパーカットが顎に決まり、体が持ち上がる。

その瞬間、怒涛のラッシュが叩き込まれる。

足の爪先から頭まで、連続でラッシュを叩き込まれ、ラストの一発が顔面に直撃する。

そして、壁に叩き着けられる。

「ぐおッあ・・!」

しかし、流石の事か、倒れない響夜。

「ほう、これで倒れないか」

「そう簡単に倒れるか」

響夜は首をコキコキならし、構える。

「今度はこっちの番だッ!」

走り出し、鬼村に接近。

「俺がそう簡単に攻撃を受けるとでも?」

「そうさ! だからこうするんだよ!」

サツと下がる鬼村に対し、響夜は階段の脇にあるガーゴイルの置物を破壊する。

「なに!」

それによって飛び散った破片が鬼村に殺到。

思わず顔面をガードする。

「しまッ・・!」

それが得策では無いと気付くも、もう遅い。

「しやらあああ!!」

「くッ!」

響夜が右手を振り上げ、それを鬼村の胸に叩き込む。

鬼村はとつさに左手を胸の前に置き、右手の『二重の極み』を受け  
る。

「な!？」

「ぐああああ!？」

瞬間、鬼村の左手が皮膚が裂け、そこから血が噴き出し、骨が砕け  
る。

「野郎、左手を盾にしたか・・・」

膝を着き、左手を右手で抑える鬼村を見下すようにそう言う響夜。

「・・・・・・・・ふ」

「？」

ふと、口角を僅かばかり上げる鬼村。

「右手だったら、俺は勝機を失くしていただろう」

「あん？そりやいったいどういう・・・!？」

いきなり、しゃがんだ状態から右手を思いっきり引く鬼村。

そして、立ち上がる勢いのまま、右手を回転させる。

「コークスクリュー」

それが響夜の胸に叩き込まれる。

「ぐああああああ!？」

その衝撃を諸に喰らい、また壁に叩き着けられる響夜。

「ボクシングに存在するパンチの技術で、発案者はボクシング選手の  
キッド・マツコイでな、肩、肘、手首を連動させて内側に捻る事で相  
手に与えるダメージを増大させる技だ。同じ原理の技に『正拳突き』  
という物があるみたいだが、俺はコークスクリューと呼んでいる」  
「がっはあ・・・くそっタレ」

流石に相当な威力だったらしく、かなり来ている様子だ。

だが、倒れない。

「この技を喰らって倒れなかったのはお前が初めてだ。だが、次で終  
わりだ」

ゆつくりと歩み寄ってくる鬼村。

その状況を打開するには、二重の極みを叩き込むしかない。だが、

相手はかわすのに慣れている。その上、今のこの状態で当てる事などできるのか……

鬼村が響夜を射程に捉える。

「終わりだ」

そして、右腕を振り上げ、コークスクリューを繰り出す。

その一撃が、響夜に直撃する。

その瞬間、響夜が左手で真正面からその拳を受け止めた。

「!?」

「捕まえた」

響夜は不敵な笑みを浮かべると、右拳を振り上げる。

鬼村はとつさに逃げようとするも、右手は響夜の左手に掴まれ、逃れる事は出来ない。

ならばガードしようとするも、すでに左腕は死んでいる。

回避どころか防御も不可能!

「オラァ!!」

二重の極みが撃ち込まれる。

「ガハアッ!?!」

口から血を吹き出し、体の中身が圧倒的衝撃に大きな損傷を受ける。

そのままゆっくりと、地面に倒れる。

「楽しかったぜ」

響夜は、フツと笑い、ドサツと床に倒れる。

「くっそ……結構効いたぜ……」

そのまま意識を闇に落とす。

## 時打VS達也

ベレッタの銃口が火を吹く。

左右誤差0・5秒だ。

それを時打は逆刃刀の逆刃で切断。

それと同時に駆け出す。

間合いでの勝負は確実にこちらが不利。

拳銃は飛び道具であるが故に、射程も長い。

それに比べこちらは刀。一応、間合いの外からの攻撃方法もあるが、それは使えば大きな隙を作る上に一時的に武器を手放してしまうことになる。

ならば、一気に距離を縮め、敵をこちらの間合いに入れる。

飛天御剣流の売りはその速度。

高速で動くが故に『神速』と呼ばれているそのスピードを生かし、接近する。

そして、時打は達也をこちらの射程に入れる。

右手に持った逆刃刀を体の左に持ってきて、横一線に薙ぐ。

それを達也は飛んでかわす。

そのまま銃撃。四発。

時打は右に走って回避。

(下手に龍翔閃や龍槌閃は撃てないか)

龍翔閃は相手をしたから相手を押し上げる技。一方で龍槌閃は空中から剣を叩き落す技だ。

一方で敵は空中でも攻撃が出来るが故にその様に一度放つと隙を作る技では下手に放てない。

そう考えている内に達也が地面に着地する。

そのまま銃撃を続行する。

それを横に走りながら回避し続ける時打。

「どうした？その程度か？」

達也が笑みの一つも浮かべずそう言う。

まさに、氷の闘争心。

「まさかな」

だが、時打はいきなり逆刃刀を振り上げる。

「!?」

それに一瞬、疑問に思う達也。

だが、今時打の足元にある物が眼に入り、とつさに防御に移る。

それは、ガトリングガンの残骸だ。

「土龍閃ッ！」

その残骸が物凄い勢いで達也に突っ込み、達也は防御はまずいと悟ったのかすぐさま転がって回避する。

その一瞬の隙を突いて、時打は接近する。

もう一度達也を射程に収める。

「くッ！」

達也は左のベレッタを時打に向けるが、いきなり時打の姿が消える。

「上か！」

否、飛んだのだ。

「ハアアッ！」

上からの叩き落とし、『龍槌閃』が、達也がとつさに下がった事で、その床が砕け散る。

しかし、直ぐに態勢を立て直し、すぐさま達也に接近。

達也が右のベレッタで時打の頭を撃ち抜かんと引金を引き、時打はしゃがんで回避。すぐさま銃口をしたに向けた達也はもう一度引金を引いて発砲。今度は体を右に向けながら左に体を移動させた事で回避する。その態勢のまま時打は剣を下段から振り上げ、達也は頭をさげて回避。だがすぐに刃を返し上段から振り下ろす。今度は達也が体を左に向け回避。右足をさげ、左のベレッタを時打に向けて引金を引く瞬間、時打がそのベレッタを弾き、左腕が大きく上がる。そのまま振り下ろすも達也が両手のベレッタを交差させて防ぐ。

そのまま鏢迫り合いに突入。

「く……」

「グ……」



ギリリツ、と互いの武器を押し付け合う。

だが、一瞬、達也が押し込み、そのまま押し切られる。

「うあ!?!」

態勢を崩す時打。

そんな時打に左のベレッタの銃口を向ける達也。

そして……

「……開いてる」

なんて不用心なのだろうか。

ちよつとした人質なのだからしつかりと監禁しなければならぬだろう。

翔鶴はそう思いながらも、寢室を出る。

道真がこの部屋を出て行つてから、すでに一時間近くが経過している。

外での戦闘の音が聞こえなくなり、扉が勢い良く開けられる音がしたので、きつと彼らが入つて来たのだろうと確信していた翔鶴だったが、その数分後に聞こえた銃声で、翔鶴は不安に駆られたのだ。だから、居ても立っても居られず、こうして部屋を出てきたのだが、まだ銃声が聞こえる。

「大丈夫ですよね、提督」

そう思いながら、彼女は廊下を走る。

肌足の上には今は冬。更にはここまで広いとなるとどこもかしこも暖房が効いている訳がない。大理石の床が冷たいのは当然の事。

だが、止まっていられない。

翔鶴は廊下を走り続ける。

そして、角を曲がった先に、扉が見える。

そこから連続して銃声が聞こえる。

そつと開ける。

目の前には、何故か更に階段。

しかし、どうやらどこかのパーティールームらしく、両側から下が見えそうだった。

そして、そこを左に曲がって下を見た瞬間・・・

ダアアアアンツ!!

「え?」

一発の銃声と共に一人の見覚えのある人物が、頭から血を引き出して倒れていくのが見えた。

黒い髪に、少し整った顔立ち。

黒が主な江戸時代の頃の様な服。

そして、その右手に持たれた、剣の反り側に峰があり、その反対に刃がある、逆刃刀。

それはまさしく・・・

「提督——!!」

翔鶴が悲鳴を上げる。

次の瞬間、時打が眼を見開き、左手を床に着き、そのままバック転して、床に着地。

片膝を床に着きながら、左手で頭の左側頭部を抑える。

生きてる・・・

そう安堵した翔鶴はその場にへたり込む。

「ギリギリの所で頭を右に傾けたか・・・」

そう関心する達也を他所に、時打は翔鶴の方を見る。

外傷の無い翔鶴を見て、ホッと安心した様な表情の後、ニツと微笑む様に笑う時打。

そして、立ち上がる。

「待っていてくれ」

そう、一言言った。

その言葉に、ほのかに体が火照るのを感じながら、短く。

「・・・はい」

そう、返事をした。

一方で、時打は翔鶴の姿を見て安心した事は本気だ。

だが、そもそも頭の側頭部をやられて、そこにある動脈を斬られている状態で大丈夫な訳が無い。

笑ったのは翔鶴を安心させる為の物でもあるが、ある意味ではやせ我慢とも言える行為だ。

もはや時間はかけていられない。

時打は逆刃刀を鞘に納める。

「？ 抜刀術のつもりか？」

「時間が無い。こいつで決める」

そう言い、時打は、間合いの外に達也を置いた状態で、抜刀術の構えを取る。

「本気か？ 間合いの外で抜刀術を狙うのは無謀だと思うが？」

達也が面白くないとでも言う様にそう吐き捨てる。

「なあ、お前。俺が床を砕くのに使った技の名前を知っているか？」

「？ あの技に名前があるのか？ 飛天童子」

達也は、そういった。

それを聞いた時打は、ニツと、不敵な笑みを浮かべた。

「なら、安心だ」

瞬間、時打は思いつきり体を反時計回りに捻じり出す！

今の時代、『るろうに剣心』の名前を知っている者はいても、その中身を知っている者は少ない。

それが意味する答え。それは……

「飛天御剣流抜刀術ツ!!」

そう叫び、時打は捻じれたバネが戻る様に体を回転させ、左手の親指で、刀の鏢を弾き飛ばすツ!!

「何!？」

これには流石に予想外だったらしく、反応が遅れるも、もう遅い。

「飛龍閃ツ!!」

鞘から矢の様に刀を弾き飛ばすこの技は間合いの外からの戦闘中に一回しか使えない貴重な技、『飛龍閃』。それ以降は警戒されて当たる確率はかなり下がってしまう。

だからこそ、こういう虚を突くタイミングで放つのが最大の得策。弾き飛んだ逆刃刀の柄頭が、達也の眉間に直撃する。

「まさか・・・刀その物を飛ばしてくるとは・・・」

あっぱれとも言う様に、その場に倒れる達也。

「ハア・・・ハア・・・お、終わった・・・」

その場に膝まづく時打。

先ほどの攻撃で、左側頭部の傷口から血が更に噴き出す。

「提督！」

翔鶴は急いで下に向かうべく、すぐ先にある階段を駆け降りる。

そして、先ほど道真が出てきた扉から出る。

「提督！」

もう一度、彼の仮称を呼ぶ。

そのまま走り寄ろうとした瞬間、誰かに後ろ襟首を捕まれ、後ろに引っ張られる。

そして、誰かの右腕が首に回され左側頭部に何かが押しつけられる。

「動くなア——！！」

「・・・は」

鬼村のコークスクリューのダメージで気絶させられた響夜。

だが、十分ぐらいで意識を取り戻し、起き上がる。

「おー、いてえ。寝たのにまだ痛むとかこいつのパンチとんでもないな」

「そうだな」

「ッ!?!」

いきなり後ろから声が聞こえ、振り向くと、そこには電を抱えた鹿丸がいた。

「な!？」

「わー! 待った待った!」

電を取り戻そうと急いで立ち上がる響夜に片手を突き出す鹿丸。

「こいつは今、俺のナイフに塗り込んだ毒で麻痺ってるだけだ。本当は致死量なんだが、どういう訳か、死なないんだよなコイツ」

と、電を見る鹿丸。

よく見ると、規則正しい寝息を立てて寝ているだけだった。

「それに、負けた相手にわざわざ動けないところで止めと刺す後味の悪いことなんてしねえよ。それに、解毒薬も飲ませたし、そろそろ・・・」

「ええ、おかげでよく聞いたのです」

「え?」

突然、電が起きたかと思うと、腹に肘鉄を喰らい、地面で悶える鹿丸。

「ここまで運んでくれてありがとうございます」

「おま、わざわざ仇で返す必要ないだろ・・・」

ふん、とそっぽを向く電。

一方で、鬼村のダメージは相当のものらしい。

「ぐ・・・う・・・」

「おい、生きてるか?」

響夜がよろよろと鬼村に歩み寄る。

どうやら、まだ大丈夫のようだ。

「ああ。生きてはいるが、左腕はまずいな・・・誰か、棒とか持っていないか?」

鬼村がそう聞くと、電は仕方ないかのように、小太刀を鞘ごと帯から外し、鞘から小太刀を抜く。

そして、どこからか布を取り出し、鞘の方を鬼村の腕に押し当て、布で巻く。

「すまん、娘」

「戦意の無い者には手を貸せ。お兄ちゃんの教えなのです」

そうこう言っている間に応急処置が終わり、立ち上がる鬼村。

「さて、俺らは時打たちの所に行くがどうする？」

と、階段の前に立つ響夜と電。

「俺たちも行こう。どちらにしろ、俺はこれじゃあ危害を加える事など出来ん」

「俺の方はいつの間にか投げナイフ没収されとるからな」

気が付くと、電の腹に鹿丸が太ももに巻いていた投げナイフのホルダーがあつた。

「危険物はボツシユートです」

「シユートしてないだろ」

「いいのです！」

その様なボケ突つ込みをしながら、彼らはこの先にあるパーティーホールに向かう。

そして、扉を開けた瞬間……

「動くなア——！！」

『!?』

翔鶴を捉えた道真が彼女に黒いリボルバー拳銃を押し当てている所だった。

「!? お兄ちゃん!?!」

「電」

時打が電の声で振り向く。

左側頭部を負傷したようで、左手で抑えていた。

「達也……」

「気絶してやがる……」

一方、時打の後ろで大の字になって気絶している男が一人。

どうやら達也というらしい。

「野郎……」

響夜は道真の行為に激昂していた。

「お前らア！今動いたら、この女を殺す！いいな！殺すぞお！」

先ほど、時打の一撃で伸びていた筈の道真。なぜ奴がこんなに早く

気が付いたのかというと、答えは単純明快、時打が手加減したからだ。逆刃刀といっても、威力を誤れば、相手を殺しかねない武器と同じだ。

だから、こういうひ弱な人間には手加減をしたのだが・・・

「お前・・・」

時打が立ち上がるとした瞬間・・・

「ッ!？」

ズダンッ!!

とつさに横へ転がり、飛来してきた弾丸を回避する。

「動くなど言っただろお!!」

「だめだ。完全に錯乱していやがる」

完全に血走っている道真。

「どうやら、手加減したつもりが、頭のネジを一本吹き飛ばしてしまったようだ。」

「ヒヒッ、どうだあ、この俺様が優位に立っている。この女がいれば、俺は無敵だアア!ヒヤハハハハ!!」

狂ったように笑う道真。

「て、提督・・・」

涙目になって助けを求めるように時打を見る翔鶴。

「く・・・」

電も飛龍閃を撃てない事は無い。だが、今鞘は鬼村の折れた左腕を補強するために使っており、小太刀の方は今自分の右手にある。

投げれば当てられないことは無いが、だが、それまでに奴が翔鶴を撃つまでに間に合う保証は無い。

詰んだか・・・?

次の瞬間ッ!

「ぎゃあ!？」

いきなり、何かの意を決したのか、翔鶴が道真の手を噛んだ。

それにより、道真の拘束を逃れる翔鶴。

「電ア!!」

時打の怒号が響き、電は小太刀を振りかぶる。

「しゃあんならうおおお!!!」

高速で回転しながら道真に向かって飛んでいく電の小太刀。

「この女ア<sup>アマ</sup>」

道真がそれには気付かない様子で翔鶴に銃口を向ける。

間に合わないッ!

道真が引き金を引き、弾丸が発射される。

それがまっすぐに翔鶴の背中を狙う。

だが、そこへ電の小太刀が飛来し、弾丸の軌道を逸らす。

「ナア!?!」

これに驚く道真。

「提督!」

「翔鶴!」

走ってくる翔鶴を抱きとめる時打。

だが……

「終わりだア!」

道真は往生際悪くまたしても銃口を向ける。

「死ねえ!」

「く……」

「ひっ!」

翔鶴が小さく悲鳴を上げた瞬間……

ダアアアンツ!!

一発の銃声が放たれた。

血が飛び散る。

「な!?!」

「え!?!」

響夜と電の表情が驚愕に包まれる。

それは、鹿丸も鬼村も同じだった。

そして——時打と翔鶴も。

血を流したのは道真だ。



そして、そんな奴に弾丸を打ち込んだのは――達也だ。

「達也!?!」

「ふん」

時打が彼の名を呼び、達也はつまらないものでも見るかのように無表情だった。

そして、道真は床に仰向けになって倒れる。

「……殺してないよな?」

「とっさだったから、心臓に当て損ねた」

ベレッタをコートの下のホルスターに入れる達也。

「もとより、こんな男の事は単なる雇主。護衛の任務が失敗した時点で契約は破棄されたも同然だ」

「容赦ねえなおい……」

響夜が顔を引きつらせながらそう言う。

「そんな事より、さっさと行ったらどうだ?じきに警察が来る」

達也が、時打の方を見る。

「え?!?!」

そこで思い出したのか、大いに慌てた表情になる時打。

「そうだった!急いでここから出ないと!」

時打は軍人だが、その軍人がこんな犯罪染みたことをしていたなんてバレればすぐさま解任されて終わりだ。

その上、艦娘である電もいる事に加え、一般人扱いされている響夜も協力していたなんてバレればもつと立場が悪い。

「裏道がある。そこを使え」

達也が指さす場所。それは、翔鶴がいた寝室のある上の階だ。

「良いのか?」

「どつちにしろ、回転式機関砲ガトリングガンなんて物を買っている時点でここは終わりだ。それに、俺はそんな男に雇われていた責任を取らなければならない」

地味にカツコいいセリフを吐く達也。

「そうか……ありがとう」

「礼を言っている暇があるならさっさと行け。それと捕まるな」  
そう言い残した達也を置いていき、時打は翔鶴を横抱きする。

「て、提督!」

「ほら、行くぞ」

「あう」

俗にいう。お姫様抱っこである。

当然、逆刃刀は回収した。

電の鞘の方は、ガトリングガンの残骸から出てきた鉄棒で代用したから問題は無い。

そして、時打たちは、道真邸を脱出した――。

## 帰還

マルマルマルマル——深夜零時。黒河市第五区。  
佐加野診療所。

そこを任されている医師、佐加野涼子は机に向かって何かを書き留めていた。

「えーつと。今日は風邪の子供が二人、怪我をした老人一人ね。あとは・・・」

ドンドンドンツッ!

「?」

突然、強く叩かれる扉。

「誰かしら?」

そう思いながら、涼子は診療所の扉に向かう。

まだ強く叩いてくる。

「はいはい、今開けますよ」

そして、扉を開けた。

瞬間に落胆。

「よ、姉ちゃん」

「・・・」

ピシャンツッ!

「あー、ばからし」

そう口に出してから、ふと、自分の弟、佐加野響夜の左肩に誰かがもたれかかっていた事を思い出す。

瞬間、勢いよく振り向いて、勢い良く扉を開ける。

そして、訝しむような眼で見ってくる響夜を他所に、彼の左側でぐったりしている黒い武士服の男を見つける。

「何があったの?」

よくみると、腰に刀を差していた。

他にも、彼の背には顔だけをこちらに向けて苦笑いしている白髪の少女、響夜の右側に小学生ぐらいの身長の子が一人いた。

「その前に怪我人いるのにいきなり扉を閉じた事を謝れ」  
「うっさい。そもそもアンタが何か言わないのがいけないでしょう」  
「が」

「その前に扉閉じただろ!?!」

ぎゃーぎゃーと口喧嘩を始める涼子と響夜。

と……

「おい……」

ふと、黒武士の男が顔を上げて、左側面から血を流しながら、彼らの喧嘩を止める。

「やばいんだ……喧嘩してないでさっさと見てくれ……」

「お願いします」

白髪の少女もそういう。

それに溜息をつく涼子。

だったのだが……

「つて、アンタ、動脈やられてるじゃない!?!」

「顔色が悪い男の容態を見て、慌てて、彼女は四人を診療所に入れた。」

「ふうん、それで道真邸を潰してきたと」

涼子は呆れながら、タオルを絞る。

黒武士の男と同じ服装の女の子、海軍の天野時打と駆逐艦の電は、部下ともいえる艦娘の翔鶴を助ける為に山の裏にある鎮守府からこの黒河市にやってきた。

そこで響夜と出会い、協力関係となり、そして情報屋を通して翔鶴と思われる道真邸に突撃。

時打の頭の負傷はその時のものらしい。

その後、翔鶴を救出。そして脱出したはいいが、途中で時打に頭の怪我で失血、限界がきて途中で動けなくなり、仕方なく、彼が抱いていた翔鶴を背中におぶり、時打を担いでここまで来たらしい。

「まあ、そんな所だ」

「ハア……喧嘩好きの弟がいると、どうしてこうも迷惑事ばつか持つ

てくるのかしら……」

響夜に包帯を巻きながら、そう呟く涼子。

「あ、あの……」

そこで白髪の少女、翔鶴が少し遠慮しがちに涼子に声をかける。

「この度は、助けていただいたありがとうございます」

「ああ、いいのよ。ろくでなしな弟だけど、その友達が怪我をしたら治してやるのが、姉の務めだからね」

と、響夜の包帯を巻き終えると、バンツと響夜を叩く。

「はい、終わったわよ」

「ありがとな、姉ちゃん」

「今日は泊っていきなさい。もう遅いし」

「あ、ありがとうございます」

ペこりと、お辞儀をする電。

「礼儀正しいわね」

よしよしとそんな電の頭を撫でる涼子。

一方で時打。

現在、怪我の治療をした直後に寝てしまい、規則正しい寝息をたてて寝ていた。

「一応、大丈夫なんですよね？」

翔鶴が、そんな彼を心配そうに眺めながら、そう聞く。

「明日には起きれると思うわ。それに、いつまでも鎮守府を空けとく訳にもいかないでしょ？」

「まあ、はい」

因みに、隠そうと思ったが、治療の際、すぐさま時打の身分証明書を見られたので誤魔化す事ができなかったのだ。

いまごろ、鎮守府の皆は心配している頃だろう。

「では、提督が起きたら、すぐにここを出ます」

「ええ。その方が良いわ」

涼子は微笑み、そう言う。

翔鶴と電が寝て、診察室には、響夜と涼子しかいない。

「それで、これからどうするの?」

「どうするって何が?」

響夜は疑問符を浮かべながらそう聞き返す。

「どうって、この辺り一帯を支配していた組織が落ちたのよ?それでどうしてあなたが狙われないと言われないの?」

「う……」

よく考えてみると、この黒河市はある組織によって支配されている。

それは警察でさえ手出し出来ない程のだ。

一見して、街は平和そうに見えるが、裏ではその組織の傘下たちが数々の違法行為をやっている。

その傘下の一つを潰したのだから、その組織に狙われていてもおかしくない。

「特に道真の方は武器の買い取りを任されている人間よ。これで、ルートの一つが潰れたわ。おそらく、奴らはどうしても貴方たちを狙うわ」

「なに、そんなときや返り討ちにすりゃいいだけだ」

「貴方ね……その組織の最高幹部の実力を知ってるの?」

「……」

それは響夜でも知っている。

組織の最高幹部は全部で十人。

正確には、実力面で認められた人材ばかりだ。

一人、一騎当千の力を持つらしい。

「例え、二重の極みを習得したアンタでも、そいつら一人相手をするのがやっと。話を聞く限り、あの時打って人でも連戦はキツイと思うわ」

「じゃあ、どうしろってんだよ?」

響夜は不貞腐れる様にそう聞き返す。

「それはアンタが考えなさい。私はこれでもこの街に唯一の医者よ。そう簡単に相手も手出し出来ない筈よ」

「そうだな。姉ちゃんの腕に叶う奴なんている訳ないな」

ニツと誇らしそうに笑う響夜。

「さて、そろそろアンタも寝なさい。考えるのはその後でも良いでしょ」

「そうだな」

そう、立ち上がり、響夜は診察室を出て行く。

「おやすみ姉ちゃん」

「ええ。おやすみなさい」

マルヒトマルマル——深夜午前一時。

容態が安定して、顔色も良くなっていく時打。

今はぐっすり眠っており、起きる事もなさそうだ。

一方の翔鶴は、まだ寝られないのか、そんな時打を見ていた。

「……」

——あの時、ただ、提督が助けに来てくれた事に、喜びしか感じられなかった。

彼女を建造した、時打が着任する前の前の提督。

その人は、優しくかったし、誰よりも、自分たち艦娘の事を気遣ってくれた。

だけど、前に出る事なんて無かった。

深海棲艦との闘いは、あくまで自分たち艦娘の役目。

ただの人である人間がする事では無い。

だから、提督というのは、守られて当然の存在だと、翔鶴は思っていた。

もちろん、そんな彼に恋をする艦娘はいた。翔鶴や瑞鶴はそうではなかったが。

だけど、彼の転勤が決まり、次に来た提督によって全てが崩れた。

艦娘を道具、あるいは自分の娯楽の為の者だと思い、何人もの艦娘を、戦績欲しさに沈めていった。

気付けば、自分と瑞鶴を含めたあの頃の全ての艦娘が消えた。

そして、周りにはあの提督によって建造された艦娘しかいなかった。

ただ、その艦娘たちも、何人もが死んだ。

そして、失った。

長門は陸奥を。

暁たちは電を。

川内と神通は那珂を。

大切な誰かが消えて、心の中に、どこか、ぽっかりと穴が空いてしまった者たちが、沢山いた。

そんな中に、沢山の提督が来た。

皆、翔鶴たちの提督の事を知らない。だから、何度も追い返し、提督がない日々が一年近く続いた。

そして、そんな中、彼が来た。

長門の放った砲弾を刀で斬り、その場にいる艦娘たちを恐怖させた。だけど、彼が自分たちに放った言葉は、また、衝撃を与える物だった。

『生きる。何が何でも生きる』

翔鶴は、その時はまだその言葉の真意を知らなかった。

ただ、恐ろしかった。

いつ、彼が自分たちに危害を加えるか、それが怖かった。

だから、彼が、助けに来てくれた時は、本当に、嬉しかった。

いつの間にか戦う事も出来なくなり、存在意義がなくなった自分を、助けに来てくれた提督。

自らの立場が危なくなるのを覚悟の上であの豪邸を襲撃し、怪我を負ってまで、自分を助けに来てくれた提督。

その時は、また、瑞鶴たちと一緒に暮らせるのだと思った。

だけど、よく考えてみると、あの時の自分の気持ちには、もう一つ、ある感情があった。

正に、一目惚れともいえるべき感情が――

「~~~~!!」



そう自覚してしまうとつい枕に顔を埋めてしまう翔鶴。

ただ、確かに、あの白コートの男との戦いの時にみせた笑みに、翔鶴は体が火照るのを感じた。

「…これが『あの人』が感じた、『恋』という感情なんでしょうか…？」

答えてくれる人はいない。

ただ、そう、信じる自分がいるのもまた事実。

「…これからどうしよう…」

だが、一つ、疑問に残る事があった。

あの白コートは、時打に向かって一度だけ言った『飛天童子』という言葉。

あれは一体、どういう意味なのだろうか？

そんな疑問が、どうしても、心に残ってしまう。

そう思いながら、彼女は彼の寝顔を見ながら、眠りに落ちた。

マルキュウマルマル——午前九時、朝。翌日。

『じゃあ、翔鶴は助けられたのか!？』

長門が、携帯越しにそう問いかける。

「ああ。ちゃんと助けられたよ」

診療所の居間にて、時打が自身の携帯の向こう側にいる長門に言う。

『そうか…良かった…』

時打がそう答えると、長門は心底安心した様にホッと息を吐くのが聞こえた。

と、突然、何か奪い取るような音が聞こえた後、威勢の良い、されどどこか焦っているような声が聞こえた。

『ねえー翔鶴姉と代わってー今すぐー!』

どうやら、誰よりも姉の安全を確認したいようだ。

「分かった。ほら、翔鶴」

「はい」

時打が自分の携帯を翔鶴に渡し、翔鶴がそれを耳にあてる。

「瑞鶴?」

『翔鶴姉! よがっただあゝゝゝ!!』

「もう、瑞鶴ったら」

ここからでも聞こえて来るほどの鳴き声が聞こえ、心底安心する時打。

昨夜、時打たちが起こした道真邸襲撃事件。

それによって、見つかった違法武器買取の疑いによって、道真とその部下。更には彼に雇われていた者たちまで拘束されてしまい、文字通り、壊滅してしまった。

当然、時打たちと対決した達也たちも拘束された。

その事はすぐに道真の豪邸のある第七区に知れ渡り、その周辺の五区、四区などにも知れ渡った。

これには多いに動揺する人もいれば、社会のゴミがいなくなったと言う人もいた。

とにかく、その五区を支配していた道真がいなくなった事で、五区の住民は少し混乱した程度で、それほどの大騒ぎにはならなかった。

そう、一般人は……

「ただいまなのです」

街の様子を見に行っていた電が戻って来た。

「お、おかえり電」

「様子どうだったよ」

響夜が電に問う。

「いましたよ。団子屋でお団子食べてたり、話してる振りして見張つてたりとあちこち」

「まずいな……マンホールまで辿り着けるか……」

翔鶴は向こうで時打の携帯で鎮守府にいるであろう艦娘たちと話

し合っている。

「ほとぼりが冷めるまで、しばらくここにいる方が良いかもしれないけど……」

「鎮守府をしばらく開ける訳にもいかない。どうしたものか……」  
時打が考え込む様に腕を組む。

「とにかく見つからない様にならないといけないわね」

と、響夜の姉の涼子がなにやら包み持ってきて現れた。

「翔鶴ちゃんは……と、今は電話中か」

「それは？」

時打が聞くと、涼子が包みの中を開ける。

すると、そこには翔鶴に似合いそうな白い着物が出てきた。

「翔鶴ちゃん用の着物よ。流石にあの恰好のままじゃダメでしょ？」

確かに、翔鶴の恰好は普段、外では着ないような弓道着だ。

普通に目立つし、もしかしたら翔鶴の容姿について何か聞かされて  
いるかもしれない。

「ただでさえ翔鶴、美人なんだしな」

「ふえ!？」

「ん?」

突然、素っ頓狂な声が聞こえ、振り向いてみると、通話が終わった  
のか携帯を持って突っ立っている翔鶴がいた。

その顔は、真っ赤だった。

「え……あの……その……」

「ん?どうした翔鶴?」

「え!?! あ! いえ! なんでもありません! それとこれお返しします!」

「お、おう」

妙に慌てながら携帯を返してどっかに行ってしまう翔鶴。

「?」

(気付いてないですね)

(鈍いな)

(鈍感ね)

「何?俺もしかして気に障る事いった?」

三人の視線に冷や汗をかく時打。

「鈍感」

「鈍男」  
にぶお

「気付けバカ」

「何故か罵倒された!？」

若干ダメージを受ける時打であった。

「わあ、ありがとうございます」

「良いのよ。それぐらい」

あれからなんとか落ち着いた翔鶴は、涼子から貰った着物を着ていた。

「提督、電ちゃん、どうでしょうか?」

早速二人に見せに行く翔鶴。

「似合ってると思うのです!」

電が笑みを浮かべながらそう褒める。

「ああ、似合ってるよ」

「あ、ありがとうございます」

なんでか知らないが、彼に褒められると心臓が高鳴ってしまうのはどうにかならないだろうか?

まあ考えた所でどうにもならないが。

「おい、そろそろ良いか?」

響夜が何故か大きな包みを持ってやってきた。

ちなみに服装は悪一文字のボロコートの代わりにスタジヤンである。

「あー、あれ着てねえと落ち着かねえな」

「どうしたんだ?それ」

響夜の包みに疑問を持つ時打。

「え?ああ、しばらくお前らの所に世話になるからその荷物」

「へえ・・・て、ええ!?!」

今、とんでもない事を言わなかったかこの男は。

今、しばらく世話になると言わなかったか？

「なんでだよ!？」

「なんでですか!？」

見事にハモる海軍組三人。

「仕方無いでしょ?響夜がここにいると、ヤクザの面子が押しかけてきて乱闘になるからしばらく離れて暮らしてるのよ」

「そ、そうなのか?」

時打たちが目を点にしてそう聞き返す。

「ああ。俺も姉ちゃんに悪いと思ってるからな。仕方ないんだわこれ」

うんうんと頷く響夜。

「どうします提督?一般人を鎮守府に、それも世間から隠されている所に招くなど・・・」

「既に山裏の鎮守府の事はこいつにバレているし、ここの情報屋にはもうとつくにバレてるみたいだし、別に上にバレなきや問題ないだろ?」

「そんな事言ってるとう本当にバレてしまうんじゃないんですかお兄ちゃん!？」

ちなみに、長門たちにはこの事を話していない。

理由はすぐさま翔鶴に代わったからだ。

「と、とにかく長門に聞いてみよう・・・」

と、また携帯を取り出し、長門に事の顛末を話す。

「——と、いう訳なんだが・・・」

『まあ・・・一応、悪い人ではなさそうだが、大丈夫なんだろうな?』  
怪しむような長門の声が電話越しに聞こえる。

「大丈夫だよ、見た目はあれだが内心良い奴だから」

『まあ、お前がそう言うならそうなんだろうが・・・翔鶴や電は良いのか?』

「はい。大丈夫なのです」

「あれでも恩人ですから」

電と翔鶴がそう言う。

『そうか、分かった。先にこちらから皆に説明しておく。あとは、無事に帰って来い』

長門は最後にそう言い残し、電話を切った。

「よし、良いそうだ」

「よっしゃー！悪いな」

ニツと笑う響夜に、つられて笑う時打。

「そうと決まれば、あとは実行あるのみだ！」

と、荷物を担ぐ響夜。

「そうだな。準備は良いか？翔鶴、電」

「はい、いつでも行けます」

「はいなのです」

着物に着替えた電を見て、準備OKだという事を確認する時打。

時打も、黒の武士服から藍色の武士服に着替えている。

「よし、それじゃあ行こうか！」

「そのマンホール場所はまだなのか？」

「ああ。もう少しかかる」

追っ手の目を掻い潜りながら、彼らは鎮守府に続くマンホールに向かう。

もし、マンホールに入る所を見られれば、そこから敵がなだれ込んでくるかもしれない。

それだけは避けなければならぬ。

一応、翔鶴は布で顔を、髪は着物の下に隠している。

だが、一応誰にも見つかる事なくマンホールまでにつき、入る所も見られていないので、安心した。

そして、薄暗い地下水道を突き進んでいき、そして、目の前に梯子が見えてきた。

「ここだ」

「いよいよか。どんな所なんだろうな？」

「まあ、良い場所とだけ言っておく」

そして、梯子を上り、マンホールを開ける。

その先は、黒河鎮守府の裏手だった。

「ここが？」

「正面はこの先だ。行こう」

四人が出て、そして、海岸が見える、正面に向かった。

そして……

「翔鶴姉！」

「わ!？」

瑞鶴が勢い良く翔鶴に抱き着く。

「翔鶴姉！翔鶴姉え！」

「瑞鶴……瑞鶴……！」

きつく抱きしめ合う姉妹。

その眼からは、涙を流していた。

「司令官——電——！」

「ん？雷か」

更に、身長が電ぐらいの似た顔をした少女、雷がやってきた。

「おつかれ」

「はいなのです」

「おう」

そして、もう一人。

秘書艦の長門だ。

「おかえり、提督」

「ああ」

彼女は時打に挨拶をすると、彼女は響夜の方へ向かう。

そして、彼の前で止まると、敬礼をする。

「この黒河鎮守府で秘書艦を務めている長門だ。今回の件で、貴殿の協力に感謝する」

「いや、そんな堅苦しいのは無しにしてくれないか？むず痒くて仕方が無い」

「今は少し我慢してくれ。そして、貴殿をこの鎮守府でかくまうとい

う話だが、全員の了承を得た」

長門は、敬礼を解き、その右手を響夜に差し出す。

「ようこそ、黒河鎮守府へ」

「おう、よろしく」

響夜も、ガシツと、長門の手を握り、握手をする。

ふと、鎮守府側からいくつかの足音が聞こえてきた。

振り返ると、そこには、この黒河鎮守府に在籍する、たった約三十隻の艦娘たち。

「提督」

長門が後ろから声をかけてくる。

「改めて、歓迎会だ」

「え？」

一瞬、茫然とした時打を他所に、長門は彼女たちの元へ。

そして、先頭に立つと、声を挙げた。

「天野司令官に敬礼ッ！」

そして、全員がバツと敬礼をする。

「ッ……」

その光景に、少し圧倒される時打。

中には、少しぎこちない者もいる反面、自分に信頼を置くかの様なしつかりとする者もいた。

「司令官」

ふと、時打の傍らにいる電が仮称で呼びかけてくる。

「何か言う事は？」

気付けば、翔鶴や瑞鶴、雷もやっていた。

その光景に、フツと笑った時打は、この場にいる全員に向かって言い放つ。

「俺が、お前たちに告げる命令はたった一つ」

沈めはしない。悲しませたりなどしない。

「生きる。何がなんでも生きる。だけどそれを理由に、仲間を見捨ててはならない。必ず、皆で生きる。鎮守府は、お前たちの家なんだから」



この刀、汝らが為に――

## 第六駆逐隊編

### 黒河の日常

——爆音が聞こえる。

それは、とある少女の背負う機械的な物から伸びる砲台からだ。体中から血を流し、所々、衣服が破れている。

そして、少女らしからぬ咆哮を上げ、少女は周りいる『敵』を屠る。それはもはや『暴走』としか言いようのない程の狂気ぶりだった。

敵に近付いては、殴り飛ばし、その口に砲台をぶち込み砲撃して頭を吹き飛ばす。

魚雷を敵の体に埋め込ませ、爆発させる。

艦載機の攻撃など最初から無視して敵に特攻する。

腕を敵の体に突き刺し絶命させる。

敵が全滅してもまだ飽き足らず、少女は周りの岩などに八つ当たる。

それが、まさか自分の妹たちを攻撃していると思わず——

——そして……

ざしゅ……

右腕に、ぬめりのある感触と、何か、肉の塊を貫く感触で、我に返る。

顔を、右に向けると、そこには、自分を抱き締める、末の妹の姿。

そして、その心臓の辺りを、自分の右腕が貫いている事を……

『いふ……』

彼女が吐血する。

少女は、恐れ声を漏らしながら、ただ、狼狽する事しか出来なかった。

『……怒るのは、別に良いけど……あまり、皆を巻き込んだんじゃ……



「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」  
酷く顔色が悪い状態で、暁は、水道で口をゆすぐ。

——今日は一段と酷い夢を見た・・・

ふらつく足取りのまま、トイレを出る暁。

「暁？」

ふと、後ろから声をかけられる。

「司令官・・・」

「どうした？顔色悪いけど」

そこには、左手に刀・・・刃が逆さまになっている刀、逆刃刀・深鳳が握られており、服装はいつもの白い軍服ではなく、白いパーカーに少し大きめのジャージといった服装の、この黒河鎮守府の提督、天野 時打が立っていた。

「別に、大丈夫よ。そういう司令官は、どうしてこんな時間に？」

「そうか、言ってなかったな。鍛錬だよ。こうしてないと、体が鈍ってしまうからな」

時打はそう言って苦笑する。

「そう・・・」

「暁の方も、少し休んでから朝食取りに来いよ。そんな状態じゃ、少しやばいかもしれないからな」

「そうね。では、そうさせて貰うわ」

そうして、暁は時打に背を向けて歩いて行ってしまふ。

「・・・」

自室に戻り、ふと、左の下のベッドを見る。

「すー、すー」

いつもは、このくらいの時間に起きるはずなのだが、どうやら、今日は休みの日らしい。

「・・・電」

そんな寝息を立てる電の頭を撫でる暁。

「・・・めんなさい」

暁は、そう一言呟き、自分のベッドに戻った。

マルキュウマルマル——午前九時、二月中旬。

執務室にて、時打と長門。

それと響夜、翔鶴、瑞鶴。

「はいこれで終わり」

「本当にあれだけの量を一時間で終わらせちゃったよこの人……」

時打のあまりの仕事の早さに唾然とすぐ瑞鶴。

一方の翔鶴は何度か見ているので驚く事なく、笑っている。

響夜にいたっては興味無しだ。

「慣れれば仕事が早く終わってくれて私も楽なものだ」

「執務を全部自分だけでやるなんて……」

ちなみに、何故三人がいるのかというと、単に暇だからだ。

翔鶴は別の理由もあるが、それは御存知の通りだろう。

「さて、もう俺が着任して二週間、響夜が来て一週間だな……」

時打が椅子にもたれかかりながらそう呟く。

「そうだな……」

そこへ、扉の方からノック音が聞こえた。

「大淀です」

「はいっってください」

時打がそう答えると、扉の方から大淀が入ってくる。

「どうした？」

「艦隊司令部より、入電です」

それを聞いた全員が緊張につつまれる。

「……出撃か？」

「はい」

出撃。

それには二種類のパターンがある。

一つは単独出撃。<sup>クエスト</sup>

提督が本部へ伝令、許可を貰い出撃し、それに見合った戦果を挙げれば、それなりの報酬を受け取れるという物。

もう一つは指令出撃。<sup>ミッション</sup>

これは、本部側からの指令を受け、出撃するというもの。これは、自由に受けられるという訳では無く、更に強制的な物で、絶対に受けなければならぬのだ。その分、報酬が単独出撃より高い。

特例で拒否する事もできるが、その艦隊の評価が下がる事は覚悟しておいた方がよい。

「それで、内容は？」

「日本海に出現した深海棲艦の撃退、あるいは撃滅です」

「そうか・・・」

時打は、この艦隊の艦娘たちには出撃させていない。

その理由は、しばらく提督がいなかった事によるしばらく実戦に出られなかった事による実力の低下。

それによる異常事態<sup>イレギュラー</sup>への対応能力の低さを考えたからだ。

それによって被害が出てしまい、最悪轟沈も考えられたからだ。

「編成は自由。期間は三日間です」

「三日か・・・よく考えないとな・・・」

「そこまで悩む事なのか？」

そこで響夜が口をはさむ。

「普通に火力デカイ奴そろえて掃討してしまえばいいだろ？」

「グハア!？」

『え?..』

その響夜の答えにいきなり吐血したのは長門だ。

そのまま蒼白になりながら地面に四つん這いになる。

「お、おいどうした長門?」

「い、いや・・・思い出したくもない黒歴史を思い出して・・・」

「そ、そうか・・・」

「なんか悪いな・・・」

その長門のダメージに引いてしまう時打と響夜。

「・・・何があつたんだ？」

「それは聞かないで下さい・・・」

大淀がやれやれとでも言う様に頭を押さえる。

「とりあえず、編成は考えておくから、下がっていいぞ」

「分かりました。では後程」

そう言つて退出する大淀。

ふう、と息を吐く時打。

「・・・長門、さつき聞いた通りだ」

ごくり、と唾を飲み込む長門。

「三日もあるんだし明日考えようか」

ガタンッ！

「今じゃないのか!？」

「あぶな!？」

思わず殴りかかつてしまう長門。

それを間一髪でかわす時打。

「別に良いだろ。力りきんでると、間違つた命令を出すかもしれないしさ」

「確かに、お前は今回が初の出撃任務だし、ここの艦娘にとつても久しぶりの出撃だ。気楽にしたい気持ちは分かるが、もう少し責任感をだな・・・」

「今はまだ重要任務を任せられない艦隊なんだから、気長にやっさいこうぜ。せんべい食うか？」

「まあ、そうだな・・・貰おう」

と、せんべいを食べ始める二人。

ちなみに、この鎮守府の裏手にある山の向こう側にある黒河市なる街の駄菓子屋で買ったものだ。

「あ、私も・・・」

「俺にもくれ」

「良いぞ」

翔鶴も響夜も食べ始める。

ズー、とお茶を一斉に飲み、ぷは、と声を漏らして一服する。  
「とりあえず編成は明日考えよう」

と、外を見る時打。

「・・・」

と、そこでふと黙ってしまう時打。

「どうかしたんですか？」

翔鶴がその様子の時打に話しかける。

「いや・・・」

立ち上がった時打は、窓を開け、しばらく空を見上げる。

「・・・雨が降りそうだな」

と、呟いた。

「雨？」

響夜がそう聞き返す。

「湿気が多すぎる。冬にしては珍しいな」

「そうなのか？まさか」

響夜がそう小馬鹿にする様に笑う。

それもそうだろう。

なんてたつて空は雲一つ無い快晴の空なのだから。

「んー、振りそうなんだがな・・・」

と、窓を閉じる時打。

「ま、今日は鎮守府の中で過ごすか」

と、呟き、時打は、長門と共に執務室を出た。

向かったのは、食堂だった。

「あ、司令官」

「お、吹雪か」

真っ先に気付いたのは吹雪だった。

「おはようございますー！」



「おはよう。演習の調子は良いか？」

「はい！司令官のお陰です」

この艦隊で、翔鶴と長門以外で最も和解した艦娘といえば、艦種問わず吹雪だろう。

その証拠に満面の笑みで時打に微笑みかけている。

「おはよう司令官」

「叢雲か。おはよう」

その後ろから来たのは、吹雪と同じ『特型』あるいは『吹雪型』の五番艦の叢雲。

俗にいう、ツンデレである。

「何しに来たのよ」

「暇だからだ。別に仕事終わらせたんだから、いても良いだろ？」

「まあ、いいけど・・・」

うぐ、と唸る叢雲。

「そういえば電・・・第六駆逐隊の皆は見なかったか？」

「響と雷ならさつき来て、電ならここに来る途中の廊下ですれ違ったわ。ただ、暁は見てないわね」

「そうか。ありがとう叢雲」

「べ、別に褒められるような事じゃないわ」

どうやら、この艦娘は褒められる事に慣れていない様だ。

それも提督限定で。

しかし、暁については気になる事がある。今朝、見かけた暁の様子。

とても顔色が酷く、先ほどトイレから出てきた所から見ると、吐いていたようにも見えた。

過去に何があった？

「あ、提督」

「ん？鳳翔か」

ふと、そんな思考を断ち切る様に後ろから声をかけられ、振り向くと鳳翔がいた。

「おはようございます」

「ん、おはよう。今日は遅いな」

「ええ、少し、駆逐艦の子たちの面倒を見てまして」

「ん？睦月型の？」

「はい」

ここで少し説明しておくが、この鎮守府に籍を入れている艦娘は、他の鎮守府に比べてかなり少ない。

前任の提督が轟沈させ過ぎた上に建造をしなかった事が重なった結果である。

なので、今この鎮守府にいる艦娘は、たった三十ぐらい。

鳳翔を入れた空母が四隻。

長門を入れた戦艦が四隻。

天龍を入れた軽巡が八隻。

重順が四隻。

駆逐艦がたった十二隻と言った数だ。

名簿化している余裕は無いので、その事はまた後程。

「司令官」

「ん？不知火」

「おはようございます」

「おう、おはよう」

『陽炎型』の二番艦の『不知火』は素っ気なく挨拶をするとさっさと今日の朝食を選びに行ってしまった。

「そういえば・・・暁ちゃんをみませんでしたか？」

「え？いや見てないけど」

「そうですか・・・」

それを聞いた鳳翔はしゅんとなってしまう。

「？」

その様子に疑問符を浮かべる時打。

「ん？ああ、暁」

長門がそう言ったので、長門が見ている先を見る。

そこからとぼとぼと歩いてくる暁が見えた。

「よう、暁」

「あ、司令官」

「いまだに、顔色が悪い。」

「あ、暁ちゃん」

「鳳翔さん……」

声を掛けてきた鳳翔を見た暁の眼が一瞬見開かれたと思うと、すぐに伏せてしまう暁。

「……おはよう」

か細い声で、そう挨拶し、鳳翔の横を通り過ぎて行ってしまう。

「？ いつもよりテンションが低いような……」

「そうだな……いつもより、かなり……」

長門もそう呟く。

ただ、その中で、鳳翔だけは浮かない顔をしていた……

弓道場……もとい、航空訓練施設。

空母はたいてい、弓をつがえて艦載機を発艦させる者が多い。

中には、陰陽術の様に、式神の様に艦載機を飛ばす空母も存在するが、そういうタイプの艦娘はこの鎮守府にはいない。

そして、今この弓道場にいるのは、『翔鶴型』の二番艦『瑞鶴』と、同じ『瑞』の名を持つ『祥鳳型』の二番艦『瑞鳳』だ。

瑞鶴が、矢筒から矢を一本抜き出し、左手に持つ弓につがえる。そしてゆっくりと引き絞り、まっすぐに、目の前に目標に標準する。

こういう事は、ただの作業だ。

ただし、いざ戦闘となれば、その『作業』は『技』へと変化する。だから……

「ッ……！」

矢を放つ。

真っ直ぐと飛んでいくそれは、一瞬にして姿を変え、一機の艦載機『烈風』になり、目の前に的に銃撃。

全て直撃する。

正規空母『瑞鶴』

翔鶴同様、前任の提督の更に前の提督の時に建造された艦娘だ。

境遇は翔鶴とほぼ同じだが、心身共に弱くなってしまった翔鶴の為に、前任の提督の言動を我慢しながらこの弓道場にて艦載機を飛ばし続けて演習し続けてきた結果、この黒河鎮守府で少なくとも空母の中ではダントツの熟練者となったのだ。

その為、この鎮守府で、瑞鶴はこの主戦力ともいえるのだ。

「ふう・・・」

ぱちぱちと、手を叩くのは当然の事ながら瑞鳳だ。

「流石です瑞鶴さん」

「ありがと瑞鳳。さ、次は貴方の番よ」

「はいー」

元気良く挨拶をする瑞鳳。

あの提督が来てから、この鎮守府に笑顔が戻ってきた。

今までは、無理して笑っている艦娘が多く、なんだか息苦しい空気が漂っていたが、改めてあの提督が着任して一週間がたったころには、心の底から笑う艦娘が増えた気がした。

「瑞鳳。もう少し肩の力を抜きなさい」

「は、はいー」

今までは一人だったが、こうして、教える相手がいると、とても楽しいと最近思うのも、きっと彼のお陰だろう。

それと・・・

「おー、やってるなあ」

「げ・・・」

「あ、響夜さん！」

——不本意ではあるが、この佐加野響夜という男でもある。

姉である翔鶴を助けてきてくれた事には感謝するが、その自由気ままな所や、勝手な所が日々癪に障る。

ただ、その言葉で瑞鳳が親しんでいる事は微笑ましい事なのだが……

「調子はどうだ？」

「……上々よ」

何故かいつも瑞鶴ばかりに構ってくるのは気のせいだろうか？

いや、駆逐艦の子たち相手に遊んでいたり、天龍や木曾と拳で語り合っていたり（ガチ）と色々な艦娘と交流していた所は見えていた。

だから自分ばかりに構う事は無いのだが、どうにもその数が自分の方が若干多いような気がするのだ。

「やっているわね」

「あ、翔鶴姉」

最近となつて、翔鶴も練習に付き合ってくれるので、どうでも良い筈なのだが、どうしても気になってしまう。

どうにかできないものか。

## 関係を断つ言葉

ヒトニーマルマル——十二時。正午。

「はあ……」

暁は、鎮守府正面の海のため息をついた。

その理由は、朝見た夢のせいですつと調子が悪いからだ。

あの夢は、電が改めて着艦した時から、度々見ている。

それでも、今日ほど、酷いことはなかった。

いつもは、あそこまでは見ないのに……

あの電は、自分たちの電とは違った。

仕草、声、姿。何もかもが同じだった。

確かに、同じ姿の艦娘は今の時代おかしくない。

はじめはダブったりすることはなく、艦娘は貴重な戦力だった。

だが、『分魂』が可能になった今、同じ姿、性格の艦娘は何人でも作れるようになった。

それでも、やはり、『建造』されてからの記憶が違うことはあるのだ。

艦娘の建造は、艦隊司令部。つまりは各地方の本部でしか建造できない。黒河があるのは関東地方、つまり、ここの本部である『横須賀』にある工廠でしか建造できないのだ。

毎日一定量送られてくる資材と建造資材を本営に送り、そこにいる『建造妖精』にそれらを渡せば、駆逐艦なら数日、戦艦なら数週間の時間をかけて建造される。

各鎮守府に存在する工廠では武器の開発しかできないようになってるのは、建造妖精の数が少ないからだ。

その為に、建造は提督無しではできないのだ。

だが、例え、轟沈したのと同じ艦娘を建造出来たとしても、それが自分たちのその子になることは決してありえない。

だってそれは、元の魂から生まれた別の魂なのだから

「……電……」

そう呟き、自分の右手を見る。

もう数時間も続けて自問自答をしている暁。

そのためか、今の天気には気づいていなかったし、背後から近づいてくる人物にも気付かなかった。

「暁ちゃん？」

「!?」

勢い良く振り向くと、そこには自分の姉妹艦の電が立っていた。

とはいっても、彼女たちのではなく、時打のであるが。

「そろそろ戻った方がよいよ。雨、降りそうだから」

「え……?」

気付くと、確かにあたりが薄暗い。

上を向いてみると、確かに明るかったはずの天気がいつの間にか曇り空になっていた。

「あ……」

「そろそろ戻ろ?じゃないと濡れちゃうよ」

「……」

その電の言葉に返事を返さない、返す事が出来ない暁。

「? 暁ちゃん？」

「ツ……」

同じ姿。 同じ声。 同じ仕草に同じ服装。

そして、同じ笑顔。

だけど、違う。

「どうかしたの？」

——やめてよ。

「どこか、具合悪いの？」

——その声で呼ばないですよ。

「そういえば、さつきから顔色が悪いけど……」

——貴方は……お前は……

「ねえ、どうかし……」

「やめてよ」

「え……?」

ふと、声が漏れた。

その言葉にきよとんとする電。

「その声で……呼ばないですよ……」

体を震わせる。拳を握り占める。うつむく。歯を食いしぼる。

「なんで親切にするのよ……どうして私に構うのよ……」

「だ、だって、心配だから……」

オドオドと、言葉を探す電。

その行為までも、暁を焚きつける材料でしか無かった。

『電』じゃない癖に……『偽物』のくせに……」

そして、バツと顔を上げ、叫ぶ。

「その声で私を呼ばないですよ!」

「……あ」

気付いた時には遅かった。

「あ、ちが……」



慌てて訂正しようとするも、遅かった。

「そう、だよね……」

電の声を聞いた瞬間、そんな事さえも忘れてしまった。

「やっぱり、私って……邪魔だよね」

「い、いなず……」

うつむいて、表情は何えなかったが、それでも、電がこの先言わんとする事が容易に想像できた。

——違う、そんなつもりじゃ……

「ごめんね。もう話さないから」

ゴロゴロ——……

「ん？」

時打は執務室の窓を見る。

空はいつの間にか雨が降っており、かみなり雷も鳴っていた。

「随分遠い所に落ちたな……」

今は長門はいない。今頃、吹雪や扶桑たちと楽しく食堂で談笑している頃だろう。

その一方で時打は何故この執務室にいるのかというと、今までに書いた絵を眺めていたからだ。

時打は持っていた、とても古いスケッチブックを机に置き、窓に左手を触れさせ、雨の降る空を眺める。

今は白い軍服を脱いで、半袖姿になっている。  
だから、左手首にある、黒いゴムの髪留めに目が映る。

「……………」

ピシャンツ！ゴロゴロゴローツ！！

雷が轟く。

「……………ん？」

そこで、ふと海岸の方で、人影が時打の目に移った。

「あれは……………暁？」

それはただ一人、雨に打たれ、立ちすくんでいる暁の姿だった。

だが、あきららかに態勢がおかしい。

顔どころか、体全体が鎮守府の方に向いており、片腕を半ば曲げた状態で前方に伸ばしていた。

「まずいな。これ以上雨が強くなると海面が上昇して波に攫われるぞ……………ッ！」

急いで軍服を着て、執務室を出る。

そして、正面の扉から飛び出て暁の元に雨に打たれながら走る。

「暁！」

彼女が姿が見えたので、その名を呼ぶ。

だが、聞こえていないのか、反応を示さない。

「……………暁？」

今度は彼女から一メートルの距離で彼女の名前を呼ぶ。

それでも聞こえてないのか、何も反応を示さない。

彼女は半ばうつ向いていて、時打の身長では帽子が邪魔して見えな  
い。

「……………」

時打は頭を掻き、今度は呼び方を変えて、彼女の名を叫ぶ。

「暁型駆逐艦ツ！一番艦『暁』ツ！聞こえるなら応答しろッ！」

「あ……………」

それでやっと聞こえたのか、彼女が時打に顔を向ける。

その顔は、酷く絶望したような顔だった。

そして、時打の顔を見た途端、目を見開き、わなわなと、恐れるような表情になると覚束ない足取りで後ずさる。

「い、いや……」

「お、おい!? そつちに行く……」

「ご、ごめんなさい……そんなつもりじゃ……」

「ツ！ 待つんだ！」

「ひッ!?」

暁のすぐ後ろは豪雨によって荒れている海。

もし落ちれば、身長の低く、ましてやおそらく混乱している暁では泳ぐことはできないだろう。

だから、時打が慌てて手を伸ばして引き戻そうとしたが、それを暁は何を勘違いしたのかさらに大きく足を下がらせ、踏み外す。

「え……?」

「暁イ——ッ!!」

海に落ちている暁を、絶叫しながら追いかける時打。

その為、二人そろって海に落ちてしまう。

「ツぷは！ 暁！ どこだ！」

海面から顔を出し、必死に暁を探す。

そして、海からなんとか腕をだしている暁を見つける。

「ツつあ!!」

得意のクロールで全力で暁の元に辿り着く。

「暁！ しっかりしろ！」

「しれ……かん……」

海に落ちた衝撃に加え、雨の影響で体温が奪われているのか、意識が朦朧としている様だ。

「必ず助ける！ だから溺れて轟沈なんて冗談やめてくれよ！」

急いで岸に向かって泳ぎだす時打。

もともと泳ぎが得意な方なので、少女一人抱えて泳ぐ事など容易い。

だが、今の暁の状態を考えれば、ゆうゆうと泳いでいる暇などない

のだ。

だが……

「ッ!？」

目の前に何かがあった。

豪雨による視界の悪さに加え、暁の様子を見ていたからか、気付く事が出来なかった。

そのまま、時打はその何かと激突した――。

「んん……んん?？」

見知らぬ……いや、執務室の天井だ。

「……こ……私……」

どうしたんだっけ？

「確か……海に落ちて……」

「起きたか」

「ッ!？」

聞き覚えの声を聞き跳ね起きる暁。

「あ……」

「お前たちがずぶ濡れだったから驚いたぞ」

長門だった。

その両手にはココアだった。

「あ、あの……」

「ん?なんだ?」

長門からココアを受け取った暁はまず気になる事を長門に尋ねる。

「司令官は……」

「ああ。病室だ」

「え?」

長門が言ったことを理解できないのか、きよとんとする暁。

「なんでもか知らないが、頭から血を流していてな。今、治療に当たらせている」

「え!？」

それを聞いて驚く暁。

「そんな……」

そして、わなわなと体を震わせ、その表情を恐れに染める。

「わ、私の所為で……」

「あまり自分を責めるな。提督はそんな事を気にも留めないさ」

長門はそんな彼女をあやすように、隣に座って頭を撫でる。

「で、でも……」

「ん?」

だが、長門は考えていなかった。

何故、暁と時打は海に落ちたのか。

その理由を……

「私……電に……」

——しやーぼんだーまーとーんーだー……

ふと、そんな歌が聞こえた。

ただの童歌である筈のこの歌。

雨が降っている。

そこにいるのは、一人の女性を抱える、一人の少年。

彼らは決して親子でもなければ姉弟でもない。

しかし、女性のその胸は赤く染まり、地面を、赤く、紅く、朱く染める。

少年の体に、その血が付き、赤く染まる。

その傍には赤く染まった刀身を持つ刀。

『——ッ！、——ッ！』

少年が必死に女性の名を呼び、胸の傷をどこからか取り出した布で抑え、女性の意識をまだ現うつに留める。

しかし、女性は、自分の血で濡れた手を、少年の頬に差し伸べる。

『——これで、良いんです』

そして、その手が、ゆっくりと落ちていく——

『——その手で、誰かの笑顔を——』

『——』 『ッ!!』

「きゃ!？」

叫びながら、飛び起きる時打。

そして、すぐに聞こえた悲鳴で我に返る。

「あ、あの……」

「え？鳳翔？」

そこには、本を胸ぐら辺りに引き寄せて、驚いた様な表情をしていた鳳翔がいた。

「だ、大丈夫ですか？」

「あ、ああ……悪い、驚かせて」

いつの間にか、酷い程に汗を掻いていた。

それを左腕で額の辺りを拭う。

「あの、タオルとか持つてきましようか？」

「頼む」

そう応えると、鳳翔はまだ洗ったばかりの様な真白いタオルを持ってきた。

思い出してみると、今日は鳳翔が保険係だった。

なんでも一部の艦娘と交代してそれぞれの仕事についているらしく、鳳翔はこの医療室の担当だった事を思い出す時打。

「ありがとう鳳翔」

「はい」

受け取ったタオルで体中に滴る汗を拭う。

「あの、大丈夫ですか？」

鳳翔が心配そうに聞いてくる。

「ああ、少し昔の夢を見ていただけだ」

時打は心配いらないとしても言う様に笑う。

「なら、良いんですが……」

それでも心配の様子の鳳翔。

そこで時打はある事を思い出す。

そして少し考え、切り出す。

「なあ、鳳翔」

「はい、なんででしょう？」

「暁……いや、第六駆逐隊に何があつた？」

「ツ……！！」

鳳翔が息を飲むのが分かる。

「そ、それは……」

「頼む。もしかしたら、暁と電の関係が崩れてしまうかもしれない」

以前、この黒河鎮守府に所属していた艦娘たちの轟沈記録を見た事がある。

その中で、以前、ここにいた電の記録にはこう書かれていた。

——— 駆逐艦『電』は駆逐艦『暁』の誤射フレンドリーファイアにより、轟沈、と……

## 六駆の追憶

ヒトヨンマルマル——午後二時。

執務室——

そこには、向かい合って座る時打と電を除いた暁型の三人。それと秘書艦の長門。

時打は、先ほど暁を助ける為に頭に怪我を負い、包帯を巻いている。

「話は大体は分かった」

時打が、そう言う。

「つまり、暁の言動で電を傷付けてしまった、と？」

「はい……その通りです……」

暁が力無くそう答える。

「そうか……」

両脇に座る雷と響はなにも言わない。

今日は電の姿を見ていない。

ただ、神通の話では、暗い足取りで自室とは違う別の空き室に入っ  
ていったらしい。

「し、司令官、私は……」

「とりあえず、頭を前に出せ」

言われた通り、暁は前に頭を出す。

そして……

「セイツ！」

「ぎゃん!?!」

ゲンコツが落ちた。

「う、うう……」

頭を抑える暁。

「まずは一つ目の処罰だ」

「げ、ゲンコツ一発だけってそれだけで良いのか？」

長門がそう躊躇いがちに聞く。

「言ったら、一つ目の処罰だって」



時打は真顔でそういう。

「そ、そうか……」

「それでだ、こっちは連帯責任だ」

「……」

時打の言葉に、間違いなく何かを覚悟する暁たち。

彼の妹分である電を傷付けたのだ。

何か重い罰が……

「電が沈んだ時の事を話せ」

「……」

あまりにも予想外な事に絶句する三人。

「い、電の事を……?」

「ああ、それだけを話してくれば、部屋に戻してやる」

と、時打は真剣そうに彼女たちを見据える。

そこで、雷が質問と言わんばかりに手を挙げる。

「ほ、鳳翔さんに聞いたんじゃないの?」

確かに、時打は病室にいた時、鳳翔にその事を聞いた。

だが……

「良く知らないんだと。ただ覚えている事は、何もかも終わっていったって事だ」

と、時打は躊躇いなしに言う。

「そう、なんだ……」

と、暗い表情で俯く雷。

そして、全員が黙り込んでしまう。

「……」

その様子に頭を掻く時打。

そこでしばし考えた後、時打はまた口を開いた。

「六年前、『飛天童子』って知ってるか?」

『?』

突然の時打の言葉に、その場にいる全員が首を傾げる。

数秒がたった処で長門が答える。

「ああ。金山市の飛天童子。金山市を支配していた組織が壊滅して、

政府がやつと介入してきたときに知られた人斬りの通り名だろう？  
それがどうかしたのか？」

「それ、俺なんだわ」

「え……」

その場の空気が凍る。

『飛天童子』

かつて、『暗黒都市』と呼ばれた金山市に、八年前、『革命の日』と呼ばれたその街で起きた今時では正に大規模な戦争が起きる三年前に突如現れた、子供の殺人鬼。

それが飛天童子。

しかし、その存在が確認されたのは、まだ政府の入る事が出来ず、完全な無法地帯、否、その街を支配していた『黄金連合』という組織が『革命の日』によって壊滅した時に、そこに住んでいた市民たちの話によってだが。

当時、『黄金連合』に敵対していた『反乱軍』レジスタンスに所属し、黄金連合の直系組織やその傘下の要人たちをたった一本の刀で暗殺し続け、二年後には裏から表舞台に全面的に活動し、あらゆる組織を潰しまくった。

そして、その殺した数は『革命の日』を除けば実に三千人。

『革命の日』に至っては、黄金連合の大隊をたった一人だけで相手し、最後には連合司令官の首を打ち取るという快挙を成した。

その子供の体で数々の暗殺を成し遂げ、その暗殺の際に『飛天御剣流』を使う事から、『飛天童子』と呼ばれていたが、その『革命の日』を境に行方不明になったという――

「それが……お前だというのか……？」

「悪いな黙ってて。まあ、忘れてたというのもあるけど、特に隠す事もなかったしな。それに……」

と、時打は自虐する様に苦笑する。

「——変に怖がらせるのも、気が引けるからな」

その眼から、光が消えると共に……

「分かった」

そこで響が口を開いた。

「司令官が話してくれたから、私たちも喋るよ。まあ、それを狙って言ってたようだしね」

「お、バレてたか」

「正直、その内容は予想外だったけどね」

ふふ、と笑う響。

「いいよね？ 暁、雷」

「ええ」

「分かったわ」

響の言葉にそう答える暁と雷。

そして、語り出す。

「あれは、司令官が来るずっと前……」

それは、五年前——

「また命令違反か」

「……」

執務室にて、当時、第二艦隊、暁、響、雷、電に加え、重巡の羽黒に加え、旗艦の鳳翔。そして当時、秘書艦だった五月雨。

当時の提督は実績主義者に加え、提督至高主義者でもあった。

「俺は何回も言っている筈だ……命令違反は許されないと」

そして、今処罰の対象となっているのは……電だった。

電は、怖気づく事無く、提督に口答えする。

「お言葉ですが、あの作戦には同意しかねます」

「チツ、いつもの口答えか」

「いくらなんでもあれは轟沈を想定した囷作戦。そんなものを決行するなど、私には理解できません」

ただ真っ直ぐに、電は提督を見据える。

「黙れ。上官の命令は絶対だ。理解せずとも決行するのがお前ら『艦娘』の役割だろう?」

提督は面白くないとでもいう様にそう言う。

「そうだとしても、無理な作戦には賛成などしません。たとえ、誰が言おうが賛成などしません」

と、電は言う。

「道具が口答えするな」

ブチツ!

ふとそんな音が聞こえた。

「私たちは道具じゃないツ!」

瞬間、蹴り飛ばされる電。

「いなく...」

「動くんじゃないえ!」

「ツ...」

吹き飛ばされた電の元に行こうとした暁だが提督の怒号によって止まってしまう。

「テメエ、ふざけてんのか? 『兵器』のお前らが『道具』じゃないって? そう言いたいのか?」

「かは... そう... です」

腹にダメージを喰らいながらも強気な態度をやめない電。

次の瞬間、腹を踏みつけられる電。

「うぐ!」

「ふざけてんじゃないぞ。ただの道具のお前が上官である俺に逆らうなんて事はなア、絶対にやっちゃいけない事なんだよ!」

「がは!」

更に踏みつけられる電。

「し、司令官、それ以上は……」

五月雨が止めに入る。

「黙ってる！邪魔したらどうなるか分かってんだろオナア!?」

「ツ……」

だが、提督の怒号により、黙ってしまう五月雨。

「オラどうしたあ、さっきの威勢はどうしたあ？」

ぐりぐりと、電の顔面を踏みつける提督。

「ツあ……私たちは……道具じゃ……ない……!」

「まだ言うかア!」

「あぐ!?!」

今度は胸倉を掴まれ、持ち上げられたと思っただけならすぐさま顔面を殴られる。

「くそっ!くたばれ!このクズが!ゴミが!」

なんども殴られたり蹴られたりする度に、鈍い音が執務室に響く。

響き続ける――

「電、大丈夫?」

「だ、大丈夫なのです」

暁の言葉に、よろよろと歩きながらも、無理に笑おうと努める電。その体の状態から見て、とても大丈夫そうには見えない。

あれから、電の態度にしぶれを切らした提督が、執務室から出て行ってしまい、五月雨の謝罪を聞きながら、六人は自室へと向かっていった。

「それにしてもあのクソ提督、作戦を執行しているのは私たちだっというのに……」

「本当、後ろでただのさばっているだけなのにさ」

そこで雷と響が提督に対して陰口を言い合う。

「そんな事は言っではいけませんよ。聞かれたらどうなるか」

羽黒がそんな二人を咎める。

「だつて〜」

「むう……」

それに拗ねる二人。

当時、この黒河鎮守府は、食事は質素、食事時間には限りがあり、更には、提督の暴行によって部屋にひきこもる艦娘が多かった。

その暴行は様々で、暴力、罵詈雑言、スタイルなどが良い艦娘は強姦などの対象になった。

大抵の艦娘が娯楽の為である上に、いう事を聞かない艦娘に対しては死ぬより苦しい行為を行う。

そのとんでもない例としては、目の前でその艦娘に親しい艦娘を轟沈させる事だ。

それによる『恐怖』を植えつけられた艦娘は、心のどこかで、提督に従わなければ誰かが轟沈こころされると思い込んでしまう。

その事を今の提督は知っていたのだ。  
だから、こんな治安を生み出したのだが……

予想外な事に、本来気弱な性格の電が『例外』として『外れた存在』となって提督の前に現れた。

決して提督に屈する事な無く、誰よりも真つ直ぐに自分の意見を述べる。

その事が、今の提督にはうざくて仕方が無かった。  
だから、暁型の全員を沈めて、恐怖を植えつけようとしたが……  
ものの見事に全て失敗。

まさか電があらゆる危険を察知して数々の対処法を思いついていたなんて誰が分かっただろうか……

そんなある日……

「……ミッドウエー海域ですか？」

「ああ。そこにいる敵深海棲艦の撃滅をしてくれないか？」

と、いかにも悪人らしい嫌な笑みを浮かべながら、鳳翔にそういう提督<sup>クズ</sup>。

ミッドウエー海戦。

そこは、かつて日本が歴史的な大敗を期した海域。

一航戦の赤城と加賀、二航戦の飛龍、蒼龍を失う事となったその海戦。

若干、航空隊はボロ勝ちしていたのだが、日本にとっては空母を四隻を失う事は、大きな打撃となった。

その海域に現れた深海棲艦を倒してほしいとの事らしい。

ただ……

電を蹴落とす気満々だという事は確かだ。

どうやら、この提督は電を自分の配下に置きたいらしい。

たしかに、電の戦果は、他の艦娘、特に駆逐艦の中ではとても良い成績を残している。

だから、今の態度を叩き折ってやろうとしているのだ。

(本当に……この人は……)

鳳翔は心の中で呆れる。

「当然、拒否権は無しだ。良いな鳳翔？」

「……はい、分かりました」

それを承諾する鳳翔。

だが、彼女はいざれ後悔する事になる。

これから起こる大惨事を予測する事など出来なかったから……



## 暴走

ミッドウエー海域……

そこはかつて、南雲機動部隊と呼ばれた、日本軍最大にして最強の空母機動部隊が、大敗を期した場所。

なので、一部の艦娘にとつては、とても不愉快な場所なのだが……

今はそんな事気にしてられない。

「まさかこんなところでスコールに出くわすなんて!？」

そう、それも台風ともいうべき、豪雨。

暁が悲鳴の様にその声を挙げる。

「いくらなんでも、これは強過ぎるよ!？」

強い風に叩き着けられ続けているため、何度もバランスを崩している響。

羽黒も、この天気では水偵もまともに飛ばせない。

「うう……み、みなさん!なるべく離れないで下さい!」

しかし、それでも負けじと駆逐艦たちに指示を出す羽黒。

だが、少しおかしい所がある。

「あれ……?」

その様子にいち早く気付いたのは電だ。

彼女でも、流星に急激に発生したスコールには対応できず、スコールに巻き込まれているのだ。

そして、ある重要な事を口走る。

「鳳翔さんはどこ?」

「え!？」

旗艦である筈の鳳翔がないのだ。

「そんな!?!鳳翔さん!?!鳳翔さん!?!」

羽黒が急いで無線で鳳翔に呼びかけるが、返事が無い。

「だめ……スコールの所為で無線が……」

「そんな!？」

暁がまた悲鳴染みた叫び声を上げる。

もし、彼女が自分たちの知らない所で轟沈なんて事になれば……

「嘘……やだ……鳳翔さん……」

それを想像するだけで挙動不審になる暁。

ただでさえ、レディという意識が抜けているだけでなく、精神的にも弱い状態で建造された彼女がこんな状況に陥れば、精神が崩壊して逆に暴走する可能性が高い。

「落ち着くのです!まだ鳳翔さんが轟沈したって事じゃない。だから希望を持つのです!」

電が必死に暁をあやす。

「で、でも……」

「スコールが止めば、水偵も飛ばせる。だから今は耐えるのです!」

「わ、分かった……」

なんとか心を落ち着かせた暁。

だが、彼女たちはまだ知らない。

鳳翔の今の状況について……

自分の艦隊とはぐれてしまった鳳翔。

「参りました……」

なんとかスコールから逃れ、近くの岩礁地帯に流れ着いた鳳翔。スコールによるダメージなどは無く、艦載機の妖精たちにも、それなりの疲労は感じられない。

この様子なら、索敵に飛ばしても良いだろう。

「お願いします」

弓を引き絞り、放つ。

放たれた矢が無数に分裂し、姿を艦爆へと変え、それぞれの方向へ飛んでいく。

「しばらく、何かがあるまでここで待機ですね・・・」

そう、一つ眩き、彼女は自分の艦載機たちが飛んで行った方向を見上げる。

今、空母単独で敵艦隊に遭遇すれば間違いない勝ち目など無い。

ましてや、世界最初、つまりは史実にある通り、空母の中で最古参である彼女が、護衛も無しに敵とまともに戦える訳が無い。

「あの子たち・・・大丈夫でしょうか・・・？」

しかし、やはり『母性』が誰よりも強いのか、自分の事より、自分の艦隊の駆逐艦たちの事を心配する鳳翔。

ふと、なにか音が聞こえた。

「?.....」

振り返った瞬間、視界が真っ白に染まった。

ド.....

「!？」

そんな音を聞いた暁が勢い良く振り返る。

なんとかスクロールを切り抜けた羽黒、暁、響、雷、電の五人。

今、なんとか水偵を飛ばした羽黒が、必死にその入電を待ち構えて、

他四人は分かれて探索していた。

その中で、暁のみがその音を聞き取れた。

「・・・鳳翔さん？」

猛烈に嫌な予感が彼女を襲い、いてもたってもいられずに速力を最大にする。

水面を滑る様に、まるでアイススケートでもしているかのように急ぐ暁。

視界に岩礁地帯を捉え、そこから煙があがっているのを捉えた暁。

「鳳翔さん・・・ッ！」

必死に走り、そこに鳳翔がいる事を願う暁。

そして、それを見た途端、絶句した。

敵深海棲艦に囲まれ、駆逐艦の砲撃や戦艦の副砲で滅多打ちにされている鳳翔の姿がそこにあつた。

「ほう、しょう、さん・・・？」

暁が途切れ途切れにそう、呟く。

だが、そんな小さな声が聞こえる筈も無く、ただただダメージを受け続けている鳳翔。

水面に倒れ伏し、飛行甲板が砕け、ボロボロとなり、まともに動けないでいる鳳翔。

それは、まさにリンチだった。

もともと空母としての耐久力を持つ故なのか、駆逐艦の主砲や戦艦の副砲如きのダメージではなかなか沈まない。だが、それが奴らにとっては面白いのか、攻撃する事をやめない。

完全にブチ切れた『駆逐艦』<sup>バケモノ</sup>の存在に気付かず・・・

ふと雷巡が魚雷を一発、鳳翔に向けて直撃させる。







暁。

フラグシップと言われるほど強い筈のリ級が、完全に暴走した暁の強さに、怯えた表情をする。

だが、どんなに情け無い顔をして、今の暁にそれを認識する余裕などない。

魚雷を二本抜き放ち、それを両手に持つ。

次の瞬間、リ級の両目にその魚雷を容赦無くブツ刺すッ！

「シネ」

それだけを言い残し、悲鳴も上げる間もなく至近距離で魚雷が爆発。

リ級があつけもなく轟沈する。

一瞬の出来事にただただ茫然とする電、響、雷、羽黒の四人。これで敵深海棲艦は全て沈めた。

本来ならここで暴走が終わっても良かった。

—— 本当ノ悲劇ハココカラダツタ。

タリナイ——



タリナイ――

マダ、イナイノ？

ハウシヨウサンヲキズツケルヤツハ。

ふと、視界に電たちが映る。

それが、自分の姉妹艦や友軍である事を認識する事など、今の暁に、出来る訳が無かった。

「シネ」

「ッ!？」

おぞましい程の殺気を感じた電。

瞬間、大急ぎで自分の艦装の妖精たちに命令する。

その時、暁の主砲から砲弾が発射される。その砲弾を、電が間一髪のところまで砲弾に砲弾を当てるという荒業をやったのける。

そのお陰で砲弾は明後日の方向へ飛んで行ってしまふ。

「暁!？」

響が叫ぶ。

今、暁が自分たちに向かって砲撃してきたのだ。

それがどうしても信じられない。

「逃げてえ!!」

更に、電の怒号。

立て続けに暁が砲撃。

全員がなんとか回避運動に移行し、その砲弾を避ける。

「暁ちゃんッ、どうして!？」

羽黒が掠れた声で暁に問いかける。

だが、当然そんな小さな声で聞こえる筈が無く、暁は砲撃するのをやめない。

更には魚雷まで率いてきた。

「うわ!？」

響に被弾。

響、小破。



「――鎮守府の事をお願いします」

瞬間、艦装を分離する。

艦娘の艦装には、二つの物が存在する。

まずは、主砲や副砲などの兵装を搭載する為の『兵装艦装』。

そしてもう一つは、水上に浮かび、移動する為の『水上移動艦装』。

電が外したのは・・・兵装艦装の方だ。

「だめええええええええ!!」

絶叫する羽黒。だが、電は、止まらない。

兵種を外した今の電は身軽。だが、逆に無防備でもある。

「シネシネシネエ!!」

まだ呪詛の様にその言葉を繰り返す暁。

砲弾が何度も体を掠め、時には直撃し、血が舞い上がる。

「ツ――お姉ちゃんツ!!」

叫ぶ電。

暁が、右手を振り上げるのが見えた。

距離は三メートル。これでも十分に回避行動に移れる距離だ。

だが、電は真つすぐ進み、手を広げる。

「電ちやあああああん!!!」

そして、暁の右手が、電の心臓を貫いた。

「.....  
あ」

掠れた声が、暁の口から洩れた。

「いふ.....」

そして、暁を抱きしめ、吐血する電。

不思議と、痛みは無い。

それとも感覚が麻痺してしまったのか。

ただ、分かる事は、自分にはもう、時間が無いという事だ。

だから……

「お・ねえ・ちゃん……」

血が溢れ出る口から、なんとか言葉を紡ぐ。

「……怒るのは別に、良いけど……あまり、皆を巻き込んだり……ダメなのです……」

自分に残された時間を、最後まで無駄にしないために。

「お姉ちゃんは……鳳翔さんの事……とても、好きだから……怒るのは分かるよ……でも、響お姉ちゃんや、雷お姉ちゃん、それに、羽黒さんを、それに巻き込まないで欲しいのです……」

「私……もう……ここで終わり……なのかもしれない……けど……」

生命の源が、失われていく。

「……お姉ちゃんたちは……生きてね……生きてれば……きつと……別の『幸せ』が……」

あまりに血を流しすぎたのか、視界が、だんだんと真つ暗になっていく。

「あ、もう、なにも……見えないや……」

腕から、力が抜けていくのがわかる。

もう、長くない。

「次に……生まれ変わる時は……」  
だから、最後に。

「……平和な……世界だと……良いな……」  
一言だけ……

「……ごめん……ね……さ……よ……な……ら……」

電、轟沈。

「……いな……ずま……?」

掠れた声で、すでに水底みなそこに沈んだ妹の姿を見る。  
そのまま、真っ赤に染まった右手を見る。

イマジブンハナニヲシタ?

何故電ガ沈ンダ?

何故私ノ手ガ真ツ赤ナンダ?

私ガ……私ガ……

——私ガ殺シタ?

「あ……ああ……」

嗚咽が漏れて、膝を着き、わなわなと震えだす。

殺シタ、私ガ殺シタ。

それを自覚していくたびに、同時に、それを否定する自分が現れる。

——死んでない。電は死んでなんかいない。私は殺して……

「あなたが……」

ふと、誰かの声があった。

真っ赤な右手から視線を外し、見上げると、そこには怖い顔をした  
雷。

「あなたが……ころしたのよ……」

弱々しい声で、暁を、責める。

そして、雷は、残酷な現実を叩き付ける。

「貴方が、電を、殺したのよ！」

「ツ……!?!」

雷がそう、怒鳴った。

雷の背後では、鳳翔に手を貸す羽黒と怯えた様な表情をする響。

ただ、その視線の中に、微かに感じられる『怒り』の念は……  
暁のした事を否応無く突きつけるものだった。

その後、鎮守府に帰った暁たちは、鳳翔はその状態からすぐさま入渠。報告は羽黒が担当し、鳳翔を除いた艦隊が、執務室にいた。

「―――以上が、今回の作戦の内容です」

羽黒が、苦い顔をしながら、そう答えた。

「ふくむ、そうか、電が沈んだか」

一方で提督の方は、いかにも偉そうな態度で聞いていた。

「ま、邪魔物が消えてくれただけ、ましか」

「ツツ!!」

それにキレたのは意外にも響だった。

「……!?!」

だが、声を上げて提督に掴みかかる寸前で、いきなり意識が刈り取られる。

「響!？」

雷が慌てて、地に伏した響を抱き上げる。

「ありがとう、五月雨」

「いえ……」

なんと、響を気絶させたのは五月雨だった。

首に当身を打ち込み、それで響を気絶させたのだ。

「お前ら、もう戻ってもいいぞ。ご苦労だった」

あっちいけ、とでもいうようなジェスチャーに、苦い顔をする羽黒。

だが、従うしかない。

なんてたつて、五月雨がいるのだから。

駆逐艦『五月雨』

前任の提督の初期艦。

その為に、提督に言われた事はなんでもこなす、本来ドジっ子な筈の駆逐艦だ。

だが、その仕事ぶりは凄まじく、反抗してきた艦娘を取り押さえ、書類の束を全て一時間以内に片づけ、どんな汚い仕事でもやる。

時には、雷撃処分まで躊躇いなくやる彼女に、今の黒河鎮守府の艦娘たちの好感度はどんぞこだ。



最も、自殺する前までの話だが。

そして、あの場でどうして暁が動かなかったのか。

そもそも耳に入っていなかったのだ。

ただ、突きつけられた現実にはただ茫然として、何も耳に入ってこなかったのだ。

自分が電を殺した。

その真実だけが、今の暁には見えなかった。

だからこそ、提督に逆らう事が出来なくなった。

「——これが、電の最後だよ」  
響が、そう、言い終わった。

恐怖を乗り越えて 牙突炸裂！

ヒトヒトマルマル——午前十一時。

暁たちが、過去の事を話した翌日。

『——あー、てすてす……一応聞こえてるんだよな？』

『ええ。というか、機材の使い方学んでこなかったんですか？』

『いやあ、よく鍛錬してたから……』

『ばかなんですか？』

『返す言葉もございません。さて、と』

鎮守府のスピーカーから、ここの提督である天野時打の声と、大淀の声が流れる。

というか、会話が……

『という訳で、出撃だー』

「!?!」

それを聞いた艦娘たちの表情が強張る。

中には、やつと来たか、と思っっているような表情をしている者もいた。

『これは単独出撃じゃない。指令出撃だ。説明は今から呼ぶ艦娘にのみするが、他にも内容が聞きたい奴は執務室に来てもし。メンバーは最後に呼んだ奴が旗艦だ。じゃあ、言うぞ』

と、放送越しに時打が一息つく。

一方、艦娘たちのは息を飲んで、その発表を待つ。

『まず、重巡羽黒』

「え!?!」

いきなり指摘された事に驚く

だが、当然時打にはその事は分からないので、続ける。

『駆逐艦暁』

「私……」

名前を呼ばれた事により、そう呟く。

『同じく、響』

「……」

一方の響は無言で立ち上がる。

『同じく、雷』

「そっか……」

そっけない反応をする雷。

『同じく、電』

「ツ……」

電は、一人誰もいない部屋で膝を抱えて座っていたが、名前を呼ばれた事でびくりと体を震わせ、顔を上げる。

「……いかなきや」

『そして最後に旗艦だ』

一息ついた時打。

そして、最後に艦隊を任せる事になる艦娘の名を呼ぶ。

『——軽空母鳳翔。以上六名はただちに執務室に来るように』

それだけを言い残し、放送が切れた。

「さて、みんなよく来てくれた」

執務室にて、ホワイトボードの前に立つ時打。

その正面には、旗艦の鳳翔を中心とした羽黒、暁、響、雷、電の六人、艦隊が立っていた。

「今回、指令出撃<sup>ミッション</sup>とは言ったが、それほど危険なものじゃない」

時打は、ホワイトボードに張られた地図の方へ向かい、マーカーで鎮守府近海の辺りにマルを書く。

「今回は、この鎮守府近海に出現した深海棲艦の撃退、あるいは撃滅だ。情報によると、編成は空母一、軽母一、軽巡一で他駆逐といった編成だ。そこで、今回は爆撃をするのではなく、されない為に制空権

の確保を優先する。だから、鳳翔には戦闘機を主として載せたいと思う。良いか？」

「分かりました」

時打の言葉にうなづく鳳翔。

「そして、問題は軽巡と駆逐艦の方だ。どちらも雷撃が出来るうえ、それなりの統率が取れていると聞く。その為に、羽黒と響、雷は砲撃で弾幕を張ってもらい、その合間を縫って暁と電には雷撃をしてもらいたい。そこで陣形が崩れた所で、電には『白兵戦』に移ってもらおう」

「あ、あの、司令官さん！」

そこで羽黒がおどおどしながら手を挙げる。

「なんだ？」

「あの・・・なんで電ちゃんに『白兵戦』が・・・？」

「ああ、そうか」

落ち度だった、と言い頭を抱える時打。

「お前ら、今の姿が人と同じ・・・だって事は理解しているよな？」

「はい。なんでも、船には女の神様がついていて、それが、私たちの体のモデルになっていると聞いたことが」

鳳翔がそう答える。

「まあ、そう解釈してくれても構わないが、とにかく、お前たちは人間の体を模している訳だ。だから、人同じ生活が出来る。ならば、人の武器を持ってもおかしくは無いだろう？」

「そ、それは、天龍ちゃんを見れば分かりますが・・・」

羽黒が変わらない態度でそう言う。

「ま、最も、俺が学生時代に電を鍛えたつてところが関係してるんだろ。言っておくが、他にも白兵戦に特化した艦娘はいるぞ？」

「そ、そうなんですか・・・」

羽黒は納得が半ばいつていない様子だ。

「話を戻すが、相手の陣形が崩れたら電は白兵戦に移行。良いな？」

「はいなのです」

微笑みながら、そう答える電。

その表情に、一瞬、浮かぬ顔をする時打だったが、すぐに表情を

戻し、彼女たちに命令する。

「よし、各員、工廠へ向かい、それぞれの装備を確認。不備があれば明石、夕張に申し出て修理してもらおう事。ビトサンマルマル1300をもって出撃せよ。さあ、戦の始まりだッ！」

「敵艦見ユッ！」

羽黒がそう叫ぶ。

彼女の飛ばした水偵が敵の艦隊を捉えたのだ。

「よし、提督のたてた作戦の通り、制空権は私なんとか抑えます。皆さんは砲雷撃戦の準備を」

鳳翔がそう叫び、全員がそれに同意する。

ふと、暁が隣の電を見るが、電がこちらに視線を向けた途端、すぐに目を伏せてしまった。

その様子を心配そうな表情になる鳳翔。  
だが。

「鳳翔さん！敵、艦載機を発艦させました！」

「分かりました！」

すぐさま鳳翔は矢を引き抜き、それを弓につがえ、引き絞る。

「お願いします！」

そして、放つ。

すぐさま矢は無数に分裂、更にその姿を零戦に変え、飛び上がる。そして、視界の彼方、いくつもの光が見えた。

艦載機たちが敵機動部隊を叩いているのだ。

「ッ………何機か抜けた……ッ！」

羽黒がそう呟く。

見て見ると、確かに何機か抜けてきている。

「皆さん、衝撃に備えてッ！」

鳳翔が叫ぶ。

それと同時に敵の異形の艦載機が魚雷を放つ。

それを間一髪のところまで回避する。

「三式弾装填！撃て！」

羽黒が珍しく声を挙げて砲火。

それが敵艦載機のいる所まで飛んで行った瞬間、爆発する。

長門が時打に対して使った炸裂弾、『三式弾』だ。

一定の時間で爆発する様になっており、それによつて飛び散った鉄屑などが艦載機を襲い、撃墜させるといふ仕組みだ。

対空射撃にこれほど適した砲弾はないだろうが、それも高度による問題。

それはさておき、その爆発に巻き込まれた敵機動部隊は全滅。

一方で鳳翔の飛ばした艦載機たちの方は未だにきっこう状態が続いており、中々制空権が掴めない。

だが、その視界に敵深海棲艦の艦隊を捉える。

「砲雷撃戦、用意！」

すぐさま行動に移る鳳翔。

その掛け声で、随伴艦の全員がそれぞれの兵装を構える。

「つて——！！」

腕を振り下ろすのと同時に、羽黒、響、雷が自分たちの主砲、副砲を連射ッ！

その全てが狭斜、至近弾となり、水柱を立てて弾幕となる。

「雷撃準備！」

「はい！」

その時、二人とも気まずい顔をしたが暁、電をして自分たちの両腕につけられた魚雷発射管に魚雷を装填する。

「発射！」

それと同時に二人が魚雷を発射。

魚雷が真っ直ぐに飛んでいく。

『ッ!?!』

それにいち早く気付いた旗艦である空母ヲ級。

すぐさま指令を出そうとするも、羽黒たちの弾幕によって妨害され、魚雷が又級、八級に直撃。

更に八級が轟沈する。

「よし」

密かにガッツポーズをする暁。

(このまま行けばいいのだけれど……)

作戦は上手くいつている。

だが、鳳翔は浮かない顔をしている。

会議が終わり、執務室を出ていく前。

「鳳翔」

そこで時打に呼び止められる。

「はい?」

「少し良いか?」

他の五人が出ていき、鳳翔だけが残る。

「今回の作戦。どうにも胸騒ぎがする」

「胸騒ぎ……とは?」

「ああ。なんだか……敵の艦隊が一個じゃない気がしてな」

「!?!」

時打の口から漏れた、不吉な言葉。

「それは……どういった根拠で……」

「いや……鎮守府近海に深海棲艦が確認されたのは一週間前。だが、その間に奴らはなんの行動も起こしていない。昨日は雨だが、その前にも何か出来たはずだ。ここを爆撃するのかな。ただ、その報告書にはこう書いてあったんだ」

そこで時打は大淀から渡された作戦指令所を鳳翔に渡す。

それを見た鳳翔の顔が驚愕に染まる。



「こ、これは……」

『敵深海棲艦は、何かを待っている模様』

「昨日はスコール。そして、その何かというのを、昨日の内に合流していたとしたら……」

鳳翔は、別に飛ばしておいた艦載機の報告を待つ。

もうそろそろ来ても良い筈なのだが……

気付けば、敵駆逐艦全てが沈み、軽巡は大破。軽空母ヌ級も中破して艦載機を飛ばせなくなり、ヲ級も小破。

一方でこちらは完全な無傷。

このまま行けば完全勝利は確実。

だが、それでも……

——ひゅうううううううううう……

「!?!?!」

突如、どこからか聞こえた音。

——自分はこの音を知っているツツツツ!!!!

「避けてえええええ!!」

叫ぶ鳳翔。だが、その叫び虚しく、羽黒に何かが直撃する。

「きやあああああ!」

「羽黒さん!」

直撃したのは左弦。

その方向を見ると、そこには・・・

「・・・戦艦・・・?」

俗に言う・・・戦艦を主としたガチ編成だ。

戦艦四隻に加え、重巡が二隻。

完全巨砲至高主義編成だ。

———どっからどうみても勝ち目なんて無い。

「提督の読みがあたった・・・ッ!」

それを聞いていた鳳翔だったが、いざの中すると、この先どうすればいいのか分からない。

「提督ッ!」

すぐさま、鳳翔は時打に連絡。

『来たか?』

『はいッ!戦艦四隻、重巡二隻です!』

『ガチできやがったな・・・』

「提督、今の戦力では到底敵いません!撤退の許可を!」

戦艦相手に駆逐艦が敵う訳が無い。

その装甲の前に一方的にやられるだけだ。

『———撤退は認めない』

「な!」

そこで時打から出たのはありえない言葉だった。

『これは指令だ。とにかく耐えるんだ。避け続けても良い。小さなダメージでも敵に蓄積させる事が出来る筈だ』

「しかし———」

鳳翔が抗議しようとするも。

『——暁と電の為だ』

「!？」

それを聞いた瞬間。

「電ああああああああ!!!」

暁の絶叫が聞こえた。

予想外の出来事に混乱している中、暁が異常に挙動不審になっていた。

「ひいッ!？」

近くに砲弾が着水した水柱で悲鳴をあげ、周りの事など聞こえなくなっていた。

「落ち着いて暁ちゃん!まだ、誰も沈んだ訳じゃない!今ならまだ態勢を立て直せるから!」

だが暁は震えるだけで何も言わない。

「ッ!」

すぐさまそば水柱が巻き起こる。

「ッ……どうすれば……」

そこでふと、深海棲艦の方を見る。

敵は砲撃してくるばかりだが、こちらを牽制しつつ確実に当ててきている。ようとしてきている。

狭叉弾とか至近弾だとかが辺り、だんだんと逃げ道が無くなってきている。

ただ可能性があるとするれば、電の白兵戦だろうか……?

(それでも無傷で辿り着けるかどうか……)  
電は、腰に差してある小太刀を見る。

陸上で深海棲艦と戦う事は無い。

だから、相手を殺さないために、逆刃の小太刀である『落雷』を常時装備しているのだが、相手が深海棲艦なら話が別だ。

小太刀『電光』

普通に刃が刀身の反りの方にある小太刀だ。

出来も良く、たいていの物なら簡単に斬る事の出来る小太刀だが、本来小太刀というのは盾として使えると言われていたために、軽く、攻撃に向いていない。逆に小回りが利き、防御に向いているのは当然の事。

その弱点と利点を上手く抑える為に、刺突を昇華させた『牙突』を習得。更に自分なりのアレンジを加えて『電式』を編み出したのは言うまでもない。

「牙突なら……」

腰の後ろにある電光。

確かに牙突の突進力なら戦艦の装甲を貫けるかもしれないが……

「助けて……助けて……」

今の状態の暁を一人にする事はできない。

動けないこの状況で、相手にとってなんのダメージにならない主砲、雷撃を打ち込み続けるのか……

「ッ!？」

そこでふと、戦艦の一人が放った砲弾が目に入った。

その軌道には……少し離れた所にいる暁がいた。

このままでは直撃してしまう。

「だめええええ!!」

それを確認した途端、電は走り出す。

そして、砲弾が暁に直撃する瞬間、電がその間に飛び込む。

電に、砲弾が直撃する。

その光景を、間近で見る暁。

そして……

「電あああああああ!!!」

絶叫。

それだけが響いた。

電、中破。

「電！電あー！」

急いで彼女を抱き上げる。

「ツ……こふ……」

「やだやだ！死んじややだ！」

暁が必死に電の体を揺する。

「ちよ……そこまで揺られると……」

だが、意識ははつきりしているようだ。

「あ、ごめん！」

「はぶっ！」

と、突然離れた所為で地面にまた倒れる電。

しかしそこからなんとか起き上がる電。

「電ちゃん！」

そこへ鳳翔がやってくる。

「大丈夫!？」

「はい。まだやれます……」

無理矢理に立ち上がる電。

「無理しちゃだめよ！」

「でも、やらなきゃ・・・！」

「やるって何を・・・」

「白兵戦です」

それを聞いて電が今何をしようとしているのか悟る鳳翔。

「やめなさい！」

「やめません。もうこれしか手はありません」

電が兵装艤装を分離する。

そして、腰の後ろにある小太刀『電光』を抜く。

その右手を鳳翔がつかむ。

「ダメよ！単独で突撃するなんて、そんなの自殺行為だわ！」

「でも、このままじゃ全員やられてしまいます！」

電が鳳翔の腕を振り切って戦艦の艦隊に突撃する。

はずだった。

暁が電の左手を掴む。

電が暁の方を見た瞬間、今、特攻しようとした気が失せた。

「いか・・・ないで・・・」

その、まるで独りぼっちの子犬の様な表情を見たら、いくら電でも、立ち止まらずにはいられなかった。

「ッ・・・」

必死に縋り付く暁に対して、電は何も言えない。

「・・・ごめん」

そう言い、電は暁を抱きしめる。

「あの時・・・貴方の事にも考えずに口聞いて・・・ごめん」

回りに水柱が立ち続ける中、ただ、電は、あやすように暁を抱きしめ続けた。

万事休す。

そう思い、苦い顔をする鳳翔。  
（何か・・・他に・・・方法は・・・）  
そう、考えた時だった。

「全主砲展開ッ！掃射ア!!!!」

ドオオオオンッ!!

『え!?!』

突如、どこからともなく飛んできた無数の砲弾が戦艦のいる艦隊に

殺到する。

更に、空高くから何かが急降下してくる。

それはその体から何かを分離すると、勢い良く水面と水平になるように体を持ち上げる。

次の瞬間、その何かと分離した黒い物体は戦艦ル級たちに直撃し、爆発を起こす。

「全く、提督さんも人が悪いわよね」

「ええ」

「あ……！」

更に頭上から何かが通りすぎていく。

烈風と零式艦戦52型だ。

「全く、提督さんも人が悪いわよね」

その声が聞こえた瞬間、ヲ級がいた方で爆発が巻き起こる。

「あれは………彗星！」

日本の最新鋭爆撃機、『彗星』が爆撃したのだ。

そのお陰で軽巡が轟沈。

ヲ級と又級も冗談では済まないダメージを負う。

更に追い打ちをかけるように、鳳翔の脇を何かが通り抜け、魚雷を海面に落とし、又級に命中させる。

「天山……」

今の鎮守府で、あれほどの練度である艦載機を運用できる空母は、自分の鎮守府でただ一人。

「お待たせ、鳳翔さん！」

「瑞鶴！」

正規空母『瑞鶴』だ。

更に、その後ろからは、長門と扶桑、そして明石だ。

「本当、底の見えない人だ」

長門はふふ、と笑う。

「ほら見せて電ちゃん」



「あ……」

一方で明石は電の傷を治療し始める。

「これは……」

「提督さん。鳳翔さんたちが出撃した後、すぐに長門さんを使って集めてね。何事かと思つたら、鳳翔さんたちがピンチになったら助けに行けって言つてき。心配性だよねあの人」

アハハ、と笑う瑞鶴。

一方で、瑞鶴の飛ばした艦載機たちがなんと戦艦の対空射撃をもともせず回避し続けているのだ。

しかも、弄ぶかのように零戦や烈風だけが機銃でちよっかいを出している。

戦艦相手に完全に遊んでいる。

それほど瑞鶴の艦載機の練度が高いという事だ。

『悪い、なんかお前ら負ける事前提な事して』

時打が無線越しにそう謝罪する。

「いえ、もういいです」

『そんじゃ、暁、電、そのまま聞いてくれ』

そこで時打が一息つく。

『電にはこれから白兵戦に移ってもらう。だけど、一人だけじゃ不安だ』

それに頷く一同。

いつの間にか、羽黒や雷や響が戻ってきていた。

『だから暁。お前も同行しろ』

「え!?!」

これに声を挙げたのは暁だ。

「む、無理です!」

『無理じゃない。お前の単独での戦闘力は常軌を逸している。ただでさえ艦隊一個分壊滅させた戦果があるんだからな』

「あ、あれは……」

それはおそらく、電が沈んだ時の暁の暴走の時だ。

『あれは、確かにお前の暴走で一時的に目覚めたものなのかもしれないな』



『暁と電を全力援護だ！瑞鶴ッ！』

「了解！アウトレンジで決めたいよね！」

瑞鶴が彗星を発艦させる。

それも、空高く。

『長門、扶桑！お前らの自慢の火力で敵を攪乱、タイミングは任せる！』

「了解！扶桑！」

「ええ。主砲、副砲、一斉射ッ！」

二人が同時に全ての砲門という砲門から砲弾を放つ。

副砲も何も関係無しに敵を攪乱する為に砲弾を撃ちまくる。

「私たちもやるよ！」

「ええ！」

響と雷も、自分たちの主砲から砲弾を放つ。

その水柱の壁に、動けない戦艦たち。

そして、その視界の悪さが、一人のル級を沈める結果となった。

「牙突ッ!!」

「!？」

立ち上がった水柱を貫いて、一本の刀がル級Aの首を貫く。

「ガア・・・ア・・・!？」

「ヤア!!」

そして止めといわんばかりに捻る。

ゴキリ、という鈍い音と共にル級Aの首が文字通り、横に九十度以上曲がる。

そのまま態勢を保てなくなり、水面に倒れ伏す。

すぐさま異変に気付いたル級B、C、Dが電に主砲を向ける。

だが。

「遅いのです」

それよりも早く、電がまだ首に刺したままのル級Aの体をル級たちに投げつける。

「!？」

当然、既に発射態勢に入っており、砲弾が放たれているので、その

ル級Aに直撃する。

事実、盾にされたのだ。

「ガアアア!!」

仲間を盾にされた事を怒ったル級Cが主砲を向ける。だが、それよりも早く、左目の視界が潰される。

「ギャア!?!」

「首吹き飛んで死ぬ」

瞬間に首が吹っ飛ぶ。

「うわ・・・えぐい・・・」

「そんなの貴方も同じでしょ電」

暁が魚雷をル級Cの左目に魚雷をブツ刺し、その状態のまま爆発させたのだ。

「オオオオオッ!」

そこで突如、重巡り級が主砲を魚雷を発射する。

だが、駆逐艦の機動力でそれを避ける暁と電。

すぐさま電が牙突の発射態勢に入る。

だが、それを阻止せんといわんばかりの別の重巡り級Bが主砲を向ける。

だが、いきなり、脇腹が爆発する。

「ゲウ!?!」

すぐさまそちらの方向へ首を向けるも誰もいない。

つまりは砲撃された訳ではない。では誰が？

「へっへっん。どうよ、この水切り爆撃は」

「正確には反跳爆撃よ、瑞鶴・・・」

「い、良いでしょ別に!」

反跳爆撃。

爆弾を水切りの様に水面で跳躍させて、敵の装甲を側面から攻撃する爆撃だ。

これは日本が英国に使われた攻撃方法だが、それが日本、ましてや艦娘にできない道理などない。

えっへんと胸を張る瑞鶴に申し訳無さそうにツツコミを入れる鳳

翔。

「ありがとうございます、瑞鶴さん」

密かに感謝の言葉を漏らし、電は駆け出す。

そして、牙突を命中させる。

「ぎゃあ．．．あ．．．!?!」

見事、腹に命中し、悲鳴を挙げるリ級A。

だが、それだけでは終わらない。

そのまま捻り、刃を上に向け、そのまま斬りあげる。

「ギャアアアア!?!」

「沈め」

止めに踵落としを喰らわせ、リ級Aを無理矢理海に叩き落とす電。

「な、なあ提督」

『なんだ?』

「なんか．．．いつもと違うくないか．．．?」

『ああ、アイツ今、悪即斬状態だからな』

「あ、悪即斬?」

『別にそうなった訳じゃないけど、なんていうかな．．．深海棲艦相手だと、容赦しなくていいから、手加減抜きでやるというか、スイツチが入るというか．．．』

「分かった。もう良い」

時打の曖昧な説明で、理解できたのか、悩みだした時打を止める長門。

だが、その間に暁はル級Bを潰し、電もリ級を刺し貫く。

「ツ．．．アア!!」

「やかましい」

「ツ．．．」

たった一言で押し黙ってしまうル級。

もう、既に敵ではない。

『あー、全艦、帰還準備。もう勝ったも同然だからな』

一同『了解』

そういう時打に、全員が賛同した瞬間、電の大技が炸裂する。

「牙突・零式イ!!!」

「ギヤアアアアアアア!!!」

大きな断末魔と共に、戦いに決着が着いた。

## 四隻目の戦艦

無事、任務を終えた鳳翔たち。

「そ・れ・で・だ」

報告に来た鳳翔。

一方で執務机に座る時打。

「今回の作戦について何か申し出は？」

「いえ、意図は察していますから」

ふふ、と笑う鳳翔。

昨日の事。

暁と電に何かがあったらしく、時打は今回の作戦を利用して、わざと彼女たちの艦隊をピンチに追い込んだのだ。

「暁ちゃんと言ちゃん。後で大泣きして謝り合っていましたよ」

「さっきまでの雰囲気が一気に壊れたな」

ふつと笑う時打。

「ま、何はともあれ、二人が仲直りしてくれて良かったよ」

と、両手を頭の後ろに持っていき指を絡ませ、椅子にもたれかかる。

「提督、ほれ」

「お、ありがとな長門」

そこへ長門が緑茶を湯呑に入れて、時打の座る執務机に置く。

それを時打は一服する。

「さて、これで作戦は終わりだな。本部への報告は俺がやっておくよ」

「そうか」

「だから、長門と鳳翔は出撃で疲れただろうし、休んでくれて構わないぞ」

「すまないな」

と、退出していく二人。

一人執務室に残る時打。

「さて、報告書に書きますか」

と、報告書にたった三十分で事の顛末を全て書き終えた時打。

「ふう・・・」

この鎮守府に来て二週間。

未だに、時打の事を警戒している艦娘も多々いるが、それでもなんとか話しかける事にまでは打ち解けた。

ただ、自分の過去の事はまだ話していない。

この事実を知っているのは暁、響、雷、電と長門の五人。

ふと、時打は軍服の上着を脱ぎ、机の隅に置く。

そして、白いTシャツ姿となり、左手首を見る。

そこには、黒いゴムの髪留め。

「……」

そして、手を翻し、甲の方を見る。

正確には、腕の甲側。

そこには、深々と、一筋、太い刀傷があった。

時打の方向から見て、手の内側から左斜め下に向かって、肘の辺りで止まっているその傷は、かなり、痛々しいものだった。

それを見つめていると、とある光景が目に浮かぶ。

雨雲が空を埋め尽くし、周りには、廃棄された家電製品や車。ましてや、弾丸の空薬莖まである。

へたり込む、一人の少年の足元には、赤い血だまり。

そして、その血だまりの中心に……

「やめよう」

そう呟き、彼はその傷から目を放す。

そして……

「てい……とく……?」

「!?」

目の前の翔鶴と目が合った。

彼女の視線の先は時打の左腕の刀傷に向けられていたが、時打の視線に気付くと、すぐさま慌て出す。

「ご、ごめんなさい！か、勝手に入ってしまった」

「ああ!?良いんだ！気付かなかった俺が悪かった！だから泣くな頼む



から!」

翔鶴の眼からは涙が零れていた。

「どうやら、何らかのトラウマが呼び起されているらしい。

「ひぐ……えぐ……ぐめんないめんない……」

「え……あーと……だ、大丈夫だから! 処罰とかそういうのしないから! 別に勝手に入っちゃいけないとかそういう法律とかないから!」

未だに、彼女の様に、トラウマを抜け出せていない艦娘もいる。

これも、どうやら課題の一つになりそうだ。

あやすこと十分。

「ぐす……すみません。取り乱してしまって」

「いや……気付かなかった俺が悪かったんだ。謝んな」

と、ぽんぽんと頭を撫でる時打。

それに頬を微かに赤くする翔鶴。

「それで、何か用か?」

「え……あ……」

聞かれた翔鶴はしどろもどろになる。

時打は、しばし考えた後、口を開く。

「もしかして……ただ俺の所に来たかったか?」

「……」

翔鶴は顔を真っ赤にして頷く。

(マジか……)

この頃、あの事件以来、翔鶴が妙になついてきていたが、まさかこれほどとは思ってもみなかった時打。

「まあ、いいけどさ」

「本当ですか!」

「雷も良くここに来てるぜ? 他にも瑞鶴も愚痴をこぼしに来たりだとか、新しく開発したいものがあるから相談に乗ってくれて明石が来たりとかいろいろ」

「そ、そうなんですか……」

それを聞いた翔鶴が少し残念そうな表情になる。

ともかく、ソファに座った翔鶴に加え、時打はその向かいに座る。

「それで……提督……」

「この傷の事か？」

「……はい」

時打は、左腕の刀傷を翔鶴に見せるように持ち上げる。

「少し……昔にな」

「……『飛天童子』の……頃のですか……？」

「……」

それを聞いた時打は分かっていたかのように苦笑する。

「……どれくらい調べたんだ？」

「……暗殺の件数。その殺人数……です」

「そっか……」

気まずい沈黙。

それを破る様に、時打が口を開く。

「昔、守りたかったものを、守れなかった時に負った傷でさ……敵に

刀奪われて、それでつけられたんだ」

「そう……なんですか……」

翔鶴が申し訳無さそうに俯く。

そんな翔鶴の頭を撫でる時打。

「そう落ち込むな。全部俺の落ち度なんだからさ」

「……」

撫でるのをやめる時打。

そして、時打は、左手の髪留めに目を移す。

「それに」

時打は立ち上がり、窓の方へ歩く。

「もう、人斬りの罪を償う答えは見つけてる」

「え……？」

翔鶴は顔を上げ、時打を見る。

「……守り続ける」

左手を窓に触れさせ、外の海岸を見る。  
そして、そのまま翔鶴の方を見る。

「今、この目に映る全ての笑顔を守り続ける。時間が続く限り、敵を打つ。それが俺の、『答え』だ」

と、そう答える時打。

その名の通りの『答え』だった。

「そうですか……」

翔鶴は、心底安心した様に、息を吐く。

それを見た時打は、笑みを零し、また、海岸の方を見る。

水平線に何かを捉える。

「ん……？」

目を凝らす時打。

「あれは……艦娘か……？」

「え？」

翔鶴が、それを聞き、時打のすぐ横に駆け寄る。

通常の艦娘にしては、異常に艦装が大きい。おそらく戦艦級。扶桑や山城の艦装に近いだろう。

だが、所々破壊されておりボロボロ、本体の方も、かなり傷付いている。

「あれは……誰だ……？」

可能性としては、この鎮守府で、一度も見ていない四隻目の戦艦である事だ。

ただ、何故この二週間、一度も見る事が無かったのが疑問だ。

今まで聞かなかつた、長門は何か、隠している様にも見えた。

もしかして、知られたくない理由が……

「う……そ……」

「翔鶴？」

そこでふと、翔鶴が声を震わせている事に気付く。

「なんで……今……」

「おい、どうした・・・?」

だが、そんな時打の言葉を見殺して、慌てて執務室を飛び出す翔鶴。  
「おい!？」

時打もそんな彼女を追いかける。

そのまま鎮守府の正面の海岸に出る。

翔鶴は機装を展開し、海に飛び込む。

「なんだってんだ・・・」

「提督!」

ふと後ろから声をかけられる。

山城だ。

「何があったんですか!？」

「知らん!なんかあそこにいる艦娘の姿を見た途端に入ってしまったんだ!」

簡潔に説明する時打。

「艦娘・・・って・・・」

山城も、その姿を確認した途端、その表情を強張らせる。

「なんで・・・」

「おい!？あの艦娘はなんなんだ!」

問い詰める時打。

だが山城は返答を躊躇うように唇を結ぶ。

「ツ・・・」

時打は、もう一度、海岸の方を見る。

そして、いくらか近付いたのか、その艦娘の正体を確認する事ができた。

「——大和・・・だと・・・!？」

声を押し殺し、そう呟く時打。

## 大和編

### 大和の過去 其ノ壺

遠い、昔。

優しい笑顔の人が、自分に、小さな四角い箱を差し出している。中を開けてみると、中には、丁度、自分の薬指にはまりそうな、銀色の輪っか。

それが、何を意味するのか、自分には理解できていた。それが分かると、自然と涙が溢れてくる。

嬉しくて、信じられなくて、叶わない恋だと思っていた。だからこそ、嬉しかった。

『貴方のそばで……ずっと、がんばります』

だからこそ——悲しかった。

前回のあらすじ——

無事、電と暁を仲直りさせる事に成功した時打たち。

だが、そんな喜びとは別に、鎮守府の正面海域から一人の艦娘が歩いてくるのが、鎮守府の執務室から見えた。

その姿を目視した翔鶴は急いでその人影の元に向かってしまう。

そして時打も、その姿を見た。

その艦娘の正体の正体は、日本最強とまでいわれた最強の戦艦の魂を持つ、『大和型』の一番艦『大和』だった。

しかし、その体はボロボロで、翔鶴が近付いた途端、気絶してしまふ。

早急に入渠させ、時打は、ある五人の艦娘を執務室に呼んだ——

「今まで聞かなかったが、説明してもらおうぞ、長門」

「ああ……分かった」

執務室にて、長門、扶桑、山城、翔鶴と瑞鶴がいた。

その向かいには時打。部屋の隅には響夜と電がいた。

時打の表情は、厳しいものだった。

「以前……翔鶴と瑞鶴の時代にいた艦娘たちの事は話しただろうか？」

「ああ。翔鶴と瑞鶴以外は全員沈んだと……」

「実は……もう一隻いたんだ」

「それが大和だと？」

「ああ。すまない……どうしても、彼女の事は隠しておきたかった……」

長門は、暗い表情で俯く。

それに続くように、他の四人も暗い表情になる。

「隠していた事は不問にしておくが、俺が聞きたいのは、大和に何が  
あったかだ」

と、手を組んで、ゲンドウポーズをする時打。

ふと、長門は、後ろにいる四人の方を見る。

すると、扶桑、山城、翔鶴、瑞鶴の四人は少し躊躇ってから、頷い  
た。

そして、長門は、時打に向き直ると、口を開いた。

「大和は、前任の更に前、名前は……一ノ瀬いちのせ 悠斗はると提督の時に建造さ  
れた艦娘で……唯一、その提督とケツコンカツコカリをした艦娘だ」  
「ケツコンカツコカリか……一人というのを考えると、ただの戦力  
増強……て訳じゃ無いな……」

ケツコンカツコカリとは、とある特殊な指輪によって艦娘の限界を  
突破させる行為の事だ。

戦力増強の為に沢山の艦娘に指輪を渡す提督がいたり、逆に、想い  
を寄せる艦娘にだけ渡す提督もいる。

最も、後者の艦娘の方が、かなり高い戦果を叩き出しているのだが。  
最も、条件さえ満たしていれば、一度指輪を嵌めただけで、限界突  
破できるらしく、外しても、大きな戦力低下にならないという事もあ  
るらしい。

「はい、提督は、大和さんの事が好きでした」

そこは翔鶴が答える。

「なるほどな……それでそいつの転勤が決まって……」

「捕まった」

「え……?」

時打の言葉を遮る様に、山城が口を開く。

「あの提督ひとは、捕まった。あの提督ツクスのせいだね」

「……どういう意味だ?」

さらに険しい顔で、長門を睨む時打。

「……資材の違法入手、報告書の捏造、更には、轟沈した艦娘の隠  
蔽」

「全部偽物だよな?」

「当然よ」

瑞鶴が声を震わせる。

「あの人が……そんな事しない……そもそも、一人も沈めた事なんてなかったツ。なのに……なのに……ツ」

瑞鶴は、悔しそうに、歯を食いしばる。

「そうか……」

ふと、時打は、一息つくくと、話題を進ませた。

「それで、どうして大和は逃亡したんだ？理由は分かるが……それを決意させるキツカケがなにかあった筈だ」

「……」

黙りこくる五人。

しかしそこへ……

「提督！」

バンツ！と、黒髪の小さな少女が勢い良く入ってくる。

初春型の四番艦『初霜』だ。

「どうした初霜？」

「大和さんが、眼を覚ましました！」

『ツ！』

それを聞いた一同は急いで医務室に走り出す。

「んん……んん……？」

目を覚ませば、そこは見知らぬ……いや、どこかの医務室の天井だった。

「あれ……私……」

半ば混乱している様で、頭が働かない。

とにかく、起き上がろう。

「く……うっ……」

だるい体を持ち上げ、起き上がる大和。



「あら、起きたの?」

「え．．．?」

ふと、声がした方を見ると、そこには、オレンジに近い茶髪をした少女が、椅子に座ってこちらを見ていた。

——誰だ?

「えつと．．．ここは．．．?」

「貴方の鎮守府、黒河よ」

「ッ!」

そう告げる彼女に、大和は体に電撃が走るような衝撃に見舞われる。

——ここが．．．!?戻ってきてしまったの．．．?!

体を恐怖で震わせる大和。

また．．．あの恐怖を．．．

「あの司令官はもういないわよ」

「え．．．?」

ふと、少女の言った言葉の意味を理解できなかった。

「初霜。司令官たちにこの事伝えて」

「は、はい!」

初霜と呼ばれた黒髪の少女は勢い良く部屋を飛び出す。

「あの．．．」

「ん?」

書類に何かを書き留めている少女に、大和は問いかける。

「もう、あの提督がいないって．．．どういう事．．．?」

「ああ、その事。変わったのよ。今は新しい司令官がこの鎮守府を任されてるわ」

「．．．」

その提督は安全なのか、その提督は危険なのか、その提督は、誰かを沈めていないか。

大和は、その事を聞こうとしたが、躊躇った。

だが．．．

「あの提督は安全だし、優しいし、誰も沈めていないわ。まあ、やって

るのは演習ばつかだからなんだけど」

それで、大和は、ある人物を連想させる。

——もしかして、あの人が……

そんな思考を断ち切るかのように、ドアが開く音がした。

「ツ！」

ふと身構える大和。

「あ、司令官」

「!?」

この角度からでは、カーテンが邪魔で見えない。

だから、少女がいった事に思わず体を硬直させてしまう大和。

「ご苦労さん雷」

そして、その提督を目に捉え……少し落胆した。

夜空の様に真っ黒な黒髪に、深い、深海の様にあお碧い眼。

そして、腰に携えた、日本刀……分類では打刀うちがたなだろうか？

——あの人じゃない……

そう思っている内に、彼は、敬礼をした。

「どうも、大和。俺は今、この黒河鎮守府を任されている提督、天野時

打だ」

その顔に笑みは無い。

ただ分かるのは、底が見えないという事。

「……大和型の一番艦、大和です」

ただ、そう返事をする大和。

「大和さん」

「ツ!?!」

その声を聞いた大和は、弾かれるように顔を上げる。

翔鶴だ。

「しよ……かく……」

「どこにいったんですか……」

その顔は、今にも崩れて泣き出しそうだった。

「……」

そんな彼女に、大和は顔を反らす事しか出来なかった。

否、彼女が顔を背けた相手は、翔鶴の後ろ、長門だ。

その眼からは、明確なる、『怒り』の感情が見て取れた。

「大和」

ふと、時打が大和に声をかける。

「動ける様なら、執務室に来てくれ。そこで話をしよう」

それだけを言い残し、彼は医務室を出ていく。

「……」

ただ、大和は、その背中を、見つめる事しか出来なかった。

## 大和の過去 其ノ弐

いつもの服装に着替える。

妖精たちが治してくれたのか、綺麗に元通りになっている。

廊下を歩いてみると、あの頃、とまで言わないが、それでも、皆に元気が取り戻されていた。

時々、こちらをちらりと見る艦娘もいたが、声をかけてくる事は無かった。

そうしている内に、執務室の扉の前にたつ。

「……………」

そこで少し深呼吸をして、扉をノックする。

「大和です」

「入ってくれ」

返って声に従い、大和は執務室の扉を開ける。

そこには、執務机ではなく、その前にあるソファに座っている時打の姿だった。

他は誰もいない。

「……………」

「秘書艦の長門には席を外して貰ってるよ。なんだか嫌なムードだったからな」

「はあ……………」

「さ、座ってくれ」

「いえ……………お気遣い無く……………」

と、遠慮する大和。

「いやいや、立っていても疲れるだけだろ？話しは長くなりそうなんだし、駄菓子もあるぞ」

と、向かい合っておかれているソファの間にある長方形の机には、確かにせんべいなどの菓子が置かれていた。

「……………分かりました」

と、大和は観念して、時打の向かいに座る。

「それで……………」

時打は、大和に対して、一度も笑みを向けていない。

それが、何を意味するのか、分からないが、とにかく大和も油断しないようにしていた。

いつ、自分の心の隙に入り込んでくるか、分からなかった。

「それで……なんで帰ってきた？」

「え……？」

「何故、今頃になって帰ってきた。このまま帰らなければ、戦う事はもうしなくて済む筈だが？」

「それは……」

よく考えてみると、自分は、ここに帰ってくるまでの記憶がすつぱりと抜けてしまっている。

思い出そうとしても、何かがフラッシュバックする訳でもなかった。

「思い出せないか？」

「……はい」

そんな大和を見抜くように、時打は問いかけた。

「そうか、それじゃあ、次は、どうしてこの鎮守府を出て行ったかだ」

「ツ……」

その質問に、口を自ら固く結ぶ大和。

「悪いな。俺はこの提督として、この艦娘の事情は全て知っておきたいんだ」

「ツ……それでどうするつもりですか……？」

大和は時打を睨む。

時打は、一つ間を置いて、言う。

「別に、なれる事なら相談相手になるさ」

「……は？」

その以外の返答に口をあんどりと開ける大和。

「俺じゃあ解決できない事はこの鎮守府にはいくらでもある。まだ過去のトラウマを抜け出せてない艦娘や、提督という存在を警戒している奴だっている。課題がまだまだある」

ただ、と一息おいて。

「出来る事なら、俺が解決したい」

と、俯きながら、そういう。

「……」

その言葉に、大和は見つめる事しか出来なかった。

だが、大和はまだ彼を信用できなかった。

「じゃあ……その刀はなんですか？」

「ああ、これの事か」

と、時打は、自分の左側にある刀に手を伸ばす。

「今の時代、提督でさえも刀を持つ人はいない筈。それでいったい、何人斬り殺したんですか？」

「……」

時打は、何も言わない。

——これだけははつきりさせたい。

誰かを殺している人間に、この鎮守府は任せられない。

いずれ、ここにいる艦娘も斬り殺されるかもしれない。

それだけは、絶対に阻止しなければならぬ。

いや、もう既に、誰かが……

「——確かに、俺は過去に、何千人もの人を斬り殺した」

「ッ!？」

時打の答えに、身を強張らせる大和。

人殺し——

その事実を知った今、なんとしてもこの事を、誰かに——

時打が、鞘に納められた刀を、自分の前に持っていき、ゆつくりと抜き放つ。

「ッ!」

まさか、抜くのか？ここで斬り殺して隠蔽する気か？

思わず、艤装の展開準備に入る大和。

そつちがその気なら、容赦は……

その刀を見た時、大和は啞然とした。

「刃が……逆さま……?」

「そう」

と、時打は、抜き放った刀を、机に鞘と平行になる様に置く。

「逆刃刀・深鳳。それがこの刀の銘だ」

「……」

「こんなもので、人が斬れるかよ」

その事実には、大和は唾然とする大和。

「し、しかし、反対の刃で他人を……」

「それじゃあ、なんでわざわざ刃を逆さまにつけたんだよ」

「ツ……」

確かに、人斬り殺すのが目的なら、わざわざそんな刃を反対つけた逆刃刀など必要無い。

ならば……何故……?

「不殺」

「え……?」

「それが俺が立てた誓い。誰も殺さないという、俺が過去に殺し過ぎた人々への償いの誓いだ」

「……」

その眼に、偽りなど感じられなかった。

時打は、机に置いた逆刃刀を持ち上げると、それをゆつくりと、鞘に納める。

「さて、これでこの刀の話は終わりだ。さて……俺の過去を話せば、お前は何かを話してくれるか?」

「え?」

「その方が公平で良いだろう?」

「そ、それはそうですが……」

もししようもない事だったらどうしよう。そう考えてしまう大和。だが、先ほど、何千人も殺したと言っていた。

それはつまり、彼が殺し屋だった頃の話だという事。

——だが、何かおかしい。

彼の若さからして、過去に殺し屋だったなんてありえない。

少なくとも、学校には通っていた筈で、それが海軍学校なら尚更、殺しの依頼を受ける事など、受けられても、やる事はできない筈だ。だったら・・・どうやって。

「飛天童子って名前を知っているか」

「ちよ、まだ聞くとは・・・」

「いいから黙って聞いてろ。俺には、部下であるお前の過去を聞く権利がある」

「ッ・・・」

そう言われると反論できない。

「それで、どうなんだ？飛天童子って名前に聞き覚えあるか？」

「・・・はい」

かつて金山市に君臨していた最強の人斬り。

子供の身であらゆる敵を討ち取った人物で、金山市壊滅に導いた張本人。

その殺人した数は・・・実に約三千人。

「それが貴方だと言うのですか？」

「そうだ」

と、時打は、左腕をまくしたてる。

そこには、痛々しい程の刀傷。

「これはその時のものだ。ある相手にやられてな」

「そう・・・なんですか・・・」

大和は俯いてしまう。

「それで・・・どうしてここを出て行ったんだ？それも海の方に」

「・・・」

口を、また堅く結ぶ大和。

「・・・まだ、信用したとは言ってません」

「そうか・・・」

「だから、まだ話しません」

と、大和は要件を、破棄した。

「結構だ」

と、時打は椅子に深くもたれる。



「お前、長門たちと同じ部屋にするか？それとも、別に個室で寝るか？」

その状態のまま呟く時打。

これには、少し考え、大和は口を開く。

「別の部屋で……お願いします……まだ、顔を合わせられません」  
「そうか……この部屋を出て、右に行つて、その廊下の角をまがれば電がある筈だ。そいつに案内を任せる」

「はい」

力無く、そう答えて、立ち上がる大和。

そして、部屋を出ていくとき。

「大和」

「？」

時打が呼び止める。

それに振り返る大和。

時打は立ち上がっており、真つすぐにこちらを見ていた。

「……この奴と、仲良くしてやつてくれ」

大和は、それに返事をせず、出ていく。

そして、でてった時に、ドアにもたれかかる。

「……できませんよ……見捨てた大和なんかが……この子たちと……」

大和は、一筋、頬に光を落とした……

翌日。マルキュウマルマル——午前九時。

「どうしても出たくないのですか？」

「はい……でたくありません……」

「それでも日本最強の戦艦、大和なのですか？」

「今の大和は最強でもありません……」

「ッ……それでも大和撫子なのですか？」

「大和は大和撫子ではありません……」

「名前に大和がついているでしょ!？」

「ここは時打が提供した大和の部屋（仮）だ。

中には電と大和。

だが、今、大きな問題があつた。

まさかの大和が引きこもりだったのだ。

「これは誤算だった……」

「私もですわ……」

隣で最上型重巡の熊野がそういう。

なんでも長門が気分が悪いといって秘書艦の仕事を休んで、代わりにしっかりといていそうな熊野に頼んだのだ。

「あの噂の大戦艦が、ここまでの引きこもりだったとは……」

「それは私も同じです」

「流石にこれは予想外だったわ……」

片側には吹雪、叢雲の特型駆逐艦唯一の二人だ。

「大丈夫なんでしょうか……」

更に神通もいる。

「……なんか多すぎない」

『それを言ったら負けです』

纏めて一括されてしまい、縮こまってしまう時打。

「あーもー!」

「え!?!ちよ!?!何するんですか!?!」

「手加減!部屋から出ていけ牙突!」

なんか妙に長い名前が出てきたと思つたら、扉が勢い良く相手大和が転げ出てくる。そして、顔面から床に落下。

「むぎゅ!?!」

年頃の女の子が出していいのかわからない悲鳴が聞こえ、思わず吹き出しかける一同。

「いたたあ……ッ!?!」

額を抑えながら起き上がり、時打たちの姿を確認した途端、その顔を一気に曇らせる。

「あ……あの……」

「あー、やっと出てくれた」

大和の背後から電がずかずかと出てくる。

「つて、何初っ端から暗い顔しているんですか?」

「……」

大和は何も話さない。

それに頭をかく時打。

「とりあえず、食堂行こうぜ」

「……大和は食べすぎます……」

「いや、食べすぎるとか過ぎないとかの問題じゃ……」

「資源が無くなってしまいます……」

と、どんだん声小さくなっていく大和。

「……熊野」

「私にも無理ですわこれは」

艦娘の、それも日本の軍艦でこういったお嬢様言葉を使うのは熊野だけなので、独特な喋り方に半ば混乱している時打。

「仕方無い……とりあえず、飯とかは食わなくて良いから、今日

一日外で過ごせ。良いな?これは命令だぞ?」

「……命令とあらば……」

と、よろよると立ち上がる大和。

しかし、未だに、その顔は暗いままだ。

——相当、深いな……

「熊野、後で」

「了解ですわ」

と、小声でそう声を掛け合う時打と熊野。

「お前ら、また後でな」

「はい、司令官」

「わかりました」

「分かったわ」

「お仕事頑張ってるのです」

そして、執務室に戻る時打と熊野。

「それで・・・」

時打は、執務机の前に立ち、それに右腕に置く。

「お前なら何か知っている筈だ。大和がいた時に何があったのか」

熊野は、あの前任の提督に最初に建造させられた艦娘だ。

つまり、今の鎮守府では、翔鶴、瑞鶴に次ぐ最古参組なのだ。

「資料によると、大和がいなくなったのは、十年前。それも、あのクソ提督が着任したばかりで、ある作戦に出撃した頃だな」

「はい、その時、私は参加していませんでしたが・・・」

そこで暗い表情で俯く熊野。

だが、一度、目を閉じた後、熊野は顔を上げ、真つすぐにこちらを見て、告げた。

「資料にある通り、その作戦で帰って来たのは・・・長門さんだけです」

「そうか・・・」

短く返事を返し、左手を顎におき、時打は考える。

表情を見て、今の相手の心理を見抜く事は時打の十八番だ。

だが、流石に相手の記憶まで読み取れない。できたらそれはすでに異常な発達を見せた科学の域か、超能力の域である。

しかし、その時の事を熊野に聞きたいが、流石にその時のトラウマを呼び起こさせるわけにはいかない。

相手を説き伏せるには相手の過去を知るか、それとも剣を交え、その技から相手の意思を読み取る他無い。

この場合は、相手の艦装、だが・・・

「最悪、決闘か・・・」

つい、口に出す時打。

「やめてくださいまし。大和さんはあれでもこの鎮守府のエースを務めていた方ですわ。長門さんとは実力が違いすぎますの」

「そうなのか？」

「ええ。大和さんは、今までに長門さんでは沈められなかったレ級を九隻も沈めているのですよ」

「あのレ級をか」

レ級とは、深海棲艦の戦艦で、戦艦ル級の最上位クラスである戦艦ル級改フラグシップよりも上の存在で、一介の艦娘では、一対一で当たるのでは死は免れない。

戦艦並みの火力と装甲、更には雷撃も可能で艦載機も飛ばせる、いわば万能戦艦なのだ。

こんなチートみないな戦艦に今までどれほど苦労させられたかは、言うまでも無いほどに強力な深海棲艦なのだ。

「それは凄いな」

「褒めてる場合じゃありませんわ。当たれば死ぬ事は必至。勝ち目なんてありませんわ」

「でもなあ……」

それでも食い下がる時打。

「はあ……うちの提督は優しいけどバカなんですのね」

「剣術バカなら否定しない」

「そりゃ剣持ってますからね」

と、ズレた方向で胸を張る時打に呆れる熊野。

「まあ、一応その事も視野に入れとくか」

「ちよ、させませんわよそんなこと……」

「そーいうと思ってー!」

突然、執務室の扉が開け放たれる。

「もう既にあの闘技場の改修工事を始めてるよー!」

と、明石が思いつきりそう報告した。

「ちよ!?!明石!?!」

「そうか、資材回しとくよ」

「提督まで!?!」

時打と明石の行動についてこれなくなってきた熊野。

「なんでしよう……この蹂躪されてる感……」

ズーンと、項垂れる熊野。

「まあまあ」

そんな熊野の背中をさする明石。

「とりあえず、いつでも良いようにしておくから」

「ああ、頼む。それで、艦装の方は？」

「完璧よ。不調はもうないわ。ちゃんと妖精たちに聞いたから」

ちなみに、おさらいしておくが、艦娘と艦装とその中にいる妖精と

の関係は、人間の体でいう中枢神経と体と運動神経の関係なのだ。

中枢神経艦娘が妖精に命令を下し、運動神経艦装を動かすといった感じだ。

たいていの艦装の管理はその妖精たちが受け持つ。

「そうか、大和の要望は出来る限り聞いてやってくれ」

「アイアイサーー！」

元氣よく返事をする明石。

「全く、内の提督は色々と規格外ですわね」

「よく言われるよ」

フツと笑う時打。その様子に呆れる熊野。

「ま、一応準備はしとくよ」

時打は深鳳を持って執務室を出ようとする。

「どこに行くんですの？」

「竹林。いつでもやれるように体を温めておかなきゃ」

「今すぐやるって訳じゃないのに」

「良いんだよ。備えあれば患いなし、ていうだろ？」

「そうですね。私も見ても良いかしら？」

「構わないよ」

と、彼らは竹林に向かった。

鎮守府一階廊下。

「……………」

電は、酷く呆れていた。

さつきから大和がそわそわしているのだ。

ただでさえここは艦娘の数が少ないのに何を気にしているのだろうか？

「大和さん？」

「ひゃい!？」

なんとも情けない声を出した大和。

それにジト目になる電。

一方の大和は顔を赤くし、縮こまる。

「もう少し堂々としたらどうなんですか？」

「や、大和はただ・・・会いたくない人が・・・」

「会いたくないって誰なのですか？」

「そ、それは・・・」

電に聞かれ、言葉を濁す大和。

だがそれは、大和たちの進行方向にある曲がり角から出てきた人物によって遮られる。

「あ・・・」

電は、大和の視線に気付き、その方向に視線を向けると、そこには長門がいた。

「あ、長門さん」

「あ、ああ・・・」

ふと、長門がいつもの調子じゃないという事に気付く電。

そして、長門は大和と目を合わせる。

その視線の先には、怯えた表情で長門を見る大和。

その様子に、見ていられなくなったのか、長門は目を反らし、彼女たちに背を向け歩き出す。

「提督よろしく言っておいてくれ」

「あ、分かったのです」

と、長門をさつきと歩いて行ってしまい、すぐ隣の角を右に曲がっていく。

電は、そんな長門を見送ると、大和の方へ視線を戻す。

そこには、俯き、両手でスカートの裾を握りしめる大和がいた。

「……」

——何があつたのです？

電は、そう心の中でつぶやく事しかできなかつた。

先ほど長門が曲がつた廊下のすぐそこで——

バキッ！

鈍い音が響き、長門が、今自分を殴つた自分の右拳を見つめる。

「……何をやっているんだ……私は……」

その声には、酷い後悔が感じ取れた。



## 大和の過去 其ノ参

ヒトヨンマルマル——午後二時。

大和は竹林に来ていた。

自分の記憶の中で、最も安心できるのがこの場所だからだ。

幸い、電は駆逐艦たちに連れていかれたので、大和は今完全なフリー。

ならば一目のつかない所で、ゆつくりと……

「こんっのー!」

「遅い」

「ぎゃん!」

突如、どこからか聞こえてきた声で身構える大和。

「まだまだアア!!」

「猪突猛進戦法じゃなおさら勝てないぞ?」

「オレが同じ戦法で来ると思ったか!」

「だろうな」

「へ?」

「セイツ!」

「ぎゃあ!」

声と同時に鋭い金属音が聞こえてくる。

誰かが金属製の武器を打ち鳴らしているのだろうか?

そして、茂みから少し顔を出し、視線を向けると……

「あれは……」

「これで、どうだアア!!」

左手に持った刀剣を右から左に薙ぐ、天龍。

だが、その刀は空ぶつてしまう。

「飛天御剣流」

「しまっ……!」

「龍巻閃!」

「ぐあ!」

それよりも早く、それを背後から受けようとしていた人物、時打が時計回りに高速回転。

右足を軸にして刃をかわし、その遠心力を利用して、天龍の背中に叩き込む。

そのまま地面に倒れる天龍。

「ツ……！」

思わず立ち上がりかける大和だったが、すぐに天龍が立ち上がったので、止まる。

「だー！くっそ！全然勝てねえ！」

「いや、随分と動きが良くなってきてる。水上の白兵戦なら、たいていの相手にはやられないだろう」

「そういうけどよ……オレは今、アンタに勝ちたいんだよ。電にも勝てねえしよお……」

「牙突は突進技故に視界が狭くなるから、右側に回り込めば一撃ぐらいは入れられるぞ？」

「本当か!？」

「最も、牙突を見極められればの話だがな」

「ツ……」

そんな会話をする時打と天龍。

「よし！もう一度頼む！」

「ああ、良いぞ」

そして、試合を再開する二人。

「……」

「天龍。さつき提督が鍛錬している時に、あんな風に襲い掛かって返り討ちにあつたんですのよ」

「!？」

いきなり声をかけられ、ビクツとなる大和。

気付くと、左側に竹に背中を預けている熊野の姿があった。

「どうやら、大和の存在に気付いているらしい。」

「不思議なものですわよね。たった二週間。それだけでこの鎮守府のみんなに受け入れられてるなんて。どんな器の持ち主なのでしょう」

か？」

淡々と語り出す熊野。

「初日に長門さんの砲弾を斬った時は、どうしようかと思つて、いない筈の鈴谷を探してしまつて、次に提督の言つた生きろという言葉に困惑して。そして長門さんと決闘するつていつた時には、何を考えているんだと思つて執務室に押しかけた時に、あの人なんて言つたと思ひますか？」

熊野が懐かしそうに笑う。

『『お前たちを知る為だ』つていつて、お茶を出してきたのですよ。しかも危険物なんてないとも言つて口をつけたものを差し出して来た時には、本当に馬鹿だつて思ひましたわ。間接キスというものをご存知無かつたのかつて今でも思ひますわ』

天龍がまた吹っ飛ばされる。

それでも負けじと剣を拾い、時打に飛びかかる。

「そんなあの人の言葉や行為に、私、少し口説かれてしまいましたわ。本当に優しくて、私たちの為に、体まで張るんですのよ？長門さんに勝つた時は、本当にやるんだなつて思ひましたわ。そして、優しいからこそ、過去の事を引きずつてゐる。少なくとも、彼に本気で惚れてゐる翔鶴は、そう思つてゐる筈ですわ」

「……」

翔鶴がああ提督に惚れてゐるのは驚きだが、それよりも驚いたのは長門と決闘で勝つたという事だ。

一体、ただの人間がどうやつたら艦娘、それも戦艦に勝てるのか……。

「……」

「貴方は、どう思いますの？大和」

「……」

大和はしばし、考え、震える声で答える。

「……分かりません……大和には……あの人の事が分かりません……」

頭を抱えるように、そういう大和。

「……どうすれば、いいんでしょうか……」

「そうですね……一度、本音で語り合ってみてはどうですか？」

「ほ、本音で？」

熊野の言葉に困惑する大和。

「まだ長門さんとの問題を解決していないのでしょうか？」

「ッ……」

その事を指摘され、口ごもる大和。

「だったら、その淀んだ気持ちを何かをやって吹っ切らせれば良い。それも、提督と戦えば特に」

実は、翔鶴救出の後、何人もの艦娘が時打に決闘を持ちかけた。

しかし、全員が全員、返り討ちにあった。

山城の艦装が龍槌閃によって破壊され、川内の俊敏な動きでも神速には追いつけず、瑞鳳が艦載機で攻撃をしかけても龍巻閃・息吹で全て吹き飛ばされアウト。

しかし、その戦いの中で、時打が彼女たちに言葉をかけ、心を解きほぐし、そして信頼を得た。

彼は、そんな風によこの艦娘たちと、本音で語り合う様に、一本の刀で戦った。

嘘偽りなく、本気の技で。

「……」

「どうします？裏にある闘技場では、既に貴方と提督が戦う事を想定して改修工事が行われていますわよ？」

そこまでする必要があるのか？と、なんとなく疑問に思ってしまう大和。

本気でぶつかると……

ただの人間相手に。

「……少し、考えさせて下さい」

そう言い残し、立ち去る大和。

「……」

「わあああ!?!」

「!?!」

いきなり天龍の悲鳴が聞こえ、弾かれるように熊野はそちらを見た。

その瞬間――

ドウツツ!!

九つの残像が見えた――

「……………」

「……………」

そして、轟音と共に、天龍とすれ違う時打。

一方の天龍はというと、服に八つ、擦った後があり、頭の髪がほんの数本はらりと落ちる。

大きなダメージは無い。故に、寸止めだ。

その技の迫力にしばし絶句するしかなかった熊野と天龍。

「ふう……………」

息を吐く声が聞こえ、我に返る熊野と天龍。

天龍はバツと振り返り、時打の後ろ姿を見る。

だが、その表情は、恐怖で埋め尽くされていた。

熊野の表情も、得体のしれない技を見せつけられて、わなわなと震えていた。

時打は、何も言わず、剣を右に薙ぎ、そして腰より少し上に手を挙げるとくるりと刀を反転させて逆手持ちになると、そのまま鞘に納める。

そして振り返ると、いつもの笑顔で彼女たちに微笑む。

「悪い。あんまりにも天龍の戦法がすごかったもので、ちよつと大技使っちゃったよ」

「すまない、と言いながら、苦笑する時打。

「さ、さっきの技に名前は……………」

天龍が震える声で尋ねる。

その問いに時打は……………」

「大和と戦う時に、技名を言いながらやってやるよ。もし早く知れた

かつたら電に聞くんだな」

と、時打は歩き出す。

「今日はここまでにしよう」

そう言い残し、彼は去っていく。

堤防の上で、体育座りをしながら、大和は物思いにふけていた。先ほどから、熊野に言われた言葉が妙に引つかかる。

決闘、それも提督、更に言えば人間だ。

とても艦娘と互角に戦うなど、規格外過ぎてやる気にもならない。

——分らない。

考えれば考える程分からなくなっていく。

あの天野時打という人間が。

深海棲艦相手に何も出来ず、自分たち艦娘に頼る事しかできない、ただの人間の癖に、艦娘と互角に戦う事が気に喰わない。

それでも、彼を信頼する艦娘が何人もいるというのも、また、事実。

まるで、『あの頃』の様に——

——違う。あの提督はあの人じゃない。重ねてはいけない。

——あの人以外、信じられない。信じてはいけない。信じては——

——そう、割り切ろうとする大和。

「……どうすれば、良いんですか？……一ノ瀬さん」

ここにはいない、大切な人の名前を呼ぶ大和。

——それは……あの、残忍な提督が着任し、早々に、轟沈が多くなってしまう、新たな建造艦が、多くなってきたころの事だった。

フィリピン海。

そこは、かつてマリアナ沖海戦が起きた場所であり、史上最大にして最後の航空機動部隊決戦となった場所だ。

そして、そこには、空母の大鳳、翔鶴の残骸が眠る場所でもある。そして、そこに向かわされた大和、長門、陸奥、千歳、夕立、村雨の六人。

この作戦、戦略以前に、士気がガタガタだった。

また、誰かが沈むのかという根拠のない迷信を胸に抱いた状態で、出撃させられればそうなるのは当然。

そして、最も精神にきていたのは大和だった。

何度も仲間が沈められる瞬間を見せられ、抗議する度に嘲笑られ、艤装を展開しようとした瞬間、彼の秘書艦である五月雨に取り押さえられる。

それがどうしようもなく悔しくて、同時に、いつ自分が壊れてしまふのではないかという恐怖があった。

そして、悪夢は現実となった。

未知の深海棲艦の出現。

その一撃で夕立が沈む。

そこからは一方的な展開だった。

敵の連合艦隊に出くわし、どんどん仲間が沈んでいく様に耐えられず、逃げた大和。

長門が止めたが、それを振り切って逃げに逃げ続けた。

そこから先は、覚えていなかった。

気がつけば、ここに戻ってきていた。

あれから、十年以上もたっていたらしい。

その間、自分は何をしていたのか、何故、なんの補給もせず十年間生き残れたのか、それがさっぱり分からなかった。

ただ、気が付いた時に思った事は、どうしようもない、後悔だった。既に、翔鶴と瑞鶴以外の、あの頃の仲間たちはもういない。

全てが、あの男に建造された艦娘だけであり、どうしても、大和は『偽りの仲間』という認識を抜け出せないのだ。

本当に、仲間だと信じられない。  
知らない人は信じられない。  
初対面の相手が信じられない。  
それが、大和の根本に座する、絶対価値観だ。

「……………」

両膝に顔をうずめる大和。

——もういつその事、このまま……………」

「……………できあ、川内って酷いのよ。夜になると夜戦だ夜戦だー！つ  
て言って夜騒ぐから眠れなくなつて眠れなくなつて」

「ああ、確かにあの騒音は迷惑だな」

「でしょ!? そう思うでしょ!? いつその事口にガムテープでも貼っ付け  
てろっていいいわよ全く」

ふと、後ろから声が聞こえた。

首だけを後ろに向け、肩越しに、その声の正体を見る。

「ハッハッハー！ そりゃあ良いなー！」

「よし、今からでもガムテープを……………」

そこにいたのは、緑かかった黒髪を二つに結つて、最近改装したら  
しく、黒っぽい道着と茶色のスカートみたいな袴を来た艦娘、空母の  
瑞鶴と、腹にサラシを巻き、黒ずんだ白い無生地ズボンに白いボロ  
コートを着ており、右手には釣り竿、左手にはバケツといった道具を  
持っている男が一人。

明らかに、この人間、更に海軍関係の人間ではない。

「ッ！」

思わず立ち上がり身構える大和。

「わー！ 待って待って！」

「落ち着け！」

そんな大和を止めるように、瑞鶴は両手を前に、男は釣り竿を持っ  
た右手をそのまま突き出す。



「どうして、一般人がここに！」

だが、それでも警戒を解かない大和。

「待って大和さん！この人は翔鶴姉の恩人なの！今、訳あってここに泊めてるだけだから！」

「そ、そうだぞ?!翔鶴救出に協力してやったんだから俺は！」

と、弁護する瑞鶴と弁明する男。

「……信ずる証拠は？」

「あー、もう！前はこんなに疑心暗鬼じゃなかったのに……！」  
頭を抱え始める瑞鶴。

「ツ……」

その様子に心を痛める大和。

瑞鶴がこうなると、大抵の事は本当だ。

あまり、瑞鶴を疑いたくないのが大和の本音だが、時打以上に得体のしれないこの男の事はどうしても信用ならないのだ。

と、そこで男が口を開く。

「あー、俺は佐加野響夜。この裏手にある黒河市で喧嘩屋をやっていた奴だよ。話しは時打から聞いている。俺はただここで瑞鶴と釣りをしに来ただけだからよ。邪魔なら場所を変えるが……」

と、自己紹介してきた。

その上、この場から退こうとしている。

「いえ……良いですよ。そこで」

「お、悪いな」

と、その場に座り込み、釣り糸を海面にたらす響夜。

大和は、響夜に背を向けて、また座る。

一方の瑞鶴は安心した様に安堵の息を漏らし、響夜の隣に座る。

そのまま、沈黙が続く、釣りの方にも音沙汰無のまま、時間が過ぎていく。

ふと、そんな沈黙を破ったのは響夜だった。

「お前、前はここのエース務めてたんだって？」

「……いきなりなんですか？」

「いや、ただ聞いたただけだ。気にすんな」

と、また気まずい沈黙が続く。  
が、今度は大和がその沈黙を破る。

「……確かに、私はこの黒河でエースと呼ばれていたかもしれませ  
ん」

大和が語り出す。

「……あの男が来るまでは、楽しい事が沢山ありました。春はお花見、  
夏は夏祭り、秋は紅葉狩り、冬は雪合戦。本当に、退屈しない毎日で  
した……」

だんだんと、声が震えてくる。

「そんなある日、提督……一ノ瀬さんは、海軍警察に捕まりました。  
本当に、何もしていないのに……誰も、轟沈なんてさせていないの  
に……」

それは、悲しみではなく、怒り。

「何も、出来なかった。ただあの人が連れていかれていくのを、見る事  
しかできなかった……私は、逆らう事が……出来なかった……」  
だんだんと、怒りから、どうしようも無い悔しさが滲んだ声が漏れ  
る。

「違う」

突然、瑞鶴が否定をする。

「瑞鶴？」

「大和さんは……何もなかった訳じゃない。提督が連れていかれ  
るのを、黙って、何も出来なかった私たちと違って、大和さんは、しっ  
かりと自分の意志を言えた。何も出来なかった訳じゃない……！」

声を震わせ、確かな、ここにはいない、誰かに向けられるべき怒り  
を込めた視線を、水平線の彼方に向ける。

「大和さんは、確かに言った。提督は誰も沈めていない。そんなのは  
全て出鱈目でたらめだつて。でも、あいつらはそんな大和さんの言葉に耳を貸  
さなかった。それだけじゃなく、余りにもしつこいからつて、撃つ  
て……本当に、何なのよ！」

と、波に打ち上げられて、落ちていたのか、手頃の石を掴み、立ち  
上がつてそれに怒りをぶつけるように投げる。

ぽちゃん、と音を立てて水面に沈んでいく。

「……………」

「……………大和さん」

そんな様子を見届けた瑞鶴が、幾分か落ち着いた声音で、大和に問う。

「大和さんは、今はどうなの？悔しい？それとも、悲しい？それとも……………居なくなりたい？」

「……………」

瑞鶴の言葉を、黙って聞く大和。

「大和さん……………」

瑞鶴は、そこで一つ間を置く。

そして……………」

「……………提督さんと戦ってみなよ」

「……………え？」

大和は思わず瑞鶴の方を見る。

「答えが見つからないなら、提督と戦う。きっと、その戦いの中で、『答え』が見つかるから」

瑞鶴は、実は翔鶴より一足先に、時打の左腕の傷と、『答え』を知ったのだ。

そして、支えていこうと思った。

ついでに、姉の恋を応援する為に。

「謝りたいんでしょう？長門さんに」

「……………」

大和は、無言でうなづく。

「そうと決まれば、後は行動あるのみ！ね、響夜！」

「おう！そうだな！」

と、釣り糸を引き上げた響夜がすでに戻る準備を済ませていた。

「え……………え……………？」

その行動に困惑する大和。

「行こう大和さん！本音をぶつけるなら今だよ！」

「ちよ!?まだ、やると決めた訳じゃ……………」

「だったら、アイツを見極めるって事で良いんじゃないやねえか？」  
「！」

響夜の言葉に、ハツとする大和。

確かに、時打はこの提督。

そして、この艦娘にも認められ、慕われている。

だが、自分は、まだ彼の事が信じられない。

だったらどうするか？

本当に信用出来る人かを見極める他無い。

大和は、ハア、と溜息を吐き、そして、よどみの消えた瞳を二人に向けてる。

「——提督はどういう戦い方をしますか？」

## 何がビツクセブンだ

「は!？」

気が付く。

どうやら、しばらく意識を失っていた様だ。

「ツ……皆は……」

辺りを探しても、誰もいない。

あるのは、硝煙の匂いと、海面に浮かぶ、血。

「う……」

その無残な光景に、思わず吐き気を覚える。

そうだ。彼女を探さなければ——

「陸奥……陸奥はどこだ……」

立ち上がり、必死に探す。

痛む足に鞭を打ち、必死にこの場所を探す。

「陸奥……陸奥……」

必死に、妹の名を呼ぶ。

だが、どれほど歩いても、まだ見つからなかった。

血の道しるべを辿り、必死に進み続ける。

体中が痛い。だけど、頭だけははつきりしている。

している筈だ。

「陸奥……」

ふと、視界の奥に小さな島が見えた。

血は、そこから流れていた。

「陸奥……!」

出せる速力の全てを出し、あの小島に向かう。

「陸奥……!」

小島に辿り着き、その小島を周回しながら、必死に彼女を探す。

そして、見つけた。

「ツツ……」

それを見た瞬間、底なしの闇に吞まれるような感覚が襲った。

「——嘘だ……」

小さく、そう漏らす。

そして、膝をつき、両手を、海面につける。

「……何がビクセブンだ……」

震える声で、どうしようもない怒りを、自分への恨みを吐き出す様に。

「何が……最強だ……何が……巨艦巨砲だ……」

——自分を罵倒する。

「陸奥……」

そして、弾かれるように天を仰ぐ様に見上げる。

「——私は……弱い……」

「——ん、——さん、長門さん！」

「はッ!？」

誰かに名前を呼ばれ、バツと目を見開く長門。

目の前には、吹雪がいた。

「……大丈夫、ですか？」

心配そうに、長門を見つめる吹雪。

気が付くと、ぐっしよりと、汗を掻いていた。

その汗を、片手で拭うと、無理に笑顔を作り、吹雪に微笑む。

「ああ、大丈夫だ」

だが、それでも吹雪は浮かない表情をしている。

「……また、陸奥さんの事を思い出していたんですか？」

「……」

それで固まる長門。

そして、一気に顔色を悪くし、手を震わせる。

そんな長門の手を、そつと手で包み込む吹雪。

「大丈夫です。あの時にも言いましたが、私は、いなくありません」

「ッ……」

その言葉を聞き、歯を食いしばる長門。

「……悪くないんだ……」

「え？」

「大和は……何も悪くないんだ……悪いのは……そんな大和の事を考えず、威張り散らしていた私なんだ……」

長門は、何かに謝るかのように、顔を歪める。

そして、両手で顔を覆った。

——涙を見せない様に……

### 戦艦『長門』

その名は、ビッグセブンの名と共に有名だ。

この長門は、その中で、その意識が<sup>プライド</sup>とても高く、そして、火力の弱い者をバカにする性格だった。

その性格を利用され、前任の提督の命令で、どんな困難な任務を達成してのけた。

誰かが沈めば、ソイツは火力が弱く、装甲が薄かったから沈んだとバカにし、そして、それによって反論する艦娘を鼻で笑った。

一方で、大和の事は尊敬していた。

彼女こそが自分の理想。彼女こそが日本の誇りだと、いつも思っていた。

彼女の心を知らずに——

そんな長門を咎めたのは姉妹艦の陸奥だった。

長門が毎回、誰かをバカにすると、それを当たり前の様に止めて、最

悪、説教にまで発展する事になる程、この鎮守府の陸奥は、それほどまでに、面倒見が良かった。

そんな陸奥を、長門は嫌う事は無かった。

喧嘩する事もあるが、すぐに仲直りをする様に、長門と陸奥は、本当の姉妹の様に、この鎮守府で過ごしていた。

だが、それも長くは続かなかった。

フィリピン海での、戦い。

未知の敵に、夕立が沈んだ時、大和が悲鳴を上げた事。

次々に沈んでいく仲間たち。

そして、大和が逃げ、敵の砲撃によって自分が気絶した事。

——陸奥が、自分の身代わりに無残な姿で死んでいた事。

陸奥を失って、長門は——大和の逃げた理由を悟った。

大切な仲間、いや、家族を失って、失って失って、失い続けて、心が擦り減らない訳が無かった。

大和は、そんな苦しみから逃げた。

そして、無様にも生きようとした。

そこで死ねば、楽になれた筈なのに、彼女は何故生きる道を選んだのかは分からなかった。

だけど、大和の気持ちは、理解した。してしまった。

そして、長門は、今までの自分の行いを後悔した。

沈んだ艦娘の事を悲しんだ艦娘は、その艦娘にとつては、とても大事な存在だという事を。

その想いを、自分は踏みにじってしまったという事を。

後から思い出していけば、自分は何んでもない事をしてしまったのだと、否応無く、察せられた。

母港に戻って、報告を済ませれば、すぐさま、出撃した艦娘の姉妹艦たちが長門を罵倒した。

何故お前だけ帰ってきた？何故見捨てた？何故沈まなければなら



なかったのか？自分の妹も守れない癖に威張るんじゃない。

全く持つてその通りだった。

もう、どうしても良くなってきた。

自室に戻れば、長門は、広くなった部屋で、泥の様にベッドに倒れた。

——このまま、消えてなくなりたい。

そう思った時、吹雪がやってきた。

『……なんの用だ？』

長門は、ベッドにうつ伏せのまま、そう問うた。

罵声を浴びせに来たのか？それなら好きにしてくれ。私には、それ以外、『救い』が無い。

だが、そんな彼女に浴びせられたのは、罵声でも、嫌味でもなく、心配だった。

具合はどうですか？入渠はしなくていいのですか？ご飯食べますか？

吹雪の親切さに、長門は、何か熱いものが込み上げてきて、吹雪を壁におしつける。

『——何故、私に優しくする？』

今まで、お前の姉妹艦が沈んだ時に、私はそんな艦娘をバカにした。嘲笑った。罵倒した。

『なのに、なんでお前は、そんな私に優しくするんだ……』

力は込めず、右手を吹雪の首に押し当てる。

そんな長門に、吹雪は、優しく微笑み、こう言った。

『——同じだからです』

『おな……じ……？』

『はい。貴方は、陸奥さんを失いました。その気持ちは、失った事のある、私も分かります。だから、罵声なんて浴びせません。もう、貴方も、私たちと同じなんですから』

そして吹雪は長門の自分の首を掴んでいる右手を優しく包み込む。

『私はいなくなりません。ずっと、貴方の傍にいます。貴方の傍で、貴方を守ります。私は、大型艦を守る、駆逐艦なんですから』

その言葉で、長門は、救われた気がした。  
そして、誓った。

彼女が自分を守ると言うのなら、自分は彼女を守ろうと。  
だから――

「私が……私が……大和を……」

「大丈夫です。今、大和さんが、司令官に決闘を申し込む様です」

「ッ!? 本当か!？」

吹雪の言葉に、思わず、顔を上げる長門。

その顔は、涙で濡れていた。

「はい。きつと、『答え』を見つける為に」

吹雪は、安心させるように、微笑む。

「だが……」

「長門さんは、司令官と決闘したから、認めたんじゃないんですか?」

「!」

それでハツとする。

きつと、大和も、自分の答えを見るける為に、時打と戦おうとして  
いるのだろう。

「……」

俯く長門。

そんな長門の肩に手を置く吹雪。

「大丈夫。きつと、仲直りできますよ」

「……そうだな」

すつと立ち上がる長門。

そして、ちよつとした体操をする。

「長門さん?」

「飯をまだ食べてなくてな。今から行こうと思う」

「そうですか。一緒に行っても良いですか?」

「ああ、構わない」  
そうして、歩き出した。

## 決戦前夜

二月二十日。

ヒトゴーマルマル——午後三時。

執務室にて。

「よし、できた」

と、時打はスケッチブックに描いた絵を見て、満足そうに笑みを零す。

「見せて下さいまし」

それを向かいに座る熊野が受け取る。

それを見て、感嘆の声を漏らす。

「噂には聞いていましたが、これ程とは……」

そこに描かれているのは、笑みを零す熊野の似顔絵。しかも、上半身まで描かれているのだ。

これほど似ているとなると、驚くのも無理もない。

「感想は？」

「とても上手ですわ。鈴谷が生きてたら、見せたいほどですわ」

と、悲しそうにその絵を眺める。

だが、そんな不穏な空気を払いのけるように、熊野は話題を切り替える。

「それはそうと、準備はいいのですの？」

「ああ、大丈夫だ」

その中身は、大和との決闘だ。

昨日の事、執務室に訪れた大和から決闘を申し込まれた時打。

当然、それを受け入れた時打だが、明石が、闘技場の改修工事まで、まだ三日はかかるとの事で、その間に、大和は自分の艤装の調整を行っているのだ。

一方の時打はそれまで英気を養う為に、こうして絵を描いているのだが、正直言って暇を潰していると思えない。

だが、これも実は修行の一環でもあるのだ。

飛天御剣流は、『速さ』を追求した剣術。

その中に、相手の表情を読んで次の攻撃を予測するという洞察力も必要になってくる。

その為に、誰かの顔を絵に描く事で、その表情を細かく描く事で、相手の表情を理解出来るようにしているのだ。

最も、絵を描く時に、その時の表情を記憶しておく、というのもあるのだが。

「前にも言いましたが、大和さんは長門さんより強い。おそらく今頃、地上戦に慣れるように訓練している筈です」

「ああ、重々承知しているよ。今回ばかりは、『奥義』を使う事になるかもしれない」

「……それって、前に天龍に繰り出したあの……」

「いや、あれは違う。確かに傍から見ればあれが奥義っぽく見えるけど、あれはその一歩手前だ。奥義はあんなものの比じゃねえよ」

「……」

『あれ』を超える必殺技。

熊野は背筋に悪寒の様なものを感じた。

あの九つの斬撃の残像が見える技を超えると、一体、どれほど凄い技なのか……熊野には想像できなかった。

「とにかく、次はいつもよりもつと気を引き締めないと。大和はこの艦娘の中で、誰よりも強い。きつと、誰よりも」

「……」

時打の手が震えている。

それは武者震いのもかもしれないが、それは、ただの純粋な恐怖。

大和という巨大な存在に対しての、圧倒的恐怖。

それでも、彼は戦おうとしている。

彼女と、分かり合う為に。

「そう、ですよ……」

「ああ。だからこそ、俺は負けられない。アイツの答えを見つけてやるには、負けちゃいけないんだ」

彼にとって、戦いの敗北は死、そのもの。

だからこそ、彼は負けられない。

「戦いは明日の正午。おそらく、アイツも最高のコンディションでやってくる筈だ。だったら俺はそれに誠心誠意答えないといけない。だからこそ、俺の全力持って、アイツの最強に打ち勝つ。それが、俺に出来る事だ」

グツと、右手を握りしめる時打。

「それで『答え』が見つからなかったら？」

「何、後は言葉攻めにするだけさ」

「それで惚れたら？」

「それこそありえない。あいつもウケツコンしてるみたいだし」

「ふふ、そうですわね」

笑い合う二人。

そこでふと、時打は思むろに執務室の扉の方へ向かう。

そして、思いつきりこじ開ける。

「きゃあ!？」

「なにしてんだ翔鶴」

と、壁に寄りかかっていたのか、翔鶴が転げこんでくる。

「いたた・・・て、ててて提督!？」

「気付かないとでも思ってたのか？」

「ひう・・・だ、だってえ・・・」

と、転んだ事が痛かったのか、涙目になる翔鶴。

「ま、なにか話して過ごそうぜ。話し相手は多い方が良い」

「そ、それじゃあお言葉に甘えて・・・」

そうして、三人は楽しく談笑した・・・

一方で、大和は・・・

「第十四斉射、って——!!!」

轟音、次に水柱。

「きゃあああ!？」

その内数発の直撃を受ける扶桑。

「なんて無茶苦茶な火力……」

その一方で瑞鶴が汗をにじませた笑みで大和を睨む。

ここは鎮守府近海の演習場。

そこで、大和は、瑞鶴を旗艦とする扶桑、山城、羽黒、高雄、神通の艦隊相手に一人で戦っていた。

「烈風も彗星も落とされちゃったし……後残ってるのは流星だけ……」

大和の異常な防空能力に圧倒されている瑞鶴。

先ほど四十六センチ砲の餌食になった扶桑はすでに轟沈判定を受け退場。

残っているのは小破の山城と必死に避け続けていた神通と瑞鶴のみ。

「なんて正確な射撃なのよ……不幸だわ」

「流星に……これ以上は……」

完全に疲れ切っている山城と神通。

瑞鶴は自分の艦載機をほとんど破壊され、残っているのは艦攻の流星だけ。

「せめて艦爆さえ残っていれば……」

大和の実力は知っていた。

だが、今の大和の実力は逃亡した時より更に強くなっている。

「三式弾、装填」

「ッ!？」

大和の口からそのような言葉が漏れた。

「まずッ……」

「第十五斉射、って——!!」

瑞鶴たちが反応するよりも早く、大和が三式弾を撃ち出す。

三式弾が真っ直ぐに瑞鶴たちに向かい、そして、そのすぐ頭上で爆散、炸裂する。

「「きゃあああ!？」」

瑞鶴は大破で艦載機を飛ばせなくなり、神通は轟沈一步手前。山城もなんとか中破にとどまっているが、流星にこれ以上は戦えない。

「ッ……ここまでか……」

「じゃあ、私の勝ちって事でいいですね？」

大和が、そういう。

「ええ、そうなるわね……」

と、瑞鶴は苦い笑みで大和にそういう。

山城と神通も同じ気持ちの様だ。

「ふう……」

と、大和がそう息を吐き出した瞬間、ドツと汗が滝の様に流れる。かなりの集中力を要していた様だ。

「大丈夫ですか？」

瑞鶴が彼女にかけよる。

大和は、汗を手で拭うも、まだ汗は流れ続ける。

「やっぱり、一人で艦隊相手取るなんて無茶だったんじゃない」

「そうですね……でも、貴方たちの話を聞くかぎり、提督はこれ位頑張らないと、勝てない気がするの」

と、大和は、鎮守府の方へ視線を向ける。

そこにいる、一人の人物に向かって。

「そうね……」

瑞鶴も、それに同意する。

「提督さんは、そこらへんにいる人たちは違う。誰よりも速くて、誰よりも強くて、誰よりも優しい。今までだって、軽い冗談を除けば、嘘を吐く事なんて無かった。そんな提督だからこそ、この鎮守府を任せられる」

瑞鶴は、そう語る。

「この戦いで、答えを見つけられるかどうかは分かりません。ただ、分かる事は、私は『答え』を見つける為に負けられないという事だけ」

大和は、拳を握りしめる。

「大丈夫」

瑞鶴が口を開く。

「きつと、答えは見つかる」

そう、言う。



「……………」

まだ拭えぬ不安。

今回の戦いで、自分に何がもたらされるのか。自分はこれからどうなるのか。

それは分からないが、それでも、この戦いは避けられない。

「そろそろ戻ろう。砲弾とか燃料とか補給しなくちゃ」

「そうですね」

瑞鶴の言葉に乗る大和。

今は、明日の戦いに備えよう。

そう思う大和だった。

次の日――

鎮守府、闘技場にて。

時打が、扉より反対側の壁際で立って待っていた。

その腰には、逆刃刀・深鳳が携わっていた。

闘技場の外にある観客席には、この鎮守府に在籍する三十隻程の艦

娘たち。

それと、この鎮守府に居候している響夜。

「そろそろか？」

「うん、多分」

響夜の疑問に、瑞鶴が答える。

「まだ調整に時間をかけてるのでしようか？」

「おそらく、かなり念入りにやっていると思うな」

「それほど、司令官の事を警戒してるって事でしょ？」

「大丈夫よ。司令官なら」

上から、電、響、雷、暁がそう言う。

ちなみに、明石はまだ来ていない。

闘技場の時打は目を閉じて、意識を集中させていた。

「提督、かなり精神統一してるな・・・」

「そうですわね・・・」

「やっぱり、大和型つてなると、そこまで警戒する必要があるんだね」

「そのようですね」

「だ、大丈夫なのでしょうか・・・」

「羽黒はいつも心配しすぎだと思うな」

天龍、熊野、川内、神通、羽黒、そして古鷹型重巡一番艦『古鷹』がそう言う。

「どちらにしろ、大和の火力は直撃すれば即死亡になるほどの威力だ。いくら提督の『神速』をもってしても、油断すれば、大和の精密な射撃の餌食になる。それほどまでに、大和は強い」

長門が、響夜と瑞鶴の隣でそう言う。

「提督にはまだ奥の手である『奥義』があると聞いたけど、それが今回の大和さんに勝つ為の鍵かもしれない。うまくそれを決めればいいのだけれど・・・」

長門の反対側で翔鶴がそう言う。

——そして、扉が開く。

『ッ！』

全員が息を飲む。

入って来たのは、当然、大和。

ゆつくりと、歩き、入り口から数歩進んだところで止まる。

時打が眼を開け、彼女に話しかける。

「よく来たな。調整はもう済んだのか？」

「ええ。お陰様で。……よろしいんですね？ 私と戦い、貴方が負けければ、二度とその剣を振れなくなりますよ？」

「なに、負けるつもりなんて毛頭ないさ。お前と分かり合う為に、俺は俺の全力を持って、お前という最強を打ち倒す」

と、身を屈める時打。刀は、抜刀しない。

「それに、これはお前から仕組んだ決闘。この戦いの挑戦者はお前だ。だから、今更自分から引くような事を言っただけでどうする？」

と、時打は不敵に笑う。

「そうですね。それは私の落ち度でした。どうやら、まだ心配性な性格が残っているみたいです」

大和は右拳を左肩に置く。そして、彼女の体が光る。

「ですが……」

そして、その光は徐々に形を成し、やがて、一つの巨大な鋼鉄の塊へと変貌する。

大和の艤装だ。

日本最強に相応しい程に巨大な艤装。主砲の四十六センチ砲が計三基九門もあり、艤装のあちらこちらに副砲や対空機関銃が多い。

その巨大な艤装の迫力に圧倒される時打。

だが……

「準備はいいですね？」

「ああ、俺はいつでも出陣可能だ」

と、ぶわツと剣気を発する時打。

両者の準備が整ったと確認した大淀が、決闘開始のゴングを鳴らす。

「決闘開始ッ!!」

## 時打VS大和

時打が駆け出す。

距離じゃ圧倒的に敵わない時打が、大和に勝つには接近して戦う他無い。

「第一斉射……」

大和が全ての砲門を時打へと向ける。

若干、焦っている様にも見える。

それほどまでに、時打が速いのだ。

「って——!!!」

そして、全ての砲塔が火を吹く。

「ツツああ!!!」

それを見切った時打は不規則に右へ左へと方向転換し、回避。

「ツ」

「オオオツ!!」

そして、そのまま回転。

「龍巻閃・旋!!」

そして抜刀。

だが、かわされる。

「!?」

「少し甘いですよ」

なんと大和が体を背後へ投げ出してかわしたのだ。

「なっん……!?!」

「副砲、て——!!」

大和の副砲から砲弾が撃ち出されるも、時打はそれ慌てて回転して回避。だが、何発か掠る。

「チツ……!」

大和が舌打ちするのが聞こえるも、時打は前方へ受け身を取って落下によるダメージを回避。

そして、すぐさま大和の方を見る。

「第二斉射、って——!!」

「!?」

だが、すでに体制を整えていた大和が二度目の斉射。

時打はそれを左に向かつて駆け出して避ける。

だが、それを追いかけるように、機銃や副砲を使って時打を追い詰めていく。

「っのォ!!」

そこで時打は自ら大和の弾幕の中に入っていく。

「!?」

それに一瞬驚いた大和だったが、すぐに表情を引き締め、弾幕を張る。

だが、時打はその全てを、命中弾のみを見切って叩き斬る。

「!?」

二度目の驚愕。

だが、大和もそれで対策を撃たない訳が無い。

「第三斉射、って——!!」

流石に、大和の最強の兵装である四十六センチ砲までは斬れないだろう。

だが、時打は、全て直撃コースである砲弾を見切り、その内の一つを頭上へ弾く。

飛天御剣流、龍翔閃。

「な!?!」

三度目の驚愕。

そのお陰で副砲を撃つのをやめてしまう。

「オオオ!!」

そして、そのまま飛び上がる。

「あの技は—」

「お兄ちゃんの十八番、龍槌閃!」

観客席から、瑞鶴と電がそう叫ぶ。

そのまま、時打は落下しながら刀を振り上げる。

だが、大和は笑っていた。

「ッ!?!」

「貰いました!」

そして、対空高角砲が火を吹く。

「ツゼアアア!!」

慌てて時打は鋭い気合と共に刀を振り下ろす。

そして、砲弾と正面衝突。

砲弾は明後日の方角へ飛んでいく。

「三式弾、装填!」

「な!」

それに間髪入れずに大和の主砲が上を向く。

「つて——!!」

「させるかあああ!!!」

それを見た時打は頭を地面の方へ向け、高速回転する。

我流飛天御剣流、龍巻閃・息吹

その突風と砲弾がまた正面衝突する。

だが、三式弾が突風に触れた瞬間、爆散。

飛び散った破片が時打の体を穿つ。

そのまま落下。

「提督!」

翔鶴が叫ぶ。

地面に落ちた時打。だが、何事も無かったかのようにむくりと起き

上がり、距離を取る。

だが、その体からは少なからず、血を流している。

「流石に、三式弾の破片を喰らえば終わりと思っていたんですが……まさかその破片の殆どを吹き飛ばす程の突風を巻き起こして弾いてしまうとは」

「なに、驚くのはまだまだこれからさ!」

そう叫び、時打は走り出す。

そして、時打は走りながら、刀を、<sup>ベルト</sup>帯から外した鞘に、自分の胸元あたりで納める。

「あれは……双龍閃か?」

長門がそう呟く。だが、それを電が否定する。

「いえ、あれは、鞘だけでなく、柄も率いた三連撃の技……」

時打は、鞘に納めた刀を、自分の前に水平に構えた状態で大和に接近する。

「第五斉射、つて——!!」

大和が砲弾を放つ。

全て、時打の各部分を狙った精密な射撃。

だが、時打はそれを体を半回転させ、そのまま器用に空中後転して回避。

「我流飛天御剣流……」

「く……!」

完全に接近された大和は、時打の攻撃を防ごうとする。

時打は、刀を自分の左脇に抱え込む様に構える。

(抜刀術!?)

すぐさま腕を交差させる大和。だが、次に来た攻撃は、完全に虚を突かれる技だった。

——柄が大和の右脇腹に突き刺さる。

「つつあ!」

突然の痛みに一瞬、悶える大和。だが、すぐに態勢を立て直そうとするも、次の攻撃が大和の背中に叩き込まれる。

鞘を纏った状態での回転攻撃。

最も、そのダメージは艤装が受け止めているが。

「く……このお……!」

「オオオ!!」

そして三撃目。その状態のまま鞘から刀が抜き放たれる。

「三頭龍・回転ツ!!」

そのまま回転して、大和の艤装に三撃目を叩き込む。

「くあ……!」

ダメージは無いまでも、艤装から伝わる衝撃は無視できないものだ。

第一の砲塔が回転する。

「!」



「第一砲塔、つて——!!」

砲撃。もともと、その砲撃を、砲塔の近くにいるだけで、衝撃によって体が吹き飛び、鼓膜が破れ、意識不明の重体になる程の威力。

「ぐおあ!？」

当然、まるで縮小された砲塔でも、その砲撃時の衝撃は物凄いものだ。

その衝撃で吹き飛ぶ時打。

地面を転がり数メートル飛んだあとで態勢を立て直す。

「副砲、撃ち方始めツ!!」

「飛天御剣流!」

大和が副砲を連射する。

一方で時打は逆刃刀を我武者羅がむしやらに振り回す。

「龍巢閃ツ!!」

まるで、龍の巢に入り込んだ小動物が、その瞬間に喰われる様に、命中弾を的確に叩き落していく。

「第二砲塔……」

そして、装填を終えた第二砲塔を時打に向け、大和は副砲の弾幕の中で、撃つ。

弾幕を防ぐのに手一杯な時打に、避ける術は無い。

「提督!」

「司令官!」

長門と吹雪が叫ぶ。

「つて——!!」

そして、大和が四十六センチ砲を放つ。

もはや、直撃は免れない。

(これでツ!!)

勝利を確信する大和。

だが、その表情は一気に驚愕に変貌する。

「飛天御剣流——九頭龍閃ツ!!」

ドガアアアアンツ!!!

轟音、それも、時打の背後と、大和の背後から。

「……………え？」

大和は、まるで錆びたブリキの人形のように、首を右に回転させ、後ろを見る。

そこには、闘技場の壁に突き刺さった、四十六センチ砲の砲弾。

一方で、時打の背後には、二発の砲弾。

「な、何が……………」

「どの剣術にも共通する事。それは斬撃の向きだ」

時打が、正眼の構えの状態のまま、語り出す。

「真上から振り下ろす『唐竹からたけ（切落きりおろし）』。

左斜め上からの『袈裟斬り』。

右斜め上からの『逆袈裟』。

右から薙ぐ『右薙みぎなぎ（胴）』。

左から薙ぐ『左薙ひだりなぎ（逆胴）』。

右斜め下からの『右切上』

左斜め下からの『左切上』。

下から斬り上げる『逆風さかかぜ（切上）』。

そして、最短距離の一点を貫く『刺突』。

どの流派のいかなる技であれ、斬撃そのものは、この九つ以外にない。当然、防御の型もこの九つに対応する様に展開される。

だが……………」

瞬間、時打が恐ろしいスピードで大和に接近する。

「ッ!？」

いきなりの攻撃に対応できない大和。

だが、ギリギリの所で装甲の展開に成功する。  
九つの斬像が見え、大和の装甲に叩き込まれる。

「うっああああ!?!」

その恐ろしい衝撃に思わず下がってしまった大和。

そして、ダメージも少くない。

時打は、彼女の後ろに。

「飛天御剣流の『神速』を最大に生かし、この九つの斬撃を同時に繰り出す。そうすれば、防御は、これを超える速度を以てしなければ絶対不可能」

大和は急いでふりむいて時打を見据える。

確かな恐怖を持って。

「これこそが、飛天御剣流最強の突進技『九頭龍閃』。そして、さっきの四十六センチ砲の内一つを弾き返したのも、この技だ」

つまりは、九つの強力な斬撃を砲弾の一発に叩き込み、何撃目かで威力を殺し、残った斬撃で砲弾を弾き返したのだ。

「四撃で砲弾の威力を殺してのこる五撃でなんとか弾き返せた。決まれば、いくらお前でも一溜りもないぞ?」

チャキツと構える時打。

「ツ…….だけどー!」

大和が全ての砲門を時打に向ける。

「乱発できなければ、この一斉射撃を防ぎきる事なんて出来ないですよ!第七斉射、って——!!」

全ての砲門が目を吹き、計九発の徹甲弾が発射される。

それが、時打に迫る。

だが、時打は落ち着いている。

「そうさ!」

その中で、時打は、また、九頭龍閃の構えになる。

「乱発しなければ、その全てを受けきれない。乱発できなければの話だがな」

「!?!」

「だからこそ、無理をするんだツ!!」

そして、時打は走り出す。

「我流飛天御剣流——九頭龍閃・乱<sup>みだれ</sup>エ!!!」

いくつもの斬像がみえ、全ての砲門にその全てが無限に叩き込まれる!!!

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツツ」

!!!!!!!

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガツツツ  
!!!!!!!

「……………嘘」

全ての砲弾が吹き飛ばされる。

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……全部、吹き飛ばしたぞ……!!」

全てがバラバラの方向に吹き飛んでいき、轟音が響き渡る。

だが、時打の方も疲労が激しい。

「な、なんだよ今の技……」

一方観客席では、天龍が驚愕した表情で闘技場を見ていた。

それは、他の艦娘も同じだった。

「九つの斬撃を放つ九頭龍閃。それを縦横無尽に乱射する様にしたのがあの……」

「九頭龍閃・乱なのです。ただでさえ、九撃入れるだけで相手はくたばるといふのに、それを乱発化するなんてお兄ちゃんの発想には毎度驚かされるのです」

「確かに、あれを連続して喰らったら、いくら大和さんでも……」

電の説明に思わず、身震いする吹雪。

「だが、今の技の体力の消費も、かなり大きい筈……いくら提督でも、これ以上砲弾を弾く事などできない筈……」

「ええ。でも、まだ、お兄ちゃんにはあの技を超える『奥義』がありま

す

『?!』

それを聞いたその場にいる艦娘たちが驚愕する。

あの九つの斬撃を同時に叩き込む九頭龍閃を超える必殺技が存在するのか……

「……天翔龍閃か」  
あまかけりゅうのひらめき

「え？なに、そのあまかけるなんとかって言う技？」

叢雲が響夜の言葉に疑問を持つ。

「飛天御剣流の奥義だ。九頭龍閃を超える、最強の必殺技だ」

響夜の言葉に、思わず悪寒が走る艦娘たち。

「もしかしたら、それを生で見れるかもしれないな……」

響夜の顔に笑みが浮かぶ。

「ええ、とても、凄い技なのです」

電の顔にも、笑みが浮かぶ。

そして、闘技場。

「く……」

思わず立ち尽くす大和。

「大和」

ふと、時打が口を開く。

「今、どんな気持ちだ？」

「え？」

「俺は、必死だ」

笑みを浮かべる時打。

「お前の様な強い奴に全力で戦うんだ。全力出すのに必死にならなくてどうする？」

「砲弾を九発も弾き飛ばして置いてよく言いますね」

「そんな事ないさ。一発飛ばすのに、かなりの体力持ってかれるんだ。必死にならずにどうするんだっての」

と、ふと刀を下す時打。

「？」

「お前はどうかんだ？」

「……」

大和は、俯き、しばし考える。

そして、顔を上げる。

「……とても、楽しいです」

その顔に、笑みが浮かんでいた。

「久しぶりに、本気の砲撃戦をやってみた気分です。こんな事は、演習で長門さんと戦った時以来でしょうか……」

「そうか」

拳を握りしめる大和。

「だけど私は……あの日、あの鎮守府に残っている仲間たちを見捨てて逃げてしまった。逃げなければ、今、ここに、翔鶴や瑞鶴以外の仲間がいたかもしれないのに……」

笑みを消し、悔しそうに顔を歪める大和。

「今、どうしても、それを償う『答え』が見つからない。逃げた事を見捨てた事を、償う答えが見つからない……それを見つげる為に、私はこの戦いを挑んだつもりだった。でも、まだ……」

大和は、握りしめた右拳を胸元までもって行き、それを見つめる。

その時、時打がまた、口を開いた。

「俺は、人斬りだった。それは、どうあっても覆らない、過去の事だ」

大和は顔を上げ、時打を見る。

時打は、真つすぐに大和を見ていた。

「その罪を償う答え。それを見つけたのは、ある人のお陰だ。その人が、死ぬ間際に言った言葉を、今でも覚えている」

時打は、刀を持ち上げ、それを胸元で止め、柄を握る右手を眺める。

そして、顔を空に向け、目を閉じて、やがて開けながら顔を下ろし、大和を見る。

「『その力で、今、この世に生きる笑顔を守って』。それがその人の言葉だった」

そして、ゆっくりと、刀を鞘に納める。

「だから、お前も、今この鎮守府に生きる艦娘たちの笑顔を守ってほしい。それが、俺がお前に送る言葉だ」

そして、時打は、大和を自分の射程に収める。  
無形の構え。

ただ立ち、何の構えも取らない、形無き型。

背水の陣ともいえるその構えは、ある、確実な信念が渦巻いていた。

「……本気ですね」

「俺はいつだって本気だ。そうじゃなければ、俺はお前を理解する事はできないし、お前が俺を理解してもらおう事はできない」

「そうですか……」

そして、大和は、観客席の方へ視線を向ける。

その中にいる、長門を見つける。

視線が交わる。

ただ、どちらも視線を逸らさない。

——ごめんなさい、見捨てたりして。

そう、心の中で呟き大和は、時打に向き直る。

「全主砲、装填。弾種、九一式徹甲弾」

それは、戦時、大和のみが扱っていたとされる最強の徹甲弾。

たとえ着水しても、魚雷の様に真っすぐに突き進み、敵の装甲を貫く、日本が開発した最強の徹甲弾。

それを今、装填したのだ。

「……飛天御剣流奥義、あまかけりゆうのひらめき天翔龍閃」

時打がそういう。

その瞬間、とめどない程の剣気が、辺りを支配する。

舞い落ちていた木葉が弾け、消滅する。

その気迫に、若干怖気づくも、すぐに、彼の剣気に負けないような  
気迫を発する。

冷たい風が、辺りに吹く。

観客席にいる艦娘たちも、静まり返る。

相手の出方を見逃さない様に、大和と時打は、互いを見据え、睨む。

ふと、一羽のハトが、闘技場の扉に降り立ち、何気ない仕草で、辺

りを見渡す。

だが、それも、すぐに飛び立ってしまう。

——その瞬間ッ!!

「——ッッ!!」

同時に動くッ!!

時打が右足を大きく踏み込む。

その瞬間、刀が抜き放たれる。

大和は発射準備へ。

「ッッアアア!!」

飛来してくる時打の刀を、大和が、右腕を犠牲にする様に、その一撃を受け止める。

その速度故に、見切る事が出来ない。ましてや、背中に巨大な艤装を抱え込んでいるのでは、それも至難の業。

だから、受けて捌く。

抜刀術はたった一撃。

前に瑞鶴から、鞘を率いた二段抜刀術の存在を聞いたが、<sup>ベルト</sup>帯に鞘がある以上、それは不可能。

ならば、その一撃を受け止めて、その間に主砲を叩き込む。

そして、その右腕に刀が直撃した瞬間。

バキイイイッ!!!

鈍い音が響き、右腕の骨が軋む。

装甲を展開しているにも関わらず、艦娘の、それも大和型戦艦の骨をきしませる程の威力となると、この方法は正解だったのかもしれないが、それでも、これ以上は受け止めきれない。

「くッアアア!!」



右腕を動かし、刃を捌く。

そして、刀は空振ってしまふ。

(捌いた!?)

(やられる!)

天龍と熊野が声にならない声を上げて、そう予測する。

(もらった!!)

そして、全ての砲塔を時打に向ける。

(これで終わりです!!)

そして、いざ撃とうとしたその時、艦装の妖精が異常を知らせてくる。

「え」

そう、声を上げた瞬間、周りの空気の動き方がおかしい事に気付く。

そして、大和の体が、時打に引き寄せられる。

(う、嘘!?)

あり得ない程の突風に、足を踏ん張るも、抵抗虚しくどんどん引き寄せられていく。

——否、その前方の空間ツ!!

飛天御剣流剣術は神速の剣術。故にその抜刀術も神速。

だが、最強の奥義たる『天翔あまかけるりゆうのひらめき龍閃』は超神速の抜刀術。

そして、その奥義は、龍を模す必殺技でもある。

例え、龍の牙から逃れられたとしても——

「——オオオツ!!!」

時打が大きく回転。

そして、もう一度大きく踏み込む。

——龍が巻き起こす風に体の自由を奪われ——

「くっああ……」

必死に、時打の射程から逃れようとするも、最初の一撃目で弾かれた空気が戻っていくときに巻き起こる戻ろうとする空気が彼女の身動きを封じる。

—— 龍の牙によって引き裂かれるツツツツ

!!!!!!!

瞬間、最強の二撃目が大和に叩き込まれた——

「大和

!!!!」

長門が立ち上がって絶叫。

大和が宙を舞い、そして、時打の数メートル先に落下する。

一方の時打は、完全に疲労している様に、立ったまま脱力している。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

息を上げらせ、刀の先を床につけている。

一方の大和は、立ち上がらず、微動だにしない。

「大和！」

「あ、長門さん！」

思わず、観客席から闘技場へ身を投げ出す長門。

そして、大和に駆け寄る。

「大和！大和！」

「なが……と……?」

大和は、あまりの威力に感覚が麻痺しているのか、体が動かない状態ですっかりと長門の存在を確認する。

時打は、刀を鞘に納め、彼女たちの姿を見つめる。

「しつかりしろ！頼むから．．．頼むから、生きてるって言ってくれ！」  
時打が人を殺さないのは知っている。

だが、それでも、先ほどの技の威力を見て、心を乱さない訳が無かつた。

あまかけりゆうのひらめき  
天翔龍 閃はいくら逆刃刀でも、威力を誤ればそれだけで死に至らしめる程強力な技。

その証拠に、それが直撃した右脇腹には服がはだけ、くつきりと痕が残っていた。

「どうして．．．」

「大和、私は、お前に．．．言わなきゃいけない事が．．．」

ぼろぼろと涙を流す長門。

その雫が大和の顔にあたる。

「私．．．は．．．あの日、逃げたのよ．．．そのせいで．．．貴方は．．．陸奥を．．．」

「私は．．．私はお前の事を何も知らずに、勝手に称賛して、誇りだとか言っただけ。お前の仲間を小馬鹿にして．．．嘲笑って．．．陸奥を失うまで．．．お前の気持ちを知らうともしなかった．．．私は、そんな自分が．．．情けない．．．」

嗚咽を漏らす長門。

涙が、後から後から流れ出てくる。

「う．．．うああああ．．．」

とうとう、泣き出す長門。

「ごめん．．．ごめん．．．」

泣きながら謝り続ける長門。

そんな長門に大和は、優しく話しかける。

「私の方こそ．．．ごめんなさい．．．あの時、逃げたりなんてしなければ．．．貴方は、陸奥を失う事なんてなかったのに．．．」

「そ、それは．．．」

「それだけじゃない．．．貴方に、この鎮守府を守るという責務さえも押し付けてしまった。本当は．．．私がやらなければならぬの

に……」

「違う……違うんだ……そのお陰で……私は……大切な事を……」  
「そうね……貴方は、大切な事を教わった。私は、それが嬉しい。だから、謝りたかった」

大和の目からも、涙があふれる。

「ごめんなさい。逃げたりして、ごめんなさい……」

しっかりと、言葉にして、大和は謝った。

「うう……大和お……」

「ふふ……すっかり泣き虫ね……」

まるで、泣く子供をあやすような光景に、時打は微笑む。

二月二十一日 ヒトフタヨンサン 1243 —— 十二時四十三分を持って、天野時打、

戦艦大和の決闘は、天野時打の勝利によって、決着。

## 事後報告

「・・・以上で、今回の事態は收拾しました」

通信室で、時打がそうマイクに向かってそう言う。

そして、次に来る言葉を待った。

すると、スピーカーからド派手な笑い声が聞こえてきた。

『ガッハッハ!!あの大和をぶっ飛ばしたか!』

『ちよ!?!ていと・・・壺条長官!?!なに大笑いしてるんですか!?!』

と、スピーカーの向こうで笑っているのが時打をここに送り込んだ

壺条豪真その人。

そして、彼にツツコミを入れたのが、彼が鎮守府で働いていた時から秘書艦についている艦娘、重巡の『筑摩』だ。

『流石だな時打!』

「いえ、俺なんてまだまだですよ」

『それに、天翔あまかけりゅうのひらめき龍閃の二撃目を入れられたみたいだしな。流

石・・・おっと、この話は禁止タブーだったな』

「いえ、お気遣い無く」

『それはそうと、時打、お前に一つ話しておきたい事がある』

「え?なんでしようか?」

『ああ、四月に開かれる定例会議の事だ』

医務室――

そこには、ジェルベッドに座る大和と、その傍らに座る長門。

他にも、何人かの艦娘たち。

大和は高速修復材を使って体は完治したが、どうやら感覚の方はまだ戻っていないらしく、仕方なくベッドに寝ているのだ。

「そういえばよ」

天龍が、ある疑問を口にする。

「あの天あま翔か龍けるりゆう閃のひらめきっていう奥義。あれ、一体どうやってあそこまで  
のスピードが出せるんだ？」

その疑問に全員が騒めく。

二人だけを除いて。

「確かに、双龍閃でも、あそこまでのスピードはできませんものね」

「どうやってやってるんだろ？」

熊野と瑞鶴がそれぞれの疑問を口にする。

「そういえば……」

そこでふと、大和が何かを思い出したかのように左手を顎に乗せる。

「あの時、提督は左足を踏み込んでいましたね……」

「え!？」

そこで声をあげたのは天龍だった。この鎮守府で唯一の剣術を扱う彼女だからこそその驚きだろう。

「左足って……右足踏み込んだ後に更に左足を踏み込んだって事なのか!？」

天龍が信じられないような表情をする。

「それがあの奥義の特性なんだよ」

と、それまでリングの皮をむいていた響夜が口を開く。

抜刀術とは、本来は自分の刀で足を斬らぬように必ず右足を踏み込むのが定石。

だが、天あま翔か龍けるりゆう閃のひらめきの場合、そこから更に左足を踏み込むのだ。

足を斬らないのは勿論、手の振りや腰の捻りを殺さないように、抜刀より刹那の拍子ですらして踏み込む最後の一步。

その一步が刀に一瞬の加速と加重を与えて、もともとの神速の抜刀

術を、超神速の抜刀術へ昇華させる。

それが天翔龍閃あまかけりゆうのひらめきなのだ。

「そんなたった一步で・・・」

長門がそう呟く。

「ああ、たった一步だ」

「だけど、その一步が難しいのです」

響夜に続くように電が続く。

「どういう事なの？電」

暁が電に聞く。

「その一步は、捨て身だとか、死中に活を求めるといった後ろ向きな心境じゃ絶対にできないのです。必要なのは・・・」

「生きようとする意志」

電の言葉を遮り、大和がそれに続く。それでその場にいる全員視線が大和に集中する。

「あの時、提督の眼には、死にたくないという気持ちでは無く、生きるという気持ちを感じられました。誰かの為に生きようとする。誰かを悲しませたくないから死ねない。そんな気持ちを感じられました」と、大和はそう言う。

「でも、私が喰らったのはそれ以上の威力を持つ二撃目。見る限り、一度目の踏み込み、抜刀の鞘走り、更に回転による遠心力と二度目の踏み込み、そして空間を挟んでの交差法。これだけの力を集中させたこの二撃目は、明らかに、私が捌いた一撃目よりも威力を遥かに凌いでいる。あれで提督が死なない様に強弱をつけてくなかったら、私は間違ひなくぼつくり逝ってましたよ」

「や、やめてくれそんな洒落にならない事を・・・」

大和の言葉に苦い顔をしながら咎める長門。

それに笑いを零す一同。

「本当、とんだバケモノ提督が来たものね」

瑞鶴がそう零す。

「本当、全くだ」

それに同意する長門。

それから、彼女たちはしばらく談笑し、解散した。

「……四月の定例会議ですか……」

『そうだ。お前の鎮守府は一年も提督が不在のために出席できていない』

「そこで、とりあえず出てくれって事ですか？」

『そうだ。更にその会議には元帥も参加する事になっている』

「！ 元帥が!？」

元帥とは、軍でいる、最高司令官の事だ。

「元帥が、何故……あの人は本来なら大将のみで行われる最高会議のみでしか出席しない筈……」

『あるとすれば、大規模作戦だろう』

「！」

大規模作戦。

それは、いくつかの鎮守府が合同で艦隊——『連合艦隊』を超える数の『大連合艦隊』を組んで、敵深海棲艦の泊地の奪還、あるいは殲滅といった大規模な作戦の事だ。

これには当然、大量の資材を使う為、かなり資材に余裕のある時しか決行できないのだが、日本ではそれは関係無い。

『日本があの世界中を襲った大地震、『ワールド・クウェイク世界大震災』のお陰で資源が山の様に手に入る様になってから、日本は深海棲艦との戦いにかんがりの戦果を挙げている。今の所は、別の国でもなんとかなっているみたいだが、どつちにしろ、いずれ他の国の資源は枯渇する』

「だから、俺たちで終わらせないといけないですね……」

『その通りだ』

と、時打の言葉を肯定する豪真。

「分かりました。一応会議には出席しましょう」



『ああ、秘書艦はちゃんと連れてくるんだぞ』

「分かってますよ。では」

と、通話を切る。

そこで一息吐く時打。

そして、通信室の壁にもたれかかる時打。

「・・・アンタはどう思う？ 『姉さん』」

と、左腕の傷を、右手で握りしめる。

## 瑞鶴編 新戦力

とある竹林にて、一人の女性が木刀を振るっていた。  
ただただ素振りを繰り返すのみで、特に技がある訳じゃない。

そんな彼女に、声をかける少女が一人。

その少女の両手には、小太刀の様な木刀がそれぞれの手に一本ずつ。

そんな少女に、女性は微笑み、彼女に木刀を向ける。

少女はそれに応じるように右手の木刀を女性に向ける。

そして……

「……ん？」

眼を開け、その眠気に思わず身動きしどうをする瑞鶴。

「んん……んあ……？」

一瞬、寝ぼけていたが、すぐに体を起こし、眼を擦った後に大きく伸びをするといった決まった動きをする。

「んふええ〜……だめですよ〜……てえとく〜」

と、どこからか腑抜けた声が聞こえ、そこへ視線を向けると、反対側のベッドで何やら良い夢を見ている様子の翔鶴がニヤニヤしながら身動きしていた。

「全く、翔鶴姉ったら」

そんな姉の様子に思わず微笑む瑞鶴。

そして、姉から視線を外し、少し浮かない顔をする瑞鶴。

「……どうして……あんな夢を……」

すでに忘れていたと思っていたあの頃の夢。

「……忘れられる訳ないか」

そう、一人納得して笑う瑞鶴。

そして、視線はクローゼットへ。

ベッドから降りた瑞鶴は、クローゼットを開けて、そこにある、二本の木刀に目を付ける。

そして、それを片手でまとめて手に取る。

「……また、やってみようかな」

そう呟き、瑞鶴は鎮守府の外へ出る。

時刻はマルゴーサンマル——午前五時三十分。

まだ起床には早い、それでも、練習するにはいい時間だろう。

そこへ……

「よう瑞鶴」

「あ、提督さん」

と、鎮守府の外周を走って来たであろう時打がやってきた。

「どうした？こんなに朝早く」

「ちよつと、眼が覚めちゃって」

「ふくん……それでその木刀は？」

「え……あ……」

と、時打は、瑞鶴の両手に収まっている小太刀サイズの木刀に目を付ける。

「これは……」

「良かったら練習相手になってやろうか？」

「え……」

時打の提案にきよとんとする瑞鶴。

「それ持つてるって事は、多少はできるんだろ？こんな時間じゃあ相手もいなさそうだし、俺が相手になってやるよ」

「……折らないでよ、これでも大事な思い出なんだから」

「わかつてる。鞘でやるよ」

と、竹林に移動した時打と瑞鶴。

時打は鞘から刀を抜き、その刀を竹に立てかけ、鞘の方を持つ。

そして、鞘を右手に、右半身になる時打。

一方で瑞鶴は、左半身になり、右手の木刀を時打に向け、左手の木

刀を頭上に持っていき、その切っ先も右手と同じ方向に向ける。  
木葉が舞い、ハラリとその場におちる。

「……行きます」

「来い」

瑞鶴がそう宣言し、時打はそれに答える。

そして、瑞鶴が踏み込んだ——

四月九日。

マルキユウマルマル——午前九時。

執務室にて。

「最近、流石に俺もここの戦力不足を感じるようになってきた」

時打が執務机でそう言う。

「だれかが中破、もしくは大破する度に、長時間の入渠が必要になってくる。これだと、いざって時の出撃ができなくなる」

「それは確かに問題だ」

その時打の言葉に、同意する長門。

「だから、俺がこの鎮守府に来て初の建造をしようと思う！それで来てもらったのがお前たちだ」

と、時打は目の前いる艦娘たちにそう言う。

「軽巡だけでなく、駆逐艦の面倒を見てくれている川内。重巡の事を把握している古鷹。戦艦の事の全般を任している大和。空母組最大の練度を誇る瑞鶴。そして秘書艦の長門。お前たちに、どの艦娘を建

造すべきかを聞きたい」

と、時打はそう言う。

最近、単独出撃クエストに手を出してきた時打。

だが、その中で、少し危険なクエスト中破者が出てくる事が多々あった。

その為にゆつくり入渠をさせているのだが、このままでは資源が枯渇してしまう可能性があるのだ。

「ただでさえ報酬の少ない依頼やってるからねえ……」

川内がそう言う。

「練度の低さも問題ですが、確かに戦力の増強は必要でしょう。提督は、何を希望されるんですか？」

大和が続くように言い、時打に尋ねる。

「出来るだけ、装甲が固く、長く運用できる……正直に言つて、戦艦あたりが欲しい所だ」

と、時打はそう答える。

「やっぱりそうですよね……」

古鷹が、そう反応する。

「提督さん」

そこで瑞鶴が手を挙げる。

「なんだ瑞鶴？」

「今提督さんの権限で使えるドックっていくつぐらい？」

瑞鶴に向いていた視線が一気に時打に集まる。

「俺の階級では一つが限界だ。一度の建造で一隻といった所だ」

「そっか……じゃあ、戦艦を建造すべきだね」

瑞鶴がそう言う。

「何故、そう思う？」

時打が問う。

「戦闘を楽にするには、私たち空母の第一次攻撃もそうだけど、やっぱり、敵を決定的に沈めるには高い火力による砲撃。それを考えると、やっぱり必然的に戦艦になるでしょ？」

と、瑞鶴がそう説明する。

「なるほどな……こんな意見が出たが、異論のある奴はいるか？」  
時打の言葉に、誰も何も言わない。

「そうか、それじゃあ決まりだな。建造するのは戦艦。それに見合った資材を送る。良いな？」

『はい』

全員、同時に応える。

「よし、今日は解散だ。お疲れ」

と、それぞれが部屋を出ていく。

そして残ったのは時打と長門、そして瑞鶴だ。

瑞鶴はくつろぐようにソファに座る。

「お前は翔鶴の所に行かないのか？」

「ここで待ってても、結局翔鶴姉はくるからね」

「言えてるな」

時打が問い、瑞鶴が答え、長門が同意する。

と、時打は執務机の上にある一枚の紙を広げる。

「またスケッチか？」

長門は、時打がスケッチブックを使わない事に驚きつつ、そう聞く。

「いや、明石から図面用紙貰ってな。試しに艦載機、設計してる」

「そうなの？」

瑞鶴が興味深そうにまだ書き入れ途中の図面を見る。

「へえ……結構分かりやすく描けてるじゃん」

「そうか？俺、こういうのさっぱりだからな……」

「でも、骨組みはしっかりしてる」

そう褒める瑞鶴。

そこへ。

「提督——！！」

明石が元気良く入ってくる。

「お、お邪魔します」

更には翔鶴。

「お兄ちゃん！」

「執務、お疲れ様」

「雷様が来てあげたわよー!」

「こらー!もうちよつと静かにしなさい」

電を筆頭に第六駆逐隊の面々。

「一気ににぎやかになったな・・・」

「まあまあ、これぐらい騒いでくれた方が良いだろ?・・・ほい完成!」

若干引いている長門に、時打がそう言い、図面に最後の一笔を入れる。

「あ、完成したの!」

「ああ。素人の設計だけど、結構かけたと思うよ。うん」

と、図面を明石に渡す時打。

それを覗き込んだ明石。そして他の面々。

「えー・・・ほうほう・・・・・・て・・・」

しばらくその図面を眺めていた明石。

だが、突然、それを見たまま固まってしまう。

「・・・あれ?明石?」

若干青ざめる時打。

何か気に障る事でもしたのだろうか?

「・・・これ本当に提督が描いたものですか?」

「あ、ああ・・・そうだが・・・」

何故だか明石の醸し出す雰囲気、その場の全員が引いてしまう。

と、明石はズカズカと扉の方へ歩いていく。

「お、おい!?明石!」

と、明石は扉に図面を持たない方の片手を扉に手を置いて、止まる。

そして、振り向く。

「・・・明石?」

その顔は――笑っていた。

「待っていて下さい提督。一日時間があれば完成できます」

「え?」

と、勢いよく部屋から出ていく明石。

その明石をただ黙って見送っていく一同。

「……なんだったんだ？」

「さあ……」

流石に、長門でも今の明石の行動は理解できないらしい。

それから数時間後、夕張が執務室になだれ込んできて、なんだか明石が怖いと泣きついてきたのは別の話。

そして次の日。マルロクマルマル——午前六時。

「ふっふっふっ」

「おい明石、なんか顔が怖いぞ」

悪い笑みを浮かべている明石に、引いている時打。

ここは鎮守府の正面の海面の崖。

何故か朝っぱらから呼び出され、

「昨晚、提督が描いてくれたあの図面」

「ああ、あれね。あれがどうかしたのか？」

「実は……それを元に新しい艦載機を作っちゃいました!!」  
「な!？」

明石のサムズアップと共に言い放った言葉に絶句する時打。

あんなドシローが描いた図面で何かを作ったというのか？

「お、おい明石。それ、大丈夫なのか？」

「ええ。初めて描いたにしては予想以上な出来でしたよ。あの頃の技術で出来る物であつたけど、誰も思いつかなかつた設計……まさに、天より授かりし設計図……さあ、御覧ください！」

と、明石は、海上にたたずむ瑞鶴に合図を送る。

瑞鶴は不承不承ながらも領き、その右手に持たれた『漆黒の矢』を弓につがえ、引き絞る。



そして、放つ。

それは真つ直ぐに飛んでいき、その姿を変え、一機の黒い艦載機に変わる。

「あれは．．．！」

デザインは、時打が設計したものと同一であり、両翼には白い日の丸。

その艦載機は空高く舞い上がると、物凄い勢いで急降下してくる。

その速度は——あの烈風さえも凄いでいる。

「お、おい!?あれ大丈夫なのか!?!」

いくら丈夫に作られている飛行機でも、その全てに、限界速度というものがある。

スピードが上がれば上がる程、その機体にかかる重圧は強くなり、その限界を超えた瞬間、機体が耐えられなくなり、バラバラに分解してしまう。

さらに、スピードが烈風以上となると、いくらなんでも無茶が過ぎる。

そして、その黒い艦載機は、水面ギリギリで平行になろうと機体を持ち上げる。

そのまま物凄い勢いで時打たちの前を突っ切っていく。

「ば、バラバラにならない．．．！」

その事に唾然とする時打。

「最高速度時速814.9 Km．．．．最高高度9000 m．．．．

凄い、予想以上の成果ですよこれ！」

「マジか．．．！」

作った本人である明石も驚いてはしゃいでる。

「機体の重量を徹底的に軽くし、かつ、超高度でもパイロットが活動できるように操縦席の居やすさを最大に保ち、さらには秒間三百発のガトリングガンを搭載して、あの速度。装甲とかの強度は烈風と同じなのに、あそこまでの速度が出るなんて．．．すごいですよ！提督、開発部門の人間だったら、絶対に勲章ものですよ！」

「そ、そうなのか．．．?？」

「はい！」

未だに信じられない様子の時打。

まさか、自分の描いた設計図が、ここまでの性能を發揮するとは思ってもみなかったのだ。

と、どうやら堪能し尽くしたのか、瑞鶴の元へあの黒い艦載機は戻っていく。

そして、矢に戻る。

瑞鶴は、未だに、あの艦載機の性能に戸惑っている様子だった。

「提督！あの艦載機に名前付けて下さいよ！設計者は貴方なんですからー！」

「え!?!俺?!」

突然、話しを振られ、戸惑う時打。

そして、ぽりぽりと頬をかいて、考えた後……

「……黒風」

「ほうほう、それはまたどんな理由で？」

「黒い風みたいだから、黒風。これで良いか？」

「黒風ですか……良いですね。よし、それじゃあ、あの艦載機の名前は『黒風』です！」

——開発により、艦上戦闘機『黒風』が完成した。

定例会議まで、あと一週間。

## 定例会議

四月中旬。

定例会議当日。

その道中、時打と長門は迎えの車に乗り、大本營のある、横須賀に向かっていた。

一応、説明しておくが、各地方に、『本部』……『本營』となる鎮守府が存在しており、その更に上の『大本營』のあるのが横須賀だ。

各地方には、そこを統率する大将級の人間、『指令長官』がおり、関東にある鎮守府を統率しているのは、時打を黒河に送った壺条豪真だ。

というか、『長官』と呼ばれる存在は、その全てが各地方の司令長官だ。

そして、その更に上に存在するのが『元帥』だ。

日本にある全ての鎮守府に命令を下せる人物はその人以外に存在しないらしい。

「今回、その人が出てくるってなると、なんか緊張するな……」

「私は初めての会議だからな……」

言動とは裏腹に、かなりガチガチになっている時打と長門。

そのお陰で時間の流れが早く感じられ、気がつけばもう横須賀についていた。

「着きましたよ」

「は、はい……行くぞ長門」

「あ、ああ……」

と、緊張しているのか何気に浮かない顔をしながら、時打と長門は、大本營の建物を見上げる。

ちなみに、長門はあるジャケットを着て貰っている。

黒いジャケットで、背中に、時打が考えた黒河鎮守府の紋章。

桜の花に、大きく筆書きで『黒河』と描かれている。

何故こんなものを着ているのかというと、以前に言った、他の同一

の艦娘との区別をつける為だ。

よく、勘違いされて別の鎮守府に行ってしまう事が今までに多々あった為に、その措置的なものだ。

それと、以前に前任の提督が使っていた紋章だが、時打が容赦無くボツとして捨てて、新しく、時打の天才的な画力と才能を見せつけるかの如き完成度でこの紋章を描いたのだ。

「ここで会議が……」

「ああ。俺、学生だったはずなのに、もうここまで偉くなったんだなあ……」

「え!? 提督って学生だったのか!?!」

思わぬカミングアウトに驚く長門。

「あれ? 言ってなかったっけ?」

「聞いてない!」

「そ、そうか……」

なんだかんだで、時打と長門は大本営に入っていく。

ある程度の受付を済ませ、時打たちは指定された部屋へ。

受付係の話では、なんでも最後まで最後らしい。

「氣い引き締めろよ長門」

「ああ、分かっている」

部屋に行くにつれて、緊張が高まっていく。

そして、その部屋の前に立ち、そして、ゆっくりと開けていく。

中に入った瞬間、突き刺さるような視線をいくつも感じた。

「ツ……」

その重圧に圧倒される時打と長門。

配置は、横長の机が横三列といった感じで、それぞれの机に、各鎮守府の名前が入った立札があった。

二人は、その重圧を感じながらも、自分たちの鎮守府の立札を見つけ、そこへ向かって歩き出す。

そして座る。

始まるまで、まだ数分の猶予がある。

ふと、長門はある鎮守府の提督に目をつける。

「あれが……」

横須賀の提督だ。

傍らには、正規空母の赤城がいた。

提督の方の容姿は、かなり軍服をきっちりと着こなしており、提督帽も上手い具合に似合っている。

顔立ちは、それなり良いが、その雰囲気から笑みを浮かべる事は無さそうでもある。そして眼鏡、それも額縁眼鏡だ。

何より、その眼光。かなりの歴戦を潜り抜けてきたような眼をしている。

隣の赤城は、彼の秘書艦だろう。

横須賀は、現在の全国に存在する鎮守府で、最強と言われる艦隊がある。

それは、あの赤城を旗艦に、加賀、蒼龍、飛龍の四人からなる、『南雲機動部隊』だ。

どういう意図なのかしらないが、あの提督がそういった編成にしたらしい。

それでも、戦果は良いもので、他の鎮守府に比べ、ランキングがあるなら間違いなく全国レベルでトップ10に入るだろう。

それほどまでに、強い艦隊なのだ。

なんでも完全に数で劣る状況から、艦載機の練度のみでその状況を打破して勝利を収めたと聞いた。

「どうした長門？」

「ああ、いや……横須賀の提督の事を見ていな」

「横須賀……？翔真さんの事か」

「ん？知っているのか？」

時打の言葉に、興味を持つ長門。

「ああ、関東の司令長官、壺条豪真の息子だよ。フルネームは壺条翔真」

「え!?提督、横須賀の提督と知り合いだったのか!？」

「まあ、長官に会いに行つた時に、何回か会つた程度なんだけど、その度に航空戦の事について色々教えてもらつてな」

「そうなのか・・・」

思わぬ時打の人脈に驚く長門。

と、そこへ正面の横にある扉が開く。

そこから、時打にとつては見知つた人物が出てくる。

豪真だ。

その表情は、時打にいつも見せる友好的なものでは無く、司令長官という立場に立つ者の威厳を醸し出す厳つい表情だった。

その傍には秘書艦の筑摩。

更には、もう一人。年齢は豪真よりもありそうで、一見して六十代であろうか？

「あれが、元帥・・・火野柱ひのぼしら 玄隆げんりゅう」

初めて見る元帥の存在に、唾を飲み込む時打。

その傍らには・・・なんと吹雪だった。

「・・・」

元帥ともあろう者がまさかの駆逐艦を秘書艦にしているなんて誰が思ったか・・・

いや、既に見慣れているであろう周りの提督にとつては慣れている事だろう。

とりあえず、姿勢を正す。

それぞれが自分の為に設けられた席に座り、豪真が席に座る提督や秘書艦たちを見渡す。

「これより、定例会議を開く」

そうして、春季定例会議が始まった。

変わって、黒河鎮守府。

「ただいまあ」

「お帰りなさい瑞鶴……ってその袋どうかしたの？」

瑞鶴と翔鶴の五航戦組の部屋にて、街に出掛けていた瑞鶴が、大きな紙袋を持って帰ってきた。

その服装は私服そのものだ。

「えへへ、『るろうに剣心』です！」

「ええ!？」

なんと、瑞鶴が持ってきた袋の中身は、全てが『るろうに剣心』の漫画なのだ。

「なんでそんな大量に……そもそもお金はどうしたの？」

「スツた」

「はいアウトおおおおお!!」

瑞鶴が右手の人差し指と親指で丸を作ったので、それに対してどこから取り出したのか、翔鶴がハリセンで瑞鶴の頭を引っばたく。

「まあまあ、これを読めば、提督の事が少しでも分かると思うよ」

「う……よ、読まないわ!」

と、ほんの少し顔を赤くして部屋を飛び出す翔鶴。

「可愛いなあ。さーてと……」

ニヤニヤと顔に笑みを浮かべながら、瑞鶴は一冊、るろうに剣心の第一巻を取り出し、読み始める。

しばらく読み進めていき、京都編あたりに差し掛かった辺りで、瑞鶴はとある人物に目をつけた。

「あ、この人……」

その人物とは、かの隠密御庭番衆御頭の四乃森しのもり蒼紫あおし。

……の、使う剣術だ。

御庭番式小太刀二刀流。

その話の中で、御庭番衆の先代御頭が習得されていたとされる二刀剣術。

作中では、その技は三つ程だが、瑞鶴は、自分も小太刀の二刀流を

使っているという事もあつて惹かれた。

そして場面は一気に縁との最終決戦へ。

その時、剣心の放った『龍鳴閃』なる技の影響を受けた蒼紫と、蒼紫の事が好きだというのがバレバレである少女、巻町まきまち 操みさおが、聴覚を鍛えられているのを知った瑞鶴。

「聴覚……か……」

全て読み終えた瑞鶴は、それを山積みになっている別巻の上に置く。

そして、手を頭の後ろで組んで、畳の上に寝転がる瑞鶴。

「……」

気付けば、読み始めて三時間はたったのか、すでに窓の外は夕焼け色に染まっていた。

と、そこで眠気が襲い、そのまま抵抗する事なく、眠りについた……

今日は、新しい艦娘が着任するらしい。

なんでも、深海棲艦の攻撃によって壊滅した鎮守府の所から来るらしい。

全く、不幸なものだ。

あの提督のいるこの鎮守府に配属されるとは。

来た。

そして実に不愉快で愉快だ。

かの一航戦様だ。



あのミッドウエーで沈んだ、哀れな正規空母。  
さて、彼女は一体、どういった風になってしまふのか・・・  
楽しみだ。

つまらない。実につまらない。

なんだ奴は。何事にも動じないなんて。

提督にバカされているんだぞ。そこで何故怒らない。

まるでつまらない事の様にな・・・

そして、どうして私ばかり気をかけるのだ。

今回の出撃だって、本当なら私にあたる筈だった急降下爆撃を代わりに受けるなど、本当に、一航戦なのか？

誰も来る事の無い竹林で、あの一航戦が木刀を振るっていた。

何か嫌味を言ってるやろう。そう思い、近付いて声をかけた。

『何故そんなもの振っているんですか？』

嫌味たつぷりな表情と声音でそう聞いてみた。

『そうね・・・こうしてると、落ち着くのよ』

なんでも、以前いた鎮守府の提督は、よく木刀を振るっていたらしい。

彼女は、それに少し興味を持ち、一緒に木刀を振るっていたそうだ。

それが日常に染み込み、暇さえあれば素振り、嫌な事があれば素振り、楽しい事があっても素振り。

そうしていれば、なんだか落ち着くらしい。

そんな理由に、私は、なんだかいつもの対抗心が生まれ、次の日には隙を見て街にでかけ、そこで木刀を売っている店に行き、そこにあった、彼女の持っている木刀より短い、長さでいえば小太刀ぐらいのものを二本買った。

とにかく、あの一航戦だけには負けたくなかった。  
素振りしている所に勝負を持ち掛け、素人同然の剣で彼女になぐりかかった。

全然、歯が立たなかった。

基本だけはしつかりしているのか、まだ剣を振ったことのない私では、本当に敵わなかった。

それからというものの、私は竹林にいつては彼女に勝負をふっかけ、そして返り討ちに遭うのを繰り返した。

だけど、いつしか、彼女とも拮抗するようになってきて、何日か立つ頃には、ほぼ互角に戦えるようになった。

だが、結局はそこで止まり、互角になってからというもの、なかなか勝ち越せなくなり、そもそも負けるどころか勝つ事さえも出来なくなってしまうのだ。

そんなある日、時間を忘れて散々打ち合った後、疲れ果てて背中合わせに地面に座った時の事だ。

『・・・貴方を見てると、思い出す事があるの』

『思い出す事？』

『ええ。同じ貴方と、こうして何度も打ち合った、あの頃の事を』

前にいた鎮守府でも、彼女は、別の私とこうして剣をぶつけ合っていたみたいだった。

そして、戦闘では、良き相棒同士だったという事を。

『もしかしたら、私は、前の貴方と、ここにいる貴方を重ねてしまっているのかもしれない。それほどまでに、楽しい』

私は、それを黙って聞いていた。

『私は、その事をずっと引きずっている。それほどに、私は、貴方が、愛おしい・・・』

嗚咽が聞こえた。

振り向いてみると、彼女が膝を抱えていた。

それが、余りにも、寂しそうで、悲しそうで、ほおっておく事が、出

来なかった。

そして、私は彼女を――

「ツハア!？」

飛び起きる。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

上がっていた息を整え、右手で片目を覆った。

そして、自分が泣いている事に気付く。

「……『加賀』さん……」

そして、誰もいない部屋で、静かにそう呟いた。

「今回、議論する事は、最近発見された姫級の深海棲艦の事についてだ」

横須賀鎮守府にて、元帥である玄隆がそう言う。

「吹雪」

「はい」

と、吹雪が手に持っていたタブレット端末を操作する。

それと同時に、部屋の電気が消える。

そして、正面のスクリーンに映像が映し出される。

そこには、骨の様な白髪と体。その両側には滑走路の様な板に、その右側にはまるで砲台の様な口がある。

「あれは……」「まさか飛行場姫か?」「でもあいつって……」「五十年前に沈められた筈じゃあ……」

そう、その深海棲艦の名称は『飛行場姫』。

深海棲艦が現れた五十年前のたった四年後に沈められた筈の深海棲艦の『姫』の名を持つ存在だ。

「お前たちが知っている通り、この飛行場姫は五十年前の『鉄底海峡突破作戦』にて沈められた。だが、横須賀の南雲機動部隊が、太平洋のマーシャン諸島付近で、陸上にこの飛行場姫の存在の確認。更に……玄隆が吹雪に合図を送る。

するとスクリーンの画面が切り替わり、今度は子供の様な深海棲艦を出した。

先ほどの飛行場姫とは対照的に黒いフード付きのジャケットを着ており、見た目は北方領土を支配していたといわれる北方棲鬼に似ているようだが、身長からしてあきらかにこちらの方が高い。

だが、間違いなく奴が深海棲艦だと分かる要素が、腰から尻尾の様に伸びている異形な艦装。

深海棲艦の中で、最も厄介な戦艦、『戦艦レ級』だ。

「お前たちも知っているだろう。砲撃はともかく、雷撃も可能、艦載機を飛ばすのも可能。しかもその練度が一機に対して零戦が十機とあったふざけた練度と性能だ。更にヲ級改フラグシップが四隻、横須賀の南雲機動部隊でなければ間違いなく航空戦でやられていただろう」

会場が騒めく。

ふと時打は、翔真の方を見た。

翔真は何も言わず、隣の赤城は俯いて、スカートの様な袴の裾を握

りしめている。

悔しいという気持ちが滲み出ているのが丸分かりだ。

どうやら、かなり一方的な展開だったようだ。

それを見かねた様子で、玄隆は続けた。

「他にも、装甲空母鬼が三隻も発見。他にも南方棲戦鬼を二隻のうえ、戦艦棲鬼を一隻に二個の機動部隊を発見した。そして、敵はここを拠点に、北マリアナ諸島に向かって攻撃しようとしている事が分かった」

北マリアナ諸島。

そこは、フィリピンとの海上交通路シーレーンを防衛する為の大事な泊地だ。

「ここをやられれば、まず、間違いなくフィリピンとの貿易は難航する。奪い返す事は可能だが、それにはかなりの年月がかかるだろう。だから、まずはこちらから先手を打つ」

玄隆はそこで言葉を切った。

そして……

「今回、私がおこへ来たのは他でもない。ここ、関東地方にある鎮守府で、この敵泊地を叩く！」

玄隆が威厳ある声でそう言う。

そして、会場から、おお！、といった歓喜の音が漏れる。

「今回の大規模作戦は、敵戦艦などの敵艦を討つ水上打撃部隊、飛行場姫を叩く陸上砲撃部隊、そして、敵艦載機を落とす、飛行場姫を封殺する航空機動部隊の三つに分ける。それで、これから言う鎮守府から、指定された艦種を出してもらい、それをそれぞれの部隊に入れる」  
そこで言葉を切った玄隆。

そして、今回の大規模作戦に参加させる鎮守府の名前を告げた。

「横須賀、小田原、鎌倉、鴨川、南房総、黒河。この四つだ」

「……え？」

その最後の名前にポカンとする時打と長門。

そして、騒めく。

「黒河？」「あれだろ？ブラック鎮守府の」「そうそう。なんか艦娘の轟沈記録を偽装したっていう」「なんであんな所が……」

「ッ！」

誰かが言った言葉に長門がカツとなり、立ち上がって叫ぼうとしたが、時打に肩を掴まれ、まるで人間離れした筋力で、立ち上がるのを阻止される。

「落ち着け長門。ここで齒向かえばお前はともかく、鎮守府にいる皆の立場が危うくなる」

「ッ……だが……」

「長門」

時打が、声を低くして長門の名前を呼んだので、長門は黙り込んでしまう。

「大丈夫だ。今は、耐えろ」

「……分かった」

と、浮きかかった腰を下ろす。

その時、どこかで安堵の息を漏らした音がした。

「これから、その六つの鎮守府の提督に説明をする。会議が終わった後、すぐに長官室に」

それだけを言い、玄隆は黙った。

そして、ある程度の報告を済ませた後、会議は終了した。

長官室にて。

「納得できません！」

まず、一人の女性が声をあげた。

南房総の提督、『柏木<sup>かしわぎ</sup> 亜美<sup>あみ</sup>』だ。

容姿としては、スポーツ系女子のようで、赤みがかかった茶髪で短髪だ。

秘書艦には、龍鳳で、亜美の行動にかなりオドオドしている。

「どうしてブラックである黒河をこの作戦に参加させたのですか!？」

その矛先は、元帥である玄隆に向けられている。

「柏木提督に賛成します。私も、ブラックなどと協力する気などありません」

彼女の言葉に同意した一人の男性。鎌倉の提督で、名前は『岩倉<sup>いわくら</sup> 久三<sup>きゆうぞう</sup>』。

かなりほつそりとした、がり勉タイプを思わせる容姿で、髪の色は時打同様、黒。

しかしその顔は、いつにもまして険しい。

傍らの秘書艦は北上も、真剣な表情でいた。

「それに、黒河に在籍する艦娘はたった三十隻しかいないと聞いています。そんな小規模な鎮守府から大規模作戦に参加させるなど、気が狂っているのかと聞かれてもおかしくありません」

「それになんども艦娘を轟沈させていると聞きます。こんな奴の率いる艦隊など、あつたところで足手纏いになるだけです」

と、更に同意するのが鴨川の提督、『郷天<sup>ごうてん</sup> 神代<sup>かみよ</sup>』。

三十代くらいで、かなり鍛えているのか、凶体がかなりでかい。

秘書艦の龍田は、その光景を面白そうに見ている。

「ハハハ……酷い言葉ようだ」

「ツツツ……慣れているんだなお前は」

その様子に、苦笑している時打と、今すぐにもぶん殴りたいと言わんばかりに拳を握りしめている長門。

「貴方たちも何か言いなさいよ! 翔真、三鷹!」

と、亜美が横須賀の提督、『壺条 翔真』と、小田原の提督、『三鷹 悠馬』の二人に話を吹っ掛ける。

三鷹の方は、男だが、髪が肩まに伸びており、頭の後ろで結って

おり、身長は、この中で一番背が低い。

その傍らには、秘書艦の叢雲がうんざりしたような表情でたたずんでいる。

「ええ、僕に言われても……」

「……」

三鷹は困った様に、翔真は……実に不愉快とでもいうような表情でいる。

「……なによ?」

亜美が訝しむような眼で翔真を見る。

「……お前たちは、一つ勘違いをしている」

と、翔真が亜美たちに向かって言い放つ。

「艦娘をわざと轟沈させていたのは前任の『秋村<sup>あきむら</sup> 禅斗<sup>ぜんと</sup>』だ。こいつが着任したのは二月の中旬。それから艦娘が轟沈したという報告は一切されていない」

「そんなの関係無い」

だが、そんな翔真の弁護を一蹴した神代。

「なに?」

「今時、刀を持つ提督がどこにいる。いくら銃刀法違反が適用されないといっても、そんなものを持つ提督などいない。それでも持っているという事は……」

と、時打に歩み寄り、身長の関係上、時打を見下す神代。

「……ろくでもない奴だという事だ」

「貴様あ……」

その神代の言葉を聞いた長門が、とうとうブチ切れて敵意をむき出しにする。

「提督は……ッ!?!」

それで何かを言おうとした途端、ビュンツ!と何かが長門の眼前で止まる。

「少し、黙ってもらえるかしらあ?」

「龍田……貴様……」

艦装の一部である槍を長門につきつけている龍田に、長門は今にも



爆発しそうな怒りを向ける。

だが……

「確かに、俺はろくでなしだよ」

と、時打は、龍田の槍の穂先を掴む。

そして、無理矢理長門から反らす。

「!?」

それに目を見開く龍田。

グググ、と、長門から反らされた槍を、今度は思いっきり押し込む。

その腕力に、思わず下がってしまう龍田。

「……貴方、本当に人間?」

「さあな……もしかしたら、何千人も斬り殺してる殺人鬼かもな」

と、冗談に聞こえない冗談を言い合う龍田と時打。

時打の槍を掴んだ右手からは血が流れ出していた。

「た、大変……」

と、同じ長官室にいた豪真の秘書艦である筑摩が慌てて包帯を取り出そうとする。

「大丈夫だ筑摩。それほど傷じゃない」

と、そんな筑摩に優しく微笑み、心配ないような素振りを見せる。

「それでだ。俺の鎮守府が参加するのはいささか不満だと思うのは、当然でしょう。俺の鎮守府は元ブラックですから」

しかし、と付け加える時打。

「そもそも、作戦を実行するのに、その様な事実が必要でしょうか?」

「なんですって?」

亜美がくいつく。

「そうでしょうか? 必要なのは、実力に対する信頼なんですから」

「……どういう意味よ?」

亜美はまだ理解できていない様だが、代わりに久三が聞く。

「今回の作戦に参加する程の練度がある?」

「ええ」

その質問に、即答する時打。

「何を言い出すのかと思えば……小規模な鎮守府に、その様な艦娘

が存在する訳が・・・」

「黒河の瑞鶴は、横須賀の加賀に匹敵する艦載機運用能力を持っている」

その久三の言葉を遮る様に、豪真が割り込む。

「長官・・・」

「父上・・・」

「他にも、電の白兵戦に、暁の単独戦闘にも目を見張るものもある。それに、その長門の砲撃戦も、かなりの戦果を叩き出している。それは、岩倉、お前の所の陸奥に匹敵するぞ」

「なに!？」

「ッ・・・!？」

豪真の言葉に、驚きを隠せない久三。それと同時に目を見開く北上。

そして、陸奥という名前を聞いて、身を強張らせる長門。

「それに、今回の編成で、その四隻を同行させるつもりだ。他二隻は流石に本人に任せるが、間違いなく、この四隻は信頼している」

それが、実力的な意味だという事だと悟った久三は、悔しそうに顔を歪める。

「で、ですが・・・!」

それでも食って掛かる亜美。

「見苦しいぞ、柏木」

瞬間、玄隆の放った威圧で、押し黙ってしまう亜美。

(これは・・・剣気!?)

その正体に気付いた時打が眼を見開く。

(この人、何か剣術を・・・)

そう考察するも、次に玄隆が発した言葉で断ち切られる。

「それに、これは最高司令官である私の決定だ。異論は許さん。特に、他人の鎮守府を蔑むような輩の言葉はな」

「・・・」

それで、押し黙る三人。

「とにかく、今から必要な艦種を書いた資料を渡す。それを受け取っ

たら、各自帰って良し。以上だ」

そして、その場にいる提督六人が、その名簿を受け取り、解散した。そして帰り際に、亜美が一言。

「・・・せめて、邪魔だけはしないで」

それだけを言い残し、部屋を出て行った。

その後ろから、龍鳳が謝る様に頭をさげ、追いかけて行った。

「天野」

「あ、翔真さん・・・と三鷹さん？」

「三鷹で良いよ。よろしく、天野くん」

と、挨拶を交わす三人。

「赤城も久しぶり」

「ええ。お久しぶりです。立派になりましたね」

と、微笑む赤城。

「それよりも、その右手、どうにかした方が良いんじゃないのか？」

「え?・・・あ・・・」

と、時打は右手の状態を思い出した。

するとどこからか手刀が時打の頭に当たる。

「いて」

「バカなんですか?」

「わ、悪かったよ筑摩・・・」

と、時打の右手を包帯で巻く筑摩。

「今回は済まなかったな、天野 時打」

そこで玄隆が口を開いた。

「いえ、お気遣い無く」

「そうか・・・大和は元気になっているか?」

「え・・・ええ、まあ。元気ですよ?」

「そうか」

それを聞いた玄隆が、ふう、と息を吐いた。

「時に、豪真から聞いたのだが、艦娘と決闘したらしいな」

「え!？」

「ほう」

玄隆のいきなりのカミングアウトに驚く三鷹、それに対して翔真は面白そうに右手を顎に乗せる。

「まあ」

「ええ!？」

赤城は、驚いた様だが、大きなリアクションはせず、一方の叢雲は盛大に驚いている。

そして、当の本人たちは、完全に固まっていた。

「それも、その長門と、大和を相手取ったらしいな」

「い、いやあ……それは、同意の上での決闘でして……決して、何か、縛りを付けるようなものではない……」

「はい……私も、彼を認める上で、決闘を申し込んだのであって……というか、私が申し込んで……」

ダラダラと汗を流す時打と長門。

「なるほど、豪真がお前の話をするわけだ」

「いやあ、それほどでもない」

玄隆の言葉に、照れたように、頭をかく豪真。

「あとで覚えている……」

一方で、時打は恨めしそうに睨む。

豪真の隣では筑摩がごめんなさいごめんなさいと連呼するように頭を上下させている。

「まあ……決闘したのは事実ですし、否定する事もしませんが……決して、邪な気持ちがある訳じゃありませんよ?」

「それは、俺が保証しよう。お前もそうだよな?」

「まあな」

時打の訂正、豪真の保証、そして翔真の同意。

「うわあ……長官と壱条提督にここまでやらせてしまうなんて……凄いい人なんだなあ……」

「そうね……」

三鷹がそう関心し、叢雲がそれに頷く。

「それじゃあ、俺たちもそろそろお暇とさせていただきます」と、敬礼をした時打と長門は、部屋を出ようとする。

「あ、そうそう、時打」

「？　なんでしよう？」

豪真に呼び止められて、振り向く時打。

「依頼されてた建造の件、今日だぞ」

「え!?! 本当ですか!?!」

思わず声をあげる時打。

「ああ、それも——」

「——高速戦艦だ」

高速戦艦！その名は霧島！

横須賀の工廠へ急ぐ。

艦娘の建造は、各地方、それも関東でそこでしかされない。

そして、黒河の提督、天野時打が依頼した建造が、今日、終わったのだ。

つまり……………新戦力だ。

「高速戦艦……………今の鎮守府ではない艦種だったな」

「ああ、戦艦枠は私をいれて大和と扶桑、そして山城しかないからな」

と、赤レンガの工廠の中にある廊下を歩いていく。

たいていの場合、建造された艦娘は、ある程度の講座を受けて、建造を依頼した鎮守府へ送られるのだが、時打の場合の事もあり、偶然にもこの横須賀の工廠に直接くる事もあるのだ。

「ここだな」

と、艦娘待機部屋ともいうべき扉の前で止まる。

そして、時打は一度長門の方を見る。それに対して、長門は頷く。

時打は一度、深呼吸をして、意を決した様に、扉を叩く。

「はい」

「黒河の天野時打だ。入るぞ」

「どうぞ」

了承の声が聞こえたので、ゆっくりと扉を開ける。

一瞬、窓から差し込んだ光が視界を霞ませるも、だんだんと慣れていき、目に映るシルエットの正体がだんだんとはっきりしていく。

そして……………

「こんにちは、私、霧島です。よろしくお願ひします」

高速戦艦、霧島だった。

ヒトフタヒトゴ—十二時十五分。

横須賀の食堂にて。

「へえ、提督は剣術をやっておられるのですか」

「まあな。飛天御剣流っていうんだ」

「そうなんですか」

何故、ここに時打、長門、そして新人の霧島がいるのかというと、単なる昼食の時間だ。

一応、互いに挨拶を済ませた後に丁度正午になったので、親睦を深めるといった名目でもあるのだが。

と、そこで霧島は気付くのだが、周りの視線、特に会議に出席していた提督たち（霧島は知らないが）からの視線の色がなにか違った。

何か、敵意のような・・・そうでないような・・・

「内の鎮守府、もとはブラックだったんだ」

そこで、霧島の疑問に答えるように長門が答える。

「それも前までの話だったんだけどな。この提督がきてから、うちも元の活気を取り戻ってきている。だから、心配するな」

「そうですか・・・」

それを聞いて安心する霧島。

「ま、その事実を知らない奴が多いんだがな」

と、時打が付け加えるように言う。

確かに、ブラック鎮守府というのは、艦娘を人として見ている人間にとつては嫌悪に値する所だ。

まあ、こんな風に、嫌われている状況に陥るには、どこかしら情報が洩れなければこうにはならない。

そんな風に話し合っているうちに、食器が空になったので、それを返却して、横須賀の鎮守府の廊下を歩く。

そこへ……

「時打く!!」

「ん? ……おわあ!」

と、時打の背後から声が聞こえ、振り向いてみると、なにかが抱き着いてきた。

「な!」

「え!」

それに驚く長門と霧島。

「ひ、飛龍か、びっくりさせんなよ……」

「えっへへ。久しぶり!」

その正体は飛龍だった。

「おう久しぶり。そして離れろ」

「あくん、良いじゃん別に!」

「良くねえよ!」

時打に抱き着いて離れようとしないう飛龍。

と、そんな飛龍の道着の襟首をつかむ存在がいた。

「わ!」

「こら、飛龍。あまり時打くんを困らせちゃダメじゃない」

「う。蒼龍」

彼女の同僚、蒼龍だ。

その蒼龍に、飛龍は恨めしそうに上目遣いで見る。

「蒼龍も久しぶり」

「久しぶり時打くん。提督になったのは本当なんだね」

と、微笑む蒼龍。

「提督、知り合いなのか?」

「まあな。この横須賀のエースの一角たちの飛龍と蒼龍だ。お前もご存知、横須賀の南雲機動部隊の二人だよ」

「よろしく! 黒河の長門、霧島!」

「よろしく」

飛龍はフレンドリイに、蒼龍は礼儀正しく挨拶をする。

「ああ、よろしく」



「よろしくお願いします」

と、同じように長門と霧島も挨拶を返す。

「そういえば、提督に聞いたんだけど、今回の大規模作戦、時打の鎮守府も参加するんだよね？」

「ああ。空母一隻、駆逐艦二隻、戦艦一隻に軽巡二隻だ。そうだ……」

と、時打は何かを思い出したかのように、突然、頭を抱え始める。

「しまった……空母枠、五航戦だ……」

「え……」

「え？」

時打の言葉に顔が引きつる飛龍と蒼龍。

一方で、長門と霧島はその理由が解らず、首をかしげた。

「だ、大丈夫かな……」

「喧嘩に発展しないといいんだが……」

「あの加賀さんの事だからなあ……」

更に三人で頭を抱え始める。

「ど、どうかしたのか……?」

「ふむ、もしかしてその加賀さんって『五航戦嫌い』なんでしょうか?」

と、霧島は分析を始める。

「今までの建造記録からみて、建造された加賀さんの性格の殆どが五航戦嫌い。希に例外ができる事もあるのですが、それでも五航戦嫌いな個体は多いようです。なので、この加賀さんも、五航戦が嫌いな五航戦嫌いだという可能性が極めて高いといえます。それがこちらの瑞鶴も一航戦が嫌いな一航戦嫌いならなお質たちが悪い。その事で頭を抱えているのではないのでしょうか?」

「そ、そうなのか?」

と、長門が霧島から時打たちへ視線を移すと、まるで凶星ともいうべき表情の三人がいた。

「まあ……そんな所か?」

「う、うん……」

「すごいね……」

かなり感嘆していた。

「まあ……」

と、そこで長門が顎に手をあてながら時打たちにある事を言った。「そちらの加賀はともかくとして、こっちの瑞鶴なら問題はないんじゃないのか？」

「え？・そうなのか？」

きよとんとする三人。

「ああ。昔、うちの鎮守府にも加賀がいてな。はじめは、瑞鶴の方が嫌っていたんだが、なにかあったのか、ある時からよく喋るようになったんだ。今は、もういないがな……」

と、長門の瞳に影が差した。

「……ま、それはそうと……」

と、時打が話題を切り替えた。

「そろそろ戻ろうか。霧島も、はやく、自分が着任する鎮守府のことも見ておきたいだろ？」

「そうだな」

時打の言葉に同意する長門。

「もう行っちゃうの？」

「ああ、今度の大規模作戦で会おう」

「うん。じゃあね、時打くん」

そして、彼らは別れた。

## 指導

「そんな訳で、今日から、この黒川鎮守府に着任することになった霧島だ。みんな、仲良くしてやってくれ」

「よろしくお願いします」

と、食堂に集まった艦娘たちに一礼をする霧島。

「高速戦艦……」

「山城、そんなに敵意むき出しにしないの」

山城が、彼女の性能に嫉妬しているのか、歯ぎしりをして、それを扶桑がとがめる。

「新しい戦艦かぁ……やっぱり提督って巨砲……」

「ストップ、それ以上いつたら長門が喀血するからやめといて」

天龍がなにかを言いかけるも、川内がそれを止める。

「霧島、混じっていいぞ」

「わかりました」

艦娘たちが騒めいている間に、時打が霧島をその中へ入れる。

「さて、こうして集合してもらったのは、霧島の紹介にもう一つある」

時打の言葉を聞いた艦娘たちが一斉に静まりかえる。

「今回の会議で、俺たち、黒川鎮守府は、大規模作戦への参加が決定した」

その場の空気が変わる。

艦娘たちが一斉に騒めく。

「て、提督！」

そこで手をあげたのは大淀だった。

「な、なぜ私たちのような小規模な鎮守府が、その様な作戦に選ばれたのでしょうか!？」

と、慌てた表情でそう聞いてくる大淀。

そうだそうだと声をあげる艦娘たち。

そこで、時打は、右手をあげ、電に合図を送る。

すると、部屋の電気が消え、投影機が、時打の背後にある白いスクリーンに映像を映し出す。

「まず、今回の作戦の概要だが、敵深海棲艦は、太平洋にるマーシャン諸島に泊地を形成、そこから、フィリピンとの海上交通路を防衛するための、北マリアナ諸島に向かつての攻撃準備を進めていることが分かった。だから、早期にこれを撃滅するべく、元帥は大規模作戦を立てたんだ。そして、なぜその作戦に俺たちが選ばれたのかというと、単純にいつて戦果だ」

「戦果？」

首をかしげる大淀。

「暁の単独戦闘、電の白兵戦、長門の砲撃戦に、瑞鶴の艦載機運用能力。それらの能力をみて、元帥は俺たちを選んだらしい」

「そうですか……」

大淀はしぶしぶといった感じで、引き下がる。  
が。

「それを聞く限り、先ほど述べた四人は出撃させると？」

「その通りだ」

時打は即答で答えた。

暁、電、瑞鶴の顔に緊張が走る。

「そして、残り二枠だが、軽巡だそうだ」

時打の言葉に、冷や汗を流す軽巡の艦娘たち。

「その二枠だが……川内、神通に任せようと思う」

「あの……」

そこで神通が手を挙げる。

「なんだ？」

「戦艦の枠ですが……大和さんじゃダメなんですか？」

神通がその様な言葉を発する。だが、大和は全く不満が感じられない表情で腕を組んでいた。

その反応に困惑する艦娘たち。

その疑問に、時打が答える。

「何度か、鎮守府が直接攻撃された、ということがあったよな？」

「ええ。主力が出払っている間に、その隙を突かれて壊滅したっていう話。提督はその事を思案に入れているのでしよう？」

大和が、時打の意図を言い当てる。

「その通りだ。大和は、この鎮守府で最強の存在だ。聞く所によると、たった一人で戦艦四隻を相手取ったとも聞く」

おお、どよめく。

「まあ、大和さんの強さは、私と翔鶴姉がよく知ってるからね」

うんうん、と誇らしげにうなずく瑞鶴。

「とまあ、改めて・・・」

時打が咳払いをすると、いきなり『超提督モード』（長門命名）になって、威厳ある声で命令を下す。

「——これよりッ！我ら、黒河鎮守府から、大規模作戦へ参加させる軍艦を指名するッ！まず、戦艦長門ッ！」

「了解だ。必ずや勝利を」

長門が答える。

「空母瑞鶴ッ！」

「よし、出撃だ！」

瑞鶴が張り切る。

「駆逐艦暁ッ！」

「分かったわ」

暁が、不安の混じった声で応じる。

「同じく、電ッ！」

「はい！壬生の・・・は?！」

電が何かを口走りかける。

「軽巡川内ッ！」

「オツケー、夜戦は期待しててよね！」

川内がまかせろというように胸を叩く。

「同じく、神通ッ！」

「了解しました」

神通がピシッと答える。

「以上が、今回の作戦に参加する艦娘であるッ！ただし、別の鎮守府の艦娘と合同になる事があるので、これだけは覚えておくよーに！以上ッ！解散ッ！」

ヒトマルマルマル——午前十時。

会議から一時間後、工廠にて。

「明石、夕張」

「あ、提督」

時打が工廠にくる。

「黒風の方はどうなってる?」

「うくん。改良を重ねているんですが、どうも、うまくいかなくて……」

見ると、明石の前にある机の上には、プラモデルサイズの黒い艦載機、艦戦『黒風』が半ば分解状態で、妖精たちが頭を抱えていた。

なんでも、黒風には所々不備があったようで、それを改善する為に色々と思案しているらしい。

「この調子だと、大規模作戦の当日に完成になるかと……」

「練度を鍛える暇もないな……これじゃあ、運用は無理か……」

「すみません。私の力が及ばないばかりに……」

夕張がそう言っって頭を下げる。

「良いんだよ。間に合わなくても、烈風改でなんとかするからよ」

時打は、そう言い、夕張の頭を撫でる。

それに顔を赤面させる夕張。

「それで、もう一つの方はどうだ?」

「あ、『あれ』ですか?ええ、進んできますよ。黒風の改修と同じくらいにできるかと」

「そつちも難しいか……流石に無理を詰め込みすぎたか……」

「いえ、不可能という訳ではありません。ただ、黒風の改修に、人員を割いてるって感じですから」

「そうか。なら、新型による戦力増加は間に合わないか……」

と、時打は顎に手をあてる。

(どうする……。どうしてこのタイミングで飛行場姫が復活したのか

気になるし、どうしてフィリピンとの海上交通路を寸断したがたるのかというのも気になる。何か嫌な予感がするから、黒風ともう一つの『あれ』の量産を急がせてみたが、これじゃあ……」  
と、悩み始める時打。

「はあ……それはこれから考えるか……」

「何がですか？」

「いや、なんでもない」

夕張が聞くが、時打はそらした。

鎮守府の裏手にある山。

そこを超えれば黒河市が見えるのだが、生憎と今回はその鎮守府側の山。

「響夜がこつちに行つた筈なんだが……」

会議が終わり、長門は鎮守府の門の前で、響夜が森の中に入るのを目撃したのだ。

「何故こんな所に……」

彼が黒河に行くことは無い筈。なぜなら、黒河は今、時打たちがその街を裏で支配している組織に狙われているからだ。

ならば、何故こんな所に……」

「全k……」

ドゴオオオオンツ!!

瞬間、轟音が響く。

「な!?!」

一瞬、敵の艦砲かと思つたがそうではない。  
聞こえたのはかなり近く。

その方向へ急いで向かうと、あちらこちらの木が薙ぎ倒されてい

た。

「こ、これは……」

その全てが、まるで木端微塵こっばみじんに吹き飛んでいたのだ。

そして、さらにもう一つ轟音。

「オラアッ!!」

そして、聞き覚えのある掛け声。

その方向を見た瞬間、何かが吹っ飛んだ。

それは、木……の、粉塵。

「な!?!」

それに驚く長門。

慌てて、その音の元に視線を向けると、そこには右拳を突き出した

響夜がたっていた。

「ん? 長門じゃねえか」

「お、お前……何をやって……」

「ん? ああ、これか」

と、響夜が右手を持ち上げて見せる。

その手には、怪我の一つも見られない。

「どうやって……」

「二重の極みっていつてな」

響夜は、長門に、自身の必殺技、『二重の極み』の説明をした。

「そうなのか……」

「俺も、習得するまで一ヶ月もかかったぜ。左之助はたった一週間で

習得したつてのによ」

その人物は誰かは知らない長門だが、ふと何を思ったのか、目の前

にある木に歩み寄る。

そして、手を猫の手の様な形にして右手を振り上げ、思いっきり木

に振り下ろす。

木は鈍い音を立てて、手が木にめり込む。

「それじゃあダメだ」

響夜がそう言う。

長門の隣に立つ響夜。



「それじゃ、ただの二連撃だ。刹那の瞬間に二撃目を入れるんだ。こんな風にな」

と、右手を木に叩き込む。

瞬間、吹き飛ぶ。

「ッ・・・」

巻き起こった粉塵に思わず目をしかめる長門。

「やりたい理由は問わない。だけど、これを習得するのはかなり難しいぞ」

「分かっている・・・なんとか大規模作戦までには仕上げる」

「そうか・・・」

と、響夜は、長門に背を向ける。

「コツは教えた、後は自分でやってみろ。時打に事情は話しておく」

「・・・すまないな」

そうして、響夜は立ち去った。

「やあああああ!!」

竹林。

そこで、瑞鶴は両手に持つ木刀を、十字に交差させて時打に斬りかかる。

それを時打は飛んで回避。

「ッ!?!しまった!?!」

「セアアアッ!!」

時打が、逆刃刀を振り下ろす。

それが瑞鶴の右肩に直撃する。

「うあッ!?!」

思わず膝をつく瑞鶴。

「大丈夫か?」

時打がそう聞く。

瑞鶴は右腕を回し、痛み以外、問題ない事を確認すると立ち上がる。  
「まだやれます！」

「そうか」

時打は、鞘に逆刃刀を納める。

「ッ!?!」

そしてそのまま抜刀術へ。

(帯ベルトから鞘を外しての抜刀術!これは、二段抜刀術の双龍閃ツ!?)

そして、瑞鶴の剣客としての感をフル稼働させて、一撃目を止めるという行動に出る。

その瞬間、右側に交差させた木刀から両腕へ、強い衝撃が走る。

「つう・・・!?!」

そこである違和感に気付く。

木刀が受け止めていたのは・・・鞘。

「鞘!?!」

「飛天御剣流抜刀術・・・」

なんと、一撃目を鞘という、全く予想だにできない、もう一つの二段抜刀術。

「双龍閃・雷ツ!!」

「ぐああ!?!」

刀による二撃目が瑞鶴の左肩に直撃する。

その痛みにも、また膝をついてしまう瑞鶴。

「くう・・・」

両肩にくる痛みに悶える瑞鶴。

「心配すんな。骨までは逝ってない・・・答だ」

「答ってなによ答って!?!」

思わず食いつく瑞鶴。

だが、未だに両肩に痛みが残っており、その痛み顔をしめる瑞鶴。

「しっかし、お前が陰陽交叉おんみょうこうまをしてくるなんて思わなかったよ」

「ふくん、知ってたんだ」

「そりゃ全部読んでるからね」

何を、とは言わない。

それは瑞鶴も知っているからだ。

「そっぴゃ一つ聞きたかったんだけど……」

と、時打が逆刃刀・深鳳を鞘に納め、瑞鶴に聞く。

「お前、なんで小太刀二刀流なんてやってるんだ？」

「……」

だんまりとする瑞鶴。

それに頭をかく時打。

ふと、瑞鶴が立ちあがる。

「昔、ここで、ある艦娘とよく剣を打ち合ってたんだ」

「なるほど、だから結構古いが、いくつも足跡の様なものが沢山あったんだな」

と、何かを一人合点する時打。

「でね、その人とは、うまく、やってこれてたんだ」

「……」

時打は、黙って聞く。

「でも……ね……」

瑞鶴の脳裏に、あの時の光景が目映る。

暗雲立ち込める空。

水面に仰向けに倒れる自分。

その上に、親友である、自分の戦友。

その口から滴る、真っ赤な液体。

「その人……いなくなっちゃったんだ……私を庇って……敵の爆撃を一人受けて……死んじゃったんだ……」

その声に、嗚咽が混じる。

「それから……剣術……やる気も失せて……もともとの本質だった……弓に没頭して……忘れようとしたんだ……感情は……任務に支障をきたすと思って……でも、やっぱり忘れられなかった……提督さんがきて……提督さんの剣が……あの人の様に真っ直ぐだから……」

時打は、俯いて表情の伺えない瑞鶴の顔から、何か光るものが落ち

る。

そして、瑞鶴がゆつくりと顔をあげた。

「……悔しいよお……」

時打に、歩み寄る瑞鶴。

そして、その胸に顔を埋める。

「悔しくて、悔しくて……あの時の自分がもっと強かったらって……私が……あの人を無理にでも、連れ帰っていれば……こんな……こんな悔しい思いをしなくて……済んだのに……」

時打は、そんな瑞鶴を抱きしめる。

そして、嗚咽は、確かな泣き声に変わる。

それが、竹林に響き渡る。

その様子を見ている者が一人。

「瑞鶴……」

竹に身をかくし、その様子を、見る事なく、愛する自分の妹の泣き声を聞く。

翔鶴だ。

「……」

そんな、場面に、今は自分は不必要だと思い、翔鶴は、その場を離れた。

大規模作戦まで、残り一週間。

## 大連合艦隊 組み分け

定例会議から、一週間がたった。

四月中旬。

ヒトマルマルマル——午前十時。

横須賀にて……

「長門、お前ちゃんと入渠してきたんだよな？」

「ああ。問題ない」

と、長門は右手をぐっぱぐっぱと、開いたり閉じたりした。

「しっかりとしてくれよ。響夜から修行のためとはいえ、かなり右手を酷使してたんだからな」

そう咎める時打に、大げさに肩を竦める長門。

その後ろには、黒河鎮守府所属だというのが分かるジャケットを着ている他五人の艦娘たち。

今回の大規模作戦に参加する黒河鎮守府の選抜メンバーだ。

「どんな人がいるのかな」

「あまり、怖い人じゃないといいですね、姉さん」

「どうしよう……もし電と離れ離れになったら……」

「だ、大丈夫だよ暁ちゃん。きつと、皆優しいから」

川内、神通、暁、電がその様に談笑。

だが、瑞鶴だけは少し浮かない顔をしていた。

「心配か？」

時打がそんな彼女に話しかける。

「え？」

「加賀の事だ」

「……うん」

うなづく瑞鶴。

「でも、大丈夫。今度こそ、加賀さんを……」

小さな声で、瑞鶴が、その様に呟く。

「……自己犠牲だけはするなよ」

「うん。でも……」

瑞鶴が、少し間を置いて、答える。

「考えるより先に動いてたら……その時は許して」

「……分かった」

そして、ある地点についた所で、時打は後ろにいる自分の艦<sub>部</sub>娘たちに振り向く。

「俺たちはここで別れよう。これが、お前たちが入る艦隊の名簿だ」

と、時打は六枚の紙を、それぞれ一枚づつ渡す。

「へえ……」

「……!」

「良かった……」

「陸攻ですか……」

「私は……水上打撃か」

「私はやっぱり機動部隊か」

それぞれの感想が口から漏れる。

「それじゃ、仲良くやれよ」

『はい!』

元氣良く答えた彼女たちに微笑み、時打は指令室に向かった。

神通、長門は水上打撃部隊だ。

主に、敵の艦隊などを叩くのが仕事だ。

「失礼する」

「失礼します」

長門と神通が、同時に、水上打撃部隊の部屋に入る。

「黒河から来た長門だ」

「同じく、軽巡の神通です。よろしくお願いします」

すると一瞬で、その部屋にいた艦娘たちの視線が突き刺さる。

もう、全員来ていた。

みてみると、大和型二番艦の武蔵、長門型二番艦の陸奥、妙高型重巡の足柄、同じく重巡の那智、護衛として陽炎型駆逐艦の雪風、白露型の白露、睦月型の如月、同じく弥生、初春型の若葉、そして、軽巡の龍田。

長門の視線が、陸奥に向く。

その視線に、陸奥は首を傾げるが、長門はすぐに視線を外し、龍田へ。

「一週間ぶりだな、龍田」

「そうねえ」

と、龍田は気の抜けた喋り方で長門に応じる。

「まあ、ここではあの時の事は水に流して、仲良くしましょう」

その言葉に眉をひそめる長門だが、時打の事を思い出し、ため息を一つついた。

「そうだな。今は協力し合おう」

「ふふ、賢いのねえ。うちの長門はともおつちよこちよいなだけで」

「……」

その私と一緒にしないでくれ、と内心で本気で思った長門。

それに苦笑いを浮かべる神通。

すると、褐色肌の艦娘、武蔵が長門に歩み寄る。

「今回はよろしく頼む。それなりに期待はしている」

「そう言い、右手を差し出す。」

不器用なのか、少しぎこちない。

だが、その笑みからは見下しているという感情は感じ取れない。

「ああ、こちらからもよろしく頼む」

「そう言い、長門も右手を出し、その手を握り返す。」

電、川内は陸上攻撃部隊の護衛。

そこで……

「……………」

「……………」

「Oh! 貴方たちが黒河の艦娘ネー! 金剛デース! ヨロシクオネガイシマース!」

と、金剛がハイテンションに、しかしその手に持ったティーカップに乗ったお茶を一滴も零さずに自己紹介をする。

「どうも、軽巡洋艦『川内』です」

「駆逐艦『電』です。よろしくお願いします」

一瞬、茫然としたが、すぐに我を取り戻し、敬礼をする。

その部屋には、金剛の他に、同じ金剛型の比叡、榛名、霧島の三人。重巡に摩耶と鳥海。護衛として、駆逐艦の陽炎、天津風、霞。重巡の利根がいた。

「ほくう。こやつが噂に聞く黒河の電か」

「え……なんですか?」

すると、利根が電を興味深そうに観察し始める。

主に、電の腰の後ろにある小太刀に視線がいつている。

その視線に下がる電。

「ふくむ。腰に刀……珍しいものじやのう」

「そ、そうでしょうか? 昔は私たちは鋼鉄の塊だったでしょうけど、今は人の体を持った艦娘です。なら、人と同じ事ができても可笑しくはないかと……」

「だったら無駄なんじゃないの?」

そこへ割り入ってくる者が一人、天津風だ。

「私たちは軍艦。そして向こうも軍艦。だったら、かなり近づかないと敵を攻撃できない刀なんて、そんなの時代遅れの代物でしかないわ。それとも、自分の提督にでも当てられたのかしら?」

と、挑発的にそう言ってくる天津風。

それを聞いた電は……

「え? そうですけど?」



と、何故か不思議そうに首を傾げる。

どうやら、自分が馬鹿にされている事に気付いていないようだ。

自分の事に対しては、かなり鈍いのだ。

「な・・・」

「うわあ。上手く流されちゃったわねえ・・・」

と、陽炎がカラカラと笑う。

そこへ電が天津風に向き直る。

「確かに、剣は明治、いえ、江戸の頃から、だんだんと衰退していきました。でも、『剣を使う術』は無くなっても、『剣に歩む道』は、今も生きてるんです。残念ながら、私や司令官が使っているのは、『剣術』ですけどね」

そう、笑う電。

「貴方が私の事を気に入らなくても良い。でも、今だけは作戦を成功させようとする同志の一人です。そこだけは、どうか認めて下さい」

と、ペこりとお辞儀をする電。

「うぐぐ・・・」

ここまで言われると、流石に何も言えなくなる天津風。

と、そんな空気をぶち壊すかのよう、金剛が割り込んでくる。

「まあまあ！そんな事より、スコーンを食べまショウ！紅茶にはこれが一番デース！」

「あ、貰います！」

そんな空気に乗る電。

「・・・」

それに茫然とする天津風。

「じゃ、私も貰おうかな」

更に乗る川内。

そんなこんなで、陸上攻撃部隊のメンバーが終結した。

廊下にて。

「うう……緊張するわね……」

「だからって、ここで待っていてもしょうがないんじゃないんですか？」

「まあまあ良いじゃない。緊張するのは誰だっつするものよ」

暁が、扉の前で立ち往生し、途中で会った、装甲空母の大鳳に加え、瑞鶴が苦笑する。

「そんな事いって、緊張していなくても、心配してるのは瑞鶴さんの方じゃないんじゃないんですか？」

「そんな事ないわよ？」

「だって……加賀さん……」

「……」

その名前を聞いた瑞鶴の顔から、少し暗い笑みが浮かぶ。

「大丈夫。気持ちの整理は済んでるから」

「なら、良いんですが……」

そんな微妙な空気に、少し気まずくなった大鳳は、話題を切り替えた。

「と、とにかく入りましょう。誰が来てるのか、気になりますし！」

「あ、ちよ!？」

と、大鳳が扉に手をかけ、まだ心の準備が出来ていない暁が止めに入るがもう遅い。

がちやり、といつも音が響き、中に入っていく大鳳。

それに続いていく瑞鶴。その後を暁が慌てて追いかけていく。

「小田原から来ました。装甲空母『大鳳』です」

「黒河から来ました。正規空母『瑞鶴』です」

「お、同じく、黒河から来ました。駆逐艦の『暁』です」

すると、畳の上に座ったり寝転がったりしている艦娘たちがこちらに一齐に視線を向ける。

見た所、やはり横須賀の南雲機動部隊の面々が揃っていた。

赤城、加賀、蒼龍、飛龍の四人は当然の事。

他にも、随伴艦として、龍鳳、白雪、初雪、皐月、北上の五人。

三人が敬礼を解くと、真っ先に近付いてきた人物が一人。  
「よろしくね。今回、この航空機動部隊の旗艦を務めさせて頂く、赤城です」

と、赤城が右手を差し出してくる。

その手を、瑞鶴は手に取り、笑う。

「はい、こちらこそ、勝利の為に精進させて頂きます」

その反応に、赤城も微笑む。

「赤城さん」

そこへ割って入ってくる者が、ここでも一人。

「あまり五航戦の子なんかと仲良くしないで」

「良いじゃないですか。仲間なんですし」

「仲間でも信頼信用した覚えは無いわ」

そう、加賀は棘のある言葉で瑞鶴を遠回りに攻撃する。

一方の瑞鶴は、代わりに分かっていたとでもいう様に笑みを作る。

「良いですよ赤城さん。加賀さんはこういう人って知ってますし」

「そうですか？でも、仲良くはして下さいね」

「分かりました」

と、ペこりとお辞儀をして、加賀の方を見る。

加賀は瑞鶴から視線を外し、一人、ちゃぶ台に向かってお茶を飲んでいった。

（あの人もお茶は好きだったな・・・）

そう感傷に浸りながら、瑞鶴は段差になっている畳の上に腰をかけた。

（今度は・・・必ず・・・）

あの日の事を思い出し、瑞鶴は決心をつける。

そこへ、飛龍が瑞鶴の背中に飛びかかる。

「わあ!？」

「やつほー！時打の所の瑞鶴！私は横須賀所属の飛龍」

そこで加賀がピクリと反応する。

「ど、どうも、瑞鶴です・・・って、提督さんの事を知ってるの?」「知ってるも何も、結構お世話になったんだよ。誘拐されかけた

時にカツコよく助けてくれたんだ」

「え!？」

助けたってどういう事!？」と、内心で思いつきり動揺している瑞鶴。

「ど、どういう意味でしょうか……」

(まずい、まさか翔鶴姉にライバルが……)

と、ある意味どうでも良い事——別に面白いから良いが——  
——を思った瑞鶴。

「うん。私が勝手に街に出かけてた時にナンパされちゃってさ。それで断ったんだけど、逆に炊き付けちゃったみたいで、連れて行かれそうになったんだ。それで、偶然にも時打がきて、ナンパ野郎どもをバツタバツタと殴り倒していったんだ。その時の雄姿といたらもう」

えへへ、と片手を頬にあてる飛龍。

(な、なにこの惚け顔……そこまでベタ惚れって訳!?)

「あ、言つとくけど私時打に惚れてるわけじゃないから」

「今心読んだ!？」

「何の話?」

と、なんだかコントを始めた二人を、蒼龍が引き離す。

「はいそこまで」

「あく、良いじゃん蒼龍」

「話したいならくつつかなくても良いでしょ? こんにちは、私は蒼龍。時打くんとは、提督につれられて、海軍学校に行ったときに会ったの」

「そうなんですか……提督さんって結構顔が広いのね」

「広い、というよりも、ここの艦娘ならほとんどが知ってるよ」

「え、そうなんですか?」

意外な事に純粹に驚く瑞鶴。

「うん。それと、敬語は私や蒼龍には使わなくていいよ。流石に加賀さんにはどうかと思うけど、気軽に話しかけていいから」

「う、うん、分かった……それで、なんで全員知ってるの?」

「それはね」

そこへ赤城が割り込んでくる。

「よく提督に会いに学校を抜け出してここに来る事が多かったからなのよ」

「ええ!? サボりって事ですか!？」

時打の意外な一面に驚く瑞鶴。

なんだかさつきから驚かさされてばかりだ。

一方で、暁は向こうにいる駆逐艦の子たちと楽しく談笑していた。

「さあ、でも、卒業できる程の単位は稼いでいたと聞いてました  
が……」

「……」

思い出してみると、あの提督はなんでも出来過ぎる。

執務、スケッチ、料理、開発、世話、機械、裁縫、Ect……

とにかく、運が他人より悪い事を除けば、なんでも出来てしまうのだ。

正に、完璧超人を体現していると言っても過言では無い。

料理に至っては鳳翔や間宮を超えている。

ちなみに黒河に伊良湖はいない。

「よく絵をかくのが好きな人でしたねえ」

「走るのも速くて島風悔しがってたもんね」

「それに良く見せてくれる飛天御剣流の剣舞も美しかったな」

と、三人が天井を仰ぎ見る。

それに、瑞鶴は、改めて時打の凄さを感じるのだった。

（つて、剣舞って私たち見た事ないよ!? 今度提督さんに見せてもらおう!  
!）

指令室。

「よく来てくれたな、お前達」

無駄に広い部屋に、執務机が一つ。

そこに座るは、一人の男。

この関東の鎮守府を統べる、壱条豪真だ。

そして、その向かいに立つのは六人の人物。

南房総の提督、柏木 亜美。

鎌倉の提督、岩倉 久三。

鴨川の提督、郷天 神代。

小田原の提督、三鷹 悠馬。

横須賀の提督、壱条 翔真。

そして、黒河の提督、天野 時打。

「ここに来てもらったのは、お前たちも分かっている通り、明日、実行される大規模作戦についての最後の打ち合わせだ。何か、質問のある者は？」

誰も手を上げない。

「よし。今回の作戦は、一週間前、元帥殿がいていた様に、敵機動部隊を封殺、あるいは攻撃する航空機動部隊。敵戦艦群を強襲する水上打撃部隊。そして、今回、撃破目標である飛行場姫の轟沈を任される陸上攻撃部隊の三つに分かれて遂行する。それぞれの艦隊を任せる提督だが、まず、陸上攻撃部隊に、岩倉と郷天」

「分かりました」

「御意」

「次に、水上打撃部隊に三鷹と亜美」

「了解です、長官」

「了解」

「そして最後に、機動部隊に翔真と時打」

「承知しました、父上」

「期待していて下さい」

それぞれが返事をする。

「それで、今回の事だが、電の調子はどうだ？時打」

そこで、豪真が時打に問いかける。

「ええ。今の所は、快調です」

「そうか、ならよし」

腕を組んでうなづく豪真。

その光景に不満の意を表すような表情をする亜美、久三、神代。

「父上。それで、詳しい内容は如何様に？」

「うむ」

豪真が手を二回たく。すると、部屋の窓にシャッターが下りて暗くなり、豪真の左、時打たちの右にスクリーンが下りてきて、そこに映像が映し出される。

そこには、今回の攻略目標のある、マーシャル諸島があった。

「今回、飛行場姫はマーシャル諸島の、ノックス・アートル島に構えている。そして、敵水上打撃部隊は、そのすぐ西にあるジャルイット・アートル島にある母港にいる事が分かった。ならば、陸上攻撃部隊は南に迂回して、背後から飛行場姫を叩く。その間に、こちらの水上打撃部隊で、敵水上打撃部隊を、機動部隊の加賀、蒼龍、瑞鶴で飛行場姫、赤城、飛龍、大鳳は敵機動部隊を叩く。尚、飛行場姫には滑走路の高速修復が可能だという事がすでに分かっている。だから、少数の烈風隊で敵迎撃部隊を攪乱しつつ、多数の爆撃機で滑走路を徹底的に攻撃。そして、滑走路を使えなくする、もしくは敵艦載機の全ての墜による封殺に成功した後は、陸上攻撃部隊が三式弾で本体を叩く」

豪真の言葉に合わせる様に、スクリーンの場面に矢印などが表示され、分かりやすく表示される。

「大体の流れは分かったな？」

全員が同時に頷く。

それを確認した豪真はさらに続ける。

「そして、現場で異常事態に陥った時は、お前達、提督が直接指揮を下し、艦隊を導け。今回、一個の連合艦隊に二人の提督をつけたのは、一人じゃ対処できない事態に備える為だ。協力しあうのも、一つの勉強と思っておけ」

豪真は、そうしめくくり、また手を叩く。するとシャッターが上が

り、部屋が明るくなる。

「最終確認は明日、午前七時に、艦娘輸送船の出航は午前九時を持つて、作戦実行は正午を持って開始する。今日はここまで、解散！」  
「そう言い、それを聞いた全員は背後の扉に向かって歩き出す。」

——一人を除いて。

「長官」

「? どうした時打」

「一応、これに目を通しておいってください」

「?」

時打が差し出したクリアファイルに入れられた資料。

その行動に気付いた一同が、一斉に立ち止まり、時打の方を向く。

それを見た豪真は、少しした後、目を見開く。

それに、眉を寄せる、時打を除く、全員。

「……間に合うのか?」

「分かりません。ですが、間に合えば確実に、敵空母を封殺出来るかと」

それに呆然とする一同。

「そうか……」

その資料を置いた豪真は、天井を仰ぎ見る。

「……期待しても良いんだろうな?」

「ええ。おそらく、いえ、絶対に間に合わせて見せます」

自信に満ち溢れた笑みで、時打は答えた。

指令室を出た時打たち。

「天野時打」

「?」



ふと、神代に呼び止められた時打。

「……調子に乗らない事だ」

それだけを言い残し、神代は、時打と翔真とは、別の方向へ歩いていく。

「アイツは……」

「まあまあ、良いじゃないですか。対抗心というものは、時には凄い物になるんですから」

「お前の『生きる意思』の様なものか？」

翔真が、笑みを浮かべず、だが、内心では笑っているようにそう聞く。

「まあ、そんな所ですかね」

「ふん。それよりも」

翔真が眼鏡を押し上げる。

「さつき父上に出したあの資料。中身はなんだ？」

翔真が鋭い眼つきで時打を睨む。

それに時打は大げさに肩を竦め、答えた。

「まあ、翔真さんにならないですかね」

「早く話せ」

「まあまあ、そう焦らず」

そして、時打は、自分たちが担当する艦隊のいる部屋につくまでに、翔真に、自分の『切り札』を口にした。

## 決戦前夜 瑞鶴と加賀

航空機動部隊、待機室。

「それで私、MVPを取ったんだ〜」

「すごい。そこまで低いとなるとかなりの練度が必要な筈なのに……」

「それが私の友永隊だよ!」

と、楽しく談笑する飛龍と瑞鶴。

一方で、加賀はそつぽを向いてお茶を飲んでいた。

他の所では、それぞれがそれなりに談笑していた。

事実、加賀だけが会話に参加していない。

「混ざらないの?」

「赤城さん……」

そこへ、抜けてきたのか赤城がやってくる。

「別に、五航戦の子と話したくないだけよ」

「全く、そこまで固いと、提督に嫌われちゃうわよ?」

「何を言ってるんですか?嫌われたくないのは赤城さんの方でしょう?」

「え……そ、それはどういう意味ですかね〜」

と、加賀の軽い反撃で、何故か同様する赤城。

「全く、いつまでも奥手だから提督にこくh……」

「わあああああああ!そんな事ないから!そんなことないからあああああああ!!」

「何がそんな事ないんですか?」

「きょうん!」

加賀の何食わぬ発言に大声を上げた赤城。

その内容に食いついてきたのは瑞鶴だった。

「へ!?!いえ!?!なんでもありませんよ!?!なんでもないからね!?!」

「なんで目が泳いでるんですか?」

「お、泳いでなんてないんだから!」

瑞鶴の純粹さに全力で逃げようとする赤城。

そこへ飛龍が割り込んでくる。

「ふっふっふ。実は赤城さん、提督の事がsへぶう!？」

何かを言おうとした飛龍だったが、いきなり赤城から伸びた左手が飛龍の口を押え、さらに飛びかかって覆いかぶさる。

「飛龍、言ったらどうなるか……分かっているわね？」

「む!?むぐぐ!むぐぐ!」コクコクッ!

赤城の恐ろしい笑みを向けられた飛龍は顔を青ざめさせ、何度も首を上下させる。

「？」

「貴方は知らなくていいのよ」

首を傾げる瑞鶴だが、加賀は気にするなと言う様にお茶を飲む。

「……そういえば、加賀さんって、南雲機動部隊じゃ、艦戦の運用を得意にしていると聞きました」

「技術は教えないわよ」

「誰もそんな事言っていないんですが……」

「関係無いわ。どっちにしろ、貴方には教えない」

「まあ、構いませんが……私の隊には、私の隊なりのやり方つてものがありますし」

「ズー……どんなやり方なのかしら?」

「教えません」

「でしょうね」

と、加賀は一切笑みを浮かべず、一方の瑞鶴はにひひと笑いながら、そう話し合う。

「これぐらいで良いでしょう。どっか行って」

「つれないなあ。それでも仲間なんですから、少しは親睦深めましょうよ」

「貴方とだけは嫌」

「それって、同じ五航戦の翔鶴姉は良いんですね」

「からかってるの?」

「ただ話題を作ってるだけですよー」

どうにも瑞鶴の友好的な喋り方にイラつく加賀。

ここにいる瑞鶴なら、すぐに食らい付いて反論してくる所を、何故

かこの瑞鶴は軽く受け流して、更にはこちらを刺激する様に、しかし話し合いたいという願望が漏れているように話しかけてくる。

正直言つて、うざい。

どうにかならないものか。と、考えを巡らせていると、待機室のドアが開く。

「？」

「あ、提督さん」

入って来たのは、二人の軍服姿の男。

片方は、きつちりと着込んでおり、提督帽をしっかりとかぶり、黒い額縁眼鏡をかけている。

言うまでも無く、加賀たちの提督、壺条翔真だ。

一方で、こちらは提督帽をかぶらず、まるで黒ダイアのように真っ黒な髪と、海のような碧い<sup>あお</sup>目をしている。

そして、その腰には、かなりの業物とみえる刀が一本。

加賀もご存知、黒河の提督、天野時打だろう。

「時打さん」

「おつす加賀。元気にしてたか？」

「ええ。お陰様で」

と、加賀は立ち上がって一礼。

「あ、そういえば、提督さんつて、横須賀の艦娘と知り合いなんでしたっけ？」

「ああ。その様子だと、飛龍たちに聞いていたみたいだな」

そう言い終えた時打。

その時打に、飛びかかる影が一つ。

「やっほー！時打が担当なんて嬉しいよー！」

「どうわ!？」

首に飛びつかれ、更には、不意打ちもあつての事か、思いつきり地面に頭をぶつける時打。

「あなた……」

それによって目を回す時打。

「おい飛龍……」

「ヒイ!? (ぎょぎょ) めんなさい!」

すると翔真に睨まれ、即座に時打から離れる飛龍。

「やっぱり飛龍は提督には敵わないんだね〜」

「うっさい蒼龍!」

「はいはい」

涙目で自分を小馬鹿にしてきた蒼龍を睨む飛龍。

が、そんな彼女たちに軽く拳骨がおりた。

「あた」

「いた」

「遊んでないでさっさとどこかに座れ」

「はーい」

と、翔真にどやされ、二人は空いている場所に適当に座る。

そこで、時打と翔真が彼女たちの前に並んで立つ。なお、時打は若干、翔真より後ろだ。

「コホン。俺がこの航空機動部隊を任された壺条翔真だ。こっちは今回、アシスタントの立場にいる黒河の提督、天野時打だ」

「よろしく」

「それで、明日の作戦の概要だが――」

「――以上が、今回の作戦の概要だ。何か質問のある者は？」

「はい」

そこで加賀が手を挙げた。

「なんだ加賀」

「何故、私が五航戦と？」

「明らかに不満の意を示している加賀。」

「その瑞鶴はお前と同等の実力を持っている。瑞鶴に本来あるべき『幸運』を持たずに、だ。艦載機の性能を考えれば、お前の方が上だが、それでも練度でいえば、お前と同じ筈だ」

「……分かりました。愚問を申し上げて申し訳ございません」

「そんな、愚問なんて・・・」

加賀の言葉を否定しようとする瑞鶴。

「あ、あの・・・」

それを遮る様に——本人はそんな事は微塵も思っていないが——白雪が手をあげる。

「その作戦を聞く限り、空母を二手の分けさせるって事でよろしいのでしょうか?」

「その通りだ。龍鳳には加賀たちの方につけるが、それは、龍鳳の爆撃能力が高いから、飛行場姫の封殺に向いているからだ。それはお前も分かるな?」

「は、はい!」

半ばオドオドしながら返事をする龍鳳。

「大体の事は理解できただろう。今回の作戦は、失敗すれば北マリアナ諸島での激しい戦闘が予想される。そうなれば、四国、九州辺りの鎮守府の負担が増える。今後の活動に支障が出るうえ、西日本にいる艦娘たちが、何人も沈んでしまうだろう。それだけは絶対に阻止しなければならぬ」

翔真の言葉を黙って聞く艦娘たち。

「今回の戦いの要はお前たちだ。絶対に飛行場姫を封殺し、陸上攻撃部隊が安全に攻撃を開始できる状況を作り出せ。そうでなければ、我々には、強行突破以外の勝機は無い。誰かが沈む事は、この男が必ず許さないだろう」

そう言い、翔真は時打の方をちらりと見た。

「当たり前です!」

すると、飛龍が立ち上がって、そう言い放つ。

「時打の不殺を破らない為にも、私たちは全員で生きて帰ります! 例え無様でも、醜く足掻いて見せます!」

「そうね」

それに続くように瑞鶴も立ち上がる。

「提督さんは私たちを救ってくれた。その恩を返す為に、私たちは精一杯頑張つて、必ず勝ちます。一切の犠牲を出さずに!」

「もう十分な程に返してもらってるんだがな」

「まだ返し足りないの！」

瑞鶴の言葉に苦笑する時打。

「その意気だ」

翔真はそう言う。

その顔に笑みは無いが、眼には確かな確信の光が宿っていた。

「日本の未来、この一戦に在り。全員、心して挑む様に」

『了解！』

全員が立ち上がり、敬礼をする。

「今回の小会議はこれで終わりとする。後は時打と雑談でもしていろ」

そう言い残した翔真は部屋を出ていこうとする。

「ん？翔真さんどこへ？」

「鳳翔の所だ。ここには彼女専用の食事処がある事を知っているだろうか？」

「ああ、そうでしたね」

納得した時打を他所に翔真は部屋を出ていく。

すると、龍鳳が時打に近付く。

「あの・・・」

「ん？」

「この間は・・・私の提督がご迷惑をおかけしました」

龍鳳が申し訳なさそうに頭をさげる。

「この艦娘は、既に知っているであろう、亜美の秘書艦だ。」

「ああ、あの時の」

「すみません。あの人、悪い事は嫌いにして・・・」

「良いよ。ああ言う人がいるだけでも、今のお前の鎮守府は安泰してるんだろ？」

「はい」

と、まだ浮かない顔で頷く龍鳳。

「まーまー！過去の事は水に流して、時打！そっちの鎮守府の事話してー！」

そこへ飛龍が割り込んでくる。

「ああ、いいよ」

と、楽しく話し合いを始める飛龍と時打。

他にも蒼龍や赤城も混じり、賑やかになっていく。

その中で、加賀だけが湯呑をちやぶ台に乗せ、外に出ていく。

「ん？」

それに気付いた瑞鶴は、その後を追いかけていくのだった。

「はあ……」

鎮守府の二階にあるベランダに出た加賀は、そこで溜息をついた。

「加賀さん」

「ん？貴方……」

後ろから声をかけられ、振り向いた加賀の視線の先には、瑞鶴がいた。

その姿を見た加賀は、落胆した表情になると、すぐに、ベランダの先に広がる海の方に目を移す。

「何しに来たの？」

棘のある声で、そういう加賀。

「加賀さんの事が気になって」

「うざい」

「ストレートに言いますね……」

加賀の罵詈に苦笑する瑞鶴。

すると瑞鶴は、加賀の隣に立った。

「……貴方、時打さんと随分と仲が良さそうね」

「ええ。あ、もしかして羨ましいんですか？」

「爆撃するわよ？」

「冗談です」

ケラケラと笑う瑞鶴。



やはり遊ばれている。

まるで、自分が何を言うのかが分かっているかのように。

「そういえば、加賀さんと提督さんって、いつ知り合ったんですか？」

「それを聞いてどうするの？」

「いじりのネタにする。提督さんの」

「……」

やはりむかつく。

どうにかして追い払えないものか。

ふと、加賀は隣に立つ瑞鶴の方を盗み見た。

そこで、加賀の思考は止まった。

瑞鶴は、海の方を眺め、悲しそうな笑みを浮かべていた。

夕焼けが彼女を照らし、その瞳に、目尻に涙が浮かんでいるのが見えた。

「……何故」

「ん？何か言いましたか？」

ふと、口から漏れた声に気付いた瑞鶴が加賀の方を見て、それに慌てて顔を反らす加賀。

「いえ、なんでもないわ」

「ふん」

瑞鶴はまだ分からないといった表情をしているが、一方の加賀は、先ほど瑞鶴が浮かべていた涙が気になった。

(何故……泣きそうに……)

そんな事を考えかけるが、すぐに思考から排除する。

考えても無駄だと思ったからだ。

仕方なく、加賀は、瑞鶴が聞きたがっていた時打との馴れ合いを話した。

「時打さんと出会ったのは、彼が電と出会った時ね」

「へえ、そうなんですか」

横須賀の様な公式の鎮守府は、人間の整備士や開発者、科学者がおり、日々新たな兵器や武器の開発に努めている。

その上で、工廠の建造部には、警備員や憲兵がおり、その機密を

護っている。

だが、時打はまぐれにもその警備網を不本意に突破。建造施設に迷い込んでしまったのだ。

そこで取り押さえたのが加賀だ。

『動かないで』

『イタタタた!?!』

『わ!?!な、なんなのです!?!』

その時の事はよく覚えている。

刀を持っている人間など、何かの危険人物としか思えず、容赦無く、腕を捻った（骨は折れてません）時の感覚はまだ残っている。

その時の電の慌てっぷりは微笑ましいものだった。

『とにかく拘束します』

『い、イエス・ママ……』

あっけなく捕まった時打はそのまま執務室へ。加賀は彼が逃げ出さない様に同伴した。

『……は?』

当時の提督であった豪真の言葉に耳を疑う。

『彼に……電を任せるのですか?』

『ああそうだが?』

その呆気ない決定に、絶句したのは言うまでもない。

『あはは……提督さんに聞いていた通りの人ですね……』

瑞鶴が乾いた笑い声をあげる。

『これで満足したかしら?』

一方で、加賀は相変わらず冷たい態度を取る。

『えく。まだ足りないですよ』

『うざい。消えなさい』

『相も変わらずドストレート』

また加賀の言葉に、苦笑いを浮かべる瑞鶴。

『貴方、本当になんなの?もし、そっちに私がいたとして、私は彼女とは違うのよ』

加賀が、うんざりといった感じでそう言う。

「はい、そうですね」

すると、瑞鶴から、先ほどから聞こえていた陽気な声が、一瞬で悲しみを含めた声に変わる。

その声に、思わず瑞鶴の方を見る加賀。

そこには、先ほど浮かべていた、悲しそうな笑み。そして、微かに感じられる、悔しさ。

「……………」

「確かに、あの人と貴方は違う。根本は同じでも、そこから分かれた貴方とあの人は違う。それは、ちゃんと理解している」

「なら何故……………」

加賀は、何かを言いかけるも、それよりも早く、瑞鶴が口を開いた。「でも、だからこそ、私は貴方と仲良くなりしたいの。次は、守れるように」

気付くと、瑞鶴は、交差させた両手を、二の腕で掴み、握りしめていた。

その様子に、加賀は何も言えなかった。

ヒトキユウマルマル——午後七時。

夕食の時間。

「時打さん、また剣舞を見せてっばい」↑夕立

「よし、夕立。どさくさに紛れて俺のチャーシュー持っていこうとすんな」

「時打く、酒飲もうぜ」↑隼鷹

「俺は日本酒しか飲まんし、飲むのは夜九時過ぎだと決めている」

「時打、まだ十八よね？」↑千歳

「日本男児は十五歳から元服といって……………」

「それは知ってますから」↑浜風

「つていうかお前ら飯の邪魔するなああああ!!」

時打は、この横須賀の艦娘たちに囲まれていた。

その様子を遠くで眺めている長門たち黒河艦隊。

「これは・・・すごいな・・・」

「はい。まさに人気者なのです」

「入る余地が無いわね」

「あく夜戦したい」

「無理ですよ姉さん」

長門、電、暁、川内、神通がそう言う。

一方の時打は、まわりの艦娘に囲まれながらなんとかチャーシュー  
麵を食おうとしている。

だが、それも周りにいる艦娘たちによって邪魔されている。

「イクにももつと構ってよ〜」

「黙れ歩く十八禁」

「そうだな」

「ああ!?!何するんですか日向さああん!?!」

「ほらほら、時打の邪魔をしない」

そこへ日向が現れ、野次馬の様になっている艦娘たちを追い払う。

「すまないな、日向」

「なに、これも恩返しの一つだ。礼には及ばん。それはそうと・・・」

日向が、長門たちの方を見る。

「ん・・・ああ。来いよお前ら!」

時打が手招きしながら長門たちを呼ぶ。

「行こう」

「そうですね」

それを見た長門たちは、自分たちの食事を持って、時打の所に行く。

「随分と人気者なんだな」

「むしろ人気過ぎて困るぐらいだ」

そうやって、麵をすすする時打。

「なんだか羨ましいなく。あんなにちやほやされて」

「最初はあれでも嫌がられていたのですよ」

「え？そうなの？」

電の言葉に、驚く暁。

「ああ、あの時は……」

「ガチで殺り合ったなあ……」

と、イイ笑顔で天井を仰ぎ見る時打と日向。

その意味に、顔を青くする黒河の面々。

「ず、随分と殺伐として学生時代ですね……」

「いやあ、それほどでも」

「褒めてる訳じゃ無いのですお兄ちゃん」

神通の言葉に照れる時打だが、それに突っ込みを入れる電。

「随分と楽しそうね、黒河の提督」

「ん？」

ふと、そんな声が聞こえ、その方向を見る。そこには、あの柏木亜美が立っていた。

その後ろには龍鳳があわあわとした様子で戸惑っていた。

「て、提督、下手に絡むのは……」

「ブラックの癖に、良くもこここの艦娘を騙せているものね。何？そこまで信頼を得たいの？」

龍鳳が亜美を遠回しに注意しようとするが、それを無視して亜美は時打に悪口を言う。

それに、不快感を露わにする一同。

「別に騙している訳じゃないさ。純粋に、俺はこいつらと交流を持ちたいだけだ」

「交流？利用する為に？それはさぞ滑稽な事で」

嘲笑うかのように亜美が嗤う。

「お前……」

そこで頭に来た川内が立ち上がりかける。

だが、その腕を日向に掴まれ、阻止される。

「!?」

「やめろ。ここでお前たちが関わる事を、時打は望んでいない」  
「ツ……」

その言葉に、一瞬、悔しさに顔を歪めるも、大人しく浮きかかった腰を下ろす川内。

「滑稽……か。確かに、俺にはお似合いな言葉だな」

時打はそう返す。

そして、一気に器の中にあるスープを飲み干す。

「だが、それはお前にも言える事だぞ」

「なんですって?」

眉を寄せる亜美。

「お前、他人を信じようとしてないんだろ?」

「!?」

その言葉に、表情を強張らせる亜美。

「第一人称、その上、噂だけで他人の人柄を、自分の中で勝手に決める。これほど滑稽な事がどこにあるのか」

「だ、黙りなさい! 大体、刀なんて持つ必要なんてどこにもないでしょう!」

「ああ、そうか」

と、時打は傍に立てかけてあった刀を手にとり、それを飛龍閃の要領で抜刀する。

「!?」

それに思わず身構える亜美だったが、時打は、落ちてくる刀を掴む。

そして、それを亜美に横に向けて、刃の腹が見えるようにする。

「そ、それは……!?!」

その刀の構造を見て、更に驚く亜美。

だが時打はそれを無視して、言葉が続けた。

「確かに、刀を持つ必要なんてない」

時打は立ち上がり、刀を鞘に納める。

「でも、俺は『剣客』だから、刀を持っていないとどうも落ち着かないんだ。それこそ」

そして、亜美のすぐそばに立ち、顔を近づけ、囁く様に、言う。

「——自分の『殺意』に押し潰されてしまう様に、な」

「——ッッ?」

その一瞬の殺気に思わず距離を取る亜美。

「……」

そして時打を睨みつける。

「……驚いた。大抵の奴は、これで立ち竦んでしまう筈なんだが、どうやら貴方は違うらしい。武術をやっているな」

一方の時打は、その亜美の行動に純粹に驚いている。

「……貴方、本当に何者?」

「なら調べれば良い。壱条長官なら知っている筈だ。最も、話してくれるかどうかは分からないけどな」

「ッ……」

悔しそうに顔を歪める亜美。

そしてすぐに踵を返し、食堂を出て行った。

その後ろを、龍鳳が謝る様にお辞儀をしてその後を追いかける。

だが、ふと、立ち止まり、時打に向かって一言。

「……龍鳳を沈めたら、許さない」

ドスの効いた声で、そう言った。

「全く」

時打は、呆れたようにそう漏らし、食器を持つ。

「間宮、よろしく」

「はい」

そして、厨房へ向かい、食器を返した。

長門たちの所に戻ると、川内が不満そうな表情で頬杖をついていた。

「どうした?」

「……殴りそこねた」

「物騒だなお前」

何気ない川内の言葉に、苦笑いを浮かべる時打であった。

「はあ……」

暗く、誰もいない廊下を歩きながら、ふと溜息を吐く加賀。

瑞鶴と話しをしていらい、この調子だ。

本当に、あの瑞鶴はなんなのか。

「本当に……」

なんだんだ。そう言おうとしたが、窓の外で誰かが激しい動きをしているのが見えた。

「？」

それが気になり、窓を見て見ると、そこには、瑞鶴が二本の木の棒、小太刀サイズの木刀を持って、乱舞していた。

「セイ！ヤア！」

短い掛け声とともに、剣を振るう瑞鶴。

そこで、ふと、剣を振るうのをやめて、ぐったりと脱力する。

その体からは汗が滝の様に流れていた。

「何をして……」

ふと、そんな声を漏らす。

すると、瑞鶴は、加賀の方を見た。

「あれ？加賀さん？」

「!？」

なんでわかった。窓は締め切っていた、聞こえない筈なのに。

そう考えている内に、瑞鶴はもう、加賀の目の前に来ていた。

「どうかしたんですか？」

「た、ただトイレに行きたかっただけよ」

「そうなんですか」

それを聞いた瑞鶴は、すぐに興味を失くした様に、戻っていく。

「……」

「ふ！ほ！」

そして、また剣を振るう。



右の剣を振るい、左の剣を薙ぐ。

どこぞの剣士の真似だろうか？

「・・・なんで剣なんて振るうの？意味なんてないでしょう」

「そうですね」

瑞鶴が剣を振るいながら、答える。

「よく、あの提督さんが来る前からこうして剣を振っていたんですよ。その所為で、すっかりと習慣づいたみたいでして」

そこで、瑞鶴は足を一回止め、今度は流れる様な足捌きを始める。

「!?」

そこで加賀は息を飲んだ。

残像だ。

まるで分身の術でも使っているかのように、瑞鶴がそう見えるのだ。

その状態で、瑞鶴は剣を振るう。

「ハアア！」

瑞鶴が、回転する。

そこから、右手が閃く。

その剣閃は空を切り、空気がわずかながら震えた。

「ッ・・・」

そのすごさに、息を飲む加賀。

「ふう・・・」

瑞鶴は、腕で顔から流れ出る汗を拭う。

「まあ、貴方の言う通り、あまり意味は無いんですけどね」

と、ニヒヒと笑う瑞鶴。

「私、お風呂に入ってきてきます。汗を流さないといけないので」

「あ・・・」

瑞鶴はそう言っつて、さっさと行ってしまふ。

「・・・」

加賀は、そこで、茫然とするしかなかった。

「ハア・・・ハア・・・」

瑞鶴が、息を切らしながら、走る。

「ハア・・・」

もともと、先ほどの剣舞で体力を使っていたから仕方が無いかもしれないが、それでも、やはり、雑念が入るとキツイものだ。

「・・・加賀さん」

その胸を、手で押さええながら、そう呼ぶのだった。

## 出撃直前!

次の日——マルナナマルマル——午前七時。

「ハア!」

長門が右手を木に叩き付ける。

木が軋み、長門の腕が突き刺さる。

「ツ……だめだ。違う……」

失敗だ。

この一週間、一度も成功した試しも無い。

「せめて……出撃までには成功させたかったんだがな」

長門はそう呟き、右手首に左手を乗せる。

「ここにいたんだ」

「……三鷹提督……」

後ろから声をかけられ、振り返ると、そこには三鷹がいた。

「何用で?」

「いやあ。ずいぶんと珍しい特訓をするんだなって思って」

「あまり簡単なものじゃありませんよ」

「だろうね」

柔らかい笑みで微笑む三鷹。

そこで、三鷹はある事を言う。

「ねえ、長門」

「なんででしょうか?」

「どうして時打くんについて行こうと思ったの?」

「……」

その答えに、ふと考える長門。

「時打くんは、あの飛天童子だ。3000人を斬殺した張本人で、殺人鬼。そんな彼にどうしてついていけるんだい?」

三鷹は、そう聞く。

「……」

眼を閉じる長門。

「……確かにそうだ」

眼を開き、先ほど殴った木の方に向く。

「提督は、あの金山市で、己の正義に従って、人を殺してきた」  
でも、と長門は続ける。

「だからこそ、提督は知っているんだと思う。命の尊さを」  
左手を、木に触れさせる。

「——命の大切さを。生きていれば、別の幸せがあるという事を。  
だから——」

右腕を振り上げる。

そして、その右手を木に叩き付ける。

「——私は、ついていくと決めたんだ。あの人の、不殺の誓いの元  
に」

木が爆散する。

「そっか……」

三鷹は納得した様に笑う。

「それじゃあ。僕はもういくよ。じゃないと叢雲がうるさいからね」  
そう言つて、三鷹は立ち去っていく。

「ふ……あの人、わざとこんな事を」

笑みを浮かべる長門。

そして、視線を右手に戻す。

「……」

開いていた手を、ぎゅつと握る。

「……見ていてくれ、陸奥」

そう一言呟き、長門は歩き出した。

後ろにいる、彼女に微笑む半透明の人物に気付かず——

横須賀の弓道場。

そこで、弓を射るものが複数。

「……ッ！」

赤城が弓を引き絞り、放つ。

その矢は真つ直ぐ飛んでいき、的の中心を穿つ。

その隣で、同じように中心をいる矢が一本。

「やりますね、瑞鶴」

「いえ、そんな……」

照れる瑞鶴。

その様子に、気にも留めない加賀。否、弓を射ながら誤魔化する。

「五航戦が……」

「漏れてますよ、加賀さん」

加賀の横で苦笑いを浮かべる飛龍。

「嫉妬するのは分かりませんが、良いじゃないですか。先輩と後輩みただい」

「それが気に入らないの。五航戦のクセに……」

「本当にストレートですよね」

飛龍が矢を放つ。

それは、中心から少し外れた場所に刺さる。

「あちやあ、外しちゃったか」

その隣で、加賀が弓を射る。

すとな、と中心を難なく貫く。

「お、流石！」

「当然よ」

「流石ですね」

「……」

そこへ瑞鶴が加賀の的を見て褒める。

だが、それを聞いた加賀が複雑な気持ちになる。

「……何の用？」

「ただ褒めただけですよ？」

「……あ、そう。貴方も射に戻ったら？」

「そうですね。では失礼して」

と、瑞鶴が弓を構える。

真つ直ぐ伸ばされた左手に弓を持ち、それに矢がつがえられる。

そして、射る。

矢は真つ直ぐに飛んでいき、的の中心に命中する。

「……まあまあね」

「えー、もうちよつと褒めて下さいよ」

「いやよ」

「やっぱリストレート」

加賀の言葉に苦笑いを浮かべる瑞鶴。

「はあ……」

それに溜息を吐く加賀。

短い間だが、もうこの瑞鶴の事が分からなくなってきた。

どうにも、親しく話しかけてくるのに、嫌な感じがしない。

馬鹿にしようにも、昨夜のあれが邪魔してどうにも上手く罵倒でき

ない。

(本当に……なんなの……?)

加賀は、弓を絞りながら、そう考えるのだった。

「ああ、そうか」

『ええ。この調子でいけば、なんとか作戦が終わるまでには完成するかと』

「慣らしとかもさせたかったが、流石にそれはぶっつけ本番でやるしかないか」

『大丈夫ですよ。この別動隊は、貴方が選んだ選りすぐりたちなんですから』

「ふ、そうだな。頼んだぞ」

『あいあいさー!』

がちやり、と通話を切る時打。

「どうだ？」

その後ろから、豪真がそう聞く。

「作戦が終わるまでには完成するらしいです」

「間に合うかどうかは、分からないな」

豪真の横で、翔真がそう言う。

「翔真さん、本当に良いんですか？」

「何がだ？」

時打の問いに、首を傾げる翔真。

「赤城たちにこの事を伝えなくて」

「伝えたら、それに頼ってしまうだろう？ そうなったら、士気が落ちるのは当然だ」

「そうですね．．．すみません。無駄な事を聞いて」

「いや、お前は内の赤城たちの身を案じて言ってくれたんだ。気にする事は無い」

時打の謝罪を、そう流す翔真。

「だがまあ、今回はそれなりに期待した方が良くもな」

「？ どういう意味です？」

豪真の言葉に、今度は時打が首をかしげる。

「実は、そこに送った潜水艦から電文がきてな。なんでも空母棲鬼を一隻投入したらしい」

「な!？」

その豪真の言葉に驚く時打。

「それって．．．」

「ああ、機動部隊の戦力増加．．．流石にお前の所の援軍に期待するしかないな」

機動部隊の戦力増加となると、こちらの機動部隊の負担が増える。

だから、なんととしてでも、黒河の新型の開発を急がなければならぬ。

そこで、豪真の携帯が鳴る。

「む、そろそろか」

豪真をその携帯を取り出し、そこに表示されている時計を見る。

「行きましょう」

「ああ」

時打たちは、外へ向かう。

そこにあるアスファルトの広場の上には、何人もの艦娘・・・今回の大規模作戦に参加する艦娘たちが、それぞれの部隊の列に並んでいた。

すでに別の鎮守府の提督たちまでいる。

そして、時打と翔真も、自分たちが担当する部隊の前に立つ。

そして、豪真が高台の上に立つ。

その横には、彼の秘書艦である筑摩。

「皆の者、よく集まってくれた」

視線が、一気に豪真に向けられる。

「今回、集まって貰ったのは他でもない。大規模作戦についてだ」  
会場にいる全員が息を飲むのがわかる。

「この作戦は、失敗すれば、西日本で、厳しい戦いが繰り広げられる事だろう。そうすれば、何人もの犠牲が出てしまうのも避けられないかもしれない。それだけは絶対に阻止しなければならない。犠牲の上にある勝利など、私は望まない」

豪真が、威厳ある声と態度でそう言い放つ。

「よって、私が望むのは完全なる勝利だ。死人を一人として出さない絶対なる勝利だ。故に私は、お前たちに言う」

そこで切る豪真。

そして、空気を震わせる程の怒号が聞こえた。

「必ず帰って来いッ!!!日本はッ!!!お前たちの家なのだからッ!!!」

それは、黒河で時打が、長門たちに言った言葉と、ほぼ同じ言葉だった。

「以上だ」

それだけを言い、偶然にも豪真を見ていた時打に視線を送る。

「時打、号令」

「え、あ、豪真長官に、敬礼ッ!!」

隣の翔真に言われ、時打は一瞬戸惑うも、すぐにそう声を上げ、敬



礼をする。

それに応じる様に、後ろの艦娘や、提督たちが一斉に敬礼をする。

「出撃だ！諸君らの武運を祈る！」

そして、その場にいる全員が一斉に動いた。

作戦開始！予想外の事態!?

太平洋、マーシャン諸島、西。

「敵艦見ユ！戦艦二、軽巡一、雷巡一、駆逐二です！」

「総員、戦闘配備ッ！」

神通の報告を聞き、武蔵が艦隊に命令を下す。

「敵、視認まで、あと五百！」

「砲弾装填、徹甲弾！」

敵が見えてきた。

射程まで、あと、二百。

「第一斉射・・・」

武蔵がそう構える。

それと同時に、長門、陸奥、那智、足柄が主砲を構える。

そして、敵が射程に入った瞬間・・・

「つて——!!」

同時に砲撃。

全ての主砲、副砲が敵に向かっていく。

答れる砲弾もあったが、長門、武蔵の砲弾は全弾直撃。

あつという間に戦艦二隻の轟沈させる。

「戦艦二隻とも大破、軽巡と雷巡も大破し、駆逐は航行不能！」

神通からその様な報告を聞き、武蔵は新たな命令を下す。

「次弾装填、第二斉射用意！」

新たに装填する五人。

「つて——!!」

武蔵の怒号と共に、砲弾を射出。

そのほとんどが残りの敵に直撃し、沈める。

「敵艦隊全滅・・・お疲れさまでした」

神通が、水偵からの連絡を伝え、安堵の息を漏らす。

「お疲れ〜」

龍田もそう言う。

「あー、また武蔵にMVP取られた〜」

足柄がそうぼやく。

「そんな事ないぞ?」

「どういう意味だ武蔵?」

那智が主砲の調子を見ながらそう尋ねる。

「夕級に砲弾を直撃させたのは長門だ。それでいて、自分の火力じゃ倒せないからと、主砲の角度を調整して、私に止めを刺せるようにした。そうだろうか?」

と、武蔵は、いまだ敵艦隊が沈んだ方向を見ている長門を見る。

長門は、振り向きながら苦笑する。

「よしてくれ、私はそんなつもりで撃った訳じゃない」

「そ、そんな事、ないと思います!」

雪風がそう言う。

「雪風?」

「今までの戦いから見て、長門さんは冷静に戦況を分析して、今自分ができる事を十分に理解しています!それは、とても素晴らしい事だと思えます!」

雪風の必死の称賛に、やや呆気にとられる長門。

「そういう事だ。素直に言葉ぐらいは受け取っておけ」

「・・・そうだな。ありがとう、雪風」

長門は、そう言い、雪風の頭を撫でる。

そこで、長門は、旗艦である武蔵に向き直る。

「それで、かなりの敵を倒した筈だが、機動部隊はどうかになったのだろうか・・・?」

『その点については問題ないよ』

無線越しに三鷹がそう言う。

『今の所は順調といった感じ。特に大きなイレギュラーも無いし、このままいけば、スムーズに作戦を成功させられると思う。ただ・・・』  
「まだ戦艦棲鬼や、レ級が出てきていない・・・という事だな?三鷹提督」

武蔵が、そうつなげる。

『ええ』

そこで亜美が続ける。

『機動部隊の方では、片方がすでに敵機動部隊との交戦を始めている。もう片方はそろそろ飛行場姫を捉えられるそうよ。でも、肝心の戦艦棲鬼二隻とレ級がないのよ。予定では、そろそろそちらと会敵してもおかしくない筈なんだけど・・・』

亜美の言葉が濁る。

「はいはい。これ以上の暗い話はやめにしましょう」

パンパン、と手を叩きながら、龍田がそう言う。

『そうだね。武蔵、今は前進しよう』

「了解した。行くぞ！」

そうして、武蔵率いる水上打撃部隊は進撃した。

「まだ機動部隊からの連絡はこないのデスカー？」

「すみません、どうやら今攻撃を始めたようでして・・・」

「足止めを何度か喰らったみたいですね」

金剛の不満のある声に、霧島が自分の受けた伝令を伝え、電がそう予測する。

「ふくむ、つまり、私たちはその攻撃が終わるまでしばらく待機って事デスネ？」

「はい。そうなります」

霧島が金剛にそう伝える。

「待つ事に越した事はありませんよ」

電がそう言う。

「そうですネー・・・」

ちらりと、電を見る金剛。

そこで、自分の提督、久三に言われた事を思い出した。

「白兵戦の可能な電?」

「ああ」

金剛は、差し出された資料を見て、そう呟く。

「牙突という、剣術でいう刺突<sup>つつき</sup>を昇華させた突進技を得意としており、かつ体術と剣術を合わせた複合闘術も使えるときた。この力で、今までにル級を何隻か沈めている」

「Wow!それは頼もしいネー!」

「油断はするな」

感嘆する金剛は久三から発せられた低い声に首を傾げる。

「この電は、あの飛天童子と呼ばれた男の艦娘だ。ソイツから手ほどきを受けているという事は、結局は禄<sup>ろく</sup>でもない奴に決まっている」

「……」

その事に何も言わない金剛。

久三は、中学生の時に、故郷で、今は捕まっている殺人鬼と呼ばれた男に、家族を全員殺されている。

その為に、人殺しをした事にある人間は一切信用しないようにしているのだ。

特に、三千人も人を殺したと言われる、飛天童子の様な男には――

「テートクの考えている事には、何も言わないでおくネ。でも、せめて、艦娘だけは信じてあげて欲しいネ」

金剛は、そう言い残した。

「川内二号機より電信、我敵艦発見セリ!」

川内がそう叫ぶ。

「川内二号機に随伴していた榛名三号機からも電信、川内二号機ノ電信、真実ナリ。北東から接近してきます!」

榛名が続けてそう叫ぶ。

「OK！皆さん！用意は良いデスカー？」

金剛の言葉に、全員が頷く。

「Yes！これより、敵艦隊の迎撃に向かいマース！」

その号令に、全員が一斉に進撃を開始する。

「川内、敵の編成は？」

「はい。軽巡二、駆逐四の水雷戦隊です」

「水雷戦隊なら、楽勝だな！」

摩耶がそう自身を持って言う。

「油断してはダメよ摩耶。前回それで雷撃喰らって大破したじゃない」

「な!?!次は当たらねーよ！」

鳥海の思わぬカミングアウトに摩耶が否定しなくも強がる。

「否定しないんだ……」

霞がジト目でそう呟く。

「まあまあ。ほら、まずは目の前の敵に集中する」

陽炎がそう言っている他所で、天津風は電をふと睨む。

その視線に気付く電は顔を天津風に向ける。

「……お手並み、拝見させてもらおうわ」

「分かったのです」

天津風が素っ気なくそう言い、電は微笑みながら答える。

「視認まで、あと二百！」

榛名がそう叫ぶ。

「了解ネ！徹甲弾装填！全主砲、発射用意！」

金剛がそう叫び、水平線に浮かぶ敵を睨む。

一方で、ここは飛行場姫のいる島、ノックス・アトール島。その上

空にて、激しい乱戦が繰り広げられていた。

零戦五二型や烈風が、敵艦載機と、拮抗した戦いを繰り広げている。練度としては、零戦隊や烈風隊の方が上かもしれないが、その隊は、爆撃機を護衛しながら戦わなければならぬので、そこに気を配らなければならぬのだ。

ようやく、何機かの爆撃機が乱戦を抜け、飛行場姫に向かう。

そこから、飛行場姫に向かって、爆弾を落とす。

その爆弾は飛行場姫に直撃し、滑走路を破壊する。

だが、目まぐるしい勢いで、その滑走路は修復される。

深海棲艦には、こういった規格外な能力を持っている奴が多い。

それは、レ級も同様であり、戦艦棲鬼も、同じような事に、その艦装に、バケモノの様な剛腕を持つ。

そして、飛行場姫に与えられた能力、それは、滑走路の高速修復。

なんらかのストックが無くならない限り、無限に回復し続けるそれは、連続で爆撃しない限り、絶対に封殺などできない。

だが、すでに、三回目の爆撃<sup>アタック</sup>。

そして、その回復力は徐々に劣ってきている。

このまま行けば、必ず飛行場姫は封殺されるだろう。

だが、その顔には、笑みが浮かんだままだった。

その南東の海。

「今の所は上手くいっているみたいね」

「流石、蒼龍と龍鳳の爆撃機体！」

「いえ、そんな……」

加賀の言葉に、同意する様に、蒼龍と龍鳳を褒める瑞鶴。

龍鳳は、それに頬を赤くする。

「まだ油断は出来ないわ。まだ周辺に送り出した偵察隊からの連絡がまだ来ないからといって、打撃部隊が叩くはずだった戦艦棲鬼やレ級がこちらに来ないとは限らないわ。まだ見つからないみたいだ

から、警戒を厳とするように」

加賀の指摘に、すぐに気を引き締める瑞鶴と龍鳳。

「はい！」

そんな加賀に、蒼龍が声をかける。

「少し緊張しすぎじゃありませんか？もう少し気を楽しんでも良いんじゃない？」

「こういう作戦の時ほど、イレギュラーはおきやすいものよ。今だつて、上手く行き過ぎてる」

加賀は、飛行場姫が攻撃されているだろう、方角を見据える。

その顔には、慢心など一切なかった。

四人の背後には、初雪と皐月の二人。

「なんか退屈だなく。初雪、なんか面白い話ない？」

「ない」

「即答だね……」

一方で、こちらは完全に遊び人モードとなっている駆逐艦の二人。

「ちよつと、電探の方にはなにもないの？」

「え？あ、はい。何もありませんよ？」

と、皐月が21号対空電探のスクープを覗き、そう言う。

「そう……」

それが、範囲外からなのか、それとも、本当に異常がないからなのかは分からない。

『一応、索敵機の搜索範囲を広げておいてくれ』

無線越しに、時打がそう言う。

「わかりました」

それを受けた加賀は、すぐに自分の艦載機たちに電信。

了解の電信が帰ってきた所で、第三次攻撃隊が、帰還する事を告げた。

「第三次攻撃隊。戻ってくるそうです」

『そうか、すぐに、第四次の用意をするんだ。間を開ければ、その分、奴が補給するかもしれないからな』

「了解」



とりあえず、ここまでは良い。

特に大きな異常も無く、損害も少ない。

この調子なら、無事に飛行場姫を倒せるかもしれない。

そんな思考を片隅に押しやりながら、味方が帰ってくるであろう水平線を見る。

「あれ？」

ふと、龍鳳からその様な声が漏れる。

「どうしたの？」

瑞鶴が聞く。

「はい。先ほど、天野提督に言われた通りに、搜索範囲を広げると電信を送った第三隊から返事がこなくて……」

「え？」

瑞鶴は、それを聞くと、龍鳳が飛ばした偵察隊の飛んで行った西南を見る。

「……………」

瑞鶴は、その方角を真っ直ぐに見る。

「？ 瑞鶴？」

「シ……………」

声をかけてきた加賀を無視して、瑞鶴は、その方角へ眼をこらす……………否、耳を澄ました。

ギョギョー

ギョギョー

海の漣の音。

もつと、耳に神経を集中させる。

ギョギョー

ギョギョー



戦艦棲鬼を迎え撃つ！龍鳳は飛行場姫を攻撃する為に温存！急いで！」

『は、はい！』

加賀の言葉に我に帰った一同が、すぐさま行動に移る。

加賀、蒼龍が弓をつがえる。

「え？」

またもや瑞鶴の表情が強張る。

「瑞鶴、どうしたの!？」

「・・・敵、三式弾・・・！ 撃墜されました」

「三式弾・・・まさか・・・」

「敵艦、水平線上に出現！」

皐月の叫び声に、全員がその方角を見る。

そこには、まったくの無傷の深海棲艦が一隻。

その容貌は美しいが、異形ともいえるのが、その背中の艤装。

巨人の様なその灰色の艤装を纏う、その存在は、まさに、獣と飼い主の様だ。

肩の砲台が、こちらに標準される。

「ツ!?!砲撃がくる！衝撃に備えて！」

加賀がそう叫ぶも、戦艦棲鬼は、その主砲を放つ。

(大丈夫、第一射なら、直撃はしないはず)

加賀がそう考える。

だが、その加賀の目の前に、何かが割り込んでくる。

「え？」

そんな声をあげた瞬間、閃光が迸った。

「——飛行場姫を攻撃していた機動部隊から電信、戦艦棲鬼が現

れました！」

時打がそう叫ぶ。

「な!?!」

亜美が思わず立ち上がる。

それと同時に、管制室の空気が変わる。

「どういう事よ!?!」

「どうやら、予測されていたようだな」

翔真が、手を顎にあててそう言う。

「ツ!?!こちらからも電信、こちらも戦艦棲鬼を発見した模様。敵は、三式弾を撃つてきているとの事です!」

更に追いつき打ちをかけるように、三鷹がそう叫ぶ。

「そんな・・・」

「バカな!?!」

その報告に、久三が叫ぶ。

「深海棲艦が三式弾を使うなど、前代未聞だ!?!何故今になって・・・」

「誰かからの分捕り品・・・」

豪真が、そう呟く。

「敵は、艦娘の誰かを鹵獲して、そこから三式弾を持ち出した。あるいは、敵が独自にその三式弾を作り出したという事か・・・」

豪真が苦い顔をする。

重い沈黙が、その場を支配する。

だが、ふと時打が、耳にかけたヘッドフォンから、新たな電信を受け取る。

「・・・飛行場姫を攻撃していた加賀から連絡・・・空母蒼龍、中破。同じく龍鳳、小破。駆逐艦の皐月と初雪はどうか回避したようです・・・空母瑞鶴が、加賀を庇い、大破しました」

翔真が眼を見開く。

「なお、加賀は無傷。しかし、戦艦棲鬼の猛攻により、発着艦は困難との事・・・」

「空母棲鬼の方はどうなっている?」

時打が、暗い声でそう言い、それを聞いた豪真は、翔真の方に向い

てそう聞く。

「はい。空母棲鬼は、姫にまでおいつめました。しかし、その合間に飛龍が小破。大鳳も中破したとの事です。更に、決定打となる攻撃が成功せず、未だに拮抗状態が続いているとの事」

翔真がそう報告する。

「増援は見込めんか・・・」

「長官、ここは、陸上攻撃部隊を先行させ、早急に飛行場姫を撃滅するべきかと思えます」

落ち着きを取り戻した久三がそう言う。

「いや、まだだ」

「ッ、このままでは、いずれ機動部隊が・・・」

「悪いがそうも言ってられんぞ」

久三の言葉を遮り、神代が切羽詰まった声でそう言う。

「どうやら、こっちの方に、レ級が現れた様だ」

『!?』

神代が頬に汗を流しながらそう言う。

「これで、三部隊とも、抑えられた訳か・・・」

その重い空気の中で、時打は、ただ祈る事しか出来なかった・・・

## まだまだ続く、敵の攻撃

飛行場姫攻撃隊は今、戦艦棲姫から猛攻を受けていた。

「うわあ!?!」

蒼龍の近くに徹甲弾が落ち、悲鳴を挙げる。

「絶対に当たらないで! どうか、艦載機を飛ばせる隙を見つけないよ!」

加賀がそう叫ぶも、すでに初雪は中破してその航行能力を半減させている。一方で皐月は被弾した龍鳳を誘導しながら回避運動を行っている。

実は、先ほど戦艦棲姫の放った三式弾で、片目をやられたのだ。

「龍鳳さん! こっちはだよ!」

「は、はい!」

視界が半分見えない中、なんとか皐月の指示に従って回避運動をする龍鳳。

一方の加賀は、その回避に熾烈を極めた。

「く、瑞鶴が被弾さえしなければ・・・」

「ぐめ・・・なさ・・・」

彼女の肩にもたれかかり、ぐったりとしている瑞鶴がいた。

その背中には、酷く傷付いており、見るに耐えなかった。

先ほど、戦艦棲姫が放った砲弾。

あれは、深海棲艦ではありえない、三式弾を使った攻撃だったのだ。

それを、おそらくいち早く察知した瑞鶴が加賀に覆いかぶさる様に、その破片を一身に受けたのだ。

その為に、瑞鶴は、そのダメージと、飛行甲板の完全破壊によって空母としての能力を損失。さらには、航行能力まで死んだのだ。

なので、加賀が彼女をかかえて回避しなければならなかった。

「く、このままじゃ・・・」

いずれ、疲れ果てて砲撃を喰らう。

そういう懸念が加賀の脳裏に渦巻いていた。

「・・・」

その時、瑞鶴が動かない筈の体を、骨を軋ませながら無理矢理動かした。

「加賀さん……避けて……」

そして、そのまま突き飛ばす。

「な!?!」

その体からあり得ないほどの力で、弾き飛ばされる加賀。

その吹っ飛ばされる中、加賀は見た。

瑞鶴が、いくつもの水柱に吞まれる瞬間を。

「瑞鶴——!!!」

加賀と蒼龍が同時にそう叫ぶ。

加賀はそのまま水に叩き着けられる。

すぐに上体を起こし、瑞鶴のいる方向を見る。

そこには、どうにか立っている瑞鶴がいた。

被弾した腹からおびただしい程の血を流しながら。

「ッ、この馬鹿!」

加賀は急いで立ち上がって、瑞鶴を引つ張る。

その直後に徹甲弾が先ほどまで瑞鶴が立っていた場所に落ちる。

「なんで私を突き飛ばしたの!?!」

「あの……まま……いけば……加賀さ……も……ひだ……して……た……」

切れ切れない言葉で、そう言う瑞鶴。

「どうしてそこまで……」

加賀は、苦い顔で、そう問いかける。

まわりでは、砲撃音と着水音が止まない。

それなのに……

「——守りたいから」

彼女の言葉は、はつきり聞こえた。

「貴方を、守りたいから。だから、私は、命を張って戦える」  
痛む体を、無理矢理、加賀から引き離す。

その直後に、離れた二人の間に砲弾が直撃し、大きな水柱を巻き起こすッ!!

「きやあ!？」

思わず悲鳴をあげる加賀。

一方で、瑞鶴は、戦艦棲姫を睨んだ。

——体が熱い。

「——加賀さんはやらせない」

——まるで、体の中にある、煮えたぎる何かが込み上げてくるようだ。

「絶対にやらせない」

——自分の根本を変えるような、何かが。

——空母ワタシという、何かが、全く違う信念何かに、置き換えられていくかの様に。

「——私の、五航戦の誇りにかけて!!!」

——今、この状況を打開するには、これしかないだろう。



「まさか、ここまで追い詰められるトハ……予想外デスネー」

硝煙にまみれた顔で、笑みを作る金剛。

その背後には、大破した霧島に加え、その霧島に肩を貸している中破した榛名。

その前に、まだ小破の比叡。

その傍らには中破した摩耶と鳥海。そして、大破して航行不能になっっている天津風を支える霞に、金剛の隣に立つ、陽炎、利根、川内、電。

「まさか三式弾を使ってくるとなのう……」

利根が睨む先には、まるで子供の様に笑う深海棲艦、戦艦レ級の姿が。

そう、ただでさえ、甲標的の様なもので先制雷撃をしてくるだけでなく、艦載機も飛ばせて、大和型並みの主砲を撃ってくる。

これほど厄介な相手がいるだろうか？

「攻撃、きますー！」

電が叫ぶ。

それに全員が身構える。

見ると、レ級は射撃体勢に入ろうとしていた。

回避行動に入った直後、レ級が発砲。

直後に、至近弾が金剛たちの周りに直撃。

幸い、三式弾では無かつたうえに、電がいち早く砲撃に気付いたのが良かったらしい。

「niceネ電！よく気が付いたネー！」

「次、来ますッ！」

「！」

どうやら寝ている暇は無いらしい。

「くぅ!?」

被弾は無し。

その事に、首を傾げるレ級。

(このままじゃまずいネ)

金剛は心の中で舌打ちした。

敵は一体、それに完全に押し負けている。

おそらくは先制で放たれた三式弾が原因だろう。

そのお陰で、大半の艦娘に打撃を与え、流れを向こうに持っていかれた。

こうなると、流れを奪うのに時間がかかる。

なんとか、戦艦や重巡などの主砲などは霧島以外は無事だが、レ級の攻撃が激しく、反撃する事ができない。

さらには、大破した艦娘を守らなければならないという事態。

「——ッ!?!」

突如、電が空を仰ぎ見る。

そして、さらなる絶望に叩き込む報告を叫んだ。

「敵機直上ッ!!!急降下アアアアアアアアアアアアッ!!!」

「?!?!」

それを聞いた艦娘たちが一齐に空を見る。

そこには、おそらくレ級が放ったであろう、黒い異形の航空機が爆弾を抱えて降ってきていた。

「Shit!!!」

金剛が舌打ちし、急いで回避行動に移る。

だが、天津風を抱えた霞だけが逃げ遅れた。

「あ……」

「霞ッ!避けるオ!!」

摩耶が叫ぶが、もう既に敵艦載機は爆弾を投下、そのコースに霞と天津風が。

このまま行けば、霞はともかく、天津風は確実に轟沈してしまう。  
万事休す!!

「アアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

しかし、そんな絶叫が迸った瞬間、邪魔な艦装を外した電が、物凄い勢いで霞たちに突っ込み、その勢いのまま抱えて、爆弾を回避する。

「大丈夫なのです!?!」

「え、ええ……」

「あまりの勢いに茫然としている霞。」

「電!?!何故艤装を!?!」

川内が、艤装を外した電を見てそう驚く。

「白兵戦をしかけます。皆さんはその間に、飛行場姫に攻撃を!」

「な!?!」

その電の発言に、一同が驚く。

「な、なに言ってるんだよ!?!」

「このままでは全滅してしまいますッ!ならば、誰かが奴をとめて、その間に飛行場姫を叩かなければ、勝つ事など夢のまた夢なんですよ!?!」

摩耶の言葉に、電はそう反論する。

それを言い切った電は、レ級に向き直り、自分の腰にある小太刀を引き抜こうとする。

「ならば、奴の相手は、戦艦である私が……」

「わるいですが、金剛さんじゃ相手になりませんよ。アイツは」

「な!?!」

金剛の提案を、即座に否定する電。

「こ、金剛お姉様じゃ、勝てないって言うの!?!」

「あのレ級は大和型でさえ、苦戦する程。それが高速戦艦如きの火力で敵うと思っているんですか?それに相手は甲標的での雷撃も可能。死角から雷撃を受ければ、その瞬間に航行能力は失われませすよ」

「ッ」

電の最もな指摘に、反論できなくなる比叡。

「じゃが、駆逐艦如きでは、その紙装甲でどうやって戦うと言うんじや!?!」

利根までもがそう言う。

「被弾する必要なんてない」

電は、小太刀を完全に引きぬく。それを器用に左手に持っていく。

「当たらなければいい。少なくとも、接近してしまえば、こちらのものです」

そのままゆっくりと全身する。

「早く行って下さい。じゃないと、貴方たちを守る事で手一杯になります」

電が、背中を向けながら、そう言う。

「駄目デス！勝てるかどうかの確証なんて・・・」

「良いから行けっつってんだろツ!!!」

「!?」

それでも止める金剛に向かって、突然の電からの罵声。

それに、体を硬直させてしまう金剛。更には、その場の全員までもが、固まってしまう。

「大丈夫なのです」

だが、すぐに元の穏やかな口調に戻る。

「電は、沈みません」

それだけを言い、電は、レ級を睨む。

「・・・」

それに、何も言わない一同。

だが、金剛は、重い声で、一言。

「・・・行きまショウ」

「!? しかし」

金剛の言葉に、榛名が反論しようとする」

「榛名、これ以上は、彼女の武人としての誇りを汚けがします」

金剛は、そう言って榛名をなだめる。

「ツ・・・」

それを聞いた榛名の顔が、悔しさに歪む。

金剛を筆頭に、一同が、電に背を向ける。

「・・・必ず、間に合わせて見せます」

金剛は、それだけを言い残し、走り出す。

だが、逃がさんと言わんばかりにレ級が発砲。

「ツ!!ハアアアアアア!!」

電が、呼吸を制御する。

その瞬間、体の筋肉の動きが変わる。

そして、跳躍。

小太刀をその合間に右手に持ち直し、一発目の砲弾を空中で右からの横薙ぎに切断。その回転を利用して右斜め上から切り下ろして二弾目を切断。

更に、三弾目を着水と共に、左から薙いで斬る。

そして、背中後ろで左手に持ち替え、牙突の姿勢に入って、その間髪入れずに牙突を放つ。そして、直撃する四弾目を貫く。

その様子に、眼を見開くレ級。

「あれ？そんなに驚く事ですか？」

電はバカにする様に、笑う。

そして、また、牙突の姿勢に入る。

「これからたつぷりと見せてあげますよ。この、自称『壬生の狼』の電の技を！」

架空の人物の理想を胸に、電は、レ級に突撃する。

「ぬお!？」

武蔵は思わず、その様な声を挙げてしまう。

「く、奴はともかく、他にル級やタ級がいるとキツイなこれは！」

「本当にそうね！」

武蔵の言葉に同意する陸奥。

先ほどから現れた戦艦棲姫がまさか戦艦ル級二人に戦艦タ級を二人を引き攣れ、あげくの果てには南方棲戦鬼が現れる程。

「きやあ!？」

「ぐあ!？」

「足柄さんと那智さんが!？」

二つの悲鳴に続いて雪風の悲鳴。

武蔵はすぐさまそちらを見る。

そこには、被弾した足柄と那智が、煙を吹き出しながら、対峙している夕級とル級を睨んでいた。

中破までにはいつていないみたいだが、それでも押されている事はたしかだ。

「それに加えて……」

武蔵は視界を外の方にやる。

そこには、駆逐艦や軽巡などもいるのだ。

「まさか、連合艦隊で来るなんてね」

「ああ……一人だけで夕級とル級の相手をしにいった長門は無事だろうか……」

武蔵は、落ちかけていた眼鏡を指先で持ち上げると、そう言う。

「あら？心配しているの？彼女の事を？」

「当たり前だ。短期間だが、この艦隊の仲間だ。見捨てる事は出来ない」

そう言い、武蔵は目の前にいる戦艦棲姫と南方棲戦鬼を睨む。

その顔には、笑みが浮かんでいる。

まるで、余裕とでも言うかのように。

「敵に空母がいるというのも厄介ね。制空権を取られて着弾観測射撃ができない……」

陸奥が苦い顔でそう言う。

上空には、敵の軽母又級が飛ばした艦戦が飛び回っている。

そのお陰で、観測機が飛ばせず、一方的な砲撃をうけているのだ。

目の前に水柱が立ち上る。

「く!?!」

「きや!?!」

それに思わず顔をしかめる武蔵と陸奥。

だが、次の瞬間、そんな二人に砲弾が降ってくる。

「ぐあああ!?!」

「きやああ!?!」

その砲弾の内一発が彼女たちに直撃する。

そのせいで、武蔵は砲塔の一つを潰され、陸奥は右舷をやられて浸

水してしまう。

「何気に連携のとれた真似してくれるじゃないの」

「間違いない。奴らは確実に我々の戦いに慣れてきている……」

武蔵は、残った砲塔を戦艦棲姫と南方棲戦鬼に向け、撃つ。

だが、分かっていたかのように、すでに回避行動に移っており、回避されてしまう。

「く……やはり当たらんか」

「万事休すね」

なんとか立ち上がる陸奥。

他の艦娘は、重巡の足柄と那智を残して周りの駆逐艦の掃討に入っているが、かなり難航しているらしく、増援はまだ見込めない。

しかし、このままではやられるのも時間の問題。

「こんな時に限って、空母いないのはきついな」

武蔵は、苦し紛れに笑い、敵を見据える。

そして、戦艦棲姫が、こちらに砲塔を向ける。

そして、発射しようとして瞬間、突如、視界の右側から何かが飛んできて、視界の左側へ消える。

「な!?!」

それに、その場にいた全員がそれに視線を向ける。

それは、顔がまるで内側から破壊された様に、原型をとどめていないル級の沈みかけている姿だった。

「なにが……」

「なるほど、これは主砲以上に威力があるな」

『!?!』

背後から聞こえた声に慌ててそちらに視線を向ける、武蔵、陸奥、戦艦棲姫、南方棲戦鬼。

そこには、硝煙にまみれ、艦装を半ば崩壊させ、所々に被弾した後がある。しかし、その顔にはまだまだ余裕だとも言える様に笑みを浮かべている長門の姿があった。

その右手は、返り血を浴びたかの様に、黒い液体を滴らせていた。「武蔵、陸奥。この二体は私がやる。お前たちは足柄たちの援護に

行ってくれ」

「ッ、一人じゃ無理よ!」

そういう長門を陸奥が止める。

「心配するな。お前たちがさっさと向こうの敵を倒して戻ってくれば、それで終わる。最も、その前に、私が奴らを沈めているかもしれないがな」

不敵に笑う長門。

その視線の先には、怒りに顔を歪ませている戦艦棲姫と南方棲戦鬼の姿。

「でも……」

「行け、陸奥。こういうのは変だが、今度こそは守るから」

そう言い、長門は、艦装を離別する。

これで、艦装による重量が無くなり、身軽になる。

その瞬間、戦艦棲姫が砲撃する。

「ッ!?危ない!」

陸奥が悲鳴の様に叫ぶ。

だが、長門は、回避をせずに、その場にしゃがんで、左手を右拳に添えて、その右拳を水面に向ける。

「ハアアッ!!!」

短い気命と共に、長門が右拳を水面に叩き着ける。

その瞬間、長門の目の前に、物凄い勢いで水飛沫が巻き起こり、それに直撃した砲弾の威力が纏めて殺される。

「二重の極み・波盾なみたて」

響夜から伝授された、最強の破壊の極意『二重の極み』。

その使い道は、いくつもある。

先ほど、長門が使った波盾は、水面を二重の極みで弾けさせ、その時に生じる一瞬の水圧で、弾丸を止めるといふものだ。

この場合は、まさかの砲弾だが。

「良いから行け!ここは私一人で十分だ!」

長門がそう叫ぶ。

「分かった」



武蔵が答える。

「必ず戻ってくる。だから、沈むなよ」

「良い。絶対よ?」

武蔵がそう言い、陸奥が念を押す。

「ああ、分かった」

そして、武蔵たちが戦艦棲姫たちから離れていく。

「どうした?」

長門が、二隻を見据える。

その顔には、怒りで歪んでいるものの、完全に警戒して近付かない戦艦棲姫と南方棲戦鬼の姿があった。

「怖気づいて足が竦んだのか?これは滑稽な事だな」

だが、と長門は、右拳を突きつける。

「それではこの長門を殺す事はできんぞ!」

「ずい．．．かく．．．?」

加賀、そう呟く。

その声はかすれており、ただただ目の前で起きている事が信じられなかった。

それは、周りにいる艦娘たちも同様だった。

——イメージ 体現するは、誇り高き信念を持つ、一人の男。

瑞鶴は、突如、心臓を中心に、炎へと包まれたからだ。  
それには、戦艦棲姫も目を見開く。

——あら 下法の力を持って、下法の者を消す力。されど、その力は  
下法に非ず。

弓が中央で割れる。その形を別の物に変える。姿さえも、変わっていく。

——ただ、その信念は、決して、まがる事などなく、ましてや、他人に変える事などできない。

割れた弓が、腰の後ろに差される。服が、燃え落ち、新しいものに変わる。

——ただ、私は、大切な物をもう一度、守る為に、この身を焼く。

燃える彼女の脳裏に、あの時の事が蘇る。

覆いかぶさる、彼女。その下にいるのが自分。

彼女が、必死に敵の爆撃から自分を庇う。雷撃を、自らが立ちだけかる事で、代わりに受ける。

何もできなかった。彼女が轟沈<sup>死</sup>ぬまで、何もする事が出来なかった。

悔しかった。

——だからッ!!!

彼女は願う。守る為の力を。彼女は願う。敵を倒す力を。彼女は求める。今、欲しい力を。

炎が鎮まる。

そこに立っているのは、瑞鶴であって、瑞鶴<sup>空母</sup>では無い。

弓道着が、黒の忍装束へと変わり、その手には、武士がつけていそうな籠手を、その後ろ腰には黒鞘の小太刀が交差するように差さって

おり、更には、何かの巻物が小太刀の交点の上にあつた。

「……ここにいる皆は、やらせない」

瑞鶴が、指ぬきの黒手袋に包まれた手で、小太刀を両手で抜く。

「私の、五航戦の誇りにかけて、新生一航戦の誇りにかけて、お前は私が倒すツ!!!」

そう叫び、瑞鶴は、戦艦棲姫に向かって、駆け出す。

三文字の正義を胸に、レ級に立ち向かう電。

自身の提督の誓いの元に、敵を打ち倒そうとする長門。

そして、己が信念誇りにかけて、自身の存在の理を外れた瑞鶴。

三方がそれぞれの戦いに激突する。

## 電、怒りの白兵戦

レ級が砲撃する。

「くうー！」

それを、どうにか避け切る電。

今、艤装を外した状態の電では、唯一の武器である小太刀の間合いにレ級を入れなければ勝機は皆無。

かといって、弾切れを狙う内に、爆撃機や雷撃機、甲標的からの攻撃を受けないとも限らない。

ならば、牙突の突進力を持って、敵に接近する。

「牙突・壱式ー！」

そして、恐ろしい程の突進力でレ級の二度目の砲撃を切り抜ける。

だが、踏み込むのは一度切りのこの技ではすぐに失速する。

だから、更に右足で踏み込む。

そうすれば、元の加速を取り戻し、レ級に接近できる。

そして、もう一度、左での踏み込み。

「ハアアツ!!!」

左手を突き出す。

だが、牙突がレ級に直撃する瞬間、右脇腹に強い衝撃が走る。

「ぐあー!」

「にひひ・・・」

レ級が噛い、電は見た。

それは、レ級の腰から、尻尾の様に伸びている、異形の艤装からだつた。

それが、電の右側面から攻撃を与えたのだ。

突進技は、その発動の最中、標準を合わせる為に、視野が極端に狭くなる。

更に、牙突の弱点に、照準を合わせる為の右手が突き手の反動加重を兼ねる為に、前に突き出さなければならぬ事にある。

その一瞬の死角に滑り込まれば、いかに足掻こうと、牙突は無効にされる。

このレ級は、それを、一度電が砲弾を防いだ時に見切ったのだ。

「この野郎ツ・・・!!」

吹っ飛ばされながらも、なんとか両足から着地する電。

だが、視界の隅で、白い筋がいくつも、電に向かって突撃してきていた。

「雷撃!？」

それを認識した電は慌てて跳躍。

魚雷を回避する。

だが、どうやら四方八方から撃ち込まれていたようで、魚雷同士が激突。水柱を巻き起こす。

「うわあああ!？」

視界を塞がれ、更には空中にいる事と、魚雷が爆発した事によっておこる爆音。

その為に、目の前から来る攻撃を予測できなかった。

「っ!？」

砲弾だ。

それも、レ級が放った、大和型に匹敵する、おそらく四十六センチ砲の徹甲弾だ。

「うわあああああ!？」

それを悲鳴を上げながらも、かなり体に負荷をかけて、体を捻って回避。

その瞬間、骨や筋肉が悲鳴をあげる。

「っあ!？」

そのまま水面に着水。

体中が、先ほどの無理で痛むが、そんな悠長な事を言ってもらえず、すぐに立ち上がってレ級を睨む。

一方のレ級は首を傾げていた。

どうやら、先ほどの攻撃で仕留めるつもりだったらしく、どうして外れたのかを理解できていないらしい。

「ヤアアアッ!!」

電が、その間に小太刀を右手に持ち替え、走り出す。

それに気付いたレ級も主砲を向ける。  
レ級が砲撃する。

その雨を掻い潜り、レ級の懐に潜り込む。  
そのまま右手に持った小太刀を右斜め下から斬りあげようとする。  
だが、その前に、レ級の艤装が、今度は電の右側から、薙ぎ払われ  
る。

そして、それがレ級の目の前を通過。

「……？」

だが、感じる筈の手応えが一切無い。

「天野流……」

突如、目の前にある艤装から声が。否、その下。

慌てて下を向くと、電が、右足を折りたたみ、左足を横に真っ直ぐ  
に、上半身を水面と水平になるように屈かがめている、かなりの柔軟性の  
ある態勢で避けていた。

「虎伏」

天野流虎伏。

超低姿勢での回避。そこから繰り出すカウンターは、完全に相手の  
虚を突く。

艤装の下から出ながら、そして立ち上がりながら、レ級に小太刀を  
突き立てる。

だが、一瞬の合間、レ級の右手が慌てて電の小太刀をそらし、レ級  
の頬を小太刀が震める。

(外した……!?)

「があ?!」

一瞬、その事で呆けたのがいけなかったのか、いきなり腹に痛みが  
走る。

そのまま後退してしまうも、背中になにかが当たる。

「ツ?!レ級の艤装?!ガッ!」

更に、右の頬からの衝撃と痛み。

レ級が殴ったのだ。

そこから、背中にあるレ級の艤装が逃げ道を塞いでいるせいで、レ

級のラツシュに打ちのめされる電。

「……の……」

だが、怪力ではあるも素人同然のラツシュの中に、一瞬の隙を見つける電。

「舐めるなア!!!」

「!?」

いつの間にか左に構えなおした小太刀で、超高速の突きを繰り出す。

牙突・零式。

電の切り札の内の一つ。それがレ級の右肩に直撃する。

「ガア!?」

レ級からその様な声が漏れ、吹っ飛ぶ。

電は、小太刀を固く握りしめ、レ級が吹っ飛ばされていくのに任せながら、引き抜く。

そして、レ級が水面に落ちる。

このまま、奥の手の電式を撃ち込めば、それで終わる。

だからすぐに構えようとする電。だが、それよりも早くレ級が動く。

艀装の尻尾が動き、電の足に向かってその口を大きくあける。

「ッ!?」

慌てて跳び退くも、伸ばしていた右足を噛まれる。

「ッ!?しまったー!」

そのまま逆さまになる。

レ級の顔に笑みは無い。どうやら電の先ほどの牙突が効いたのか、切れた様だ。

「……シズメ」

「!?」

その瞬間、視界が急変、直後に何かに叩き着けられ、激痛が体を貫く。

そのまま何かに振り回されるように、何度も何かに叩き着けられる。

水面は地面ほど固くは無い。しかし、それは、衝撃の伝播の差だ。例えば、水を張った風呂に、手を叩き着けてみるとしよう。すると、手がじんじんと痺れたり、痛かったりするだろう。

それは、もともと水の持つ、粘性が関係している。

この粘性が、水面に叩き着けられる衝撃を逃がす事が出来ず、水を一時的に『固体』にしてしまうからである。

ある程度の高さからおちれば、水面は地面と同じ様になり、十五メートル以上の高さから叩き着けられればただでは済まない。

「があああ!?!」

もう何十回と叩き着けられる電。

だが、その中で、一瞬だけ、目の前に敵の尻尾が見え、それを認識した瞬間に、電は牙突・零式を放つ。

「!?!」

牙突が艤装の顎に直撃すると、顎がこじ開けられ、もともとあった遠心力で上空へ吹き飛ばされる。

そのまま受け身をとる事も出来ぬまま水面に叩き着けられる。

「があ!?!」

かなりのダメージを負ったのか、まともに立ち上がる事のできない電。

一方のレ級は、散々叩き着けて疲れたのか、息を整えていた。

「ぐう．．．ああ．．．．．」

——死ねない。

その執念のみで、電は立ちあがる。

「はあ．．．はあ．．．」

先ほど、レ級の艤装に噛みつけれたからなのか、右足の骨が折れているかもしれない。

これでは、牙突が使えない。

かといって、他の技を繰り出しても、壊れた右足では、十分な踏み込みが効かず、不発に終わってしまう。

逆転の鍵になる牙突・電式も当然の様に使えない。

レ級が主砲を向ける。



確実に仕留める気だ。

一方で電は、何の悪あがきなのか、なんとか手放さなかつた小太刀を左手に持つ。

そして、牙突の構えをする。

それを見て、レ級は、バカにする様に、笑みを浮かべる。

それは勝利を確信している目。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

電は、ダメージがかなり応えているのか、息が荒い。

しかし、レ級はそんな電に構わず砲撃。

更に、周りに展開させていた甲標的からも魚雷を放つ。

極め付けに電の直上から爆撃機を落下させる。

もはや絶体絶命。

万事休すか・・・

「——生きる意志は、何よりも、何よりも、どんな力よりも強い」

そう、暗示をかけるかのように、電はそう呟く。

その瞬間、電は左足で、真上に跳躍。

直後に砲弾よりも速く、いくつもの魚雷が、電の真下で正面衝突。

爆発を巻き起こし、水柱がたつ。

電は、その水柱に乗る。

その先にレ級の放った砲弾。

読まれていたのだ。

レ級の顔に狂喜的な笑みが浮かぶ。

だが、その表情は驚きに包まれる。

「ハアアアアア!!」

なんと、直上から来ていた爆撃機が落とした爆弾に、一度空中前転を促して回避、その尻に足を乗せ、更に跳躍したのだ。

「!？」

これには、流石のレ級も驚かすにはいられない。

更に、電は、爆弾を落として、落下コースから外れようとしていた敵艦載機に左足を乗せる。

そのまま、レ級に突っ込む。

その構えは、牙突のまま。

「オオオオオオツ!!」

これは、電が考えた、対空の参式と対を成す、空中から突き出す牙突。更には、それに、零式の要領も加わり、更に威力が加算された、牙突。

「牙突・肆点零式!!」

その牙突が、レ級の心臓のある左胸に直撃する。

「アアア!？」

あまりの激痛に、悲鳴を上げるレ級。

そのまま持つれあう様に、倒れる電とレ級。

「う、あああああああ!!」

だが、電が、止めと言わんばかりに、小太刀を捻るツ!!

「ア、．．．．」

レ級は、短く、そう声を漏らすと、やがて、死んだように、動かないくなる。

事実、轟沈だ。

「ハア．．．ハア．．．ハア．．．」

叩き着けられた衝撃で、体のあちこちから血を流す電。

そして、レ級の横に力尽きたかのように寝転がる電。

「ハア．．．ハア．．．か、勝った．．．」

電は、そう呟き、空を仰ぎ見る。

## 長門、勝利への一撃

戦艦棲姫、南方棲戦鬼の砲撃が長門を襲う。

だが、長門の波盾によって全て防がれる。

「く……響夜から聞いてはいたが、確かにそこまで連発できそうにないッ！」

攻撃が激しすぎて、かつ下がりながら撃っているので中々接近できない長門。

「艀装を外したのはまずかったかな？」

だが、その顔には笑みが浮かんだままだった。

「さて、少し無茶をするか」

長門はそう呟くと、突然、敵二隻を周回していた所を、まるで神風をするかの様に突撃を開始する。

「!?!」

一瞬、驚いた二隻だったが、すぐに落ち着きを取り戻すとすぐさま砲撃を再開する。

長門の周りに、いくつもの水柱があがる。

「ふ、その程度か!?!」

だが、長門に当たる事は無い。

水柱の合間に見える敵の主砲、副砲の向きから、着弾場所を予測。

そこから、どのように回避するべきかを導き出し、あとはその方向へ避けるだけ。

そして、長門と二隻の距離は超至近距離へ。

戦艦棲姫が、迎え撃つ様に、艀装にある剛腕、その右腕を振り上げる。

長門も、右拳を引き絞る。

「アアア!!」

「オオオ!!」

雄叫びと共に、二人の拳が激突。

外見だけの話なら、戦艦棲姫の剛腕が、長門の華奢な腕を弾くか折れるかのどちらかの運命を辿っただろう。

だが、長門は、艦娘として、その体からありえない程の膂力を有している。

さらに、響夜が、漫画から現実へと編み出し、それを長門が命懸けで習得した一撃必倒の必殺技――

――破壊の極意『二重の極み』が重なる。

「ぎゃああああ!?!」

戦艦棲姫、ではなくその艤装が悲鳴をあげる。

その右腕は、肘の辺りまでにまるで破裂したかのように血を吹き出していた。

「!?!」

「余所見していいいいのか?」

「ッ!?!」

戦艦棲姫が艤装の方を思わず振り向き、その後に長門の声が聞こえ、振り返った途端、長門の左拳が炸裂する。

戦艦棲姫はそのまま吹っ飛ぶ。

だが、その顔は殴られた衝撃で歪んだだけにとどまり、先ほどのル級のようにはならない。

その理由は、長門は右手の二重の極みしか習得していないから。左では二重の極みは使えないからだ。

だが、これで、一時的にだが、南方棲戦鬼の方へ集中できる。

「!?!」

南方棲戦鬼の顔が驚愕に染まる。

「喰らえエ!!」

二重の極みが南方棲戦鬼の胸に直撃する。

口から血を吹き出し、水面に倒れ伏す。

南方棲戦鬼は、耐久は高いが、実は装甲はかなりの紙なので、比較的倒しやすいのだ。

「アアア!!」

「ッ!」

その光景を見た戦艦棲姫が怒りに歪んだ顔で両肩の主砲を放つ。  
だが、長門は体を背中から海へ投げ出す事で回避。

そして水面に向かって二重の極み。

「!?」

一瞬の目くらまし。

その間に態勢を立て直す。

「アアア!!!」

「オオオ!!!」

またもや双方が同時に突撃を開始。

長門が先に右拳を放つ。

だが、戦艦棲姫はそれを迎撃するのではなく、本体自らが回避。

「!?」

「アアア!!!」

艀装の方が叫んだかと思うと、その残った左の剛腕が、長門を右へ吹っ飛ばす。

「ぐう!!」

その痛みに顔を歪ませるも、すぐに態勢を立て直す長門。

すぐに戦艦棲姫は砲撃を再開。

それを巡行しながら回避。

そして、また接近をする長門。

「まずはあの艀装を破壊するッ!!」

そう標的を絞り込んだ長門は、まずは邪魔なあの異形のバケモノの破壊に専念する。

その為に・・・

身構える戦艦棲姫。

「オオオ!!!」

拳を振り上げる長門。

だが、それよりも、艀装の左腕が動く。

「ッ!?!」

それに目を見開く長門。

その拳が、長門を捉える。

だが、長門は、いきなり拳のくる方向へ進行方向を変える。  
「!?」

そして、左手の手袋を破きながらも、回避しきる長門。  
そしてついに、艀装の懐に潜り込んだ!

「オオオツ!!」

拳が、戦艦棲姫の艀装に直撃する。

「ギアアアアア!!」

艀装が悲鳴を上げる。だが、完全破壊には至らない。

「もう一度だ」

だが、再び腕を引き戻した長門が、今度は大きく踏み込んで、その拳を、先ほど拳を叩き込んだ場所に叩き込む。

「ギアアアアアア!!」

その威力で、艀装が完全に粉碎される。

「!?」

「終わりだ」

そして、長門が、もう一度、拳を振り上げる。

その拳を戦艦棲姫に向かって振り下ろす。

「——終ワラナイ」

「!?」

突如、戦艦棲姫の呟いた言葉に動揺する長門。

だが、拳は止まらず、戦艦棲姫へ。

だが、その右手首を、戦艦棲姫は左手で掴む。

「な!?!」

「オオオ!!」

そのまま背負い投げを繰り出す。

(コイツ!?! 武術を!?!)

だが、叩き着けられる前に腕を引き抜き、遠くに投げられるにとどまる長門。

すぐに立ち上がって、戦艦棲姫の方を向いた瞬間、いきなし視界が急変。

そして、左頬に鋭い痛みが走る。

「ガ!？」

そのまま、また水面に叩き着けられる。

(今、殴られたのか!?)

まさか、本体もかなりの怪力だと誰が思ったか。

ただでさえ、自分の艦装に守られている筈の存在が、ここまで戦闘できるのだと誰が思ったか。

このままではマズイ。そう思った長門はすぐに立ち上がる。

そして、自身の直感に従い、右腕を顔の前にはたてる。

その直後に重い衝撃が走る。

「……」

「そう来るだろうと思ったよ」

戦艦棲姫は笑わず、長門は笑う。

戦艦棲姫は右拳を突き出していた。

だが、その瞬間に、右手を振り上げる。

それに応じるように長門も笑みを引つ込め、左手を振り上げる。

そして、拳が正面衝突する。

「ぐ」

「グ」

その重さに、思わず顔をしかめる長門と戦艦棲姫。

筋力は同じ。

だが、長門には、決め手である二重の極みがある。

「おおお!!」

長門が右拳を振り上げる。

そのまま戦艦棲姫に振り下ろす、

戦艦棲姫は、体を横にして、紙一重でかわす。否、胸を掠めた。

「ツ……!?!? いんぐ!」

だが、突如、口から黒い液体を吐き出す戦艦棲姫。

「掠ツタダケテ……」

「まだまだ行くぞ!!」

「!」

もう一度右手を引き戻し、長門が振り上げる。

だが、今度は空振りに終わる。

「二度モ効カンゾ」

しゃがんで回避したのだ。

そして、右手を長門の腹に叩き込む。

「ぐ!?!」

思わず下がる長門。

だが、それよりも。

(さっきのは・・・!?)

何かに驚いている長門。

だが、戦艦棲姫は攻撃をやめない。

「く!」

(考えている暇は無いか!)

防御の姿勢に入る長門。

交差させた腕にまた戦艦棲姫の右拳が叩き込まれる。

(やはり・・・)

それで後退する長門。

そして、何かを確信する。

(二重の極みを、習得しようとしている・・・!)

そう、先ほどから戦艦棲姫は、右拳の拳を立てて、長門に片手二連撃を入れているのだ。

その形は、まさに、二重の極みの型そのもの。

「・・・原理ハ、理解シタ」

戦艦棲姫は、そう言う。

「後ハ、ヤリ方ヲ覚エルダケダ」

身構える長門。

深海棲艦に、ここまで知性のある存在がいたなど、思わなかったのだ。

そのまま膠着状態が続く。

だが、突如、彼女たちの周りに立ち上った水柱が、その沈黙を破った。



「!?!」

水柱の方向から見て、長門から三時の方向、戦艦棲姫からは九時の方向から飛んできた。

その方向には……

「長門!!」

武蔵たちだ。

何人かが、中大破しているが、それでも誰一人として沈んでいない。

「ココマデカ」

ふと戦艦棲姫がそんな事を言う。

そちらに向くと、戦艦棲姫は、武蔵たちを見て、まるで諦めたかのような顔をしていた。

それは、決して生きる事を諦めたのではなく、この戦いを続ける事に対しての諦めだった。

「次会ウ時マデニハ習得スル。ソレマデ首ヲ洗ツテ待ツテイロ」

戦艦棲姫は、そう言い残し、去っていく。

「! 逃げいくわよ?!」

足柄がそういう。

「逃がさん!」

那智がそう言い、主砲を向けるが、以外にも、武蔵が手を挙げてそれを止める。

そのまま長門へ歩み寄る。

「……… 奴とは何を話したんだ?」

長門に、そう問うた。

「……再戦だ」

長門は、そう言った。

## 瑞鶴、誇りの為に

電、長門、瑞鶴が戦闘を開始して数分。

司令室では、騒然としていた。

「報告します」

久三が声をあげる。

「陸上攻撃部隊、旗艦『金剛』から電信。駆逐艦『電』が単身でレ級に向かい、残った金剛たちは飛行場姫への攻撃へ向かった模様」

「そんな!?!駆逐艦一隻じゃいくらなんでも無理がある!」

久三の言葉に、声を挙げる三鷹。

「仕方ないだろう、彼女自身がそう具申してきたんだ」

「だからって!」

久三の冷たい態度に、声をあげる三鷹。

だが・・・

「水上打撃部隊から電信!黒河の長門が単身で戦艦棲姫、南方棲戦鬼と対峙、武蔵と陸奥は足柄と那智の援護に向かった模様!」

亜美がその様に言う。

「ええ!?!」

その報告にさらなる驚きを表す三鷹。

「大和型でさえも苦戦する戦艦棲姫に加えて、南方棲戦鬼まで加わってるんじゃ、勝ち目が無いよ!」

「でも、これも彼女自身からの具申よ?それは尊重すべきじゃないの?」

「ツ・・・」

亜美の何気ない言葉に、歯噛みする三鷹。

これでは、ただでさえ少ない黒河の艦娘の主力ともいうべき二人を失ってしまう。

「空母棲姫を攻撃していた機動部隊から報告。敵に援軍が現れた模様。ヲ級改flagshipが二隻との事です」

そので翔真がさらなる衝撃を叩き着けるように、そう言う。

その場にいる全員が息を飲んだ。

「このままでは、いづれ・・・」

「全滅か・・・」

豪真が、苦い顔でそう言う。

その場に重い空気が漂う。

・・・一か所を除いて。

「だから、どういう意味だよ蒼龍!・・・はあ!?瑞鶴の姿が変わったって?それも、全くしらない・・・え?忍び装束?」

時打が、無線越しになにやら意味の分からない会話をしていた。

「時打、何があった」

「だから・・・え?あ、はい」

豪真が声をかけた事で気付いたのか、海図から目を放し、ヘッドフォンを外して豪真の方へ向く時打。

「何があったのよ?今、切羽詰まってる状況なのよ?」

亜美がそう言う。

その態度に、少し嫌な顔をする時打だったが、すぐに報告した。

「えー。なんでも、瑞鶴がいきなり炎に包まれて、それがおさまったら、なんだか黒い忍び装束を来て、小太刀を二本、腰に差していたとかなんとか・・・」

「心意改装か」

「へ?」

豪真が、時打の報告を聞いてそう呟く。

「心意改装?」

三鷹がそう言う。

それで、何かに気付いたかのように、その場にいる全員を見渡す。

「ていと・・・長官、話した方がいいのでは?」

「うむ・・・そうだな」

彼のすぐそばに立っていた筑摩がそう耳打ちすると、豪真は、諦めたかのように語り始める。

「心意改装というのは、艦娘自らの意志で、改装を促す現象の事だ」

その言葉に、全員が驚愕する。  
もちろん、翔真も。

「艦娘自らって・・・そんな事、聞いた事がありません！」  
亜美がそう声をあげる。

本来、艦娘の改装は、各地方にある本営でのみ可能で、その艦娘の最後の姿、あるいは、そうなる筈だった姿、あるいは、そうなるかもしれない可能性をもとに、実装されるものだ。

そのお陰で、その艦娘の性能は大幅に向上し、深海棲艦との戦いにもかなりの成果が期待できる。

だが、その中で、艦娘自らの意志で、自身の改装を促す事が可能なのだ。

それを、『心意改装』というらしい。

もともと、不確定要素の多い艦娘には、まだまだ未知の要素が沢山あるのだ。

感情の昂りで戦闘能力が向上したり、何故人間の、それも女の子の姿をしているのかという事とか、色々あるのだ。

その中で、最も不可解なのが、この心意改装だ。

本来なら、それなりの資材の元に、姿を変貌させるものだったのだが、この心意改装は全くの別。

自らの意志で、その姿を変化させる。

その引金は、まだ分かっていないが、なんでも、艦娘が、力を欲する時、覚悟を決めた時、そして、絶望的な状況である時、この三つの要素が揃っていなければ、この心意改装は発動しないらしい。

「しかも、心意改装も、一時的なものでもあるのだ」

「つまり、瑞鶴がその姿を維持できるのに限りがあるって?」

時打がそう聞く。

「その通りだ。時に、今、黒の忍び装束と言ったか?」

「え、ええ・・・あれ?でもそうなるって・・・」

「ああ、瑞鶴はまだ改。その先に改二、改二甲が存在するが、その姿は、そのどれにも該当しない」

「これも、心意改装の副作用かなんかなんですか?」

神代がそう言う。

だが、豪真を首を横に振った。

「いや、それは思想改装だ」

『思想改装?』

さらなる記憶に無い名称に、混乱する一同。

「思想改装とは、その艦娘が、一番なりたい存在。自身の概念軍艦を捨ててもなりたい存在への強い想いがあって成される改装だ」

「そんなものが・・・」

久三が声を震わせてそう言う。

思想改装。

原理としては心意改装と同じだ。

だが、その内容は全くの別物。

何かに強い憧れを持ち、なお、自分を捨ててでもなりたいその存在になる。その様な心を持って、なおかつ、その意志を妖精にくみ取って貰ってなされる改装。

その願った姿になった艦娘は、本来、その艦種とは全く別の性能を発揮する様になる。

例えば、駆逐艦が、スーパーマンの様な怪力を求めたとする。

自分が艦じゃなくなっても良いから、その力を欲し、それを、改装を任された妖精が感じ取り、勝手に設計図を変更。

そして、それで誕生したのが、スーパーマン並みの怪力をもつ駆逐艦が現れてしまったのだ。

そのお陰で、敵深海棲艦を素手で殴り飛ばすという快拳をなしとげた。という逸話が、実はこの世界には存在する。

だが、それで自分がその軍艦としての信念を捨て、新たな信念をもってこれからの人生を歩んで行かなければならないという現実を突きつけられてしまう事が起きてしまう。

一度改装してしまえば二度ともたに戻る事はできない。

ただ、その艦種としての能力が残ったり、残らなかつたりと、そういう度合いは存在するらしく、今の瑞鶴がどれほど、元の自分の力を有しているかは分からないのだ。

「そんなものが・・・」

「ただ、思想改装を成功させた艦娘は、この関東では初めてだ。下手に言つて、艦娘に無理を強いさせたくは無かったから黙っていた」

そういう豪真に、その場の全員が黙る。

だが、その沈黙を破つたのは時打だった。

「今は祈りましょう。自分たちの艦娘が、勝利をつかみ取る事を」

「オオオオオオオオオ!!!」

雄叫びを挙げて、戦艦棲姫に突っ込む瑞鶴。

その両手には、二本の小太刀。

水面を全力疾走し、戦艦棲姫に突っ込む。

その瞬間、戦艦棲姫が砲撃する。

発射のタイミングをずらして、副砲も加えた間髪入れずに連続で砲撃してくる。

その砲弾を、聴覚で飛来を予測。

そのまま右へ左へジグザグに走行。

狙いをつけられないようにするためだ。

「くう!!」

巻き起こる水柱に顔をしかめながらも、瑞鶴は避け続ける。

その時、砲弾中に、明らかに音の違う砲弾に気付く瑞鶴。

「! 三式弾!」

直感的にそう予測した瑞鶴は、すぐさま行動に移る。

右手の剣を前に、その柄頭に左手の剣の切っ先を向け、そのまま左手の剣で右手の剣で弾き飛ばすッ!!!

御庭番式小太刀二刀流 『陰陽撥止』

おんみょうはつし

弾かれた小太刀が、砲弾の中の一つに突き刺さる。

その途端、閃光をまき散らしながら爆発!!

「くー！」

光に目を細めるも、なんとか舞い戻ってくる小太刀を右手で掴む瑞鶴。

「おおお!!」

まだ砲撃が続く。

その中を、掻い潜る瑞鶴。

そして、戦艦棲姫に近づく瑞鶴。

その途端、戦艦棲姫の剛腕が動く。

左腕が振り上げられ、それを横に薙ぐ。

そこに、瑞鶴がいる。

完全に直撃コースだ。

そして、それが瑞鶴に直撃した。その瞬間、瑞鶴の姿が描き消えた。

「!？」

それに目を見開き、驚く戦艦棲姫。

残像だ。

振り切った左腕の方向から、瑞鶴が現れる。

そのまま反時計回りに回転。

そこから、右手の小太刀で、超高速の三連撃を繰り出す。

回転剣舞だ。

「ツ!？」

それを上体を反らす事で、なんとか左脇腹を掠める。

「まだまだア!!」

瑞鶴がそう叫ぶと、戦艦棲姫の周りを、残像を描きながら回転する。

「!？」

流水の動き

動きの緩急をつけて、相手に残像を見せる歩法だ。

その動きで、戦艦棲姫を攪乱する。

そして、両手の小太刀で戦艦棲姫を攻撃する。

剣舞ともいわれるそれは、祭りなどでやる儀式剣舞とは違い、実践で使われる実践剣舞。

「オオオ!!」

四方八方から、艤装の剛腕に守られている戦艦棲姫を徐々に追い詰めていく。

だが、突如、戦艦棲姫が両腕を振り回す!

「あ!?!」

つい決定打を与える為に近付き過ぎていたのが仇となったのか、その剛腕の餌食になる瑞鶴。

「が!?!」

「瑞鶴!」

加賀が思わず叫ぶ。

だが、空中で態勢を立て直した瑞鶴が、水面に上手く着地。だが、膝をつく。

「ぐう……」

その様子になやりと笑う戦艦棲姫。

「ぐ……加賀さん!」

突然、瑞鶴が加賀に向かって叫ぶ。

「今のうちに、飛行場姫を叩いてください!」

「!? 何言ってるの!?! 一人だけで、戦艦棲姫相手に勝てると思ってるの!?!」

「はい!」

まさかの肯定。

それに思わず表情を固まらせる加賀。

「絶対に勝ちます! だから、加賀さんは、加賀さんたちは、飛行場姫を攻撃してください! お願いします!」

そして、瑞鶴が駆け出す。

「暁の水平線に、勝利をツ!!」

瑞鶴は、そう言い、戦艦棲姫に突っ込む。



「く……全艦、発艦準備！」

「瑞鶴、轟沈しずまないでよ！」

「お願い、必ず、生きて……！」

加賀が蒼龍と龍鳳にそう言い、二人は悔しそうに顔を歪めながらも、弓を、飛行場姫の方へ向ける。

「攻撃隊、発艦ッ!!!」

場面は、瑞鶴へ。

「オオオオオ!!!」

両手の小太刀を逆手に持つ。

「御庭番式小太刀二刀流奥義……ッ!!」

何かの危険を感じ取った戦艦棲姫は剛腕を自分の前で交差させ、防御の姿勢に入る。

「回転剣舞・六連ッ!!!」

六連撃の斬撃が、三連ずつ交差しながら戦艦棲姫の両腕に叩き込まれる。

その剛腕から黒い液体が噴き出す。

「ぎい……!!」

艀装が、声を漏らす。

(だめだッ！まだ足りない！)

何が足りない？

剛腕が瑞鶴を襲う。

それを、なんとか何とか両手の小太刀で左へ反らす。

だが、ただ掠っただけで吹っ飛ばされてしまう。

——力が足りない。

なんとか踏みとどまった瑞鶴はまた飛行場姫へ駆け出す。

そして、攪乱する様に、流水の動きを発動する。

だが、戦艦棲姫はそれを見切ったかのように、残像の中にいて、見つかるはずの無い瑞鶴の位置へ剛腕を振るう。

「なっ！」

それに反応出来ず、小太刀を交差させる事で、防ぐ。







そして、瑞鶴の視線の先にある水平線に……空母を主とした編成の艦隊が眼に映った。

その方角は、マーシャン諸島の南東。完全に、こことは違う場所から来た航空部隊だ。

空母ヲ級改flagshipが二隻、又級elite一隻、随伴艦の軽巡一隻に駆逐二隻といった編成だ。

「あ……く!!」

瑞鶴は急いで立ち上がろうとする。

だが、すでに鬼人化の反動でまともに体が動かない上に、小太刀を振るう為の両腕も死んでいる。

しかし、このままでは、後ろで必死に飛行場姫を攻撃している加賀たちに危害が及ぶ。

なんとかしなければ、なんとか……なんとか……!!!

突如、上空から降り注いだ弾丸の雨が、敵艦載機を撃墜する。

「……え?」

それに茫然とする瑞鶴。

思わず空を見上げる瑞鶴。

太陽の光に顔をしかめるも、確かに、その光の中にある、十個の黒い斑点が見えた。

それは、徐々に大きさを増していき、そして、その姿を確認できるようになった。

「あれは……!!!」

それは、上空から物凄い勢いで急降下してくる。  
そして、敵の艦載機たちを、怒涛の勢いで落としていく。  
敵の航空部隊の旗艦であろう、空母ヲ級改flagshipが眼を  
見開く。

数百機に対してたったの十機。

その十機が、一機も落とされる事なく、敵の異形の艦載機たちを落  
としていく。

その姿を、瑞鶴は知っている。

黒い塗装。そこに描かれている白い日の丸。

烈風を超える性能。

それは、ああ、それは間違いなく……

突如、無線に通信が入る。

そして、そこから、とても見知った声が聞こえた。

『お待たせ、瑞鶴』

「翔鶴姉……!!!」

## 逆転の鍵、黒風、白狼の初陣

一方で、ここは、赤城率いる敵機動部隊殲滅隊のいる海域。

「ぎやあああ!?!」

「暁ちゃん!?!」

爆撃を受けた暁が悲鳴をあげる。

「くう……」

水面に膝をつく暁。

その体はすでに大破となっていた。

「これはまずいかもね……」

魚雷を放ちながら、北上が苦い顔でそう言う。

重雷装巡洋艦という事もあつてか、魚雷で何隻か沈めているが、まだ敵の主力たる『鬼』から『姫』となつた空母棲姫や、途中で合流してきた敵の航空部隊からの攻撃により、空母は装甲空母の大鳳を残して封殺。

今はなんとかか生きている航行能力で回避を続けている。

「このままじゃ……」

白雪が、主砲を撃ちながら、そう呟く。

一方で、飛龍の肩に持たれかかっている赤城と、なんとか応戦している大鳳はというと。

「ぎやあ!?!」

赤城と飛龍の傍で爆発。

水柱が立ち上る。

「くそ!?!せめて飛行甲板さえ無事なら……ッ!!」

飛龍がそう悪態吐く。

赤城は悔しさをにじませた表情で俯いていた。

飛龍は中破、赤城は大破を伴っており、さらには、何故か集中してくる敵の艦載機からの攻撃を避け続けなければならないのだ。

「どうしても、私たちを沈めたいみたいね……」

赤城が、なんとか視線だけを上空へ向け、そう言う。

「死ねない……絶対に死ねない……!!」

飛龍が、執念深い様な低い声でそう言い、無茶をする様に加速する。  
「だめ、援護が間に合わない」

一方の大鳳の方では、ボウガンから艦載機、零戦五二型を飛ばしているも、その援護が、敵の物量によって徐々に落とされていき、だんだんと飛龍と赤城たちに攻撃隊が行く様になっている。

「このままじゃ・・・!!」

いずれ赤城と飛龍がやられてしまう。

その様な、最悪の未来を予想してしまう大鳳。

「く、こんな所で・・・!!」

大鳳は歯を食いしばりながら激戦が繰り広げられている空を見上げる。

「何か、この状況を打開できる何かがあればいいんだけど、ねえ!!」

北上が主砲を撃ちながらそう言う。

敵は、空母棲姫にフ級flagshipが二隻。更にヌ級が三隻、内二隻がelite。

他にも、駆逐艦のeliteが三隻、軽巡eliteが更に二隻も残っており、状況は著しくない。

寧ろヤバイ。絶体絶命。

「！ 赤城さん！ 飛龍さん！」

「しまった!?!」

そこへ、飛龍と赤城の直上から、敵の爆撃機が急降下してきていた。まるでなにがしの惑星を破壊する超破壊砲の様な、球型の白い異形の艦載機。

赤城も、見上げてその姿を確認する。

これで爆弾を投下されれば、回避は間に合わずに、直撃してしまう。そうなれば、確実に沈められるのは必至。

(ダメ、私はまだ、あの人に・・・!!)

赤城が、心の中で、そう、思った時。

どこからか飛来した機関銃の銃撃が、敵艦載機を襲い、爆発する。

「な!?!」

「!?」



それに目を見開く。

そして、赤城たちの後ろから、何かが脇をすり抜けていく。

「あれは……!!」

それは、真っ黒い、墨を塗った様な体をしている、レシプロ機。

その両翼には、白い日の丸。

それは、彼女たちの記憶に無き、あの戦争でさえも存在しなかった、黒い艦載機。

当然、彼女たちの記憶に、あの様な機体は存在しない。

ならば……あれは……

そう考えている内に、その艦載機は、烈風を超えるスピードで飛び回り、敵を次々に落としていく。

「すごい……!!」

眼を見開く飛龍。

更に、頭上へ抜けていく黒い艦載機。

その数、先ほどから来た機体と合わせて、十機。たった十機。

それでも、その恐ろしい性能故に、敵の艦載機は、まるで羊の様に逃げ回り、黒い艦載機は、狼の様にその敵を追い回す。

本当に、羊と狼の様だ。

その光景に啞然としているのは、何も赤城たちだけじゃない。

空母棲姫たちも、口をポカンと開けて、思わぬ奇襲に啞然としている。る。

だが、更に彼女たちを驚愕させる出来事が起きる。

空母棲姫たちの直上。そこから、一機の、今、上空で暴れまわっている黒い艦載機と対象的な真っ白い、雪の様な艦載機が上空から急降下。

そのスピードは、もはや常識を超えている程に、速い。

落下に身を任せるように、おそらく、かなり高い場所から降下を開始したのか、超高速で急降下してくる。

その数、実に二十!!

「!?!」

それに気付いた空母棲姫だが、時既に遅し!!

白い艦載機が機体と爆弾を切り離し、落下コースを離れていく。そして、落下による加重と、その爆弾自体が持つ爆発力が加算され、その爆弾は、敵空母群に直撃した瞬間、深くめり込むと同時に爆発を巻き起こす。

敵空母たちが悲鳴を上げる。

炎上して、もはや艦載機を飛ばすどころじゃなくなる。

そこへ、どこからともなく砲撃音。

それがヲ級たちに直撃。否応無く、轟沈させる。

さらには、どこからか飛んできた艦攻の流星一機が、魚雷を投下。

その魚雷が空母棲姫に直撃する。

またもや空母棲姫の断末魔。

そして、止めと言わんばかりに先ほどの白い艦載機が爆弾を投下。

そして轟沈させた。

その、余りにも呆気ない運びに、茫然として立ちすくす一同。

飛龍から赤城が、空を見上げる。

そこには、まるで凱旋するかの様に、飛び回る黒い艦載機と白い艦

載機。いや、黒い艦載機と白い艦爆だ。

「あの艦載機はいつたい……」

気付けば、周りにいたはずの敵の随伴艦全てが沈められていた。

ふと、上空を飛び回っていた二種類の艦載機たちが一斉に、赤城た

ちの後ろの方向へ飛んでいく。

そちらに視線を向けると、そこには、白銀の髪をなびかせ、黒と白

の艦載機たちの着艦作業をしている女性が一人。

もう一人、黒髪のおかつぱ髪で、カタパルトをモチーフとした髪飾

りを付けている女性が一人。

「お疲れ様。よく頑張ったわね」

白髪の女性は、そう言い、弓へと戻った黒い艦載機たちを、矢筒へ

戻す。

「あれは……翔鶴と羽黒？」

飛龍がそう呟く。

「あ、あれは！」

そこで、何かに気付く大鳳。

その肩には、黒河鎮守府の紋章、<sup>エンブレム</sup>桜に黒河の文字があった。

「じゃあ、あれは……」

そこで、赤城たちの姿を確認した翔鶴は、敬礼をする。

「黒河鎮守府所属、空母『翔鶴』。長旅を経て、応援にかけつけました」

「お、同じく、黒河鎮守府所属、重巡の『羽黒』です！」

そう言う、翔鶴と羽黒。

しばし茫然としていた赤城だが、すぐに我に返ると、敬礼を返す。

「横須賀鎮守府所属、空母『赤城』です。貴方たちの応援に感謝します。

しかし、今、状況は著しくは……」

「それなら大丈夫です。すでに、向かわせています」

「え？」

その言葉の意味を理解できていない赤城。

そんな赤城を他所に、翔鶴は、今瑞鶴がいるであろう方角を見るのだった。

「Shit!!」

金剛はそう言う。

「こんな所で、戦艦に出くわすなんて!？」

比叡がそう叫ぶ。

そう、今、金剛たち、陸上攻撃部隊は、偶然でくわした戦艦ル級改flagship二隻と夕級flagship二隻に追いかけていているのだ。

一方でこちらは大破した艦娘が複数いるうえに、ダメージを受けている艦娘も多い。その上に大破した艦娘を守りながら戦わなければならぬ。

万事休す!

「すみません、お姉様、私が被弾したばかりに……」

霧島が、申し訳なさそうにそう言う。

その眼鏡は片方が割れ、主砲は、全て破壊されている。もうすでに戦闘能力は失われている。

「stopネ霧島。今はそんな事いつている暇はアリマセン」

金剛はそう言うも、今、この状況を打開するのは難しい。

その中で、川内は悔しそうに歯を食いしばっていた。

(まだだ……)

川内は、拳を血が出てきそうなばかりに握り絞めていた。

(また、あの時と同じ……)

それは、那珂が沈んだ瞬間。

助ける事も叶わず、必死に伸ばしていた手を掴む事もできず、沈めてしまった、妹の姿。

その時の敵の編成は、今の敵と同じだった。

「くそ……これじゃあ電がレ級に向かっていった意味が無くなるじゃねえかよ!!」

摩耶がそう吐き捨てる。

「今は態勢を立て直しまシヨウ！榛名は霧島を、霞は天津風をかかえて下がってくだサイ！摩耶と鳥海、陽炎は後衛で援護をお願いします。あととは私と利根と川内で前に出て攪乱をします。急いで!!」

金剛がそう艦娘たちに命令した途端、川内が、いきなり駆け出す。

「うわああああああああああ!!」

「!? 川内!?!」

いきなり絶叫を挙げて、戦艦四隻に向かっていく川内。

まだ改二実装を施していない状態である上に単身で戦艦と(それでも戦えるかどうか分からないが)向かうなど、自殺にも等しい行為だ。

「だめデス！そんなに前に出ては……」

金剛が止めようとするが、川内の周りに水柱が立ち上る。

「ぐうあああああ!!」

更に上空で爆発。三式弾だ。

それを運よく掠る程度で済んだもの、それでも突撃をやめない川

内。

「やめなさい！川内！」

金剛がそう叫ぶ。

それでも止まらない川内。

「うわああああああああ!!」

もはや捨て身とも言おうべきその行動に、金剛は絶望を感じた。

その瞬間、突然、戦艦群にどこからか飛来してきた徹甲弾が直撃する。

『!?』

それに驚く一同。

そして、それでも突進をやめない川内を叱咤する声が響く。

「やめなさい川内！それで沈んだら、先に逝った那珂が悲しむよ！」

「ッ!」

それで我に返ったのか、急停止する川内。

そして、川内に背を向けて立つ影が一人。

「ふる・・・たか・・・？」

「うん、おまたせ川内」

重巡の古鷹だ。

さらに、別の方角から砲弾が敵戦艦たちに直撃する。

「当たりました！」

「良し！低練度でここまでやれば上出来よ！主砲、つて——

!!!」

さらに砲撃音。

そして直撃。

「あれは・・・!」

比叡が、その砲弾を撃った張本人の姿を見た途端、息を飲んだ。

「黒河鎮守府所属の山城です。ただ今より、貴艦らの援護に入ります！」

「同じく、黒河の霧島です！」

そう言う、山城と霧島は、再度主砲を発射。

それが、ル級二隻と夕級を一隻を庇う様に出た戦艦夕級が全て受け

る事によつて、他三隻は被弾を免れ、逆に夕級は沈む。

それを見た残った夕級が怒りに顔を歪ませる。

そして、怒りをまき散らす様に叫ぶ。だが……

「——うるさいよ」

「!?!」

突如、脇腹に激痛が走る。

見ると、そこには、魚雷が突き刺さっており、更には、いつ接近したのか、白髪の帽子を被った少女の姿があった。

そして、爆発。

「ギャアアアア!?!」

「むう、やはりこれでは沈まないか」

不満そうな表情を作る少女。

「響!」

「うん、おまたせ」

響は、ずれた帽子を直しながら、川内の方へ向かう。

「金剛さん」

「え、あ、ハイ」

突然、古鷹に声をかけられた金剛は、ついびしと背を伸ばしてしまふ。

「私が合図したらそちらで一斉に砲撃してください!」

「……分かったネ!」

どうやら、すぐに意図を察したらしく、そう返事をする金剛。

「皆サン、斉射準備!」

比叡、榛名、摩耶、鳥海、利根が一斉に主砲を構える。

「霧島!今!」

「三式弾、つて——!!」

山城の号令で、三式弾を放つ霧島。

そして、ル級たちの中心で、その三式弾が爆発。

一瞬だけ、敵の視界を奪う。

「今です!」

「全砲門、Fire——!!!」

古鷹の合図で、金剛たちが一斉に砲撃。

その全てがル級たちに殺到し、全て沈めた。

「お疲れさまです」

「Congratulation! 助かったデース!」

戦闘が終わり、安堵の息をつく陸上攻撃部隊。

「改めて、黒河鎮守府所属、重巡の『古鷹』です」

「鎌倉所属の『金剛』デース!でも、今はそこまで時間は無いデース」

「ああ、電の事なら・・・」

と、響が後ろを向く。そこには・・・

「ごぼごぼごぼ・・・」

「しっかりとしてくれでち。これでも、初陣で運ぶのは結構きついのでち」

水面にうつ伏せにつかっているボロボロの電を、引き摺っている潜水艦の少女。

「電!?無事だったの!」

「まさか、もう一隻建造してたなんて誰が思ったか」

川内は声をあげて、古鷹が呆れた様にさういう。

その潜水艦の名は、伊号第五十八潜水艦。通称、伊58ゴイヤ。

時打が霧島建造直後に、長門を通して建造した艦娘の一人だ。

「全く。まさかコイツがレ級を単独撃破していたなんて誰が思うか」

と、伊58がそう悪態吐く。

「え?貴方たちが援護して倒したんじゃ・・・」

鳥海が何を言っているんだという様にさういかけると、山城があげない事実を口にする。

「電がたった一人で倒してたわ。私たちが来た頃には、もう決着をつけていた」

「しかも、心臓突き刺して、更に捻るというコンボつきでち」

と、伊58がさういながら電を仰向けにする。

「ごほ・・・電、レ級を撃破しました・・・がく」

寝転がりながら敬礼した途端に力尽きたかのように目を閉じていびきをかく電。

「マジかよ……」

「嘘でしょ……」

その報告を信じられないとでもいうように、表情を強張らせる摩耶と比叡。

「さあ。そろそろ機動部隊も仕事を終えている頃です」

「？ 報告では、戦艦棲姫の妨害で攻撃隊が発艦できないとか言っていたような……」

首を傾げる榛名。

「ああ、それなら、すでに対処したとの事で、もうすぐ飛行場姫の封殺に成功するそうよ」

霧島（黒）がそう答える。

「本当ですか!？」

陽炎がそう聞く。

「ええ」

「さあ、行きましょう！勝利を掴む為に！」

古鷹がそう言う。

「OK。皆サン！行きまショウ！」

そうして全身を始めた時、霧島（鎌）が霧島（黒）の服の袖を掴む。「？」

「霧島？」

それに首を傾げる榛名と霧島（黒）

「私はもう戦えません……ですから、貴方が代わりにお願いします」

そう言う霧島（鎌）。

霧島（黒）は、その手を握ると、こういった。

「はい。必ず」

「follow me！皆サン！ついてきて下さいネー！」

金剛の声が聞こえ、陸上攻撃部隊と、黒河艦隊が前進を始めた。



「……まあ、一応間に合ってくれたな」

「ひやひやした……」

と、腕を組んで脱力しながら椅子にもたれかかっている翔真と何故か冷や汗を流している時打。

実は、皐月が瑞鶴の戦いを、かなり分かりやすく実況してきたので、瑞鶴がダメージ受けたり血を吹き出したと、妙に真実味のある喋り方で言ってきたものだから焦らない訳が無い。

「敵の増援に機動部隊がくるなんて思ってもみなかった……」

「確かにそれは冷や冷やしたな」

と、デスクに突っ伏した状態でそういう時打に、その様な感想を述べる翔真。

そこで、時打は、この横須賀にくる前、執務室でした会話を思い出す。

「え？黒風と『白狼』<sup>はくろう</sup>が完成したら出撃しろって？」

「ああ。そうなんだ」

時打は、翔鶴に向かってそう言う。

白狼。

時打が考案した新たな艦爆だ。

性能は黒風と同じだ。ただ違うのは、爆弾を抱えている事と、区別をつけるために塗装が白いという事だ。

「何故、その様な？」

「ああ。まあ、保険といった所かな？」

と、時打はおどけるように言う。

「それで、お前にはその艦隊の旗艦を任せたい」

「はあ……」

「お前の艦隊指揮能力には、眼を張るものがある。この鎮守府でいえば一番だろう」

「そんな・・・一番だなんて・・・」

片手を頬にあてて、わずかばかり頬を紅潮させる翔鶴。

「それでなんだが・・・」

時打が、机を叩く。

すると、翔鶴の背後の扉が開く。

「え？」

振り向いて入って来た人物を確認すると、翔鶴は目を見開いた。

「実はもう一隻建造してたんだよね」

「・・・何やってるんですか・・・」

そこにいたのは、潜水艦の伊58だった。

「ちゃんと長門にはいつてあるよ」

「長門さんだけでしよう？」

「それでだ。今回言った編成にこいつも加えてやってくれ」

それに首を傾げる翔鶴。

「はあ・・・今回の編成には航空戦艦や駆逐艦がいるとはいえ、潜水艦に対処しきれないと考えて、私を保険として、七隻目として入れるらしいのでち」

と、伊58が代わりに説明する。

「そうなんですか・・・」

「ああ。黒風と白狼のテストもかねての事だが、なにしろ、ここの艦載機運用能力で、ブランクがあるとはいえ、瑞鶴に次ぐのがお前なんだよな」

「ハハハ・・・」

「聞くところによると、前任のクズが来る前は、瑞鶴以上に艦載機を扱うのが上手かったそうじゃないか」

「そんな、私は別に褒められるような事はしてませんよ」

「それでも俺が褒めたいんだよ。素直に受け取っておけ」

「・・・はい」

時打の言葉にしばし茫然とした翔鶴だったが、すぐに我に返ると、短く返事を返して俯く。

(甘酸っぱいでち)

その空気に、甘酸っぱさを感じる伊58だった……

その結果、なんとか誰かが沈む前に戦場に到着、お陰で戦況をひっくり返して勝利をもぎ取ったのだ。

「なんだと!？」

そこで久三の方で声があがる。

「電が単身でレ級を倒しただと!?!そんなバカな話があるか!？」

「ハア!？」

それを聞いた亜美が椅子を蹴っ飛ばす勢いで立ち上がる。

「それどういう意味よ!？」

「知らん!もう一度聞くぞ!本当に電が単身でレ級を倒したんだな!?!……………嘘を言うな!じゃあどうやったら駆逐艦一隻で艦隊を丸ごと圧縮した様な奴に勝てるんだ!？」

何やらギャーギャー喚いている久三。

そんな久三をそっちのけで豪真が時打に声をかける。

「…………流石だな」

「身に余る光栄です長官殿」

そこへ三鷹が面白い事を聞いたように報告する。

「長門が、単独で南方棲戦鬼を撃破、戦艦棲姫を撤退に追い込んだそうです」

「ハア!？」

更に亜美の信じられないような声。

「どうして黒河如きの艦娘が、二隻を倒せんのよ!？」

「ちなみに、こちらの方では、黒河の方から援軍が来て戦況をひっくり返してくれたぞ」

「な!？」

「なんだと!？」

翔真の何気ない発言に、更に驚愕する亜美と久三。

「なんで黒河の艦隊が…………ん?何!?!黒河からの援軍だと!?!お陰で敵戦

艦群を倒せた……ふざけるな!!」

ヘッドフォンを乱暴に机の上に置くと、ズカズカと時打に歩みよる久三。

そして、その胸倉を掴んで引き寄せる。

「どういう事だッ……!」

「どういう事って……事前にこつちが出撃命令を出してただけですが?」

「どうしてそんな事をする必要があつた? 答えろ!」

怒りに歪んだ顔でそう叫ぶ久三。

その様子に、呆れた様な表情をする時打。

「……なんだその顔は……」

「いや、滑稽だなって思つて」

「!? なんだと!?」

「だって、これで作戦は成功したも同然。そこに文句をいうなんて、滑稽という以外になにがあるんです?」

「ツツツツツ!! ブラックの癖にイ……!!」

「もう良いでしょう、岩倉提督」

時打が、久三の腕を掴む。

「!?」

その瞬間、ありえない力で腕を外され、押される。

「その戦いの勝因は、我が黒河鎮守府の艦娘の戦果。電のレ級撃破。長門の戦艦棲姫撤退。瑞鶴の戦艦棲姫の撃破。そして、我が黒河からの増援。特に最後なのは、なければ確実に赤城たちが沈んでいたし、金剛たちだつて陸上への攻撃どころじゃなくなる。それは、貴方だつて分かるでしょう?」

「ツ……貴様……」

「見苦しいぞ岩倉」

今にも時打に殴りかかりそうな久三に、豪真が声をかける。

「!? しかし……」

「見苦しいと言っている」

「ツ!?」

瞬間、豪真が放った気迫で押し黙る久三。

「結果良ければ全てよし。今回はこれで良いだろう」

「……分かりました」

不承不承といった様に、頷いた久三。

「時打」

「はい」

「瑞鶴の様子を報告させろ。大破した状態から、心意改装を使った筈だ。かかる負荷は大きい筈だ。すぐに超高速修復カプセルを用意させる」

「分かりました」

超高速修復カプセル。

艦娘は、そのダメージを、『入渠』と呼ばれる特殊な薬を混ぜた浴槽で治す。

早く治したい時は、単独出撃などの報酬で送られる事のある『高速修復材』なる薬品を投与する必要があるのだが、それでも、余りにも酷いダメージとなると、治すには、この『超高速修復カプセル』が必要となるのだ。

この超高速修復カプセルは、人間が入れるようなサイズのカプセルに、艦娘を入れて、その中で、通常の入渠よりも遥かに早いスピードでその艦娘が受けた傷を治すのだ。

これは、各地方の本営にしか存在しない代物で、それが無い鎮守府は、その艦娘のダメージを時間をかけて直さなければならぬのだ。最大で一年もかかるものもいるらしい。

「陸上攻撃部隊から報告。飛行場姫を、無事、撃破する事が出来たようです」

神代がその様に報告する。

それを聞いた一同は、途端にその場の空気が和んだ。

「轟沈者はゼロ。こちらの完全勝利ですね」

「それはこちらが無傷の時に言え。ダメージの多い艦娘はまだいるんだ。特に、電と瑞鶴はな」

喜ぶように言う三鷹を、そう咎める翔真。

そこで、豪真が立ち上がる。  
「さあ。宴の準備をしよう。盛大に迎えるんだ」

## 宴

ヒトナナマルマル——午後五時。

横須賀鎮守府の食堂には、大きく『祝！大規模作戦成功！』の文字が描かれている横断幕があった。

端には小さく『なのです！』の文字が。

そして、食堂はかなりの熱気に包まれていた。

それは勿論、自然現象などでは無く、気持ちの事だ。

「うめえ！酒うめえ!!」

「ちよ!?それ私のなんだけど!?!」

「アハハハ!!変な踊りー!」

と、こんな風にお祭り騒ぎ。

その様子をカウンター席で日本酒をゆっくりと飲んでいる時打。

「これはすごいですね・・・」

その隣で、時打の小さいサイズの酒器にその日本酒を注ぐ翔鶴。

「提督は爽酒が好きなんですネ」

「そこまでアルコールの高いものなんて飲まないよ。味が淡くて香りが少ないこれが俺にとっては何度良いんだ」

と、翔鶴が注いでくれた日本酒を口に運ぶ時打。

酔った様子は無い。

「時打」

「あ、翔真さん」

ふと、翔真が赤城を引き連れてやってくる。

「お前の所の明石からもらった設計図。今量産を進めている」

「お、それじゃあこれからの戦局も優位に進められそうですね」

「まだ油断はできない。敵が三式弾を使ってくる事が分かったんだ。そいつの技術が高くて、時代遅れの武器じゃその力を十分に発揮できないという事があるだろう?」

「そうですね」

そう会話をし、翔真は翔鶴をはさんで隣に座った。

そこで赤城は翔鶴に近付いた。

「今回はありがとうございます」

「あ、いえ、私はただ、提督の命令に……」

「それでも、助けられた事は事実です。本当にありがとうございます  
た」

と、深々と頭をさげる赤城。

「鳳翔、塾酒を頼む」

「はい、ただいま」

「あんたは相変わらず濃いものですよ」

「ふん。お前ならこれぐらい飲めるだろうっ」

「好みじゃないだけです」

そう言って、酒を一飲み。

ふと、時打は会場の一端に目を向ける。

そこには、もうすっかり元気になった瑞鶴が飛龍たちと楽しそうに  
談笑していた。

あの後、瑞鶴の心意改装は解除され、もともと負っていたダメージ  
に加え、心意改装の時に負ったダメージが加算されて、生死を彷徨う  
事になり、一刻を争う状態だったそうだ。

一応、マーシャル諸島近海に待機していた艦娘輸送船『だいは丸』の  
中にある入渠施設でなんとか命を保ちつつ、横須賀に着いた時にはす  
ぐさま超高速修復カプセルに放り込まれ、そのまま数時間はその中  
に。そして出された後も何時間かは眠っていたらしい。

この宴は、準備になぜかかなりの時間がかかったために、瑞鶴の参  
加が間に合ったのだ。

ちなみに、検査などは豪真のお陰で身体的健康状態を調べるだけ  
にとどまり、この宴が終われば、また心意改装や思想改装についての検  
査が行われるとの事。

「楽しそうですね」

隣の翔鶴が、瑞鶴を見ながらそう呟く。

「そうだな」



時打も、微笑みながら、そういうのだった。

一方でこちらは瑞鶴の方。

「あの後大変だったよ。逃げた戦艦棲姫の行方を捜して艦載機を飛ばしたんだよ」

「それで結局は見つからなかったけどね」

飛龍、蒼龍がそう言い、瑞鶴はそれに感心する。

「へえ、私が気絶している間にそんな事があったんだ」

「っていうか、一番大変だったのは瑞鶴の方なんだからね？」

「え？」

蒼龍の言葉に首を傾げる瑞鶴。

「だって、あの姿から戻った途端にお腹から大量の血を吹き出してさあ。どこの出血大サービスだよって思ったわよ一瞬」

「アハハ・・・それはどうもすみませんでした」

どうにも実感の無い瑞鶴。

それもそうだろう。

なにせ、その状態でずっと寝ていたのだから。

ただ、瑞鶴の中ではずっと疑問に思っている事が一つ。

それは当然、あの黒の忍び装束姿の事だ。

何故あんな姿になれたのか、未だに分からないのだ。

ただあの時思ったのは、守りたい。ただそれだけだった。

「ふう・・・考えても仕方がないか」

「何が仕方がないのかしら？」

「うわあ!？」

いきなり背後から声をかけられ、少し驚く瑞鶴。

「か、加賀さん・・・」

「随分な反応ね。少し傷付くわ」

「う・・・ごめんなさい」

項垂れる瑞鶴。

「別にいいわ」

そう言い、加賀はテーブルの上に自分のコップを置く。  
そのまま二人の間には沈黙が入る。

「・・・あの、加賀さ・・・」

「あの時は、ごめんなさい」

「え？」

突然の謝罪に戸惑う瑞鶴。

「私は何も出来なかった。貴方が傷付いている間に出来た事は、ただ安全な場所で飛行場姫を叩く事ぐらいだった。貴方の手助けなんて、一度も出来なかった」

「そ、そんな事・・・動けなかった私を運んでくれた。危険を冒してまでそうしてくれた事に、私は純粹にうれしいんですよ」

「でも・・・」

振り向いたの加賀の顔は、ほんのりと濡れていた。

「それだけしか出来なかった・・・」

「それだけでも、十分です」

瑞鶴は微笑み、加賀は浮かない表情をしている。

そこへ、飛龍がやってくる。からかいに。

「おー！加賀さんが珍しくデレてる〜！それも瑞鶴に」

「飛龍、それはどういう意味かしら？」

ゴゴゴ、という黒いオーラを出しながら、飛龍を睨む加賀。

「えーそのままの意味ですが？」

「良いわ飛龍、演習場に出なさい。みっちりやり合っただけあげるわ」

「じよ、冗談ですって」

加賀の気迫に怖気づく飛龍。

「アハハ・・・」

苦笑する瑞鶴に、蒼龍が声をかける。

「加賀さんはね、貴方が倒れた時に真っ先に向かったのよ。貴方の名前を何度も呼んで、そりゃあ大粒の涙をボロボロと零してたものだよ」

「そうなの？」

「うん」

「蒼龍！そんな出鱈目言わないで！あなたもシバくわよ！」

「ごめんなさいい」

飛龍にチヨークスリーパーをかけている加賀が蒼龍に向かってそう怒鳴る。

それに蒼龍はお気楽と言った感じ返事をする。

そんな風景に、つい微笑んでしまう瑞鶴。

こんな日常を、毎日送れたら。そう思ってしまう瑞鶴。

この戦いが終わってしまったら、自分たちはそうなってしまうのだろうか？

兵器として用済みとなり、解体されるか、それとも、人として生きるのか。

それは分からなかった。

だけど、今は、過去の事なんかよりも現在いまを生きる。

戦うべきは今。その信念をもって、奴らと戦えば良い。

瑞鶴は、そう思うのだった。

マルマルマルマル——深夜零時。

すつかり、食堂は静けさに満ちていた。

「すみませんね。手伝ってもらって。お酒も飲んでいるでしょうに」  
「なに、軽いものですよ」

台所にて、水道で皿を洗う時打。

そんな時打にお礼を言う、この横須賀鎮守府の鳳翔。

他にも、間宮や伊良湖が食器を拭いて片付けていた。

食堂では、床で寝ているものや机に突っ伏して寝ているものもいたり、すでに自室に戻っている者もいる。

「扶桑もすまないな」

「はい、何分と目が覚めてしまったので、これぐらいの事をするのが丁

度良いんです」

時打の言葉にそう答えるのが、横須賀の扶桑だ。

ちなみに、この山城はそんな扶桑の為に粘ろうとしたが、すでに酒が回っているらしく、ダウン。

今は床でだらしなく寝ている。

「はあ、不幸だわ・・・」

「そう言いながら手伝っているのはお前だろう?」

一方で、黒河の山城は、黒河の長門と共に、皿を運んでいた。

「それにしても、仕事が速すぎやしないか提督」

「え?」

「これが普通ですけど?」

長門の疑問に、時打だけでなく、何故か鳳翔まで首を傾げてくる。

「・・・いや、愚問だったか」

まあ、長門がそう思うのも仕方が無いだろう。

なんていったって、時打の担当していた皿の山がどんどんなくなっていき、高速で動く機械の様に早すぎるのだ。

「・・・ねえ、やっぱりうちの提督って、私ほどじゃないけど不幸な事を除けば、完璧超人のレットル貼られてもおかしくないんじゃない?」

「・・・そうだな」

山城の言葉に同意する長門。

「そういえば時打くん」

「ん?なんすか鳳翔さん」

ちなみに、何故時打がこの鳳翔の事はさん付けなのかというと、幾分かお世話になったからだ。

「瑞鶴の事はどうするんですか?」

「・・・」

時打は、皿を洗う手を止める事なく、黙る。

周りには、働く手を止めて、二人に注目する。

「・・・明日、長官の所に出向く事になってる。その時に、瑞鶴の意志で改装するかしないかを決める」

「そうですか・・・」

鳳翔はそれを聞くと、時打の洗った皿を拭くのを再開する。

それを聞いた長門たちも、すぐに動き始める。

誰もが、無言で、作業を行った。

食堂の机の一つ、そこで瑞鶴は、突っ伏した状態で、なにやら楽し

そうな表情で寝ていた。

「えへへ・・・かがしゅん・・・」

その様な寝言を呟いた。

我願うは、幸福を守る力

ヒトヒトマルマル——午前十一時。

大本営、長官室。

そこには、執務机に座る豪真、その傍らにボードをかかえている筑摩。

その豪真の正面の椅子に座っているのが瑞鶴。そしてその傍には時打と長門、そして翔鶴。

「ざっと、今、お前が疑問に思っていたあの変身の概要だ」

「そうですね……」

瑞鶴は、納得といった感じでそう呟く。

今回、瑞鶴が心意改装のみならず、思想改装なる変身を果たした事により、今、豪真と時打の間だけで議論とも呼べない議論をしていた。「そこで、お前には、改装せずに空母としての能力を保持したまま戦うか、それとも、改装をして、近接戦闘特化になって戦うか、お前の意思を聞きたい」

豪真が、そう瑞鶴に問う。

今回、心意改装によって、瑞鶴の一部始終ながらも、怒涛の連続攻撃が得意だという事が分かった。

ただ、問題は、瑞鶴の空母としての能力が失われるか否かにあった。あの変身で、瑞鶴は空母としての能力が使えるかどうかはわからなかった。

ただ、加賀の詳しい報告では、小太刀の鞘の上に、龍驤や飛鷹型などの陰陽術系の空母が使う様な巻物があったと言われている。

もしかしたら、瑞鶴は、改装しても空母としての能力を失わずに済むかもしれない。

だが、しれない、だ。

そういうのが残る保証など無い。

「……」

しばし考える瑞鶴。

「瑞鶴……」

「……」

翔鶴が心配そうに声をかける。

時打は、黙って瑞鶴を見つめる。

「……以前に、翔鶴姉が、誘拐された事がありました」

「ほう……」

ふと、語り出す瑞鶴。

「その時、自分の無力さを思い知りました。私に、陸上で戦う力なんて、そんなに、無いから……」

瑞鶴は、スカートの様な袴の裾を握りしめる。

「あの時もそうだった。接近されて、至近距離で砲撃を喰らった私を、あの人は、空襲から身を挺して守ってくれた。あの時、私が動けていれば……ううん、私が接近さえ許していなければ、あんな事にはならなかった……ッ!!」

瑞鶴の声が震える。

それには、確かな悔しさが滲み出ていた。

「だから……」

瑞鶴は、いつの間にか流していた涙を拭い、顔をあげ、確かな決意を持った表情で、豪真を向く。

「改装してください。皆を守る、力を下さい」

瑞鶴は、そう懇願する様に、豪真に言った。

「……それがお前の意思だな？」

「はい」

豪真の問いに、即答で返す瑞鶴。

ふう、と一息吐く豪真。

そして。

「……ついでに」

数時間後。

「改装、終了したそうです」

工廠にて、筑摩が妖精の言葉を通訳するように言った。

「どんな姿なんでしょうね・・・」

「さあな。それは俺にも分からない。どんな姿だったんだ？加賀」

「そうね・・・忍びなれども忍ばないって感じだったかしら？」

「どこの戦隊ものですか？」

翔鶴の疑問に、時打が加賀にふり、それに加賀が答え、その答えに突っ込みをいれる電。

「とにかく、これで白兵戦が可能な奴が長門も入れて三人か・・・」

「これからどんどん増えてきそうで、なんか怖いです・・・」

「それはその時に考えようぜ」

電の不安な声に、お気楽に答える時打。

「おーい！」

廊下の向こう側から、瑞鶴の声が聞こえてきた。

「あ、瑞鶴・・・あら」

翔鶴がその姿を認めた瞬間、少し戸惑ってしまった。

そこには・・・

「まんま蒼紫じゃねえかよ!？」

黒い忍び装束だというのは聞いていたが、それがまんま、人誅編の四乃森蒼紫の衣装なのだ。

「えっへへへ。どう?」

と、くるりと回ってみせる瑞鶴。

多少、アレンジが加わってみるも、遠くから見ればどこからどうみても四乃森蒼紫のコスプレだ。

「まあ、良いんじゃないか・・・?」

「え、ええ・・・」

「あはは・・・」

なんとも言えない感想を述べる時打と翔鶴と電。

「あの時は考える余裕は無かったけど・・・良いんじゃないかしら?」

「あ、加賀さんが珍しく褒めた」

「!？」



加賀の何気ない褒め言葉にニヤリと笑う瑞鶴。

そして加賀は自分の発言に気付いたのか、顔を赤くする。

「あ、あれは、その・・・」

「加賀さんがでーれたでれたー!」

「!? ま、待ちなさい!!」

他人に言いふらそうとする瑞鶴に、その瑞鶴を追いかける加賀。

「あ、行っちゃった・・・」

「すっかり仲が良くなりましたね、あの二人」

その二人の様子に、唾然とする電とくすりと笑う翔鶴。

「そうだな」

それに同情する様に、笑う時打。

——その時。

『——ヤハギ』

「!?」

突如脳裏に聞こえてきた声に声に出す事無く驚く時打。

「? どうかしたのです? お兄ちゃん」

そんな時打の様子に気付く電。

「ああ、いや、なんでもない・・・」

時打は、やるせない表情で答える。

その様に、翔鶴も首を傾げる。

「・・・なんだったんだ?」

自分の頭を抑えながら、そう呟く時打だった。

『——ヤハギ、ヤハギ、どこにいるの？ヤハギ』

その声は、時打の心に語り掛ける様に、彷徨う。

## 吹雪編

### 我欲するは闇夜の力

とある海域にて、激しい砲撃戦が繰り広げられていた。

「く！羽黒、そっちは任せたぞー！」

「は、はい！」

「瑞鳳、攻撃隊は出せるか!？」

「な、なんとか！」

「よし、初霜、時雨、吹雪！雷撃の用意だ！」

長門が、その様に命令をする。

「はい！」

「分かった！」

「いきます！」

それに答えるように、初霜、時雨、吹雪が雷撃の準備に入る。

「魚雷装填！……！！」

吹雪の号令で、三人は一齐に魚雷を放つ。

その魚雷は、一齐に敵深海棲艦の艦隊に真っすぐに突っ込んでいき、軽巡、駆逐艦に一隻づつ直撃する。

だが、当たったのが一発か二発だけだったらしく、轟沈にまでは追いつけなかった。

「瑞鳳！」

「はい！」

瑞鳳が弓を引き絞り、放つ。

その矢が無数に分裂し、艦攻『流星』へと変貌する。

そして、敵艦隊に真っすぐに飛んでいき、魚雷を海に投下。

すると魚雷は真っ直ぐに敵に突っ込んでいき、敵の空母の又級に直撃する。

又級は大破して、艦載機の発艦が出来なくなる。

「よし、これで……」

吹雪がそう声を漏らした途端、突然の砲撃音。

「!?」

ル級が砲撃してきたのだ。

その砲弾の射線には吹雪がいた。

「しまった!?!」

確実に当たる距離、避ける事も叶わない。

「吹雪!!」

「あ……」

だが、長門が吹雪と砲弾の間に入る。

そして、轟音が轟く。

「長門さああああああああああああああん!!!」

「時雨小破、羽黒中破、他は無傷で、長門は轟沈寸前の大破か……」

時打は、出された報告書を見て、そう呟く。

目の前には、長門を除く、今回の指令出撃ミッションに参加した艦娘たち。

「長門は入渠させてるから時期に回復するだろう。誰も沈まなかつた事が、なによりも嬉しい事だな」

時打は、そういうも、目の前の艦娘たちは浮かない顔をしていた。

特に、吹雪が。

「とりあえず、全員入渠して来い。ダメージ追ってない奴も、硝煙を落としてこい」

それを聞いた全員が、入渠に向かう。

「ふう……」

「どう思いますの?」

傍らの熊野がそう聞く。

「今回はなんとかクリアしたが、それでも、毎回のよう、長門が吹雪をかばって大破する事が多くなったな……」

「長門さん必殺の二重の極みも、接近しなければ成功しない代物ですしね……」

長門は、響夜から、破壊の極意である二重の極みを伝授してもらっている。

そのお陰で、例え接近戦に持ち込まれたとしても、その必殺の一撃が敵を文字通り玉砕する。

電も、牙突も使えるため、白兵戦についてはここではスペシャリストといえるだろう。

そして、瑞鶴だが、思想改装によって、四乃森蒼紫をイメージとして、超高速の連撃を得意とする『御庭番式小太刀二刀流』を習得しているだけでなく、空母としての能力を損なわずに済んでいるのだ。

陰陽系空母などが使っている巻物のようなもので、艦載機を飛ばせるようにしているのだ。

これはこれで頼もしい。

ふと、熊野が勝手にお茶を用意しながらある事を時打に聞いてきた。

「そういえば、これは、答えなくていいのですけど……」

「ん？なんだ？」

「貴方が、飛天童子の時に使っていた刀って、今、どこにあるんですの？」

瞬間、場の空気が凍った。

「~~~~~ツツツ?!?!?!」

背筋におぞましく這いまわる蛇を連想する熊野。

質問を間違えた。

それは間違いない。

(こ、殺される！)

ただだらと冷や汗を流し、後ろを振り向く事を断固として拒否する。

後ろを向いた瞬間、一瞬にしてその意識を刈り取られてしまうかも

しれない。

だが、その空気はすぐに熱を取り戻した。

「いや、すまない」

「ほ……」

思わず安堵の息を吐く熊野。

「俺が飛天童子の頃に使っていた刀、『影丸』は、金山市にある山にある無人の神社に納めてるんだ」

「そうなんですの？」

冷や汗を拭いながら、熊野がそう聞き返す。

「だけど、取りに行こうと思うなよ？あれは血を吸い過ぎてる。もうあれは、『妖刀』と呼んでも可笑しくない程の怨念を溜め込んでる」

「……」

持った本人である時打が言うと、妙に説得力がある。

「心得ましたわ」

「頼んだぞ……そして、そこで聞いている川内」

ビククウ!?

もし現実で効果音がつく事があったなら、このような音がついていただろう。

「絶対にいうなよ？」

「い、イエッサー！」

扉の向こうから、川内がその様に言った声が聞こえ、次にドタドタとした音が遠くに行ってしまう。

「全く……」

「誰かに言いふらしたりしそうだなアイツ」

「それは祈るしかないでしょう」

と、熊野は時打の座る執務机の上にお茶を入れた湯呑を置く。

「お、悪いな」

それを手にとり、一服する時打。

「それにしても……」

ふと、時打はある資料を一つ手に取る。

「これは一体なんなんだ……」

駆逐艦『吹雪』、思想改装の可能性有り。

心意に、淀みを発見せり。

改装に、願望に見合った武器が必要である。

「はあ……」

ぼすん、と自分のベッドに落ちるように倒れる吹雪。

「まただ……」

そう呟く吹雪。

長門が大破するのは、今日に限った事では無かった。

前回の単独出撃の時もそうだった。

吹雪に被弾しそうな砲弾を、全て長門が受け止めているのだ。

そのせいで、長門が轟沈寸前のダメージを負ったり、艦装をやられ

て戦闘能力を失ったり、そんな事が続いているのだ。

「これじゃあダメだ」

あの日約束した事。

自分が貴方を護るから。

あの日、長門が陸奥を失い、自暴自棄になっていた時に、吹雪が長

門に向かっていった、あの言葉。

これでは、その逆ではないか。

「駆逐艦の私じゃ……限界がある……」

仰向けの状態からむくりとおきあがる吹雪。

駆逐艦は、その機動力を生かして敵を攪乱する事が得意であり、敵艦に肉薄して雷撃を撃ち込む事にかなりの利点を持つ。

だが、小型艦というだけあって、装甲は薄い。

戦艦などに砲撃されればあっという間に大破に追い込まれる。

それを避ける為の機動力なのだが、敵の射撃にはかなり見栄の張る能力がある。

とにかく避ける先を読まれてそこを攻撃されるのがオチとなつてきているのだ。

ならどうすれば良い？

方法なら、この鎮守府に存在する。

白兵戦だ。

現在では、電、長門、瑞鶴の三人のみが可能。天龍も、そこそこ鍛えれば可能となるが、白兵戦による効果は高いといえるだろう。

とにかく、接近してしまえばあとはこっちのもの。

一撃で仕留める、あるいは短期で連撃を食らわせればそれで終わる。

幸い、一撃の破壊力は電と長門が、短期的に連撃を与えられるのが瑞鶴だ。

だが、自分にその様な力を手に入れられるのだろうか？

電の天野流、あるいは牙突は、長い年月をかけれ磨き上げられたものであり、その成果を自分が短期間で手に入れるのは無理だろう。もとより、力を欲する事に短気な吹雪はそこまで待つていられない。ならば長門の二重の極みは？これは殴る事に特化していて、もともと高い膂力が存在しなければならぬ技だ。

連発すれば骨が軋む様な技に、果たして自分が耐えられるか。

ならば残されているのは瑞鶴と同じ心意改装だろう。

憧れなら存在する。

時打だ。

あらゆる『速さ』を追求した飛天御剣流の使い手であり、今自分が思う、最強の存在だろう。

そして、暁から聞いた、彼の正体。

それは、四年前まで栄えていた、無法地帯金山市を支配していた、黄金連合を壊滅させ、反乱軍<sup>レジスタンス</sup>の頂点にたった存在。



その名は飛天童子。

子供にして三千人という黄金連合傘下の人間を殺し尽くし、そして、天下分け目の決戦の日『革命の日』にて、反乱軍の勝利と共に姿を消した人物。

それが彼だ。

……なお、これは吹雪の解釈なので、一部ずれている所があります。ご了承下さい。

カッコいいと思った。

闇に生きるダークヒーロー的な存在。

それでいて最強の存在。

誰にも、正体を見破られる事なく、ただ闇の中で敵を消していく。

この吹雪にとっては、それが何よりもカッコいいと思った。

ただ、今の彼は殺しから離れ、今の様に、自分たち艦娘の為に尽くしてくれている。

不殺の誓いの元に、自分たちの為に、陸で戦ってくれている。

海で戦う、自分たちの代わりに。

それが証拠に、誘拐された翔鶴を救い、大和と決闘をして、大和と

長門を仲直りさせた。

そんな彼に、吹雪は憧れを抱いた。

純粋な、彼の様な人間になりたいという願望が吹雪にはあった。

ただ、彼に憧れるだけではだめだ、と、ふと思ってしまった。

なら、何をすればいい？

それが見つからなかった。

「おなか、空いた」

ふとやってきた雑念を口にして、とりあえず今はその欲求に従い、立ち上がった吹雪。

食堂への道中だった。

「ねえねえ神通く」

「なんですか姉さん」

「提督が飛天童子の頃に使っていた刀の在り処あ、知ってる？」

ナンデスト？

その場で硬直する吹雪。

たった今、すれ違った川内姉妹の会話に聞き耳をたてる。

「……」

「ちよ!?神通!?なんで早歩きになるの!?!」

「離して姉さん私まだ生きていたい」

「だ、大丈夫だって!提督に聞かれなきや良いんだから」

「いやです死にたくない離して聞いたら殺されるから精神的にお願いだから」

「何もそこまで怯えなくていいじゃん!?!」

そこからしばらくモメて、やっと神通の方が折れた。

「金山市にあるんだって」

「金山市というと、提督が現役の頃に活動していた、あの?」

「そう!そこにある山の上にある神社に納めてあるんだって!」

「だからって取りにいかないですからね」

「分かってるって。ただ誰かに話したかっただけ。でね、その刀の銘は……」

「……」

「ちよ!?また……この!」

「きや!?!」

「刀の銘は『影丸』っていうんだって」

「……」

「そんなに落ち込まなくてもいいじゃん……」

そんな風に会話し、去っていく二人。

「……金山市の……山……」

その時、吹雪の中で、何かが渦巻いていた。

力を欲する欲望と、それはいけないと止める理性。

吹雪は、その心情のまま食堂へ向かった。

何を頼んだかは覚えていないが、ただ口の中が辛かった事は覚えていた。

そして、足は自然と自室へ。

部屋に戻れば、また風呂から戻ってきたのと同じように倒れる吹

雪。

そして、一言。

「…………長門さん…………」

## 消えた吹雪。 目的地は戒めの地

マルヨンマルマル——午前四時早朝。

艦娘は、まだ熟睡している筈なのに、一室だけ、ごそごそと音がする。

「これで、よし」

小声で、同室の艦娘を起こさないようにそう言う。

その姿は、半ズボンに白いTシャツの上にパーカーを着ている、という姿だった。

その背中に、小さな鞆を背負う。

「……」

ふと、彼女は、隣のベッドに寝る叢雲を見る。

もうすっかり熟睡しており、目覚める様子は無い。

その笑みからみて、余程楽しい夢を見ているようだ。

「んん、どうだあ、私の魚雷はあ……」

「……ごめんね」

彼女は、叢雲にそう一言呟き、部屋を出ていく。

夜の暗い廊下、何かと警戒して、大きな音を立てない様に、歩いていく。

そして外に出て、以前見てしまった瑞鶴が使っていた山の向こうにある街への抜け道。

その入り口であるマンホールの蓋を開け、中に入り、蓋を閉める。

そして、地下水道をしばらく歩いた所で、梯子が見え、そこを登っていき、上の蓋を開ける。

そこは江戸か明治の境かと思っただが、路地から出て、さらに感嘆する。

「うわあ……」

初めて見る街の風景に感嘆する吹雪。

まだ朝の四時という事もあって、人はいないが、それでも惹かれる所があった。

だが、そんなに街を見ている暇は無い。

「そうだ、駅」

吹雪は、駅に向かう。

迷わずに進めたのは、鎮守府にある電子機器室にあるパソコンで出した地図を頭の中に叩き込んでいたのが幸いしたようだ。

そして、駅つき、彼女は一度振り返る。

「……行ってきます」

そう一言呟き、彼女は、電車に乗り込んだ。

「……」

「えーっと、その、はい、確かに口にはしましたよ、はい、でもそれは神通だけで……あははは」

「もう一つのっけろ」

「はい」

「ひいひい!!」

執務室にて、川内は、どこから持ってきたのか、石抱と呼ばれる、日本の江戸時代より続く拷問器具の餌食にあっていた。

大きなギザギザのついた木の板に人間を正座で座らせ、その足の上に四角く切った石を乗せ、苦しめるものだ。

「ごめんなさいもう言いふらしたりしませんだから許してなんでもしますから奉仕といたしますからおねがいします」

「そこまで呪詛の様に言うなや……もういいぞ」

「あーらよっと」

川内の膝の上に乗っかっていた石の束を、響夜が二重の極みで破壊する。

「ううう……」

未だに足が痛いのか、地面にへたり込む川内。

一方で、この執務室に来ているのは、響夜、長門、瑞鶴、電、翔鶴、大淀の七人。

「なんて事だよ……まさか吹雪が……」

時打は、そう言う。

事の発端は、叢雲が時打を訪ねた事にあつた。

吹雪が朝っぱらからどこにもいないと言い、鎮守府中を探してもどこにもいなかった。

一日待てば戻ってくるだろうと思い、明日になってみても、吹雪は部屋に戻らなかった。

これはただ事じゃないと、本格的に探してみた所、吹雪の自室からある程度の服とリュックが無くなっている事に気付き、吹雪が自主的に出て行つたと推測。

そこで可能性として川内をとらえて、こうして罰という名の拷問をしたのだ。

「その兆候はあつたんじゃないのか？」

長門が、鋭い眼光で時打を睨む。

「ああ」

時打は、机の隅に置いていた一枚の書類を引き出す。

「この間の身体検査の結果。ここを見て見ろ」

「えつと……心意に淀みあり？改装に武器が必要？なにそれ」

瑞鶴が、その書類を見て、そう言う。

「なんでも思想改装にはいろいろあるみたいだな。これに書いてある通り、なにかしらの武器が必要らしいんだ。お前の場合は、変異系とって、もともと持っていたものがその願望に見合ったものに変化するっていう感じだ」

時打はそう説明する。

「そうになると、吹雪の奴が金山市に行ったのは、そこにあるお前の刀を

取りに行つたんじゃないかねえのか？」

響夜がそう予測する。

「……」

「な、なんだよ？」

そんな響夜を、時打は睨む。

「お前……俺の刀の事言つたっけ？」

「なあに、お前の事は調べさせてもらったぜ。飛天童子といえば金山市、爺さんから聞いた飛天童子の話では、お前街を出る時に刀を持たずに出てつたらしいな」

「そこまで……はあ、そうだよ」

響夜のいきさつに、観念した様に、時打は言い出す。

「確かに金山市には俺の現役時代の愛刀『影丸』がある。だけど、どうして吹雪はそれを欲しがったりなんてしたんだ……」

考え込む時打。

「確かに……」

一緒に考え込む翔鶴。

「……私の所為なのか……？」

ふと、長門がそう呟く。

「私が……吹雪に負い目を感じさせていたのか……だから、吹雪は……」

「長門」

声を震わせる長門に、時打が咎めるように声をかける。

「お前の行動は間違つていない。仲間を守るために身を挺する事は、間違つてはいないんだ。ただ、お前は傷付き過ぎたんだ。そこに悪いも良いも無い。勝手に自己嫌悪するのは良いが、今はこれからどうかを考えるんだ」

「そう……だな……ああ、すまない。取り乱したりして」

時打の言葉を聞いて、沈んでいた長門はもとの活気を取り戻す。

「さて、これからの事だが、もうある程度は決めている」

時打は、執務机から立ち上がる。

「吹雪を連れ戻しに行く。もう二日も経っている筈だから、すでにア

イツは金山市についてるかもしれない。だから、響夜、瑞鶴、長門に俺の四人で金山市に行く。電には悪いがここの主力の一人だから残って貰う。しばらく開けるから、ここの指揮は大淀に任せる。なるべく単独出撃には出るな。指令出撃にのみ出る。良いな？」

「分かりました」

時打の言葉にうなづく大淀。

「それから、鎮守府へ敵が攻撃してきたら戦闘面での事は大和に譲渡、大淀は戦況を伝える事に専念しろ」

時打は、そう言い、改めて一回を見渡す。

「行こう。手遅れになる前に」

「ここが、金山市・・・」

吹雪は、金山市の駅の前で立ち尽くしていた。

高いビルが並び、街には娯楽という娯楽を持つ施設が立ち並び、派手な服を着る人たちが多く。まさにリッチと言っても過言は無いその街の風景に、思わず絶句してしまう。

「ここに、司令官の刀が・・・」

「邪魔だ」

「あ!? すみません!」

後ろからその様に言われ、思わず避けて謝ってしまう吹雪。

こんな風に入りが入り乱れている所は、吹雪にとっては慣れないものだ。

「どきなさい」

「すみません」

「オラどけ」

「ひい」



「目障りだ」

「ごめんなさいごめんなさい」

初対面なのに容赦無く浴びせられる罵声に縮こまりながらも受け流し、道の隅に行く事が出来た吹雪。

「はあ．．．怖い」

なんとというか、随分と殺伐とした街だ。

金山市は、もともと暗黒都市と呼ばれていた無法地帯。

その風習が残っていても可笑しくは無い、のだが。

ふと、吹雪が人混みを避けながら歩いていた所。

「ん？これは．．．」

ふと本屋にあったある本に目をつける吹雪。

「これは．．．」

本の題名は『飛天童子』だった。

試しに開いて読んでみると。

「飛天童子、その正体は、まだ年端もいかない少女だという事．．．少女!？」

その内容に驚く吹雪。

確かに、時打の容姿は美男子のそれであり、髪もかなりサラサラだ。

伸ばせば女性と見間違われてもおかしくは無いだろう。

「当時は、彼女の存在で反乱軍は子供さえも使う非道な集団だと思われていたがそうでは無く、彼女は独自に活動していた事が分かった。事実、彼女はたった一人で戦っていた事が判明していた．．．一人で．．．？」

吹雪は、さらに読み進める。

「僅かばかりにも反乱軍の人間を殺していた事も、革命の日移行にも分かっており、彼女は決して反乱軍の仲間では無かったという事が分かった。しかし、反乱軍決起の際、彼女は反乱軍の側についていた事が判明していた」

更に、更に読み進める。

「革命の日の三か月前、彼女には、義理の姉と呼べる人物がいたという事も判明。その名前は、『加賀』．．．て、え．．．」

思考が止まる。

加賀

もしかしたら別人かもしれない。

名前が同じというだけで、もしかしたら、別人なのかもしれない。「苗字は無い。ただ分かっている事は、彼女は、とある組織が飛天童子を殺そうとして計画で、その実行中、彼女が飛天童子を庇い、死亡したという事だけ。その墓は金山市の第三墓地にあるとされている。その後の一週間は、飛天童子が活動していない事から、かなりの精神的ダメージがあつたという事が分かる……」

ぱたん、と、吹雪はその本を閉じた。

「……行こうか」

吹雪はそうつぶやき、歩き出す。

こればかりは、本人の口から聞いた方がいいだろう。

金山市には、一つだけ、開発されていない山がある。

その理由としては金山市の自然破壊的な開発に業を煮やした政府が絶対死守的な行為に出てどうにか開発を止める事ができたというのが大きい。

もうすでに夏である上に、ビル群が多いために、こういう都会で多いヒートアイランド現象もある為に、金山市の気温がかなりの高温となっているのだ

なので、吹雪はすっかり汗だくとなっている。

「はあ……はあ……きつい……」

途中、自販機で買ったミネラルウォーターを飲み干しながら、そういう吹雪。

そして、目の前にそびえ立つ緑が残る山、『美濃柱山』みのはしらやまの山道の前に立つ。

「ここが……」

しばし見上げていた吹雪だったが、すぐに意を決した様な表情になり、いざ入ろうとした時。

「ちよつとその君」

突然、後ろから声をかけられた。

「そこに入るのはやめておいた方がいいよ」

「……私ですか？」

振り向くと、そこには、なんだか頼りなさそうな顔立ちをした男性がたっていた。

「そう、君だよ。そこに入るのはやめておいた方がいいよ。なんてたつて、こここの辺りで有力な組織が管理してる山だからね。不要に入ると、すぐに捕まって拷問の対象になるよ」

「……」

すらすらと言う彼の言葉に、躊躇いも無い事から、どうにも真実味を感じてしまう吹雪。

吹雪は、そんな彼から視線を外し、山の方を見る。

もとより、刀を一目見ようと思つて、黙つて鎮守府を出てきた身。

そこで成果なんて無しに帰れる訳が無い。

とにかく、今は引く。

「分かりました」

「分かってくれるとうれしいよ。その様子だと、長旅で疲れてるようだね」

「……」

なんて目ざとい。

確かに吹雪は関東からここまで三時間も乗り換えに乗り換えを繰り返し、時には、新幹線の中でずっと座りばなしで、遊び道具などを置いてきた事で暇を潰す事も出来ず、疲労が溜まる一方のままここに来たのだ。

「良かったら、僕の家に来ないかい？まあ、僕もこの辺りにある組の一

人なんだけどね」

そうおどけるように笑う男性。

「そうだ。まだ名前を言ってなかったね。僕は弘馬ひろま。清松きよまつ。君は？」

「吹雪です。よろしくお願いします」

ぺこりとお辞儀をする吹雪。

「こちらこそよろしく。じゃあ、早速ついてきてくれ」

男性、清松についていく吹雪。

歩いたのは、ほんの少し歩いた程度で、大通りの一つにある大きな賭博場の前に案内された。

「やあ、今帰ったよ」

「おう清松！」

店に入ると、早速、清松に声をかける者が一人。

「この主任マスターともいえる巨漢の髭を生やした男がウイスキーを出しながらそう言う。

「んん？どうしたその女の子は？」

「ああ、山に入ろうとしてたから引き留めてあげたんだ。かなりお疲れの様子だから、ジュースの一つでも出してくれないか？」

「山に……いや、後で聞くとしようか。おい嬢ちゃん！こっちに來な。なんか出してやるよ」

「は、はい」

クーラーが効いていて、涼しいのを感じながら、吹雪はカウンター席に座る。

そこへ明るい橙色の液体、オレンジジュースをガラスのコップに入れて出される。

「あ、ありがとうございます」

それを、喉が渴いていたのが一息に飲み干す吹雪。

「ふう……ああ、おいし」

「ガハハハ！いい飲みっぷりじゃねえか！ほれ、こいつはサービスだ」と、出されたのはごく普通のショートケーキだった。

「わあ、ありがとうございます！」

「良いつて事よ」

丁度、お腹が空いていたのでこれはありがたい。  
手を合わせて行儀良く頂きますと言い、ケーキに齧り付く吹雪。

「なあ清松」

「なんですか、重信しげのぶさん」

清松に、巨漢の男、御神楽みかぐら 重信しげのぶは声をかける。

「あの嬢ちゃん。本当に山に入ろうとしてたんだな？」

「ええ。ずんずんと山に向かって歩いて行ってきましたよ。あと一歩でも山に踏み込んでたらどうなっていたか・・・」

「ああ。あの人、あの刀だけは何が何でも守ろうとするからな。誰にも取られたくないんだろうよ。時打の刀をよ」

重信は、そう呟いた。

ふと、オオ!!という歓声が響いた。

「なんだ？」

「どうやら、ルーレットの方で何かあった様ですね」

見るとそこには、沢山の人だかりができていた。

「ん？」

そこへ、吹雪が興味深そうに向かっけていってるのが見えた。

「す、すみません・・・あ」

そこで吹雪が眼にしたもの。

それは、大量のチップを所有している男と、どうやら負けて根こそぎ持っていかれた様子の男がいた。

「くそ、なんで・・・」

「ハッハッハー! どうやら運は俺に味方してくれたみたいだな!」

「も、もう一回だ!」

「良いだろう!」

と、またゲームを始めようとしている男二人。

その時、吹雪は素早くあたりを見回した。

そして、隣にいた男のポケットに手を突っ込み、すばやくチップを五枚抜き出す。

それに気付かぬ隣の男。どうやら、あまりにもこのゲームが面白いのか、気付いていないようである。

「あ、あの！」

吹雪が声をあげる。

視線が一斉に吹雪に向く。

「私も参加してもよろしいでしょうか？」

会場がどよめく。

「な!？」

「おお!?!度胸あるじゃねえか!」

それを遠目から見ていた清松と重信がその様に声を漏らす。

「君は・・・」

「私にもやらせてください。一回だけです」

そう言つて、吹雪は、ルーレットテーブル、赤の十九番にその抜き

出した五枚のチップを叩き着ける様に置く。

「赤の十九番。これをお願いします」

あまりにも大胆な行為に啞然とする一同。

「ハッハッハー!ディーラー、彼女も参加させてあげたまえ!ちよつとした体験だ!良いだろう!」

「ちよ!?!何勝手に・・・」

「お願いします」

大金を持つ派手な服の男の言葉に、反論する絶賛負け続けの男だったが、吹雪がそれに割り込んで更に懇願してきたので、ディーラーは仕方ないといった風に頷いた。

「分かりました、お嬢さん、貴方の参加を受け入れます」

「ありがとうございます」

「では、席にお座りください」

ディーラーにそう言われ、椅子に座る吹雪。

「おー!結構可愛いじゃねえか!」

「頑張れよー!」

周りからの応援。

それに若干のプレッシャーを感じながらも、吹雪は、ルーレットを凝視する。

そして、ディーラーがベルを鳴らし、賭けベットの開始を知らせる。

「赤だ。赤の二十五番！」

「そうか、じゃあ俺は黒の十三番だ」

と、負け男は残りの掛け金を全て置き、もう片方の男は挑発するかのようになんともその数字に置く。

全員、掛け金が三十六倍になる一目賭けだ。

ディーラーが、全員が賭け金を置いたのを確認し、ルーレットのホイールを回す。そして、金属のボールを、それとは反対方向に投げる。

「かけ金の追加、または変更を」

ディーラーがそう言う。

「このままで」

「俺もこのままで」

「・・・」

男二人はそう言うも、吹雪だけが何も言わない。

ただただ、回るルーレットを見る。

「お嬢さん、もうよろしいですか？」

「少し待ってください」

吹雪はそう言い、じつとルーレットを凝視する。

「ん？」

ふと、清松は、そんな吹雪の様子に、ある光景をフラッシュバックさせる。

「あの子・・・」

清松が、そう呟いた時、吹雪は、極限にまで集中していた。

ボールの周りがだんだんと遅くなり、回転するホイールも遅くなる。

（これは・・・！！）

吹雪は、ボールがどこに入るのかを演算する。

そして・・・

「変更します。赤の十九番から、赤の十四番へ」

『!?!』

それを聞いた会場の一同がどよめいた。

「分かりました」

だが、ディーラーは同様した様子などなく、吹雪の置いた五枚のチップを、赤の十九番から赤の十四番に動かす。

一定の時間が経過し、ディーラーが、ベッドの終了を宣言する。

そして、ボールが、ポケットに落ちる。

その数字は・・・

「赤の十四番」

「な!?!」

『オオオオオ!!!』

まさかの大当たり。

それに驚く男二人を他所に、周りの人間が歓声を上げる。

「すげえよ嬢ちゃん!」

「まさか当てちまうなんて」

「もの凄い強運の持ち主だなおい!」

「あわわ・・・」

周りからの褒め言葉に困惑してしまう吹雪。

そして、眼の前に、先ほどだしたチップの三十六倍の金額のチップが出される。

「わあ!?!」

一方で、負けた二人というと・・・

「負けた・・・また負けた・・・」

負け続けていた男は完全に折れていた。

「く、やるな。だが、勝負はこれからだ!」

一方で、派手な男はどうやらまだまだ続けるらしい。

「・・・あれ、偶然と思うか?」

「いや、必然だ」

重信と清松が、そういう。

吹雪はあの時、ルーレットを見て、ホイールとボールの動きを見て、どのポケットに入るのかを予測したのだ。



その姿は、間違いなく……

「もしかしたら、時打くんの愛弟子だったりしてね」

「まさかな。あいつは自分の飛天御剣流を誰かに教える事はしねえよ」

重信は、そんな事あるかともいう様にそう言う。

「単に似てるってだけだろ？」

「そうだね。そうなのかもしれない」

清松は、そう呟き、ウーロン茶を飲んだ。

その視線の先では、吹雪が目の前の男を圧倒していた。

回転しだしてからの変更で、必ずヒットするという荒業を連続で成功させていた。

「ああ、楽しみました……」

「君の様な年の女の子がするような事じゃないと思うんだけどな……」

カウンター席で、満足そうな笑みを浮かべる吹雪に、若干引き気味な苦笑いを浮かべる清松。

「しつつかし、嬢ちゃん、中々の運の持ち主だな」

「いえ、ただボールとホイールの動きを見て、どこに入るのかを予測しただけですから」

と、重信の褒め言葉に何でもない様に答える吹雪に、顔を引き攣らせる清松と重信。

(この子やっぱり……)

清松は、そんな吹雪を見て、かつて自分が殺そうとした少年の顔を思い浮かべる。

最も、その時はアツサリと返り討ちにあって、命からがら逃げる事ができたが。

「さて……これどうしましょう……」

と、吹雪は、先ほどボコボコにした男から分捕った大きな黒い革の

カバンの中に納まっている大量のチップを見る。

「何って、金に戻せばいいだろ？」

「そんな簡単に言わないで下さいよ。これでもし盗まれたりしたら、少なからずシヨック受けますよ」

「そりゃあこれだけの大金をもつてたらな」

重信はそう言い、吹雪に注ぎなおしたオレンジジュースを入れた。

「そういえば一つ聞きたかったんだけど・・・」

「はい、なんででしょう？」

「どうしてこの街に来ようと思ったんだい？」

「え？」

きよとんとする吹雪。

「その恰好からみて、君の街の人間じゃない。それは、ずっとこの街で生活してきた僕だからこそ分かる事だ。君も知ってるだろう。この街は、かつて暗黒都市と呼ばれた元無法地帯。その風習は、今でも残っているんだ。まだ殺伐として空気も残ってるし、極道の組織の間での抗争も終わっちゃいない。そんな危険な所で、どうして君は一人でここに来ようと思ったんだい？」

「・・・」

黙りこくる吹雪。

その表情には、陰りがあつた。

「・・・私」

だが、何かを決めたのか、俯いたまま語り出す。

「実は、ある場所で戦ってた、兵士、ていうのかな。とにかく、そんな事をやってたんです。でも、私が原因でいつも傷付く人がいるんです。私がつと強かったら、相手の攻撃にいち早く対応できていたら、そんな風に思ってしまうんです」

「だから、力を求めに、あの山の噂を聞いて、ここに來たって事なんだね」

清松が、そう続けた。

「はい」

吹雪は、それを、否定する事なく肯定した。

「馬鹿ですよ。ただの噂にすぎると、強くなる確証も無いのに。でも、待っていられなくて、もう、その人が傷付いていくのも見えてられなくて……」

吹雪は、自虐する様に笑う。

「……僕は、君と同じ様な子を見た事あるよ」

「……え？」

いきなり語り出した清松に、困惑する吹雪。

「その子は、ある大切なものを失って、しばらく、動かないでそのままだった事があるんだ。でも、ある日、彼は、何かを思い出した様に、立ち上がって、前を向いて、また歩き始めたんだ。その、失った大切な人の言葉を思い出してね」

「……」

しばし茫然とする吹雪。

清松は、それに構わず語り続ける。

「彼はその人の言葉を信じて、この街を去っていった。まだみぬ笑顔を守りに行くためにね。最近、連絡すら寄越してくれないけど」

「そう……なんですか……」

苦笑いを浮かべる清松に、吹雪は、そう答えた。

「ただ、あの山にある刀は本当にやめておいた方が良く。あの刀の持ち主と、あの山を管理してる組織の御頭は、かなり仲が良かったからね。その組織の御頭は、あの刀を何としてでも守り通すつもりでいるから、面談して懇願しても無駄だよ」

「そうですか。はあ……みんなに怒られるなあ……」

と、遠い眼をする吹雪。

「まあ、今はパーツと飲もうぜ。お前の勝利祝いだ！」

「あ、はい！ありがとうございます！」

重信のそんな言葉に嬉しそうに乗っかる吹雪。

だが、彼ら、いや、彼女は知らなかった。

「ほう、ここが、あの飛天童子の刀がある街か」

自分に恐ろしい試練が待っている事に。

## 迫りくる刃

金山市実森区<sup>みのもり</sup>。

そこはこの街で唯一の緑を残す、美濃柱山の管理を任されている組織のある街。

そこにある『剛玄組』の立札のある、一つの大きなビル。

その組長室に、普通の成人男性の様な体格をした、スーツの男が、誰かと電話をしていた。

「そうか、清松たちがその少女を保護したんだな。なら結構。その少女の事については彼らに任せるとしよう」

男は、そう言い、電話を切る。

「とうとうそんな少女にまで噂される代物となったか」

「あの子も、当時は女の子と勘違いされていましたけどね」

ふと、背後から凜とした女性の声が聞こえた。

振り向くと、そこには、一人の綺麗な女性がたっていた。

長い黒髪を先でそろえ、その灰色のかかった黒い瞳は、なんでも見透かしていそうだった。

そして、その手に抱きかかえているもの。

それは、赤ん坊だった。しかもスヤスヤと規則正しい寝息をたてて。

「全く、あれは誰もが振るえるような代物じゃないぞ」

「それは私でも重々承知しておりますよ」

やれやれと言った感じため息をつく男と、その妻らしき女性はふっと笑う。

「アイツがこの街を去って、もう五年。街は未だにその頃の風習が残っている。組織間での抗争は絶えず、この街で起き続けている。警察が介入して幾分か楽になったが、それでも、裏で起きていることまでは対処できていない」

「そうね。こんな事をいうのは、気が引けるけど、あの子が、この街に残っていてくれたら・・・」

「もう、子供の手を借りるのはやめようと言っただろう。彼が、自ら自

分の人生を捨てたとしても、俺たちは、もうアイツの様な未来ある奴の人生を奪ってはいけないんだ」

男は、女の腕の中で眠る赤子の頬に触れる。

そして、幸せそうに、笑みを作る。

「そうね・・・」

女が、表情を曇らせる。

その時だった。

「御頭！」

バアアン!!と部屋のドアが開け放たれる。

「ちよつと、この子が起きちゃうでしょう」

「す、すみません・・・つて、それどころじゃないですよ！」

女に咎められ、一度は沈みかけた威勢を、思い出す様に、取り戻し、声を若干抑え込んだ声で御頭と呼ばれた男に向かってそう言う。

「どうしたんだ。そんなに慌てて」

「それが、駅を警備していた同僚から連絡が来て・・・戻って、戻って来たんですよ！彼が、アイツが！」

そして、彼らにとつて懐かしい、完全に意表を突かれる名前を口にした。

「時打が、ここに戻って来たんですよ！」

「久しぶりだな」

金山市の駅前で、時打はそう呟く。

「ここが・・・」

「金山市か。滅茶苦茶リツチな所じゃねえか」

「・・・」

その街並みに、驚きを隠せていない瑞鶴、響夜、長門。

都会のように、あちこちに行き交い、車が大量に道路を横切つていく。

時打は、その街を見て、何か、回想に浸っているようにボーっとしている。

その様子に気付く響夜。

そこで、響夜は時打の背中を思いつきり叩く。

「うお!?!」

「さーって！早速吹雪を探しますか！この事はお前が一番良く知ってるだろ？何か心当たりとかねえのか？」

「心当たりねえ・・・知り合いの経営してる賭博場だとか、貧困街の住人だとか色々あるけど・・・確実なのはあそこか・・・」

「あそこってどこなの？提督さんむぐ!?!」

突如瑞鶴の口を塞ぐ時打。

「むぐぐ!?!むぐぐ!?!」

「バカ野郎。ここで俺の身分晒す気か？」

「ッ!?!」

時打の言葉で気付いたのか、暴れるのをやめる瑞鶴。

それを確認した時打は、瑞鶴の口から手を離す。

「ごめん、てい・・・時打さん」

「それでよし。さて、じゃあ、まずは知り合いの酒屋から行く事にしようか」

「酒屋？そんな所に通ってたのか？」

「いっとくけど酒を飲み始めたのは十五の時だぞ。この時はまだ飲んですらいねえよ」

「十五で飲み始める貴方もどうかと思うぞ」

時打の言葉に疑問を持つ響夜に、時打は弁解するようにそう言い、そんな時打をジト目で見える長門。

「とにかく、早速行こうか」

「おう」

「ああ」

「はい」

そうして歩きだした。

吹雪が泊まっている賭博場『金龍』きんりゆう。

その楽屋にて、吹雪はチップから変換された大金に囲まれながら、いつものセーラー服に着替えていた。

その理由としては、金山市に來たのは昨日。

そして寝巻から着替えたかったからだ。

「ふう、これで良し！」

ぐ、と軽くガッツポーズをする吹雪。

「吹雪ちゃん、もういいかい？」

「あ、もういいですよ」

吹雪がそう返事をする、入って來たのは清松だった。

「すみません、楽屋の一つを貰ってしまつて」

「良いんだよ。困つてる子には優しくしないとね」

そう微笑む清松。

「それにしても、どうしてセーラー服？」

「え、ああと……ふ、服を買うとか、そういうの考えた事なかった言いますかなんと言いますか……」

「そうなんだ……じゃあ、服とか買いに行く？」

「いえ、良いですよそこまでして貰わなくても。それに、帰つてからでも、いくらでも選べる時間があります」

「そっか。早く帰らないといけないもんね」

寂しそうに言う清松。

吹雪は、清松に、夏休みという名目上の旅行（武者修行）という事でここにきていると言つたのだ。

そして、その終わりの日が近いという事で、その残りの時間を楽しもうとしている事になっている。



「この大金はどうするの?」

「それは後で考えます」

吹雪はすでに考えるのを放棄していた。

「そ、そうなんだ……」

顔を引きつらせている清松を他所に、ふと、吹雪は窓の外を見た。

「……」

——今、彼らは来ているのか……

もうすでに一日。

かれらがとつくにこの街に来ていても可笑しくないのだ。

(怒られちゃうかな……)

そう思う吹雪だった……

ヒトヒトサンニー——午前十一時三十二分。

居酒屋『b a i l l a d e』

そこに努めるのは一人。

元々長い髪を、丸めるようにして首のあたりで結った髪型をした女性  
性が一人経営していた。

「♪」

鼻歌を歌いながら、誰もいないカウンター席を台拭きで拭くその女性。

名前は『宮川 真由美』。

あまり人気の無い飲酒店で働く独り身の女性だ。

カウンター席を全て吹き終わった頃、扉が開く。

「あ、いらっしやいませ……」

そこで絶句する。

その人物が、どうにも見覚えのある人物だったからだ。

ただそれだけだったら良かった。

本当なら、その人物は、ここには戻ってこない筈だからだ。

「ど、どうも、真由美さん……」

「時打くん……?」

「まさか貴方が戻ってくるなんて」

「まず寄る所といたらここしかないからな」

と、時打は出されたウーロン茶を飲む。

「それに、結構楽しくやってそうじゃない。提督業」

「あはは……」

真由美の言葉に、視線を右に動かす時打。

そこには、静かにお茶を飲む長門と瑞鶴と響夜の姿があった。

そこでふと、長門は真由美にたずねた。

「て、天野さんと貴方は、以前はどのような関係だったのですか?」

「関係、ねえ……」

「特に大きな事は無い。ただこの人が元反乱軍だったって事だ」

「そうなのか?」

その答えに意外そうに答える響夜。

「まあな」

「この子、あの時は本当に受け答えが上手でね」

「会話は苦手だった筈だったんが……」

「貴方が知らないだけよ」

ジト目で見ると時打を他所に真由美がそう言う。

「しっかし、結構成長したわね」

「もともと成長期には入ってなかったからな」

真由美の言葉に、そう返してウーロン茶を飲む。

「それで、ここに来たのは、何か理由があるんでしょう?」

「ああ」

時打は、グレーのパーカーのポケットから、二枚の写真を取り出す。

そこには、黒髪で、ポニーテール。服装はセーラー服の少女の正面からの写真と、横から取った写真だ。

「この女の子を見かけなかったか？」

「いえ…昨日も今日もここで働いてたから、外に出る事なんてなかったから……」

「そうか、ありがとう」

そう言つて

写真をしまう時打。

「……その子、貴方の妹？」

「まさか、コイツのだよ」

「ハア!？」

真由美の疑問に、何故か長門を指さしながらそういう時打。

当然、長門は意表を突かれたので驚くのは当然。

「ななななにいつてるんだ貴方はア!？」

「だって、その方が都合がいいだろ？」

「都合がいいとかの問題じゃなああああ!!!」

大声を張り上げる長門。

「そういえば、貴方たちの名前聞いてなかったわね」

「う」

そこでうめき声を出す長門と瑞鶴。

彼女たちは艦娘。

本来ならこんな所にはいけないのだ。

だから、ここで彼女たちの身分をさらす訳には……

「ああ、この黒髪ロングの奴は相良さがら 長門で、こっちのツインテールの

方は四乃森しのもり 瑞鶴だ」

と、さらりと偽名を述べる時打。

「ごっほえっほごっほ!？」

それに驚いて、飲んでいたお茶が肺に入つて咳き込んでしまう長門と瑞鶴。

「あら、そうなの？よろしくね、相良さん、四乃森さん」

「え、ええ。あはは……」

「どうも……」

苦笑する二人。

まさかの偽名に困惑し、かつそれで通ったから混乱せずにはいられない。

「一体いつ考えてたんだ？」

「え？出発する時にはもうとっくにおもいついてたが？」

響夜の言葉になんでもないともいう様に言う。

「ふふ、良い仲間ができたわね」

真由美が、その様に呟く。

「・・・ああ」

それに、頷く時打。

その時だった。

不意にがちやりと、部屋のドアが開け放たれる。

そこへ視線を向ける一同。

すると、そろそろと入ってくる黒スーツの男たち。定番の如く、サングラスをかけている。

思わず立ち上がって警戒する四人。

瑞鶴は、シオルダーバックから出ている二本の紫の包みに包まれている棒に、それぞれに両手を触れる数センチ手前で止め、響夜と長門はいつでも拳を撃ち出せるように身構え、時打は背に背負っていた逆刃刀を腰のあたりに持つ。

たった数秒で一触即発。

だが、真由美だけは違った。

そして、黒スーツの男たちに続いて入って来た男によって、その均衡は崩れる事になった。

「貴方は・・・」

その人物を見て、眼を見開く時打。

「え？」

「知り合いなのか？」

瑞鶴と響夜がそう意外そうに言う。

「・・・久しぶりだな、時打」

「随分と立派になられたもので、剛玄さん」  
警戒を解く時打。

「なに、こんなもの。お前がいた時に比べれば、楽な立場だ」  
ふ、と笑う剛玄と呼ばれた男。

「なあ時打……この人だれ？」

「かつて、反乱軍のリーダーを務めていた人だよ。名前は剛玄ごうげん 勝義かつよし」  
時打が響夜に向かってそう言う。

「そ、それじゃあ、ていと……時打さんの元上司？」

「いや、上司っていう程でもない。単なる友人としての関係だ」  
瑞鶴の疑問に、剛玄は、そう答える。

そこで、時打は剛玄に歩み寄る。

ボディーガードらしき人物は、躊躇いなく時打に道をあける。

時打が前にたつと、その人物が、かなりの長身だという事が見て取れる。

「丁度良かった。頼みたい事があったんだ」

「そうか。ただ、その前に……」

剛玄はそう言い、入り口の方に視線を向ける。

すると、扉の方から勢いよく飛びついてくる人物が一人。

「時打くーん！」

「うわ!？」

黒い髪をなびかせて時打に飛びついてくる女性。

「「な!？」」

思わず声をあげてしまう三人。

「会いたかったよー！」

「ちよ!?! 冴さん!?! 頭をそんなわしやわしやかきまわさないで……う  
おおお!？」

その豊富な胸に顔を埋められながら、頭をわしやわしやとかき回される時打。

「い、いい加減にしろー！」

「あ」

なんとか持ち前の腕力で冴と呼んだ女性を引き離す。

「全く、会ってそうそうこれとは、全く変わってないな冴さんは！」

「あーらー。誰かしら? その冴さんって人」



——だが。

「大変です組長!!」

突然、先ほどドアの外で待機していたボディーパーガードの一人が慌てて入ってくる。

「どうしたんだ？」

「本部から連絡が入って、刀を以上に多く持った男と、双子らしき巨漢の男二人に黒マントを纏った男、そして長刀を持った男に襲撃されて……」

そして、次の一言で、その顔は絶望に染まった。

その報告がくる数分前。

剛玄組本部のビルにて。

「ウオオオオオオオオオ——!!」

『うわああああああ!!』

「シャアアアアアアアア——!!」

『ぎやああああああ!!』

二人のガトリングガンを持った男二人の斉射により、遮蔽物に隠れていた組員たちがやられていく。

「くっそ！あんなもん持ち上げられるなんて、どんだけの腕力だよ！」

組員の一人が、ハンドガンを撃ちながらをそう吐き捨てる。

「おい！アイツがこっちに来たぞ！」

「!？」

組員の一人が遮蔽物の右側からくる、黒マントの男が一人。

「クソ！撃て！撃て！」

一人がそう言うのと、その場にいる全員がドカドカとハンドガンから弾を撃ち続ける。

「無駄」

一方で、黒マントの男がそう呟いたかと思うと、懐から銃剣を抜き出し、それをかなりの精度で連射する。

「ぐあ!？」

「ぎやあ!？」

次々に倒れていく。

「くそ！引くんだ！」

勝てないと踏んだのか、後退していく組員たち。

「ふん」

「おーおー流石だな、沙影」

背後から、ガトリングガンを持った双子の巨漢の男。その肌は褐色で、外国人だという事が丸分かりだ。

だが、その言語は完璧な日本語だった。

唯一見分ける手段としては、兄の『ジョン・ウィーカー』が右腕に赤いバンダナを巻いており、弟の『ウィルソン・ウィーカー』が左腕に青いバンダナを巻いているという事以外にない。

そして、黒マントの男、『仙波 沙影』は銃剣を持った手をマントの下に隠す。

「そろそろ、七火と破道が赤子を捉える頃だ」

沙影がそう呟くと、身をひるがえして、このビルを出ていく。

「ぐああああ!？」

胴体を切断されて絶命する組員。

「ぐ、くっそ・・・」

その後ろでは、血まみれで地面を這いづる男、『鞍馬 英一』がいた。



その目の前には、黒スーツに、冷徹な眼差しで長刀を持つ男が一人。  
「おーおー、粘るねえ」

その後ろでは、確実に銃刀法を無視しているかのように、刀を体中に装備している男が一人いた。

そのうち、一本、鞘に納めたままの刀の先に、一つ籠がぶら下がっていた。

「ゆ、優香……ちゃん……を……かえ……せ」

「黙れ」

「ぐああああ!?!」

腕を刺され、うめき声を出す英一。

刺したのは、長刀を持つ男だった。

「おーい、それぐらいにしとけよ破道。これ以上はマズイぜ」

「……チツ」

破道と呼ばれた男は血を払い、鞘に長刀を納める。

「ま、まで……」

英一は、立ち去っていく二人の男に向かって、刺されていない手を伸ばすも、抵抗虚しく、赤子の泣き声を聞きながら、意識を急速に遠のかせていく。

「すみません……組長……ごめんよ……時打くん……」

賭博場『金龍』

そこで、吹雪は与えられた楽屋にて、荷物の確認をしていた。

そこには、清松の姿もあった。

「これで全部だね」

「はい。ありがとうございます」

全ての荷物をリュックの中に入れて、そう確認する吹雪。

「短い間でしたが、ありがとうございます」

ぺこりと礼儀正しくお辞儀をする吹雪。

「いや、いいんだよこれぐらい」

清松は、そう返す。

その時だった。

「清松！大変だ！」

そこへ重信が慌てて部屋に入ってくる。

「どうしたんですか重松さん？」

「どうもこうしたも、剛玄組の本部が襲撃されたんだ！今、死人や怪我

人の手当に人手が足りないらしいんだ！」

「ええ!？」

重信の言葉に驚く清松。

(剛玄って確か・・・司令官の元上司だった人?)

吹雪は、ただ事じゃないと理解しながら、そう考える。

「それだけじゃねえんだ！優香ちゃんがその襲撃された奴らに連れて

いかれたんだ！」

「そんな!？」

「あ、あの・・・」

更に驚く清松に、吹雪がある事を問う。

「その、優香ちゃんっていうのは誰なんですか？」

「ああ、この辺りを支配してる剛玄組組長の剛玄 勝義さんの娘さん

で、また赤ん坊なんだ」

「!？」

吹雪の顔が驚愕に染まる。

「でも、どうして襲撃なんか・・・」

清松がそう頭をかかえる。

だが、何故か吹雪だけが、その答えを見つげられた。

「・・・刀」

「え？」

「刀です！あらかじめ上を潰して動けない所で山に侵入して刀を奪おうとしてるんですよ！」

最も、吹雪にとってはその部分はどうだったっていい。

「その為に優香ちゃんを攫ったのか!？」

「くそ、なんて奴らだ・・・！」

清松と重信が悔しそうに顔を歪める。

「二人はその剛玄組の本部へ行って下さい！」

だが、そんな二人を他所に、吹雪が窓を開ける。

「な!？」

「吹雪ちゃん!？」

二人の声を聞かず、吹雪は窓から外に出る。今が二階、隣の建物がここよりも低かった事が幸いしたのか、飛び移る事に成功する。

「吹雪ちゃん!！」

清松が叫ぶも、吹雪は振り返らず走り出す。

だが、目の前にはの天井から6メートル程も高い建物が立ちはだかっていた。

窓もないためによじ登る事もできない。

だが、吹雪はスピードを緩めない。

「無理だ!！」

思わずそう叫んでしまう清松。

だが、その瞬間、彼は見た。

吹雪の服が霞み、かすかに黒いコートが浮かび上がる瞬間を。

そして、吹雪が、その足からあり得ない程の脚力で、その建物を飛び越えた!

「な・・・!？」

あの様な芸当ができる存在を、清松と重信は一人しか知らない。

「・・・アイツ、本当に時打の弟子かなんかじゃないのか?！」

飛び越えた吹雪の姿は、もとのセーラー服に戻っており、だがその速力は凄まじいものだった。

## 取り戻せ 儂き命の為に

「♪」

「うるさいぞ七火」

「良いじゃねえかよこれぐらい」

鼻歌を歌っていた『千間せんけん 七火しちか』を咎める『破道はどう 葉緒はお』。

二人は今、山道を歩いていた。

七火の持つ刀の先には一つの籠。その中には、不機嫌そうな顔の赤子が一人。

優香だ。

「それにしても、まだつかんのかね」

「黙っている。これでもお前の趣味に付き合っやってるんだ。無駄な事いうな」

「へいへい」

本来、彼らにはもう三人仲間がいるのだが、この山道で邪魔が入らないように入り口に置いてきたのだ。

たとえ、誰かが来ても、巨漢の褐色の二人、ジョンとウイルソンの持つガトリングガンの餌食になるか、銃剣使いの沙影の技でやられるかのどちらかだろう。

「お、そろそろだな」

ふと、門が見え、そこを潜り抜ける。

「ん？」

そこには、一人の少女がいた。

僅かながらに汗を流している所を見ると、どうやら急いでここまで来たらしい。

「誰だあの嬢ちゃんは」

「さあな。ここは本来封鎖されてるから、参拝客ではない様だ。それに……敵意が剥き出しだ」

長刀の柄に手をかける葉緒。

「……その子を離して下さい。それだけしてくれれば刀なりなんなりあげます」

吹雪は、葉緒が放った殺気に怖気づく事なく、睨み返す。

「悪いがそうはいかねえんだなこれ。刀を手に入れるまで返す訳には  
いかないんだよ」

そう言う七火。

「どけ、ガキ。じゃないと斬る」

更に重く、低い声でそう威圧する葉緒。

本来だったら、ここで退いているだろう。

だが、命の危険に晒される瞬間なんていくらでもあった。

だって自分は、心を持つ兵器『艦娘』<sup>ソルジャー</sup>なのだから。

「どきません」

きつぱりと、吹雪は、そう言い放つ。

「そうか」

一方で葉緒はそれを聞くと、長刀を鞘から抜き放つ。

吹雪は、右腕をまげ、肘裏に左手を置いて、構える。

「なら死ね」

「艦装展開ッ!!」

恐ろしいスピードで迫り、横に一閃、薙ぎ払う葉緒。

だが。

「む」

「ぐう!?!」

鋭い金属音と共に、思いつきり後ろに弾き飛ばされる吹雪。

だが、その姿に、違和感があった。

さつきまで背負っていなかった鉄の塊。

右手には二本の銃口の様なものと、砲台のようなグリップ。

そして、両太腿には、まるで魚雷発射管の様なものを取り付けられていた。

「なんだありやあ!?!」

「・・・艦娘か」

驚く七火を他所に、葉緒は冷静に予測する。

「優香ちゃんは返してもらいます」

そして吹雪は、真っ直ぐに主砲を七火と葉緒に向ける。

「そうかい」

すると七火はいきなり右手に持っていた籠をぶらさげら刀を、いきなり鞘を飛ばす様に外す。

「!?」

それに目を見開く吹雪。

だが、籠は七火の近くにあった木の枝にぶら下がり、鞘は真っ直ぐに刀に戻る。

「.....」

「面白い芸当だろ？」

ニヤニヤと笑う七火。

それに怒りで顔を歪める吹雪。そこには焦りの感情も滲み出ていた。

「いくぞ。死んでも後悔するなよ」

葉緒が、そう警告し、吹雪は、身構えた。

一方で七火は刀を二本抜いて二刀流になる。

「そんじゃ、行くでエ!!」

そして、ぶつかる。

タイヤがこすれる音が響き、リムジンが道路を全力疾走する。

「うわああ!?!」

その上で、小太刀を突き刺してなんとか振り下ろされないようにしている瑞鶴の姿があった。

そんな瑞鶴を片手で引き寄せる時打。

「落ちんなよ!このスピードで落ちたら轢死ものだ!」

「分かってるわよそんな事!」

何故こんな事になっているのかというと、余りにも時間が惜しかったから時打がリムジンの上に飛び乗ったのが始まりでそれに続くように瑞鶴が飛びのつたのだ。

そして響夜と長門と勝義と美織はリムジンの中に乗り込み、そして待った無しで全速力で美濃柱山にむかっているのだ。

そのリムジンの中では、物凄い揺れの中で頭を抱えている勝義と美織の姿があった。

その様子に、何も言わない長門と響夜。

「うわああああ!?!」

「だからしつかり掴まってる!」

外ではあまりの揺れになんども落ちそうになっている瑞鶴と時打の叫び声が聞こえる。

「あともう少しで美濃柱山です」

そこで、運転手の男が彼らに向かって、到着が近い事を知らせる。

「そうか・・・」

勝義は、短くそう答えた。

「・・・また、子供の手を借りなければならぬのか・・・」

悔しそうに、そう言う勝義。

そんな勝義に、長門は、口を開いた。

「それは違うと思います」

「なに?」

それに顔をあげる勝義。

美織も、長門に注目する。

「天野さんは、もう貴方たちの知っている様な子供じゃない。今は、沢山の笑顔を守る一介の剣士です。今、彼が、貴方たちの娘さんを助けに行っているように」

長門は、拳を握りしめ、それを見つめる。

「そうだぜおっさん」

その言葉に、響夜も乗る。

「また手を借りないといけないのかというところじゃねえ。俺たちは俺たちの意志でアンタらに協力してんだ。今更、関係がどーのこーの

言う必要なんてないだろ」

そして、右拳を左掌にぶつける。

「あんたらの娘さんは任せておけ。必ず連れて帰る。もちろん、生きてでな！」

二カツと笑いながら、響夜はそう言う。

それで、しばし茫然としていた勝義と美織だったが、お陰で幾分か緊張が解けたのか、笑みを零す。

「そうだな。任せよう」

「優香をお願いします」

そう、頭をさげる。

そして、タイヤとアスファルトが思いつきり擦れる音が響き、車が止まる。

「つきました！」

「おし！行くぞ長門！」

「ああ！」

短く気合を入れ、バン！と扉を開けて外へと飛び出す響夜と長門。

その上から、時打と瑞鶴も飛び降りてくる。

「うお!?!」

「あれは、ガトリングガンか!?!」

そこには、派手の倒れているトラックやハチの巣にされている車などがあり、そこには、何人も地面に倒れている剛玄組の組員たちがいた。

「シャアアアアアア!!」

「！ 避ける!!」

そして、山道の入り口と思われる場所に、ガトリングガンを持った二人の褐色巨漢の片割れがガトリングガンを時打たちに向かって構える。

それにいち早く気付いた響夜が危険をしらせ、それぞれが倒れているトラックに身を隠す。

その瞬間、叫び声と同時に、連続で続く轟音と共にガトリングガンを発射。



「くっそ！あんなもの持たれちゃ近付く事なんて出来ねえぞ！」

「せめて、あれだけでも破壊できれば……」

悪態吐く響夜の言葉に、瑞鶴がバックから取り出した小太刀二本を腰の後ろのベルトに差しながらそう言う。

「ならば私が……」

「待て長門。艤装なんてもの使ったらお前が艦娘だって事がバレるぞ」

「しかし、このままでは……」

長門が飛び出そうとするも、時打が止める。

「俺と瑞鶴があいつらを攪乱する。その間にお前らは左右から回って、不意打ちでガトリングガンを二重の極みで壊せ。そこから後は俺が山にいくから、それぞれの得物をやれ。良いな？」

「おうよ！」

「了解！」

「それなら！」

時打の考案した作戦を承諾した三人。

そこで、ガトリングガンがその攻撃をやめる。

「今だ！」

「鬼人化ア!!」

その途端、瑞鶴の体が一回、ビクンツ！と跳ねたと思った瞬間、体から蒸気を出し始める。

そして目が鮮血の様に赤くなる。

トラックから飛び出す四人。

手筈通り、時打と瑞鶴が真正面から突っ込み、長門と響夜は側面から突撃すべく、左右それぞれへ走り出す。

「ウオオオオオオオオオオ!!」

「シャアアアアアアア!!」

それを見た巨漢の男二人が今度は同時にガトリングガンを乱射。

「飛天御剣流・龍巢閃ツ!!」

「鶴翼乱舞ツ!!!」

それと同時に時打が抜刀、それと同時に、瑞鶴と時打が高速で剣を

振り回し、命中弾を斬り落としていく。

「んな!？」

「バカな!？」

「・・・ツ!？」

トリガー引金を引きながら、巨漢の男二人——よくみると同じ顔である——信じられないとでもいう様な表情と共に、声を挙げ、黒マントの男が眼を見開く。

「ぐ!？」

「流石に、はげし・・・ツ!!」

だが、流石にガトリングガンの連射性に苦戦しているのか、弾がばらけるギリギリの所で止まってしまいう時打と瑞鶴。

「ウオオオオオオオオオ!!!」

「シャアアアアアア!!!」

それに気付いた巨漢の男二人がさらなる咆哮をあげ、ガトリングガンを瑞鶴と時打に集中させる。

時打と瑞鶴の体力が無くなるのが先か、それともガトリングガンの弾が切れるのが先か。

そこでふと、マントの男、沙影が視線を右に動かした。

そこには、まさに側面から突っ込んでくる響夜の姿があった。

「チツ!あの二人は陽動か!」

敵の意図を見抜いた沙影はすぐさまマントの下から銃剣を抜き出し、響夜に向ける。だが。

「こつちにもいるぞ!」

「!？」

左から声が聞こえ、慌てて振り向くと、そこに長門の姿が。

「なんだと!？」

「ウオオオオオオオオオ!!!」

「シャアアアアアア!!!」

だが、巨漢の男、ジョンとウィルソンは左右から近付いてくる二人に気付かず、むしろ燃えている状態で目の前の二人をハチの巣にしようとしていた。

「チィ!!」

舌打ちをして両手の銃剣を二人に向ける沙影。

そして、発砲。

銃弾は真つ直ぐに響夜と長門の眉間を貫かんと飛んでいく。

だが、その軌道を見切った二人は顔を傾けるだけで回避。

「!?」

「射撃の正確さが仇になったな!」

眼を見開く沙影。そんな沙影に長門がその様に言う。

射撃の正確な相手の弾道というのは、急所を狙うという癖がある者が多い。

だから、眉間を狙ってくると踏んだ二人は、顔を傾けたのだ。

「オオオ!!!」

そして、どういう訳か、右に立つジョンはガトリングガンを右に、左に立つウイルソンは左に構えている為に、どちらも本体を狙うのは簡単だった。

だから、二重の極みが入った。

そしてガトリングガンは大きな音をたてて爆散。

「ぬあ!?!」

「ぬお!?!」

一発だけでガトリングガンが粉碎されたのをみて驚くジョンとウイルソン。

「提督さん!!」

銃撃の嵐が止み、それと同時に瑞鶴が叫んだかと思うと時打は全速力で走り出す。

「行かせん!!」

その時打に立ちはだかる様に銃剣の銃口を向ける沙影。

だが、時打が跳躍した瞬間、それまで時打がいた場所から小太刀が飛来してきた。

「!?」

思わず、それを銃剣で弾く沙影。

その弾かれた小太刀はくるくると回り、一人の少女の手元に戻る。

「御庭番式小太刀二刀流『陰陽撥止』」

瑞鶴が、そう沙影を見据えながらそう言う。

沙影は、ギリツ、と奥歯をかみしめ、忌々し気に瑞鶴を睨む。

「オオオ!!」

「お前たちの相手は私たちだ!」

「シャアア!!」

「行かせねえ!!」

一方で、沙影を飛び越えて山道に入っていった時打をおいかけようとするジョンとウィルソンだったが、響夜と長門が立ちはだかり、それを防ぐ。

「どけお前ら!」

「どけと言われてどく俺たちじゃねえ!!」

そして殴り合いの喧嘩に発展する。

「ヤアア!!」

「シイイ!!」

そして、瑞鶴と沙影も、その刀剣をぶつける。

「うわああ!?!」

大きく弾き飛ばされる吹雪。

そして、石堀に叩き着けられる。

「ぐう・・・」

「これが艦娘か」

「なんか拍子抜けだなあ」

つまらなそうなものを見る様な眼で吹雪を見る葉緒に、とんとんと右手の刀で肩を叩く七火。

「こっのお・・・」

無理に立ち上がる吹雪。

「そうこなくつちやなあ!!」

それを見てニヤリと笑いを浮かべる七火。そして走り出す。

「くー」

吹雪は、それを見て左の魚雷発射管から魚雷を一本抜き放ち、それをダーツの要領で向かってくる七火に向かって投げける。

「小賢しい!!」

だが、それを左の刀で弾かれてしまう。

だが、その直後に吹雪は主砲を発砲。

「ぬお!!」

高速で飛来する砲弾をなんとか左に転がる事で回避する七火。

そこへ新たな魚雷を投擲する吹雪。

「ぬおわ!!」

それに驚いて更に転がる七火。

「こなくそー」

「!?」

そこで、まさかの自分の左手の刀を投げる七火。

回転のかかったその刀は、あまるで巨大な手裏剣の様に迫ってくる。

「うわあ!!」

それを左へ大きく飛び退く事で回避する吹雪。

「背中ががら空きだ」

「!?」

そこへ、背後から長刀を構えていた葉緒が立っていた。

「しまっ・・・」

「ぬうん!!」

「きやあ!!」

そして、大きく神社の方へ吹っ飛ばされる!!

何度もバウンドしながら石作の地面を転がっていく吹雪。

「葉緒、もう少し手加減したらどうなんだ?あれでも女の子だぞ?」

「関係ない。俺にとって齒向かう者全てが敵だ」

「本当に容赦ないなお前」

葉緒の言葉に引く七火。

「ぐ、うう……」

顔を擦りむいたのか、火傷したように痛い。

「まあいい。とつとと片付けるぞ」

すると、葉緒が真っ直ぐにこちらに歩いてくる。

一方で吹雪はなんとか立ち上がり、主砲を葉緒に向け、発砲。

だが、無駄な体力など使うつもりなんてないともいう様に最小限な動きで回避する葉緒。

「巖流と呼ばれる剣術がある」

ふと、何かを語り出す葉緒。

「それは、古文にも記されていない幻の流派。かつて、宮本武蔵のライバルといわれた佐々木小次郎がこの剣術を扱っていたとされる」

そして、吹雪をその長刀の射程に納めたかと思うと、右手に持った長刀を、左の腰へ持っていき、わずかに腰を落とす。

「当時佐々木小次郎が得意とした『燕返し』と呼ばれる技が存在する。それは、剣の軌道を急激に変えると言う荒業の事を指すのだが、その先に、鞘を率いない居合が存在する」

それが、何かの技の前兆だと予期した吹雪は、慌てて身を引く。

「それが——秘剣・燕返しだ」

ビュオツ!!!

その瞬間、物凄い風切り音と共に、吹雪の主砲が真っ二つに切断される。

それと同時に、吹雪の右脇腹から左肩にかけて、真っ赤な液体が、噴き出す。

「あ……」

短く声を漏らす吹雪。

だが、後ろに倒れかけていた筈の吹雪の右足が動いて、その場に踏みとどまる。

「むー」

「ハアアア!!!」

その状態で艤装を分離し、右足で大きく前に出る推進力を作り出し、左足で飛び上がる。

主砲で威力を削いだ上に、後ろに下がる事で直撃を回避したのだ。更に葉緒の居合は、時打の扱う飛天御剣流とは違い、二段抜刀術が存在しない。

ならば、居合発動後には、決定的な隙が出来る。

そして、踏み込んでしまえば、長刀の間合いじゃ踏み込まれたときには対処できない。

そのまま右肘を曲げ、前に突き出し、肘鉄を食らわせようとする。  
(行ける!!)

そして、勝てる。

だが、そう思った瞬間が命取りだった。

突如、腹部に酷く重い衝撃が走った。

「が……!?!」

「俺がそれに対処法を考えていないとでも思ったか」

蹴りだ。ものすごく鋭い蹴りだ。

左足がピンと伸ばされ、真っ直ぐに吹雪に垂直蹴りを食らわせていた。

そして、吹っ飛ぶ。

「吹雪イ!!!」

その時、誰かが吹雪を呼ぶ声が聞こえ、遠ざかる意識の中で、門の前から物凄い勢いで走ってくる、良く見知った黒髪の男の姿を見た。

(し……れい……か……)

「ガア!?!」

一時消えかけていた意識が、神社の扉に叩き着けられ、突き破った事で、無理矢理引き戻される。

そのままゴロゴロと転がっていき、神社の奥にあった何かの祭壇にぶつかる。

「う……うう……」

体中が痛む中で、時打の姿を見た吹雪は、無理にでも立ち上がろうとする。

だが、思う様に力が入らず、なかなか立ち上がれない。

そこで、吹雪は片手を祭壇の上につき、それを支えにして立ち上がろうとした。

そして、ある程度立ち上がり、もつと高い所を手をつこうとして手を伸ばしたところで、何か、丸みをおびた手すりの様なものを掴む。

だが、その形と感触から、それが手すりではないとすぐに分かる吹雪。

では何か。

顔を持ち上げ、その正体を見た。

「かた・・・な・・・？」

「おおお!!」

「うお!!まだいたのか!」

吹雪が吹き飛ばされたのを見た時打の頭には何かがカーツと昇る気がした。

その瞬間、加速して、時打は長刀を持つ男に突撃する。

そして突撃しながら回転。

「ぬ!」

——飛天御剣流・龍巻閃『旋』

この技は、息吹の元となった技。

突撃の威力に加え、回転による遠心力を加算させるこの『旋』は、本来返し技として機能する龍巻閃の中で、唯一、先手を打つ事を可能とする。

逆刃刀の刃が時計回りに回転する為に、葉緒の左斜め下から斬りあげられる。

それを、葉緒は長刀で防ぐ。

そのまますれ違っていくように時打は葉緒の後ろへ飛んでいく。



葉緒がすぐに背後を見た時、そこには、態勢を立て直すでもなく、真つ直ぐに先ほど吹き飛ばした吹雪の元へと向かっていた。

「チィー！」

すぐに時打の意図を呼んだ葉緒はすぐさま追いかけようとする。

だが、そんな時打の前にどこからともなく刀が飛来する。

「!？」

それを時打は一瞬、目を見開くも、すぐさま逆刃刀で弾き飛ばす。

「ちよ〜つと待ちな」

「・・・」

刀が飛来してきた方向を見ると、そこには刀を体中に装備した男が一人。

「敵を目の前にして逃げるなんて、軍じゃ死罰ものだけぞ？」

「生憎と俺は陸軍じゃないし、自衛隊でもない。そんなものが適用されるとは思わないがな」

「そうかい」

そこで七火は更に二本、刀を抜く。

すると、鞘の部分がパキンと半分割れ、刃が残った方を連結させる。

「・・・連刃刀か」

連刃刀。

二つの刀を連結させて、二重の刃を作り出し、そこで斬られた部分は、傷口の縫合が上手くいかず、そこから肉が腐っていき、死に至らしめるといったものだ。

これは、『るろうに剣心』の主人公、緋村剣心の逆刃刀を作った人物、新井赤空が初期に作った殺人剣だ。

「お、ご名答。ちよいとダチが作った代物でな。俺、刀が好きなんだわ」

「ふぎけろ。お前がいう刀が好きっていうのは、手に入れた刀で人を斬るのが好きって意味だろ」

早く吹雪の安否を確認しなければならぬ。

だが、この二人はどちらもかなりの使い手だ。

流星に、背を向けてはいられない。

ふと、左の視界で葉緒が動いた。

「!」

すぐさま反応し、防ぐ。

「そこをどけ。余り時間をかけている暇などない」

「どくか!」

鏢迫り合いに入るも、時打は自ら引いて時計回りに回転。

そこからバランスを崩した葉緒に龍巻閃を撃ち込もうとする。

だが、葉緒はすぐに態勢をたてなおし、それをしゃがんで回避。

そしてお返しと言わんばかりに足を斬らんとばかりに長刀を横薙ぎに払う。

それを時打は高く飛んで回避する。

「!？」

「たけえ!」

その高さに驚く葉緒と七火。

「龍槌閃!!」

そして、その落下の一撃を葉緒に撃ち下ろす!!

葉緒は、それをバックステップで回避する。

時打は葉緒を追撃しようとする。

だが、背後から七火が連刃刀を持って、突き刺してこようとする。

「こつちもいるぜ!」

だが、時打はすぐさま振り向いて、連刃刀の二つの刃の間に逆刃刀を滑りこませ、鏢で止める。

「!？」

「俺を突き殺したければ、電の牙突を超える技を繰り出すんだな」

そして、そのまま逆刃刀を回転させて連刃刀の刃をどちらもへし折る。

立て続けに、下に滑り込み、そのまま刃を跳ね上げるように、七火を打ち上げる。

飛天御剣流 龍翔閃。

「ぐおおあ!」

鳩尾に直撃する。

そのまま打ち上げられ、石作の地面に叩き着けられる。

「ほう……」

ふと、葉緒が感嘆の声を漏らした。

「今のは龍翔閃か。つまり、お前が飛天童子か」

「……」

時打は、振り向いて葉緒を見据える。

「だが、なんだその刀は。あの男にでもなつたつもりか？」

あの男とは、当然、あの男の事だろう。

「別に、もう人は殺したくないだけさ」

「ふん。あの飛天童子が聞いてあきれる。もう人を殺さなくなったのなら、それは弱者にも等しい」

「お前の持論はどうだっていい。さつさとそこをどけ」

時打は歩き出す。

そのまま正眼の構えに入る。

「ふん。俺にとっては、お前の様な腑抜けた奴が生きているというだけで虫唾が走る。だから、ここで殺す」

両方、退く気など無いようだ。

時打は歩くのをやめず、葉緒はいつでも迎え撃てるように構える。

だが。

「おー、いてえいてえ」

ふと背後からの声で止まる時打。

振り向くと、そこには、何事も無かったかのように起き上がっている七火の姿があった。

「まさかアンタが飛天童子だとはな。恐れ入ったぜ」

(何故だ。鳩尾に入った筈だ……)

時打は、何故、七火が立ち上がったのかを理解していないようだった。

だが、それはすぐに分かった。

「そうになると、こっちは秘密兵器を出さなきゃな」

と、七火は持っていた刀と、更には上半身に来ていた服まで脱ぎ捨てる。

すると、腹には何やら銀色のサラシの様なものが巻かれていた。

「・・・薄刃乃太刀」

「やっぱ知ってたみたいだな。その通り！これは薄刃乃太刀だ！」  
薄刃乃太刀。

刀としての強度を保ったまま薄く鍛える事で、数メートルの長さで刀としてはありえない程にしなる刀身を実現させた、赤空の後期型殺人奇剣。

七火は、薄刃乃太刀を、腹からシユルシユルと抜き取ると、すぐさまそれを鞭の様に放つ。

そして、その蛇の様にしなるその刃を、時打の背後から突き刺さんと伸びる。

時打は、背後からくるそれを大きな動きで回避。

それをみて、ニヤリと笑う七火。

「ほう、紙一重でかわせば、手首の返しで自由自在に方向転換できるこの刀の餌食になると知ってて、わざと大きく避けたな？」

「刃としての強度を保ったまま、薄く鍛える事で、しなやかさを追求し、更には刃の先を僅かに重くする事で、持ち手の手首の動きで軌道を自由自在に変える事の出来る。この刀は、限りなくそれに近い」

時打は、その様に指摘する。

「ご名答だ。なんだ？よく知ってるなお前。もしかして、これの作り主を知ってるのか？」

「知ってるもなにも・・・まさか・・・」

この男、まさか『るろうに剣心』を知らないのか？

もしそうだとしたら、こちらの剣術の特性を知らない可能性がある。

ならば、向こうの剣の特性を知っているこちらが有利か？

時打は、その様に思案する。

「おい葉緒！お前はさっさと刀を取りに行ってくれないか！薄刃乃太刀は鞭と同じで集団戦には向いてないからよ！」

「チッ、さっさと片付けろ」

七火の言葉に、舌打ちをして吐き捨てる葉緒。

「!? 待て!」

「待ちな!」

「!?」

すぐさま追いかけてしようとした時打だったが、七火が放った薄刃乃太刀が右から襲い掛かり、思わずさがって回避してしまう。

「お前の相手は俺だ!」

「ツ……」

歯噛みする時打。

一方で葉緒は、どんどん神社に向かって歩いていく。

だが。

「む!」

突如、突き破られボロボロとなった神社の扉から、物凄い剣気が発せられた。

何か嫌なものを感じ取った葉緒は大きく飛び退いた。その瞬間、扉の残骸が爆散する!

「!?」

「なんだア!」

その轟音に驚く、時打と七火も驚く。

葉緒は、無言で長刀を構える。

土埃が舞う、神社の入り口から、人影が現れる。

その人影に、その場にいる全員が注目する。

その姿は、黒いコートを来て、中には、黒を主としたセーラー服。

その左腰には、黒鞘が差さっており、右手には、黒鉄の刃を持つ、刀。

それこそが、時打のかつての愛刀『影丸』だった。

そして、それを持つのは、黒髪を、頭の後ろで結っている、一人の少女。

もとの姿からは、いくらか成長しており、体の各部分も成長していた。

しかしそれは、時打が、良く見知った人物だった。

「吹雪・・・？」

それに応えるように、少女、吹雪は、口を開いた。

「貴方たちに、司令官は殺させません。司令官の、大切な人の想いの為に」

そう言い、吹雪は、影丸を敵に向けた。

## 吹雪 影丸 抜錨

時打が七火と葉緒と戦っている間、吹き飛ばされた吹雪は……  
「……………」

自分が手に持った刀を見つめていた。

その手は、まだ祭壇に置かれていた刀剣を掴んでいた。

吹雪は、それが直感的に時打の愛刀『影丸』だと見抜いていた。

それを持ちあげ、右手で柄を、左手で鞘を持つ。

「……………」

息を飲む吹雪。

これを抜いてしまえば、もう後には戻れないかもしれない。

正直に言つて怖い。だけど、引く訳にはいかない。

下手をすれば、この剣に込められた狂気に吞まれてしまうかもしれない。  
ない。

だけど、だからといって、あの赤子を見捨てる事などできない。

ならばどうすれば良いのか。

これを抜く事。

さすれば、自分の中の何かが変わってしまうかもしれない。

艦としての誇りを捨て、新たに剣士として目覚める。

それが、どうしても怖い。

あの鎮守府に残った、唯一の姉妹艦である、叢雲との関係を断ち切ってしまうかもしれない。

「……………」

吹雪は、眼をつむる。

だけど、これを持った彼は、己の全てを捨てて、この街に住む人々を守ろうとした。

ならば、自分も、その道を行こう。

「お願い」

吹雪は、自然とその刀に語り掛けていた。

「大切な人を守る為に、もう、何も失わない為に。力を貸して、影丸」  
そして、吹雪は、それを、抜いた。

その刀身を見た瞬間、胸が焼かれるような感触に見舞われた。  
叫ぶ間もなくその熱は、体を包んだ。

だけど、そんな事で悲鳴を叫んでいる程、自分は、弱くない。

——イメージ体現するは、全ての人の命の為に、己の全てを捨てた一人の少年。

刀身を、どんどん抜いていく。

——闇に生き、誰かの為に傷付いていった、その少年。

その時、服装が変わっている事に気付く。

白かったセーラー服は、黒く、からすば鴉羽色に染まり、その上から、黒い、フード付きのロングコートに変わる。

突如、頭の中に何かが流れ込んでくる。

それは、記憶。この剣が蓄積していった、戦いと悲しみと激動の記憶。

やがて、青色の炎が収まり、そこにいるのは、膝をついて、抜けきった鴉羽色の刀身を持つ刀を右手を持つ、一人の少女。

その姿は、成長しており、女性としての象徴も、幾分か成長していた。

ただ、その瞳から、涙を流していた。

「……こんなの、悲しすぎます……」

だが、すぐに涙をふき取り、立ち上がる少女。

そして、踵を返し、出入り口に向かって歩き出す。

ふと、気配を感じた。

吹雪は、刀を鞘に戻し、そのまま、何も構えず入り口に向かって歩き出す。



そして、刀の間合い一步手前で、居合斬りを放つ。  
一刀だけでなく、正方形を描くように、入り口を吹き飛ばす。  
そのまま外に出る。

そこでは、七火と対峙する時打と、どうやら先ほどの攻撃を避けた  
のか、神社の階段の下で片膝をついている葉緒の姿があった。

そして今、時打が押されているという事を、感じ取る吹雪。

刀を右手に持ったまま、吹雪は、口を開いた。

「貴方たちに司令官は、殺させません」

影丸の記憶から読み取った、時打の、大切な人の言葉を思い出しな  
がら、言い放つ。

「司令官の、大切な人の想いの為に」

そして、影丸を敵に向ける。

「ウオオオオオ!!」

「ドラアアアア!!」

拳と拳がぶつかる。

が、すぐに決着がついた。

「ぐあああああ!?!な、なんだあああ!?!」

いきなり、ぶつかり合ったジョンの右腕から血が噴き出す。

それと同時に骨までも玉砕される。

「っしー!」

「おい!?それ人体に向かってやっても良いのか!?!」

ガッツポーズを取る響夜に、激しい格闘戦を繰り広げている長門が  
なんとかと言った感じで叫ぶ。

「いいんだよ死ななきや」

「そういう問題じゃ・・・うお!?!」

ウィルソンの蹴りを体を半ば地面に投げ出すようにかわす長門。  
そのまま地面に倒れる。

「シャアアア!!」

鋭い雄叫びと共にウイルソンが拳を振り落とす。

「く」

長門はそれを右に転がって回避する。

その途端、コンクリの地面に拳がめり込む。

「な!？」

「そらそらあーもつと行くぜえ!!」

と、縦横無尽にラッシュを繰り出すウイルソン。

それを長門は、その華奢な腕から考えられないような腕力で、繰り出されるラッシュの中にあるウイルソンの両腕を掴む。

「んな!？」

「たとえ、素早くラッシュを繰り出したとしても、結局は二本の腕だ」  
そしてそのまま思いつき頭をさげたかと思うと、もの凄い勢いで  
のヘッドバッドを食らわせる。

「ぐああああ!？」

だが、かなり打たれ強いのか、すぐに態勢を立て直すウイルソン。  
しかし、仰け反って上を向いていた視線を前に戻すと、そこには長  
門の姿が無かった。

「終わりだ」

「!? ぐえ!？」

突然後ろから声が聞こえたかと思うと、絞め落とす様にチョークス  
リーパーをかける長門。

そのまま一気に絞め落とす。

「ああ!？ウイルソン!」

「余所見してる場合かよー!」

「ぐは!？」

余所見をしていたジョンに、響夜がその腹に拳を叩き込む。

余程重かったのか、すぐにその場に沈んでしまう。

「ちえ、手応えねえな」

「あるのは怪力だけか」

どこか残念そうにいう響夜と、締めて落ちたウイルソンを丁寧に下

ろす長門。

「チツ、使えない奴らが」

「チエストオオオ!!!」

舌打ちをする沙影に、瑞鶴が右の小太刀を振り下ろす。

それを左の銃剣の刃で受け止める。

そのまま弾こうとした沙影だったが、瑞鶴は、更に左の小太刀を振り上げる。

「な!？」

「陰陽交叉ツ!!」

一刀目の小太刀の上から威力を上乗せするように二刀目の小太刀を叩き着ける陰陽交叉。

それにより、左の銃剣の刃が斬り落とされる。

「バカな・・・ツ!!」

「悪いけど現実よ!」

そこへ止めを刺す様に、鋭い直進蹴りを食らわせる瑞鶴。

「ぐは!？」

そのまま吹っ飛んでいき、山道の入り口の脇にあつた立札に激突する。

「二丁上がり」

そう言つて、くるくると右手の小太刀をペン回しの要領で回す瑞鶴。

「大丈夫か!？」

そこへ、さつきまで後ろで戦いを見ていた勝義と美織がやってくる。

「なに、こんなもん安いもんよ!」

「歯応え無かつたわ。これなら、天龍と戦った方が幾分かましよ」

なんでもないようにそう言う響夜と瑞鶴。

「さあ、いきましよう。ていと・・・天野さんが先に行ってます」

「ああ、そうだな」

長門の言葉に同意する勝義。

「急ぎましよう!」

美織がそう言い、全員が一斉に走り出した。

「吹雪……」

時打がそう漏らした。

何故なら、目の前の少女、見覚えのある姿から幾分か成長して女性らしくなっている上に服装が白から黒が主となる服装に変わっているが、それは確かに、艦娘、特型駆逐艦一番艦の吹雪だ。

そして、その右手には、かつて時打と共に、幾たびの修羅場を潜り抜けてきた愛刀『影丸』の姿。

「……」

「司令官、この男は私がやります。なので司令官はその何やら鞭の様な剣を持った男をお願いします」

啞然としている時打を他所に、吹雪は、葉緒を見据える。

その勇ましいさまに、時打は、ため息を一つはいた。

「吹雪」

そして、彼は彼女の名前を呼んだ。

吹雪は何かと思い、視線を時打へ向ける。

そして、時打は七火の方へ向きながら、ドスの効いた声で吹雪に言う。

「これが終わったら、覚悟しておけよ？」

「……はい」

その怒気に、怯えた様な声で答える吹雪。

「そういう訳で一つ目の罰だ」

「は、はいー」

慌てる様に返事をする吹雪。

「その男を、殺さずに仕留めろ。良いな？」

時打は、吹雪に向かって、そう言う。

吹雪は、少しぼーっとしていたが、すぐに表情を引き締め、目一杯の声で応える。

「はいー」

その様子に、不思議と笑みを零す時打。

「殺さず？」

そこへ、若干、怒りを含めた声を発する男、葉緒が割り込んでくる。

「そんなふざけた心情で俺を倒そうなぞ、バカにする事だ。世の中、勝ち負けが決まるのは生か死。弱肉強食だ。そんな世の中で敵を生かすなどとほざくなど言語道断だ」

そして、葉緒は吹雪を睨みつけ、言い放つ。

「そんな奴は生かしておけない。そんな志で戦いに身を投じるなら、俺が殺す」

そんな風と言う葉緒だったが、吹雪は、冷やかな眼でそんな葉緒を見つめている。

「……なんだその眼は？」

「弱肉強食ですか。確かに、その通りでしょう」

吹雪は、葉緒に向かってそう答える。

そして、ゆっくりと階段をおりていく。

「ある人は言いました。剣は凶器、剣術は殺人術。どんな綺麗事を並べても、それが真実。『人を活かす剣』と唱え続ける人間は、自分の手を汚した事が無いから言える、甘っちょろい戯言、と」  
でも、と吹雪は続ける。

「今は、剣の時代じゃなし、血を流す争いの必要としない時代でもあるんです。それに、私は、その甘っちょろい戯言の方が好きです。今は、本当は刀なんて必要のない時代の筈なんです。それでも」

階段を降り切った吹雪は、右手の影丸を葉緒に向ける。

「貴方の様な、弱者を見下し、戦いを愉たのしみ、そして殺していく様な輩がこの世にはびこっているから、私たち剣士は剣を取るしかないんで

す。弱き人々を、守る為に」

「何の意味がある？」

ビュン、と長刀を薙ぐ葉緒。

「弱者を守って何の意味がある？弱者など、所詮何も出来ない虫けら同然。仲間がいなければ、何も出来ない虫けらを守って何の意味がある」

冷酷な正論を叩き着ける葉緒。

「一人じゃなにも出来ないからこそ、繋がりが出来て、強くなれるんです」

だが、それでも屈せずに吹雪は言う。

「この刀の持ち主は一人だった。だからこそ、道を踏み外しかけたし何度も殺されそうになった。だけど、誰かがそんな人に道を教え、支えるだけで、その人は強くなれた。支えがあるから、いくらでも前に進めるんです」

「ふん。所詮はそいつも弱者の一人に過ぎなかつたって事だ。一人じゃ何もできない、抱え込む事のできない弱者だ」

「弱者弱者って……貴方はどうなんですか？あの人だって、仲間でしょう？」

「アイツはオマケだ。山道に入り口に置いてきた奴らもな。勝手についてきただけだ」

葉緒は、そう吐き捨てた。

「そうですか。どうやら、これ以上話し合うのは無理そうですね」

残念です、そう言った吹雪は、影丸を両手で持つ。

「そうだな。これ以上の口論は時間の無駄だ」

葉緒もそう言い、長刀を構える。

「セアアアア!!」

その瞬間、時打の叫び声が聞こえた。

そこでは、七火の薄刃乃太刀を掻い潜りながら、なんとか踏み込もうとしている時打の姿があった。

だが、吹雪と葉緒はそんな戦いを繰り広げている二人をちらりとも見ず、睨み合う。

そして、同時に走り出す。

「ハァァァ!!」

「ツ!!」

吹雪が剣を上段に構え、葉緒が右から薙ぎ払う様に構える。

そして、刃と刃が衝突する。

「うおりや!」

「ツ!!」

七火が乃太刀をうねらせ、時打へ向かわせる。

それは地面を跳ね返り、まるで針を縫う用に何度も地面に向かって弾き飛ばされ、そのまま時打に突っ込んでいく。

時打はそれを、深鳳の切っ先を突きつける事で防ごうとする。

だが、一瞬、七火の口角が吊り上がったかと思うと、薄刃乃太刀の刃が深鳳の切っ先にあたる。

その瞬間、薄刃乃太刀が左へ、逸れるように曲がる。

「!?」

更に、その刃は弧を描く様に曲がり、時打の首を貫かんと迫る。

時打は、それを上体を大きく右に体を傾ける事によって、薄皮一枚、斬られる程度で避ける。

だが、それでも追撃をかけるように、たった今時打を通り過ぎた薄刃乃太刀の切っ先が急激にその軌道を変えて、時打の後頭部へ迫る。

「貫ったア!!」

七火がそう叫ぶ。

だが、時打は、普通の剣客ならありえない行動に出る。

なんと、鞘をベルトから外し、その先で薄刃乃太刀を弾いたのだ。

「な!?!」

鞘を率いた二段抜刀術を使う時打だからこそ、考えつく防御法だ。そのまま右へ体を投げ出し、転がって、乃太刀から逃れる。

「さっきのは仕留めたと思ったんだがな」

本心では驚きながらも、七火は笑いながらそう言う。

一方の時打は、その顔に笑みなど作らずに、頬に冷や汗を流していた。

正直に言って、あの様に不規則な動きをする、鞭の様にしなる剣と戦うのは初めてであり、かなり攻略するのが難しい。

その不規則な軌道を読むのは、かなり難しい。視界の外から攻撃される上に、視界から外れた瞬間、また別の軌道を描いて、襲い掛かってくる。

時打は、左手に持つ鞘を見る。

「……一か八か……」

時打は、そう呟くと、真つ直ぐに七火を見据え、そして、しゃがんだ状態から、一気にトップスピードで走り出す。

「ハッハー!!」

七火は、それを見たかと思うと、その様な笑い声をあげて、薄刃乃太刀を時打に向かって放つ。

それに対して、時打は、乃太刀とぶつかる瞬間に大きく飛び上がる。

「飛天御剣流……」

だが、七火は手首を動かし、乃太刀を時打へと向かわせる。

落下軌道上から刺し貫くつもりなのだ。

「貫ったア!!」

どう動こうと、目の前から迫る乃太刀の刃からは時打は逃れられない。

たとえば、深鳳で防ごうとしても、その刃は軌道を変えて、確実に決まる。

そして時打は、迫りくる乃太刀の刃を、深鳳の柄で防ぐ。

そのまま乃太刀は軌道を変えて、弧を描きながら時打の首を刺し貫かんと迫る。

直撃すると思われたその時だった。

ガキイ!!

なんと、反転させていた刀身に納めかけていた鞘で、薄刃乃太刀を



防いだのだ。さらに、乃太刀の切っ先は鞘にめり込み、さらにその部分には中に刀身が収まっている為に貫通する事も無い。

つまりは、どんなに手首を動かしても、一度抜かない限り、刃を時打に当てる事など不可能。

しなる為に死角から刺し殺すという優位を持つ代わりに、『薙ぐ』という要素を殺した。それが、この殺人奇剣『薄刃乃太刀』。

「ナニイ!？」

思わず声をあげる七火。

だが、時打は、そのまま落下していき、七火の脳天に深鳳を叩き着ける。

更に、それだけでは終わらず、納めかけていた鞘を、思いっきり鏢に叩き着け、その衝撃を利用して七火に二撃目を喰らわせる!!

「三頭龍・共鳴!!」

時打は倒れ行く七火の体を踏み台に飛び上がる。

そして、その背後に着地する。

ドシャ、と七火が時打の背後で倒れる。

時打は、鞘に納めた深鳳を左手に持つ。

だが。

「ぐ、うう……この野郎……」

なんと、七火はふらつきながらも立ち上がる。

「よくもやってくれたなあ……この代償は、高くつくぞ!!」

そう叫んだかと思うと、すばやく薄刃乃太刀を時打に向かって放つ。

そのまま真っ直ぐに飛んでいく乃太刀だが、それは、後ろを向く時打の右をすり抜ける。

それを見た七火は、ニヤリと笑い、手首を返した。

すると乃太刀は、軌道を変えて弧を描き、時打に向かって再度突っ込む。

本当なら、ここで回避行動を起こすのが普通だろう。だが、時打は、ただ突っ立ってるだけで動こうとしない。

「諦めたか！ならそのまま死ねエ!!」

そして、乃太刀は時打を貫く。――― 筈だった。

「は？」

いきなり足元がぐらつく。

その為に態勢を崩し、同時に、手を動かしてしまった為に、乃太刀の軌道が逸れる。

そして乃太刀はあらゆる方向へ飛んでいく。

「な、なんだ・・・!?!」

慌てて乃太刀を引き戻し、再度、乃太刀を放つ。

だが、結果は同じで、急に足元がぐらつき、態勢を崩して乃太刀の軌道が逸れる。

「あ、頭叩かれて、脳がイカれたのか・・・?」

「それもあるが、違う」

時打が振り返った。

「ど、どういう意味だ?!」

「三頭龍・共鳴。本来、三頭龍っていう技は、連続で三撃、相手にお見舞いする技だ。この共鳴は、一撃目に、龍槌閃の派生、刃を叩き着けるのではなく、上空から刃を突き刺す『惨』の要領を使い、柄から相手の脳天に衝撃を加え、更に、柄ですぐさま刀を納刀した時の衝撃を使って二撃目を入れる。本当なら、ここで相手は脳震盪で倒れるんだが、そうならない相手には、この技の三撃目の効能が後になって効いてくる」

時打は、深鳳の柄に触れ、刀身を半ば引き抜く。

「その三撃目には、飛天御剣流、龍鳴閃という技が使われる。簡単に言って、神速の抜刀術の逆回し、いわば神速の納刀術だ。そして、その納刀した際に起こる鏗鳴りは、まるで龍の嘶いななききの如き超音波が発生し、お前の耳の奥にある、平衡感覚を司る三半規管を麻痺させたんだ。お前が薄刃乃太刀を上手く扱えないのは、頭叩かれた事で軽い脳震盪状態から、龍鳴閃の効力が倍増させられたんだ。だから、今お前がまともに立っていられるのはある意味奇跡なんだよ」

と、時打は、深鳳を鞘に戻し、左半身になって腰を落とす。

抜刀術の構えだ。

「ふ・・・ぎけん・・・なよ・・・」

七火から、なにやら震えた声が聞こえた。

「ふぎけんなよテメエええええええ!!」

そこから絶叫して薄刃乃太刀を振るう。

どうやら、頭を打ってまともな考えが出来なくなっているようだ。

だが、もはやその軌道は滅茶苦茶といっても良い。

だからこそ、時打は、一撃で仕留める事が出来た。

大きく、前に飛び、そのまま抜刀して、七火の首筋を叩く!

「ぐはっ!」

その一撃を喰らった七火は、ゆっくりと、倒れ、気絶した。

時打は、しゃがんでいた態勢から立ち上がり、刀を反転させて、逆

手に持った状態で鞘に刀を収めた。

高く、高く飛び上がる吹雪。

そのまま、飛び上がる勢いが衰え、完全に止まったかと思うと、重力が彼女を地面へ引っ張り、落下していく。

その勢いを利用し、吹雪は、影丸を上段に構える。

「龍槌閃ツ!!」

「ぬうんツ!!」

物凄い勢いで振り下ろされる刃に対し、葉緒は、地面を抉りながら長刀を上へと斬りあげる。

そのまま衝突する。

「ぐ」

落下のスピードに加え、振り下ろすタイミングが完璧ジャストだった為、威力は吹雪の方が上だ。

一方で、葉緒は地面を長刀で抉る事でデコピンの要領で迎え撃ったが、それでも威力は吹雪が上。だが、体重の問題で、一瞬の加速が終

わかってしまい、弾かれる吹雪。

だが、空中で回転し、地面に華麗に着地。

「オオオ!!」

「くー!」

だが、追撃と言わんばかりに葉緒が剣を上段から振り上げる。

そのまま上から、さまざまな方向から剣が振り下ろされる。

吹雪は、それを素早く後退しながら反らす事で直撃を回避し続ける。

だが、黙って攻撃を受け続けている吹雪ではない。

真上、唐竹から振り下ろされる一刀。

それを見切った吹雪は、左足を軸にして回転。

上段からの振り下ろしを回避する。

そのまま一回転して、返し技で遠心力をたつぷりとつけた技、龍巻閃で葉緒を背後から攻撃する。

これに咄嗟には反応できない葉緒。

その一撃は吸い込まれるように葉緒の背中に直撃する。そして、吹っ飛ばす。

(決まった・・・ッ!!)

記憶から読み取り、急速にそれを体へと技術を染み込ませる心意改装と思想改装。

本来なら長い年月を費やして習得する筈のものを、こうして前借りみたいな感じで習得したのだが、決まると気持ち良いものがある。

その感覚に若干の恐怖を覚えながらも、吹雪は、吹っ飛んでいった葉緒を警戒する。

一瞬だが、葉緒が体を前に投げ出し、威力を軽減していたようにも見えた。

案の定、葉緒は立ち上がった。

「何故だ」

怒気を孕んだ声で、葉緒は吹雪に問う。

「何故、峰打ちでやった?」

その表情は変わっていないが、眼から感じ取れる怒気は、尋常では

ない。

「言つたでしょう。殺さずに貴方を倒すと」

「ふざけるな」

「!?」

気付くと、吹雪の懐に、葉緒が潜り込んでいた。

その長刀を持っている右手は、左腰の方にあつた。

「しまっ……」

「秘剣・燕返しッ!!」

恐ろしいスピードで飛来してくる鞘無し居合。

それが吹雪の胸に直撃する。

大きく、後ろへ飛んでいく吹雪。

だが、血はその胸から吹き出さなかつた。

「……チツ」

「くう……!」

ギリギリの所で鰐元（刀身の根元）で防いだのだ。

吹っ飛ばされた先でなんとか踏みとどまり、警戒する様に構える吹雪。

「貴様は俺を侮辱したいのか？世の中、弱肉強食だ。勝つた者こそ正義。負けた者は悪。それはこの世の常識だろう」

「……侮辱って、貴方の言うセリフには矛盾を感じますね」  
「何?」

「弱肉強食。確かにそうです。弱い者から社会という土台から蹴落とされる。強い者がより高い高みへと昇っていける。それはこの世の理です。でも……」

吹雪は、葉緒に影丸を突きつける。

「そんなものは、繋がりがあれば怖くないッ!!」

吹雪は葉緒に向かって言い放つ。

「共に支え合える仲間がいるから、守りたい誰かがいるから、負けたくないライバルがいるから、弱い人間はいくらでも強い人間に立ち向かっていける！繋がりの無い世界なんてものは、進展する技術の停滞しか生まない。争いがあるから負の感情が生まれるかもしれない。

でも、だからこそ、負けたくないから新しい事に挑戦したくなる！超えようと思うから沢山の事に挑戦したいと思う！『繋がり』があるから、人は、前に進めるツ!!」

そして吹雪は、影丸を両手で持ち、正眼の構えとなり、葉緒を睨み付ける。

「それが分からない貴方に、私は負けない!!」

「ほぎけ」

だが葉緒は冷酷な態度をやめない。

「滑稽な演説ご苦労。だが、所詮そんなものは無駄にしかならない。所詮、数の力など、圧倒的力の前には無意味なのだ。どんな策を練っても、結局は力の前にひれ伏す。世の中、力だ。権力国力経済力、その他全ての『力』が全ての有無を決めるのだ。どれだけ綺麗事を並べようとも、それが真実だ！」

「そんなもの全て、人がいなければ成しえませんが!!」

地面を蹴り、神速で駆け抜ける吹雪。

「権力は、誰かに支持してもらわなくちゃ成しえない。国力は国そのものが無くちゃ成しえない。経済力なんて働く人たちがいるから成り立っているんです！この剣術ちからだって!!誰かが作ったものを使わなくちゃ、やる事なんてできない！沢山の人が協力しなくちゃ、それは決して、絶対に成しえないんですツ!!!」

有らん限りの声で叫んだ吹雪。

!!!!!!

「ほぎけ！結局は誰かの協力を請わなければならぬというなら、それは弱者の中の弱者！虫けらの中の虫けらだ！一人で強くならなければ意味が無いのだ！そうしなければ生きていけないのだ！例え繋がりを持っていたとしても、そいつが無能なら、ソイツの為にやってきた努力は全て水泡に帰す！だから、無能な奴は邪魔だ！うるさい虫けらだ！道端に落ちている石ころだ！そんな奴の為に、時間など割いていられるか！この世は、弱肉強食だツ!!!!!!」

それでも、自分の言葉を曲げない葉緒。

!!!!!!

その構えはすでに秘剣の構えに入っている。

「ハアアアアアツツ!!!!!!」

!!!!!!

「オオオオオオツッ!!!!!!」

そして、互いに大技を放つ。

我流飛天御剣流 九頭龍閃『結』

秘剣・燕返し

葉緒の放った、秘剣・燕返しは、これまでの最高速度を出した。

肉眼では捉える事のできない程のスピードで、吹雪の首を刈り取らんばかりに、その刃を振るう。

刀身のリーチもさることながら、速度でさえも吹雪よりも早い。

確実に先に決まるのは葉緒。

葉緒自身もそう確信していた。

だが、次の瞬間、葉緒の振るっていた長刀がいきなり軽くなった。

「!？」

その違和感に、眼を見開く葉緒。

見ると、なんと、長刀がその中間あたりで、へし折れていた。

九頭龍閃『結』

それは、九つの斬撃を九つの方向から繰り出す九頭龍閃を、一点に集中させるのが、この『結』だ。

九頭龍閃の乱れ打ちで放つ『乱』とは違い、通常の九頭龍閃と同じこの『結』は、以前、時打が大和の砲弾を弾く時に使ったアレは、『結』では無く、通常のだ。

理由としては、ただ単に九つの斬撃をその砲弾に喰らわせて弾けばよかつただけなのだ。

だが、この『結』は、本当に一点に攻撃を集中させ、威力を収束させる為に、武器や防具を破壊するのに有効なのだ。

そして、今、吹雪は、武器を殺すつもりでこの『結』を放ったのだ。

だからこそ、葉緒の長刀は死んだ。

そして、秘剣・燕返しは、不発に終わる。

「ハアアア!!!」

九頭龍閃の放った直後、吹雪は、深く身を沈めた。

そして、大きく踏み込み、飛び上がる。

「龍翔閃ツツツ!!!」

「グハアア!」

そして、渾身の一撃が葉緒の鳩尾に直撃した。



## 我鎮守府へ帰還ス

地面に倒れ伏す、葉緒。

その様子を、息を挙げながら、打刀・影丸を持った右手をだらりと下げる吹雪。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

その刃に、血はついていない。

峰打ちだ。

「ハア……ハア……んっぐ……」

出掛けた唾を飲み込み、深呼吸で息を整える吹雪。

「吹雪」

ビクリ、と体が跳ねる。

表情が強張る。

怒っているだろうか。

そんな不安が、吹雪の心に満ちる。

吹雪は、ゆっくりと振り返る。

そこには、不機嫌そうな顔で腕組みをして、吹雪を睨む時打の姿がある。

「し、司令官……」

吹雪は、そんな時打から、視線を外す事が出来なかった。

時打が、手を伸ばす。

それを見た吹雪は思わず目をつむる。

——怒られる、そして殴られる。

そう思った瞬間だった。

吹雪の肩を誰かが掴んだかと思うと、一気に引き寄せられる。

そして、何か、暖かいものに頭をぶつける。

「……？」

恐る恐る目を開いてみると、そこには、白のワイシャツの生地。

「……良かった」

弱々しく、時打が呟いた。

一瞬、それに目を見開いた吹雪だったが、時打がすぐに離れると、左

手を振り上げ、それを思いっきり振り下ろす。

「ギャン!?!」

とんでもない差のあるアメとムチ。

それに頭を抑える吹雪。

「いたたあ……」

「お前な、提督である俺の許可を取らずに勝手に外出するとかどういう了見だ。それも目的が俺の影丸とか何考えてんだこのバカ。川内から聞き出したのかも知れねえけど、俺にちゃんと外出許可を取りに来て、それなりの理由を述べれば俺だって影丸をお前に託したさ。それに……」

酷く早口な説教が吹雪の耳を突き抜ける。

その時打の様子に、吹雪は、どうにも安心感を覚え、思わず微笑んでしまう。

その時、吹雪の体が光り出す。

「え!?!」

「なんだ!?!」

それに驚く時打と吹雪。

光が収まると、そこには、いつもの白いセーラー服を着た吹雪が、影丸を左腰にさげて立っていた。

体形も元に戻っている。

「あれ?」

「そうか、心意改装は一定時間しか持たないんだっけか」

戸惑う吹雪に冷静に分析をする時打。

「ま、とにかく、今回の事は、帰ったら一週間の謹慎処分＋反省文十枚書け。良いな?」

「は、はい……」

「吹雪!」

突然、どこからか声が聞こえた。そちらへ向くと、神社の門の入り口から、黒髪の女性、長門が焦燥感に駆られた表情へ吹雪へ走ってきていた。

「な、長門さ……」

吹雪が言い終わらない内に、長門は吹雪に抱き着く。

「このバカ！何故勝手にどこかへ行くんだ！心配したんだぞ！」

「…………ごめんなさい」

嗚咽を漏らす長門に、吹雪は、そう微笑んで謝った。

「提督さん！」

「おい無事か!？」

更に、瑞鶴や響夜もやってくる。

「時打！」

「時打くん！」

「剛玄さん、美織さん」

更に、勝義と美織も来る。

「優香は!？」

「あそこです」

そう問い質してくる美織に対し、時打の代わりに吹雪が、長門に抱き着かれた状態で指を指して答える。

その先には、そよ風に揺られながら、木に引つかかっている籠があった。

その中から、赤子の泣き声が聞こえた。

「優香！」

「俺が取ります！」

その籠へ駆け寄る勝義と美織と時打。

「瑞鶴さん…………あの…………」

瑞鶴を見て、口ごもる吹雪。

そんな様子の吹雪に、瑞鶴は微笑む。

「すまないって思ってるなら、行動でとり返しなさい」

「はい」

吹雪は、そう返事を返した。

「吹雪ちゃん！」

「吹雪！」

さらに、入り口の方から声が聞こえた。

「あ、清松さん、重信さん」

「無事だったんだ！」

「つて、時打イ！」

「え？うわ!?本当だ!？」

清松と重信だった。

「清松さん、重信さん。どうしてここに……」

優香を下した時打が、二人の姿をみるなりその様に言う。

「ああ、いや、吹雪ちゃんがここに……」

「うおい!?吹雪、お前その刀どうしたあ!？」

二人も吹雪にかけよる。

「やれやれ……」

そんな様子に、時打は、苦笑いを浮かべた。

「すまない時打。手を煩わせるような事をして」

背後から、勝義がそう謝罪する。

「良いんですよ剛玄さん。俺とアンタの仲だろ?それに……」

時打は、勝義の後ろにいる美織、そして、その美織が抱えている籠の中で眠る優香の姿を見る。

「……貴方には、大切な人を失う気持ちを味わってほしくない」

「そうか……」

その笑みに、陰りが浮かぶのをみた勝義は、そう、申し訳なさそうに答えた。

「時打くん！」

そこへ、清松がやってくる。

「君も疲れてるだろうし、今日は僕の所に泊まっていきなよ。勝義さんは、事後処理で忙しいだろうし」

「そうだな……死んだ組員たちを弔わないとな」

「手伝いましょうか?」

「いや、お前はもう、この街の人間じゃない。お前が、これ以上関わる事は無い」

「でも……」

「時打。お前、『提督』になったんだろう?だったら、お前はお前の戦いをしろ。俺たちは、俺たちの戦いをする。だから、彼女たちと生き

ろ」

そう、勝義は言った。

「……分かったよ。ありがとう。剛玄さん」

そう、深々と頭をさげる時打だった……

「どうだあああ!!!」

「なにをおお!!!」

清松が経営している賭博場にて、響夜と瑞鶴が、丁半で白熱した戦いを続けていた。

「……一の丁!」

「おっしやああああ!!」

「負けたアアアアア!」

どうやら、丁で響夜が勝ったようだ。

「もう一回よ!!」

「おう!何度でも負かしてやるぜ!!」

更に、瑞鶴の連敗。

「ははは……白熱してますね……」

「そうだな。ほれ、ロイヤルストレートフラッシュだ」

「んな!」

一方で、時打と吹雪はポーカーをやっていた。

「ど、どうやって……」

茫然とする吹雪。

「ま、たまたま運が良かったただけだろ?」

と、ケラケラと笑う時打。

「うう……」

一方で吹雪は悔しそうな表情になる。

「あまり賭博に熱中するなよ」

そこへ長門がやってくる。

大量の金を持って。

「おい長門。その金どこで手に入れた？」

「いや、先ほど『ぱちんこ』？なる機械で手に入れてきたんだ。案外面白かったぞ？」

「えー」

啞然とする時打と吹雪。

「お前……いずれ破産するぞ」

「え？」

「もう一回よおおおおお!!!」

「ちよ!?分かったから抱き着くな!?うおおおおお!」

「はあ……疲れた」

楽屋の一室にて、時打は用意されたベッドに倒れる。

そこで、天井を見上げながら、時打は、ふと思いついた疑問を思い浮かべる。

陸上での心意改装。

もとより、時打自身である『飛天童子』をイメージしたのだろうか、艦娘が、本来の戦場である海では無く、陸で戦うなど、前代未聞——  
——という訳ではないか。電と長門、そして大和がいい例だ。

ただ、自分の存在を剣士に置き換えるならいざ知らず、時打が心配しているのは、吹雪の持つ影丸の事だ。

本来あれを作った人物は、その刀を持つ人物に見合った刀剣を作る事を得意としている。

だが影丸の場合、戦国時代の時に作られたもので、その元主が死

に、それが巡りに巡って、大正時代でそれを作った鍛冶屋の一族に返却。そのまま先祖代々に受け継がれ、時打が、『ある事件』と共に持ち出したものだ。

本来、打刀が作られ始めたのは江戸。

戦国時代での主流は『太刀』だ。

打刀と太刀の違いは、刃を上にして左腰に下げた時、刀身の鞘に納める部分、『茎』<sup>なかご</sup>と呼ばれる部分に刻まれた銘が外側となった時は、おむね打刀だ。

なので、その頃では気付かれる事は無かったが、外側に銘を刻んだ影丸は、その時代初めての打刀と言えるだろう。

戦国の世で切り捨てた兵士の血だけでは無く、その間の江戸、明治でも人を斬り続けた影丸。

戦争になれば、当然、一族がその刀を置いて逃げるのは当たり前的事。だが、空襲を受けてもなお、破壊される事なくしぶとく残り続けた。

そして、影丸は、戻ってきた一族の人間によって、『縁起の良い刀』として持ち帰ったのだ。

そんな刀を時打は持ち出したが、自然と手に馴染んだ為に、戦いが終わるまで愛用していたのだ。

ただ、その間で斬った人間の数は数知れず。

三千という数字も曖昧なのだ。

もしかしたら、それ以上なのかもしれないし、それ以下かもしれない。

だが、決してそれに込められた怨念は少なくは無い筈だ。

何故、吹雪の様な、正義感の強い彼女を、影丸は選んだのだろうか

？

それが、未だに不思議でならない。

ふと、時打の部屋のドアがノックされる。

「？」

「吹雪です。司令官」

「ああ、入れ」

時打がそう言うと、ノブが回り、吹雪が入ってくる。

「どうした？」

その表情は、少し暗かった。

「司令官……」

そして、吹雪は、影丸を握る左手に力を込めて、言った。

「……ずっと、一人だったんですか？」

「……」

「ずっと……たった一人で戦い続けてたんですか？」

吹雪が、そう問い質す。

「……どうしてそれを？」

時打は、理解した様な口調で、そう言った。

「影丸の記憶を見ました。貴方は、加賀さんに出会う前……貴方は、黄金連合からも、反乱軍からも殺されそうになっていた。殺しているのは黄金連合の人間のみのお咎なのに……どうして、あの人たちは貴方を殺そうとしたんですか？」

吹雪は、そう問い詰めた。

それに時打は、溜息を零し、手を合わせて俯いた。

「……普通、子供が人を殺すと思うか？」

「……いえ」

「それが理由だ。子供の分際で人を殺すな。子供の癖に悪者殺してヒーロー気取りか、てな。あの頃の金山市の風紀は、乱れきっていたと言っても過言じゃない。反乱軍も、その中身は黄金連合と同じだった。まともな人間は、当時リーダーだった剛玄さんを含めて、一部の組織と幹部だけだった。だからこそ、手柄を俺に横取りされたくないから俺を殺そうとしてきたんだ」

「そして、加賀さんが死んだ……」

吹雪は、辛そうに俯いた。

「あれは、もともと黄金連合が計画してた計画に反乱軍がそれを利用しようとした。俺が反乱軍に入ったのは、剛玄さんの説得のお陰かもしれないが、とにかく、姉さんを殺した奴らを消すにはそうするか



なかった」

ぎゆう、と時打が両の手を握りしめた。

「すでに剛玄さんは、反乱軍の中にいる、独占欲高い奴を消そうと企んでたんだ。もともと、そういう奴を捨て駒としか見てなかったらしかつたからな。そして、革命の日、黄金連合の連中と共に、正統派の人間と共に、そういう奴らを根こそぎ殺した。一人残らず、全員な」  
そう、時打は述べた。

「……………」

吹雪は、その場で、立ったまま、俯いて聞いていた。

「それが、俺の最後の仕事になった。もともと金は殺した奴から取ってたし、良い終着点になったと思ったよ」

そして、時打はベッドに倒れた。

「…………でもさ、そういう奴らにも、家族の一人や二人はいた筈なんだ」

吹雪は、嘆くように自白する。

「どんなクズにだって、血のつながった家族がいて、悪に堕ちなければ養っていけなかったのかもしれない。俺は、そういう奴を何人も何人も殺していった。命乞いをしてきた奴もいた。家族の為に生きようとした。愛する誰かの元へ帰ろうと戦った奴もいた。俺は、そういう奴らを、何千人も殺していった。その結果、この手に残ったのが、姉さんが書き残した、遺書と手紙、そして紹介状と渡すべき相手の名前と居場所だった」

「司令官…………家族が抜けてますよ？」

「それもあるのか…………もう、帰らないって決めてるんだ。母さんとはかく、妹に、血を見せたからな」

時打は、そう言った。

「それって、どういう意味ですか…………？」

吹雪は困惑した。

それは、影丸の記憶に無い事だからだ。

「それを聞くか？」

「…………すみません」

起き上がりながら、時打に聞かれ、吹雪は口籠ってしまう。

「……まあ、お前になら良いだろ。俺になりたいならな」

「ツ……」

そう言って、時打は、言った。

「俺の故郷の町長の息子を殺したんだ。妹の目の前でな」

「!？」

「学校での事だった。昼休みに、妹の元へグラウンドに行ったら、どうやら、妹がソイツに蹴ったサッカーボールをぶつけちまったみたいだな。引き連れてた、取り巻きでアイツを痛めつけて、女子たちと一緒に妹に悪口を浴びせて、とにかく妹を追い詰めていったんだ。当然、止めたさ。だけど、取り巻きに邪魔されて、ダメだった。仕方なく実力行使に出ようと思ったけど、その直前で、奴が言ったんだよ。『有能の兄に見合った無能な妹だな』ってな」

吹雪は、思わず身震いした。

「そこからはタガが外れて、そこにあった木の棒で、アイツの眼にそれを突き刺して絶命させた」

眼は、深く棒などが突き刺されれば、脳に強烈なダメージが浸透して死に至る事がある。

五歳の頃から飛天御剣流の修行をしていた時打だからこそ、人体の事についてかなり詳しく調べていたのだろう。

そして、本気で殺す気があったからこそ、時打は、町長の息子を殺す事が出来た。

「そして、すぐにその場から逃げて、知り合いの鍛冶屋に逃げ込んで、刀を盗んで金山市に逃亡した。思えば、もともと金山市に行つてその内情を正そうとしたからな。良い区切りになったと思うよ」

時打は、自虐する様に笑った。

それほどまでに、滑稽な事だから。

「わ、私……」

何を言ったらいいのか。だが、口が、あまりの話の大きさに、上手く動かなかった。

吹雪が受け継いだのは影丸の記憶。

そこには、影丸が蓄積してきた、主の記憶と、殺した人間の顔と表情。そして、数。

だが、時打が殺したのは、その中でダントツの数だった。

「あまり自分を責めるなよ。俺がやった事だ」

そんな吹雪の頭を撫でる時打。

「こんな血塗れた手でも、誰かを守りたいって思えるだけで、俺は満足なんだよ。それに、これ以上お前たちに、大切なものを失って欲しくないんだ。その為に、俺は、海で戦うお前たちの代わりに、陸で戦ってるんだ」

吹雪は、なおもつらそうに、俯く。

「さ、この話は終わりだ。もう遅い、部屋に戻って寝ろ」

そう言う時打だが、吹雪は、少し躊躇ってから、思い切つて、顔を挙げる。

「司令官」

「なんだ？」

「司令官は、一人じゃありません。それだけは忘れないでください。長門さんや、私たち艦娘だけじゃない。響夜さんもいます、豪真長官もいます、友人の翔真提督や、三鷹提督も。そして、貴方の事を本当に好きだと思っている艦娘（みづな）もいます。それだけは、絶対に忘れないで下さい」

そう言い残し、吹雪は、部屋を出て行った。  
やり切ったという顔して。

「……」

それに、しばし唾然とする時打。

「……はは」

そして、笑みを零す。

「なんか、痛い所突かれたな。こりや、ますます頑張らないとな」  
そう呟く、時打だった。

翌日。

ヒトマルヒトヒト——午前十時。

金山駅。

「お騒がせしてすみませんでした」

そうペこりとお辞儀をする吹雪。

その背中には、包みに包まれた棒状のもの……打刀・影丸が背負われていた。

「いいんだよ吹雪ちゃん」

「そうよ？ 貴方のお陰で優香を取り戻せたんだから、そんな畏<sup>かしこ</sup>まらないくても良いの」

そう言う美織。

「剛玄さんも、金山市の復興。頑張つて下さい」

「ああ。もうお前の様な奴を出さない為にな」

一方で、時打と勝義がその様に会話をする。

「吹雪」

ふと、勝義が吹雪の方を向く。

「あ、はい」

吹雪は、そんな勝義の方を見る。

「……………ありがとう」

「……………はい」

勝義の言葉に、一瞬、目を見開いた吹雪だったが、表情を戻すと、いつもの笑顔に戻り、そう返した。

「おーい！ 切符もう買ったよー！」

「早くしないと置いてくぞー！」

駅の入り口で、瑞鶴と響夜がそう叫ぶ。

「あいつら…………」

そんな二人の様子を見て、やれやれと言った感じで頭をおさえる長

門。

「ははは……」

そんな様子に苦笑する時打。

「さあ、行ってやれ」

「重信さん……分かりました。では、ありがとうございました」

そう、お辞儀をする時打。

「ああ」

「この治安が良くなったら、会いに行くからね」

「それまで沈むんじゃないぞ」

「じゃあね、吹雪ちゃん」

そうして、時打たちは、彼らと別れた。

そして、電車の中で。

「なあ。吹雪」

長門が、隣に座る吹雪に声をかける。

「？ なんですか長門さん」

「あの時、お前は私を守るって言ったよな」

「はい。そうですよ？」

吹雪は、そうあっさりという。

「今でも、それは変わりません」

吹雪は、そう返す。

「そうか……」

長門は、ふと考え込むそぶりを見せると、また口を開く。

「お前が私を守るっていうなら、私はお前を守る。だから、強くなつたってことを証明してくれ」

「……はい」

そうして、彼らは、自分たちの家鎮守府へと帰った。

## 五月雨編

### 孤独の少女

とある海洋にて。

立て続けに起こる、砲撃音と爆発音が響いていた。

「おい!? 艦爆が抜けてきているぞ!!」

「すみません! 瑞鶴が白兵戦に集中していて」

「ル級! 残り二隻です!」

「はつや!? もう三隻目じゃない大和!」

「流石大和型・・・私も負けてられないのです!」

怒号の様に飛び交うそんな会話の中、電がそう言い、目の前のイ級に牙突を叩き込む。

「もう一隻・・・あ」

ふと大和が残り二隻のル級の内片方に主砲を向けた時、そのル級の背後で、軽巡やら重巡やらに囲まれている吹雪を見つける。

だが、追い詰められているのは何故か、取り囲んでいる重巡たちの方だった。

「やっぱり、提督の力を受け継いだけではありませんね・・・」

そう感嘆する大和。

今の吹雪は、改装を済ませて、黒いセーラー服の上に黒のロングコートを着ているという服装であり、その体は、幾分かの成長を遂げ、中学生ぐらいだった体格が一気に高校生ぐらいの体格にまで成長している。

そして、その華奢な体からありえない程の臂力で、右手の鴉羽色からすばの刀身を持つ打刀、『影丸』を振るう。

「ハア!!」

「ギヤア!?!」

右斜め上から飛び上がり気味の袈裟懸けを重巡にすれ違いざまに喰らわす。

更に、その後ろにいた軽巡を振り下ろした影丸を左横に構えてその

まま薙ぐ。

「波龍閃!!」

横一文字。

その攻撃は目の前の軽巡だけでなく後ろに控えていた駆逐艦までもをぶった斬る。

そこへ吹雪めがけて回りの深海棲艦たちが一斉に砲撃。

しかも距離が近いのか全て水平だ。

これじゃあ、どう動こうとも避ける事が皆無。

それこそ、空へ飛ばなければならぬ。

それが可能なのが飛天御剣流なのだが。

その瞬間、吹雪は水面を蹴って空高く飛び上がる！

そして、吹雪がさつきまで立っていた場所に無数の水柱が立ち上る。

『!?!』

敵が全員目を見開く。

「飛天御剣流……」

そして吹雪は、そのまま重巡り級に落下しながら接近。

「龍槌閃『惨』!!」

そして、影丸を逆さまにもった状態からり級のその頭蓋を刺し貫く。

声を挙げる間も無く、絶命するり級。

吹雪は、貫いた後、後ろに後転してり級から降りる。

その瞬間、すぐに海上を全速力で駆け出す。

本来艦娘は、船という概念を持つ事から、まるでスケートの様に海上を滑る様に移動するのだが、その機能を切り替えて、水面を蹴りながら、文字通り、走る事が出来るのだ。

だからこそ、吹雪は、飛天御剣流の『神速』を発動できるのだ。すれ違いざまに、敵深海棲艦を斬り飛ばす。

時には上段から切り落とし、時には下段から斬りあげる。とにかく目に映った敵から斬り伏せていく。

「うっひゃあ……」

そんな吹雪の戦乱怒涛の強さに目の前のヌ級を斬り伏せながらに若干引き気味に声を漏らす瑞鶴。

「すごいですね……」

「ああ、流石、一对多数の戦闘を想定した飛天御剣流だ。そして、それを使いこなす吹雪もな」

翔鶴の言葉に、長門がそう答える。

思想改装を実施してから、吹雪の戦績は著しく上がっていつている。

これも、時打の飛天御剣流を使っている事が大きいだろう。

だが、それでも本家である時打に叶わないのだが。

ふと吹雪が左手を翻し、ロングコートの腰回りの裾をばさりとあげる。

そこから姿を見せるのは、十二センチ単装砲。

それを引き抜き、駆逐艦に向かって拳銃みたく発砲。

これを避ける駆逐イ級。

だが、直後に爆発!!

「っし」

と、爆発して沈んだイ級の横で電がガッツポーズを取る。

魚雷を当てたのだ。

「ナイスだよ電ちゃん!」

「はい!それを後ろ!」

「おっと!」

すぐさま後ろから軽巡たちが放った雷撃を避ける吹雪。

「いいコンビですね」

「そうですね」

そんな二人の様子を見て、そう呟く大和と瑞鶴。



「さあ、そろそろ終わらせよう。斉射用意！」

「はい！」

「瑞鶴、白狼の準備を」

「分かった！」

そうして、もはや一方的ともいえるこの戦いが、程なくして、終わった。

現在の時打の階級は、大佐。

春の大規模作戦の功績、および、黒風、白狼、そして新たに艦攻『紅燕』こうえんを開発し、開発部でおおいに貢献し、結果、時打を一気に大佐にまで昇進させたのだ。

当然、注目されるのは言われるまでもない。

ただ、時打が作ったのは艦載機だけなので、全国の空母たちから賞賛されるのも無理もない。

最も、開発者としての部分だが。

そして、時打は今、大本営、横須賀を訪れていた。

そばには、長門ではなく、羽黒がいた。

八月の定例会の為だ。

「今回は、特に大きな事も無かったな」

「はい。資料をまとめてみましたけど、特に大きな事もなかったですね」

廊下を歩きながら、その様な会話をする時打と羽黒。

「時打」

「ん？長官？」

ふと、時打たちは、後ろから豪真に声をかけられた。

「なんですか？」

「いや、お前に会わせたい奴がいてな・・・」

と、少し気まずそうな態度を取る豪真。

「会わせたい人？誰なんです？」

「ああ、別にお前は良いんだが・・・」

そう言葉を途切らせた豪真は、羽黒をちらりと見る。

「？」

それに首を傾げる羽黒。

「羽黒に会わせてはいけない奴なんですか？」

「いや・・・というよりも・・・向こうが、なあ・・・」

しどろもどろになる豪真。

「？」

「とにかく、これはお前たち黒河鎮守府に関する問題だ。羽黒、というよりも、黒河に所属する全ての艦娘に関わる事だ。とにかく付いてきてくれ」

そう、豪真になされるままに連れていかれる時打と羽黒。

そこは、本営の地下。

薄暗い廊下を、三人は黙って歩いていく。

若干、羽黒がきよろきよろと辺りを見ながら怯えているのだが。

ふと、角を曲がった先に、光が見えた。

どうやら、右側の窓から光が差し込んでいるようだ。

そこへ移動する。

「見て見ろ」

と、豪真は時打に向かってそう言った。

「？」

二人は、窓の中をのぞく。

すると、そこには、深い青色の長い髪をした、一人の少女が、その部屋にたった一つしかないベッドの上で、ちよこん、と座っていた。

「あれは・・・五月雨か？」

時打は、そう直感した。

服装は、セーラー服に似た服装ではなく、病院の患者が来ているようなローブとズボンだが、彼女は間違いなく白露型六番艦『五月雨』

だ。

だが、明らかにおかしい所といえば、時打の知る五月雨は、真面目で一生懸命、ドジっ子な部分もある、まさに王道ヒロインの要素を色々と詰め込んでいるといった様子だ。

だが、彼女からは、それが感じられないどころか、生きているのかと分からない程に、眼が虚ろなのだ。

ベッドの前には、暇つぶしの要素に本などが置かれているが、一度もそこから動かしていないのか、積まれたままの状態となっていた。テレビも埃をかぶっている。

「長官、彼女は一体……」

「それは、彼女が良く知ってるんじゃないのか？」

豪真の方を向いた時打だったが、豪真の視線が、時打の背後、羽黒の方を向いている事に気付き、そちらへ視線を向けてみると、そこには、眼を見開き、まるで狼狽しているかのような表情で、中にいる五月雨を見つめていた。

「な、なんで……どうして……」

「羽黒？」

「嘘……嘘だよ……だって……あの子は……」

「羽黒！」

「!？」

情緒不安定になりかけていた羽黒を、時打は一括する。

「まずは落ち着け」

「はい……すみませんでした」

項垂れる羽黒。その表情は、暗い。

そこで時打は、豪真に向き直った。

「長官、彼女は、五月雨は、俺の前任が転勤になった時に、死んだ筈なのでは？」

これは、電と暁が問題を起こした時に、響が話してくれた時に言っていた、前任、秋村 禅斗の艦娘の筈だ。

その転勤が決まった時、五月雨は、首を吊って死んだのだ。

死んだ……筈なのだ。

「五月雨の首・・・あそこに、痣があるのが見えるな？」

「痣・・・ええ、あります」

五月雨の首には、くつきりと、幅三センチの太い線状の痣が見えた。それも、縄の痕。

「五月雨が、どういう訳かここに送られてきた時にな、ストレッチャーから落ちたんだよ」

「え・・・大丈夫なんですかそれ？」

「それで、打ちどころが悪かったのか良かったのか、それで息を吹き返したんだよ」

「なんですかその荒治療の様な展開は・・・」

豪真のさらっとした言い方に、苦い顔をする時打。

「ただ、その時のアイツの絶望した顔には、面を喰らったがな」と、豪真は、そう言った。

「・・・」

それに何も言えない時打と羽黒。

だが、そんな沈黙を破る様に、羽黒が豪真に問う。

「あの、どうして、五月雨ちゃんはここに・・・」

「彼女の要求だ。ここに、監禁してくれってな」

豪真は、そう述べた。

それに、何も言えない羽黒。

「・・・長官」

「不可だ」

時打の言わんとした事が理解したのか、拒否する豪真。

「しかし・・・」

「もう、誰とも関わりたくないそうだ」

と、豪真はそう言う。

時打は、しばし立ちすくし、拳を握りしめる。その視線を、部屋の中にいる五月雨に向けて。本当に、死人のように、微動だにしていな。

「まあ・・・」

そんな時打に、豪真が気の抜けた声を発する。

「もともとそんな五月雨の心を解きほぐすために、お前を連れてきたんだがな」

ニツと、笑う豪真。

「長官……」

そんな豪真に、茫然とする時打と羽黒。

「ドアはそこだ。だけど気を付けろよ。下手すると、殺されるぞ」

「肝に銘じております」

と、時打は、腰の深鳳の鞘に左手を添える。

そして、豪真が示した扉へ向かう。

ドアノブに手をかける。そして、ゆっくりと、ドアノブを捻った。

「

彼女が、何かつぶやいた気がした。

だが、聞き取れなかった。

時打は、それでもかまわず、扉を閉め、五月雨の前に立つ。

「……お前が、五月雨だな？」

「

何も答えない。

むしろ、動く気が無いようだ。

「俺の名前は天野時打。黒河鎮守府の、今の提督だ」

そして、時打は大きく踏み込んだ。

その瞬間、彼女の体が大きく跳ねるのを見逃さなかった。

そして、ゆっくりと、その顔が挙げられた。

「

その顔は、酷くやつれていて、瞳は虚ろ。窓越しからでは分からなかったが、ここまで酷いとは思わなかった。

だが、その表情は、酷く怯えていた。

「え」

彼女が、初めて声を発した。

その短い音から分かる程、彼女の声は、枯れていた。

「一つ言っておく」

そこで時打は、あらかじめ布石を打っておく。

「俺はお前を連れ戻しに来たんだじゃない。ただ話がしたくてここに来ただけだ。そこを理解してくれれば、後の俺の話は流してくれていい」

時打の言葉に、ただ茫然とする五月雨。

「どうやら、先ほどの言葉が余程の衝撃だったらしい。」

「ま、これから話す事は、今の鎮守府の状態だがな」

「あ、あの・・・」

「ん？」

五月雨が、話しかけてくる。

「あ、あの・・・提督は・・・秋村提督は・・・今、何をしていますか・・・？」

五月雨は、そう、半ば安定しない音程でそう聞いてきた。

「さあ・・・分からないな。秋村提督が今、どこで何をしているのかは、さっぱりだ。ただ、別の鎮守府に行ったって事ぐらいだが・・・」

「そう・・・です・・・か・・・」

時打の言葉に、俯く五月雨。

そこで、時打は耳を澄ませた。

「私がないのに・・・・・・どうやって・・・」

「どういう意味だ？」

「!？」

時打は、あえて聞いた。

それにバツと五月雨は顔を挙げた。

「お前がないのに、どうやって鎮守府に就く事ができたのか、あるい

は、どうやって運営していくのか、そんな感じか?」「――」  
返す言葉も無い、といった表情になる五月雨。

「……」

「ま、そんな事は後回しに、一応は俺の話聞いておけよ」

「いやです」

「即答かい」

五月雨の反応に、若干傷付いた様な仕草をする時打。

だが、五月雨の方は、深刻だった。

「いや……です……」

俯き、頭を抱える。

「聞きたく……ありません……」

「……そうか」

時打は、短く、そう答えた。

「じゃあ、また出直すとするよ。また来る」

「……もう、来ないで下さい」

「断る」

時打が、その様に即答する。

その瞬間、部屋の空気が、一気に下がった。ような気がした。

「――殺しますよ?」

五月雨は、そう、脅した。明確な殺意を持って、時打を睨みつける。

普通なら、ここでビビッて腰を抜かしそうなものだが、散々人を殺してきた時打には無駄な事だ。

「生憎と、そういうのには慣れてるから無駄だよ」

「なら体に教えてあげましょうか?」

「臆装を展開できないの?」

「!？」

時打の指摘に、驚く時打。

どうやら凶星だったらしい。

実は時打は結構鋭かったりする。恋愛事に関してははてんでダメだが。  
響の話聞き、豪真にここに連れてこられた時に、時打は一つの仮

定を立てた。

どうして、五月雨が生き返ったのか。

鎮守府からここに運ばれるまでに、すでに蘇生できる時間は過ぎていた筈だ。

なのにどうして生き返ったのか。艦娘の体の構造は、頑丈で力が常人よりも強い事に加え、生殖器官が機能していない、歳をとらない事を除けば、あとは全て人間と同じだ。

人と同じように呼吸をし、人と同じように体を動かし、人と同じように食べ物を食べる。

だから、首を吊れば、人間同様死ぬ筈なのだ。

なのに、五月雨は生き返った。

偶然にも、発見されるのが早かったから蘇生できた。のなら納得はいくが、おそらくそうではない。

彼女の、艦ふねとしての魂が、身代わりになったのだ。

艦娘の艦装はその魂に直結している。

だから、自分が艦としての自信が損なわれれば、艦装は上手く動かなくなるのだ。

これは、過去に実例のある事から言えるものだ。

そして、今の五月雨は、その艦としての魂を失った、いわば不老の存在でしかないのだ。

勿論、記憶はある。

軍艦としての記憶、この世界に転生してからの記憶。そして、培った経験。

ただないのは、その艦娘としての魂のみ。

人としての魂は、まだある。

「だから、なんだっていうんですか?」

「艦装がなくちゃ戦えないだろ?」

時打の言葉に、五月雨は、不敵に笑う。

ふと、時打は、何か大事な事を忘れていていると思いつく。

そして……明確な殺意を感じた。

「ッ!」



思わず、上体を反らす。

五月雨が、飛びかかってきたのだ。

喉元を正確に、潰す気で。

「な!?!」

「なるッ!」

すぐに時打は、五月雨の来ていたロープの裾を掴むと龍巻閃の要領で右に回転。

そのまま床に叩き着けられる。

「が!?!」

「忘れてた。そういやCQC近接格闘が出来たんだったな」

時打は、額に冷や汗を流しながら、そう言った。

「嘘……」

「嘘じゃない。これでも武術の心得はあるんだ」

そう言うのと、時打は、五月雨から離れる。

「今日はこれぐらいでおひまとさせてもらうよ。またな」

起き上がって、無言でうつむいている五月雨にそう言い残し、時打は、部屋を出て行くこうとした。

「あの……」

掠れた声で、五月雨が呼び止める。

「なんだ?」

時打は、上半身だけを五月雨に向けて、そう聞いた。

「できれば……誰にも……この事は……いわないで……くだ

さい……」

そう、懇願した。

「……それでいいのか?」

「……はい」

時打の問いに、五月雨は、間を置いてそう言った。

「……言っておくが、窓の向こうに羽黒がいるからな」  
「!?!」

時打の発言に、五月雨は弾かれる様に顔をあげる。

「少なくとも、今の鎮守府で、お前が残していったものはまだ残ってい

るからな。だから、いつかお前を説得する。覚悟しておけ」

そう言つて、時打は五月雨の返答を待たず部屋を出て行った。

横をみれば、そこには、心配そうな、泣きそうな様子の羽黒がいた。

「あ、あの……」

「一応、五月雨に言いたい事は言つてきた……つて、長官はどこに行つた？」

「あ、えつと……長官さんはさきほど、部下の方から連絡が入つたみたいで、そうしたら、いきなりものすごく怖い顔で歩いて行つてしまつて……」

「物凄く怖い顔？なんでだ……？」

思い当たる節としては、何か豪真にとつてもものすごくマズイ状況になつたか。あるいは、艦娘の『存在意義』についてで何かを言われたか。

それはともかく。

「行つてみよう」

「は、はい」

そう言い、時打と羽黒の二人は、豪真が歩いて行つたであろう廊下を歩いていく。

もともと、ここまでは一本道で、ただただ長い階段を上つていく。

そして、地下三階であろう階の階段に足を踏み入れた時だった。

「だからここには五月雨ちゃんはいないっていつたでしょう！」

突然、時打の良く知る人の叫び声が聞こえた。

「な、なんでしょう……？」

「急ぐう」

「あ、はい……つてええええ!？」

時打の言葉に同意した羽黒だったが、突然、時打の脇に抱えられた。

それに驚きの声をあげる羽黒だったが、そのすぐに発せられるべき声を発する暇の無く、ものすごい風と共に、彼らは飛んだ。

「ぎゃああああ!？」

「う、流石に重いな」

「酷い!？」

何気ない時打の発言にショックを受ける羽黒。

そう思っている間に、すでに階段の一番の上に到達。

そこで、丁寧を下ろされる。

そこまで来て、誰かが口論しているような声が聞こえた。

そして、時打が扉に手をかけて、ゆっくりと開け……ようとした。

「いい加減にしろ、秋村」

その瞬間、羽黒の中でドス黒いものが渦巻いたのと、時打が勢いよく扉を蹴ったのは、同時だった。

H e l l   t o   y o u

バアアンツ!!!

その様な音が響き、視線が一気にそちらに注がれる。  
その様な音をおこしたのは、黒髪の刀を腰に差した男だ。

「時打・・・!?」

豪真は、そう漏らす。

「・・・」

時打は、俯いていた顔を、ゆつくりと上げる。

その表情を見て、豪真は戦慄した。

キレている。

その表情は、まさに怒りそのもの。

その場に踏みとどまっているのを見る限り、なんとか理性を保っているという事。

だが、何かキツカケがあれば、間違いなく、今、左手で掴んでいる刀を勢いよく抜刀するだろうという程の殺気が滲み出していた。

そして、その怒りの矛先は、今、豪真の目の前に立っている男へ向けられていた。

「おや？長官以外にも人がいたとは、驚きですなぁ」

豪真の向かいに立っていた男が、そう言う。

時打は、その男に向かって、こう言い放った。

「・・・お前が・・・秋村・・・ッ」

その声は、ドスが効きすぎていると言っても良い程に低く、殺気が込められていた。

「ええ。俺が秋村　禅斗だ。今は、舞鶴で提督をやっている」

「ッ・・・!」

時打は歯噛みする。

秋村は未だに提督が続けている。

以前の黒河での所業が、白と断定されている為だ。

艦娘に恐怖を与え、従わせる。

その方法が、惨い事に艦娘を轟沈させる事だったのだ。

使い捨ての駒の様に沈めていき、そして、残った艦娘には、従わなければまた誰かが沈む、という恐怖を受け付ける事で従えてきたのだ。

そんな事を許せる筈が無かった。

「まあいい。豪真長官、話を戻しますが、俺の五月雨をそろそろ返してくれませんかねえ？」

ふと、興味が失せたかのように時打から視線を外し、豪真に向き直る秋村。

その言葉に、反応するものが二人。

「だから言っているだろう。すでにお前の五月雨は一年前に死んでるだろ」

「何を言ってるんですか？知ってるんですよ。貴方たちが、五月雨を監禁してるってね」

「何をばかな事を。一体どこにそんな証拠があるんだ？」

そんな風に口論をする豪真と秋村。

豪真の傍らには、怒りに歪んだ顔で秋村を睨み付ける筑摩の姿があった。

一方で、秋村の傍らには、黒髪のショートカットで、セーラー服の上にジャケットといった服装の少女、駆逐艦の『睦月』がいた。

それも、改二の姿だ。

その表情に、感情など映っていなかった。

「コイツ……ッ!!」

時打は、煮えたぎる何かを必死に抑え込みながら、そう呟く。

ふと、秋村がこちらを見た。

そして、何かに気付いたかのように、醜悪な笑みを浮かべる。

「おう、羽黒じゃないか。久しぶりだなあ。どうしてここにいるんだ？」

そう、秋村は言った。

その時、時打は、自身の怒りが急激に冷却されるのを感じた。





「羽黒オ！」

「そいつを抑えろ」

「はい」

羽黒に駆け寄ろうとする時打に、睦月が立ちほだかる。

「ッ!!」

「!？」

だが、時打は、神速と同時にフェイントをかけて睦月の視界から一瞬にして消える。

睦月が一瞬戸惑ってしまうのと同時に、時打は、睦月の頭上を通り過ぎる。

「おいー羽黒！しつかりしろー！」

「がふ．．．」

抱きかかえて揺さぶるも、羽黒は口から血を流しながら、顔をしかめ、必死に腹の痛みに耐えている。

「何をやってるんだお前は。あんな奴に抜かれやがって」

「すみません」

秋村が、煩わしそうにそう言い、睦月が浮かぬ表情をする。

「ッ．．．」

時打は、その様子の二人に何も言わない。

今睦月がやったのは正当な行為だ。

羽黒が秋村に向かって仕掛けようとし、睦月が自分の提督を守る為に仕方なくやった。

はたから見れば、こうなるだろうし、どっからどうみても羽黒が悪い事には変わりはない。

だからこそ、時打は二人に何もいえない。

例えやり過ぎだとしても。

「まあいい。おいお前、そこどけ」

秋村が、背を向ける時打にそう言う。

「．．．．．なんでだ？」

「そりゃあ、ソイツの『躰』だよ。艦娘が人間に攻撃した事を後悔させてやらなきやな」



「それなら、その責任は、今の提督である俺が負うべきものだ。お前にそんな事をする権利なんて無い」

「今の……そうかあ。最近、黒河で大戦果挙げたって聞いたけど、お前だったのかあ。余計な事をしてくれたよね」

「ッ!?!」

秋村の言葉に、また頭に血が上るのを感じた。

「とにかくそこを退いてくれ。ソイツは俺のものだ」

「お前が転勤した時点でコイツはお前の『道具』じゃない。俺の『艦娘』だ」

時打は、秋村に向かってそう言う。

「チツ、めんどくせえな。おい、やれ」

「はい」

睦月が前に出てくる。

それを見た時打は、痛みに悶える羽黒をおろし、しゃがんだ状態で腰の深鳳に手をかける。

一方で睦月は、ジャケットの左手の袖から、器用な手つきでバタフライナイフを取り出し、刃を出す。

そのまま一歩、また一歩と時打の間合いに入ってくる。

時打は、親指で鍰を押し上げ、いつでも抜刀出来るように構える。

そして、睦月が時打の間合いに踏み込もうとした瞬間。

「やめないかッ!!」

豪真の声で、睦月は歩くのをやめた。

そして、時打も我に返る。

「んだよ。良い所だったのに」

「どこが良いものか。何を考えているんだお前は」

秋村が不満そうに、豪真がその顔を険しくして秋村を睨み付ける。

「羽黒。しっかりして」

「うう……げほ……」

一方で、筑摩は、ダメージを負った羽黒を介抱していた。

「羽黒を頼む」

時打は、押し上げた鍰を元に戻し、筑摩に一言告げ、立ち上がる。

「ちえ、まあいい。行くぞ睦月」

「はい」

秋村の言葉に、短くそう返した羽黒は、黙って秋村についていった。

「ああ、そうそう」

ふと秋村は何かを思い出したかの様に立ち止まり、時打の方を見る。

「あそこはまだ俺の鎮守府だ。間違えるなよ」

それに時打は。

「ふざけるな」

そう一言、返した。

そのまま、秋村たちは立ち去って行った。

## まさかの再開 羽黒の黒

『——じゃあ、羽黒は……』

「しばらく療養だ。かなり深く入ったみたいだからな」

時打が、電話越しに、長門へそう言った。

『まさか奴が……それに五月雨も……』

「あまり言いふらすなよ。言ったら言ったでまとめて押しかけてきそうで、五月雨が混乱しそうだからな」

『ああ、分かった。それで、提督……秋村の奴はどうなった？』

「まだここに残るつもりらしい。どうしても五月雨を取り戻したいみたいだな」

『奴め……それほどまでに手駒を揃えておきたいのか……』

長門が怒りに満ちた声で、そう言ってくる。

「五月雨はもう艤装を展開できない。Ⅱでいえば、陸での仕事に専念させる事ができるんだろ。だけど、その情報をどうやって手に入れたんだ……」

そう、今の問題はそこだ。

秋村は、何故五月雨の居場所を、ましてや生きている事を知る事が出来たのだろうか。

時打が調べてみた所、当然の如く、五月雨は轟沈死という事になっており、どうあっても探そうとは思わない筈だ。

死体を確認したいならまだわかるが、あれはどう見ても生きている事を前提とした行動だ。

「艦娘は都合の良い『道具』じゃねえのに……」

『ああ。私たちは、人間とは違う。だけど、心は、人間と同じだ。悲しければ悲しいし、怒れば怒れる。喜びすら感じられる。だ……』

「ああ、今の政府の内情は艦娘を兵器として見ている奴が多い。だからといって粗末な扱いをすればその分士気は落ちるし、憎悪を積もらせかねない。以前の事例に提督に砲撃した艦娘たちがその鎮守府を乗っ取ったっていう事もあったからな」

『でも、結局は……』

全員沈んだ。本営が意図的に資源を断ち、更に、そこが離島である為、敵に囲まれ、一斉砲火でその島は跡形も無く消し飛んだ。

それが全てだった。

「とりあえず、俺もここに残って奴の動向を探る。吹雪と電をこちらに向かわせてくれないか？」

『分かった、すぐに向かわせる』

「それじゃあ、鎮守府の事は任せたぞ」

時打は、そう言い残し、受話器を戻した。

「ふう」

時打は、そう息を吐いた。

現在、羽黒は横須賀の入渠している。今日中には治るみたいだが、それでも先ほどの羽黒の『闇』については、悪寒を感じえない事は出来なかった。

あれが羽黒の素の表情なのか……

「考えても仕方が無い……か」

時打は、そう結論付け、歩き出す。

その間も、口にした言葉とは裏腹に、考察していた。

分からないのだ。奴が何故、五月雨を欲しがるのか。

五月雨はもう艦娘としての力を失った。

だけど、響の話聞いた限り、そして、先ほど五月雨が襲い掛かってきた時に分かった事だが、五月雨はCQC、近接格闘が可能だという事だ。

それならば、自分に歯向かうものを片っ端から力で抑え込む事が出来るという事だ。

もちろん、数の問題もあるが、今は、おそらくだが同じように『調教』した睦月がいる。

よって、秋村が五月雨を取り戻せば陸での戦力は二人。時打なら二人を同時に相手をするのは問題ではないが、睦月や五月雨の実力は、まだ未知数な所が多い。

五月雨はもしかしたら本気を出していないのかもしれないし、睦月

に至っては、あの脚力だ。

そんな不確定要素の多い二人を相手に果たして自分は勝てるのか。などと不安が頭によぎった時、目の前にある左の通路から誰かがでてくるのが見えた。

「ん？」

ふと、その姿に覚えがあった。

白いコートに黒いスーツ。そして、冷酷ともいえる眼光。

そう、その男は……

「ッ!？」

「ん？」

思わず距離を取る時打。

よって少し後悔した。

銃を使う相手に、距離を取るのは愚策だと。

「……飛天童子か」

「なんでお前がここに……」

そう、その男は、かつて、翔鶴を攫った道真敦也みちざね あつやに雇われていた傭兵的な存在『秋風 達也』あきかぜ たつやだった。

「——つまり、もともと名を売ってつとりばやく政府の人間になりたかったのか？」

「そういう事だ。傭兵業では稼げる金にも限りがあるからな」

羽黒のいるであろう医務室に向かいながら、そう会話をする時打と達也。

「鬼村も鹿丸も、今は別の所で活動している。まあ、犬になるつもりは無いがな。あくまで裏向きに、だがな」

「そうかい」

達也の言葉に、そう返す時打。

「それで、今回は壺条長官に言われて、お前の手伝いをしろと言われた訳だが、何をすればいい」

「秋村 禅斗って奴の動向を探ってきて欲しい。奴が、地下にいる五月雨に近付いたら、とにかく俺に連絡して、俺がくるまでなんとか足止めしておいてくれ」

「なんとかしよう」

達也は、そう言う次十字路を、右に曲がっていった。

そして、時打は、真っ直ぐに歩いて行った。

扉をノックする。

「時打だ」

「あ、時打くん！入って入って！」

中から聞き覚えのある陽気な声と共に、扉が開く。

そこには、扉を開けた主である飛龍、彼女の相方である蒼龍がいた。

「あれ、千歳や千代田は？」

「今席を外してて……明石さんが時打君の作った黒風などの開発に



「うれしい・・・かん・・・さん・・・」

「気分はどうだ？」

「・・・」

羽黒は、そう言ってくる時打を見ると、体を起き上がらせようとする。

だが、力が入らないのか、中々起き上がれない。

そんな彼女に、蒼龍が手を貸す。

「ありがとうございます」

そんな蒼龍に、感謝の言葉をかけ、羽黒は、起き上がった状態で、俯いた。

「先ほどは・・・申し訳ありませんでした・・・」

「艀装の無断展開は鎮守府だけにしろ。だから、なんでお前があそこまで憎悪を燃やすのかを聞かせてくれ。俺には、その権利がある。部下の命を預かる者として」

時打は、そう言う。羽黒は時打から視線を外し、俯く。

そのまま、少しの間を置いて、羽黒は、返事を返した。

「分かりました・・・」

「じゃあ、私たちは出て行った方がいいかな？」

羽黒の返答に、飛龍たちは出ていこうとする。

「いえ、司令官さんの友人でもある貴方たちにも、聞いて欲しいんです・・・この事は、長門さんでも知らない事なので・・・」

そう、羽黒は引き留めた。

「分かった。でも、後悔はしないでね」

「はい」

蒼龍の言葉に、羽黒は頷いた。

### 重巡洋艦『羽黒』

もともと、彼女は自分の姉である、妙高、足柄、那智の三人がいた。当時の彼女は、秋村の行為に苦しめられていた駆逐艦たちの面倒を



一生懸命に見ていた。

そのほとんどの場合、秋村の気に障る事をやった駆逐艦たちの代わりにその暴行をうけた事がほとんど。

その度に、那智や足柄が激昂して、五月雨に返り討ちにあうのが毎度の事であった。

そんな日常の中で、羽黒は駆逐艦たちの為に、街に赴き、こっそりと貯めていた金でお菓子を買って、それを分け与えるという事を毎日していた。

幸いにも、同じ重巡洋艦が秋村の視線をそらしていたのでバレる事はなかった。

だが、誰かが沈んでいくのは一行に減らなかった。

そして、電が沈んで、二年後の事だ。

羽黒以外の妙高型。そして、羽黒に特に中の良かった駆逐艦や軽巡たちが、連合艦隊として出撃した日の事だった。

全員、沈<sup>死</sup>んだ。

とある敵泊地を襲撃せよとの事だった。

そして、全員が沈んだという情報が入った時、羽黒は、目の前が真っ暗になり、気を失った。

眼がさめ、自暴自棄になり、しばらく鎮守府の中を彷徨っていた時、羽黒は、偶然にも、その書類を見つけてしまった。

鎮守府の外にある、誰も知らない、倉庫。

そこに、今までの作戦の、本当の情報が書かれた書類が山のように隠されていたのだ。

中には、艦娘の轟沈記録や、秋村の前任、一ノ瀬を刑務所に送りにする為の計画書もあった。

つまりはそこからガタが外れたのだ。

心が真っ黒いものに塗り潰された羽黒は、全力で執務室に走っていった。

電が沈んだ時も、鳳翔を襲ったあの深海棲艦の事は聞かされていな

かった。

そして、あの倉庫に置かれていた書類には、その事がしつかりと書かれていた。

やはり偽装。自分たちをだまし、ここにいる艦娘を沈める事を前提で作戦を立てていたのだ。

都合の良い、玩具を作る為に。

羽黒は、扉を蹴破るのではなく、主砲で扉を吹き飛ばし、秋村を殺そうとした。

だが、またしても五月雨に阻止されてしまい、両の腕と脚の骨を砕かれた。

そして、地下にある牢獄で、骨折の痛みに苦しみながら、秋村が黒河を去るまで投獄され続けた。

長門が来るまで、ずっと、そのまま。

「――以上が私の受けてきた仕打ちです」

羽黒は、怒りの滲んだ声で、そう話し終えた。

――直後

ドガアアアンツ!!!

「!？」

時打が、自分のすぐ横にあつた壁を、拳で破壊した。

「……………ふざけんなよ……………」

時打は、低く、低くそう呟いた。

「艦娘を使い捨ての道具の様に扱いやがって……………いくら、同じ奴がいるからって……………やって良い事と悪い事があるだろ……………」

艦娘にだって、帰りた場所がある、笑える場所がある、悲しむ事だってできる、泣く事だってできる。なのに、そんな艦娘を殺しに殺して何が楽しいんだ。戦争はゲームじゃねえんだぞ。艦娘は兵器じゃねえんだぞ。帰るべき場所のある『兵士』だぞ……その命を預かってるくせに、海の上じやなんの役にもたない俺たちの代わりに戦つてんのは誰だか分かってんのか。いいや絶対に分かっていない。そういう奴がいるから人類はいつまでたつても勝てないんだよ。奪つても奪い返されるし、もう何年なのか分からない戦争を続けてんの、今更娯楽にありつきたいのか。諦めてんのか。勝てないから諦めんのか。それじゃあ今まで戦つてきた艦娘たちが報われねえじゃねえかよ。俺と同じじゃねえかよ。人類の為に、苦しむ人々の為に、力に怯える人々の為に、今日も必死に死地に出向いてんだぞ……それなのに、それなのにツ!!」

また、壁を殴る。

へこんでいた壁が更にへこむ。

「艦娘は、そこまで都合の良い道具じゃねえ。その気になれば、俺たち人類を簡単に絶滅させる事だって可能なんだ。それを……」

「時打。そこまでだよ。羽黒が怖がってる」

殺気が滲み出ていた時打を、飛龍が咎める。

「あ、悪い……」

「良いよ。こんな話を聞いて、怒らない訳ないからね」

飛龍の言葉に、羽黒の背筋に蛇が纏わりつくような感覚がおとずれた。

その表情は、完全に『怒』そのもの。

それは蒼龍も同じだった。飛龍ほど表にはでていないが、その表情は完全に怒っていた。

「話してくれてありがとうな羽黒。お陰で、アイツを潰す理由が出来た」

(あ、これ、完全にブチ切れてる……)

羽黒は、短い時打との邂逅で今、時打が猛烈に溶岩の様な怒りを滾らせているのが分かった。

「そうときまれば早速行動開始だ。今日中には吹雪たちがくる筈だ。飛龍と蒼龍は、ここに来る吹雪、電と合流したら、電はお前たちと、吹雪は俺と一緒に行動するように言っておいてくれ。それと羽黒がさっき話した事は、お前たちの判断に任せる。とにかくぶっ潰すぞ」  
「了解！」

完全にスイツチの入った三人。

そして羽黒は思った。

この三人を怒らせてはいけないと……そして、こんな素晴らしい提督の元につけて良かったと。

## 搜索活動

ヒトハチマルマル——午後六時。

「つまり、秋村の奴は他にも艦娘を引き連れてたのか？」

『ああ、見る限り、睦月を含め、陽炎と木曾がいる。ちなみにどうやら先にとつておいたホテルに泊まっているらしい』

時打は、電話越しに達也からその様な報告を受けていた。

「木曾は、サーベルとか持つてるから分かるが、陽炎の方はなんでだ……睦月がいるのに、連れてくるなら戦艦だとか重巡とか連れてくるのが妥当の筈だが……」

『それについては俺は分からん。俺は海軍じゃないからな』

「分かってるよ。それじゃあ、また新しい動きがあつたら連絡してくれ」

そうして通話を終える時打。

「どうでしたか、司令官」

「ああ。どうやらホテルに泊まっているらしい」

「ホテル……ですか……」

吹雪が、恨めしそうにそう呟く。

吹雪も、虐げられていた者の一人。

秋村に対して決して浅くはない恨むを持っている。

自分の手でとにかく叩き潰したいだろう。

「一応、長官には許可取ったからな」

時打は、そう呟き、自分の目の前にある資料室を見据える。

そこへ入ると、時打と吹雪は、そこにある資料をあさる。

内容はもちろん、秋村の事だ。

あちらこちらにある資料をあさり、どうにか秋村 禪斗の資料を見つけた事ができた。

「えーっと。出身は神奈川。幼少の時はそれなりに裕福な生活をしていた、と」

「こっちは家系ですね。うわ、父親が元海軍将校ですか……うざい」

「そういう所のプライドが高いつて事だろ。他には？」

「そうですね・・・」

まとめた結果。

秋村 禅斗。

年齢は二十九。

階級は少将。

海軍将校と、金持ちの娘の間に生まれ、それなりに裕福な生活をしてきたらしい。

父親の影響で海軍の就職、それなりに高い成績を納め、無事提督に就任。

黒河では、多数の轟沈者を出すも、海域の奪還に貢献。

よつて転属前は大佐にまで上り詰めたらしい。

そして、舞鶴に入ればその戦果は劇的に向上。

日本海側に出現する深海棲艦を撃滅していつているらしい。」

「・・・胸糞悪」

その資料をしまう時打と吹雪。

「こっちは舞鶴に着任してる艦娘の名簿だな・・・えつと・・・伊勢や日向もいるのか・・・他には・・・げ、武蔵もいる・・・睦月型もいるところをみて、あの睦月は最古参だな・・・」

そう、時打は資料を読み漁る。

他にも、これまでの資源の収入。出撃回数。遠征の回数などの資料を見て見たが、その全てが普通だった。

おそらく、偽装をしているのだろう。

「あ、司令官、携帯鳴ってますよ」

「ん？ああ。達也からだな。なんだ？」

時打は、携帯ガラケーを取り出し、通話ボタンを押す。

「時打だ」

『舞鶴にいた仲間から連絡が入った。轟沈者はいないそうだ』

「は？」

時打は茫然とした。

『轟沈者はいない。だが、解体された奴がいる』

『そういう手があったか!』

『ほかにも、『食事』を制限したり、食事を質素レシヨなものにしたりして、なんらかの『認識』を刷り込ませているらしい』

『その認識ってなんだ?』

『それまでは分からなかったらしい。とにかく侵入してみても分かったのはこれだけだ。後、出撃回数は通常の倍だ』

『それだけ分かれば十分だ。秋村の奴の動向は?』

『酷いものだ。艦娘だけを部屋に残して自分だけ豪華な夕飯だ。おそらく、資源を売りさばいて金に換えているんだろう』

『なんて奴だよ……』

『引き続き監視を続けるが、どうやら動き出すのは今夜になるらしい。それまで起きているな? 飛天童子』

『当然だ。夜戦には慣れてる』

『なら問題ないな。切るぞ』

プツ……と通話が切れる。

「司令官、どうでしたか?」

吹雪が聞いてくる。

「奴を叩き出す算段が立てられそうだ」

「そうですか……」

吹雪は笑わない。

時打が笑ってないから。

それが何を意味をするのか。

一度、飛天童子という人間の体験と記憶を追体験した事がある吹雪だから分かる。

たった一秒の間で、三年という年月を頭に叩き込まれた吹雪だから分かる。

「司令官。命令を下さい」

吹雪は、時打に向かってそう言う。

——時打は笑わない。戦いの中で、決して笑わない。

「私は貴方の艦<sup>ふね</sup>。この身果てるまで、貴方の元で戦い続けると誓った艦<sup>ふね</sup>であり、剣士です。だから、命令を下さい。敵を打ち倒す、貴方の想いを、私に預けて下さい」

吹雪は、そう言った。

時打は、それにしばし茫然とするが、すぐに頷き、口を開いた。

ヒトキュウマルマル——午後七時。

医務室。

「調子はどうですか？羽黒さん」

「ええ。だいぶ良くなりましたよ」

電の言葉に、羽黒は笑みを作り、そう返した。

しかし、まだ淀みは抜けきっていないらしい。

「うん・・・分かった・・・伝えとくね」

部屋の奥では、飛龍が携帯を通して誰かと会話をしていた。

しかし、今終わったようで、飛龍は電と羽黒に歩み寄る。

「どうやら、睦月の他に陽炎や木曾もいるらしいよ」

「陽炎と木曾ですか・・・陽炎の方は、問題ないとしても、問題は同じ刀剣を持つ木曾さんの方ですね・・・」

刀剣、というか近接武器を持つ艦娘は、白兵戦でもそれなりの戦果を叩き出す事例が多い。

伊勢や日向、天龍と龍田。そして例外である思想改装を施し、剣士として目覚めた艦娘。

ただ、問題は、元祖的な存在である伊勢たちと、思想改装の艦娘との剣術の差は、歴然といっても良い程の差がある。

意識の差である。

もともと『艦』としての認識の高い伊勢たちは、砲撃戦を得意とす



るだけあって、剣術の方は、真面目にそれに打ち込んでいら者よりも劣るのは当然。

そして、思想改装は、『流入現象』と呼ばれる脳へ直接、本来なら長い年月をかけて磨かれる筈の技術を叩き込まれるのだ。

そして、それで完成するのが、それに特化した『士』艦娘だ。

されど、時には、電や長門といった例外が存在する。

人と同じように努力し、力を身に付けていけば、おのずとその力は、海上でも威力を発揮されるようになるのだ。

そして、木曾も同じような存在なら、倒すのは容易ではない。

「電ちゃんならどうにかなるんじゃないの?」

「そう簡単に言わないで下さいよ。私の牙突は一撃必殺。だけど当たらなければ意味はないのです。しかも木曾さんの剣術は未知数が多いいのです」

「確かに……」

蒼龍の言葉に、電はそう返す。

「ああ、それと、作戦、立てられたみたいだよ」

飛龍が、そう付け足してきた。

「どういうものなの?」

そして、飛龍は、作戦の内容を伝えた――

「そろそろ時間だな」

秋村は、時計を見て、そう呟いた。

「ほら、いくぞ」

秋村は、自分の後ろにいる三人にそう声をかける。

完全無表情の睦月、眼の下に酷い隈がある木曾、そして、首になにやら首輪のような鉄塊を巻かれた陽炎。

秋村は、改めて滑稽だなど思ったようにほくそ笑み、歩き出す。

「お前たちの同類を迎えにな」

そして、秋村は、メールを送った。

「……動いたか」

達也はそう呟き、アンチマテリアル対物ライフル『ウルティマラティオ・ヘカー  
トⅢ』のスコープから目を放す。

もともと艦娘を狙撃する為に用意したものだだったが、自分をこのように依頼した人物が自分で決着を着けるといつてきたから、狙撃をやめて、こうして監視する事だけに集中しているのだ。

だが、奴らが動いたという事は、こちらも動かなければならない。

「報酬を受け取る前に、コールド死なれてはこまるからな」  
達也はそう呟くと、電話をかけた。

## 夜中の決戦

地下。

「また来たんですか？」

「ああ」

そこで、五月雨はベッドの上で時打と対峙していた。

「ちよいと、外に連れ出しにな」

「なんでですか？」

時打の言葉に、五月雨は訝しむように睨む。

一方で時打は溜息をついて、隠す事無く五月雨にとっては頭をハンマーで殴られたような衝撃を与えた。

「秋村が来る」

「!？」

「だから連れ出しに来た」

五月雨は、体が強張るのを感じた。

あの男がここに来る。

「ど、どうして……」

「それは俺にも分からん。ただ分かる事は、アイツはお前をどうしても取り戻したいらしくてな」

複数の足音が聞こえる。

「ほれ」

「!？」

時打が何かを投げる。

それを驚きながらも受け取る五月雨。

それは、五月雨のいつものセーラー服と靴、それとホルスター付きのコルトガバメントだった。

「扱えるだろ？」

時打はそう聞いてくる。

五月雨は感付いていた、この近付いてくる足音の正体が。

「……どうして……」

五月雨は聞いた。

「どうしてあなたは、ここまで私を守ろうとするんですか？ どうして、私を……貴方の鎮守府にいるみんなを傷付けた私を、助けるんですか……？」

五月雨は、そう聞く。

時打は、間も置く事も与える間も無く答えた。

「お前は俺の艦娘もの一人だから。お前も、まだ黒河の艦娘だろ？」

時打は、笑わずにそう答えた。

「どう……して……どうして……そんな事言えるんですか……私……ずっと……ずっと……みんなを……傷つけてきたんですよ……」

「なら謝れば良い」

五月雨の言葉に、時打はそう返す。

「無様に、誠心誠意に、謝り続ける。たとえ、許されなくても、償っていけば良い。俺は、取り返しのつかない事をしでかした。だから、許されるまで、償い続けているんだ」

「え……」

五月雨は、その言葉の意味が分からなかった。

取り返しのつかない。その言葉に、どんな意味が込められているのか。

「お前も、償い続けるんだよ。そして、真正面から向き合って、謝る。俺は、そうしてきた。だから、お前も、同じ様にして欲しい。それが、俺がお前に送る、精一杯の『謝罪』だ」

そして、時打は、真っ直ぐに五月雨を見据え、頭をさげた。

「遅れて、すまなかった」

五月雨は、困惑する。

何故自分が謝られているのか。

その理由が解らなかった。

「お前が苦しんでいるのに、俺は、気付いてやれなかった。もっと早く、あの男の所業を突き留めていれば、こんな事にはならなかった。だから、すまなかった」

だけど、それで十分だ。

五月雨は、ベッドから降りる。

「五月雨？」

時打は、顔をあげる。

「着替えます。後ろを向いててください」

そう言い、五月雨は、ローブに手をかける。

「そうか」

時打は、五月雨に背を向けて左腰にある刀の柄に手をかける。

五月雨は、一分と立たぬうちに着替えを済ませ、ガバメントの安全装置を外す。

そして、後ろをむく時打の隣に立つ。

すると、部屋の開いている扉から、ぞろぞろと、黒スーツの男たちが入ってくる。

しかも、全員、アサルトライフルとかハンドガンやショットガンを持っていた。

「……一つ良いですか？」

「なんだ？」

「これが終わったら……私は、黒河に行ってもいいですか？」

五月雨は、そう、聞いた。

それに時打は、こう答える。

「行くんじゃないだろ？帰るんだろ？大歓迎だ」

時打は、刀を抜き放つ。

その刀は、刃と峰が逆という不思議な構造をしていたが、不思議と、その人に合っているような気がした。

「そうですか」

ふと、先頭に立っていた男が口を開く。

「天野時打。そこにいる五月雨さえ渡してくれれば、命だけは助けてやろう」

その問い時打は……

「断る」

即座に、首を横に振った。

「そうか、なら死ね」

そして、黒スーツの男たちが一斉に銃口を向けた。

「行くぞ」

「はい」

そして、時打と五月雨は一斉に駆け出した。

同時刻、横須賀水道にて……………

「……………時打くんの予想が当たったわね……………」

足柄がそう呟く。

「ああ。全く、流石歴代主席だ」

那智も同じように頷く。

彼女たちの目の前には、夕立、および神通によって照らされた複数の影をみすえる。

「大丈夫かしら……………」

「なんだ？彼の元教師だから気になるのか？」

「まさか、私が心配してるのは五月雨ちゃんの方よ」

那智の言葉に、おどけるように否定する足柄。

「さて、貴方たちにも、働いて貰うわよ、吹雪、電」

そう言い、足柄と那智は自分たちの後ろにいる吹雪と電を見据え

る。

吹雪の姿は、体が幾分か成長しており、その服装も白いセーラー服から黒いセーラー服へ、その上に黒いロングコートを羽織っており、その腰には、立派な黒鞘の刀。

正真正銘、黒河の吹雪だ。

その肩には、黒河の紋章があつた。

当然、電にも。

「はい！先陣は任せて下さい！」

「壬生の狼の名にかけて！……は!?」

「ふふ、じゃあ、頼むわね」

「任せたぞ」

吹雪と電の返事に、笑みを零す足柄と那智。

『こちら神通！まもなく武蔵の射程距離です！』

「了解したわ。はあ……どうしてこんな時に限って、こつちの大和や武蔵は出撃しているのかしらね」

「まあいいじゃないか。こつちには、時打の愛弟子の電と吹雪がいるんだからな」

「そうね。さあ、行くわよ貴方たち！」

「はい!!」

「……始まったか？」

「はい、先ほど夕立ちちゃんから電信が入りました」

横須賀の執務室にて、翔真の言葉に赤城が答える。

「夜じゃお前は役に立たないからな。戦況を細かく教える事だけに専念しろ」

「はい」

そう言い、翔真は窓の外を見る。

もうすっかり日が沈み、月が闇夜を照らしている。

その闇夜の中で、何が繰り広げられているのか、それは、翔真には分からなかった。

「ハアア!!」

他の男たちより、体躯の大きい男の鳩尾に、龍翔閃を撃ち込む時打。

「ッ!!」

「ぐ!?!」

「な!?!」

五月雨は、両手で持ったガバメントで男たちの持つ銃を撃ち落とし、  
ていく。

階段を駆け上がりながら、時打と五月雨は、特に打ち合わせをした  
訳でもないのに、どんどん黒スーツの男たちを倒していく。

中には、体術で五月雨を抑え込もうとする奴らもいたが、五月雨の  
CCCの練度に敵わず返り討ちにあう者が多かった。

時打にいたっては、銃弾を全て避けている。

「五月雨、急げ!」

「分かっています!」

時打の恐ろしいスピードに、なんとかついていく五月雨。

(は、はやい!?!この人、本当に人間なの!?!)

その速さに目を見開く五月雨。

そう、とにかく速いのだ。

階段を飛び越えると言うショートカットをもつてしても、相手も同



じようにそれで跳び、引き離していくのだ。

ふと、右足を誰かに掴まれる。

「!?」

「捕まえたぞー!」

捕まえたのは、当然、黒スーツの男。

だが、五月雨は冷静に物事を考え、空いた左足で、その男の顔面を踏みつける。

「ぎゃあ!?!」

人の顔面で、鼻は最も神経が集中している場所。

そこを叩かれれば強烈な痛みが走るのは当然の事だ。

だから、黒スーツの男はあまりの痛みに手を放した。

すぐさま時打をおいかける五月雨。

しばらくブランクがあったとはいえ、とにかく時打は速い。

そして気付けば、階段が終わっている所まで辿り着いていた。

時打は躊躇う事なくドアを蹴破る。

その先には当然の様にスーツの男たちが銃を持って構えていた。

そして同時に発砲。

アサルトライフル、ハンドガン、ショットガン、その他もろもろと

にかく乱射してくる。

もはや避ける事は不可能。

万事休す!

「セアアアア!!!」

だが、時打は深鳳を持っていた右手を突き出すと、その手に持っていた深鳳を、まるで扇風機のように高速回転させる。

すると、その高速回転によって生まれた円形の盾が、銃弾を全て弾き飛ばす。

『ナア!?!』

「すごいー!」

それに驚く黒スーツの男たちと五月雨。

だが、それも長く続く訳が無い。

五月雨はガバメントを構える。

目の前では、全力で銃弾を迎撃している時打の姿。

自分はこれ以上、あの人たちを不幸にしてはいけない。

「てえ!!」

引金を引く。

その銃弾は真っ直ぐ飛び、壁にあたり跳弾する。

そのまま跳ね返った銃弾は、男たちの内、一人が持っているアサルトライフルに直撃する。

全弾を撃ち尽くすまで、敵の銃器を全て破壊する。

そして、マガジンを交換するころには、敵も弾切れを起こす。

その瞬間、時打は駆け出す。

その勢いを使って、体を水平にして飛んで体を回転させる。

「我流飛天御剣流 龍巻閃『息吹』ッ!!!」

瞬間、豪風が吹き荒れ、五月雨は思わず顔を腕で庇う。

そして、豪風が吹き終わり、腕をどかすと、そこには、床に倒れ伏している黒スーツの男たちがいた。

「……ッ!!」

「ふう……」

その中で、時打は立ち上がる。

「急ごう、五月雨」

「はい」

振り向いた時打に、頷いて追いかける五月雨。

そうして、幾人もいる黒スーツの男たちを倒していき、港の外に出る。

そして、コンテナの多い、コンテナヤードに入る二人。

「これからどうするんですか!?!」

「とにかく横須賀を出る!それで黒河だ!」

五月雨の言葉に、時打がそう答えた。

その時、コンテナの影から、何かが飛び出てくる。

「ッ!?!」

時打は、その姿を目視した瞬間、すぐさま納めていた深鳳を抜刀。その残光を弾き飛ばす。

その重さに、腕を痺れさせるも、なんとか耐える。

「木曾か！」

「悪いがアンタには死んでもらう」

木曾がサーベルを突き出す。

時打はその軌道を深鳳で逸らすことで回避する。

「後ろ！」

ふと五月雨が叫んだかと思うと、時打は木曾のサーベルを反らしたまま左半身になりつつ、深鳳の柄が上になるように背中に腕を回しながら後ろを向く。

そこには、艤装を展開した睦月が、左手のバタフライナイフを持って突っ込んで来ていたのだ。

時打は、その姿を確認すると、鞘を帯から外し、逆手に持った状態で睦月のバタフライナイフを下から弾く。

更に、その鞘で、木曾の方向を向く僅かな遠心力と臂力で木曾の右脇腹に、鞘の切っ先を叩き着ける。

「ぐあ!?!」

そのまま横に吹っ飛んでいく木曾。

そして、時打は右手の深鳳で睦月を吹き飛ばす。

「うあ!?!」

瞬く間に二人を吹き飛ばした時打。

五月雨はすぐさま睦月へガバメントを向け、時打は深鳳の切っ先を木曾に向ける。

そのまま膠着状態が続く。

だが。

「おいおい何してんだお前らあ」

「ッ!?!」

「……………」

突如、聞こえた声。

それに、身を強張らせる五月雨。

「……秋村」

「……提督」

時打が低い、五月雨が掠れた声で、その声の主の名を呼ぶ。

「よお、久しぶりだなあ。五月雨」

その正体は、かつて、五月雨の提督だった、秋村 禅斗だった……

どちらを選ぶ？

「提督……」

五月雨は震える声でそう呟いた。

「久しぶりだなあ、五月雨」

一方で、秋村は嫌らしい笑みで五月雨に声をかける。

「心配したぞお。お前、ずっと監禁されていたんだからなあ」

「あ、あれは、私が……」

「だけど、もう大丈夫だぞ。お前はもう一人でいる必要なんてないんだからなあ」

秋村は、そう言う。

五月雨は、怯えるような表情で、秋村を見つめる。

「答える秋村」

時打が口を開いた。

「なんだよ？」

秋村が忌々し気に返す。

「なんでそこまで五月雨を欲しがる」

時打は、それだけ聞いた。

「なんで欲しがるのかってえ？そんなの決まってるだろ」

秋村はこういう。

「そいつは俺のものだからだよ」

「なんだと？」

時打は眉間にしわをよせる。

「俺が手塩をかけて銃器全般、格闘技術、工作技術なんかを教えさせたんだぜ？ここまで育てて貰って、恩返しして貰うってのは当然の事だろ？」

「銃器全般……人でも殺す気だったのか？」

「ハッ！そんなの、当たり前だろ？」

時打の問いに、秋村はさも当然の様に答える。

「世の中、人を蹴落とさなきゃ生きていけない。だけど蹴落とすには力と手駒がなくちゃいけないんだよ」

「その為のCQCと武器か」

時打は、忌々し気に秋村を睨む。

「そうだ。それに五月雨、お前はどうしても俺の所に戻らなくちゃならないんだぜ？」

「何を……」

五月雨がそう呟きかけた時だった。

秋村が、指を鳴らす。

すると、コンテナの影から、陽炎が出てきたのだ。

その眼は虚ろであり、その首には、鉄の首輪。さらには、謎のラベルと共に、いろいろなランプやら電子機器がむき出しになっていた。(あの構造にラベル……まさか……)

その仕組みに気付く時打。

それは、五月雨も同じだった。

「爆弾……ッ!?!」

五月雨が、そう呟いた。

その時、木曾が悔しそうに顔を歪めた。

睦月は、相も変わらず無表情だが。

「Eそxのa通cりtりlりy」

秋村が、わざわざ英語で答えた。

それは、首輪の中に仕掛けるタイプのプラスチック爆弾。

「お前ッ!」

「おーっと動くなよ? じゃないとドカン! だからな?」

秋村は、そう言つて、右のポケットから起爆装置らしきもの出す。

「五月雨、戻ってこい。俺にはお前が必要なんだよ」

「人質とつておいて何言ってるんだお前は!?!」

「チツ、うるさいなあ。おい、木曾、睦月」

「!?!」

秋村の言葉で、飛びかかってくる木曾。

一方の睦月は主砲を向けてくる。

「くお!!」

木曾のサーベルをバックステップで避ける時打。

そのすぐあと、木曾は追い打ちをかけるようにサーベルを薙いでくる。

それをさらに下がってかわす時打。

その後もくる追撃をバックステップで避け続け、五月雨からかなり引き離されたとき、不意に木曾がさがった。

時打は、その意図をすぐに察すると、すぐさま睦月の方を見る。

そこには、主砲を向けてくる睦月の姿があった。

睦月は、すぐに主砲の引金を引いた。

時打は、腰を曲げ、引き腰になる状態で頭を下げて回避。

そこへすぐさま木曾がサーベルを突いてくる。

「西洋剣術か!？」

「ハア!!」

連続で突いてくる木曾。

そのスピードは、かなり速い。

常人では見切れない速さだが、時打にはそれは見える。

深鳳で木曾のサーベルをギリギリの所でいなす時打。

だが、その時、時打が高速で突いてくるサーベルを右に避けた。

「!？」

「俺を突き殺したければ、電の牙突を超える技を持つてくるんだな!」

——龍巻閃

時計回りに高速回転し、遠心力をつけた一撃が、木曾の背中に叩き込まれる。

「グハア!？」

そのまま吹っ飛んでいく木曾。

すぐさま時打は睦月の方を向く。

その瞬間に睦月が発砲。それを時打は深鳳の逆刃を使って斬る。

だが、突如、背後から殺気を感じる。

すぐさま時計回りに回転する時打。

そして、背後から突いてきた木曾のサーベルを、またしても右に避ける。

そのまま、また木曾に龍巻閃を叩き込もうとしたその時だった。

「木曾く、分かっているなあ？負けたら、陽炎がどうなるか」  
「ッ!？」

突如、秋村が放った言葉の意味を、瞬時に理解してしまう時打。  
その為に龍巻閃を中止し、前方に転がる時打。

——だが。

ゴギッ

「ぐ．．．!？」

回転の軸足だった右足を捻ってしまう。

だが、すぐに起き上がり、片膝立ちで秋村を睨み付ける。

「お前．．．ッ!!」

「木曾、いいな？負けたら、ドカン！だぞ？」

「ッ．．．分かった．．．」

秋村の言葉に、木曾は悔しそうに顔を歪め、かすれた声でそう答えた。

「頼む．．．死んでくれ．．．」

「木曾．．．ッッ秋村ア!!!」

時打の絶叫。

それと同時に、木曾が斬りかかってくる。

「ッ．．．」

一方で、五月雨は、時打が右足をくじいている事を見抜いていた。  
そして、時打は、これ以上攻撃しないという事を。

「あのままじゃ．．．」

「さくて、五月雨え。今度はお前だ」

「!？」

秋村の言葉で、五月雨は、時打たちの戦闘から目を離し、秋村の方を見る。

「戻ってこい五月雨。それならば、あの男の命も、こいつの命も助けて



やろう」

五月雨は、無性に胸を搔きむしりたくなつた。

こんな下衆ゲスの言いなりにまたならなければならぬのか、と。

だが、自分の為に、他人を見捨てる事なんて出来ない。

五月雨は、後ろを見る。

そこには、痛めた足で必死に木曾や睦月の猛撃を躲し続けている時打の姿。

ふと、時打が五月雨の方向を見る。

「ッ！」

だが、すぐに視線を外し、木曾たちの攻撃をかわし続ける。

五月雨は、拳を握りしめる。

しばしの葛藤の末……

五月雨は、右手に持っていたガバメントを捨てる。

その瞬間、秋村が醜悪な笑みを、一層深くする。

五月雨は、秋村に向かって歩き出す。

「?! さみだ……ぐ?!」

時打が五月雨の名を呼ぼうとしたが、視線を外してしまった事により、木曾のサーベルが、左脇腹を掠る。

「良いぞ。戻ってこい五月雨」

秋村は、五月雨に向かって手招きをする。

五月雨は、うつむいたまま、秋村に向かって歩く。

そして、秋村の目の前に立つ五月雨。

「五月雨」

秋村が、彼女の名を呼び、左手を差し出す。

その時だった。

五月雨が、秋村の左手首を、右手で掴む。

「……は？」

「セアアアア!!!」

間拔けな声を発した秋村だったが、五月雨が声をあげた瞬間、五月雨は左手首を持ったまま回転しながら秋村の懐に潜り込む。

左腕を左脇腹に入れ、そのまま左上腕を左手で掴む。

そして、沈めた腰を頭を下げるのと同時に突きあげる！

その瞬間、秋村の足が地面から離れ、それだけでは無くものすごい勢いがついて、秋村の体が五月雨の前方に投げ出され、背中から叩き着けられる。

「グハア!？」

それで意識がとびかける秋村。

その所為で右手に持っていた起爆装置を手放してしまう。

柔道の代表的な技、『背負い投げ』だ。

さらに、本来なら左手は襟首を持つ為に、腕のみを持って投げるその技の本来の名前は、『一本背負い』。

しかも、相手の体の事を何も考えずに投げる事に特化した投げ方だ。

「くー!」

五月雨はすぐさま秋村が手放した起爆装置を拾う。

それを見た時打は、同じように見ていた木曾をすりぬけ、睦月に向かって走り出す。

「!？」

時打は、右足を大きく踏み出す。

その瞬間、右足に激痛が走るも、時打はそれに耐え抜き、前に大きく踏み出す。

その途端、睦月が主砲を撃つ。

時打は、それを左斜め下から斬りあげた深鳳の逆刃で一刀両断。そして、左足を踏み出し、大きく上空へ飛ぶ。

「!?」

睦月は、そこから撃ち落としに警戒する。

だが、時打は、睦月の頭上を通り過ぎると、睦月のすぐ背中で着地。そして、左足を軸にして、睦月の背中の艤装に横一文字に一撃を入れる。それも、逆刃での斬撃。

「う!?!」

うめき声をあげた睦月だったが、すぐに振り返って、主砲を放とうとしたが、振り向いて主砲を突き出した瞬間、睦月の主砲が砲塔、砲門もろとも切断される。

時打が左から難いだ深鳳を、すぐさま切り返し、主砲を斬ったのだ。

そして、時打は、左手で睦月の腹に掌打を叩き込む。

「ぐう!?!」

そのまま吹っ飛んでいく睦月。

一方で、木曾はぼうぜんとしたまま睦月が吹っ飛ぶ姿を見ているだけだった。

睦月が沈黙したのを見届けた時打は立ち上がり、深鳳を鞘に納める。

そして、右足を引き摺りながら、五月雨の元へ向かう。

「五月雨」

「あ、時打さん……」

五月雨は、両手に起爆装置を抱えたまま、時打の方を見る。

「陽炎さんの爆弾を」

「おう」

五月雨の言葉にうなづく時打。

そして陽炎に近づく時打。

「ひっ……」

「落ち着け。顎を挙げて、首を出せ。じゃないと斬りにくい」

小さく悲鳴をあげた陽炎だったが、時打の声音に、なにかと従う。

そして、言われた通りに顎をあげ、首を曝け出す。  
そこへ、時打は深鳳の逆刃で首輪を切断する。

「あ」

「木曾ー」

時打は、木曾の名を呼ぶ。

「!?」

「陽炎を頼む。提督である俺に介抱されても、不安が残るだろうからな」

「あ、ああ、分かった」

よろよろと立ち上がる木曾は、すぐに陽炎の元へ向かう。

「さて、あとはその起爆装置を……」

「五月雨エ……」

「!?」

突如、憎悪に塗れた声<sup>まみ</sup>が聞こえた。

「俺を裏切る気かあ……!!」

秋村だ。

時打はそんな秋村に糾弾する様に声をかける

「もう終わりだ秋村。この起爆装置と爆弾が上に提出されれば、すぐにお前は軍法会議にかけられて、有罪にされる。無駄な抵抗はよせ」

「終わり？ 終わりだと？」

秋村は、低い声と共に、笑みを作る。

「まだ終わっちゃいねえ。睦月イ!!」

秋村がそう叫ぶ。

すると、睦月がむくりと起き上がる。そして、艤装を分離した。

「睦月……!?」

睦月は、スカートのポケットから、筒状の何かを取り出すと、それを片方を首に押し当て、反対側にあるボタンらしき突起を押す。すると、プシュツという音が発せられる。

「もうやめろ睦月。これ以上争っても意味が……」

「無駄だ」

時打の言葉を木曾が遮る。

「ソイツはもう・・・提督無しじゃ生きていけない・・・」  
木曾は、悔しそうにそう言う。

その意味を理解できなかった時打と五月雨だったが、時打は、先ほど睦月のやった行為で思いあたる事を口にする。

「薬物か・・・!?」

「!?」

それで五月雨もハツとする。

「ハハハハハハハハハハ!!」

「秋村！貴様ア!!」

高笑いをあげる秋村に時打は斬りかかろうとしたが、右足の激痛がそれを止めてしまう。

「ぐ!!」

(さっきの無理が祟ったか!?)

睦月に斬りかかるさいに右足で踏み込んだ時に悪化させてしまったようだ。

一方で、睦月は、虚ろな目で歩み寄ってくる。

「さあ！殺せ！ここにいる奴ら全員殺せええええええ!!」

秋村が、そう叫ぶ。

「くそー!」

羽黒の時から見ても、睦月の近接格闘の強さはかなりのものとみえる。

いま、足を痛めている時打では、うまく戦えるかどうかも分からない。

「提督」

「!」

ふと、五月雨が口を開いた。

「私がやります」

そう言って、五月雨は時打に起爆装置を差し出す。

「な!!いくらお前がイツに同じように育てられたからといって、睦月は臙装をつけた時より、格闘戦闘の方が強いんだ！いくらなんでも無茶だ!」

木曾が、そう叫ぶ。

「大丈夫です」

だが、五月雨は、止まらない。

時打は、差し出された起爆装置を受け取る。

「私には、まだ、やり残した事があります」

五月雨は、ポケットに手を突っ込む。

するとそこから、黒いゴムの手袋が出てくる。

その手袋には甲や指の関節等に鉄板がついていた。

防刃仕様の手袋だ。

「だから、こんな所で立ち止まる訳にはいかないんです」

そして、五月雨は睦月と対峙する。

## 五月雨ならぬもの

対峙する五月雨と睦月。

先に仕掛けたのは五月雨だった。

二度踏み込んで右拳突き出す。

だが、睦月は左腕で顔に直撃する筈だった右拳を反らし、その右腕を左脇に抱え、すぐさま反撃に五月雨の腹に掌打を入れようとする。

だが、それと同時に額に激痛が走る。

五月雨が頭突きをかましたのだ。

そのお陰で視界が一瞬、ぐらつく。

だが、それは五月雨も同じで互いによろめきながらも距離を取る。しかし、先ほどの掌打で腹にダメージを受けた五月雨よりも先に今度は睦月が態勢を立て直す。

そして、低い体勢から顔面に向かって右のショベルフック（ショベルで土を掘り起こす様に繰り出すアッパーじみたフック）を繰り出す。

それをギリギリの所で頭を下げる事で回避する五月雨。

そのまま体を反らし、バック転をしながら蹴りを繰り出す。

それを睦月は急いで右手を引き戻してその蹴りを回避する。

更に、睦月は下がって態勢を低くし、まだバック転中の五月雨に向かって突っ込む。

そして、五月雨がバック転を終えた瞬間、睦月が懐に入り込む。

睦月の左フックが五月雨の右脇腹に入る。

「ぐう!」

そこで五月雨あ初めて苦悶の声を挙げる。

そこへ追撃と言わんばかりに少し距離をとった後に反時計回りに回って左足の後ろ回し蹴りを放つ。

それを五月雨はしゃがんで回避し、睦月の無防備の腹に飛び込み、右手でストリートを放つ。

それでよろめく睦月。五月雨が畳み掛ける。

左正拳。右蹴り。右大振り。左掌打。左蹴りあげ。左正拳。右肘

鉄。

その様な連撃を全て捌ききる睦月。

「くー！」

だが、五月雨は気付かなかった。

睦月が、絶好の機会を伺っていたという事に。

突如、五月雨の右拳が大きくはじかれる。

「!?」

その直後、睦月が右足を地面から浮かせる。

右足を突き出す、上半身を反時計回りに回転させる、左足を強く踏み込む。

それらによって生み出された推進力が五月雨の腹に打ち込まれる。

「ガア!?」

羽黒が喰らった、壁をへこませる程の威力を持つ直進蹴りだ。

そのまま大きく吹っ飛ばされる。

地面を何度もバウンドし、その戦いを見ていた時打の所まで吹き飛ばされる。

「五月雨！」

「ぐ、うう……」

ギリギリの所で後ろに跳んだのが幸いしたのか、ダメージを軽減させる事に成功したが、それでも重い。

なんとか起き上がる五月雨。

そんな五月雨に、時打は、先ほどの戦闘で分かった事を脳裏で秒単位で整理していた。

五月雨は、異常な程に下半身がしなやかで強い。動体視力は、もともと高いのだろうが、地下で一年間何もせず<sup>ブランクを貯める</sup>に過ごしていれば、劣るの<sup>劣</sup>は至極当然だが、もともと高いのは目に見えて分かる。

そして、剣士である時打には分かる。

タックルや突きには、多少の軍人格闘術が混じっているが、その根本にあるのは、剣士としての基礎。

つまり五月雨は、どういう訳か、『無刀の剣士』という存在に成り



立ってしまっているのだ。

ならばなぜ、五月雨は剣を使わないのか。

その理由は至極簡単だ。今まで積んできた訓練の全てが、銃器やナイフなどの軍人として必要な戦い方しか学んでいないからだ。そこに『剣士』という概念は存在しない。

しかし、問題は何故五月雨に『剣士』としての戦い方が混じっているのか。

そこが疑問だ。

だが、そんな疑問を置いておけば、彼女の使う『剣術』が何かが分かった。

そして、その可能性があるのなら……

「五月雨」

「？」

時打は、五月雨の方に手を置き、耳打ちする。

「次の攻撃は左足を前に出して、右足を後ろに、そして、右手と左手で握り拳を作って、顔の横に置け」

「え？」

「置き方は右手が上、左手が下、剣の柄を握る様にだ。そこから……」

そのまま、時打の言う言葉を聞く五月雨。

「……それでうまくいくのでしょうか？」

「それはお前次第だ。良いか？成功するかどうかはお前次第だ」

時打は、そう念押しする。

それを聞き入れた五月雨は、一つ目を閉じて深呼吸をする。

そして、眼を開き、立ち上がる。

時打に言われた通り、左足を前に、右足を後ろへ、左前半身の状態となり、右手を上、左手を下に、刀を持つように構える。

それを見た睦月も、身構える。

——重心を体の外に。

カチツ

その瞬間、五月雨が、CQCではありえない程の速さで、睦月との距離を詰める。

その速さに、睦月は一瞬だが見失う。

その勢いのまま五月雨は、右手を突き出す。その拳が、睦月の腹に直撃する。

だが、その拳は、横にすり抜けてしまう。

「あ!?!」

あまりにも慣れない勢いに拳を突き出すのが遅れてしまい、標準がズレたのだ。

そのまま、睦月の右脇腹の衣服を破りながら、すれ違ってしまう。

さらにその速さについてこれず、足を地面についた瞬間、よろめいてしまう。

それが命取りだった。

振り向く五月雨。

そこには、睦月がいた。

「!?!」

急いで下がろうとした五月雨だったが、時すでに遅く、睦月が両拳を五月雨の胸に触れさせる。

——寸勁スシケン・極ゴク

それが、五月雨に打ち込まれる。

「ハアツ!?!」

音無き衝撃に、五月雨は、吹き飛ばされる事無く、その場に膝を着く。その口から、少なくとも血を吐き出し。

ついには尻まで地面につこうかという時に、睦月が五月雨のセーラー服の胸倉をつかみ、引き寄せ、空いた手で五月雨の胸に手を当てる。

その時、どんつ、と睦月の腹に軽い衝撃。

見ると、そこには五月雨の右手。握り拳で、苦し紛れの一撃を入れ  
たつもりだったのだろうが、力が入らず威力が無かった。

そんな無駄と分かっていながら抵抗する五月雨に対し、哀れだと思  
った睦月は、とどめを刺そうとした。

示現流しげんりゅうにおいて、その剣閃は、雲耀うんよう。そして、その足捌きもまた、  
雲耀うんよう。そして、その足捌きもまた、

それらの根幹となるのが、人体の腰のあたりにある、大腰筋だいやうきん、  
小腰筋しょうようきん、腸骨筋ちようこつきんから成り立つ、腸腰筋ちようようきんによる、腰と脚の関節たる  
仙腸関節せんちようかんせつの稼働。

先ほどの五月雨の構え。あれは、示現流の代表的な構え、『蜻蛉の構  
え』である。

姿勢によって伸ばした腸腰筋により重心を体の外に出しながら、前  
に出した足の膝を脱力すると同時に、大腰筋と小腰筋の収縮で、後  
ろ足を引き抜き、体の上方への浮き上がりを腹圧を高めた腹筋で防  
ぎ、腰方形筋を使い姿勢を制御する。

残る腸骨筋で腸骨を内側斜め前方の正中線にぶつけるイメージで  
振り、そこで得た推進力を全て、大腿筋膜張筋、大腿四頭筋により、前  
方へ運んでいた後ろ足に乗せる。

それらすべてが正しく成功すれば、重心は体の外へ出たままとなり

——踏み込みは不可視の領域に達する。

だが、五月雨のそれは不完全であり、睦月にも見切る事が出来た。

だから横にすり抜けてしまった。

だが、それで終わりではない。

カチッ

その音が聞こえた瞬間には、睦月は吹き飛ばされていた。

「うお!?!」

「な!?!」

「嘘!?!」

「バカな!?!」

その光景を目の当たりにした時打、木曾、陽炎、秋村は驚きの声を挙げる。

示現流には、松村宗棍まつむらそうこんと呼ばれる示現流免許皆伝者がいたが、彼は、それと同時に琉球の偉大な唐手家からてでもあった。表から見る事の出来ない身体からだの深部で起こっている腸腰筋の正中線への衝突。

先に述べた、松村宗棍が使えたときれる秘中の秘。

本来なら踏み込みで発揮される腸腰筋によって稼働した仙腸関節が生む推進力を、足ではなく、胸、肩、肘、手首へと螺旋に伝え、それによって、まるで鞭を振るうが如くエネルギーは加速増幅させ、相手に接した状態からでも、威力を吐き出す。

それは、五月雨の独自の工夫。

それは、砲塔を持たない彼女が、艦としての魂を失って、唯一残った、砲塔。

彼女が、その仕組みを、一度の踏み込みで理解し、そして、それを、自身の体にある、剣士としてのつくりを利用して放った一撃。

時打でさえも予想する事の出来なかった、その一撃。

五月雨は、なんとか立ち上がりながら、そう呟いた。

そして、自分の右手をまじまじと見つめる。

「な、なんだよ今の・・・なんなんだよオ!?!」

秋村が叫ぶ。

「どういう事なんだよ!?! どうしてその事を黙っていたんだよ!?! 五月雨エー!」

秋村がずかずかと五月雨に近付いていく。

「あ!?! おい!」

「待て」

その秋村を慌てて止めようとした木曾だったが、時打が止める。そんな時打を見る木曾だったが、その表情は、何か、一つの確信を  
持っていた。

「教えろー！どうして隠していた!?!」

秋村が、五月雨の射程に入る。

そして、秋村が、五月雨に掴み掛かろうとした瞬間。

カチツ

スイツチ音と共に、秋村は吹っ飛んだ。

「グハアアア!?!」

そのままコンテナに叩き着けられる秋村。

物凄い激痛が秋村を襲う。

「い、いてえ．．!?!な、なにしやがんだ、この．．．!!」

「汚い手で触らないでもらえますか?」

「ツ!?!」

突如、五月雨から放たれた冷酷な一言。

それに目を見開く秋村。

その五月雨の眼は、冷徹そのものだった。

だが、その奥に見える、怒りの炎は、秋村を恐怖へと陥れる。

「哀れだな」

時打の声。

「!?!」

「かつての部下だった奴に、こうも嫌われて、更には吹っ飛ばされて。」

自分のしでかした事の重大さ、そしてその分帰ってくる『ツケ』。その結果がこれだ。おとなしくお縄に着け秋村」

右足を引き摺りながらも、その殺意を全く衰えさせる事無く、秋村にゆっくりと近付いていく。

「く、くそ。睦月イ!!」

秋村が、そう叫ぶ。

すると、睦月が、よろよろと立ち上がる。

「睦月・・・!」

時打が、悲痛な表情をする。

「そこまでして・・・」

「ハア・・・ハア・・・」

睦月は、全くダメージを感じさせない様に、秋村を守らんと歩く。

「もう良いだろ、睦月・・・」

「睦月・・・」

そんな睦月を、木曾と陽炎が、悔しさをにじませた声でそう呟く。

「もう、良いでしょう・・・」

そんな中に、震える声が、一つ。

「もう、良いでしょう!!もはや勝負はついた!これ以上の戦闘は無意味以外のなんでもありません!!!大人しくしてて下さい!!」

五月雨は、そう叱咤する。

だが、睦月は止まらない。

それどころか、五月雨の方向を向いて、今にも飛びかからんと身を

沈める。

「どうして・・・」

「・・・きさ・・・らぎ・・・ちゃん・・・」

「!？」

今まで、返事以外では決して口を開かなかつた睦月が、初めて口を開いた。

「まもら・・・ないと・・・わた・・・しが・・・姉・・・と・・・

して・・・」

「ツ・・・」

途切れ途切れに発せられるその声に、五月雨は、拳を握りしめる。

「良いぞ。やれ、ソイツを殺せ、殺すんだ睦月イ!!」

「ううああああああああああああ!!」

初めての、絶叫。

それと同時に、睦月が、走り出す。

その睦月に、悔しそうな表情を浮かべる五月雨。

互いの射程に、睦月が入る。

そして、五月雨に向かって、寸勁を撃ち込むべく右手を突き出す睦月。

だが、五月雨は、大きく体を後ろに投げ出す。

それは、自ら地面に向かって倒れるのと同義だった。

「!？」

よって、睦月の寸勁は不発に終わる。

一方で、五月雨は、左手を地面に着き、右前半身になり、右掌を、睦月の胸に。

腸腰筋の稼働によって生み出される推進力。それ即ち、足を使わないの同時。

普通、パンチや蹴りは必ず、足の踏み込みがなければ、それほど大きな威力を持たない。踏み込みなどなくても、とにかく足の動きによつては、その威力は大きな力を発揮する。

だが、この五月雨の技は、足では無く、腰の腸腰筋によつて発揮される推進力を使う為、どんな態勢からでも、その威力を吐き出す事が可能。

だから。

カチツ





時打の本気の一撃が、秋村の顔面に叩き込まれる。その顔は歪み、コンテナに直撃する。

「た、たしゆけ……」

何かを言いかけ、がつくりと気絶した。

無論、死んではない。

時打は、それを見届けると、スツと深鳳を鞘に戻した。

「いたたあ……」

一方で、五月雨は、睦月をどかしながら起き上がる。

そして、吹っ飛んでいった秋村の方を見る。

そこには、見るに耐えない程に顔が物理的に歪んだ秋村の姿があった。

「……自業自得です」

五月雨は、それだけを言うと、睦月をその場に寝かせ、時打の元へよろよろと歩み寄る。

「時打さん……」

五月雨は、時打の名前を呼ぶ。

その五月雨に、時打は、手を伸ばす。

そして、そつと頭を撫でる。

「……よくやった」

——初めて、褒めてもらった。

「……はい」

それが、どうにもうれしくて、思わず、そう返事をした。

## 黒河元提督 一ノ瀬悠斗

五月雨が睦月を、時打が秋村を吹っ飛ばした五日後。

横須賀本営、通称『大本営』。

その長官室。

「昨日、舞鶴から無断入港してきた武蔵たちを、横須賀から足柄、那智、夕立、神通、黒河から吹雪、電を使って撃退。および拘束。更に、横須賀港付近のコンテナヤードにて、天野時打、つまりお前と、五月雨が、舞鶴の提督である秋村禅斗と、その部下、木曾、陽炎、睦月の三人と交戦。しかもその前に、地下に侵入してきた謎の集団を全員ノックアウトして、更には秋村の顔の骨格を変えちまうほどに吹っ飛ばして、他三隻を拘束した……何か言いたい事はあるか？」

「「い、い、え、な、い、も」」

長官である豪真の言葉に、時打、翔真、五月雨はそう返した。

「全く……まあ、お前たちのお陰で秋村の違法行為が全てバレたんだ。これ以上の事なんてないな」

昨夜、時打の元へ届いた、舞鶴からの艦隊の制圧と共に、警察が時打たちのいたコンテナヤードに入ってきて、秋村を確保。

睦月は、時打が薬物を盛られている可能性があると言い、すぐさま病院へ、木曾と陽炎は事情聴取の為に、時打と五月雨と共に署に出所した訳だ。

その時に発覚した、秋村のいくつもの違法行為。

薬物、書類の偽装、黒河の前任の一ノ瀬悠斗への捏造、艦娘の異常出撃、質素な食事、劣悪な生活環境、艦娘の異常な行動制限、強姦、そして、艦娘への精神洗脳。

それらの行為が発覚した為に、秋村はもはや有罪確定。

本人は全力で否定しているが、唯一、精神汚染を回避した木曾や陽炎の証言で、秋村の立場はもつと悪くなり、もはや、裁判の余地も無しにと、問答無用で無期懲役の刑に処された。

その際、何故か誰かから裁判の余地を与えろと声が上がったのは、今でも謎のままである。

ちなみに、達也はすでに次の仕事に行ってしまったてここにはいない。

「しかし、時打はともかく、お前まで協力するとは思わなかったぞ翔真」

「友人の頼みです。俺の理にかなっているなら、拒否する必要はないので」

豪真の言葉に、翔真は淡々と答える。

「ふ、友人か。それで、五月雨」

「は、はい！」

突然、名前を呼ばれた為に飛び上がる五月雨。

「克服してくれた何よりだ」

「あ、ありがとうございます・・・」

もじもじとする五月雨。

だが、豪真はそんな五月雨から視線を外し、時打に向き直る。

「そういや、時打。お前の報告書に、五月雨は『示現流』が使えるって聞いたんだが？」

「ええ。あの足のしなりは示現流で鍛えなければありえませんが、五月雨の歩き方を見れば、貴方なら分かるでしょう？『示現流の

豪真』さん？」

「ふ、その名前で呼ばれるのはいつ以来か」

豪真がほくそ笑む。

壱条豪真。

五十代ではあるが、若いころ、示現流の免許皆伝として、その名を馳せた事のある名剣士だ。

その剣術は、先ほど時打が述べた通り、薩摩の最強剣としてうたわ

られた『示現流』だ。

その一撃は、岩をも断ち、あらゆる敵を薙ぎ払ったともいわれる。そして、日本で初めて、深海棲艦を倒した人類としての名を持つ。最も、人である以上、艦娘ほど深海棲艦と戦えない上に、歳には敵わなかったようで、今はこうして机に座って書類仕事をしているのだが。

「確かに、五月雨は示現流の歩法を使っていた。それは日常生活から見ても同じだった」

豪真は、そう言う。

「ま、その原因は多分、俺にあるんだろうけどな」

「え？どういう意味ですか長官？」

「いや、五月雨を建造する時に、な……」

なんでも、自分の髪の毛を大量に建造資材に間違えて捨ててしまっただけ……

「『そんな事?!』」

「いや、まさかこうなるとは思わなかったんだ……」

つまりは、豪真の遺伝子が五月雨の遺伝子に混じって、その体のつくりを取り込んでしまったという事なのだ。

「つまり、五月雨は半分アంతアの遺伝子で出来ているのか!？」

「ある意味、俺の妹でもあるんだな」

「え、じゃ、じゃあお兄ちゃんとお呼びした方が……」

「そこまでしなくていい」

若干危ない発言をした五月雨を咎める翔真。

「それで、とにかく長官の剣術という癖っていうものが五月雨に建造

された際に刷り込まれたって訳だな？」

「そういう事になるな」

だが、五月雨は剣術から離れて生活していた。

だから、その癖というものは、あまり機能しない筈なのだが……  
「剣の才をお前が開花させちまったんだよなあ……」

五月雨が使うあのどんな態勢からでも威力を吐き出す掌打。

彼女曰く、推進力を螺旋に伝えるから『螺旋砲』と名付け、日々、その技の鍛錬に励んでいるのだ。

「そこで、頼みがあるんですが……」

「なんだ？」

「五月雨を鍛えてやってくれませんか？ 剣士として」

時打がそう言う。

「あ、あの、私からも……」

「うむ、五月雨は、十分強いし、艦娘としての力が無いから、普通に一人の女の子として生活しても良いんだぞ？」

五月雨の言葉に、豪真は、そう返す。

それに、五月雨は、一度口籠るも、すぐに口を開いて、自分の答えを言う。

「私は、もっと強くなりたいです」

五月雨は、力強く、答える。

「すでに、軍人として鍛えられた身。ならば、それを無駄にはしていない気がするんです。例え、あの様な男に鍛えられたとしても、私は、人々の為になる事がしたい。その為に、強くなりたいです。だから、お願いします」

そして、深々と頭を下げる。

「私を、鍛えて下さい」

それに、渋る豪真。

だが、時打の苦い顔での諦め顔と、翔真のすまし顔を見て、溜息を一つ吐いた。

「分かった。だが、手加減はしないから覚悟しておけよ」

それを聞いた五月雨の顔がパアツと明るくなった。

「ありがとうございます！」

嬉しそうに返事をする五月雨。

「どうやら、もとのお茶目な五月雨に戻ったようだ。」

「そうだ時打」

「？　なんですか？」

「一ノ瀬の事だが、改めて裁判がされて、今日釈放されるそうだ」

「……」

一ノ瀬。

その名は、時打が黒河に着く前の前任の更に前任の名前だ。

記録によれば、轟沈者を一人も出さず、更には出撃回数がどの鎮守府よりも少なかったと聞く。

そして、唯一、大和とケツコンした人物。

「それで、俺は黒河を解任……って事ですかね」

「それは奴次第だ。それは俺にも分からん」

時打の言葉に、豪真はそう返す。

「とにかくお前が迎えに行つてやれ、それで一度黒河に戻れ。五月雨をつれてな」

「分かりました」

「……」

「不安か？」

「！」

豪真は、先ほどとは一変した様子の五月雨に声をかける。

だが、五月雨は、それを受け入れるように、頷いた。

「はい……私が、あの人を陥れたのも同然ですし……それに、皆に……」

ぎゅうつと、服の裾を握りしめる。

「考えても仕方ないだろ」

ふと、時打が口を開いた。

「言つたら。とにかく謝って償うって」

そう微笑みかける時打に、五月雨は、不思議と心に巣くっていた不安が消える様な感覚した。

「それでは、俺たちはこれで失礼させて頂きます。長官、また後程」  
「ああ。また次の会議でな」

そうして長官室を出て、翔真を別れた時打と五月雨。

廊下を歩いていると、吹雪と電が楽しく談笑している姿が見えた。

「吹雪、電」

「あ、司令官！」

「五月雨さんも、お疲れ様なのです」

声をかけるとすぐに駆け寄ってくる。

「五月雨も、お疲れ」

「はい、吹雪さん」

吹雪の言葉に、五月雨はそう返す。

この五日間で、二人の仲は随分と改称された。

もともとわだかまりが少なかったというのも幸いしたのかもしれないが、とりあえず、こここの部分はかなり良くなったと言っても良いだろう。

「お〜い。話は良いから、刑務所行くぞ」

「刑務所？何故ですか？」

吹雪が首を傾げる。

「そうですか・・・」

「ああ、一応覚悟しておけよ。あの人の時代の頃の艦娘はほとんど沈んで、大和と翔鶴と瑞鶴しか残っていないからな」

「そうですよね・・・少なからず、ショックを受けるかもしれないですしね・・・」

時打から話を聞いた吹雪と電は、暗い表情で刑務所に向かって足を運んでいた。

「あ、見えてきましたよ」

五月雨がそう言う。

見ると、刑務所の門が。



門番の人と話をして、中に入る時打、五月雨、吹雪、電。  
そして、刑務所の扉から、誰かが出てきた。

その人物は、いかにも普通と言った感じの人間だった。  
髪の色は、白髪も混じった黒髪。その体は、刑務所で鍛えたのか海  
軍で鍛えたのか、それなりにしつかりとした体格だった。

身長は、時打よりも若干高い。

その男に、時打は自ら近付く。

向こう、こちらに気付く。

「一ノ瀬 悠斗さんですね？」

「ええ。そうですけど・・・」

男、一ノ瀬はそう答える。

「俺は、黒河鎮守府の提督をやっている天野時打という者です」  
「え！黒河の!?!」

一ノ瀬は、その声を挙げる。

「ええ・・・」

「じゃ、じゃあ・・・秋村くんは・・・」

「? 秋村と知り合いなので・・・」

突然、落ち込みかける一ノ瀬に、疑問を持つ時打。

「あ、ああ。同期なんだ、彼とは」

「そうなのですか・・・」

「もともとプライドが高くてね・・・今、鎮守府にいる皆は・・・」

その問いに、表情を暗くする時打。

後ろにいる吹雪、電、五月雨。

「そうか・・・沈んだんだね・・・」

「・・・分かってたんですか?」

「いや、知らなかったよ。五日前の事を聞くまでは」

そう、自虐する様に笑う一ノ瀬。

「ただ、捕まる時に、次に就くのが秋村くんだって聞いた時には、正直、  
不安しか無かったんだ。でも、その時にはもうどうしようも無くて  
ね・・・その様子じゃ・・・大和も・・・」

今にも泣きそうな表情をする一ノ瀬。

「大和は、まだ生きてますよ」

そこで、時打は告げる。

「え……?」

「翔鶴と瑞鶴も生きています。ですが、それ以外は沈んでしまいました」

そう、時打は、心によぎる悔しさを押し殺しながら、告げた。

「そう……か……」

「どうしますか?一度、こちらの鎮守府に来て、会ってみると言うのは?」

時打は、淡々と告げるも、その声には、どこか、悔しさが滲んでいた。

「……君は、演技が上手いなだね」

「?」

「いや、なんでもないよ。そうだね……上の命令で戻れと言われるかもしれないからね。一応、下見程度に、行ってみるよ」

「分かりました。では、早速電車に乗りましょう。出所早々、悪気はしますが……」

「ああ、気を使わなくていいよ。善は急げって言うでしょ?」

「急がば回れ、という言葉もありますよ」

「吹雪、それは言わなくていい」

吹雪の言葉を咎める時打。

これが、黒河にとって、どんな変化をもたらすのか、それは、まだ誰にも分からない。

## 謝罪

ヒトフタマルマル——午後十二時——正午。

黒河鎮守府。

「ここに来るのも、久しぶりだな」

「ざっと十年ぐらいですものね」

一ノ瀬と五月雨が、そう言う。

鎮守府の門の前で、時打、電、吹雪、五月雨、一ノ瀬は、鎮守府の建物を見上げていた。

「おっし、いくぞ」

そう言い、入っていく時打と電と吹雪の三人。

だが、一ノ瀬と五月雨は、入るのを躊躇うように、その場に立ち竦んでいた。

それに気付いた吹雪は振り返り、彼らの微笑む。

「大丈夫ですよ。きつと、皆受け入れてくれます」

安心させるように、そう言う吹雪。

それで、緊張が少し抜けたのか、表情を緩める五月雨と一ノ瀬。

「そうですね」

「行こうか」

そして、彼らも、続いて歩き出す。

鎮守府に入って、まず始めに出迎えてくれたのは、長門だった。

「おかえり提督」

「おう、ただいま長門」

「長門さん、ただいまなのです」

「ただいま長門さん」

「電と吹雪もな。それと・・・」

長門は、後ろにいる一ノ瀬と五月雨を見る。

その途端。

「すいませんでした!」

「はっ」

いきなり五月雨が土下座をしてきた。

「私の所為で貴方の妹である陸奥さんを沈めてしまいました！こ、この罪は、必ず、償います！だ、だから……」

「ストップストップ！待て！分かった！お前の言いたい事は分かった！」

あまりにも突然の事過ぎて、若干混乱している長門。

「で、でも……」

「私はもう気にはしてない。あんな遺書を書かれていたら、誰だってお前を恨めなくなるよ」

「遺書……？」

どうやら記憶がおぼろげな五月雨。

あの日、五月雨が自殺した日。

その部屋には、紙が一枚、床に転がっていた。

その紙には、こう書かれていた。

『やっと終われる』と。

「お前が、一人苦しんでいたのに、私たちは気付く事が出来なかった。もし、気付けていれば、お前をここまで追い詰める事なんて無かった。だから、私からも謝らせてくれ、すまない」

長門の言葉に、くしゃりと顔を崩す五月雨。

「長門さあん……」

「おいおい。そこまで苦しかったのか？」

そんな五月雨に苦笑いを浮かべる長門。

一応、こちらは片付いたようだ。

「提督！」

「提督さーん！」

「お、翔鶴、瑞鶴」

今度は翔鶴と瑞鶴がやってきた。

「おかえりさない、提督」

「ああ」

「おかえり……って五月雨じゃない。なんで泣いてるの？」

「いろいろあったんだよ」

「ふくん、別に良いけど」

そんな事を時打と言い合う翔鶴と瑞鶴であったが、ふと、翔鶴は、後ろにいる人物に気付く。

「あ……」

そんな声が漏れた。

「？ 翔鶴姉……あ」

瑞鶴も、つられるようにその人物を見て、声を漏らす。

「や、やあ、久しぶりだね、翔鶴、瑞鶴。瑞鶴は随分と変わったね……」

「てい……とく……」

気まずそうにそう言う一ノ瀬に、かすれた声でそう呟く翔鶴。

そして、翔鶴は悔しそうに顔を歪め、嗚咽を漏らし、涙を流す。

「しよ、しょうか……」

「ごめん……なさい……」

翔鶴、漏れ続ける嗚咽の中で、それだけを呟いた。

「ごめんなさい……皆を……守れなかった……沈めてしまいました……私がいながら……みんな……みんな……沈んでしまいました……」

そんな翔鶴に、何も言わない瑞鶴。そして時打。

「いや、良いんだ。君が悪い訳じゃない。悪いのは、秋村くんの策略に引っかけた僕が悪いんだ。決して、君が悪い訳じゃない。もちろん、瑞鶴も」

「提督……」

「提督さん……」

一ノ瀬は、そう言う。

その言葉に、情けない程に顔をくしゃくしゃにした翔鶴が顔をあげる。

「さ、涙を拭いて、いつもの君の笑顔を見せてくれ、翔鶴」

「ぐす……はい」

一ノ瀬の言葉に、翔鶴は、不器用にも笑顔を見せた。

その様子に、安堵する様に笑みを浮かべるその場にいる一同。

「さて、俺は一度執務室に戻ります。一ノ瀬さんは、鎮守府を自由に見て回って下さい。翔鶴と瑞鶴を案内につけましょう」

「分かった」

「私は五月雨と一緒にいます。長門さんは秘書艦として頑張ってください」

「ああ、分かった」

そうして、分かれたのだった。

あらかた、挨拶もすませ、ふと一ノ瀬は、自分の最愛の人がいないのに気付く。

「あれ……」

そんな声を漏らし、鎮守府の庭を歩いていると、ふと、がさり、という音が聞こえた。

「ん？」

そこへ向かってみると、なんと、イヌツゲと呼ばれる垣根に最適な木の中に頭を突っ込んで足をじたばたさせている女性の姿があった。

頭隠して尻隠さず、とはこの事だ。

しかも、見覚えのある人物だった。

「……ぷふ」

笑いを零してしまう一ノ瀬。

「大和、それ隠れてるつもり？」

ビクッ！とその体が跳ねた。

「だ、ダレノコトデスカー」

その人物は、まだ幼さのある声でそう返す。

「いや、無理あるから。出てきてくれないかい？」

「……」

その人物、大和は、しばし沈黙してから、体をイヌツゲから出し、一ノ瀬から背中を向けてその場に座る。

「……こつち向いてくれないかな？」

「……」

一ノ瀬の言葉に、反応しない大和。

「大和……？」

ふと、大和の様子がおかしい事に気付く一ノ瀬。

「……合わせる……顔が……ありません……」

大和は、おそらく詰まっていたであろう喉から、それだけを絞り出した。

それを聞いて、一ノ瀬は、なんだその事か、と思った。

「大和、それは僕が悪いんだ。僕が秋村くんの……」

「私は……大和は……逃げたんです……」

「え？」

その言葉の意味を、理解できない一ノ瀬。

「私は……仲間を見捨てて逃げた……本当なら……守らなくちやいけない……大切なもの……なのに……私は……私……はあ……」

大和が、泣きながら、一人縮こまる。

「ひつぐ……えぐ……」

「……」

両手で顔覆う、そんな大和を、黙って見る一ノ瀬。

だが、一ノ瀬は大和に歩み寄り、彼女を後ろから抱きしめる。

「……大和」

「やめてください……私には……そんな権利は……」

「権利なんて関係ないよ。それに、君は、今こうして戻ってきてるじゃないか」

それで、ハツとするように嗚咽を止める大和。

「僕は、嬉しいんだよ。今、こうして君は戻ってきて、またここで戦っているじゃないか。それだけじゃない、時打くんから聞いた事だけど、今、ここにいる皆と精一杯向き合おうと頑張ってるんだよね？僕

は、そんな君の一生懸命な所が好きになつたんだよ。だから、僕は、君に想いを伝えたい。他の誰でもない、戦艦でもない、僕が好きになつた、優しい大和にだよ」

「でも、私は・・・」

「確かに、敵前逃亡とかは、許されない事だ。それは同時に、仲間を見捨てる事でもあるからね。でも、君は、その事を今、自分の精一杯を持って償おうとしてる。それは、立派な事なんだよ。だから、君はそれを誇りに思っている。僕は、そんな大和が好きなんだから」

それだけで、大和の中で、何かを塞ぎ止めていた何かが、壊れた気がした。

その時、鎮守府で、大きな泣き声が、鳴り響いた。

「本当に良いんですか？」

「うん。今の鎮守府は、君あつてのものだからね」

翌日のヒトマルマル——午前十時。

鎮守府の門の前で、時打と、黒河鎮守府の面々は、一ノ瀬と五月雨の見送りしていた。

「それに、親しい相手が三人だけつてのもね」

「はあ・・・」

一ノ瀬の言葉に苦笑いを浮かべる時打。

「本当に戻ってこないのか？」

「はい。もう私は艦娘としては戦えないので」

一方で、五月雨は長門たちと話していた。

実は昨日、五月雨は黒河にいる艦娘たちに手当たり次第に全力土下座をしまくった結果、あまりにも無様で誠意が高すぎるので、逆に恐縮してしまつて気が抜けてしまったのだ。



だから、彼女を咎めるものは誰もいない。

「でも大丈夫です。修行を終えたら、今度は時打さん……ううん、『提督』の役に立つように頑張ります。それが私の罪を償う『答え』です」  
「そうか……頑張れよ、五月雨」  
「はい！」

「じゃあね、五月雨ちゃん」

たくさんの艦娘から、そう言われる五月雨。

「それじゃあ、大和や翔鶴、そして瑞鶴の事を頼んだよ。僕も、影で応援してるから」

「ありがとうございます。誰一人沈めたりしません」  
そう言い合い、握手をする時打と一ノ瀬。

「そろそろ行きましょう。時間は有限なんですから」

ふと、護送車の運転席の窓から、運転手がその様に言ってくる。

「そろそろか」

「では、気を付けて」

「うん。あ、大和」

「はい？なんでしよう」

ふと、声をかけられた大和は首を傾げる。

「時打くんの役に立つんだよ」

「！ はい！」

「もう十分役に立ってるんだが……」

一ノ瀬の言葉に、頬を赤らめながらも満面の笑顔で返す大和。そして、それに更に苦笑いを浮かべる時打。

「それじゃあ」

「また会いましょう！」

「ああ、また会おう、五月雨、一ノ瀬さん！」

「一ノ瀬さん！いつかまた！」

別れの挨拶と共に、護送車に乗る五月雨と一ノ瀬。

そして、護送車が発進し、彼らは、別れた。

横須賀、壺条邸。

そこは和式の屋敷。

かなり広いみたいだ。

そこに、五月雨は居候していた。

「前に俺が使っていた部屋だ。自由に使え」

「ええ!?大丈夫なんですか!」

「心配するな。部屋は移った」

「あ、そうなんですか……」

浴衣姿の翔真につれられ、上に道着、下に黒の袴といった剣道着姿となっっている五月雨が自室に案内されていた。

「荷物置いたらすぐに道場に来い。そこで父上が待っている」

「分かりました」

何故こうなっているのは、知つての通り、示現流の修行の為だ。

もともと身体が示現流のものになっていく五月雨にとって、家元に住ませてもらうのはこの上ないほどの幸運だ。

一日中、鍛錬をここでやれるし、指導も受ける事が出来る。

こんな事は願ってもみない事だ。

そして、五月雨が道場に入ると、そこには同じように剣道着姿となっっている豪真がいた。

「おうやっとな来たか」

「待たせましたでしょうか?」

「まあな、久しぶりだからうずうずしているんだ」

よくみると、なんだか豪真の身体から熱気を感じる。  
まだ運動をしていない筈なのになんでだろうか？

「そんな事より、五月雨、お前なんだか人に教えを受けるのに抵抗がある様に見えるな」

「……」

ふと豪真にそんな事を指摘され、何も言えなくなる五月雨。

凶星だからだ。

とにかく毎日が苦しい訓練や鍛錬の日々だったからだ。

こちらの体の事を一切考えず、とにかく体に教えるように痛めつけられていったからだ。

休みも許されない、とにかく鍛え続けられたのだ。

身体を壊せば即刻入渠。終わったら

そんな事をされて、まともな精神を保てた五月雨の精神力は高いといえるだろう。

「……」

「だからまあ……」

ふと、豪真がかがんで五月雨の腹のあたりをさわる。

ここで豪真が変な気を起こしたら即刻セクハラと判断されるだろう。

だが、この豪真という男は、惚れた女以外、気に入らない奴は男女問わず殴り飛ばすという性格であるが故に。

カチツ

ものすごい衝撃と共に吹っ飛ばされる五月雨。

(これは……螺旋砲!?)

否、その改良型!

「げほ……ごほ……」

突然の事に、腹筋に力を入れられず、更には吹っ飛んだことで木の床を転がり、咳き込む五月雨。

「実力を見せつけければ、嫌でも尊敬というものが産まれるというものだ」

「ッ……」

それで五月雨は悟る。

(この人……)

この男は、強いと。

「流石です、我が師」

「お、良い響きだ」

そうして、五月雨の修行が始まった。

## 黒河大抗争編

馬坂 葉子

夜……

山々に囲まれた海岸に、建物が一つあった。

そのコンクリートの道を一人歩く女性。

そんな少女に近付く影が二つ。

二人とも男だ。

足音を忍ばせて、そつと少女に近付く男たち。

片方の男の片手には、ガーゼが握られていた。

そして、そのまま背後から掴み掛かろうとした、その時だった。

「excuse me」

「!」

「少しだけ眠っていただきます」

背後から聞こえた声の正体を確認する前に、重い衝撃によつて地面にもんどりうつて倒れる男二人。

「ふう」

「ありがとうございます、提督」

女性……大和がその様に礼を言う。

「いや、礼を言うのは俺の方だ。悪いな、こんな事に付き合わせて」

それに答えるのは、この建物、鎮守府の主ともいえる『提督』の地位についている男、天野 時打だ。

「いえ、前から仲間を攫った奴に『お礼』をしなければならぬと思ひましてね」

「わりと物騒な事いふなお前は」

「しばらくしばらくと男二人を拘束する時打。」

「しかし、これでもう四回目か」

「二回目は司令官が四月の定例会に、二回目は大規模作戦の時、三回目は十二月の十五日に提督のしている前で、ですね。こつとも懲りずに来ているとなると、流石に憲兵を用意する必要がありますね」

憲兵とは、陸軍から選ばれる、鎮守府を警備する役割を与えられる人材の事だ。

この黒河は、数少ない、『隠蔽されている鎮守府』である為に、憲兵はいないのだ。

その理由としては、わざわざ身に来る一般人がいないから、バレていないから誘拐される可能性も低いから、とかが主な理由だ。

他にも細かい理由もあるのだが、それを言ったらキリが無い。

現在、季節は冬。それも、時打が着任してそろそろ一年になろうとしている。日付は二月八日だ。

もう秋である。

「そろそろ、大元を潰さないとダメだよな・・・」

「ですな・・・」

こうも連続で来ているとなると、そろそろその原因となっているヒューマンショック奴隷売り場を潰さなければならない。

この間、瑞鶴が黒河の情報屋である三柱 刃馬の所に行って、その奴隷売り場の事を聞いたら、どうやら、人を売った金で黒河の大組織に賄賂を渡して媚を売っているらしい。

ちなみに、前に潰した道真の事は、組織はそれほど重くみていなかったらしく、すぐに警戒態勢を解いたらしいのだ。

「それにしても、提督、髪が伸びましたね。それもかなり」

今の時打は、背中の背中半分あたりまで髪が伸びているのだ。

一言で言って、一年でここまで伸びるなど異常である。

しかも、女性の様になりサラサラなのだ。傍から見れば、女性と間違われても何も言えない程だ。もともと女性らしい顔付きである時打にとっては、これは変装にはかなり役に立ちそうだ。

「ああ、そうだな・・・そろそろ髪を切るべきかな」

「というか、そこまで伸ばすなんて・・・女装趣味でもあるんですか？」

「・・・・・・・・」

そこで黙りこくる時打。

「・・・・・・・・え？」

「勘違いしないでくれよ大和……実は子供頃に母さんを真似て伸ばしてたんだ……いや、マジで……」

とんでもない事を暴露する時打。

「とはいっても、流石に邪魔だな……」

「というか、誰かに指摘されるまで対処しなかつたんですか？」

「面目ない」

時打は、そう言つて、自分の左手首にある黒い髪留めで、髪を結う。

「……」

そこで大和は、彼に、とある艦娘の面影を浮かべてしまう。

かつて、自分と最後を共にした、あの――

「ん？どうした大和」

「え、ああ、いや、なんでもありません」

「そうか？まあいい。こいつら運ぶぞ」

「分かりました」

そうして、二人は縛られながらのびている男二人を運んでいった。

翌日、ヒトハチマルマル――午前八時。

「今日から、憲兵がここに着任する事になった」

その場の空気がざわざわと騒ぎ始める。

「理由は皆、知つての通り、ここ最近やつてくる人攫いどもだ。以前に翔鶴が攫われたお陰で、調子に乗つて攫いに来る奴が多くなつていやる。一応、俺の知り合いである長官が選んだ人材だから、お前らを無碍むげに扱うという事はしないと思うが、くれぐれも仲良くしてやつてくれ」

「あの……」

時打の言葉に、手をあげるものが一人。

駆逐艦の三日月だ

「着任するのは、何人なんですか？」

「二人だ。内一人は期間限定だがな」

「二人？何故それだけなんですか？」

「なんでも、大人数で一氣に着任させたら、お前らが混乱するだろうから、だと」

時打は溜息混じりにそう言う。

「提督さん」

「どうした瑞鶴？」

「響夜の事はどうなるの？」

「それについては、もうとっくに長官に言っている。お陰で『お叱り』を受けたがな」

と、時打は苦笑いをする。

実際、長門もその現場を見ており、その時の時打の苦笑いっぷりを見て、つられて笑ったという。

「とりあえず、十二時にそいつらは来る。それまで気長に待っていてくれ。それじゃ、今日は解散」

その一言で、艦娘たちは解散した。

それから数時間後……

「今日の執務は、これで全部だな」

「はい。資材の量もしっかりと計算しました」

時打の言葉に、今日は休暇をとっている長門の代わりに秘書艦を務めている霧島がそう返す。

ふと、霧島が時報をする。

「そろそろヒトフタマルマルですよ。提督」

「っと、そうか。艦娘には体内時計があつて、寸分狂いなく時間を確認できるんだっけか？」

「はい」



もともと、軍艦だった頃には当然、艦内に時計がある訳で、その時  
のものが体に時計的な作用をほどこしている様なのだ。

「じゃあ、そろそろ正門の方に行くか」

そうして、門の方に行く二人。

するとそこには人だかりができていた。

おそらく、今日くる憲兵の事が気になってやってきたのだ。

その中には響夜もいる。

「よう」

「お、遅かったじゃねえか時打」

「少し時間がかかってな」

「つというか、今日誰が来るとか聞いてないのか？」

「ああ」

響夜の言葉に、そう返す時打。

すると天龍が鎮守府につながっているトンネルを見て、声を挙げ  
る。

「来たぞー！」

回りが一気に騒めく。

「そろそろですね……」

霧島が緊張した様な声音でそう呟く。

鎮守府の門の前に、黒いリムジンの様な護送車が止まる。

そして、護送車の扉が開き、出てきたのは……

「やつほー、天野、髪伸ばしたー？」

茶髪でポニーテールの女性だった。

「ま、馬坂!?!お前だったのか!?!」

その女性、馬坂と呼ばれた女性に驚く時打。

「よう」

更に反対側からは達也が出てきた。

「達也!?!お前もか!?!」

「期間限定という事でな」

思わぬ人物に驚きを隠せない時打。

「達也は知ってるけどよ……女の方は知り合いか？」

「ああ、俺がまだ憲兵学校に通ってた頃の同級生だ。名前は、馬坂 葉子」

ふと、時打の口元に笑みが浮かぶ。

「しっかし、お前が来てくれるなんて嬉しいよ」

「私の方も、貴方が所属してる鎮守府につけて嬉しいわ」

互いに歩み寄る時打と葉子。

しかし人混みに紛れていた吹雪は見ていた。

「あれ？なんで刃出してるの？」

電も見た。

「あれ？なんかあの人、足の動きが少し慎重な気が・・・」

次の瞬間、時打と葉子の姿が霞んだかと思うと、高い金属音が鳴り響いた。

『!』

その場にいる一同が一斉に驚く。

いつの間にか時打が抜刀し、女性が蹴りを入れたのだ。

そのまましばらく硬直していた二人だったが、すぐさま二人同時に振り向く。

「腕は鈍っていないみたいね」

「お前も、前より速くなっただんじやないか？」

「そうかもっね!!」

ふと女性が深く沈みこんだ。

「お前ら、少し広がってくれ」

時打がそう言い、刀を横に水平に胸元辺りに構えたかと思うと、丁度、そこへ女性の足が直撃する。

踏みとどまった時打は、葉子の蹴りの威力が完全に消えたのと同時に、時打は刀を上段に構え、振り下ろす。

それを、葉子はしなやかな動きでかわす。

「やれやれ・・・」

一方で達也は溜息をついていた。

「初めて会った時から思っていたが、本当に好戦的だな。奴は」  
「おいおい、これ止めなくてもいいのか？」

「別に俺が止める事のものじゃないだろ」

響夜の言葉に、そう返す達也。

一方で、時打と葉子は、もの凄い速さで激闘を繰り広げていた。

時打は刀で、葉子は足のみで連撃をぶつけてあわせていた。

ふと時打が飛び上がる。

「やっばー!」

それを見て葉子は笑いながらも冷や汗を流す。

「飛天御剣流 龍槌閃ツ!!」

時打は、落下の威力を使い、刀を振り下ろして地面を砕く。

それを避ける葉子。

「あつぶなく。でもま、そっちも技使ってくるなら、こっちもやらない

と、失礼だよね!」

葉子はそう言い、腰を落とす。

馬坂流 瞬踏しゅんとう

そして踏み込んだかと思うと、目にも止まらぬ速さで時打の懐に入り込み、左足で直進蹴りを放つ。

瞬く間に相手を踏み倒す。

それがこの瞬踏の名の由来。

しかし、それを黙って受ける時打ではない。

すぐに右へ回避したかと思うと、そのまま遠心力を付けるように回転。

飛天御剣流 龍巻閃

しかし、葉子はその背後から迫る一撃を、すぐさま突き出した左足を引き戻して、その足で思いつきり地面を蹴り、後転宙返りで回避する。

そのままもう一回で後ろにバック転をしたかと思うと、距離を取る。

「ひゆう、さっすが」

「お前もな。さっきの瞬踏も前より速くなってる」

互いにほくそ笑む時打と葉子。

そのまま続行となるとされていたが……

「はいはい、そこまですよ」

「ん？」

「吹雪」

そこへ吹雪が割り込んでくる。

「戦いなら後でいくらでもできるでしょう。それよりも、皆さんに紹介した方が良いんじゃないんですか？」

「つと、そうだな。勝手に戦いに没頭している場合じゃなかった…」「うゝ、もうちよつと楽しみたかったのにゝ」

吹雪の仲裁によつて中断させられる戦闘。

突如始まった戦いが終わってくれた事でホツと安堵を息を漏らすその場の一同。

「そんじゃ、改めて」

葉子はピシツと気を付けをして、敬礼をする。

「本日付けで、この黒河鎮守府の憲兵長を務める事になりました。馬坂流闘技免許皆伝の馬坂 葉子です。よろしくお願いします！」

そんな元氣な挨拶に、周りにいた艦娘たちが毒気を抜かれたように茫然とする。

「……あれ？」

それに首を傾げる葉子。

そんな空気を変えるように、今度は達也が前に出る。

「秋風達也だ。今回は、一ヶ月の間ここで憲兵をする事になった。よろしくとだけ言っておこう」

と、それだけ言つて、あとはだんまり。

「……神通」

「はい」

ヌツとどこからともなく音を出さずに出てくる神通。

『うわあ!?!』

それで一部を除く全員がものすごいアクションで驚く。

一ヶ月前の改装で川内ともども改二になったお陰で、ある程度、服装に変化があり、額には鉄の額当てが付けられていた。

「案内してあげなさい」

「はい」

時打がそう言うのと、神通はうなずき、二人に近付く。

「こちらです」

「あ、うん……」

「分かった」

葉子は引き攣った笑みを、達也は真顔でそう言い、神通についていった。

「さて、質問など皆したいだろうけど、今日は休暇だ。暇を適当に潰しててくれ」

時打がそう言うのと、その場にいた艦娘たちがそれぞれ解散していく。

その中で、時打は、改装して、神通の様に忍者に似た格好をした川内に近付いた。

「で、前に話してたもの凄い足技を使う奴が言ってたけど、それがアイツなんだ。どうだ？感想は」

と、時打は川内に近付くなりその様に言ってきた。

「……」

一方の川内は茫然としていた。

「凄まじかったか？」

時打が、更に問いかける。

「……うん」

「そうか。弟子入りしたいなら、好きにすれば良い。自分で道を見つけてるのは良い事だ」

時打は、それだけを言い残し、立ち去っていく。

そして、その場に残ったのは川内だけだった。

「……私も……強く……」

川内は、それだけを呟いた。

黒河市のどこかにある、奴隷売り場にて。

「またか……」

そのの主と思われる男が、忌々し気にそう言う。

「はい。どうやら、あの場所には強力な用心棒がいるようでして」

それに答えるのは、部下と思われる男性。

「チツ、良い収入源だつてのに……仕方ない、そこを大人数で襲うぞ」

「はあ……」

「他の同業者を集めるぞ。決行は一週間後だ」

「へくえ。面白い事を考えてるねえ」

『!?』

突如、彼らのいる部屋の隅から、子供の様な声が聞こえた。

「アタシもその話に混ぜて欲しいなあ」

次に聞こえた声で、部屋に出来ていた影から、一人のすらりとした足をした少年が出てきた。

「こ、これは、弘斗様、何故ここに……」

その姿を見た男たちは慌てて畏まる様に頭を下げる。

「べつにつく、面白い話が聞こえてきたから、よつてみただけ。それできつきの話だけど、なにになに？もしかしてとても強いのか？その用心棒って人」

「え、ええ……これまで何度もそこへ向かった同業者がいたのですが、全てその場で捉えられたらしくて……」

「そうなんだ。じゃあ、その人も速いのかな？」

「ええ。おそらくは」

踊る様にその場でステップする少年。

「ふくん。それじゃあ、アタシも手伝ってあげようかなあ。その襲うって奴」

「え?!いや、わざわざ貴方の……ほ?!」

「本当にごいいますか?」

部下が弘斗の言葉に思わず反対しようとしたが、上司が部下の腹を

殴って阻止、そしてまるで了承するかのよう聞いてくる。

「うん。だって面白そうだし」

『十王』の一人に手伝ってもらえるとは、光栄の至りでございます」

上司の男が、その様に言う。

「あ、そうだ。十王といえは、健吾もこの話乗っかりそうだな」

「健吾様でございますか？」

「うん、あの人、とても好戦的だからね。他にも部下を連れてくるよ」

「ありがとうございます」

「それじゃあ、決行の日になったら呼んでね」

そう言っ、影に消えていく少年だった……

「ん？」

「？ 提督、どうかしたんですか？」

ふとお茶から目を放し天井を見上げた時打。

その様子に、一緒にお茶を嗜んでいた翔鶴が気付く。

「いや、なんか寒気が……」

「……近いうちに何かがおきそうですね……」

時打のその呟きに、翔鶴も冗談じゃない苦笑いを浮かべた。

「それにしても、提督って髪が結構伸びやすいんですね」

「まあ、昔は切るのが面倒だったから、こうして伸ばしてたんだがな」

「他の人から見たら女性って間違われますよ？」

「そうかもな」

翔鶴との会話を弾ませる時打。

「それにしても、似てるなあ……」

「何に？」

翔鶴の何気ない一言に、時打が問いかけてくる。

「軽巡の矢矧さんですよ。提督、今その人にとても似てますよ？」

「そうか・・・母さんの名前も『矢矧』だったけど、思い出してみると、確かにそうかもな」

時打はそう言い、耳の前にある髪の毛をいじりだす。

「へえ、そうなんですか・・・もしかしたら、提督のお母さん、艦娘かもしれないね」

「まさか、そもそも艦娘じゃ子供を作れないだろう？」

生殖器官が使えない事と歳をとらない事が、唯一『人間』と『艦娘』を区別する方法だ。

「そうですね・・・」

それを聞くと、何故か悲しい気持ちになる翔鶴。

「まあ、確かに、子供の頃は父さんよりも母さんの方に近い感じもあったし、そもそも親父は俺が三歳の頃に死んでるんだ」

「え、そうなのですか・・・？」

それを聞いた翔鶴の眼がうるみ出し、それに気付いた時打が慌てて誤魔化す。

「で、でも、父さんの残してた『るろうに剣心』があつたお陰で、今俺はこうしてあの時お前を助けられたんだし、良い事もあつたんだ。お前が気に病む必要なんて無い」

それに、と彼が続ける。

「俺は、お前らの笑顔を守れてる事が、一番嬉しいんだ」

「・・・」

時打の、悲しそうな笑顔。

そこに、一つの感情を滲ませて。

だが、時打はそんな空気を変えるように話題を変えた。

「そーいや、川内は今頃どうしてるかな」

「あー、そーいえば、今回着任した憲兵さんって、提督の知り合いでしたよね」

「ああ、馬坂っていう、四国じゃ有名な家の人間なんだ」



「四国の・・・？それがなんで横須賀の憲兵学校に・・・」

「なんでも、世界を知る為だとか・・・」

「ははは・・・」

時打の答えに、苦笑いを浮かべる翔鶴。

「さて、そろそろ見回りに行こうか」

「あ、でもそれは憲兵の仕事じゃ・・・」

「あ、そうだった・・・」

「へーイ、テートクー！」

「どわあああああああ!!!」

突如、扉が開け放たれ、その様な口調と共に誰かが入ってくる。

その瞬間、時打が恐ろしいスピードで執務机の後ろに隠れる。

「え？え？」

そして翔鶴は何故、時打が隠れたのか理解できずに混乱していた。

「ハッハッハー！やっぱ壺条長官の言ってた事は本当だったわね時打  
！」

「つて馬坂、お前か!？」

その声の正体は憲兵の制服たる、黒の軍服姿の葉子だった。

しかし、その服装は上は軍服だが下はスカートといった感じであり、足には黒のニーソといった感じだ。

「お前え・・・」

「まあまあ落ち着いて」

怒り心頭の様子の時打をなだめる葉子。

「て、提督・・・」

ふと、葉子の後ろから川内がなんだか浮かぬ表情で出てくる。

「つて、川内じゃないか、どうした？」

そんな様子の川内に、首を傾げる川内。

「あ、そうそう時打、こいつしばらく前線から外す事できない？」

「前線から？・・・良いのか？」

葉子の言葉に首を傾げた時打だったが、すぐに何かを察して尋ねた。

「ええ、一人前の、馬坂流戦闘術の人間に育ててあげるわ！」

この時、密かに、大きな戦いが迫っている事に、まだ誰も気付く事は無かった。

そして、この了承で、川内にどのような変化をもたらすのか、それは、神のみぞ知る。

## 馬坂の技

本来、鎮守府には、人間に提督以外である職業が最低でも二つ存在する。

一つは憲兵。

鎮守府に侵入してくる輩を捉え、連行する事が仕事だ。

ある時には、殺しもいとわれない事もある。

もう一つは整備員だ。

これは、艦娘の艦装や装備を整備、修理、開発などを担当するのが主な仕事。

艦娘の要望に合わせて、艦装の微妙な調整を、ほとんどの鎮守府にいる明石と協力してやる事が多いものだ。

しかし、黒河鎮守府の様に、世間から隠蔽されている鎮守府には、その様な者たちはいない。

理由としては、隠されている為に狙われる事は無い。出撃の回数が少ないといった理由が多いからだ。

「よし、それじゃ早速始めよつか！」

「は、はいー！」

三月三日——ヒトキュウマルマル——午前九時。

黒河鎮守府にある竹林にて、ここ唯一の憲兵である馬坂 葉子と、その彼女に弟子入りした川内が、今、葉子の家系の武術である馬坂流 戦闘術の修行を始めようとしていた。

「さて、ここ一ヶ月近く、ずっと走り込みをさせてた訳だけど、何か変化はあった？」

「とても体力がついた気がします」

まあ、両足に片方十キロの重りをつけて毎日、全力疾走を繰り返せば、いやでも体力がつくだろう。

それだけでなく、日常の中でも体力をつけるように足に鉄製で防水の重りをつけて、飯を食べる時も寝る時も、あまつさえ風呂に入る時

でさえ、足に重りをつけて生活し、その状態で山を登ったり下りたり、鎮守府の外周を何時間も走らされ、一時、体力が限界を超えて丸一日寝込んだ事もあったのだ。

しかし、その間、葉子が施してくれたマッサージのお陰で筋肉痛にならなかったのは不幸中の幸いかもしれない。

しかも、足腰を鍛える為に、黒河市に出向いて相撲を取らされたりもしたのだ。

間違いなくこの一ヶ月で川内を殺す気で鍛え上げるメニューであつたのは間違いない。

ちなみに、時打曰く、「俺も一ヶ月試してみたが、あれは確かに普段鍛えていない奴がやれば間違はなく死ぬな」との事。

だが、那珂の事を思い出せば、こんなもの、戦艦級を十隻相手するよりも容易い。

さらに、半月ほど、体捌きの事も叩き込まれたので、歩き方が染み付いた感覚も感じていた。

「よし、その意気で、早速、基本の技を受けてみようか」  
「はい……え？」

威勢よく返事をする川内。だが、その顔は突如、不安に変わり、次には驚愕に変わる。

——受けてみようか？

葉子が、右半身になると、後ろに伸ばした右足を、膝を折り曲げながら川内に迫らせ、ある地点までくると、突如その足を伸ばし、川内の腹にその蹴りを直撃させる。

「!?」  
声を挙げる間も無く吹き飛ばされる川内。

「げほ……ほ……!?」  
「まず、これが馬坂流戦闘術『蹴突』。さらに、これに回転をつけて命中率と威力をあげたのが『穿爪』。まずはこれを我が物として貰うよ」

馬坂がそう言う。

「馬坂の技は全て『蹴り』。その一撃は、熊の心臓を穿ち貫いたそうよ。

その脚力はまさに、暴れ馬が如し、とも言われてるわ。まず、貴方には、馬坂流の基本を知ってもらいたい。その為に、まずはこの技を覚えてもらおうついでに、極めてもらおうわ。他の技は、その後ね」

「わ、分かりました！」

葉子の言葉に、すぐさま立ち上がって返事をする川内。

「よし、それじゃあ始めよっか！」

「はい！」

それを遠くから見守る者がいた。

「姉さん……」

「心配か？」

鎮守府の屋上で、その様子を遠目で見ると、川内の妹である神通。

その背後から、時打が歩み寄ってくる。

「……はい」

「そうか」

神通の横に立つ時打。

「ま、大丈夫だろ。川内も、途中でバテなければ、確実に強くなってるから」

「……私が心配してるのは、そういう事じゃないんです」

神通は、組んだ両手に力を込める。

「私は……怖いんです……もし、あの力で、姉さんが危険な目にあつたら……私は……どう役に……」

震える声で、そう、呟く神通。

それに、時打は笑って答える。

「神通は真面目だよな」

「え？」

「横須賀でも、こっちでも、やっぱり神通は神通だ。川内型の中で、一番まともだ。だからこそ、川内の様な考えには至れない」

時打は、神通に向かって、こう言った。

「川内は一途だ。一度決めた事は最後までやる。諦める事なんて絶対しない。だけど、それが裏目に出る事がある。それを止めるのがお前だ。だけど、今、川内は、これからの事の分岐点にいる。ここでお前が言って諦めたら、川内は、きつと前に進めなくなる。今よりも、固く、その場に踏みとどまってしまおう。それはお前も嫌だろ？だから、今は見守ってやれ。立場的には、お前は川内の保護者なんだからな」  
時打はそう言って、川内たちのいる所から目を離し、芝生の方へ眼を向ける。

そこでは、瑞鶴と吹雪が剣を交じ合わせていた。

瑞鶴の速過ぎる剣劇に対し、防戦一方の吹雪。

時打のかつての愛刀、影丸を、柄と峰を持ってなんとか高速連撃を反らし続けているのだ。

「やれやれ。ああいうのには抜刀術で先手を取ればいいのに」

時打は苦い笑いを浮かべながらそう言う。

「……」

その様子に、神通は、一度俯き、何か、思いつめたような表情をしながら、今、汗にまみれながら、必死になんらかの技を習得しようと竹に蹴りを入れていた。

「……そうか、準備は整ったんだな？」

『ええ、上にバレないようにするのに苦労したよ。ただ、全部送られるまでは、後一週間はかかりそうだ』

「よし、なら決行は二週間後だ。良いか？今回の為にかんりの資金を投入したんだ。失敗は許されない」

『分かってるよ。じゃ』

そう言い、通話が切れる。

「これで、大儲け間違い無しですね」

部下の一人がそう言う。

「ああ。これ程の『武器』を揃えたんだ。いくら、向こうにいる用心棒でも、太刀打ちは叶わないだろうな」

くくく、とデスクに座る男は、笑いを漏らす。

「……ボスに報告でござるな」

忍者装束の覆面男がその会話を盗み聞きしているとは知らずに……

数日後、ヒトマルマルマル——午前十時にて。

執務室にて。

「大規模攻撃？」

「ああ」

そこで、時打と長門は、鎮守府周辺の地図を広げ、これから来るであろう攻撃に備えていた。

「もう何度も誘拐阻止してんだ。奴らにも商売つていう奴もあるだろ

うし、もしかしたら、それなりに武器を集めてるかもしれない」

「大丈夫なのか？」

「その点については、どうにかする気だ。とにかく、次に来るであろう攻撃に備える為に、陸上じゃ戦えない艦娘はどこかに隠れさせる必要がある。最悪、海へ逃がすかもしれない」

「海か・・・一応、電や瑞鶴、吹雪も撃退に参加させるのだろうか？」

「ああ、当然、お前にも頼む。出来れば川内にも頼みたい所だが・・・」

「それは少し無理かもね」

ふと、声が聞こえた。

葉子が扉から入って来たのだ。

「馬坂」

「あの子、覚えは良い方だけど、まだ実践に出して良いレベルじゃないわ。大抵の敵なら倒せるけど、ゲームというボスクラスとなると、勝てる確率は低いわ」

「そうなのか・・・」

「ま、前線に出す事は出来なくても、後衛で守る事はできるわ。私たちが敵を取りこぼしたりしなければ、ね」

そう言う馬坂。

「と、なると・・・まず、達也の狙撃で敵に狙撃手がいる事を知らせる。それで敵が恐怖状態で混乱した所で俺たちが殴り込む・・・大雑把にするとこんな感じだな」

「敵に装甲車がいる時も考えて、あの、佐加野って奴と長門の二重の極みに破壊してもらうって事にして・・・時打、『斬鉄』ってできる？」

「ああ、出来るぞ」

斬鉄、とは、その名の通り鉄を剣で斬る技術だ。

「よっしじゃあ装甲車はまかせた！」

「お前だって蹴りで装甲車ひっくり返して走行不能に出来るだろ」

「えー」

「まあ、取りあえず意見はまとまったみたいだし、一応皆に言ってくるよ」

「お、悪いな長門」



執務室を出ていく長門。

そして残されたのは時打と馬坂のみ。

「…それで、どうするの？このまま行けば、黒河を支配してる組織つて奴と真正面から対立する事になるわよ？」

馬坂が、少々鋭い目つきで時打にそう言う。

「そうだな…出来れば穏便に行きたい所だ。下手に大規模で攻め入られたら、いくら俺でも対処しきれない」

「単独で動いてるならまだしも、守るべきものが沢山あるからね…」

そのまま、静寂がその場を包む。

「…仕方が無い」

「何が？」

「危険な賭けだが——」

時打は、その『賭け』の内容を暴露した。

## 黒河最強の艦娘 那珂

吹き飛ばされる。

そのまま地面に背中から落ちる。

息が吐き出される。

「げほ……ごほ……!?!」

「あー、少し強かったかな?」

吹き飛ばされた川内は、腹を抑えながら起き上がる。

「ぐう……」

「まあ、たった二日で蹴突を極めるなんて、まるで桜兄を思い出すね」

「おう……にい……?」

「うん、私のお兄ちゃん。本名は『馬坂<sup>まさか</sup> 桜花<sup>おうか</sup>』」

吹っ飛ばした方の葉子は片足を僅かにあげながらそう言う。

「兄がいたんですね」

「うん。結構厳しかったけどね」

川内の言葉に苦笑いを浮かべて返す葉子。

「そういうえば、貴方の妹たちってどんななの?」

「……」

葉子がそう問いかけた時、川内はその場で俯いて動かなくなる。

(あ、しまった)

失言だったと後悔する葉子。

「ああ、ごめん。忘れて」

「いえ……気にしないで下さい……」

以前、時打から聞いた話では、彼女と妹の神通は、末の妹である那珂を失っている。

川内は、先まで元気とは思えない足取りで立ち上がる。

その様子に、馬坂は頭を掻き、溜息を一つ吐いた。

「今日はここでやめようか」

「え、そんな……」

「今の貴方の精神じゃ、少し無理があるわ。一旦、休みを入れなさい」

葉子はそう言うと、川内の肩に手を置く。

「休みましょ?」

「……はい」

葉子の言葉に、川内は不承不承と言った感じで、承諾した。

「で?なんで執務室しごとな訳?」

そう言つて、時打は送られてきた書類を見ずにサインやら意見やらを書き殴っている。

「やだなく、どうせそれすぐに終わるんでしょ?」

「今回は多いんだよ。それに秘書艦が……」

「えつと、これはあつちで、これはこつちで、あああ……」

時打が視線を向けた先では、書類を絶賛舞い上がらせている初霜の姿があつた。

「大丈夫か初霜く」

「す、すみません!すぐに纏めますので!」

あわあわと書類を急いで纏めようとする。

頭にある鉢巻の縛り方からみても、その姿はある意味、残業でやけくそになつた男性社員の様だ。

まあ、駆逐艦子なので酒は飲まないだろうが。

「も、持つてきま、したあああああああ!」

なんとかかまとめた初霜は急いでそれを時打の元へ持つていこうとしたが、何のいたずらか落ちていたバナナに足を取られ、すつてんころりと盛大にサマーソルトキックを放つたが如き回転でアクロバットに転倒した。

そのままスカートがめくれ、あらもない姿をさらしてしまう初霜。

「あううく」

そのまま目を回すおまけつきだ。

「おいおい……」

「セエイツ!!」

「ぐはあ!」

その様子に、何をしているんだと言つた顔でズレた方向の事を頭に思い浮かべていた時打の顔面、詳しく言う目と目に鋭い蹴りを入れる川

内。

「な、何故……」

そのまま倒れ、がっくりとその場にひれ伏す時打。

「あーらー」

その様子に苦笑いを浮かべる葉子。

「うくん……って提督う?!?何が起きたんですか?!?」

やっとの事で復活した初霜は、時打に起きた惨劇に思わず悲鳴を上げる。

「あー、気にしない方が良いよ。というか気にしないで」

「あ、はい」

川内に念を押された初霜は承諾するしかなかった。

「いたた……何だったんだ?」

「あ、もう復活した」

「まあこんな事は日常茶飯事だったからね」

復活した時打はともかくとして、そこへ執務室の扉が開き、神通が入って来た。

「提督、少し話をしたい事が……あ、姉さんもいたんですか」

神通は部屋に入るなり、その様に言う。

「なんだ?話たい事って?」

「はい……その……」

時打の問いかけに、しどろもどろになる神通。

「那珂の事について、話があるそうだ」

『?!?』

そんな神通の代わりに、部屋に入って来た長門がその様に言う。

「神通?!?」

川内が思わず声を挙げる。

「ごめんなさい……でも、どうしても提督には、知ってもらわなければならぬから……」

神通は申し訳なさそうに、俯きながらそう言う。

「……初霜」

「分かりました」

初霜を退室させる時打。

「で、どうしていきなりそんな話になったんだ？」

「姉さんの弟子入りを、聞いていた霧島さんから、過去の事を詳しく話さなかったと聞いたので・・・提督は、どうして姉さんが強くなりたいのか、御存知ですか？」

神通は、そう聞いてくる。

「いや、さっぱりだ」

「私の方は、とにかく妹を守れるようになりたいって聞いたわね」

その問いに時打は素っ気なく答え、葉子はその様に答えた。

「そうですか・・・」

しみみりとした空気になる。

その空気に、先耐えかねたのは予想外にも川内だった。

「分かった」

川内は、俯いていた顔を挙げて、時打と葉子を見た。

その眼に、確かな決心の色をつけて。

「話すよ。私が強くなりたい理由。そして、那珂がどんな存在だったか」

「姉さん・・・」

「ごめん神通。そしてありがとう。これで、言わないで終わらなくて済んだよ」

神通に微笑む川内。

「ま、一応、話は着いたという事で、前々から疑問に思ってた事を言わせて貰うぞ」

そこへ割り込むように時打が口を開き、艦娘の戦績表を取り出す。

そして、その中にある『軽巡洋艦 那珂』のページを出す。

「このバカげた戦績はなんだ？」

そこには――

軽巡洋艦	五百三十五隻
重巡洋艦	六百七十四隻
潜水艦	三百六十七隻
航空母艦	五百七十三隻
戦艦	七百六十九隻

「普通の出撃でここまでの戦績なんて叩き出せない。それこそ、たった一隻で出撃し続けなければならない状況じゃなければ尚更だ」

時打は、視線を強くする。

「何故、コイツだけこんな戦果を叩き出せた？ いや、どうやってこんな戦果を叩き出した？ いくら大和でもここまでの事は出来ないぞ？ レ級を三十隻を沈めるなんて、常軌を逸してる。どうしてここまでの事が出来たんだ？」

時打は、そう問い詰めた。

それで顔を見合わせる川内と神通。

そして、川内が口を開いた。

「それは――――」

とある海域にて――

「きやああああ!?!」

「神通!?!」

神通が被弾し、大破へと至る。

今回は、通常の撃滅任務であり、敵艦隊である戦艦二隻、空母二隻、軽巡二隻といった艦隊に、こちらは軽巡三隻、駆逐三隻の水雷戦隊で戦闘していたのだ。

しかし、当然といえば当然の様に、軽巡や駆逐艦如き火力で戦艦の装甲を貫ける訳が無く、一方的な戦闘に陥っていた。

そして、今、戦艦一隻と軽巡二隻を相手どっていた、川内、神通、三日月、卯月、白雪のうち、川内以外が多大な被害を被<sup>こうむ</sup>っていたのだ。  
「く……」

一方で、軽巡は沈める事に成功したが、残る戦艦はまだまだ健在。川内は、もう一時間に渡る戦闘に、ずっと全力で動いていたからか、

かなりの疲労が見られた。

そのまま、戦艦ル級 flagship の主砲が川内に向けられた。

その時、ル級の足元で轟音と共に高い水柱があがった。

「!?」

その水柱から、人影が飛び出し、ル級の背後に回り込むと、膝裏を蹴り、膝がつくんの要領で膝を水面に着かせ、その後頭部に自身の腕に取り付けられた主砲を突きつけ、砲撃。

だが、彼女の持つ二十センチ砲ではル級の装甲を至近距離でも貫けず、すぐさま振り返って主砲を突き着けようとしたが、それを許さない様に、振り返った瞬間に顔を蹴られ、今度は水面に倒れ伏す。

そして、その人影は、魚雷発射管から魚雷を数本抜き出すと、それをル級に向かって軽く投げる。

そして、魚雷がル級の背中に触れた途端、大爆発を起こし、巨大な水柱が立ち上った。

「……」

その光景に茫然とするしかない一同。

だが、これが普通だ。

「あー、終わったー!」

と、収まった水飛沫の中から、先ほどの人影が出てくる。

「おーい!大丈夫?」

その人物、那珂が笑顔で手を振ってくる。

その様子から、被弾後どころか疲労の少しも見当たらない。

「え、ええ……誰も沈んでないから」

「そっか、良かった」

川内の言葉に、那珂はホツとする様に顔をほころばせる。

「じゃ、帰ろっか!」

その那珂の一言で、艦隊は帰還をした。



那珂は、希に見る、『怪物艦』<sup>モンスターシップ</sup>と呼ばれるものだった。

怪物艦というのは、駆逐艦が、兵装なのはそのままに、機動力などのステイタスが戦艦越えているもの例に、主に、駆逐艦、軽巡に多く見られる、いわば、建造失敗艦なのだ。

その力は絶大で、すごいものといえば、全部戦艦のみの編成の艦隊を相手取る事も可能な程なのだ。

だが、失敗艦というだけあって、その代償はさまざま。

声の喪失、盲目、感情欠落、部位欠損、その他もろもろ。

だが、代償が大きければ大きい程、その力は絶大だった。

川内たちの自室にて。

神通は、大破のままベッドに寝転がっていた。

「あーらら、入渠許可してくれなかったね」

その神通の有様に、なんでもない様に言う那珂。

「そうね……」

疲れていたのか、ぐっすりと眠っている神通。

その妹の様子に、川内は、頭を撫でた。

那珂は、一ノ瀬の時に建造された艦娘だ。

その為、すでに改装は済んでおり、その衣装はアイドルの様な恰好だった。

この時、部屋から出る事は許されておらず、艦娘たちは、ほとんどの時間を自室で過ごすのだ。

瑞鶴は抜け出して街に出向いていたようなのだが。

「あーあ、暇だなあ。歌っても良ーい？」

「やめなさい。神通の傷に響くし、なによりあの提督に聞こえるでしょう？」

「うーけちい」

そう不貞腐れる那珂。

神通の容態を全く気にしていない様子だ。

その様子に、何も言わない川内。

否、言っても無駄だからだ。

その時、放送が流れた。

「ん？」

『軽巡の那珂、川内。今すぐに執務室に来て下さい。繰り返します—

』

スピーカー拡声器から、秘書艦である五月雨の音が響いた。

「なんだろ？」

那珂は何気ない様に呟くが、川内は訝しむ様な表情で放送を聞いていた。

先ほど出撃して報告してきたばかりだ。なのになぜ今呼び出されるのか。

「〜♪」

那珂は相変わらず能天気部屋を出ていこうとする。

「あ、那珂……」

川内の静止を聞かずに部屋を出て行ってしまう那珂。

「……」

しばしその場に立ち尽くしていた川内だったが、すぐにその後を追う。

その道中、遠征帰りだろうか、ボロボロな駆逐艦たちを見かけたが、那珂の姿を見ると、慌てて道を空けた。

その中には、明確な敵意を持った視線もあった。

その様子に、川内は溜息が出そうになる。

那珂の怪物艦としての代償は、『楽』以外の感情の欠落。

『怒』の感情が無いから殺意が無く、『哀』の感情が無いから容赦がなく、『喜』の感情が無いから油断する事が無い。

とにかく、『楽』の感情しか持ち合わせていない為に、那珂には、精神的にも身体的にも、どの艦娘にも劣らない戦闘能力を引き出す事が出来るのだ。

だが、その感情の欠落の所為で、誰かが沈んでも悲しむ事が出来ず、その死を笑う事しか出来なかったのだ。

だから、那珂は嫌われていた。

彼女の事を知っている翔鶴と瑞鶴、そして現在行方不明である大和は例外として、他の艦娘からは嫌われているのだ。

そして、執務室にて。

「たった二隻で、ウエーク島の敵泊地を攻撃しろ……!?」

前任提督、秋村からその様に言われ、川内はその表情を驚愕へと染める。

「その通りだ。何、お前たちなら大丈夫だろう？何せ、戦艦相手に何度も勝ってるんだからな」

秋村は、嫌な笑みを浮かべながら、その様に言う。

「で、でも、そこは小さいとは言え、泊地ですよ？せめて、重巡の一隻でも……」

「実はこの後に重要な任務があつてなあ。そいつらにはそれをやらせる予定なんだ。それに、大破してないのはお前たちだけなんだ。だから、な？」

秋村の言葉に、歯噛みする川内。

どこまで下衆なのだこの男は。

しかし、反論をいくら並べようとも、全ていなされ、襲い掛かろうものなら五月雨にやられる。

「・・・分かりました」

承諾するしかなかった。

一方、那珂はそのやり取りに一切口を出さないうでいた。こういう時には、大抵、自分の髪を弄って、会話には一切参加しないのだ。

どういう意図があるのか分からない。

だが、それを追求した所で、何の意味も無い。

川内は、出撃するべく、部屋を出る。

那珂もいるから大丈夫だろう。

そう思っていた。

それが、最大の慢心だと気付かずに。

そして、ウエーク島にて。

敵の思わぬ罠により、包囲され、砲撃や爆撃、雷撃の暴風雨にさらされ、最初はなんとかしのいでいたが、徐々に敵の物量によって押しはじめ、ついに川内が被弾してしまった。

「くう・・・！」

思わず水面に膝を着く川内。

「被弾するなんて情けないよ。そのままじゃまた当たっちゃうよ?」

その川内を見て、相変わらずの調子でそういう那珂。

「うるさい・・・そんなの分かってるっつうの!」

なんとか立ち上がろうとする川内。

だが、その直後に敵の放った砲弾による水柱が立ち上がる。

「きゃあ!」

それでまた膝をついてしまう川内。

「全くもう」

那珂は、そんな川内に呆れ、砲撃を続ける。

「このままじゃ・・・」

川内は、今の状況に絶望しか感じなかった。

敵の包囲網の一部に突破しかけている状態だが、敵の猛攻に逃走は困難を極めていた。

それに加え、川内の被弾によって、航行能力の大体が減少。

スピードが落ちる始末である。

一方で那珂は全くの無傷。

それに疲れも感じない。

その様子の那珂を見て、川内は一つ、ある考えを思いついた。

「那珂、私を見捨てて逃げて」

川内は、自分を庇いながら戦っている那珂に向かって、そう言った。

「・・・何?」

那珂が攻撃の手をやめないでそう聞いてくる。

「私を連れて逃げるのは、多分、出来ない。だけど、貴方一人なら、逃げる事は出来るでしょ?だったら・・・」

「こんな時に、ふざけないでくれるかなあ?」

突然の、那珂の低い声。

「!?!」

そして衝撃。

視界が急変し、長い浮遊感の後に、水面に着水。

そのまま水面を滑り、止まった所で痛む腹を抑えながら、体を慌て

て起き上がらせる。

「那珂!？」

驚愕の中、川内は妹の名を呼ぶ。

「川内が逃げて」

那珂は、相変わらずの笑顔でそう言う。

「な、何を言ってるの!?! 私なんかよりも、私が……」

「早くいかないと、魚雷を撃ち込んじゃうよ?」

「ツ……!?!」

いつもの笑顔で、那珂は、そう言う。

その表情に、微かな『本気』を入れて。

「那珂……」

「早く行ってよ。正直、邪魔なんだからさ」

那珂は、敵の方向を向く。

そして、魚雷を一本、引き抜く。

「ツ……」

それは、『沈める』の意志表示。

川内は、那珂から背を向けて、走り出す。

胸いっぱい悔しさを込めて、川内は走った。

そして、ある程度逃げた所で、水偵を飛ばした川内。

理由は、索敵ではなく、那珂の安否。

どんな窮地に立たされても、絶対に勝った那珂。

今回も、ありえない様に敵を撃滅している。

そう思っていた。否、現実逃避をしていた。

敵泊地は、半壊。しかし敵は一部健在なのを除いて、轟沈と大破。

その中に、那珂の姿は無かった。

「——その後、母港へ帰還した私は、その事を報告。提督から、罵声を浴びた後に、一ヶ月の、謹慎を受けました」

「拷問——の間違いじゃないのか？」

そう問いかける時打。

「……………」

「凶星……か」

時打は、そう呟くと、冷めたお茶を一口飲む。

「暁たちの時もそうだったが、凄惨だな」

時打は、そう、無表情にそう言った。

「……………何も言わないんだ？」

葉子がそう聞いてくる。

「言ってもしょうが無いだろ。俺に出来る事は、導く事だ。他人の過去に口を出す事なんてできないさ」

「この子たちよりも凄惨な過去を持っている癖に？」

「内容が全く違う」

乾いた会話が二人の間を飛び交う。

だが、それもすぐに終わり、時打は川内を見据える。

「那珂の事は分かった。怪物艦なら、その強さもうなずけるだろう。お前が強くなりたかって、馬坂に願ったのは、その時の自責の念からか？」

「……………」

川内は、その問いに何も答えない。

「……………肯定、として受け取っておく」

時打は、ふう、と一息吐く。

「なるほどね……………」

そこで、葉子が口を開いた。

「貴方の事情はよく分かった……………だったら、一つ、ある事をしてもらおうわ」

葉子は、川内に向かって、人差し指を立てる。

「もうすぐやってくるであろう人買業者たちの撃退。これに貴方も参加してもらおうわ」

「!？」

葉子の言葉に、目を見開く川内と神通。

その中で、時打は何も言わない。

「その戦いの中で、神通を守りなさい。そして、無事、守り切ったら、貴方は、立派な馬坂流の人間よ。その時に貴方に出来るメリットは、一つは私たち馬坂家の人間からの支援を受けられる事。上手くいけば、この鎮守府の運営にも大きく影響するわ。もう一つは、馬坂の最奥。馬坂の人間でない者には、この奥義を教える事は出来ない」

そして、立ち上がる葉子。

「ごめん時打。すこし焦がすよ」

「書類は燃やすなよ」

そう会話瞬間、突然葉子が、その場で回転しだした。

「!？」

まるで、小さな竜巻の様に、高速回転をする葉子。

そこで、川内は気付いた。

彼女の足元が、赤く発光し始めている事に。

やがて、葉子が回転をやめると、その右足は、熱気を感じる程に赤熱していた。

正確には、彼女の履いている、黒のロングブーツが。

「これが、我が一族に伝わる最奥、馬坂流戦闘術最奥義『火爪』<sup>ヒツメ</sup>」

「ひ……づめ……」

まるで、小さな太陽を思わせるその熱は、川内と神通を圧倒していた。

「摩擦によって生まれた熱が、その速さに応じて、その熱量を増大し、敵を中から焼く」

しかし、その熱は徐々にその迫力を弱めていき、やがて、冷める。

「これが、火爪。海の上で使えるかどうか分からないけど、これを習得したければ、自分の妹を守りなさい。そして、無事、守り切れたら――」



葉子は、真っ直ぐに、川内に指を指す。

「——貴方を、自分の信念を貫ける者として、認めてあげるわ」

## 師匠と弟子

鎮守府の正面。

そこに、海が目の前に広がるアスファルトの上で。

「……つつあ!?!」

吹雪が鞘に納めた影丸を、鞘から高速で引き抜き、空を斬る。

「っはあ……はあ……ダメだ……」

吹雪は、そう呟き、自分の、現在後ろ足となっている左足を見る。

「どうして出来ないの……」

もう一言呟き、吹雪はビュンツと影丸を薙いだ。

吹雪がやっているのは、飛天御剣流奥義『天翔龍閃』あまかけるりゅうのひらめきの特訓だ。

だが、見ての通り、吹雪は、左足を踏み出せていない。

「……」

抜刀するまでは良い。だが、踏み込んだ右足よりも、それ以前に、吹雪は、左足を前に出す事が出来なかった。

何故、踏み出せないのか。

それが、吹雪にとって、最大の難点だった。

天翔龍閃の発動は、要である、左足の踏み込みが必要不可欠だ。

その踏み込み無くして、奥義は放てない。

生きようとする意志を確かにある。だが、何故か踏み込む事が吹雪に出来なかった。

吹雪は、ふと、自分の右手にある影丸に視線を落とす。

——もしかして、『アレ』を見たから……

影丸の記憶は、一言で言って、憎悪の嵐だった。

一人を斬れば、その者の復讐の為に、襲い掛かり、降りかかる火の子を払おうとして殺せば、新たな憎しみが生まれた。

時打は、その何千もの憎悪を向けられてもなお、戦い続けたのだ。

その相手が、例え、子どもだったとしても。

いつしか、時打は、斬る度に振る血の雨を浴び続けた事で、だんだ

んと、殺戮に溺れて行った。

ただ、人の幸せを願って、自分が汚れる事をいとわず、ただ人を斬り続けた。

その所為なのだろうか？

心の奥に住み着く、一つの感情。

それは、憎悪ではなければ、憤怒ふんぬでもない。

どこか、寂しげで、まるで、永遠の孤独を求めるような。そんな、灰色の感情。

白にも黒にもなり、だが、それだけの色にしかなり得ない、寂しい色の感情。

それが、吹雪の『生きる意志』を妨げているのではないのだろうか？

そもそも、あの激動の日常を生き延びてきた時打と、その人本人ではなく、刀の記憶を受け継いだけの吹雪では、根本的に違うのではないのか？

それに、この刀は、『あの人』を斬った。

それが枷になっているのではないのか？

もし、そうなのだとしたら、吹雪は——

「どうした？」

「!？」

突然、後ろから声をかけられ、驚いて慌てて後ろを振り向く吹雪。

「し、司令官……」

「そんな所で、稽古か？」

そこには、何故か黒の武士服姿の時打がいた。

「……なんでその服装なんですか？」

「いや、なんとなく」

時打の素っ気ない返しに、呆れる吹雪。

ふと、時打は、ふむ、と声を漏らした後、吹雪に近付いて、影丸を取り上げた。

「あ……」

吹雪が声を漏らし、驚きと心配で顔を曇らせるのを他所に、時打は、

鴉羽色の刀身を持つ影丸を、物色するように角度を変えながら、眺める。

「……まだ馴染むな」

そして、そのまま正眼の構えになると、真つすぐに走り出す。

——吹雪に向かつて。

「!？」

それに驚く吹雪だったが、時すでに遅く、既に時打は技の発動に入っていた。

あらゆる角度から八撃、そして最後に刺突つっきの一撃で止めを刺す、飛天御剣流の最強の突進技、『九頭龍閃』。

その残像が見えた時、吹雪は、脳裏に、明確に、斬り刻まれるイメージが浮かんだ。

殺される——ツ!!!

吹雪の心理には、それしかなかった。

故に、吹雪はその時だけ、時打の持つ誓いを忘れた。

死にたくない——ツ!!!

そのまま微動だもする事が出来ず、スローとなった視界、走馬燈の中、斬られる時を待った。

だが、当然の如く、時打は吹雪を斬らなかった。

「……」

その場に立ち尽くし、呆然とする吹雪。

「……ま、こんなものか」

時打はそう言い、その場で数回影丸を振るい、吹雪に歩み寄る。

吹雪は、数秒たって正気に戻り、その後、びっしりと冷や汗を流した。

そのままゆっくりと、怯えるように振り向いた。

「いきなり悪いな。もしかしたらお前が、天翔龍閃の習得で焦ってるんじゃないかと思ってな」

時打は、いつもの笑顔でそう言う。

そして、吹雪は、その顔を俯く事で反らす。

凶星だからだ。

「天翔龍閃は、どの剣術にも必ず存在する奥義だ。それを習得するには、必ず、師匠と呼べる存在が必要だ」

「はあ……」

「誰かが、教えてくれなければ、奥義なんてものはもとより、その剣術の歴史さえも知る事も出来ない。枝葉を辿って理に至る。これが剣術を習得する為の絶対条件だ。そして、飛天御剣流の理は、『世に生きる弱者を守る』。そして、『生きる意志』だ。ただ、その力の使い方間違ってはいけない。お前も、この剣の記憶を知っているなら、な」

時打は、そう言っつて、吹雪の鞘に影丸を納める。

そして、時打は、吹雪に背を向け、その場で、一つ深呼吸をする。

「天翔龍閃は、超神速の抜刀術。発動の要は左足の踏み込み。だが、俺はこの奥義にある改良を加えた」

吹雪は首を傾げる。

改良。なんのことだ？

そう、思った瞬間、時打から、止めどない剣気が発せられるのを感じた。

「左足を踏み込む事により、飛天御剣流の抜刀術にさらなる加速を加えたのが奥義『天翔龍閃』。だが、それじゃあ、まだ遅い気がするんだ。あの街で、この技はなんでも破られた。だから、奥義を超えた奥義を作る事にした」

そして、時打が動き出した。

ゴウアツツツ

!!!!!!!!!!!!

「!?」

恐ろしい程の突風。

それと同時に聞こえた、アスファルトの破碎音。

その直後に、吸い込まれる感覚。

これが、天翔龍閃の特性の一つ、一刀目で弾いた空気による真空になつた空間へ、空気が戻っていく、突風。

思わぬ不意打ちに、足の踏ん張りがきかず、抵抗する暇も無く、吸い込まれていく。

だが、次の瞬間に、誰かに支えられ、吸い込まれるのは阻止された。思わず閉じていた目を開けると、いつの間にか振り向いていた時打の手に、自分がしがみ付いていた。

「あ……………」

「これが、俺が新しく編み出した、我流飛天御剣流の奥義だ」  
「……………」

茫然とする吹雪。

「まあ、驚くのも無理も無いか。かなり体力を持つていかれるうえに、逆刃刀でも威力を調整しなければ相手を殺してしまう『天翔龍閃』よりも、威力が高く、手加減が出来ない大技だ」

時打は、抜刀していた深鳳を鞘に納めると、海岸線の方を見る。

「良いか。天翔龍閃は、その刀では絶対に人に対して使うな。使う相手は……………」

「深海棲艦……………」

時打の言葉に遮りつつもつなげてそういう吹雪。

「その通りだ。飛天御剣流は、その強さ故に、味方した方に、必ず勝利をもたらすと言われている。最も、それは使い方次第だがな」

「使い方……………次第……………」

吹雪は、そう呟く。

片手で、鞘に納められている、影丸の柄に触れる。

かつて、時打と共に、鮮血の雨、死の匂いに塗れた道を戦い続けてきた、鴉羽色の刀。

その名の通り、影の様に、黒い刀。

その刀に、何千もの憎悪と悲劇を貯め込んできたこの刀は、本当なら、吹雪には耐えられないほど重いものの筈だ。

味方さえも切り捨てる事のできたかつての時打じやあるまいし、何故吹雪には、その憎悪の影響が少ないのか？

一度は、三年の間に溜め込まれた、一万人の負の感情に、消されかけた吹雪の意識。

それを、助けてくれたのが、ある一人の人物の、優しい感情だった。まるで、聖母の慈愛の様に、暖かで、姉の様な温もりを持つ、あの感情。

それに救われた気がした。

だから、今の自分がいる気がした。

「司令官」

「ん？なんだ？」

「私、『答え』を見つけられそうです」

「お、そいつは良かった」

暖かな感情。それで、確かに、自分は意識を保つ事が出来た。でも、だからこそ気付いてしまった。

自分は、その名の通り、全てを凍らせる、  
『<sup>B</sup>吹<sup>L</sup>  
<sup>I</sup>雪<sup>Z</sup>  
<sup>A</sup>』<sup>R</sup>  
<sup>D</sup>などのど……



## 激突

マルマルマルマル——深夜零時。

「へくえ、あれが噂の」

そう呟くのは、小柄な、傍から見れば子供の様な男子、『日藤 弘斗』  
が、ニヤニヤと笑顔を浮かべながら視線の先にある建物に視線を向け  
る。

「ええ。しかし、やはりまちかまえていますね」

この人買い組合の頂点に立つ、『柴岩 宮城』という男が、ナイトス  
コープ搭載の双眼鏡をのぞきながらそう言う。

「こちらの戦力は二千人、対して奴らはたったの九人……舐めてい  
るのか？」

「いいや、誰も、劣らずと言った感じね。でも、あの黒い武士服の男は  
あの中で一番強いわね……多分、彼一人で全滅出来る程じゃない  
かしら？」

「まさか……こつちには色々と準備をしてきたんです。陽動、お願  
いしますよ？」

「オツケー。じゃ、始めようか、健吾」

弘斗が、無線機に向かってそう言うのと、無線機から豪快な笑い声が  
聞こえた。

『ガハハハハ！遂に俺様の出番か！滾る、滾るぞ！俺様の血が滾って  
滾って、滾りまくるぞおおおお!!』

その直後に、弘斗たちの右の方で、大きな音がしたと思った瞬間、大  
きな土煙を挙げて、木々がなぎ倒されていく様子が、直線状に建物に  
向かって入っていく。

「やーれやれ。相変わらずなんだから」

「我々の準備も出来ています。何人か同行させましょう」

「ありがと。でも、アタシの速さについてこれるかどうかは、わ・か・  
ら・な・い・け・ど」

そう、色っぽく言い残した弘斗は、次の瞬間、宮城の視界から消え

ていた。

「やれやれ、相変わらず速い事で・・・」

宮城は、そう皮肉っぽく言うと、懐からタバコの箱を取り出し、吸う。

そして、新たに、無線機の周波数を変え、指示を出す。

「戦車を出せ」

『アイサー』

「それと、『鎧』も持ってこい」

その直後、大きな振動音とともに、大きな何かが、木々を踏み倒しながら、現れた。

「来ました!」

翔鶴が、この夜の中、艦載機を飛ばし、鎮守府の屋上からその様に叫ぶ。

「よし!準備は良いな!」

「はい!」

「おう!」

「ああ!」

「ええ!」

「誰もさらわせない!」

それぞれがそれぞれの返事を返し、それぞれが武器を構える。

達也は屋上で、狙撃銃ドラグノフを構えて敵を狙う。

「十時の方向から、何かがもう突進してきます!さらに、二時からもう

一人、こちらはかなり速いです！」

「おっしやあー突進してくる方は俺に任せろ！」

「じゃあ私は速い方ね！時打たちは他に来るかもしれない敵を片付けて！」

響夜と葉子がそれぞれの方向へ入っていく。

「吹雪！峰打ちで抜刀術は禁止だ！良いな！」

「そんなの言われなくても分かっていますよ！」

時打の忠告に、吹雪は怒ったように返し、影丸を抜刀、刃を返す。

「ねえ、提督さん……」

ふとそこで、瑞鶴が冷や汗をかきながら笑みを浮かべていた。

「ん？どうした瑞鶴？」

「……戦車が来たら、どうすればいいかな？」

「……」

それには黙り込む時打。

「山の方から、戦車が三台程来ます！っていうか、どこから仕入れたんですかアレ!?」ヒトマル「10式ですよあれ!？」

ヒトマル「10式戦車。」

陸上自衛隊が使っている戦車だ。

「どっから仕入れたんでしようか……?」

電が怪訝そうにそう呟く。

「おそらく、深海棲艦相手に何の役にも立たないからお蔵入りしてた奴を買ったんだろう。前に金山市で、ヒトマル10式を使って大量殺戮しようとしてた奴を見た事がある。最も殺したけどな」

最後に物騒な事を言い、時打は深鳳を抜刀する。

「司令官！私も斬鉄は出来ませんが……」

「いや、お前は敵の掃討に集中しろ。それと……」

すうーっ、と息を大きく息を吸った時打は、一度息と止めて、そのすぐあと、全て吐き出すように、上空へ向かって叫ぶ。

「逃げろおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

ものすごい絶叫。

それを聞いた、翔鶴と達也はそれを聞くと、翔鶴は屋上から飛び降

り、達也は屋上を横に逃げる。

その直後、鎮守府の建物に三つの爆発が起きる。

一つは屋上の一部を抉り、もう一つは鎮守府の壁を貫く。最後の一つは鎮守府の塀の一部を吹き飛ばす。だが、倒壊には至らず、達也はまた狙撃銃を構える。

一方で、飛び降りた翔鶴を時打が受け止める。

「おっと!」

「ひゃう!」

「以外とクレイジーな事をするよなお前」

翔鶴を下す時打。

「広い所へ行け、そこで艦載機の着艦作業をしろ」

「分かりました」

翔鶴にそう告げた時打。それを聞いた翔鶴はすぐさま鎮守府の中に入っていく。

「さて、電、お前は穴をあけられた塀の所に行け、瑞鶴と川内は正面を、吹雪と長門は遊撃を頼む」

「「はい!」」

「俺は戦車だ!」

時打は、そう告げ、走り出す。

響夜は、月明りに照らされた森の中を走っていた。

目の前に走る、土煙の前に立ちほだかる為。

そして、その進路上に追いつく響夜。

「おっしやあー!来おい!!!」

そう叫ぶや否や、木々を薙ぎ倒して、何やが黒い砲弾の如き勢いで突っ込んできた。

「うおおおおお!!!」

「む?!俺様の前に立つか?!愚か者めえ!!」

その何かを真正面から受け止める響夜。

「うっおおおおおお!?」

だが、その威力と突進力故に、ずざざざざ!!と足底を擦らせながら、後退してしまふ響夜。

「ワハハハハ!!無駄無駄無駄無駄ア!この俺の筋肉の前に、何者も無意味なのだア!!」

「なら、これでどうだあ!!」

響夜がそう叫ぶと、押されながら片足を上げて、それをまた地面に叩き付ける。

その途端、足に大きなクレーターが出来て、砕ける!

足での二重の極みだ。

「ぬお!!」

それで足を踏み外し、態勢をくずす、なにか。否、横に幅広い、かなりのマツチヨマンな男。

「うおりやああああ!!」

そして、バツクドロップの容量で投げ飛ばす。

そのまま太い木に激突、薙ぎ倒す。

「どうだあ!」

うがー!と唸る。

「貴つ様あ!よくも俺の前進を止めてくれたな!」

だが、先ほど吹っ飛ばされた大男は、何事も無かったかのように立ち上がり、うがー!と唸る。

「知るかア!!お前があそこにいる奴らを攫う気なら、いくらでも止めてやんよ!突き進めたきや俺を倒してからにしゃがれゴラア!!」

何故か初っ端から興奮状態の響夜。

「上等だア!そのイカれた鳥頭をひしやげてやる!」

大男、『次元 健吾』は身を低くすると、その巨体から信じられない様な突進を繰り出す。

「はええ!」

そのスピードに驚く響夜だったが、そのまま突っ立ったままでは直撃する事は必至。

横に転がって、その突進を回避する。

「ぬうー！」

だが、その転がって突き進んでいった健吾を見た響夜は、その顔を驚愕へと染める。

なんと、あの突進でまるでゴムボールが壁に当たって反射するように急激な方向転換をしてきたのだ。

「なあ!？」

それにより、さらに転がって避ける響夜。

だが、またしても反射するように方向転換してきて、その勢いを止める事なく何度も突進してくる為に、響夜は何度も避けなければならなかった。

「ハッハッハー! どうした喧嘩屋!! その程度かあ!？」

「なる! ならこれでどうだあ!!!」

響夜は、右腕を振り上げ、大振りに、突っ込んでくる健吾に向かって振り下ろす。

当然、二重の極みを健吾の突き出していた左肩に直撃させた。

だが。

「ござかしい!!」

「な!？」

健吾は何事もなかったかのように突進を続け、響夜は、驚愕による硬直で、その突進の直撃を喰らってしまう。

「ぐは!？」

そのまま吹っ飛ばされて、木に叩き付けられる。

「ハッハッハー! どうだ! この衝撃吸収スーツの効果は! 対貴様用に今回だけ特別に用意したものだ! 受けた衝撃をすべて伝導させ、反対側へ逃がす。あらゆる方向から弾丸や砲弾を受けても、全ての衝撃が後ろへ行くって訳だ! ハッハッハー!!」

「なるお・・・」

よろよろと立ち上がる響夜。

「どうしたどうしたあ! その程度かあ!」

健吾がまたもや突進する。

「チー！」

衝撃を和らげるために後ろへ飛ぶ響夜。

だが、健吾の次の攻撃は、殴打だった。

「ぐほ!?」

右拳が顔面にクリーンヒットし、よろける響夜。

だが、持ち前の打たれ強さでなんとか持ちこたえるも、次の攻撃が響夜を襲う。

そのまま、突進する威力に加え、拳の威力も加算されて、ラッシュを喰らいまくるハメになってしまう。

「くっそ野郎が！」

だが、そのままやられてばかりいる響夜ではない。

左拳を振り上げ、アッパー気味に健吾の胸に二重の極みを叩きこむ。だが、先ほど健吾が言った通り、その衝撃は全て中に仕込まれた衝撃吸収スーツの所為で全て体外へ逃げてしまう。

「ハハハハハ!!!無駄無駄無駄ア!!!」

「くそがあ!!」

「見つけた」

木の枝との間を飛び移りながら、移動する葉子。

その視線の先では、子供の姿を捉えていた。

その子供がただ者ではないと一目で見抜いていた葉子は、射程に入った所で、木の枝を思いつき蹴り、その少年に向かって飛ぶ。

そのまま空中で反転して、ライダーキックの様に片足を突き出し、少年に突っ込む。

その奇襲に気付いた少年は、普通じゃありあない程のスピードをいったん緩め、その蹴りを回避する。

「まさか、こんな子供までもが、犯罪者なんてね」

葉子が、そう少年に言う。

そこで少年の返した言葉は……

「ひどい。子供なんて。アタシはこれでも立派なレディなのよ？」

「……」

一瞬、悪夢を見た気がした葉子。

「……オカマなの？」

「違うわよ？ 私は男の身をもって生まれた乙女なの」

「同じよー」

実は葉子は、体と性別が真逆な人間は嫌いなのである。

それが男であっても。

「とにかく、鎮守府あそこに手を出そうってなら、容赦はしないわ」

「いやくん、怖い。お姉さん綺麗なんだから、もっと言葉遣いちゃんとした方が良いわよ？」

「余計なお世話よ」

御託だ、と思いつながら、葉子は踏み込み、少年と距離を詰める。

「あら？ やる気？」

「元からそのつもりよ」

そのまま顔を蹴り飛ばすべく、右足で回し蹴りを繰り返す。

だが、それに対抗するかの様に、少年オカマの方も回し蹴りを放つ。

そのまま、正面衝突。

「!?」

「良い蹴りねえ」

互いに弾かれ、距離を取る。

(強い……)

もともと、その姿を見た時からわかっていた事だが、ここまでとなると、葉子でもてこずる。



馬坂流には、二つの戦法がある。

長期戦と短期決戦。

長期戦は、その名の通り、長く走り続ける馬の様に粘り続ける戦い方。短期決戦は、たった短い時間で全てを出し切る戦い方。

速めに決着をつけたい葉子は、当然、短期決戦を選ぶ。

思いつきり踏み込み、距離を詰める。

そして、右足で、今度は後ろ回し蹴りを放つ

『廻牢・刻濤』

少年はそれを頭を下げる事で回避。

「あー残念」

「まだよ!!」

かわされた事を認識した葉子は、追撃するべく、すばやく足を引き戻し、左足で回し蹴りを放つ。

『廻牢・刻戟』

その二撃目が、少年の胸に直撃する。

そのまま吹き飛ばされる。

「浅いッ!」

だが、すぐに吹き飛ばされる中で態勢を立て直し、華麗に着地する少年。

「わー、すごいねお姉さん。まさか一撃もらうなんて思わなかったよ」  
「よく言うわ」

少年の言葉に、葉子は、冷や汗をかきながら笑みを無理矢理作る。

刻戟が直撃する瞬間、当たったと見せかけて、後ろに大きく飛んだのだ。

ボクシングの高等技術、スリッピングという奴だ。

「でも、アタシ的には、あの刀のお兄さんと戦いたかったな」

「悪いけど、その人は別に大事な仕事があるから無理よ。変わりに私が遊んであげるわ」

とんとん、と葉子は地面を踏みしめる。

「ふふ、じゃあ、退屈させないでよっ!」

にやりと笑う少年、弘斗が態勢を低くする。

——来るッ!

そう直感した葉子は、右足を踏み込む。

そして、互いに同時に大きく飛び、飛び蹴りを真正面から直撃させる。

轟音。直後に、土煙が巻き起こる。

「全く、10式ヒトマルを持ち込んでくるなんて、どんだけ本気なんだよ!？」

時打は、そう吐き捨てながら、三台の10式戦車の砲弾や機関銃の攻撃をかわしていた。

「くそー!しばしっこい奴だ!」

「機関銃で逃げ道を塞げ!」

砲塔上部の司令塔  
「キューポラから、機関銃を撃ちまくっている車長たちがそう怒号を飛ばす。」

「やれやれ」

時打はその男たちを一瞥し、周りを弧を描くように走っていた進路を急激に戦車の方向へ変える。

「な!?!」

「バカめ!自分から死にに來やがった!」

「蜂の巣にしてやるぜ!」

それを見た三台の車長三人は、突っ込んでくる時打に向かって、機関銃を撃ちまくる。

だが、その銃弾の雨が時打に浴びせられようとした途端、まるで蜃

気楼の様に時打の姿が消えた。

「な!？」

「ど、どこに行った!？」

それにうろたえる戦車。

だが、その内の二号車が、突然、がくんと車体が傾いた。

「な、なんだア!？」

それに驚く二号車の車長。

見て見ると、そこには、履帯ごと全部まとめて着られたホイールの残骸があつた。

「は……?？」

その光景に、茫然とする二号車の車長。

次の瞬間、さらなる金属同士の衝突音。

「!？」

慌ててそちらを向くと、そこには、大きく曲がった主砲の姿が。

これでは、砲弾を撃つ事はできない。

「な、何が……」

バキンッ!!

「な!？」

更に、自身が持っていた機関銃が、目の前で破壊される。

そして、顔を挙げてみると、そこには、刃が逆さまの刀をたずさえた黒い武士服の男の姿。

そして、その眼光に睨まれた車長は、腰が抜けた。

「コイツ!!」

すると、三号車の砲手が、二号車の後ろから、時打に向かって、主砲を向ける。

しかもこのままでは、二号車の車長まで巻き添えを喰らってしまう。

それを見た時打は、右足を挙げて、二号車の車長を中に踏みつけるように押し込む。

「ふぎや!？」

そして、逆刃刀・深鳳の刃を返し、右腕を振り上げ、背中に近付け

る。

放たれる砲弾。

それを、真正面から、叩き斬る。

真つ二つにされた砲弾は、時打の左右へ通り抜け、後ろへ飛んでいく。

「は・・・？」

おそらく、その場にいた全員がその様に眩いた事だろう。

そして、その茫然としている間に、時打が三号車の履帯をホイールごと切断し走行能力を奪い、主砲を峰の方で曲げて封じ、機関銃を破壊し残る攻撃手段を殺す。

それを終えた後、すぐさま標的を一号車へ変え、たった十秒の間で、全てを片付けた。

しまいには、逃げられないように戦車に設けられた全てのハッチを叩いて歪ませ、戦車に乗っていた人間を閉じ込めた。

「これでよし」

そう言い、時打は鎮守府の方を見た。

その時だった。

ドガアアアアン!!!

「は・・・？」

突如、鎮守府の方で起こった爆発。

時打は慌てて、服の下に隠していたスマホを取り出し、カメラアプリを起動させて、様子をさぐる。

すると、そこには、どこから侵入したのか、パンツァーフアウストやらRPGやらを持ち込んでいる様で、その対処に長門が追いやられている。

その中には、達也の狙撃でもんどりうって倒れる敵もいた。

「一体どうやって・・・まさか・・・！」

何かの結論に至った時打は、急いで鎮守府に向かって走る。

「くそーぬかった!」

敵がまさか、黒河への抜け道を使ってくるとは思わず、入って来た敵を殴りとばす長門。

時には背後を取られ、その敵を達也が屋上から狙撃する。

「うわああああ!」

またもや爆発。

達也がパンツアーファウストそのものを狙撃して爆発させたのだ。

その度に、人のバラバラになった体が宙を舞う光景を目撃してしま  
う長門。

「く・・・こんな事は、あの時ではいつもの事だろう・・・ツ!!」

長門は、軍艦だった頃過去の事を思いだし、歯を食いしばる。

他の艦娘は、既に海の上に逃げている。

どうやら敵は、相手が艦娘とは思ってはおらず、船が無い事を事前に調べていたのだろうが、自分たちの船を用意していなかった事はある意味では失敗といえるだろう。

だが、一人だけ、逃げていない艦娘がいた。

翔鶴だ。

「きゃあ!」

「逃げんなよ!」

足がもつれて転んでしまう翔鶴。

それをニヤニヤとした醜悪な笑みを浮かべる男がじりじりと近寄ってくる。

「い、いや・・・」

「翔鶴ツ!!」

艦娘は、確かに人間よりは丈夫で力は強いが、それを除けばただの女の子。

当然、恐怖を感じるのは当然事であり。

「ゴハア!？」

怒るのも当然だ。

「大丈夫か!？」

「は、はい．．．!？」

尻もちをついたまま、頷く翔鶴。

一方で屋上で、達也は膝立ちで、敵を撃ち抜いていた。

「今は非常事態だ。依頼に反するが、止むを得んぞ」

そう呟き、達也は引金を引く。

その弾丸は、的確に<sup>人</sup>的の頭部を撃ち抜き、絶命させる。

「次．．．．」

ボルトアクションで再装填、引金を引く。

「次．．．．」

再装填、発射。爆発。

「次．．．．」

冷酷に、機械の様に敵を撃ち抜いていく達也。

「あそこだア!？」

「撃て撃て撃てえ!!」

「!」

だが、狙撃は気付かれれば、脆くなる。

複数のパンツァーファウストやRPGがバズーカ砲などが達也に

向けられる。

「ふん」

それを見た達也は、最後に一発撃ち、RPG一発を撃ち抜き、その

周りにいた敵を巻き込む。

「うわああああ!？」

そして、屋上から飛び降りる。

次の瞬間、鎮守府の屋上が無数のロケット弾やらが直撃し、爆発。

幸いにも、達也は無傷だ。

そして、受け身を取りながら、地面に着地。

そのまま立ち上がって、歩きながら狙撃を続行する達也。

「うおわ!？」

「アイツ、たつたまま狙撃してるぞ!」

それにうろたえる敵集団。

ボルトアクションを繰り返し、時には弾倉マガジンを交換して撃ち抜く。

だが、それは長くは続かない。

やつとの事で態勢を立て直した敵集団が、アサルトライフルを構えて、達也に向かって乱射。

すると達也は、横に大きくサイドステップし、身体の向きを変えるように左手で腰のホルスターからガバメントを抜き放ち、そのアサルトライフルを持っている男を撃ち抜く。

「ぎゃあ!」

胸に直撃を貰い、もんどりうつ男。

その間に達也は狙撃銃を捨て、新たに右手でコートの下からガバメントを引き抜く。

そして、左の方の弾丸を全て撃ち終えたらすぐに右へ切り替え、セミオートで弾丸を放ち、敵を撃ち抜いていく。

「早くしろよ。そろそろお前のお姫様が攫われるぞ」

達也は、今こちらに全速力で走ってきているであろう男へ、そう言う。

「ふむ、艦娘ですか」

鎮守府の海岸で、一人のピエロマスクのシルクハット男が、双眼鏡で海の上にいる少女たちの姿を捉えている。

「船をだしましょうか・・・しかし、相手は艦娘。まともに太刀打ちできるとは思えませんし、かといって見逃す事もできない・・・八方塞がりですねえ」

キキキ、と笑う仮面男。

「見つけたわ！」

「ん？」

ふと、そんな声が聞こえ、そちらを向くと、そこには、一人の少女が立っていた。

首にマフラーを巻いており、忍者を思わせる服装の少女。

「貴方だけ、仲間を抜けていた・・・こういう事だったのね」

少女、川内がそう言う。

「ふむ、貴方も艦娘の様ですね。ああ、丁度良い、貴方には人質となつてもらいましょうか」

「生憎、私はそう簡単に捕まる訳にはいかないわ」

「それもそうでしょう」

ピエロの男、『影間かげま 祐司ゆうじ』が両手を広げる。

「ッ！」

それに身構える川内。

「では、ここは力尽くで、降参してもらいましょう」

「ッ!!」

そこで先に動いたのは川内だった。

先手必勝とも言おうべきその踏み込みは、一瞬で距離を詰め、右足を折りたたみ、そして、真つすぐに突き出す。

『穿爪うがもちづめ』

基本の技、『蹴突』を昇華させた直進蹴り。

だが、裕司はそれを、半身になった川内の後ろに回り込む事で回避。

「!？」

「良い蹴りですねえ」

「?そして軽く押した。」

「?!?!」

瞬間、背中近くの脇腹に物凄く強い衝撃が走り、陸の方へ吹っ飛ばされる。

「げほ、(っ)ほ・・・!？」

腹を抑え、激しくせき込む川内。

「なかなか良い蹴りでしたよ。しかし、まだ弱い」



「ッ！」

それを聞いた川内は、悔しさに顔を歪ませ、気合のみで無理矢理立ち上がる。

「ほう、立ち上がりますか」

「負けてられないのよ……」

左足を前に、右足を後ろに出し、両手を地面について前かがみになって、腰を上げる。

一般で言う、クラウチングスタートというものだ。

だが、これは馬坂流という、構えの一つだ。

『猪突前進の構え』

「貴方を排除する」

「出来ますかね？」

「やるしかないでしょ!!!」

そのまま、地面を蹴り、川内は裕司に向かって突っ込む。

「ハア……ハア……なんとか、逃げ切れた？」

目の前に広がる海を目の前に、そう呟く翔鶴。

「このまま海に出れば……」

逃げ切れる。

それは口に出さず、翔鶴は、水上移動装置を展開しようとする。  
だが。

「それじゃあ困るんだよ」

「!？」

すぐ後ろから声が聞こえ、慌てて振り向いた瞬間、腹に鈍痛が走り、その痛みに耐えきれず気絶する翔鶴。

その一瞬で見えたのは、白銀の機械的な鎧を身にまとった男だった。

剣を薙ぎ払い、残敵を全て倒す時打。

「これで全部か・・・」

「ああ」

時打の言葉に、若干暗い声で答える長門。

その理由は、気絶している敵の中に、血を流し、絶命している者たちの事だ。

それを察した時打は、長門を背後から撫でる。

時打の方が若干身長が高いため、自然な仕草のように見えるその光景。

「あとで、埋葬しよう」

時打はそれだけ言い、長門の元を離れる。

そして、第二派が来るか来ないかを確認する為にまた屋上の上つている達也の方へ向かって歩き始めたその時、銃声が鳴り響いた。

「達也?」

そこには、九時の方向へ狙撃をしている達也の姿があった。

時打は急いで崩れた鎮守府の建物を飛び上り、達也の元へ向かう。

「おい、達也、どうし・・・」

そこまで言いかけてから、時打は、達也が何を狙撃しているのかわいた。

「お前のお姫様が攫われてるぞ」

若干、ジョークを交えたその達也の言葉の深い意味を、時打は否応なく直観させられた。

「翔鶴ッ!!」

謎のいかつい鎧に纏われた男に、翔鶴が担がれているのだ。

それを見た瞬間、時打の中で、何かが煮えくり返るのを感じた。もともと翔鶴の運は、前世でもある通り、『不幸艦』として揶揄されていた程、悪かったものだ。

だから、その運の無さが今、この瞬間に反映されているのかもしれないが、そんな事を考えている暇は無い。

否、考える必要などない。

時打は、自身の出せる限界速度を出し、その男に向かって走りだす。その時、達也が。

「出来る限り時間は稼ぐ。後は自分でやれ」

当然、時打の耳には入らなかったが、実際、あの鎧男にとっては、かなり邪魔臭いものだった。

「ええい！鬱陶しいッ!!」

忌々し気にそう叫ぶ宮城。

翔鶴を左腕に抱えながら走っているも、飛来してくる狙撃のせいでもちらに気が向いてしまう。

さらには数回、足に直撃され、態勢を崩す事もあるのだ。

それでうまくスピードが出ないのだ。

「ん・・・んん・・・?」

さらに運の悪い事にここで翔鶴が目覚めてしまった。

ものすごいスピードで走っているために、その風はかなり冷たいもの。

そして、そのスピードによって、ものすごい速さで変わっていく地面の様子に驚かずにはいられない。

だがなにより、見ず知らずの男に抱えられているのは、恐怖を抱かない事なんて無かった。

「ひ、いやあああ!!」

「な!?!もう起きたのか!?!」

艦娘の体は丈夫だ。

だから、浅かったのだ。

「はなして！離して！」

「チツ、面倒くさい女だ」

じたばたともがく翔鶴を必死に片腕で抑えつける宮城。

だが、いきなり、自身が来ている鎧・・・アイアンマンの様な鋼鉄の鎧の頭部に搭載された演算装置が、攻撃を知らせる警告を、メットに搭載されたモニターに映し出される。

そして、その攻撃の軌道を正確にオレンジ色の軌跡として可視化される。

慌てて右腕を胸の前に出し、その攻撃を待った。

すると、上腕に鈍い衝撃が走る。

更に、重い鎧をつけている筈の宮城の体が浮き上がり、吹っ飛ばされる。

それと同時に、左腕の翔鶴を手放してしまう。

「翔鶴！」

「提督！」

宙へ投げ出された翔鶴を、宮城を吹き飛ばした時打が左腕で受け止める。

「提督！提督！」

時打の胸に顔を埋め、服の裾を握りしめながら、彼女は安堵の涙を流す。

「ぐ・・・」

一方で、宮城は鎧のお陰でダメージは無く、鎧が歪んだ様子もない。なので立ち上がった。

そして、突如現れた時<sup>イレギュラー</sup>打に対し、演算を始める。

「・・・」

『脅威度 5。用心すべし』

それを見た宮城は、時打を見据える。

「翔鶴、下がってろ」

「はい」

翔鶴を後ろへとおいやる時打。

そして、右手の深鳳の切っ先を向ける。

「・・・」

その眼は、怒気をはらみ、今にも宮城に襲い掛かってきそうだった。

だが、こちらにも何も戦果が無かったなんて言えない。

せめて、男の後ろにいる女だけは攫って行く。

鎧、『A F M S』に搭載された兵装を確認し、身構える。

静寂があたりをつつみ、冬の冷たい風が吹く。

そして……

ドゴオオオン!!!

どこかで大きな音が鳴り響き、二人が同時に動く。

直球に突き進む者と全てを一撃の元に粉碎する者。

悪魔の様な速さを持つ者と馬の様な速さを持つ者。

妹を守る為に戦う者と愉悦を欲する者。

そして、守るべき人の為に刀を持つ者と自らの商売の為に全力を出す者。

この双方がぶつかり、決着がつく時、その先にどんな結末があるか、まだ誰にも分らない。

## 明王と化せ 十重の極み

大きく吹き飛ばされる響夜。

「ぐおあ!？」

木に叩き着けられ、一瞬意識が遠のくも、持ち前の打たれ強さで持ち直す。

「なかなか倒れんな」

一方で、健吾の方はまだまだ余裕と言った感じで首を回していた。

「くっそ・・・」

よろよろと構える響夜。

打たれ強い、といっても、それでも限界はある。

「やはりお前が俺様に勝つ事は不可能だ！ハッハッハー!!」

「んだとゴラ!？」

地面を蹴り、響夜は健吾に向かって走る。

そして、右で二重の極みを放つ。

だが、図体がでかい為に、自然的に胸にその拳がめり込む。

「んくん、痒いなあ」

「チー！」

健吾の余裕そうな表情を見て、すぐさま左で二重の極みを撃ち込む。

「ハッハッハ、無駄無駄あ」

「くそー！」

今健吾が、服の下にきている厚さ一センチもあるタイトスの様なスーツ、『衝撃吸収スーツ』によって、撃ち込まれた衝撃をスーツ内で伝導、体外へ吐き出す機能を有している。

だから、二重の極みの特性である、『一撃目の衝撃で抵抗を失くして二撃目で破壊する』という行為ができないのだ。

「オラオラオラオラア!!」

二重の極みをラッシュで撃ち込み続ける響夜。

だが、長くは続かず、一旦距離を取る。

「効かないねえ」

しかし、散々打ち込んだのにも関わらず、余裕な表情をして指をパキパキと鳴らす健吾。

「くそ、どんだけ反則なスーツなんだよ……！」  
ギリツと歯を食いしばる響夜。

(もうあれを使うしかないのか……?)

そう思いはじめたその時、腹に重い衝撃が走る。

「ぐお!?!」

健吾がアッパーカットで響夜の腹を殴ったのだ。

そのまま宙を舞い、背中から地面に落とされる響夜。

「ぐは!?!」

「ハツハツハー！弱い弱ーい！そしてまだ終わってないぞ！もつと俺様を楽しませてみるオ！」

「この野郎……」

もとより、響夜は負ける気などない。

だが、肝心の二重の極みが効かない、というよりも、打撃だとかの類が効かない相手にどう対処すればいいのかが分からない。

あのスーツが吸収しきれない程の衝撃を与えればなんとかなるかもしれない。

しかし、二重の極みのワンランク上の、握り拳から指を弾くように広げる事で、三つの衝撃を重ねる『三重の極み』は、あのモードにならないと成功率が一割にも満たない程低いのだ。

成功するまで敵が待ってくれる訳が無いので、必然的に、二重の極みに頼るしかない。

じりじりと近寄ってくる健吾。

響夜はなんとか立ち上がろうとするも、中々立ち上がれない。だがその時。

ヒュッ

「!?!」

突然、顔の右側面に右腕をかざす健吾。

そこに、なにか光るものが飛来し、健吾の右腕がそれを弾き飛ばす。宙を舞うそれは、それが飛来してきた方向から出てきた影によって掴まれ、健吾に向かって、その双剣を向ける。

瑞鶴だ。

「瑞鶴!?!」

「何だらしない様になつてんのよ!」

瑞鶴は響夜のありさまをみるなりそう怒鳴る。

「ぬう、貴様も俺様の道を阻むか!」

「俺様つて随分と身分のお高い事で」

地面を蹴り、健吾に向かって走り出す瑞鶴。

両腕を交差させ、健吾に向かって、その双剣を、重ね当ての要領で振るう。

『陰陽交叉』  
おんみょうこうさ

一刀目の後ろから二刀目を叩き着け、重ね当てで敵を切断する御庭番式小太刀二刀流の技。

「ぬん!」

「!?!」

それに対し、健吾はみずから胸を出す。

その胸に、瑞鶴の交差させられた双剣が叩き込まれる。

(自分から体を……!?!)

その行為に困惑する瑞鶴。

だが、そこで異変に気付く。

健吾から一滴の血も流れていないのだ。

「!?!」

「ハッハッハー!このスーツは、衝撃を吸収するだけでなく、防刃にもすぐれているのだ!」

「だつたら!」

今度は瑞鶴は右腕を後ろへ引き絞り、右の小太刀を突き立てるように真っ直ぐに健吾に向かって突く。

「防刃素材は刺突には弱いものよ!」

「その通りだ!」



「!?」

だが、健吾はその攻撃を、左手の人差し指と中指でその刃を受け止める。

「嘘……うが!？」

それに驚く暇も無く、顔面に拳を叩き込まれる瑞鶴。

それで意識が遠のく。

しかし、意識を聞から引きずり出すかの様に、二撃目が瑞鶴の顔面を襲う。

「あ……かあ……」

「まだまだおねんねには早いぞ!」

「瑞鶴!」

よろめく瑞鶴。

その瑞鶴に、三撃目を入れようとする健吾。

だが、二撃目で意識を引きずり出されたために、瑞鶴はその三撃目が来る前にすでに攻撃態勢を整えていた。

「な、める、なあ!!!」

「ぬお!？」

瑞鶴の眼が真っ赤に染まり、体から蒸気を発する。

高速回転する瑞鶴。

御庭番式小太刀二刀流奥義

「ハアアア!!!」

その回転を使い、超高速の六連撃が健吾に叩き込まれる。

—— 『回転剣舞・六連』

右斜めから平行に三撃、同じく左斜めに三撃。

計六連撃の交差した連撃が健吾を襲う。

さらには、身体強化『鬼人化』のおまけつきだ。

だが。

「良い攻撃だ。だが、まだまだだな」

「嘘……!？」

だが、健吾には全く効いている様子が無い。

それに目を見開き驚愕する瑞鶴。

健吾の右腕が動く。

「!?」

それに瑞鶴が気付いたのは、すでにその右手が瑞鶴の首を掴んでからだ。

「あ……か……」

「いいぞお。もがけもがけ!もがき苦しめ!」

健吾の右腕を引きはがそうと、両手でその右手を掴むも、その剛力の前に、成す術が無かった。

「瑞鶴!」

「きよう……やあ……」

意識が朦朧としているのか、喉を抑え込まれて声が出ないのか、かすれた声で響夜の名を呼ぶ瑞鶴。

「ハッハッハー!どうした喧嘩屋あ!このままではこの女は死ぬぞお!」

ニヤリと笑う健吾。

「テメエ!!」

それに頭に血が上ったのか、立ち上がって健吾に向かって走り出す。

そして、その背中に二重の極みを叩き込む響夜。

だが、当然の如く、その衝撃はすべて体外へ吐き出されてしまう。

「小賢しいわ!」

「ぐは!」

振り向き様に左腕で殴られ、吹き飛ばされる響夜。

その吹っ飛んでいく様を見て、ほくそ笑む健吾。

ざしゆ

「む!」

突然、瑞鶴を掴んでいる右腕に、鋭い痛みが走る。

振り向いてみるとそこには、健吾の右腕に瑞鶴の右の小太刀が突き刺さっていた光景だった。

瑞鶴の顔は、蒼白ながらも、してやったり、といった表情で、笑っている瑞鶴の姿があった。

しかし、健吾はそれを見て多いに顔をニヤつかせる。

次の瞬間、思いつき右腕を振り上げたかと思うと、瑞鶴を思いつきり地面に叩き着ける。

「ガハア!」

それによって、空気が不足していた肺の中の空気が更に吐き出される事になり、上手く呼吸が出来なくなる。

「なかなか舐めた事をしてくれるじゃないか」

「あ……あ……」

健吾は、右腕にささった小太刀を引き抜く。

その右腕から止めどなく血があふれ出る。

「ふん!」

「あが!」

だが、右腕に力を入れた途端、右腕からあふれ出ていた血がびたりと止まる。

筋肉によって止血したのだ。

「ハッハッハー!こんな切り傷程度、筋肉さえあれば血などどめる事など造作も無い!」

豪快に笑う健吾だが、瑞鶴はすでにそれを聞いていない。

先ほど力を入れられた事で、更に首が絞められ、急速に意識が遠のいているのだ。

「瑞鶴ツ!!」

その様子の子の瑞鶴にいち早く気付く響夜。

高笑いをする健吾。

そんな中、響夜は見た。

瑞鶴がこちらを見て、微かに口を動かした事を。

「に……げ……て……」

なんとか読み取る事が出来たその言葉に、響夜は、頭の中で何かがフラッシュバックして碎けると同時に、何かが沸騰するような感覚に襲われる。

ゆらりと立ち上がる響夜。

そして、何を思ったのか、胸の前で、両手を合わせる。

そして、数回深呼吸をした後、突然、地面が揺れた。

「ぬ?」

異変に気付く健吾。

響夜が、両手を、両肘をその場に固定し、右手を反時計回り、左手を時計回りに上に向かって拳を作りながら半回転させる。

そして、両手の拳を今度は思いつきり打ち付ける。

なんの儀式なのか、首を傾げる健吾。

「……『明王モード』」

そう呟いた響夜。

そして、ゆつくりと歩き出す響夜。

背後に、明王の化身を移しながら。

それを見た健吾は、何かやばい、と瑞鶴を離し、身構える。

「げほ!げほ!げほ!」

酸素がやつとの事で吸い込めた瑞鶴は、はげしく咳き込む。

やがて、それが収まると、瑞鶴は、心配する様に響夜を見る。

「響夜……?」

その表情は、怒りに染まっていた。

右拳を握りしめる響夜。

そして、健吾を射程に収めた瞬間、響夜が踏み込む。

左足を前に出した瞬間、地面がいきなり爆ぜる。

「ぬお!!」

「きゃあ!!」

足での二重の極みだ。

それで健吾の態勢を崩す。

その健吾に、響夜の左手を添えた右拳が叩き込まれる。

宙に浮いている為に、後ろに下がる健吾。

「ふん、だからなんどやっても……!」

いきなりよろめく健吾。

そして、先ほど響夜の拳が当たった場所に微かな鈍痛があった。

「な、何故だ!? スーツがあるかぎり、お前の二重の極みは効かない筈……」

「流石に、四つも重ねればとどくか!?!」

響夜が口を開き、身構える健吾。

「右手で二つ、左手で二つ。この四つの衝撃を重ねれば、流石にそのスーツも衝撃を吸収しきれないって訳だ」

また、右手に左手を添える響夜。

「これが五つになるとどうなるんだろうな?」

「く、くそがあああ!!」

健吾が雄たけびと共に走り出す。

一方で、響夜はその場で右腕を振りかぶる。

健吾は、左肩を前に出し、ショルダータックルを喰らわせようと、更に加速する。

(大丈夫だ! 俺にはこのスーツがある限り、奴の二重の極みは効かない! そうだ、絶対に効かない! 効かないんだ!)

自身に暗示をかけ、謎の恐怖を振り払う健吾。

だが、そんな様子に気付いていないのか、はたまた呆れているのか、響夜は、容赦なく明王の拳をその左肩に叩き込む。

「五重の極み」

ほどなくして、健吾の左肩に鈍い痛みが走る。

「ぬあ!?!」

思わず下がってしまう健吾。

そんな健吾に追撃と言わんばかりに、今度は左手に右手を添えた状態で腰の方から左拳を振りかぶる。

そして、健吾の腹に、左拳を叩き込むのと同時に、左膝を叩きこんだ。

「七重の極み」

それによって下がる健吾。

そして……

「ゴハア!?!」

咯血した。

「ば、ばかな……な、なんで……!?!」

「片手で三つ、もう片手で二つ。そして、片足の膝で二つ。合計七つの衝撃で咯血か」

狼狽する健吾を他所に、響夜は、冷酷な眼差しでそう説明する。

明王モード、というのは、一言でいえば、ただの自己暗示だ。

だが、響夜は、先ほどの儀式の様な動き、『プリシヨットルーティーン』によって自らのイメージを固め、雑念を消し、自身を一つの破壊兵器とする事で、二つ以上の衝撃を作り出す事が出来るようになったのだ。

「さて、問題だ。お前のスーツ、十の衝撃は耐えられるのかねえ」

腰のあたりで、両拳を構える。

そして、腰を落とす。

そして健吾は直感する。

あれはヤバい、と。

「く、くそおおおおおおおおおおー!」

だが、自身のプライドが、逃げる事を許さず、もはや自暴自棄になって響夜に突進する。

ここでプライドを見せずに逃げていれば、こんな事にはならなかっただろう。

右足で二つ、左足で二つ。それを体内で伝導させ、それぞれを両手に伝導させる。

そして、両手を前に突き出し、相手に直撃させた瞬間に、その二つの衝撃と共に、左右同時に三重の極みを放つ。

両足で四つ、両手で六つ。その合計は十。

その一撃は、山をも砕くほどの威力。

十重とえの極み

「ふう……」

何か突き抜けたかの様なその森の光景。

同時に、地面に膝をつく響夜。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

だいぶ、久々に放った十重の極み。

その威力は、人を一撃で木端微塵にする程の威力で、もし、健吾が衝撃吸収スーツを着ていなければ、間違い無く殺していただろう。

「ハア……」

立ち上がる響夜。

そして、放心している瑞鶴に向かって歩き出す。

「おい、無事か？」

「……ええ」

声をかける事で、瑞鶴は我に返り、力無く返事をする。

「……なんで来た？」

響夜がそう質問する。

「……貴方が、危なそうだったから」

顔を伏せる瑞鶴。

そんな瑞鶴を、響夜は、何を思ったのか、抱きしめた。

「……二度としないでくれ」

「……無理」

微かな嗚咽と共に、瑞鶴はそう答えた。

## 馬坂の最奥 『火爪』炸裂

「ラァァァ!!」

水平に薙ぎ払われる左足の後ろ回し蹴りを、弘斗は上半身を反らす事で回避する。

「おっしい〜」

「ザツケンナゴラー!」

敵の態度に額に青筋を浮かべる葉子。

だが、その体には、所々血が流れており、黒い制服から分からないが、白い裸体はしっかりと赤く染めていた。

その理由は、弘斗の履く、ハイヒールにあるのだ。

踵の部分がとんがっており、それが葉子の体を抉っているのだ。

先ほどからこちらの攻撃全てを避けている弘斗。

その避け方は、まるで紙を相手に蹴るかのように手応えなく、幽霊の様に避けるのだ。

「えい!」

「ぐう!」

弾丸の様に放たれる直進蹴り。

それが葉子の腹を抉る。

だが、葉子はそれをすんでの所で踏ん張り、右足を思いつき蹴りあげる。

しかしその蹴りは弘斗がバック転する事で回避される。

「アツハハ!おっそ〜い!」

「くう・・・!」

腹を抑える葉子。

そこから血が流れ出る。

ハイヒールの踵の部分による蹴り。

通常のものと同じ、今葉子が履いている黒鉄のロングブーツと同じ鉄製。

更には、針の様にとんがっているのに、それが地面に刺さらない様に体重移動にも注意している。



そしてなにより、子供だ。

「情けないな……」

自虐する様に笑う葉子。

「時打は、幼い子供の命を奪ったつてのに」  
地面を踏みしめる。

「私が子供を蹴れなくてどうすんのよ」

ある意味、残酷な事を言い、葉子は、両手を地面につける。

猪突前進の構え、だ。

「馬坂流戦闘術——ツ!!」

スタートダッシュで、一気に初速から最高速度トップスピードに入る、猪突前進の構え。

「!？」

そのスピードに目を見開く弘斗。

そして、葉子は、そのスピードのまま、体を前に投げ出し、逆サマーソルトキック、空中前転踵落としを繰り出す。

「——『空紅・前』ッ!!」  
からくれない

それをすんでの所でかわす弘斗。

「すつごういー!じゃ、おかえしに……」

一歩下がった弘斗は、そこからすぐに弾かれるように前に向かって蹴り出し、直進蹴りを放つ。

だが、そこで葉子は下がる。

「無駄よー!」

しかし、下がった所でそこは弘斗の蹴りの進行方向。

直撃は免れない。

が、そこで葉子がさらに前回転。

「!？」

その意図が分からない弘斗。

しかし、気付いた時にはもう遅かった。

「空紅・後ー!」

バックステップからの回転踵落とし。

その一撃が弘斗の腹に直撃する。

「ぐほお!？」

「まだまだア!!」

しかしそれでは終わらず、直撃させた右足が離れた瞬間、追撃の左足が弘斗を更に襲う。

よって、地面にクレーターがうまれる。

「どうだ・・・ッ！」

空中へ飛び上がり距離を取る葉子。

だが。

「舐めんじやないわよ」

「!？」

空中で回転した所で、目の前に、狂喜している弘斗の顔があった。

「かつはあ・・・!？」

そして、胸の中心に鋭い痛み。

いつの間にか、腹に弘斗の蹴りが入っていた。

「ツ~~~~?!?!？」

それに衝撃が無く、態勢を崩し、地面に落ちる。

「ぐう・・・くう・・・」

痛みに悶え、うつ伏せになる葉子。

「さっきの技、とてもよかったわあ。でも残念。私を落とすまでには至らなかつたわね」

「くそ・・・」

悔しそうに、呟く葉子。

おそらく、なんらかの方法で葉子の『空紅』の直撃を回避したか、じくを外して威力を半減して、ダメージを軽減したのだ。

「致命傷ね。流石に手当しないとまずいわよ?あ、でも、貴方は標的じゃないから、死んじやってもいいんだっけか?」

アハハ、と高笑いをする弘斗。

子供のする思考じゃない。否、子供だからこそ、罪悪感を感じない。「純粹すぎるってのも、考え物ね・・・」

ぐぐぐ、と立ち上がろうとする。  
脳裏に移る、兄と弟との修練。

——負けられない。

才ある兄と弟に置いて行かれ、自分だけ、家を出る寸前で手に入れた、馬坂流戦闘術の免許皆伝。

よろよろと立ち上がる。

その時に言われた、弟からの言葉。

『今更手に入れたんだ？お姉様？』

徹底的に叩きのめされた。

とんとん、と足踏みをする。

その時の笑い顔ときたら、悔しさしかなかった。

敵を見据える。

東京の憲兵学校に来て、彼に出会った。

刀を持ち、他人を引き寄せないようなオーラを放ち、誰とも関わらない、孤独さを感じさせる彼。

そんな彼をほっとけず、話しかけてみた。

案外、受け答えが上手で、どんどん彼に惹かれていった。  
ある日、弟が学校にやってきた。

そこで、弟は、自分の事情を全て暴露した。大勢の見ている間で、高笑いをして、自分の笑いにした。周りからも笑われ、すぐにその場を逃げ出そうとした。そんな時だった。彼に腕を掴まれ、引き留められたのは。その時の言葉は、これだった。

『逃げんじゃねえよ』

その言葉を、自分に告げ、彼は、弟に立ち向かった。そして勝った。

馬坂の奥義を使い、徹底的に痛めつけようとした弟を、グラウンドがぼろぼろになるくらいの激闘の末に、あの奥義を放ち、斬り伏せた、彼。

葉子は、その時、絶対に恩返しをしようと言った。

例え、彼の幸せを、自分で作る事ができなくても、私は、彼に恩返しをする、と。

——今、その一部を、ここで返す。

「返すわよ、時打」

ガキンツ！と、右足の靴で、左足の靴の脛辺りを擦らせる。

火花が散る。

葉子は、その右足を、空中で思いつき振り振るう。

その瞬間、右足が燃え上がる。

「!？」

空気摩擦での赤熱。

馬坂流戦闘術の最奥は、とにかく、足の部分を燃やすか赤熱させるか、それが出来ればいいのだ。

それだけで、その脚は、地獄を業火を纏った、篝火となる。

それこそが――

「馬坂流戦闘術奥義の型『火爪』――地獄の業火に焼かれて死ね」

これにより、葉子の技は一段階、進化する。

「馬坂流戦闘術――ツ!!」

左足を前に出し、『猪突前進の構え』からの初速全開のスタートダッシュを決める葉子。

そのスピードに、さらに赤熱する右足。

「ツ！」

流石の弘斗も、あれを受けるのはまずいと予期し、回避行動に移る。

葉子は、空中で、前転の高速回転をする。

右足が、まるでタイヤに刃が飛び出ているかのように、赤い奇跡を描き、弘斗に迫る。

「――『火車・縦断』ツ!!」

その一撃が、空気を焼きながら、弘斗に迫る。

だが、弘斗はそれをすんでの所で下がって回避。

葉子の右足は地面に叩き着けられ、地面を焼き焦がしながら、クレーターを作っていく。

だが、その右足を踏み込み、更に左足を前に出し、下段から右足を蹴りあげる。

「馬坂流戦闘術――『火漣』ツ!!」

「うわ!?!」

それを状態を反らす事で回避する。

だが、追撃はまだ終わらない。

「『火燕落ツ!!』」

ついに、地獄の業火の一撃渾身の踵落としが、弘斗に叩き込まれる。

「ぐうああああ!?!」

肉が焼ける音と共に、地面に叩き着けられる弘斗。

下がる葉子。

だが、それでもまだ戦闘不能にならない弘斗。

「やってくれたわねえ……」

火傷は、損傷では無く、痛みによるステータスダウンが大きくみられるダメージだ。

「死んで、お姉さん」

弘斗の姿が掻き消える。

気付けばすでに懐に。

「しまっ……」

何かを言い終える前に、八連撃の蹴りが葉子に叩き込まれていた。「ぐっああ!？」

「アハハ！そのまま死んじゃえ！」

意識が遠のく。

だが、その時、脳裏に走った、時打との学校での日々と、川内との修行の日々が、葉子の意識を引き戻し、踏みとどまらせる。

「ツツツ……射程、距離い……入ったわね……ツ！」

「嘘、なんで……!？」

狼狽する弘斗。

「終わりだあああああああああ!!!」

絶叫、そして、左足を思いつきり、深く、深く踏み込み、超高速の、超高温の、超弩級の一撃が叩き込まれる。

「馬坂流戦闘術——『火爪ひづめうが穿ち』イ!!!」

発火、からの、火線の貫通。

閻魔大王の炎が如き、その焰の槍が、弘斗を穿ち貫く。

弘斗は、もんどりうって倒れ、そのまま白目をむいて、倒れる。

「はあ……はあ……はあ……か、勝った……」

がくがくする足でなんとか立ち、血が腹をおさえ、白目向いて気絶している弘斗を見下す。

その弘斗から背を向け、鎮守府に向かって歩き出す葉子。

「はあ……戻らないと……みんなが……」

「その傷では無理でござろう」

「!?」

突如、後ろから聞こえた声に、思わず振り向く葉子。

そこには、先ほどもでいなかった弘斗の傍に、一人、赤い忍び装束と覆面で顔を隠した男がいた。

そのガタイはかなりムキムキのマッチョメンで、首から風になびく赤いマフラーがなぜかとてもよく似合っている。

思わず身構える葉子。

「待て、拙者は戦う為にここに来たのではない」

そして、両手を合わせ、お辞儀をする忍者。

「ドーモ、馬坂葉子ニサン。赤島せきしま 小太郎こたろうデス」

それに、アゼンとする葉子。

「ア、アイエエエ!? ニンジャ!? ニンジャナンデ!?」

そして、ニンジャリアリテイションヨック N R Sを起こすのだった。

「先ほどの戦い、見事であった。拙者、実は、お詫びに来たで候そうろう」

姉の想いを乗せて斬れ 『天翔龍閃・加賀岬』

機銃が乱射される。

それを、弧を描くように走って避ける時打。

「チッ」

舌打ちする宮城。

その姿は、まるでアイアンマンの様な鎧に包まれていた。

左腕の上腕から出た小さなガトリング式機銃を納め、代わりに脚部から三連装追尾ミサイル発射装置を右足から飛び出させ、発射する。

そのミサイルは高速で動く時打を捉えており、追尾する。

「提督ー」

その様子を遠くから見る翔鶴が叫ぶ。

それに答える様に時打が反転。

右手に持った逆刃刀を地面に向かって振るい、それによって巻き起こる土の散弾がミサイルに直撃、爆発を巻き起こす。

飛天御剣流——土龍閃

土や石を抉り飛ばし、相手に直撃させる中距離攻撃。ミドルレンジ

だが、それを予測していたのか、宮城はさらなる攻撃にすでに入っていた。

右掌から、エネルギーを集束させ、電磁エネルギーによる光線を放つ。

「うおっ!?!」

思わず声を挙げて回転して回避する時打。

だが反撃と言わんばかりに土龍閃で反撃。

飛んでいく土や石が宮城に直撃する。

だが、怯んだ様子も無ければ、鎧には傷一つついていない。

宮城が着ている、『A F M S』アーマード・フルメタル・スーツは、頭部に超高性能な演算装置

に加え、チタン超合金配合の装甲にうえ、内部に大量の機銃やエネルギー砲を内蔵しており、そのエネルギー量は、極めて高く、そして容易に手に入る電気できてきているのだ。



未来予知に近い演算で敵の次の行動、回避先、思考を全て予測し、自身の思考で武装を自由に出し入れでき、更には操作できるといった、まさに機械仕掛けの鎧だ。

そして今、宮城は演算機能を使って時打の次の行動を予測して、その地点に攻撃を仕掛けている。

仕掛けている、だが。

「何故当たらない・・・ッ!?!」

装置が演算と共に、その原因を検証。

「次の行動の予備動作を、ギリギリまでやっていないだと・・・!?!」

時打は、攻撃や動く際、なんと初速でトップスピードを叩き出して動いているのだ。

それも、体に通常よりも高い負荷をかけてだ。

おそらく、戦っている間に、自分の行動が読まれている事に気づき、更にはかなり多い兵装を持っている為に、接近戦に持ち込む為の準備運動を行っているのだ。

さらには、人間にしては異常なスピード。

ただの人間が、ここまでの動きが出来る訳が無い。

なにか、秘密がある筈だ。

次の瞬間、時打が向きを変えて、宮城に接近を始める。

「来るかッ!」

身構える宮城。

走行中、前に出る右足。

それが、地面につく瞬間、いきなり大きく前に踏み込む。

それを見た演算装置が、次の攻撃を予測。

右足の踏み込みで飛び上がる時打。

それを待ち構えたいた様に、右腕を上空へ掲げ、腕から機関銃を出し、回転、弾丸を放つ。

対する時打は、空中で高速で回転。

それによって巻き起こる突風が、連続でやってくる無数の弾丸の軌道を反らす。

やがて弾丸の嵐が切れ、時打の回転が緩み、宮城の目の前に着地。おおきく身を低くし、狙うは、装甲が薄いであろう、左脇。そこへ、龍翔閃を叩き込む。

「ッ!」

刀身は、しつかりと左脇を捉えた。

だが、そこから先に進まない。

どんなに力を加えても、そこから先へ刀身が進む事が無かった。ジジジ、という音が聞こえ、目を凝らす。

そこには、何もない。しかし、刃が、鎧に触れる寸前で止まっていた。

確かに、そこには何かある。

「電磁バリアツ!」

直感で悟り、慌てて時打は、宮城の脇を抜け、背中へ逃げる。

そこへ、宮城の来ているスーツの頭部の額部分から、エメリウム光線よろしくレーザーが発射。その場を焼き尽くす。

背中へと抜けた時打は負けじと波龍閃をその背中に叩き込む。

だが、やはり、刃は鎧に触れる寸前で止まる。

「くッ!」

苦い顔をする時打。

距離を取る時打。

同時に、時打のいる方向に向いて、身構える宮城。

「参ったな……」

時打は、そう呟く。

電磁バリア。

磁場による重力場を展開し、敵の物理的な攻撃を防ぐ、いわば、エネルギーシールドの事だ。

こういうのは、<sup>アンドロイド</sup>人造人間や<sup>サイボーグ</sup>改造人間について専門的なアメリカやロシアがその開発の実権を握っているのだが、現代の科学力ではイージス艦や軍艦に纏わせるほどのエネルギー磁場を作れない事が分かり、一応、それを纏ったサイボーグが深海棲艦の砲弾の威力を少なからず軽減させる事に成功したらしい。

だが、所詮は軽減。完全に防ぐ事は叶わず、お蔵入りとなった技術の筈だ。

「——その技術を、あの鎧に……」

木の陰に隠れ、戦いの様子を伺っていた翔鶴も、その正体に気付いていた。

もともと、戦術眼は高い方であり、彼女に旗艦を任せれば、高確率で完全勝利を得られる程だ。

指揮力だけで言えば、現日本空母の艦娘最強である、横須賀の赤城と同等と言えるだろう。

そんな戦術眼を持つ翔鶴だからこそ、あの鎧の構造を見抜く事ができたのだ。

「どうすれば……見た所、バリアを局所的に展開して、提督の攻撃を完全に無効化しているだろうけど、展開されるよりも早く刀を振るえば、ぶつける事は敵うだろうけど、提督が、そのスピードを超えられるかどうか……」

思考を全力で回転させる翔鶴。

なにか、なにか、彼に助言する事はできないか。

ただそれだけを考えて、翔鶴は、必死に考える。

ふと、時打は、深鳳を鞘に納めた。

「提督……?」

翔鶴は、それを見て一瞬首を傾げるも、すぐにその意図を読み取った。

抜刀術だ。

抜刀術なら、バリアが展開される前に、攻撃を直撃させる事が出来るかもしれない。

無形の構え、となり、時打は、目の前にいる敵を見据える。

——その構えは、あまかけるりゆうのひらめき天翔龍閃だ。

ここで勝負をつけるつもりなのか、敵を真っ直ぐに睨み付ける時打。

宮城は、手首を動かし、手の甲の方向から、ブレードを出す。

両刃の横幅な剣だ。

おそらく、迎え撃つつもりだろう。

そのまま静寂があたりをつつむ。

息を飲む翔鶴。

先に動いたのは、宮城だ。

両手を大きくあげ、時打に大きく飛びかかる。

その所為で胴がから空きになる。

一拍おくれて踏み込む時打。

宮城よりも速く、右足を踏み出し、刃を抜く。

更に、天翔龍閃発動の要である、左足を踏み込み、更なる加速を、深鳳にかける。

そして、深鳳の刃が、宮城の右胴に叩き込まれる。

だが、刃はその寸前に止められた。

「ッ!？」

「嘘——ッ!？」

電磁バリアを集中させて、超神速の抜刀術である天翔龍閃を防いだのだ。

宮城が仮面の中でほくそ笑んだ様な気がした。

「くッー!」

両足を浮かせる時打。

宮城の胴体を軸にして、深鳳を使って、宮城の脇をすり抜ける。

そこへ宮城の両手の剣が襲うも、空ぶる。

地面を転がり、宮城のいる方向を向く時打。

「そんな……」

決め手である天翔龍閃が防がれた。

翔鶴にとっては、信じられない状況だった。

超神速の抜刀術である天翔龍閃を防ぐ。

それは、反応してからじゃ遅い。

つまりは予測したのだ。

だが、無形の状態で、どこへ刃をあてるのか分からない筈だ。

しかし、宮城は、攻撃を仕掛ける際、両腕を上にあげ胴体を曝け出す事で、時打の攻撃を誘導したのだ。

もともとスタンバイしていた所へ、演算装置による精密な未来予知にも近い予測が、より正確な軌道を割り出し、そこへバリアを集中させたのだ。

これでは決め手である天翔龍閃は使えない。

完全な無形からの生と死の狭間から生を見い出す事を前提とする天翔龍閃は、攻撃の最中の不安定な状態からでは放つ事が出来ない。

これでは、勝機が無い。

「提督……時打さんッ!!」

声を押し殺し、そう呼んだ。

一方で、時打の脳内は酷く冷静だった。

「やはり防がれたか」

攻撃や動作を予測されていたのは分かっていたし、電磁バリアを使って攻撃を無効化される事も先ほどので分かっていた。

ならば、飛天御剣流最強である天翔龍閃ならどうだと思ひ、放つてみた所、見事に防がれてしまった。

これで決め手は全て封殺されたと言ってもいいだろうが、防がれた事で、逆に勝機が見えてしまったのだ。

また鞘に深鳳を納める時打。

「無駄だ」

ふと、なにやら機械的な声が鎧から聞こえた。

「貴様の決め手である先ほどの居合は、すでに防いだ。もはや、お前に勝機は無い。大人しく負けを認めて、あの女を渡せ」

降伏勧告。

確かに、もう一度天翔龍閃を放ったところで、今度は完全にその特性や威力、速さなどを完全に覚えたシステムによって防がれるだろ

う。

だが、時打の飛天御剣流には、まだ『最速の抜刀術』が存在する。  
左手で鞘、右手で柄を持ち、構える。

「飛天御剣流抜刀術——」

その名は、かつて姉と共に戦った、空を飛ぶ、鋼鉄の鳥たちの名。

「——『零龍閃』ツ!!」

抜刀から収納まで、全く見えない程の抜刀術が、宮城の脇に叩き込まれた。

ガアアアンツ!!!

「ツ!?!」

その衝撃に、目を見開く宮城。  
思わずよろめいてしまう。

何が起こった。

「まだまだ行くぞ」

時打がそう呟く。

「零龍閃——三機ツ!!」

刃が抜き放たれる。

月明りに反射した三つの残光が、宮城を襲う。

「ぐう!?!」

その衝撃に、思わずうめき声をあげる宮城。

余りにも速すぎる。

抜きから納める所まで、機械の演算さえも、それを見破る事が出来ない。  
とにかく速すぎる居合。

「くそお!!」

両掌からレーザーを放つ宮城。

それを横に跳んで、空中を回転しながら回避する時打。

だが、その眼が宮城を捉えた瞬間、まるで弾丸でも放つが如く斬撃を放つ。

「零龍閃——捨り込みッ!!」

抜刀、残光が半回転、十二時の位置でその軌道を変え、真つ直ぐに飛んでいき、宮城の顔の右側面に直撃する。

更に、地面に着地し、その低い態勢から、更なる斬撃。

「零龍閃——水面飛行ッ!!」

低く地面スレスレに弧を描く斬撃が、左足の脛を斬る。

どの攻撃も鎧に阻まれて、防がれるも、しかし確実にダメージを刻んでいる。

零龍閃

その正体は、《超光速》の抜刀術だ。

『天翔龍閃』は、超神速の抜刀術であるが、速さだけではなく、威力

も兼ね備えた抜刀術だ。

だが、この零龍閃は、威力を削いで、命中率と速度をあげた抜刀術だ。

その速さ故に、かつて、その技を見た者はこう呼んだ。

不可視の魔剣、と。

余りにも速すぎてその刀身が見えない上に、燕返しのように、威力が無いために剣の軌道を自由に切り替える事のできる為に、予測が不可能であるこの抜刀術。

なにがし落第騎士の、相手の理を見抜いてどのような攻撃をするかを予測しなければ、防ぐ事はおろか、避ける事もかなわない抜刀術なのだ。

それが証拠に。

「くッー」

木の後ろに隠れる宮城。

すでに威力が無い事は演算で分かっている。  
ならば、木を利用して、死角を作り、その影から攻撃する。  
そうして隠れる宮城。

だが、突如として、木の横左右から二つの残光が見え、右の残光が  
宮城の右腕から出ていた機関銃を穿ち、左の残光が左膝裏を穿つ。

「バカな・・・ッ!？」

曲がる斬撃。

そして、攻撃範囲の拡張。

それが、この零龍閃ゼロロセンのえげつない所なのである。

その範囲は槍の範囲を超え、その軌道は自由に曲がる。

まるで、斬撃を飛ばしているかのように。

「チィー！」

もはや、回避はおろか、電磁バリアによる防御も無意味。

木ごしに、頭部からレーザーを放つ。

そのレーザーは木を貫通し、木の後ろでいるであろう時打に向かっ  
て突き進む。

だが、既に時打は宮城の背後を取っていた。

「零龍閃ゼロロセン——」

「ッ!？」

(いつの間にか?)

そして、時打の刀から、連続で斬撃が放たれる。

「——一型——二型——三型——二型——五二型

——五三型——」

かつての大戦で、活躍した、機体の名称。

「雷電——紫電——紫電改二——!!」

その名の持つそれぞれの威力を、宮城に叩き込んでいく。

「彗星——天山——流星——!!」

宮城は反応する事ができない。

「友永隊——ッ!!」

水面すれすれで放たれる無数の斬撃が、宮城を宙へ浮かせる。

「江草隊——ッ!!」



直後に、曲射のように、上空へ放たれた斬撃が、軌道を変えて急降下する様に宮城へ向かう。

まるで、爆撃するかのように。

地面に落ちる宮城。

だが、地面に落ちる前に、止めと言わんばかりに時打が最後の一撃を撃ち込む。

「零龍閃——烈風ッ!!」

その威力を兼ね備えた光の速さの斬撃が落ちる途中の宮城に叩き込まれ、吹き飛ばす。

「——ッ!!」

翔鶴は、あつけにとられていた。

翔鶴でさえも、抜きから納める所まで見えなかった超光速の抜刀術は、たった今、鎧の男を地に伏せさせた。

だが——

「何故……その名前を……?」

その技の名を、どうしてあの鋼鉄の鳥たちのものにしたのか?

次の瞬間、宮城の鎧からミサイルが発射される。

その数、十。

「零龍閃——十機ッ!!」

対する時打も、迎撃するかのように、十個の残光を放ち、撃ち落とす。

その間に立ち上がる宮城。

健全そのものだ。

時打も、それには冷や汗を流す。

時打は、戦いのなかで絶対に笑わない。

日常では、苦笑する事が多かったのに、いざ戦闘となると、その顔からは笑みを消す。

——ただあの時、翔鶴に微笑んだ時以外は。

今いらぬ事を思い出し、体温を上昇させる翔鶴。

ただそれは、あの街での教訓なのか、それとも油断しない為なのか。ただ、翔鶴は、その戦いを、見守る事しか出来ない。

一方で、対峙する宮城と時打の方では。

「貴様、舐めた真似を・・・」

おそらく頭部についてあるだろうスピーカーから、その様な忌々しさを込めた声でつぶやく宮城。

「別に舐めてないさ。俺は至って真面目だ」

そう言い、時打は、両手を深鳳と鞘から離す。

無形の構え、だ。

そこから繰り出される技は、ただ一つ。

『天翔龍閃』だ。

あまかけるりゆうのひらめき

「またその技か、それはさつき防いだらう？無駄な事はやめろ」

「別に無駄じゃないさ。これから放つ技は、さつきの比なんかじゃない」

次の瞬間、その場にある全ての木の葉が弾け飛ぶ。

「ツー」

その気迫に、肌がぴりぴりとする感覚に全身を襲われる翔鶴。

それは、異常な程の剣気。

そして、宮城の頭部のモニターから、異常な程の警告が鳴り響いていた。

『非常に危険——離脱を推奨されたし——重症覚悟——脅威度10——』

「ツ・・・!?!」

その数値に、思わず怖気づく宮城。

これを受ければ、死ぬ事は無いが、意識不明の重体になる事は必至。

そう、機械が告げている。

そして、本能が、逃げる事を推していた。

逃げなければ、とにかく逃げなければ。

——しかし、ここまでできてなにも得られなかったなんて事は許されない。

そう、プライドが逃げる事を許さなかった。

「ぬうおおおおおお!!」

雄叫びを挙げ、両手を掲げる。

胴体をさらし、そこに電磁バリアを展開、演算装置が、焼ききれんばかりに回転する。

とにかく、この一撃を防げば、あとは両手のレーザーと剣を突き立ててれば相手は絶命し、難なくあの女を攫える。

そして、高値で売り飛ばし、それを組織に献上する。

幸い、組織には人身売買の事はバレていない。

貴重な収入源である自分たちが潰されれば、組織も少なからずダメージを受けるだろう。

それだけは許されない。

それは、宮城の持つ、忠誠心。

それが、彼を前へと駆り立てた。

一方で時打は、その心意を見抜いていた。

だからこそ、憐れむ様な目しかできなかつた。

その忠誠心が異常だからこそ、この男は、こんな凶行に走った。

そんな人間は、あの街で何十人とみてきた。

そして殺した。

だからこそ、時打は、斬る。

そのひねくれた精神を。

時打は踏み出す。左足を。

——頼む、姉さんツ!!!

胸の中にある、煌く、指輪きざらめに願う。

右手が暖かい何かに包み込まれる。

導かれるように、左足を踏み込むのと同時に、左手で握った鞘に収まっている深鳳の柄を握る。

深鳳を抜き放つ。  
刃が白く輝く。  
右足を踏み込む。  
腕が、音の壁に激突する。  
壁が重くのしかかり、前へと進もうとする右手を抑え込む。  
だからこそ、三歩目の左足を踏み込んだ。

超々神速の抜刀術が、宮城の集束した電磁バリアに直撃する。  
だが、電磁バリアがまるで紙のように突き破れ、鎧を破壊し、宮城を、上空へと吹き飛ばす。

その名は――

「我流飛天御剣流奥義――

『あまかけるりゆうのひらめき天翔龍閃・かがみさき加賀岬』

意識を吹き飛ばされ、鎧を砕かれた宮城は、あっけなく地面に落ちる。

それと同時に、時打は、一回薙いだ深鳳を鞘に納めた。

そして、地面に膝を着く。

「提督！」

思わず声を挙げ、駆け寄る翔鶴。

「大丈夫ですか!?!」

「ああ、心配するな。どこもダメージとか喰らってないから  
脂汗を流しながら、無理に笑う時打。

まだ、戦いの最中だというのに、時打は笑った。

その意味を、翔鶴は理解できなかった。

だが、やはり、気分が高揚するのは確かだ。

ふと気付いたかのように、翔鶴は、地面に倒れ伏す宮城の方へ視線を向ける。

「あの人……」

「心配するな。死んでない」

翔鶴が疑問に思っている事に答える時打。

パチ、パチ、パチ……

「ツ!？」

突如聞こえた拍手。

それが聞こえた方向視線を向け、時打が前に出る。

「すごいね。まさか『AFMS』を着た宮城に勝つなんてね」

暗い影から、一人の少女が現れる。

金髪の肩で切りそろえた髪。目は青であり、その幼き顔には、どこか大人びた雰囲気を感じられた。

その服装は、青を基調としたフリルのついたドレスの様なものだった。

「誰だお前は……?」

時打が、深鳳に手をかけ、警戒しながらそう問いかける。

「ああ、紹介がまだだったわね」

そして、右手を前に、左手を腰の後ろあたりに回して、お辞儀をする。

「こんにちは、現黒河鎮守府提督、天野時打さん。私の名前は、夢原・ゆめはらA・愛亜梨めありという者です。以後お見知りおきを」

その律儀な態度に、それでも警戒をやめない時打と翔鶴。

「この度は、傘下の人間が大変失礼いたしました。今日はそのお詫びに来たのです」

両手を背中後ろに隠し、背筋を伸ばして、礼儀正しく、そう言う愛亜梨。

「ちよっと待て」

「なんででしょう?」

「今、傘下って言ったか?」

「はい。そうですよ。ああ、一つ抜けてましたね」

いけないいけない、と可笑しく笑う愛亜梨。

「私の名前は夢原・A・愛亜梨。またの名を、黒河市を裏で支配する、『黒河幕府』の最高権力者にして征夷大將軍、夢原・A・愛亜梨と申します」

海岸。

吹き飛ばされる。

宙を舞い、地面に叩き着けられる。

「姉さんッ!!」

誰かの声が聞こえる。

なんだか、胸のあたりがすーすーとする。

口から、何かがとめどなく溢れる。

霞む視界の中、ピエロの仮面を被った、右手が真っ赤な男が見え、もう一人、泣きながら何かを言ってくる、たった今守りたい大切な人の顔が見えた。

——これで、終わり……?」

心臓を貫かれ、赤い血だまりを作りながら川内が、そう、思った。

守りたい者のために 川内の馬坂流

鎮守府門前。

「ハアツ!!」

影丸を薙ぐ吹雪。

「アバーツ!?!」

なぞの断末魔と共に吹っ飛んでいく吹雪。

「ザッケンナゴラーツ!!」

「牙突ツ!!」

「アバーツ!?!」

その吹雪にとびかかろうとした男を、砲撃のような突きで吹き飛ばす電。

「あらかた片付いたでしょうか?」

「これで全部だろうね」

血のついていない影丸を薙ぐ吹雪。

そして、鞘に納める。

「隙ありだ糞ガキ共オオオオオオ!!」

その吹雪に向かって気絶した振りをしていた男が立ち上がり、アサルトライフルを腰だめで乱射しようとする。

だが、それよりも速く、吹雪の右手が霞み、抜き放たれた影丸が間合いの外にあるアサルトライフルを真つ二つにする。

「.....」

男の戦意を刈り取るには十分な程だった。  
がつくりと膝をつく男。

「セエイツ!」

「ぐっはあ!?!」

しかし、無慈悲な事に電が気絶させる為にわざわざ顔面をぶっ飛ばした。

「よし」

「よ、容赦ない.....」

その電の様子に若干引いてしまう吹雪。

立ち上がる敵も無く、とりあえずは戦闘終了といった雰囲気になる。

「まさか瑞鶴さんのルートを使われるなんて思わなかったね」

「そうなのです」

一言づつそう言い合うと、吹雪はふと、右へ視線を向けた。

そこには、見覚えのある、半透明の少女が一人。

「……………」

血の気が一気に消え失せ、体温がありえない程に下がった気がした。

実は吹雪は、ゴースト系が大の苦手なのだ。

「ん？どうしたのです？」

「あああああれれれれれ」

震える腕で、半透明の蒼白い少女に向かって指を指す。

「？　そこに何かあるのですか？」

「えいやだってそこにいるでしょまさかみえないの？」

電の返答に絶句する吹雪。

だとしたら、この半透明の蒼白い少女、(面倒くさいので)幽霊は自分の何か背後霊的な何かなんじゃないのか？だとしたら何か呪われるような事をしたのか？自分は呪い殺されるのか？

(せめて、普通の人間のように、年老いて死にたかったな……)

などと遺言の様な事を心の中で口走る吹雪。

だが、その姿には確かな見覚えがあった。

その人物は――

不意に、幽霊がこちらを向いた。

「ヒィッ!？」

「なのですッ!？」

小さく悲鳴を上げた吹雪に驚く電。

そして、幽霊は、口をこう動かした。

『私を川内のところへ連れて行って』



次の瞬間、その幽霊が吹雪の中に入った。

「ハアアア!!」

真つ直ぐに右足を突き出す。

だが、ピエロマスクの男、影間 祐司はその川内の足に飛び乗り、更に飛び上がる。

その体に、一切の重さを感じさせずに。

「ッ!」

そして、ありえない事に、何も無い空中で何かを蹴って、川内に突進してきたのだ。

そして、その腹に強烈な掌打を貰う。

「グアア!」

重い衝撃が腹部に走り、また吐血する。

「げほ、げほ・・・!」

地面に向かって、血をまき散らす川内。

その体には、まるで弾丸を撃ち込まれたかのような傷、斬撃を喰らったような傷、無数の痣ができていた。

完全にボロボロだった。

それでも立ち上がる川内。

その背後から、ケタケタと笑う祐司。

「おやおや? まだ立ち上がるのかね?」

「うる、さいッ!」

背後にいる祐司に向かって、後ろ回し蹴りを放つ川内。

だが、それもいとまたやすくかわされてしまう。

「簡単に背後を取られてしまうのに。大人しく捕まった方が良いん

「じゃないんですか？」

「ッ!?!」

いつの間にか背後にいた祐司。

そして、背中に鋭い痛みが走り、喘ぎ声を漏らす川内。

「あ……ぎ……ぎ……」

祐司の右手の五指全てが、川内の背中に突き立てられていた。

「中国拳法にある『点穴』という技を昇華させたものでして、人間の皮膚のみならず戦車の装甲を貫く事も可能なんですよ、これ」

ケケケ、という笑いを漏らす祐司。

「ぎい……アアッ!」

「おっと」

左足を思いつきり上げ、川内の顔の横にある祐司の顔を蹴ろうとする川内だったが、祐司はそれを回避。

そして距離が出来た事で、川内は振り返り、『廻牢・刻戟』を放つ。

だが、それを今度は受け止められてしまう。

「ッ!?!」

「まだまだ未熟といった所がありますね。もしかして貴方、これ覚えたのはごく最近なのでは？」

凶星。

直後、衝撃。

吹き飛ばされ、木に叩き着けられる。

「ゲハアッ!?!」

肺の中の空気が一気に吐き出される。

「げほ、げほ……!?!」

激しく咳き込む川内。

「これ以上は時間の無駄でしょう。大人しく捕まって下さい」

「ぎっけん……私は、負ける訳にはいかないのよ……!」

「どちらにしろ、貴方に勝ち目はありません。次で終わりますので、そのつもりでいた方が良いでしょう?」

「そんなの、やってみなきゃ分かんないでしょ!」

祐司に向かってそう叫ぶ川内。

だが、こんなボロボロの状態でもともに無傷の祐司と戦える訳が無い。

「そうですか？では仕方ありませんね」

腰を落とすピエロマスクの男。

そして、一気に踏み出そうとした瞬間、ピエロの視線が一瞬、海の方角を見た瞬間、大きく横に跳んだ。

直後に、その地面が吹き飛ぶ。

「な!？」

砲撃だ。

「おやおや、向こうから来てくれるとは」

キキキ、と笑いを零す祐司。

「神通!？」

そして、川内はその砲撃をした張本人の名を叫んだ。

「姉さん!」

酷く焦燥に駆られた表情で姉の名を呼ぶ神通。

「なんで……!」

歯噛みする川内。

安全の為に、陸で戦えない艦娘は全て海へと避難させ、神通もその中に入っていたのだ。

なのに、何故ここにいるのだ？

安全な場所に避難させた筈なのに。

確実な作戦の筈なのに、何故……!!

「姉さん!逃げて!」

神通がそう叫ぶ。

だが、

「自分から来てくれるとは、手間が省けました」

「ツ!？」

いつの間にか、背後に回っていた祐司が、神通を陸へと蹴り飛ばす。

「ああ!？」

「神通!」

その光景を見た川内が、脊髄反射の要領で駆け出し、吹っ飛ばす神通

を受け止める。

そして、祐司のいる方向を睨み、戦慄した。

「嘘……ッ!？」

立っているのだ。水面に。

「どうして、なんで、どうして、海の上に、水の上に……どうして立っていられるの!？」

狼狽する川内。

「なに簡単な事ですすよ。よく見て下さい、足に波紋がなんども広がっているでしょう?？」

確かに、祐司の両足から、左右交互に波紋が広がっている。

「片方の足が沈む前にもう片方の足を水面につき、また片方の足が沈む前に片方の足を引き上げ水面につける。その繰り返しです」

「そ、そんなデタラメ、出来る訳が……」

「おや?君の使う馬坂流の奥義であるあの右足の赤熱や、君たちのリーダーと思われるあの武士姿の男の速さ、それに、あの喧嘩屋の二重の極みだつて、原理こそ通つてますが、ある意味ではデタラメでは無いのでしょうか?」

祐司の指摘は正しい。

葉子のあの火爪や、時打の神速も、響夜の二重の極みも、ただの間にはデタラメと思われるもおかしくない程のものだ。

「あるんですよ。戦乱の時代、実際に水の上に浮いたという伝承が。その時には、なにやら木の様なもの履いていたようですが、それはあくまでカモフラージュ。本当は、これが現代で言う『水蜘蛛の術』なんですよ」

水面で跳ぶ祐司。

陸に足をつき、くるりと川内と神通に向き直る。

「——ッ」

もはや絶句するしかなかった。

なにもかも次元が違い過ぎる。

勝てる訳が無い。

「あ、ああ……」

何もかもが砕かれた気分だった。

「さて、そろそろ終わりにしましょうか」

「う、ああああッ!!」

自暴自棄。

半分錯乱した川内は、神通を横へ突き飛ばし、左足でローキックを放つ。

だが、狙いが甘く、いともたやすくかわされてしまう。

そのまま回転しながら右足で後ろ回し蹴りを放つ。

腹を狙ったものだろうが、腰を折り曲げて回避される。

そのまま連続で蹴りを入れるが、どれもデタラメで、狙いがなっていない。

それに、『デタラメに強い』ならまだしも、『デタラメじゃ弱い』川内じゃ、そもそも当たる訳が無かった。

「いい、良いですよ、その恐怖におびえる顔！圧倒的存在に抱く恐怖！それは私のような強者<sup>狂者</sup>には愉悦であり、甘美！さあ！もつと恐怖しなさい！狂いなさい！絶望しなさい！それこそが！貴方の本性だッ!!」

「ッ!？」

突如、狂人と化した祐司の言葉に動きが止まる川内。

「動揺したね」

蹴り飛ばされる川内。

——やはり戦いにならない。

神通を通り過ぎ、地面を滑る。

「姉さん！」

「まだですよ？まだまだこれから。貴方には、最高の恐怖を与えなければなりませんから」

キキキと、仮面の奥で笑う祐司。

だが、その声が、耳には入らない川内。

もはや立ち向かう勇氣どころか、立ち上がる勇氣すら失せた。

「ひ……あ……」

嗚咽を漏らす川内。

結局、何も変わらなかった。

川内は、この黒河にいる川内型の中で、最弱の艦娘だった。

今でこそは、時打のお陰でそれなりの力をつけてきたが、潜在能力でいったら、神通や那珂にも劣る存在だった。

そのスペック故に、秋村には、いつも邪魔物扱いされてきた。

被弾は必ず川内。

とにかく出撃すれば川内は必ず被弾する。

そのお陰で何度も入渠。

もちろん、被弾しない事は無かった。

運よく当たらなかったり、仲間が偶然にも壁になったり、そういう事も、希にあった。

だが、やはり被弾する。

距離をとって、ちゃんと立ち回っていた筈だった。

だが、どこか甘かったのか、敵の砲弾が、必ずと言っても良い程に直撃する。

それは、弱いから。

自分が、劣っているから。

分かっているけど、当たる。

雷跡が見えても、それが遅く、直撃する。

得意の夜戦に持ち込んでも、相手の方が一枚上手のように、砲弾が直撃する。

こちらの砲弾は当たらないのに。

だから、自分は、妹たちに頼るしかなかった。

妹たちに頼るしか、自分が生き残る事は出来なかった。

だから、新しい提督が来て、葉子が来て、あれなら、自分も強くなれると思った。

だけど違った。

身体は強くなっても、心だけは何も変わりはない。

そもそも、武術の一つを学んだ所で、心の在り方が変わる訳が無かった。

結局、心の問題だったのだ。

自分が、どこか、あの黒い奴らに対して恐怖を抱いていたのだ。いや、そもそも戦いそのものに恐怖を抱いていたのかもしれない。所詮、自分は、何もできない、ただの『臆病者』じやくしやだったのだ。

「ではそろそろ、メインディッシュの時間といきましょうか」  
歩き出す祐司。

神通に向かつて。

一方で神通は、ゆっくりと立ち上がる。  
そして、キツと祐司を睨み付ける。

「おや？ 貴方は私を恐れないのですか？」

「正直に言つて、怖いです。私なんかじゃ到底かなわない相手、一瞬でやられてしまうでしょう」

毅然にふるまうも、その声には、確かに怯えが感じられる。

「だから、一つ約束してください」

「だからこそ、神通には分かっていた。

「私を殺す代わりに、姉さんを攫うのは見逃すと」

ナンデスト？

「ほう、それはまた」

「お願いします。貴方の真の目的は他人の絶望をその手で作る事。ならば、私を殺せば、姉さんの最も絶望した顔が見れるでしょう。それで、手を打ちませんか？」

「ふむ、あの人々がそれを許す訳はないでしょうが、それは良い」

キキキ、と漏れる笑い声。

「良いでしょう！ 貴方の命と引き換えに、貴方の姉の命は助けてあげましょう！」

両手を広げ、歓喜の意を示すような恰好になり、高笑いをする祐司。  
神通の足は、震えていた。

「せめてもの報いに、痛みを感じさせずに死なせてあげましょう」

右手を弓のように引き絞り、両手を広げる神通の、ある部分を狙う。

「Good night」

祐司の腕が、神通の心臓に向かって突き進む。

もはや避ける事も叶わない。

否、避ける気の無い神通には、避ける動作そのものが不要。

不可避の死。

誰かが干渉しなければ、絶対に避ける事は不可能。

干渉しなければ。

不意に、左腕を誰かに掴まれる。

何かと思う暇無しに、思いつきり引かれ、後ろへ態勢を崩す。

そのまま誰かと入れ替わる。

鮮血の花びらが、月夜に照らされ、舞い上がる。

その花びらが、自身の姉のものだと分かるまで、そう長くはかからなかった。

「姉さんッ!!」

叫ぶ妹。

崩れ落ちる姉。

「おや?」

そして首を傾げるピエロ。

川内はゆつくりと後ろに倒れ込み、地面に尻もちをつく神通の目の前に仰向けに倒れる。

心臓のあった部分に、風穴をつくって。

「姉さん! 姉さん!」

あまりの事に上手く動かない足を引き摺りながら、川内の元へ駆け寄る。



「じ……つう……」

「姉さん！死なないで！姉さん！」

視界が滲み、川内の顔がよく見えない。

川内の口と風穴のあいだ左胸からはとめどなく血が溢れ出し、徐々に大きな赤い水たまりを作っていく。

塞ごうと思っても、貫通している上に、人間のエンジンとも呼べる心臓をまるごと損傷しては、もはやまだ生きている事が奇跡なのだ。

神通もそれが分かっていた。だが、理性では分かっても、溢れ出す感情を止める事はできなかった。

「やだ……やだ……姉さん……」

必死に、川内が助かる方法を探す。

だが、考えれば考えるほど頭がこんがらがっていき、やがては行き詰ってしまう。

「ふむ、これは予想外ですね」

一方で、祐司は、仮面の奥で、笑っていた。

確かに妹の方に標準を定めた筈だが、突如再起した姉が入れ替わる事で、逆に姉の方を刺し貫いてしまったわけだ。

それが証拠に、祐司の川内を貫いた右手は、真っ赤に染まっていた。なにはともあれ、あれでは助からない。

ついでにいつて、少し予定が狂ったが、妹の方の絶望した顔を見れただけでも満足だ。

祐司は踵を返し、その場を立ち去ろうとしたが。

「むっ」

ふと森の方から聞こえた何かがちらに急激に接近してくる音。

「……上ですか」

顔を空へ向ける。

すると、木の上部から、何か黒い影が出てくる。

どうやら、木の枝をつたって、やってきた様だ。

その影は、右手に持っていた刀らしきものを上段に構えると、技名を発しながら、落下の勢いと共にその刃を振り下ろす。

「龍槌閃ツ!!」

女性のような高い声と共に、その刃が振り下ろされ、祐司はそれを横に跳ぶ事で回避し、直後に大きな土煙が巻き起こる。

だが、その影は、黒いロングコートをなびかせ、祐司に再度斬りかかる。

下段右斜め下から斬りあげる。

顔面を狙った攻撃。

それを頭を下げる事で回避する。

返す刃で水平に左から薙ぐ。

身体を大きく反らし、ブリッジをするように避ける。

そのままバック転をしながら後ろに下がる。

そこで初めて敵の姿を視認する。

前開きのロングコート。

その中には赤いネクタイの黒いセーラー服。

顔は、フードを被る事によってできた影で見えない。

だが、明らかに相手は女性。それも少女。

その状態で対峙する二人。

漣の音とその静寂にながれる。

だが、突如としてその沈黙は破られる。

ロングコートの少女が突然、祐司に背を向け、川内と神通に向かっ

て走り出す。

その行動に首を傾げる祐司。

「!?!」

その少女の行動に目を見開く神通。

だが、少女はお構いなしに二人に向かって、突如その姿が霞む程に

加速。

そして、左手を白く発光させ、その左手で、川内の額を殴った。

「姉さん!」

思わず声をあげる神通。

一方の少女はそれを見ると、一気に力が抜けた様にそのスピードのまま激しく転倒。



自分はその時、どういう訳か、神通を引っ張って、あの男の手刀を心臓に受けた筈だ。

ふと、目の前に誰かがいるのに気付く。

それは那珂だった。

「那珂!？」

思わず、その名を呼ぶ川内。

だが、那珂はこちらを向かず、川内に背を向けている。

その目の前には、何隻もの、深海棲艦。

「嘘……」

その瞬間に恐怖に刈り取られる川内。

「那珂、逃げよう！今すぐ！」

反応しない那珂。

「那珂！」

那珂の手を掴み、引こうとする。

だが、その手は空を切る。

「え？」

何度も手を掴もうとする。

だが、どれも空を切り、掴み事は叶わない。

「なんで……?!？」

そこで、異変に気付いた。

すり抜けるのだ。

始めは那珂が避けたのかと思ったが、そうでは無く、川内がまるで

幽霊のようにすり抜けているのだ。

直後に、那珂と川内の周りを水柱が立ち上る。

「ぎゃあ!？」

驚いて尻もちをつく川内。

衝撃も何もないのに。

水柱が収まった頃に、ふと那珂が後ろを向いた。

腰を下ろしている川内を見ている訳では無い。

その更に後ろ。

川内も後ろを見る。

そこには、今にも水平線に消えそうな黒い点。  
それは、自分だ。

そう、これは、那珂を失った日だ。

那珂一人おいて、逃げて行ったあの日だ。

何故、今になってこんなものを思い出しているのか。

否、見せられているのか。

「……川内」

ふと、那珂が呟いた。

それに、勢いよく振り返る川内。

那珂の表情は、珍しく、無表情だ。

「……そっか」

そして、いつもの、楽しそうな笑顔では無く、悲しみに満ち溢れた  
笑みを浮かべた。

「ッ!？」

それに、眼を見開く川内。

「これが……『寂しい』って気持ちなんだ」

その言葉を零し、頬に煌く何かが零れ落ちるのが見えた。

そして、敵のいる方向を見据える那珂。

「さくて、ラストライブ、張り切って行こう！」

その瞬間、川内は立ち上がって走り出す。

「那珂ア!!!」

全力で走る。

だが、まるで現実に引き戻されるかの様に、何かに引つ張られる。

それに全力で抗う川内。

しかし、強すぎるのか、どんどん引き離されていく。

「——那珂ア!!!」

もう一度、叫ぶ。

那珂の肩がびくりと震え、そして、こちらを向いた。

「私、強くなるから！強くなって、神通を守るから!!いつか、いつか来るかもしれない、もう一人の貴方も絶対に守り抜いて見せるから!!!誰



絶叫。

それと同時に、低い姿勢で立ち上がる。

「——ッ!?!」

「これは……!?!」

神通が口元に手をあて、祐司が片足を下げる。

「やれやれ……」

吹雪は笑みを作り、立ち上がる。

傷口は、塞がっていた。

吹雪が川内に叩き込んだのは、『ダメージコントロールダメージ修理要員』だ。

艦娘が轟沈をしてしまう際に、その受けたダメージを高速修復し、轟沈を回避するというものだ。

だが、轟沈回避、つまりは、蘇生であるがゆえに、その数は希少であり、一回使えば消えると言う、貴重なものだ。

それを何故吹雪が持っていたのか、それは与えた本人にも分からない。

ただ、今はそんな事どうでも良い。

右足を前に出し、左足を後ろへ、前足を伸ばし、後ろ足を曲げ、その後ろ足の膝に左手をつく。

馬坂流 ちょうばこうそく 跳馬後足の構え

しゅうう、と湯気を出しながら、川内は、しっかりと敵を見据える。

そして、後ろ足を思いっきり伸ばし、右足を浮かせ、まるで水平移動するかの様に体の向きをそのままに、祐司に急速に接近する。

「!?!」

茫然とした為、回避が間に合わない。

馬坂流 『げんか廻牢・弦華』ッ!!」

そして、川内は、前足の右足を地面について、その右足で地面を蹴り、右足の裏で祐司の顎を蹴り飛ばした。

「ぐおっ!」

完全な不意打ち。

後ろ足の回し蹴りでは無く、前足による、サマーソルトキック蹴り上げ。

通常なら、後ろにある手足が、そこから筋力による推進力で敵を殴

るのが普通だ。

だが、川内は相手の虚をつくために、前足のみで敵を蹴り飛ばしたのだ。

よろける祐司だが、なんとか踏みとどまる。

仮面の口部分から、血が零れる。

吐血したのだ。

川内は、そんな祐司を睨み付ける。

「——お前は私が倒す」

それに対し祐司は、

「く、くく……」

笑っていた。

「痛い、痛いぞ。そう、これは私が生きている証。私が、今この瞬間生きていくという証明！素晴らしきかな人生ツ!!ハレルヤ!!!」

天に向かって、そう叫ぶ。

「行くぞオオオツ!!!」

川内が絶叫。

左足を踏み出し、地面を抉りながら、踏み込んで、祐司に接近する。

スライディングをするように、背中に地面を向け、倒れ込みながら、祐司の足を払わんと、左足を地面スレスレで薙ぐ。

だが、祐司は、体が水平になるように、体を前に投げ出しながら飛んで回避。

そして、右手を開き、その皮膚を貫く弾丸のような指による刺突を繰り返す。

だが、川内もそれで黙っている訳では無く、左足を薙いだ勢いを利用して、回転。

倒立し、その勢いを利用したまま、祐司の左側面を蹴る。

同時に、川内の脇腹に祐司の五指がめり込む。

「ぐうお!!」

「あああ!!」

祐司は吹っ飛び、川内は脇腹に走った痛みで態勢を崩し、倒れる。だが、川内はすぐさま立ち上がると、地面を蹴り疾走。



土煙の中、突如として、何かが飛来。

「!?」

それを胴体に喰らい、勢いを失う。

次に土煙の中から、祐司が現れ、右拳で川内を殴り飛ばす。

地面をゴムボールの様に跳ね、あやうく海に落ちかけたがなんとか踏みとどまり、再度、祐司に向かって疾走。

すると祐司は右手をまるで野球ボール投げるような動きで、何かを投げてきた。

石だ。

「そうは行くかア!!」

疾走の勢いを殺さず、体を浮かせる。

大きく股を開き、後ろに出た左足を回し蹴りの要領で前に出し、回転の推進力へと加算。

そこから、一回転して、右足の後ろ回し蹴りで突風を巻き起こす。

馬坂流『空紅・左薙ぎ』

それによつて、投げられた石の軌道が変わり、全て川内を避けていく。

前足が地面についたのと同時に、また疾走を再開。

そして、祐司を射程に入れる。

もう一度、左足を踏み込む。

前に出る推進力を加算し、右足を折り曲げ、祐司の右脇を抜けながら、渾身の膝蹴りを祐司に叩き込む。

馬坂流『蓮華』

それで吹っ飛ばす祐司。

「ハア・・・ハア・・・うぐツ!」

思わず脇腹を抑える川内。

先ほど受けた、点穴による痛みだ。

ガラガラ、と祐司が出てくる。

「くくく・・・」

相も変わらず笑っていた。

「ここまで楽しんだのは、初めてです。十王と戦う機会も無く、かと

いって自分と同等の実力、それも、真剣に勝負に挑む者がいなかったこの人生。だが、今は違う。私は君という存在に出会ったツ!!感激しているのだ!私は、今まで人生はつまらないものだと思っていた!!!しかし今!この時だけは!私は私という存在を肯定できる!分かりますかこの歓喜を!!この喜びを!!!」

一層、楽しそうに語る祐司。!

それに対し、川内も笑った。

「確かに、分かるかもしれないわね。何故この体に生まれてきたのか。何故今になってまた戦わなければならぬのか。そんな事を疑問に思っていた。だけど、私たちは戦場で戦う存在。戦いの中でこそ、自分たちの存在意義を正当化できる。でもさ、この体に生まれ変わって、一つだけ分かった事があるんだ」

川内は、マフラーを直す。

「人としての体に生まれ変わって、言葉を伝えられる様になったからこそ、私は、新しい繋がりにってものを持てるようになった。私は、その繋がりを守りたいって思った。ただ壊すだけの貴方とは違う」

川内は、笑みを消し、構える。

「だから私は貴方を倒す。妹を守る為に、私は戦う」

それを聞いた祐司は、考える素振りをみせ、キキキ、と笑いを漏らす。

「なるほど、それもまた一興。貴方の人生だ。強制はしないさ。だが、今はそんな事を言っている暇などないだろう?」

「ええそうね。つけましようよ。決着って奴を」

風が吹き抜ける。

「姉さん!」

ふと、神通が声をかける。

「勝って!」

そう一言だけ告げた。

「参ったな。そんな事を言われちゃ、負けない訳にはいかないでしょ!」

地面に手をつき、猪突前進の構えを取る川内。

祐司も、右半身となり、右手を手刀にし、左手で狙いを定める。辺りを静寂を包む。

「——いざ尋常に——」

突然、そんな声が聞こえた。

川内でも、祐司でも、神通でもない。

吹雪だ。

右手を上げ、まるで審判をするかのように、

「——勝負ッ!!」

右手を振り下ろした。

疑問に思う暇なんて無い。

振り下ろされるのと同時に、川内が走り出す。

いきなりのトップスピードから、一気に祐司に近付く。

だが、蹴りと突きでは確実に距離がある。

だからどうあっても川内が先に敵を射程に収める。

祐司が川内の射程の一手手前になる。

その直後、川内の足が浮いている所へ祐司が踏み込んでくる。

「ッ!」

これでは流石の川内も反応できない。

そして、右手が川内の首に向かって突き立てる。

血が舞い上がる。

「何ッ!」

祐司がそんな声をあげる。

川内が、後ろ足である左足を曲げて、祐司の手刀の軌道に顔面を置き、そして、腹筋をつかつて、体を左に倒し、首を傾ける事で、頬から耳にかけて、一線の傷を刻みながらも致命傷を回避したのだ。

だが、態勢が崩れた事によって、川内の体は大きく倒れていく。

しかし、左手を地面についた直後、右足を一気に引き戻し、走る事で出来た推進力と共に、右足を伸ばさず事で、祐司の顎を蹴っ飛ばし、上空へ吹っ飛ばす。

川内が地面に両足をつき、祐司をおいかける様に飛び上がる。空中で後転。

祐司よりも少し高い位置、反転している視界。

だが、その眼はしつかりと、吹っ飛んで空中で仰向けになっている祐司を捉えていた。

「そうか……」

祐司は、仮面の奥で何かを悟ったかのような表情をする。

「馬坂流」

「『哭梯・武砺威琥』ツツ!!!」

渾身にして会心。オーバーヘッドキックが祐司へと叩き込まれ、垂直に地面に落下。

大きなクレーターを作り、地面をへこませる。

同時に、川内はなんとか着地。

その後に、尻もちをついた。

「姉さん！」

そんな川内に、神通がかけよる。

「神通」

「おーい！」

別の方向からも声が聞こえ、そちらを見ると、丁度、川内の師匠である葉子が現れた。

「うっひゃあ、この威力は『哭梯』、それも『武砺威琥』方ね……一回実演しただけなのに、もう使えるようになるなんてね」

感嘆する葉子。

「うお!?! なんじゃこりゃ!?!」

「地面へこんでるし!?!」

さらに、瑞鶴に肩を貸されながら響夜もやってきた。

「吹雪さん！川内さん！神通さん！」

更には電と達也もやってきた。

「みんな……」

「弘斗を回収してきたは良いが、これはすごいでござるな」  
『!?!』

最後に、知らない声。

全員の視線が、声の聞こえたクレーターの中心へ向けられる。

そこには、赤い忍び装束の男がいた。その肩には、少年が一人担が

れていた。

それに全員が警戒する。

「あー、だいたいよぶだいたいよぶ。敵意はないからこの人」

だが、そんな空気をほぐすように、葉子が仲裁に入る。

「まあ・・・味方かどうかも分からないけどね」

苦笑いをする葉子。

すると、赤い忍び装束の男が両手を合わせ、アイサツをした。

「ドーモ、せきしま赤島 こたろう小太郎デス」

それに対し、その場にいた一回は・・・

「ドーモ、小太郎ニサン、響夜デス」

「ドーモ、瑞鶴デス」

「ドーモ、神通デス」

なんとか響夜と瑞鶴と神通だけはアイサツを返せたものの、

「アイエエエエ!」

「ニンジャ!? ニンジャナンデ!」

「ゴポポー!」

「ちよ!? 姉さん!」

吹雪、電、川内はNRSを引き起こした。

「む、そこの女子おなじ・・・ニンジャでござるな」

「まあ、そう、かな?」

小太郎の問いかけに、何故か瑞鶴は肯定した。

幕末辺りでの忍者の呼び方は、『隠密』。

つまり、瑞鶴が自身のイメージとして体現している『四乃森 蒼紫』

は、『隠密御庭番衆』の頭領。

それも歴代最強の肩書を持つ者だ。

だから、瑞鶴は、自然とアイサツを返せたのだ。

響夜が何故アイサツを返せたのかは不明だが。

「で? その忍者サンが一体何の用だ?」

「口を慎みなさいよ響夜」

「なんでだよ?」

葉子の言葉に顔をしかめる響夜。

「この人は、黒河を裏で支配する黒河幕府の最高権力者、征夷大將軍の地位につく夢原・A・愛亜梨の近侍きんじよ。それなりの実力があるのは確かよ」

「まじかよ・・・」

葉子の説明に、冷や汗をかく響夜。

「そう、そして私が一番の信頼を置いている人物でもあるの」

さらに別の方向から、幼い少女のような声。

そちらへ視線を向けると、金髪碧眼の少女と、翔鶴に肩を貸してもらっている時打の姿があった。

ついでに、砕かれた鎧を着たままの男も引きずられながら来ていた。

「ご苦労様、小太郎。さっさとそいつを回収して」

「御意」

そう答えると、まるでゴミでも拾うかのように肩に祐司を乗せる小太郎。

「さて、黒河鎮守府の皆さんには、大変ご迷惑をおかけいたしました。わたくし、先ほど、その馬坂葉子さんが言っていた黒河幕府の最高権力者、征夷大將軍の夢原・A・愛亜梨でございます」

少女、愛亜梨が向き直るなり、そう畏まる。

「お詫びとして、鎮守府の修理と、改修工事を、こちらで全額負担致しますよう」

「ちよつと待つて。どうして、鎮守府のことを知っているの?」

瑞鶴がそう問う。

それに対し、愛亜梨は、不敵な笑みを浮かべて答える。

「この鎮守府のことは、私と小太郎。他、十人いる最高幹部『十王』の極一部にしか知られていない事実ですが、今回のことで、組織はおろか、市民にもばれてしまいました」

「えっ?」

愛亜梨が、山の方へ視線を向ける。

全員がつけられてそちらを見てみると、そこには、小さくうごめく何かが無数にいた。

その中で、夜目の効く川内と神通だけは、それが何なのかわかった。「あれは、黒河市の人たち・・・！」

「大きな音が出すぎたか」

そもそも、山の裏にすぐ街がある時点で無理があったのだ。

それに、RPGやパンツァーフアウストやバズーカ砲などの重火器に加え、戦車などの兵器を投入してきたのだ。

バレない方がおかしい。

「一応、情報は外に漏れないようにインターネットは封鎖してるけど、まず間違いない、明日、黒河市には、この鎮守府の存在が知れ渡るでしょう」

愛亜梨はそう言うと、時打の方を見る。

「ここはひとつ、代表者同士。話をしませんか？」

そう、笑う愛亜梨。

もはや、別の道は無いに等しい。

「わかった。体力が回復したら、そちらに伺おう」

「交渉成立。修理は問答無用でやりますので、そのつもりで。ああ、何かこちらの者が不埒を働いたら容赦無く制裁してくれていいので」

では、と言い残し、彼女たちは、闇夜に消えた。

## 黒河幕府と征夷大將軍

黒河市の名物ともいえる、街の中心にそびえ立つ、大きな城名を、『賀縁城』がえんじょう。

創建は、明治より。

そもそも明治時代に出来たこの黒河市は、一言で言つて、自由すぎるのだ。

法律があるのに、銃刀法がほとんど機能していない事もその原因だ。

どんなに政府うへから、圧力がかかろうと、負けじと独自の分化を作り、時々くる政府からの兵士たちを、この街を管理している『黒河幕府』の練度の高すぎる傘下たちによつて必ずと言つていいほど返り討ちにしているのだ。

とにかく、自由主義を体现した街としても有名なのだ。

街の風景はそのままなのに、アンバランスに科学がその場をはびこっている。

バイクや車や、携帯、懐中電灯、高画質テレビ。

とにかくアンバランスなのだ。

そして、自由。

自由を体现しているだけあつて、奴隷あ商売いのも、隠れてやっている者もいるのだ。

「それが、この街の大まかな歴史さ」

「自由過ぎんだろ」

そして、賀縁城の天守閣にて、愛亜梨と時打は向かい合っていた。

その傍らには、愛亜梨側には、忍び装束を着たままの小太郎と、二人の顔が瓜二つの双子と思われる高校生ぐらいの女性が二人。見分けは、髪の高さが正座している状態で、床につくか、セミロングなのかだ。



顔もそれなりに整っており、美しいの一言に尽きる。

ただ、その顔には警戒の色が見え、今にも時打に斬りかかりそうだった。

一方で、時打の側には、吹雪一人だ。

理由としては、飛天童子としてだが、時打の思考を唯一理解できる人物だからだ。

ただその時、翔鶴も連れて行った方が良いのでは？と言われたのだが、理解は出来なかったようだ。

ただし、右側の席には二つ程空席があった。

「さて、この度は非常に申し訳ない事をした。部下に代わって、お詫び申し上げます」

「一応受け取っておく。それで、話というのは？」

時打は、そう問う。

「ああ、これで鎮守府の事はバレた訳だ。上<sup>うえ</sup>さんにも言っておいてくれたんだろう？」

「ああ。こっぴどく怒られたよ」

「それはご愁傷様だ。ま、原因はこちらにあるのだがな」

「それはもう気にしなくて良いんだが・・・」

「それはそうと、そろそろ本題に入ろう」

姿勢を正す愛亜梨。

「我々から、いくつかの提案がある」

「提案？」

「ええ、一つ目は、今回の事件で、お互いにお咎め無しだという事」

「それなら、鎮守府の修理に加え、改修工事もしてくれるから、良いんじゃない・・・」

一瞬、後ろにいた双子が微妙に動いた気がした。

「まあまあそう言わずにさ。それともう一つ、貴方がた海軍のトップとの秘密の会合とやらをしたいのだ」

「トップ・・・」

「元帥とまではいかない、けどまあ、一つの地方を収めている大将様にお会いできないかな？」

「それは何とかしてみろが、あまり期待するなよ?」

「気長に待つき。それで、三つ目の提案だ」

指を三本たてる。

「報酬さえもらえれば、我々がお前たちの要望に可能な限り応える。反対に、こちらが報酬を送れば、お前も可能な限り答える、っていうのはどうだい?」

「つまりは等価交換か?」

「そゆこと。まあ、貴方の事は調べがついてるよ。殺しは頼まない」

「なら良いんだがな」

内心、安堵の息を漏らす時打。

「さて、小太郎や、正宗姉妹はどう思うかな?」

愛亜梨は、うしろにいる傍付きたちに問いかける。

「拙者は別に構いません。拙者は主の決定に従うまででござる」

小太郎は快く承諾。

ただ、正宗姉妹と呼ばれた双子は、どうにも納得のいかない様子だった。

「どうかしたのかな?」

「いえ、先ほど愛亜梨様が上げた三つの提案については、反対は無いのです。ただ……」

ロングヘアの少女がそう答える。

「別に、言っても良いぞ。罵声には慣れてる」

時打がそう言う。

「……馴れ馴れしい」

ぼそり、とそんな声が聞こえた。

「……」

それで無言になる愛亜梨、小太郎、時打、吹雪。

そして……

「……ふ」

吹雪が鼻で笑った。

「……ッ!!」

それで頭に血が上ったのか双子だからか息ぴつたりと同時に抜刀。

「わあああ!?!すみませすみません!笑ったのは謝りますからあ!」

「許さんツ!!」

「ひいひい!」

そのまま廊下にもつれ出る三人。

「.....」

「許してやってください。普段は大人しいのですが、主様の事、あるいはそれに関係する事だと、感情的になりやすいのでござる」

「あー」

時打も納得と言った感じで苦笑を浮かべる。

「で、まあ、こちらからの提案は以上なんだけど、そっちはどう?」

「いや、特に要求する事は無いな.....」

「あら、そうなん?」

ふと、廊下の方で大きな音が響いた。

「息吹イ!!」

「きゃあああ!?!」

障子が派手に破れ飛び、そこには床に倒れ伏す正宗姉妹。

「は!?!しまった、つい自棄ヤケになって息吹を使っちゃった」

一方で、吹雪はやってしまったとばかりの慌てよう。

「小太郎」

「御意」

愛亜梨の一言で、小太郎はその処理に向かった。

もはやどうでも良い。

「あ、そうだ。道真っていう男と、奴隷商売の方はどうなったんだ?」

「道真.....ああ、一年前にどつかの三人組に潰されたあのバカか。問題無い。奴隷を所持していた時点でこの街じゃ、他人の自由への権利を奪った所で問答無用で刑務所行きだからな。今頃、鞭打ちの刑にでも合ってるだろうよ」

くつくつく、と笑いを零す。

「それで奴隷商売の方だが、これから処理する所だ。そもそもそれに気付けなかった私たちにも非がある。所持している奴らも徹底的にいぶり出してやるさ」

どうにか復活した正宗姉妹と小太郎、吹雪が戻って座る。

「ああ、そうだ」

ふと、愛亜梨が何かを思い出したように、時打に言う。

「実は、全国に潜伏している傘下の奴らからの情報なんだがな、北海道や東北の方の海軍、黒いらしいよ」

「黒い？」

「ああ、真つ黒だ。お前の場合は、内陸の金山市にいたから、知らないかもしれないけど、その辺りにある鎮守府がなんでも酷い有様でね。艦娘の轟沈数が、とても多いみたいなんだ」

「そんな事が……」

表情を強張らせる吹雪と訝しむ時打。

「勿論、漏れていないだろう。なんでもその上層部が原因らしくてね。艦娘の扱いについては、何も言っていないそうさ。だが、都合良く扱えない場合は容赦無く粛清されるらしい。特に、提督に叛逆を企て、かつ、上層部の命令にも逆らったら、同じ艦娘を使って、全員を沈め、また新しい艦娘と提督を着任させる。その繰り返しだ。そこはそれを躊躇い無く繰り返し返している」

愛亜梨は笑ってはいない。

「そして、最近手に入れた新しい情報なんだが、『艦娘救済派』のトツプである、現元帥である火野柱ひのぼしら 玄隆げんりゆうを目の上の敵にしているらしいんだ。だから——」

「——蹴落とす為に、誰か支えを消す」

愛亜梨の言葉を遮り、時打が繋いだ。

その時、正宗姉妹が動こうとし、小太郎が止めたが、愛亜梨と時打は気にも留めない。

「ご名答。最近、関東の上層部の人間が消されて行ってるの、知ってるかな？」

「ああ」

「これは間違いなく、その第一段階だろう。近頃は提督も狙われているって話だ。用心してくれよ」

「分かった」

姿勢を正す愛亜梨。

「お前には、貸しがある、それを返す前に、死ぬなよ」

黒河市の大通おおどおりを、途中で勝った団子を食べながら歩く時打と吹雪。  
その間に、言葉は無い。

『ああそうだ』

ふと、時打は愛亜梨が部屋を出ていく際に言い残した言葉を思い出していた。

『君が飛天童子として活動する一年前にあつた、一カ所だけ、艦娘を可愛がっていた提督のいる鎮守府があるって聞いたな。そこにいた一人の空母が史上最強と言われたようだぞ?』

空母という言葉が引つかかるが、何故彼女はそんな言葉を、時打に残していったのか。

最後の団子を口に入れ、串をゴミ箱へと入れ、鎮守府に向かって歩き出す。

その道中、黒い武士服の下にある、首飾りのチェーンに通した指輪を、布越しに握り絞めてみる。

そうすれば、かつて死んだ、自分の姉の温もりを感じられた。

鎮守府に戻ると、沢山の作業員たちが、鎮守府の修理に当たっていた。  
た。

中には、艦娘たちも数人いた。

「提督」

そこへ長門がやってくる。

「進行状況はどうだ？」

「手慣れたものだよ。たった半日で、半壊した四分の一まで治っている。少なくとも、食堂だけは今日中に治りそうだ」

「なら良かった」

ほ、と息をつく時打。

「お兄ちゃん！」

「司令官！」

そこへ電と暁がやってくる。

「電、暁、どうした？」

「明石さんから伝令なのです」

「川内の診察が終わったって」

「そうか、今すぐ行くこう」

そうして、狙われなかったからか、無傷の工廠にやってくる、時打、

吹雪、電、暁の四人。

長門は、引き続き、資材を運ぶために、工事現場に残った。

ちなみに、響夜は打撲程度だったので問題は無かったが、葉子の場合は、小太郎が施した応急処置は持たないとの事で、しばらく療養。

「明石、川内」

「あ、提督」

そこには、ベッドに腰掛ける川内と、ボードとペンを持って何かを書き込んでいた大淀と、診察器具らしきものを持っていた明石がいた。

「大丈夫か？」

「はい。もう動けます」

そう言っつて、手の力でベッドから飛び降り、くるりと一回転してみる。

「神通とは、話しはつけたのか？」

「……うん」

時打の問いに、控えめな笑みを持って、答えた。

「なら良かった。それで明石、川内の心意については？」

「変化無し。心意改装の高潮はみられないよ」

明石がそう答える。

「そうか、この間の事で、何か変化があるんじゃないかって思ってたけど、ま、何もなければそれで良いか」

「ですね」

時打の言葉に、川内が答える。

「ただ、ね」

ふと、川内の声がシリアスさを醸し出す。

「心臓を貫かれて意識が飛んでた時、那珂の夢を見たんだ。そして約束した。誰にも負けない程に強くなるって。でも、心は変わっても、姿は結局変わらなかった。それってさ、私がこの姿を捨てきれないからだと思うんだ」

ただ、と呟き、ぎゅつと両手を握る。

「艇ふねとしての自分と人間としての自分。この二つの私がいるから、私は、私でいられる。弱い自分も、情けない自分も、結局それは、変わらない自分であり、向き合えないといけない過去。那珂との事も、今の私がいる事の一つでもある。だから、私はこのままでいい。あ、だからって、強くならないって訳じゃないから」

おどけるように笑う川内。

その瞬間、工廠の扉が勢いよく開かれる。

「よく言ったア！」

葉子だ。

「し、師匠!?!」

「馬坂!?!お前、大丈夫なのか!?!」

半裸に寝巻を羽織っている状態で、その胴体には、包帯がぐるぐる巻きにされていた。

「この程度で寝てなんていられないわよ!それと川内!」

「は、はい!」

「ますます気に入った!この間の件も含めて、改めて貴方を馬坂の人間として認めてあげるわ!家にはちゃんと事情話しておくから、首を長くして待つてなさい!」

そう自信満々に言い放つ葉子。

それに川内は、頭を深々と慌てて下げる。

「あ、ありがとうございます！」

思わず、その場にいる全員に笑みが浮かぶ。

ただ、時打はまだ知らなかった。

この、更に三年という月日の先、飛天童子自分がした事の重大さを、新ため

て痛感する事を。

彼は知らなかった。

自分が、どれほど恨まれていたのか。

誰かが、死んだ瞬間、時打は、それを思い知る。



## 天野時打編

### 北東の闇

「——それ、女性の前ではあまり言わない方が良いわ」

ふと、月が綺麗な夜に、姉がそう言ってきた。

「え？どういう事だよ姉さん」

『月が綺麗ですね』。それは、外国でいう『I love you』にあたるのよ」

「ああ、なるほど……」

弟は、納得した様に頷く。

「でもさ」

「何？」

「そんな回りくどい言い方じゃなくても、真っ直ぐに気持ちを伝えればいいんじゃないのか？」

弟の言葉に、姉は、くすりと笑う。

「そうね」

そして、自分の左手を、月にかざす。

「その方が、断然気持ち伝わるものね」

もし、と彼女は続ける。

「貴方に、好きな人が出来たら、そうしなさい。回りくどいのを無しにして、真っ直ぐに、ね」

「出来るのか？俺に」

「そうね。きつと、出来るわ」

そう言つて、抱きしめる。

豊満な胸が、息を苦しくするが、温もりが感じられ、冷たかった心に、熱が入り込んでくる気がした。

北海道支部本営。

会議室にて。

「首尾はどうだ？」

「問題無い。ロシアから輸入したアンドロイドや、サイボーグの整備もあらかた終わっている」

海軍の制服を着た老人に問われた白衣の青年は、嫌な笑みをうかべてそう返す。

「そうか、青森の方はどうなっている？」

「金山市は諦めた方が良いでしょう。三年前に送った葉緒たちは既に敗北。他にも何度も刺客を送り込んでみたが、ことごとくやられている」

「チツ、と舌打ちをする老人。」

しかし、そのがたいはとでも六十を過ぎている老人とは思えず、その眼光からは気迫を感じる。

「飛天童子め……」

忌々し気に、その名を呟いた。

「まあ、お陰で腕の良い兵士を手に入れる事が出来たんですから、結果オーライですよ」

それを、陸軍の制服を着た少年がなだめる。

「ふん。で？二十年前に手に入れた阿賀野型の二人はどうした？」

「ええ。姉の方の二人は楽に終わりましたが、どうにも末の子がね」  
「間に合わないならそれで良い。今はとにかく、陸軍を掌握する事が先決だ」

老人が、そう重みを含めた声でそう言う。

「で、その後は、一番の障害である『壹条 豪真』を消す、と」

ヘッドフォンを首にかけたジャケットの男が、気楽そうにそう言う。

「火野柱あ 玄隆男は強者だというのに馬鹿だ。今や、世界中の資源を我々日本が牛耳っているというのに、それを使って第二次世界大戦の復讐をしないと、バカな男だ」

「今が絶好の機会だというのにねえ」

老人の言葉に、やけに大きなジャンパーを着た女性がそう答える。「それで」

だが老人はその話は終わりともいふかのように別の話題に移った。

「神奈かなの様子はどうか？」

「ええ、絶好調です」

「日に日に溜め込まれた恨みだ。飛天童子を殺すのに、これほどの人材はいないだろう」

老人は笑わずも、その声には、期待の色が見えた。

「大変です！」

その時、会議室の扉から、警備員が慌てて入り込んでくる。

「何があったのです？ 騒がしいですね」

「す、すみません」

白衣の青年がその警備員を咎める。

「何があった？」

老人が睨みを利かせて警備員に聞く。

「は、はい！ 先ほど、洗脳中だった酒匂が脱走しました！」

「なんだと!？」

白衣の青年が、警備員の男の言葉に声を挙げる。

「何故ちゃんと拘束しておかなかった!？」

「それが、自分の手の骨を自分から砕いて、リギングアンカー 艦装封じの手錠を外したんですよー！」

「それで艦装を展開したと？」

老人が聞くと、警備員の男は恐縮し、肯定する。

「は、はいー！」

「チツ、早急に沈めろ。まだ計画を知られる訳にはいかない」  
「了解しました！」

そう命令すると、慌てて警備員は会議室を出ていく。  
「良かったので？」

ジャンパーの女が聞いてくる。

「都合良く扱えないのなら排除する。そんな奴がいるだけで、作戦に支障をきたすからな。やるなら完璧に、確実にだ」

「りよ〜かい」

女は面白そうに、そう了承した。

「もうすぐだ。もうすぐ、我々の悲願が、父と祖父の悲願が成されるのだ」

老人は、椅子に体重をかけ、天井を仰ぎ見て、自身の胸で輝く、口ケットペンダントを握りしめた。

とある、山奥にある街にある、和風の、敷地の広い屋敷の様な家。  
その庭に、一人の女性が、花に水をやっていた。

その髪は、地面につくほどに長く、髪を頭の後ろで結って、ポニーテールとなっていた。

瞳の色は赤く、その顔は、凜々しいの一言につきる。

劇で男性の役をやっても十分に受けるだろう。

やがて水をやるのをやめ、彼女は、家にあがる。

そして、広間の隅にある仏壇に目をやる。

そこには、まだ三十代ともいふべき男性の写真が飾っており、その眼は、海のように深い青色をしていた。

「……貴方」

女性は、今は亡き、最愛の人の名を呼ぶ。

その横にある箆笥たんすの上には、いくつかの写真がたてられていた。

そこには、二人だけで映っている写真や、自分の子供たちが、楽しく遊んでいる写真もあった。

だが、この家には、女性一人だけしか住んでいなかった。

十八年前に、夫が病死し、十五年前に起きた事件の所為で、息子と娘の両方を同時に失った。

そして、自分は、家の外に出られないという、自由を奪われた。

幸い、家から出られないだけで、他の家の人とは、交流は可能だった。

買い出しにいけない代わりに、近所の人が食材を分け、時には、一緒に食べる事もあった。

だが、この胸にぽっかりと開いた穴だけは、埋まる事なんてなかった。

どこで育て方を間違ってしまったのだろうか？

息子は十にも満たない歳で犯罪の道に走り、その妹はその時のショックで記憶喪失。

そして、妹は、町長の思惑で嘘の認識を刷り込まされて、もう、自分が親だという事を信じては貰えない。

息子に至っては、自分の自由を奪い、なおかつ、街の治安を悪くした張本人だという事で、街の人々から、恨みの種にされている。

一言で言って、この街に、息子の居場所は無いに等しかった。

「・・・・・・・・時打・・・・・・・・矧莉・・・・・・・・」

女性は、今にも泣きそうな声で、愛する二人の子供たちの名を呼んだ。

「やああああ!!」

横須賀にある壱条邸にある道場で、竹刀を撃ち込む五月雨。

それを容易にかわす豪真。

だが、五月雨は体を空中へ投げ出すと、右腕を曲げて、広げた掌を鞘の鏝に近い所に押し当て、腰の筋肉が起こす推進力を、体を螺旋状に駆け巡らせ、掌から吐き出し相手を吹き飛ばす、『螺旋砲』を発動する。

すると、右腕から吐き出された推進力が、竹刀を推し、五月雨の体を軸に回転。

そのまま、横にかわした豪真に打ち込む。

それを見た豪真の顔に笑みが浮かぶ。

次の瞬間、微かなスイツチ音と共に、豪真の体が蜃気楼の様に消えた。

否、後ろに飛びのいてかわしたのだ。

当然、五月雨の竹刀はからぶる。

そのまま頭上へと進む推進力に任せ、床を転がる。だがすぐに起き上がり、示現流の基本の構えである『蜻蛉の構え』からの不可視の踏み込みを使い、豪真に急接近する。

そのまま竹刀を振り下ろそうとする。

だが、豪真はそれを分かっていたのか、両手に持っていた竹刀をまっすぐに五月雨の軌道上に向けていた。

豪真の竹刀に衝撃が走る。

「む」

しかし、すぐに違和感に気付く。

竹刀の先にあたっていたのは、五月雨の竹刀。

身を低くして、豪真の刺突を回避したのだ。

そのまま、密着状態へ持っていこうとする。

だが、それよりも速く、豪真の右手が閃き、開かれた手を腰にまで持っついていき、そこからスイツチ音、からの右腕がまるで弾丸の様なスピードで五月雨の額に豪真の掌が直撃する。

「あゝ」

その様な声と共に、五月雨の体は、面白い程に回転しまくり、豪真の横をすり抜け、そして壁に背中から叩き着けられる。

「げう……」

女の子が出してはいけないような声と共に、五月雨はずりり、と逆さまの状態で床に頭をつく。

「ハツハツハー！まだまだだな！」

「くう……」

豪真の場合は、ただ待ち構えていただけなので、すぐに拳を引き戻す事がきたのだ。

「そろそろ三年だな」

ふと、豪真は、夏の日差しが差し込む窓から、晴天の空を見上げる。

「もう梅雨明けですものね」

なんとか起き上がった五月雨が、豪真の元へ歩み寄る。

「しっかし、お前は竹刀の扱いよりも、やっぱり格闘戦の方が得意なんだな」

「あうう、すみません」

わしやわしやと頭を掻きまわされるように撫でられ、五月雨は恨めしそうに、しかしどこか嬉しそうに言葉を返す。

時打が、黒河に着任して四年。

季節は夏の梅雨明け。

今日も、いつもの平和な日常と、過激な戦いが繰り返される。

それは、これから日本を揺るがす大きな抗争が起こる事を、誰もが予想出来ない程のものだった。

とある病院の一室にて、一人の少女が、静かに寝息を立てていた。それは、まるで死んでいるようだった。

だが、彼女を取り囲む機械は、正常に彼女の生存を知らせていた。その時だった。

「ん」

一つ、小さく声を漏らし、身じろぐ。

そして、ゆっくりと、眼を開けた。

「.....」

ここがどこなのか理解できず、寝たままの状態であたりを見渡す。だが、それで十分では無かったらしく、体を起こす。

だるい体をどうにかして起こし、また、あたりを見渡す。

そして、自分の広げた両手をしばし見つめる。

ふと、何かに弾かれるように、部屋の隅を、正確には、扉のある方向の上を見ていた。

「.....やばいっ..」

一言、そう呟き、彼女は、ベッドを降りた。

まるで、導かれるように。

運命の歯車は、動き出す。

狂々、狂々と。



廻り創める。

「時打」  
広い、広い、碧い海が広がる世界で、  
一人の女性が、その名を呼んだ。

## 襲撃者

——やはぎ

「ん？」

ふと聞こえた、知らない、だけどどこか懐かしい声に、時打はその歩を止める。

今は、一人。

ちよつとした事情でこの横須賀に来ており、今は、病院に向かって歩いていて。

理由は、そこにいる、とある艦娘に会いに行くためだ。

病院について、受付を済ませ、目的の病室に入る為のカードキーを受け取り、そこへ向かう。

エレベーターで、最上階の五階の更の上。

軍の、それも許可を貰った者以外は入れない六階に辿り着く。

そして、目的の部屋を見つけ、カードキーを使って中に入る。

「どうも、一ノ瀬さん」

「あ、時打くん」

そこには、一人の青年と少女。

「睦月も、久しぶりだな」

「」

睦月は顔を綻ばせ、何も言わずに首を立てに振った。

この艦娘の駆逐艦『睦月』は、三年前、かつて、時打の前任、そして今、睦月の目の前にいる青年、一ノ瀬悠斗の後任である秋村禅斗が転属した時に引き取った艦娘だ。

彼女には、CQC・・・では無く、中国拳法を叩き込まれていたのだ。

彼女の得意技である『寸勁』は、その中国拳法の技の一つだ。

何故彼女がここにいるのか。

その理由は、秋村が彼女に飲ませていた薬物にある。

艦娘は、普通は病気にかかりにくいというえに、薬物による中毒衝動を起こさないのだ。

つまりは薬物に対して耐性があるのだ。

だが、そんな艦娘にでも限界というものがあるし、あまりにも強力過ぎると、衝動を抑え込めないのだ。

そんな艦娘に一番有効だと言われている薬物。

それが、『蜘蛛の毒』だ。

正式な名は無い薬物だが、かつて第二次世界大戦で使われたある薬物と同じような効力がある。

感覚を麻痺させて、危険察知能力を低下させる効力がある。

それゆえに、戦争で多様される事が多かったのだ。

そして、これが艦娘の免疫力を無視して犯す事が可能な唯一の薬物である。

ただ、食べ物に紛れ込ませて、知らぬ間に食べさせればいいのだが、睦月の場合は違う。

首に直接薬を打ち込んでいたのだ。

直接打ち込むという事は、本来なら大量に服用しなければならぬほどの症状を、ほんの少しで済むのだ。

つまりは、中毒作用が半端無いのだ。

それを一年間も続けていれば、発声器官が麻痺しても可笑しくなかった。

睦月は、喋る事が出来なくなっていた。

それこそはじめは、禁断症状で暴れて、抑え込むのには苦労したそうだ。

今は、その症状も収まり、落ち着いて、薬も完全に抜けたが、その副作用で、発声器官の機能を停止させてしまったのだ。

なので、

『久しぶりです』

睦月は、スケッチブックにどこかおぼつかない文字で返事を返し

た。

服装はいつもの制服とジャケットだが、表情はどこか寂しそうだった。

「調子はどうだ？」

『順調です』

時打の言葉に、すばやく返事を返す睦月。

流星に筆を引くのが速い。

「それで、如月の方はどうなったんだ？」

時打は、話題を一ノ瀬に投げかける。

「ああ、如月の方はね……」

それは、ようやく睦月が落ち着いてきて一週間の事だった。

睦月が無性になにかを伝えようとしてきたのだが、病院の人間たちは、まだ混乱しているのかと、睦月をあやしたのだが、唯一、何かを伝えようとしている事に気付いた一ノ瀬が、スケッチブックとペンを渡した所、ようやく如月の存在が明らかになった。

睦月の話によると、如月はとある出撃で、右腕右脚左目を損失したままの状態で放置されていたとの事だ。

だが、舞鶴に行ってみると、件の如月はどこにもおらず、ただ、連れ去られた痕跡のみが見つかった。

艦娘の場合、例え体の部位の欠損したとしても、長時間入渠していればいずれは元通りになるのだ。

その上、止血さえすれば生き永らえる程の生命力も保有している。

戦艦棲姫の三式弾や徹甲弾、心意改装によって新たに追加された『鬼人化』による反動で体が外側だけでなく中身までボロボロになった瑞鶴が死ななかつたのが良い例だ。

その上、睦月と如月と一緒に生活していた部屋もあり、如月がいたという事は信じられた。

だが、結局はそこまで。

どこに行つたのかまでは分からない。

そこにいたというのは確実なのに、如月の姿はどこにもない。

一応、『地下室』という所も探してみたが、どこにも如月の姿は無かった。

他に知っている事は無いかと聞いてみた所、他には何も無かった。ただ、治して欲しくば、いう事を聞けと言われ、当時、すでに薬を投与されてまともな判断が出来ない状態で、睦月はそれを了承。

そして、しばらくの間、CCCなどの格闘術を徹底的に叩き込まれたのだ。

そして、現在。

その如月の行方を、一ノ瀬が単独で調査しているのだ。

「ここ三年。探偵業をしてきて、ようやくつかめた情報が、どこかの誰かが連れて行った事だ。それ以外は情報は無し」

一ノ瀬は、海軍での仕事が無い為か、一時海軍を抜けて街に探偵事務所を構えているのだ。

「そうですか……」

その一ノ瀬の返しに、時打はそう返した。

そうして、少しの会話の後、時打は病院を出た。

時打が、鎮守府に着任して四年。

歳はもう二十歳を超え、体も幾分か成長した。

電は、思想改装により、その姿を新選組のそれへと変化させ、より鎮守府の主力として活躍している。牙突の磨きも日に日に向上している。

吹雪に至っては、時打の元愛刀である『影丸』の中に封印されていた時打の『飛天童子』としての三年間を追体験し、その体に時打の『飛天御剣流』を刻み付け、今では、色々なアレンジを加えた彼女だけの飛天御剣流を編み出し、操っている。

川内は、三年前の大規模な戦闘の後、葉子の実家に一年間、修行として居候。そして帰って来た時には相当な力をつけ、その足に、馬坂家秘伝の武具『漆蹄』<sup>しつてい</sup>を装備していた。

無論、海上でもその脛当て<sup>ロンヅブ</sup>では使え、空気摩擦による『火爪』も使えるようになっていた。なので、海上でも一瞬ではあるが、火爪による一撃を相手に与える事が出来るようになっていたのだ。

瑞鶴は、日々その剣の腕をあげていき、どういう訳か百人一首までやり始め、瑞鶴曰く『耳を鍛える為』だとか。

長門は時打の秘書艦として貢献し、響夜直伝の『二重の極み』で敵を玉砕していつている。

なかなかの戦果だ。

ただ、最近、達也が仕事帰りにこちらによるようになった。

理由としては、如月の行方だが、その時、長門の気分、というか声<sup>こゑ</sup>が妙に高揚しているのか錯覚ならぬ幻聴だろうか？

「まあ、艦娘と提督が結婚するのは最近ではおかしくない事だからな」歩きながら苦笑する時打。

ここ数年、特に大きな事も無く、海域が取ったり取られたり踏んだり蹴ったりと、人類と深海棲艦の戦いは拮抗している。

陸の方は相も変わらず平和であり、普通の日常が過ぎていた。

「この戦いが、終わればいいのにな」

そう呟き、時打は歩を進めた。

人がいない事に気付いて歩を止めるまでは。

「……………」

左肩にかけていた包みを左腰に差す。

(人祓い……一体いつ?)

包みから鞆を露出させ、周囲を警戒する。

ふと、背後から足音が聞こえた。

時打は、そちらを向かない。

徐々に近付いてくるその足音。

次の瞬間、大きく踏み込む音が聞こえ、時打はすぐさま最速の抜刀術『零龍閃』<sup>ゼロセン</sup>を発動。

視界から色彩を消し飛ばし、そこへ回される意識を全て、動体視力へ移譲。それによって、視界は急激にスローになり、体は重くなる。

別に、視界から色を消す事など、それなりの鍛錬を積めば簡単に出て来る。

ただ単に集中力をコントロールすればいいだけの話だ。

よって、時打は、刃を抜き放ち、その背後から襲い掛かってくる存在を捉え——その剣閃を鈍らせた。

(こいつは!?)

軌道をすぐさま変更。

足を払う為に地面に向かって零龍閃を放つ。

だが、敵はそれをすぐさま見切り足を浮かせる。

そして引き絞っていた左手を突き出す。

それを時打は足をその場に固定し、半ば倒れるように膝を曲げて、体を後ろに動かす事で回避する。

そのまますれ違う。

「ツ—」

時打は、深鳳を鞆に納めず、その切っ先を襲撃者に向ける。

そして、その頬に冷や汗を流す。

「……………如月」

睦月と同じ、制服とジャケット。

だが、その左目は、瞳孔の部分がまるで機械のように動いており、義眼だという事を証明していた。

「……どこの所属だ？」

時打がそう問いかける。

「名乗る事は禁止されています。ですのでその質問には答えかねます」

そう、機械的に答えた。

「何故俺を襲う？」

「そういう命令だからです」

「誰からだ？」

「答えず」

「じゃあお前自身の目的はなんだ？」

時打は、そう本人の意見を探る様に、単刀直入に聞いた。

それに対し、如月の答えは、

「——睦月ちゃんを取り戻す事」

だった。

「……ちなみに、なんで俺だ？」

「睦月ちゃんを取り戻すには、貴方は邪魔だって言われた」

「だから殺すか」

「はい。その通りです」

如月が右腕を引き、左手を前に出す。

攻撃を予期した時打は、すぐさま刀を鞘に戻して、抜刀術で迎撃の構えを取る。

たとえどんな踏み込みだろうと、一度反応できれば、絶対に空振りなどありえない『零龍閃』。

「——だから」

不意に、如月が口を開く。

「貴方を排除する」

瞬間、後ろ足だった右足が突如、ジェット噴射。

突然の出来事、それによってありえない状態からの推進力による接近。

それに動揺した時打は、刃を抜くのに、一コンマ遅れてしまった。その推進力は、音速を超えていた。



瞬きする合間に接近した如月。

その肘からも蒼い炎を噴出。

これで間に合った時打も流石と言えるだろう。

零龍閃の中で最大の威力を持つ『烈風』。

それによって、恐ろしいスピードで迫ってくる如月の右腕を反らし、顔面への直撃を避ける。

直後、ベルトから鞆を外しその鞆の先で如月の脇腹をすばやく叩く。

「ぐうッ!？」

それにうめき声をあげながら、距離を取る如月。

そんな如月から距離を取る時打。

そして、あの音速を超えた踏み込みの正体に気付く。

黒光りする義手と義足。

かなり精密に作られたそれは、あらゆる技術の最先端を行く日本ならではのデザインと発想だった。

そして、時打が何度も戦った技術と同じだった。

「推進力カートリッジ射出装置と、六七式黒王石義眼か」

ラグドニウム

「知っていたんですか？」

「前に何度か見た事がある」

その異常さに、おもわず舌を巻いたが。

そしてラグドニウムとは、日本でしか手に入らない、ダイヤモンドを超える強度を持つ鉱石の事だ。

そして、それを使用している義眼という事は、その義眼が持つ演算能力で、使用者の思考速度を加速させているのだろう。

脳が焼ききれない程度には。

「だったら、攻略は可能だ」

如月のラグドニウムの義手と義足は、内臓している、発火カートリッジによる爆発によって生み出される推進力で相手に強力な攻撃を与える事が出来るのだ。

そんな高等技術であるその技術をなぜ、如月が持っているのか疑問だが、今はそんな事を考えている暇はない。

時打が先手必勝で動く。

零龍閃は、間合いの外への攻撃を可能とする。

だが、軌道も変えられるという有利性を持つが、あらかじめ軌道をイメージしておく必要がある。

しかもその処理をほんの一瞬の間にやり、一気に相手に畳みかけることがきもだ。

連撃も可能とする零龍閃。

その数最大で三十機。

だが出撃させるのはたった四機。

狙いは、義手の関節部分。

だが、通常の人間の思考の数倍の速さで稼働する如月の義眼が、その軌道を読み、わずかに義手と義足の位置をずらす事で、関節部への直撃を免れる。

ただ、彼女のつけている義手は、時打の零龍閃では破壊するのは不可能だ。

理由としては、注意を惹く為。

すぐさまお得意の『神速』で距離を詰め、如月の懐に入る。

だが、未来予知にも等しい、如月の義眼の演算はそれを予測。

すぐさま右腕を引き絞り、カートリッジを炸裂させる。

それと同時に時打が、鞘から刀を抜刀。

今度はスピードを重視した零龍閃ではなく、ただの抜刀術。

だが、その抜刀術は、鞘にわざと刃をひっかけることで、力をため込み、鞘から刃が抜き放たれた時、デコピンの原理で恐ろしいほどのスピードを發揮。

音速を超える、拳打と居合。

それが真正面でぶつかりあい、如月のストレートの軌道を、そらした。

だが、如月の義手が、ひっかかるように時打の刃を遮り、如月に刃を叩き込めない。

だから、柄頭で腹部を強打。吹っ飛ばす。

「ぐうっ！」

よって、距離ができてしまう。

左手で腹部を抑える如月。

すぐさま、時打は鞆に深鳳を収める。

そしてそのまま膠着状態が続く。

互いに睨み合い、出方を伺う。

しかし、その膠着を破ったのは、音も無く時打の背後に現れた男が背後から、箆手に仕込んだダガーで時打の心臓を刺し貫こうとした行為だった。

しかし、時打は初めからそれを予期していたかのように、膝を曲げ、しゃがんで回避する。

「何ッ!?!」

そう声を漏らした瞬間、脇腹に鋭い衝撃が走り、吹き飛ばされる。零龍閃を放ち、背後にいる相手に向かって、剣閃をぶつけたのだ。後ろを向かずにだ。

そのまま吹っ飛ばされ、ブランドの店に突っ込む。

「その程度の奇襲、恐れるに足らねえよ」

時打は、吹っ飛んでいった男に向かってそう一瞥する。

だが、その男はブランドの店から戻ってきた。

全くダメージを受けた様な感じがしない。

その理由は分かっている。

おそらく、服の下に隠している衝撃緩和のなにかによって、ダメージを緩和したのだろう。

その男は、時打に向かって、憎悪に満ちた視線を向けてくる。

「飛天童子ィ……」

「!」

——飛天童子。

(復讐絡みか……!?)

その名は、かつて時打が、かの金山市で使っていた通り名。

その名を知っているという事は、大抵は、時打に復讐を懇願する者たち。

そう思考を巡らせた瞬間、上空から数発の銃弾が降り注ぎ、時打は

それを地面を転がって回避。

そこへさらに別の敵からの攻撃。

地面をへこませるほどの踏み込みで、時打へ滑る様に接近する一人の男。

「セエイッ!!!」

「!?」

だが、それよりもやく刀を抜刀した時打が、その男の突き出した右手を龍翔閃で跳ね上げる。

そして、左手で掌打を放つ。

その攻撃が胸へ直撃した瞬間、時打は奇妙な感覚をその左手の感じた。

「？」

「ぬう・・・」

距離を取らされた男は、何事も無かったかのようにその場に仁王立ちする。

直後に先ほどの銃弾が襲う。

それを時打は高速で叩き落す。

「チ」

地面に降りたつたのは赤毛の女性。

その顔は憎らしそうに時打を睨んでいた。

一方で、先ほど、突きを放った神父服の男は、表情にこそ出していないが、その眼は今にも誰かを殺しそうだった。

如月は違うとして、他三人は確実に復讐目的。

四対一。

内一人は体の一部を機械へと変貌させている。

しかも全員手練れ。

この数を凌ぐには、時打であつても難しい。

周囲を見渡し、意識をコントロールする。

色彩はいらない。視界をモノクロと化し、動体視力をあげる。

次に、味覚、嗅覚を切断。今この瞬間にいらぬ感覚は全て遮断する。

触覚も断ち、それらに使われる集中力を、全て第六感に捧げる。

この動作を全てクリアするまで、たった一秒。

その瞬間、全員が同時に動き出す。

如月のカートリッジ射出。籠手に仕込んだ刃を出し、かけだす黒服アサシンの男。踏み込み、加速のベクトルを限りなく地面と平行にして突っ込んでくる神父。拳銃を構える赤毛の女。

さきに辿り着くのは如月。

脚部の射出装置から薬莖が排出され、音速で飛んでくる如月。

同時に、腕部のカートリッジを射出。加速による、音速を超えるパンチ。

時打は、それに対し、時計回りに回転。

右腕の外へ回避し、そのまま遠心力をつけて、如月の背中に『龍巻閃』『凧』を叩き込む。

次に神父。

龍巻閃によって正面を向いた所へ、神父の右拳の突きが放たれる。

一方で時打は深鳳を振り切り、引き戻すのは片手では難しい。

だが、そんな窮地に対応しきるのが飛天御剣流。

あらゆる状況に対し、様々な方法で対応し、相手の表情で次の攻撃を見極める。

臨機応変。

すぐさまベルトから鞘を抜き出し、それを拳が届くギリギリの所で鞘の先を腹に叩き込む。

龍巻閃による遠心力がまだ残っている事が幸いし、威力は十二分。

神父は顔をしかめ、距離を取る。

次に襲い掛かるのは後ろからおそいかかる黒服の男。

だが、暗器を使っている時点で時打に勝ち目などない。

すぐさま柄頭が鳩尾を叩かれ、悶絶。

「ぐあああああ!?!」

流星に鳩尾はキツイらしくその場に膝をつく。

そして、残った赤毛の女は、対角線にいた如月を吹っ飛ばした事で、その巻き添えを喰らって転倒。

だが、如月がすぐさまスカートの下に隠していたベレッツタを左手で抜き放ち、時打に向かって発砲。

その銃弾は、偶然右足を後ろへ下がらせた時打の足元に直撃、火花を散らす。

「ッ」

それに冷や汗をながす。

義眼の精密な演算による、射撃。

これほど厄介なものはないだろう。

「ぬんー」

「ッ!？」

直後に、神父が再度踏み込んでくる。

その手には、どこからか取り出した黒鍵こっけんを、指の間に、片手三本、両手六本を持つて斬りかかってくる。

右斜め上から、右三本を薙ぐ。

時打はそれをバックステップで回避。

紙一重の為に服が斬れる。

そこから左右交互による連撃。

時打は深鳳を持つて全てをいなす。

突如、連撃がやんだかと思うと、距離を取り、両手をの黒鍵を投げってくる。

それらは左右から弧を描きながら時打に飛んてくる。

時打はすぐさま鞘に深鳳を納め、超光速の斬撃を飛ばす。

「零龍閃——六機ッ!!」

すぐさま黒鍵を叩き落され、あらぬ方向に飛んでいく。

直後、神父が改めて抜き出した新たな黒鍵を抜き出し、もう一度、投げ。

今度は四本。

更には神父も踏み出してきた。

時打はもう一度零龍閃を発動。

光速の残光が黒鍵を叩き落す。

しかし、黒鍵を全て叩き落し、神父を叩こうと思った瞬間、背後か

ら、悶絶から復活した黒服の男が、時打でも気付かない程の気配の無さで、右手を時打の首に回し、左手で、籠手にしこまれたダガー、『アサシンプレード』で時打の脇腹を差した。

「ッ!？」

その鋭い痛みにも、思わず思考がスパークし、途切れる。

次の瞬間、神父の左鉄拳が時打の胸に叩き込まれる。

そして吹っ飛び、建物の壁に叩き付けられる。

黒服の男はすぐさま時打の横回避したので、巻き込まれる事は無かった。

「グハア!？」

その重い衝撃に、思わず口から血を吐く時打。

地面に膝をつく事は無かったが、壁によりかかって痛みにも苦しむ事は免れなかった。

視線を正面に向けると、そこには赤毛の女が拳銃……デザートイーグルを時打に向けて構えていた。

「死ね」

引き金に指がかけられ、いぎ、熊をも殺す弾丸が放たれようとした瞬間。

「やらせません」

微かなスイッチ音とともに、女の体が横に吹き飛ぶ。

「アアア!？」

その衝撃に、宙を舞い、そして地面に滑るように叩き付けられる。

「!?!？」

その思わずイレギュラーに、その場にいた全員が驚く。

海のような青い髪。

ノースリーブの制服。

防刃素材の手袋。

「五月雨!？」

「大丈夫ですか!？」

五月雨が時打のすぐ傍にかけよる。

そして、時打の左脇腹を見る。

「傷口が深い・・・すぐに治療しないと」

「その前にまずはこいつらだ」

時打は右手で傷口を抑えながら、深鳳を左手で構える。

五月雨もその意図を読み取り、敵に向かって構える。

「如月さん・・・なんでこんな所に・・・それに、あの腕と足・・・」

「説明は後だ。まずはこいつらをどうにかするのを考えろ」

「はい」

その直後に、如月が発砲。

時打がそれを弾き、すぐに五月雨が踏み込む。

「ヤアア!!」

鋭い掛け声とともに、スイツチ音が響き、五月雨が消える。

否、消える程のスピードで踏み込んだのだ。

0から百へのストップアンドゴー。

その速度は音速を超える。

狙うは、神父の男。

右拳での鋭いストレート。

それを神父の男は左手を高速で回し、受け流す。

『回し受け』という奴だ。

だが、五月雨が大きく踏み込んで神父との距離を詰めようとする。

しかしそれを許さず、右手で掌打を放ってくる。

「くっ!」

思わず左手で顔面を狙ったその掌打を受け止め、靴底をすり減らし

ながら、距離を取らされる。

直後に、右拳の強力なストレートが放たれる。

それを、体を思いつきり逸らして、紙一重で回避する。

そのまま地面にしりもちをつく。

更に、ローキックが飛んでくる。

「くっ!」

地面を転がり、それを回避。

だが、神父はさらに回転し、ローキックを連続で放ってくる。

五月雨はそれをすぐさま立ち上がってバックステップ。



神父はその五月雨に向かって遠心力を付けた右拳で突きを放つ。それを予期した五月雨は、その右手首を左手で掴む。

そのまま体を半時計回りに体を回転させ、強烈な一本背負いで神父を投げ飛ばす。

「セアアアッ!!」

「ぐあ?」

背中から地面に叩き付けられ、肺の中の空気を一気に吐き出される。

一方で時打の方は苦戦していた。

先ほどの刺突が深かったのか、出欠が酷く、上手く動く事ができないのだ。

それでも気迫でなんとか痛みを誤魔化しているあたりは凄い。

「貴様、その傷でまだ勝機があると思っっているのか!」

「そうじゃなきゃやらねえさ!こんな事!」

最も、戦わない事が今の時打の思う最良の選択なのだが。

「人斬り風情があ!」

「ッ!」

黒服の男がアサシンブレードを振るう。

だが、もともと暗殺器具であるの武器は、そのリーチ故に、時打の居合が先に決まる。

一撃目は、脇腹。

「ぐは!」

それで態勢を崩す黒服の男。

「悪いな」

時打は、そう一言呟き、帯から引き抜いた鞘で、二撃目を男の左腕に叩き着ける。

飛天御剣流抜刀術『双龍閃』

間髪入れずに刀と鞘で二段構えの攻撃をする二連撃技、双龍閃。

その二撃目は、適格に男の左腕に装着されたアサシンブレードを破壊する。

「ぐうあ!」

「ついでだー！」

さらに、鞘を返して、その切っ先で右腕に叩き付ける。すると、鋭い金属音とともに、袖から折れた刃が出てきた。

「西洋では、より多くの敵を殺す為に、両手の暗器を持つ事がある。お前はずっと左手のみで攻撃していたが、その度に右手が不自然に動いていたから、まさかと思ったが、案の定だったな」

「ぐう……」

悔しそうにその場に膝まづく。

そして、恨みがましそうに時打を見上げる。

その視線に、胸の中に、ある黒い何かが渦巻く。

———コロセ

「ツ……」

胸中に浮かんだ、一つの言葉。

直後、左から銃弾が飛んできて、時打はそれを逆刃で迎撃。

「飛天……童子イ……!!」

赤毛の女が、おぞましい形相で呪詛を吐き、時打に黒服の男もろとも、デザートイーグルを乱発する。

「つぁッ!」

時打は、痛む脇腹を我慢しながら、剣を振るう。

銃弾は全て二つに割れ、あらぬ方向に飛んでいく。

「チィッ!」

全弾撃ち尽くしたデザートイーグルを捨て、別の拳銃を引き抜こうとしたが、それよりも速く、時打が飛翔。

「ッ!」

そのまま女に叩き付ける。

右肩に直撃し、鎖骨が折れ、悲鳴を上げる。

「あああ!」

膝をつき、肩を抑えながら地面に伏せる。

地面に着地した時打は、その様子を見つめる。

——コロセ コノオンナハ、オマエヲコロスマデトマラヌゾ  
うるさい。

時打は、そう一蹴し、その言葉を振り払おうとする。

——フクシユウヲナシトゲタシユンカン、コノオンナドウナル？

だが、言葉はどどん頭の中に浮かんでいく。

——スベテヲフクシユウニソソイデキタコノオンナハ、ソレヲ  
ナシトゲタシユンカン、ソノサキノミチハナイゾ

——ス・ク・イ・ナ・ド・ナ・イ・ダ

——ダカラコロセ

——テオクレニナルマエニ

——『救われぬ者には死を』

それがお前の本質の筈だ。

「時打さんッ!!!」

「ッ!?!」

五月雨の声で現実に戻される。

気付けば黒服の男が背後から、時打にナイフを突き立てようとしていた。

「ラァアッ!」

ほぼ反射的に体を回転させて、黒服の男と位置を入れ替え、その背中に『龍巻閃』を叩き付ける。

「ぐはあ!?!」

そのまま吹っ飛んでいく。

確実な手応え。

男の意識は、確実に刈り取られた。

その様子に、時打は、思わず安堵の息を吐いた。

助かった……

頭の中に浮かんだ言葉。

それに背筋を冷たくするも、なんとか、いつの間にか跳ね上がったいた心臓の鼓動を鎮める。

「……まだ、残ってるのか……」

もう、捨てた筈の『信念』の筈だ。

なのに……

「時打さん!」

そこへ五月雨が駆け寄ってくる。

「傷を見せてください!」

駆け寄るやいなや、時打の服をめくり上げ、傷口を見る。

「……あれ?」

そこで首をかしげる。

「傷が・・・塞がっている?」

正確には、傷が塞がりかけている状態で止まっているのだ。

「良く解らんが、こういう体質なんだ。こういう深い傷を受けると、自然と治ってるんだよ。まるで、誰かが治してくれるみたいにな」

時打はそう言い、深鳳を鞘に納める。

「・・・ぐうううああああ!!」

その瞬間、五月雨の背後からあの神父が襲い掛かり、その手刀を五月雨に突き立てようとする。

「ッ!」

だが、仙腸関節の僅かな駆動音とともに、五月雨が振り返り、螺旋状に体を駆け巡った増幅された推進力『螺旋砲』が、神父の男の手刀をすり抜け、突っ張りの如くその腹に直撃した。

「もう一撃・・・ッ!!」

さらにそこから吹き飛ぶ前に、二度目の『螺旋砲』。

片手による連撃。

これぞ、五月雨が四年間、豪真の元で修行し続けて編み出した『螺旋砲』。

『螺旋連装砲』

二重のダメージを受けた神父はそのまま吹き飛んでいき、壁に激突。

背中から叩き付けられた為に、肺から空気が吐き出される。

だが、衝撃が強かったのか、空気を吸い込む間もなく、気絶する。

「死ねええええええ!!」

女が、鎖骨を折られた痛みを精神で凌駕し、動かない筈の右腕を無理矢理動かし、デザートイーグルを向け、放つ。

右腕は跳ね上がり、曲がってはいけない方向に曲がる。

間違いなく脱臼だ。

一方で飛んでいった一撃必殺の弾丸は、標準が定まってなく、弾道がそれ、時打に当たる事なくどこかへ飛んでいった。

「ああああああ!!」

それでもデザートイーグルを向けようと右腕を無理矢理動かそうとする。

「この人……左腕が……」

先ほどから、左腕を全く使っていないのだ。

「お前……あの時腕の神経を斬った女か」

ただの主婦だった女の事を思い出し、時打は苦い顔をする。

「死ねええええええ!!」

「もう、寝ろ」

時打は、悔しそうに顔を歪めた後、体を大きく捻り、戻る反動を利用して刀がはじき出され、その柄頭が女の眉間を打つ。

脳天を揺さぶられたためか、女が白目をむいて、その場に倒れ伏した。

「これで全部でしょうか……?」

「ああ」

覇気の無い声で、そう応える時打。

「この人たちは……」

「俺に復讐しようとする奴らだよ」

「復讐した所で、死んだ人が生き返る訳じゃないのに……」

時打は、そんな五月雨を一瞥し、自分の右手を見る。

『救われぬ者には死を』

「……なぜ、今更……」

覚悟はしていた。

実際、復讐はこれが初めてだ。

だが、『これ』が浮上するなど思わなかった。

忘れはしなくても、心の奥底に抑え込んでいた筈だ。

なのに、何故。

「時打さん？」

五月雨に声をかけられ、現実を引き戻される。

「どうかしたんですか？」

五月雨は、心配そうにその声をかける。

「ああ、なんでもない」

無理に笑顔を作り、誤魔化す。

今はまだ、バレる訳にはいかない。

心配される訳にはいかない。

時打はその様な思いで、誤魔化した。

「そうですか……」

「そんな事より、お前、どうしてここに？」

「はい、豪真さんにおつかいを頼まれていたんですが、途中で貴方が戦っているのがみえたので、助太刀にと思ひまして……あれ？」

そこで何かに気付く五月雨。

「如月さんは……？」

「!?」

そう、如月がないのだ。

「どこにいったアイツ!？」

周囲を警戒し、辺りを見渡す時打と五月雨。

だが、どこにも如月の姿は無い。

「逃げた……のか……？」

「そうなんでしょうか……？」

そう思案しているあいだに、如月は、高い位置から彼らを見下ろしていた。

「はい……全員倒されました……断念……ですか……はい……

はい……わかってます……睦月ちゃんを取り戻す為です。貴方に従います。では予定通り、『プレデター』を一機、お願いします」

如月は、義手の右手に握られた携帯からの通話を切り、彼らを観望する。

さて、『天野時打』の中の『飛天童子』はいつ目覚めるのやら。

「ッ！」

何か近づいてくる。

「五月雨」

「分かっています」

時打から九時、五月雨から三時の方向から、何かが高速で近付いてくる。

そこで五月雨は違和感に気付いた。

反射神経を鍛える為に、『百人一首』を豪真や翔真よりやり続けている。たからか、聴覚が良い五月雨には聞こえていた。

近付いてくる何か、足を踏み出す度に、機械の駆動音がする事に。そして、その正体はすぐに明かされる事になった。

何か、屋上から飛び出してくる。

「!?!」

その何かは地面に着地し、時打たちは、目を見開く。

そう、如月のような義手なんかじゃない。

それは、現代の科学によって生み出された、機械へと改造された人間。

「……サイボーグ改造人間……ッ!?!」

声押し殺し、そう、呟いた。



救われぬ者には死を

「LLLLLLLL!!」

顔を単眼の覆面で隠し、体は青い強化骨格で覆い、その右手には鏢無しの片刃の剣。

その姿は、さながら、一つ目小僧のようでおぞましかった。

奇怪な声を張り上げ、剣を逆手に持ち、時打たちに襲い掛かってくる。

「くッ!!」

飛龍閃で刀を手放している時打は避けるしか手段が無い。

だが、五月雨は避けるのではなく、反撃する事を選んだ。

一撃目を引き絞った状態で、腰の関節駆動による加速。

その一撃が、サイボーグの腹に直撃する。

そして、その密着した状態で、二度目の推進力の掌打。

その衝撃で吹き飛ぶ。

螺旋連装砲だ。

サイボーグが吹き飛んでいる間に、時打は刀を回収。

だが、サイボーグは何事も無かったかのように空中で一回転し、華麗に着地する。

「効いてない……!?」

その様子に驚く五月雨。

螺旋砲は密着状態で発動すれば、その衝撃は体中へ染み渡る。

理由は、人間の体の七十パーセントが水だからだ。

故に、人間の体は燃えにくいし、体を揺さぶられやすい。

そして、螺旋砲を密着状態で放てば、その衝撃は体内の水分に伝導。

その衝撃が体を一瞬でさいなむのだ。

「そいつは体液に燃料電池<sup>MFC</sup>の電解質を使ってるが、外側の強化骨格が衝撃を全部無効化してんだ。やるなら、頭部の脳を破壊しないとだめだ！」

そう叫ばれ、五月雨はとまどう。

「破壊するって……相手は……」

「ッ……」

五月雨のその返しに、齒噛みする時打。

相手は元は人間。

脳や顔以外の部分は全て機械へと入れ替え、その自我は改造のさいに、抑え込まれる。

だから、止めるには、動けなくするか、破壊するかのどちらか。

——コロセ

「ッ!?!」

再度の衝動。

例え動けなくしたとしても、脳は死なず、廃棄されてしまえば、機能を完全に失うまで、長い時間を孤独に過ごす事になるのだ。

改造されれば、人としての生活は二度と出来ない。

人の脱水症状や栄養失調も起きなければ、破壊されない限り、死ぬ事は無い。

脳を破壊されなければ、永遠に機動し続ける。

救いなど無い。

「GIGIGIGI……!!」

合成音声で発声した声は、とても人間のものでは無かった。

いきなり四つん這いになったかと思うと、まるで蜘蛛のように地面を這いずり、急接近してくる。

「ひっ—」

その恐ろしさに思わず悲鳴を上げる五月雨。

サイボーグが右手の剣をその状態で振るう。

それを飛び上がる事で避ける五月雨と時打。

それを追いかけるように立ち上がりながら剣を下段から振り上げる。

時打は深鳳を振り下ろし迎撃。

そこからサイボーグが連撃を浴びせてくる。

そこで時打は五月雨を横へ蹴つ飛ばす。

「!?」

一瞬、何をされたか理解出来なかった五月雨。

だが、その意図をすぐに理解する。

敵の目的は、時打なのだ。

おそらく、二人とも殺せと命令されているのだろうが、何故や奴は時打を優先して狙っているのだ。

まさか、彼も時打に復讐を願っているのか？

一方で時打は防戦一方。

決して、サイボーグの攻撃が激しい訳では無いのだ。

自分の精神の問題だ。

——コロセ イマズグコロセ コイツハテオクレダ スクイ

ナドナイ

ダメだ……こいつは人間だ……

——ソナモノハコイツニトツテハカコノハナシダ ニンゲ

ンデハナイ

それでも……俺は……

サイボーグが、時打を掌打で吹き飛ばす。

「ぬあ!？」

吹き飛ばされ、壁に激突する。

肺の中の空気が吐き出されるが、それを持ち前の打たれ強さで持ち直す。

しかし、サイボーグが追い打ちをかけるように飛びかかってくる。

「ッ!？」

サイボーグの剣が時打の顔面の左側に突き刺さる。

「LL……GIGI……」

首を痙攣させたかのようにかくかくとさせ、マジマジと時打を見

る。

(こいつ・・・わざと・・・!?)

先ほどの攻撃、確実に時打の命を奪えた筈だ。

なのに、そのチャンスを利用して時打を殺さなかった。

コイツの目的は、復讐ではないのか？

「G I G I・・・」

そのまま、何かに抗う様に、その体を止めていた。

時打には、その意図が分からない。

だが、突如、サイボーグが発した声に、気付いてしまった。

「コ・・・ロ・・・シ・・・テ・・・ク・・・レ・・・G I

「な!？」

「G I・・・」

その微かな言葉に、目を見開く時打。

「モ・・・ウ・・・コ・・・シ・・・タ  
ク・・・ナ・・・イ・・・」

まるで、泣きつく子供のように、サイボーグは、無理矢理、発声器から声を絞り出す。

「ツ・・・」

時打は、左手で、サイボーグを押し返す。

「時打さん!」

そんな時打に五月雨がかけよる。

「G I G I・・・G I I・・・コロ・・・セエ・・・!」

その言葉に、五月雨は顔を強張らせる。

「どう・・・して・・・」

五月雨には、その言葉を理解できなかった。

「コロ・・・シテ・・・タノ・・・ム・・・」

体を痙攣させ、自分に与えられた信号という名の命令に、必死に抗

いながら、その言葉を紡ぐ。

——コロセ

「……ああ、分かったよ」

時打は、そう呟くと、ゆつくりとサイボーグに歩み寄る。

「時打さん!」

ゆつたりと、静かに、まるで、死への宣告の様に。

「……言おう」

これをやるのは、いつ以来だろうか？

「貴様の罪に、救いなどない」

静かに、刃を光らせ、

「貴様への罰に、生への選択肢などない」

心を、徐々に、あの頃へと戻していく。

「故に、貴様に、救いなどない」

そして、サイボーグを、その射程に収める。

「——救われぬ者には、死を」

ここで、サイボーグがとうとう命令に逆らえず、時打に襲い掛かる。だが、それよりも速く、時打は、刀を振るった。

飛天童子。

金山市を支配し、独裁的な支配を続けていた黄金連合を壊滅し、無法の世界に法律を与えた英雄的存在。

「っ……」

鎮守府の廊下を歩いていた吹雪は首筋にぶるり、と冷気を拭き付けられたかのような感覚を覚える。

「……司令官？」

窓を見上げ、そう呟く。

しかし、現実はそうではない。

英雄という存在ほど、残酷な存在はいない。

英雄とは、誰かに讃えられる一方で、誰かに恐れられ、恨まれ、憎まれなければならない存在だ。

同時に、標的以外の人間を殺さなければならない、存在でもあるように。

救われぬ者にあるのは、死と絶望のみ。

## 終わりになき怨念

最近、時打の様子がおかしい。

「……………」

翔鶴は、ふと、胸中にそんな事を思い浮かべた。

最近、考え事が多くなっており、声を掛けても気付かない事が多くなったり、あまり他人に関わらない様に執務室に引き籠る様になつたと来た。

明らかに何かあつた。

もしかしたら、睦月に何かあつたのだろうか？

否、それはもうとつくに確認済み。

どうやら、無事回復に向かつているようだ。

ならばなんだろうか？

「ほんと、どうしてしまったのでしょうか……………」

「ああ、本当にな」

「はい……………つてきやあ!？」

突然横から声が聞こえ、飛び上がる翔鶴。

そこには、この鎮守府に居候している響夜だった。

「響夜さん……………」

「おつす翔鶴」

軽く会釈する響夜。

「しつかし、本当にどうしちまったんだ、時打……………」

「仕事はちゃんとやっているみたいですけど……………部屋からもあまり出てきてませんし……………」

「らしいな。瑞鶴から聞いたよ」

「そうですね……………最近、瑞鶴どうですか？なんだか、最近嬉しそうです」

「そうなのか？まあ最近、俺と一緒にいる事が多くなったかね」

口角を僅かに上げる響夜。

「……………春ですね……………」

ふと、口からこぼれた翔鶴。



「それ、お前にも言える事だぞ」

それが聞こえていたらしく、そう返す響夜。

「え？」

それに首を傾げる翔鶴。

「なんでもねーよ」

ニシシと笑う響夜。

翔鶴にはその意図は分からない。

ふと、進行方向の十字路から、叢雲がやってくる。

何かを探しているような素振りを見せ、二人に気付くと、そちらに駆け寄ってくる。

「響夜、翔鶴さん。吹雪見ませんでしたか？」

「吹雪だあ？見てないが」

「私も、見てませんね」

「おかしいわね……いつもなら電たちと一緒にし合ってると思ったんだけど……」

うくん、と唸る叢雲。

「ま、もしかしたら、街に出て言ってるのかもね。ちよつと行ってくるわ。司令官に言っておいて」

「分かったわ。気を付けてね」

そう言うと、叢雲はさっさと走って行ってしまった。

「そんじゃ、ちよいと時打の所に行くか」

「はい」

古ぼけたスケッチブックを棚から引き抜き、中を見る。

どれも、一人の女性をえがいたものだ。

まあ、時々、元気の良い、ぼろぼろの服を着た中年の男たちや女や子供、老人まで描かれている。

だが、やはり、一人の女性の絵が多い。

白い道着に藍色のスカートの様な袴。髪の色は黒で、サイドポニーテールと呼ばれる、頭の横で髪を結った髪型をしている。

その表情は、大人びており、毅然とした美しさを兼ね備えた女性だ。その左手の薬指には、銀色に輝く、指輪が――

しかしそれは、時打の記憶の中にある女性の姿だ。

この絵は、鉛筆のみで描かれており、モノクロだった。

しかし、その美しさは見事に再現されていた。

色あせる事も無く、そこに生きているかのように。

ふと、時打は、自分の来ているシャツの下にある、ネックレスのチェーンに通した指輪を取り出した。

所々傷付いており、いつかの輝きは失われているも、時打は、それを見ずばらしいとは思わなかった。

これには、これを贈った者の想いと、受け取った者の想いが詰まっているのだから。

しかし――

天井を仰ぎ見る。そして目を閉じる。

そして目を開けた訳じゃないのに、真つ赤に染まった血だまりと、幾人もの無残に地面に転がる人間だった者たち。

その心意は、命を失った事でもあるし、そのままの意味でもあった。

鉄の匂いが鼻孔をくすぐる。

内臓が眼にうつも、何も思わない。

斬り飛ばされた人間の恐怖に満ちた表情を見ても、何も思わない。今にも死にかけている人間を見ても、何も思わない。

ただただ、何も思わなかった。

『お前だな』

不意に誰かの声が聞こえた。

『――お前が僕たちを殺したな』

足に、不愉快な感触が感じられた。

そこには、真っ赤に染まった体の、子供や赤ん坊。

『お前だな』

『お前だな』

『お前だな』

連鎖的に聞こえてくる、声。

『お前がお母さんを殺したな』

『お前が妻を殺したな』

『お前が皆々みんなみんな殺したな』

『関係無い人たちまで殺したな』

まるで、呪詛の様に、時打の体に這いずって頭に向かって上っていく。

『お前のせいだ』

『お前のせいだ』

『お前のせいだ』

時打は、その怨念たちを見て、

「——くだらない」

そう、吐き捨て、右手に持った影丸で全て斬り殺した。

『許さない』

『許さない』

『許さない』

『飛天に災いあれ、童子に不幸をもたらせ、その凶刃が、汝に向けられよ。幸せを奪え、孤独を与えろ、一人孤独に朽ち死ね——』

断末魔の様に、呪いの言葉を吐きながら、怨念たちは、ただの屍に戻る。

そんなものを見ても、何も思わない。

しかし、一つだけ思う所がある。

これで、良いのだと。

これが、俺の本質なのだ、と。

コンコン……

「!？」

ドアを叩くノック音で現実に取り戻される時打。

慌ててスケッチブックを机の引き出しに隠し、指輪を服の下に入れる。

「提督、翔鶴です」

「ああ、入っていいぞ」

若干の冷や汗が頬を伝うが、それを意識の外へおいやり、入って来た来客を迎え入れる。

入って来たのは、翔鶴と響夜。

「どうした？」

「叢雲が外出してくるからよろしくだよ」

「そうか、分かった」

時打は頷く。

「それだけか？」

「……あの」

時打が尋ねると、しばし考える素振りを見せた翔鶴が問いかける。

「最近、お疲れではありませんか？」

「そうか？まあ、他人からそう言われるならそうなのかもしれないが、大丈夫だ。別に寝れないって訳じゃないし」

「……」

確信。

翔鶴の脳裏にその二文字が浮かんだ。

時打は果たして、寝れないと自ら言う性格だったろうか？

時打の眼の下に、隈は無い。

おそらく、夜での活動に慣れているからだろう。

だが休息は必要だ。

見た所、疲れている様子はない。

だが、どこか、精神的にやられている。

高い戦術眼を持つ、翔鶴だからこそわかる、良く分かる人間の心身の状態を見抜く能力。

「そうですか……」

だが、翔鶴は引き下がった。

「ありがとうな、心配してくれて」

「はい」

見てしまったのだ。

確かに見えた——『人斬り』の眼が。

殺気こそ発していない。

だが、そこに染みている、人斬りの見てきた、惨状を見る時の様な、残酷な眼。

退室し、扉の前で立ち止まる翔鶴。

しかし、その表情は、震えていた。

「おい……」

「分からない……」

震えた声で、そう呟く。

「提督の事が……何もわからない……私は……何も知らない……私……」

その小さな声は、その場に、空虚にも消えていった。

黒河市、大通り。

そこで吹雪は、一人ぶらぶらと歩いていた。  
ただ、注目を色々と浴びていた。  
まずは服装。

黒のロングコートの下に、黒を基調としたセーラー服。  
足には、黒のロングブーツ。

そこまでなら問題ない。

注目を浴びている理由は、腰に差す、黒鞆に納められた刀だろう。  
銘は『影丸』。

かつて、飛天童子とうたわれた殺人鬼が愛用していた刀だ。

ただ、そんな事実をこの街の人間が知る由も無く、ただ、刀を持っているから危険人物なんじゃないのか、あるいは、刀の出来栄えを見て見たいと思っている、はたまた、子供を中心に刀を持っているから強そうな人だと思われるかのどれか。

ただ、吹雪はそんな視線を意識の外へ追いやり、先日首筋に走った悪寒の事について考えていた。

だが、その答えはいつまでたつても分からなかった。

ただ分かるのは、その悪寒は、影丸から発せられたものだという事だ。

「分からない・・・」

一旦思考を切る吹雪。

瞬間、首筋に、先日のものとは比較にならない程の、まるで、巨大な主砲をいきなり向けられたかのような、そんな殺気を感じた。

「ツツツツツ?!?!」

直感に従い、勢い良く、左斜め前に跳び、体を反転させ、その殺気を発した者を睨み付ける。

そこには、女性が一人。

顔立ちは少女に似通っており、髪は黒髪で腰まで伸びたロングヘア。

服装は、吹雪のと酷似しており、黒いロングコートとセーラー服に似たもの。ただ違うとすれば、ネクタイの種類だろうか？

その左手には、赤鞆に納められた、柄に謎の文字が書かれている刀

だ。

長さは、影丸ぐらいいはあるだろうか？  
そして、鮮血の様に、真っ赤な瞳。

吹雪は、この人物を知っていた。

「貴方はッ……!?」

その姿を見て、驚愕する吹雪。

吹雪自身の記憶には無い。

あるとすれば、影丸の記憶の中。

吹雪が体現したのは、この女だ。

あの時に見た、時打の姉の仇の少女の姿。

何故、その姿をこの体に体現させてしまったのか。

ただ、今日の前にいる存在は、自分に向かって殺気を放っている。  
今にも、斬りかかってこの首を斬り飛ばしそうな程の、本気の殺意を。

「お前……」

不意に、女性が尋ねる。

それに、吹雪は体を跳ねさせる。

そんな事をお構いなしに、女性は言う。

「……何故その刀を持っている？」

## 紅の少女

金山市にて、飛天童子が現れる前から、黄金連合には、反乱分子を消していく為に、一つの組織を結成していた。

数人の精鋭を集め、暗殺などの任務を全うする為だけに作られた組織。

その組織のお陰で、反乱軍は、レジスタンス上手く動けなかったといえるだろう。その力は、当時の反乱軍の力では太刀打ちできるものではなかった。

ただ、飛天童子の登場により、その組織はその討伐に駆り出され、反乱軍が動きやすくなったといえるだろう。

その組織の名を、特殊警察『鉄槌団』。

連合に仇成す者を、闇の中で狩る。

それがこの組織だ。

飛天童子が現れた当時では、それはもう出し抜かれまくっていたが、いつの日か衝突が多くなり、鉄槌団は飛天童子によってどんどんその数を減らしていったのだ。

革命の日には、もうほとんどが死んだとされているが、そのほんの少しだけが生き残り、この日本各地にて、隠れ住んでいるらしい――

「何故、その刀を持っている？」

「ツ……」

目の前にいる女性。

この女は、かつて金山市で反乱軍を狩りまくった組織『鉄槌団』の一人だ。



三十人の構成で、その中にリーダーが一人いるといった感じだ。ただ、この女はリーダーではなくても、その飛天童子本人である時打と死力を削った唯一の人物だ。

そして、時打の姉である加賀を殺した張本人。

「質問に答えろ」

女性が、更に殺気を強め、そう問いかける。

その殺気に怖気づきながらも、なんとか開いた口で答える。

「こ、これは、これの持ち主から、借り受けたもの、です……」  
すると、女性は考える素振りを見せた。

「借り受けた……か……あの男がそんな事する訳が無いが……  
まあ、剣を変える事はある程度得るだろうな」

女性はそう呟くと、殺気を引つ込めた。

それに、思わず安堵の息を吐いてしまう吹雪。

「ならば、質問を変えよう」

だが、それさえも束の間。

「飛天童子はどこだ？」

「ッ……！」

殺気こそ出していないが、その眼光は確実に吹雪を射貫いていた。

「……何故、その事を……」

「その刀を持っていてるなら、大体検討はつくだろう？」

女性はそう言う。

「……因縁」

そう、呟いた。

すると女は踵を返し、歩き出す。

「あの男に伝えておけ。影丸を持って私と決闘をしろ。お前と私は仇同士、この因縁を断ち切る事などできない、とな」

そう言い残し、女性は去っていく。

「吹雪——！」

直後に、横からよく知る声が聞こえ、そちらに視線を向けた。

「叢雲ちゃん」

「いたいた探したわよ」

「ごめん」

軽く謝罪する。

「……さっきの人は？」

そう聞いてくる叢雲。

それに対し吹雪は、女性の向かった方向を向いて、こう答えた。

「……『緋勇<sup>ひゆう</sup> 紅葉<sup>もみじ</sup>』。司令官の、宿敵だよ」

東京都総務省。

主に、陸軍の司令部がある場所だが、年に一度だけ、海軍の各地方の司令長官、陸軍のトップたちが会合をする場所だ。

「……黒河の白兵戦隊。彼女たちを陸軍に入れられないものですかねえ」

「ダメだ。陸の治安もそうだが、今は海からくる深海棲艦を抑え込まなくてはならない」

そこで、一人の陸軍将校のつぶやきを、即刻、豪真が断った。

その陸軍将校の名は『小林<sup>こばやし</sup> 蓮呉<sup>れんご</sup>』だ。

主に、九州での治安維持に努めている陸軍だ。

体はとも陸軍将校とは思えないほどほっそりとした体つきで、歳もかなり若い。

その頭部は、眼鏡をかけて若干長い髪を頭の後ろで結っている。

「でもねえ、接近戦など遠距離攻撃できる敵にわざわざ接近する必要なんてありますかね？」

「そうか？ 実際、接近戦は効果的だぞ？ 黒河では多大な戦果をそれで叩き出している。どこにも問題は無い」

そしてなぜかヒートアップしてきている。

「お前ら……」

「あわわ……」

一方で、海軍元帥である火野柱　玄隆とその秘書官の吹雪は頭を抱えていた。

必ずあるのだ。こういう事が。

「大体、貴方たち海軍がさつさと深海棲艦を倒してくれればいいんですよ。そうすれば、こちらの戦力も拡充するのに」

「戦争でもおっぱじめる気か？ただでさえこちらは資源を独り占めしているというのに、他の国がどうなつてもいいというのか？」

その豪真の言葉に、明らかな嫌悪感を覚える者が数名。

その視線に、豪真は気付いているが、あえて口に出さない。

「そういう事を言っている訳ではなくてです」

「陸軍の戦力の拡充は資源と人員の無駄だ。人間同士の戦争はもう終わったんだ。黒河の奴らはやらん」

最も、そんな事出来ないのだが。

(こつちにはいざつて時の『保険』があるんだからな)

顔には出さないも、心の中でほくそ笑む豪真。

もしもの時は、『彼女ら』があそこだけは守ってくれるだろう。

そういう心意気だ。

そう言っている内に、取りつく島も無くバツサリと話を切られてしまふ。

「で？陸軍元帥さんよ？今回もまたくだらない話でもする気か？」

「貴様！将校の分際で志摩元帥殿に向かつてくだらないとは何事だ！」

豪真の歳に似合わぬ言葉使いに、食って掛かる人間が一人。

その人物は、玄隆の向かい側に座っている五十代あたりの男の傍にいる男だった。

まだ若く、その目は憎らし気に豪真をにらみつけていた。

「うっせーよ忠犬野郎。陸軍元帥の傍付きだからって調子乗ってんじゃないぞ」

「な、なんだと貴様……ッ！」

「やめないか井口」

今にも襲い掛かりそうだった『井口 誠也』を止める、陸軍元帥『志摩 長野』。

「しかし……！」

「貴様じゃ、口論でも実戦でも勝てん。知っているだろう？こいつが唯一深海棲艦を倒した男だという事をな」

「ッ……」

そういわれると、何も言えなくなる井口。

「海上の事は海軍の管轄下だ。我ら陸軍が口出しして良い問題ではない」

「……わかりました」

不承不承といった感じで引き下がる井口。

志摩は、それを見ると、玄隆に向き直る。

「さて、何の話だったかな？」

「いや……一年の戦果の総合結果と現在の現状と各国に運ぶ資源の分配の話だろうか？」

「おお、そうだったな」

ハツハツハ、と笑う老人。

本当に大丈夫かこの人、とこの場にいる全員が思うのだった。

「司令官……私この人苦手です」

「そう言っただけでやるな吹雪」

吹雪が両手に抱えた書類を一層強く抱きしめながら、そう引き気味に言う。

そんな中、豪真は、ふと海軍側の一人の将校を見る。

そこには一人の老人。

しかし、その体軀はガツチリとしており、七十という年齢には似合わない顔立ちをしていた。

その眼差しは、明確な何かを感じられた。

(何を考えている……『志葉 正義』……)

その視線に、酷い嫌悪感を感じる豪真。

彼は、北海道本営の長官を務めている人物だ。

(この間の時打の一件も、コイツが絡んでないだろうな……)

この会議が行われる数日前。

横須賀の商店街にて、全身機械で出来た人間と、他三名の武器を持った襲撃者の事件。

その時、『おつかい』に行かせていた五月雨と、標的であった時打で対処したらしいが、その全身機械の人間、サイボーグ人造人間の頭部が中にある人間の脳ごと斬られていたのだ。

五月雨は刃物を持っていないし、持ち歩いていたとしても、五月雨には『斬鉄』は出来ない。

ならば考える可能性としては、時打だろう。

だが、時打なら、あのサイボーグの構造を見抜いていた筈だ。

技術こそ、アメリカで開発された、人間の脳のみを機械の体に移植するという奴だ。

体は機械であり、人間のそれとは明らかに異なるが、元は完全な人間。

そんな存在を、時打が殺すとは、豪真には到底思えなかった。

そうこうしている内に、会議は終わり、各地方の長官たちが帰り支度を始める。

豪真は今日、秘書艦である筑摩を横須賀において、やってきているのだ。

その腰に、一本の業物と見える刀を一本携えて。

現代鍛冶師が作った打刀、『おきのかみ隠岐守』である。

総務省の廊下を何人かの職員とすれ違いながら歩く豪真。

(しかし、あの時、どうして奴は『彼女』の事を……)

それは、時打たちが起こした事件の直後の事だった。

急いで駆け付けた豪真と警察と同時にもう一人の、本来ならここにいない筈の人物が転がり込んできたのだ。

「——矢矧い！」

『!?!』

その声に、その場にいた全員の視線がそちらに向く。そこには、背中を覆う程に伸びた黒髪。幼さの残る可愛らしい顔。しかしその服装は病人が着る筈のローブをその身に纏っており、顔には大量の汗を流し、その視線は、真っ直ぐに時打へと向いていた。

「矢矧……」

もう一言、そう呟いた。

しかし、たった今、人であったサイボーグを切り捨てた時打には、首を傾げる事しか出来なかった。

「……矢矧……?」

その顔を曇らせ、少女は、時打に近付いていく。

疲れているのか、ふらふらとした足取りで、時打に近付いていく。

時打は、ただ、何故か疲れ切った表情で、彼女を見据える。

そして、少女ののぼされた手が、時打に触れる。

その瞬間、時打の顔が一瞬強張った。

まるで、脳裏に電撃が走ったかの様に。

そして、時打は、眼の色を変えて、一言呟いた。

「……阿賀野姉……」

『な……』

その言葉に、絶句する豪真と五月雨。

『阿賀野』

その名は、日本が誇った最新鋭軽巡洋艦『阿賀野型』のネームシップを務めた艦の名前だ。

そこまでならまだいい。

問題は、時打はその名の最後に付け加えた、『姉』の文字。

「時打さん……今……」

「え……?」

そこで時打は自分の言葉に気付き、思わず口に空いている手をあてる。

「矢矧……?」

阿賀野は、もう一言、そう時打の事を呼ぶ。

「……どうして」

しかし、先ほどの様子とは一変、目を見開き、阿賀野はあとずさる。

「どうして……貴方から……矢矧の魂を感じるの……？」

「な……!?!」

その言葉に、絶句する時打。

「どう……して……あな……たは……矢矧の……」

——なに？

それだけを言い残し、まるで糸の切れた人形のように、地面に倒れた。

あれはどういう意味だったのか。

阿賀野は、その後、病院に連れ戻され、今は詳しい検査を行っている。  
る。

時打も、自分の鎮守府へ戻った。

ふらふらとした足取りで。

(時打……戻ってきているのか……)

飛天童子としての、時打の中のたった一つの信念。

『救われぬ者には死を』

この世で生きていけぬ、天が裁けぬ程の悪行をした者、生きていく事が辛い者、もう助からない者、その全ての人間を、『死』という『救済』を持って、この世から解放する、彼のたった一つの正義。

それは、世間でいう『正義』とは程遠い、自己満足の『正義』。  
生き残ったとしても、その先の人生が苦しいものなら、早々に殺してしまつた方が幸せなのではないのか。

全てを失つて、生きる事が出来ないのなら、飢餓という苦しみを与える前に殺してしまつた方が楽なのではないのか。

そんな考えの元に、飛天童子は戦ってきた。

そして、この間のサイボーグの件。

プログラムの、従う事しか出来ない、哀れな奴隷。

そしておそらく、自分の死を願う事を言われ、時打の中の何かを外れたのだろう。

あの時の時打の眼は、確かな、人斬りの眼をしていた。

(そろそろどうにかしないと…唯一の歯止めは、あの翔鶴か…) 見ても明らかに時打の事を好きだという事がバレバレの彼の勤める鎮守府の艦娘、翔鶴。

彼女がどうか、時打の歯止めとならん事を、豪真は密に願った。

自分の死を覚悟して。

——薬丸示現流 居合 『抜き』

瞬間、人のいないビル街に甲高い、金属音が響き渡った。

振り向き様に放たれた、時打の『零龍閃』<sup>ゼロロセン</sup>を超える速度で放たれた居合抜きが、突如襲ってきた対物ライフルの弾丸を叩き斬る。

残像さえ、許さない。許されない。

直後、背後からおそってきた人影の跳躍からの振り下ろしを豪真は、既に納めた鞘からもう一度、『抜き』を放つ。

再度の金属音。

「むっ！」



豪真の一撃の方が重かったのか、その人影は吹き飛ばされる。

だが、空中で一回転した後、華麗に地面に着地する。

そして、その体を見て、豪真は一瞬、驚愕する。

「お前……」

その体は、およそ人間と呼べるものでは無かった。

黒い金属で全ての四肢を取り換え、胴体も、女性としての体を保つたままではあるが、とても肉がありそうではない。

顔は、バイザーの下に隠れて分からない。髪型は長い白髪だという事が分かるが、それ以外には、何もわからない。

ただ、明らかとして分かるのは、この女は、自分を殺す気でここにいるだという事が、見て取れた。

「壺条 豪真」

不意に、女が無機質な声で語り掛けてきた。

「貴様にはここで死んでもらう。飛天童子への復讐の為に」

「ほう……」

それを聞いた豪真の顔に、ニヤリと笑みが浮かぶ。

直後、豪真が鞘から隠岐守を肉眼では確実にとらえられない速度で抜刀。

再度、同じ方向から飛んできた対物ライフルを叩き落とし、瞬く間に、それよりも速く隠岐守を鞘に納める。

「悪いがそうはいかねえ。あの男はまだまだ生きていなくちゃ困るか  
らな」

数で、圧倒的不利と突きつけられても、豪真の顔から、笑みが消える事は無かった。

## 薬丸示現流

速くも動いたのは、女のサイボーグの方だ。

右手に持った赤い刀身の太刀をを上段から振るう。

それに対し、豪真はバックステップで回避。

そこから太刀の刃を返し、返し切りの要領で豪真を再度追撃する。

だが、豪真は、右足を前に出し、右半身になると、そこから抜刀。

「ッ!？」

咄嗟に右腕だけを引き戻し、その腕を顔の右側面へおいた。

直後に、大きな金属音が鳴り響く。

豪真の隠岐守の刃が女の鋼鉄の腕に叩き込まれたのだ。

だが、豪真の剣速をもつてしても、その両腕を切断する事は敵わなかった。

しかしそれを気にする事も無く、瞬きよりも速い速度で刀を鞘へ納める。

その間に女が左手の剣を振り下ろした。

それを体を前方へ動かす事で回避。

間髪入れずに『抜き』を発動。

刃がバイザーに直撃する。

だが、バイザーには傷を一つ作るだけで、とても決定打とは言い難かった。

直後に、豪真は大きく飛びあがる。

その飛び上がった豪真の下を、対物ライフルの弾丸が飛んできて、通過した所をアスファルトの地面に大きな穴をあけて貫く。

流石の威力と言えるだろう。

射線をわざと晒す事で、豪真の動きを制限しようとしているらしいのだが、歴戦の男相手にそれはあまり意味をなさない。

「ハァー」

バイザー女が再び斬りかかる。

右片手での一太刀からの両手持ちでの連撃。

それを全てかわしきる豪真。

ラツシュが終わった瞬間、女が右手の剣をいきなり《離した》。  
「!?」

それに驚く豪真。

だが、そんな暇を与えないかの様に、女の右足があがる。

そして、女の右足の裏が、刀の柄を掴んだ。

「なぬ!？」

「ハアア!!」

通常、人の脚は、腕の三〜四倍の力を有している。

その理由は、至極簡単に体を支える為。

そして、サイボーグは、体が鋼鉄であるが故に、人間より重い。

その体を支える為の脚力は、もはや常人の数十倍はあるだろう。

——レッグスラツシュ

強靱な脚力によって振るわれる斬撃。

豪真はそれを居合で迎撃。

だが、歳によって衰えている豪真に対し、相手は疲れを知らないサイボーグ。

その力の差は歴然。

だからこそ豪真は、あえて吹っ飛ばされる事を選んだ。

大きく吹き飛ばされながらも、態勢を立て直し、地面着地。

直後に、踏み込み。

不可視の領域による神速の踏み込み。

それによって女が反応できない速度で接近、抜刀、斬る。

右脇腹に刃が直撃。

しかし、鋼鉄の繊維でできた人工筋肉が収縮し、硬質化。刃を阻む。  
「チッ」

舌打ちする豪真。

だが、その直後に、女の右足が返され、豪真へ向かう。

それよりも速く、剣を鞘へ戻し、空いた左手を先ほど刃を直撃させた右脇腹に置く。

カチッ

スイッチ音と共に、女の体が吹き飛ぶ。

『螺旋砲』だ。

「なあ!？」

思わず声を上げ、吹き飛んでいくサイボーグ。

だが、吹っ飛んでいく最中で態勢を立て直し、華麗に地面に着地する。

だが、その隙を逃す豪真ではない。

鞘から抜いたままの隠岐守、両手で持ち、それを顔の横へ。更に体を半身にし、右足を前に出す。

示現流の代表的な構え、『蜻蛉』だ。

その踏み込みは、あらゆる手順を正しく踏めば、不可視の領域に入る程。

故に、女が反応できない速度で豪真は急接近。

そのまま、刀を振り下ろす。

一方のサイボーグは、着地時のしやがんだ状態から、まるでブレイクダンスをするかの様に体を滑らせながら回転。

右足で鮮血色の刀身を振り回し、遠心力をつけた一撃で豪真の振り下ろしを反らす。

その一撃は地面を砕き、破壊する。

それによって回転の調子が狂い、地面を転がるサイボーグ。

一方の豪真はすぐさまその刀を抜き放ち、追撃する。

負けじと、転がりながら立ち上がり、右足に刀を掴んだまま、超高速で連撃を放つ。

それに対し、豪真も両手もちでの応酬。

鋭い金属音が連続で鳴り響き、空気が刀が正面から当たる瞬間に震える。

しかし、豪真は、客観的に見れば、余裕の無い応酬に見えるが、かなりの余裕をもって戦っていた。

「ッ……」

実際、疲れの知らないサイボーグでも、かなりの手練れなのか、そ

の違和感に気付いていた。

手加減されている。

明らかに、身体のアドバンテージでは上回っている機械の体に対して、ここまで余裕を持った戦いの出来るなんて、おそらく思わなかったのだろう。

徐々に焦りがその顔に出てくる。

しかも、互いに地面についている足は二本と一本。足腰による踏ん張りは、確実に豪真の方が強い。

「マジかよ……」

狙撃位置についていた男の口からそのような言葉が漏れた。

伏せの状態から、対物ライフルを豪真に向けているが、応酬のスキを狙って撃とうとしていたのだが、注意がこちらにも向けられている状態で、しかもあの実力なのだ。おそらく利用されるのが関の山だ。

「仕方ねえなあ……」

男はそう呟くと、懐から無線機を取り出すと、それを耳元にあてる。

「――神奈がやられそうだ……ああ……分かってるな……ああ……確実にやれとのおおせだ。行ってこい……はあ、分かったよ。後で勝つてやる……」

そう告げると、無線機を切る男。

そして、またスコープを覗き込む。

そこには、一気に踏み込まれ、吹き飛ばされたバイザーのサイボーグの姿が見えた。

「さあて、一対一ならなんとかなるかもしれないねえけど、複数相手にはどうなるんだろうな……?」

## 薬丸示現流

示現流から派生した剣術であるが、その実態は、野太刀を使う事を

主とした古流剣術。

その居合術である、『抜き』とは、抜即斬とも謳われるほどの速さを  
持つほどのものだ。

それを昇華させ、人の眼に映らなくなったもの。

それを、不可視の魔剣『雲耀』と呼ぶのだ。

「ぐあ!？」

居合を喰らい、更に下がるサイボーグごと、神奈。

「……なあ、一つ提案があるんだがよ」

そんな彼女に、豪真はある事を持ちかける。

「ここはひとつ引いてくれねえか？俺とて、暇な訳じゃねえんだわ」

豪真は、彼女に向かってそう言う。

神奈は、それに答えない。

「このままやるっていうなら、俺も容赦はしねえ。それでもいいか？」  
「……」

答えない神奈。

それに、豪真はあたまをかく。

不意に、後ろから殺気を感じた。

「ッ!？」

反射的に、抜きを発動して、振り返りながら抜刀。

直後、振り切った刃に何かが直撃する。

先ほどから狙っていた狙撃では無い。

人だ。

だが、どういう事か、肉に食い込んだ感触がしない。

そう思っている内に、その何かは吹き飛び、地面に着地。そのまま、  
勢いが消えるまで、靴底をすり減らしながら滑る。

「……」

そこには、一人の男。

服装は、陸軍の黒の軍服。

しかし、右腕の裾の部分が綺麗に切られており、そこから、包帯の様なものが巻かれているのが見えた。

「……化身刀か」

「ご名答だ」

男は、ニヤリと笑う。

化身刀。

空手の最奥とも呼ばれる、人体を一本の刀へ鍛え上げる、体術の究極系。

先手無き空手ならではの発想であり、何度も体に打撃を与え続け、あらゆる攻撃に態勢を付ける事でその強靱な皮膚の硬さは、鋼に匹敵する程。

「そんなもの、今時やっているものはそうそういない。それに、陸軍とは驚いたな」

「ふん。その女が上手くやってくれば出てくる事は無かったんだがな」

男は嘲笑うように返す。

「清……貴様……」

「おいおい勘違いするなよ？ちゃんと許可はもらったんだぜ？全員にな」

男は、神無の言葉にそう返した。

直後、豪真の立っている場所に影がさす。

「ッ!?!」

上を向くと、そこには、上から飛び蹴りを繰り返そうとしている者が一人。

その右足は、赤く赤熱している。

大きく飛んで、その蹴りを回避する豪真。

直後、先ほどまで豪真が立っていた場所のアスファルトが溶けて吹き飛ぶ。

馬坂流奥義『火爪』——『火山岩』

「あれ？外しちゃった？」

そこには、こげ茶色の髪をした一人の高校生ぐらいの少年。

その服装は、陸軍の制服。

「なに……!?!」

更に、もう一人。

金色の髪をなびかせ、左胸に構えた刀を、思いつきり降りぬく。

鹿島神傳直心影流——『阿吽の呼吸』——『龍尾』

それを豪真は抜きで上空へ軌道を反らして難を逃れる。

距離を取るも、そこにいたのは、『人』では無かった。

「お前は……!?!」

否、他人から見れば、『人』に見えるだろう。だが、その中身は全くの別物。

「——夕立!?!」

白露型四番艦『夕立』だった。

しかし、その眼は虚ろで、しかし、確かな敵意を感じる。

「チツ……海軍も関わっているのか……!?!」

「正確には、日本の北方辺り、ですがね」

「!?!」

背後から聞こえた、声。

それも女性。

振り返る。

だが、間に合わない。

「つぁ!?!」

脇腹に走る激痛。

だが、それすらも感じる暇のない程の追撃。

前方に体を投げ出し、その追撃をかわす。

そして、その襲撃者の姿を見る。

「なるほどな……」



そして確信する。

「お前が出てきたって事は……あの男の差し金か」

「はい」

女は、無機質にそう答えた。

黒河海岸にて。

「♪」

本日、山城は実の上機嫌だった。

「ああ、今日はアサリがこんなにとれるなんて、これで一食分は浮くわ  
」

と、バケツ一杯のアサリを見て、うつとりと独り言をつぶやく。

そんな感じで鎮守府に向かって歩いてみると、ふと視界の片隅で、  
誰かが倒れているのが見えた。

「……」

それによって沈黙する山城。

たつぷりと理解するまで三秒。

「ちよ?!大丈夫ですか!?!」

慌ててその人物にかけよる山城。

どうやら女性、それも少女のようだ。

「う……」

「しっかりしなさいって!ああ、もう!やっぱり不幸だわ!」

嘆く山城。

だが放っておく事も出来ないので、一応彼女の容態を調べる。

服装は、ノースリーブのセーラー服。手袋もしており、髪型は  
ショートボブ。

幼さのあるその体は、その長身的で平均的には低いその体に妙に  
マッチしている。

とりあえず、山城は片手一つにバケツを持ち、彼女を抱えて運ぼう

と、手を掴んだ。

「ん？」

そこで違和感に気付く。

どうも、その手袋に纏われた手が、まともな形をしていなかった。甲のあたりで、変な形になっており、指がありえないところでありえない方向に曲がっているのだ。

「ちよ……」

山城は、すぐさま少女の手袋をはぐ。

すると、その手は、青紫色に染まっていた。

「なにこれ……」

呆然とする山城。

「……やは……ぎ……ちゃん……」

その眩きが、山城の耳に届く事は無かった。